THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第三十七年　第九號　第四百二十號

正十一年八月一日發行（每月一回一日發行）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

英國バーミンガム大學總長 ロッヂ博士著 高橋五郎譯

七版

死後の生存

靈魂不滅即ち死後の永生は今や詩人宗教家の空想に非ず一切の現象に對して冷靜深刻なる疑惑の眼を向けつゝある幾多科學界の權威者も亦、漸く此一大事の前に叩頭せんとす。玆に精密なる實驗と推理とに立脚して此大驚異を闡明せるものを、オリヴア・ロッヂ博士の「死後の生存」と爲す。現代化學の基礎たる電子説の唱導者として、又夙に無線電信の可能を發見せる先覺として、將た又歐洲大戰中獨逸に對抗して幾多の新發明を完成したる科學者中の巨星として、現に博士の名聲は籍甚たり、本書は實に博士の科學的觀察と哲學的思辨との結晶にして、歐洲各國語に飜譯せられ最新心靈學の最大權威たることは遍ねく人の知る處なり。苟くも心靈問題を論ずる者は必ず先づ本書を讀まざるべからず。なほ附錄として有名なるワルレス博士の「靈怪實在論」あり。

■四六判總布裝● 定價三圓 ●郵税十二錢

白耳義 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

十八版 ●死後は如何 附錄「交靈術とは何ぞや」 壹圓九拾錢 郵税拾錢

印度マドラス大學 ナラス教授著 曹洞宗大學教授 立花俊道譯

六版

佛教の要諦

▼釋尊彫像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入

▼四六版總布製 價參圓貳拾錢 郵税十二錢

これ幽玄なる佛教々理の眞諦を何人にも解し易きやうに手に取る如く明快に説破せる稀世の名著にして現に印度マドラス大學、カルカッタ大學等の指定參考書として推薦せられ、歐米の學者間にも嘖々の好評ある「エッセンス、オブ、ブヂズム」の全譯である。譯文亦明快を極む。

目次

◎歷史的佛陀 ◎四諦(四代眞理) ◎世界の謎
◎佛教の合理性 ◎佛教と苦行主義 ◎人格
◎佛教の道德説 ◎佛教と厭世主義 ◎死及び死後
◎佛教の婦人 ◎賢正八正道 ◎至高善

▲「余は佛教の知識を得んと欲する萬人に此書の熟讀をすゝむ。憶ふに此の書はかゝる主題に關する空前の良書と稱するを得ん」―スマンガラ大僧正

ラスキン著

●塵の倫理 三版 小林一郎譯 貳圓四拾錢 郵税十錢

●二ツの道 再版 小林一郎譯 二圓三拾錢 郵税十錢

●胡摩と百合 四版 栗原古城譯 二圓 郵税十錢

東京市本鄉區西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

澁澤子爵推奬

カーネギー自敍傳

カーネギー翁原著
小畑久五郎氏翻譯
（新刊）

全一冊菊判大金上製六百頁コロタイプ寫眞版廿三
定價金四圓（郵税廿四錢）

「アラビヤンナイトよりも奇異にして、波瀾の多い歴史。」とは本書に對するワンダイク教授の評言である。蘇格蘭產の一貧少年が米國に渡航し、多年の艱難を嘗めて世界の鋼鐵王となり、巨億の富を積むに至るまでの驚異すべき彼の半生と、而して平和財團の事業に、ヘーグ平和殿の建設に、文化向上の目的の爲に、四海兄弟の理想の爲に、人類一般の啓明改善の爲に其の半生に積み得たる一切の財產を投棄せられた驚嘆すべき事蹟とは、眞に末代までの語草であらねばならぬ。「富の福音」の宣傳によつて最も正しい財產分配方法を示し、一方には貴族富豪の良師たると共に、一方には勞働者の親友となつた斯の偉人、世界平和、人類愛の熱烈な使徒であつた斯の翁の全面目、圓滿で樂天的な彼の人格は、本書を通じて永久に忘れることの出來ない印象を與へ感銘を傳へるのである。階級爭鬪と富の掠奪が世界民衆生活の安定を脅しつつある今日、此の偉人の天眞な赤裸々な自敍傳は、物質慾にのみ驅られる現代人には一服の淸涼劑であり、又青年立志の活教訓で、處世道德の指針である。澁澤子爵は平生翁の事業と人物を敬重して居られたが、最近米國巡遊に際し、親しく翁の遺族を訪うて此の自敍傳を得られ、歸朝後自ら監修して翻譯を完成させられ、世に薦められるのである。子爵の眞摯な裏書が何物よりも多く本書の價値を語つてゐるのである。

發行所　神田通神保町　振替一〇五番　冨山房　賣捌　全國書店

中央公論第卅七年八月號目次

口繪『火山湖』……小川芋錢

▼公論

夏休中の青年諸君に告ぐ……卷頭言……一
世界平和の理想に因みて諸家の文化主義を檢討す……田中王堂……四
婦人問題の醫學的觀察……醫學博士文學博士 富士川游……七三
軍部大臣開放論……水野廣德……八四
エスペラントを中等學校に課するの議……井上萬壽藏……九一

▼說苑

趣味眼に映ずる朝鮮……橫山黑頭巾……一
昆蟲の音樂……西村眞次……三八
千利休論＝茶の湯の考察……西川一草亭……五三
西湖夜話……田中貢太郎……五七

官吏夏休廢止の功過批判……五六
○河上肇○小川未明○千葉龜雄○早川鐵冶○寺田精一○堺利彦○石川半山○田中萃一郎○谷本富○桑木嚴翼○前田蓮山○北澤新次郎○馬場恒吾○室伏高信○澤柳政太郎○本間久雄○犬養毅○淺井四郎○高島米峯○堀江歸一○菊池寛○宮田修○米田實○杉村廣太郎○上司小劍○植原悅二郎○水野廣德○奧田竹松○鵜崎鷺城○芳賀矢一○上山滿之進○神戸正雄○巖谷小波○福永恭助○鶴見祐輔○内ケ崎作三郎○生方敏郎○古島一雄○川尻東馬○森本厚吉……六〇


▼詞華
早川雪洲・レーニン（詩）……野口米次郎……八一
富士の歌（歌）……若山牧水……八四

▼想華
シチリア遊記……柳澤健……八七

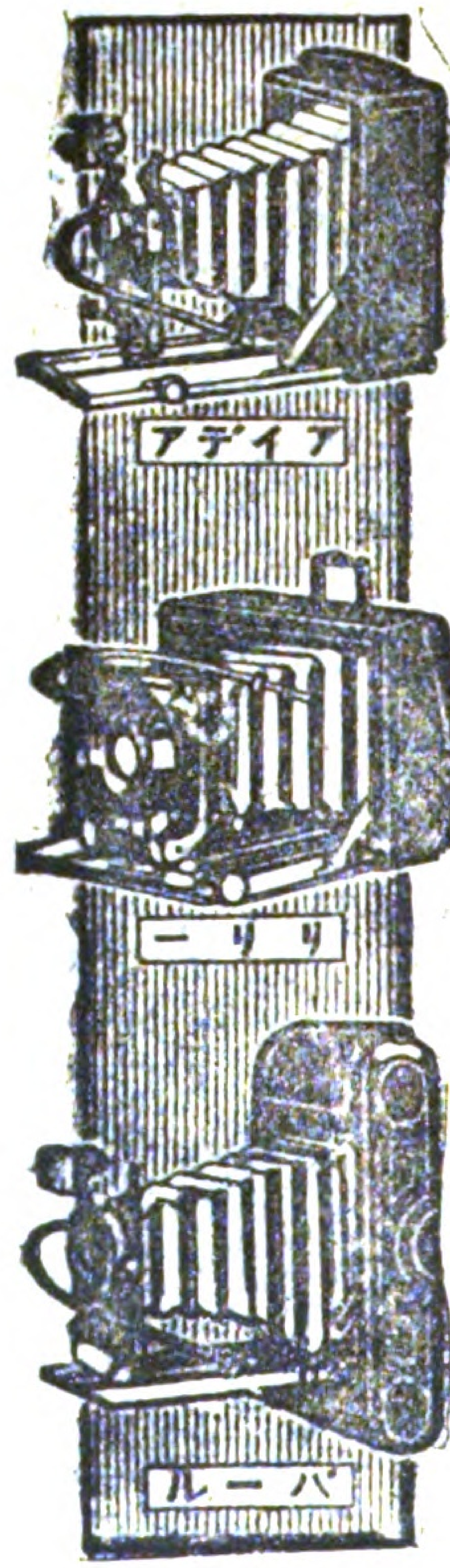
▼時論
海……水野廣德……一三三

社會評論雜談・小題小言……法學博士 吉野作造……一七八

《創作》
■山戀ひ……宇野浩二……一
■巷の雜音……藤村千代……六三


世界的優良品として外人間にも好評嘖々たる
プラトーン萬年筆
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣
愛用者の高雅な人格を偲ばしむる
プラトーンインキ
万年筆用
事務室用
學生用

旅行氣分の高潮に達した頃日
海に山に唯一の好伴侶は
リリー。パール。アイデア。



名刺形
手札形
葉書形
型錄進呈

◉藝術味ある印畫……自信ある寫眞は怎うしても完全に焦點を覗き得るカメラに限ります。リリー、パール、アイデアの三大カメラは何れも斯界の覇者として、推奬せらるゝ理想的寫眞器にして乾板フヰルム兼用せられ焦點も覗かれます。

◉面白い懸賞――以上のカメラを御求めになれば一枚宛台紙が添へてありますからあなたの傑作を貼つて御送り下さい、入選者は寫眞の趣味に掲載し賞品も贈ります。

東京本町二丁目　**小西六本店**　大阪長堀橋支店

大正十一年

中央公論

八月一日發行

八月號

第卅七年第九號

第四百十二號

夏休中の青年諸君に告ぐ

随分と長い夏の休みをどうして過したらいゝかとは、よく若い人々から聞く所の質問である。之に對していつも私の與ふる答は斯うだ。夏休みにでも無ければ出來ぬ様な異つた經驗を積むことに利用せよと。

何時でも出來る様な事を、わざ／＼夏休みにまで持ち越す程、馬鹿げたことはない。

都會に學んで居る學生が田舎に歸省し、田舎に居る學生が一寸都會に出て見る底の轉換は、別に問題とする程の事はない。避暑と稱して閑地にブラ／＼するは無意義の甚しいものであるが、やゝ篤志なものになると、この長い期間を利用して外國語を勉强して置かうとか、又は何々の學問を研究して試やうとか云ふのもある。之も誠に結構には相違ないが、併し此種の研究は、少し時間の遣繰を工夫すれば平常でも出來ぬことはない。そこで私は、平常でも出來る程のことをわざ／＼夏休みにやる必要はあるまいと云ふ。夏休みの最善の利用法としては、斯んな時にでもなければ一生の中二度と經驗の出來ぬやうな事をやつて見るに限ると思ふ。

私は生來旅行が好きだ。學生時代よく山野を跋渉したものだ。其の中でも中學時代一二の友人と一ケ月足らずの徒歩旅行をしたことは、今でも最も樂しい思ひ出の一つである。其後段々年を取ると、色々俗用が多くなつて、かうした長期の旅行が許されなくなつた。旅行好きの生れ附きである癖に、今となつて見れば、あれが一生の中の唯一の樂しい思出かと考へると、どうして若い時分にもつと能く夏休みを利用しなかつたかと悔しくなる。

人生は複雑だ。我々の經驗を豐富ならしむべき事象は我々の周圍に山程ある。迂つかりして居ると、自分の本務に縁の遠い事柄は終に全で知らずに濟んで了ふ。夏休みは實に此種の異つた事柄に些でも觸るゝ機會を我々に提供するものではないか。

昨今學生界に登山熱が盛である。誠によろこぶべき現象だ。斯んなことも夏休みにでもなければ經驗の出來ぬ

事だ。閑居してゴロ／＼して居るよりは遥によい事だが、併し青年に取つての夏休みの利用法は、決して之に盡きるのではない。

近頃は勞働問題の攻究が盛だ。青年學生に取つても之は頗る人氣のある問題だが、併し机上の空論だけでは、折角の研究の結果も社會に活きて來ない。一つ何處かの工場に傭はれて自ら職工となつて働いて見てはどうか。夏休みは正に斯んな事に利用すべきものである。

否、研究の爲でなくともいゝ。或は地主に雇はれて農作の手助けをやつて見たり、或は坑夫となり、或は漁師となり、又は客船のボーイとなつて遠洋に出航して見たり、いろ／＼變つた經驗を積む方面は幾らもある。研究などゝ云ふ目的が眼の先にブラついて居ると、却て普通の勞働者と同じ氣持になつて眞劍に實際の經驗を積み得ぬ恐れもあるから、私は寧ろ一つの定期的ビジネスとしてやつて見た方が善いやうにも思ふ。

兎に角、夏休みは斯んな時にでも無ければ出來ぬ樣な仕事をやるに限る。平常でも出來る樣な仕事を爲し續けるのは馬鹿氣た話だ。平常の仕事を夏休みにまで持ち越さねばならぬ樣な、徒らに忙しい憐れむべき境遇の人は別として、夏休みをどうして暮さうかと思ひ廻らす丈の餘裕のある幸福な人は、須らく此の幸福なる境遇を極度に利用すべきである。それには異々も云つた通り、斯んな時に限りて爲し得る樣な異つた仕事をするに限る。

金のある人は金を使つて樂しく異つた經驗を積むことが出來る。中にも海外の旅行などは最も他の人々をして羨ましむるに足るものである。金のない人も此の樂みを目當にして平素收入の一部を貯へて置くもよからう。併し金がなければ變つた經驗は得られないと思ふならば大なる誤である。私は寧ろ金のある人も、金を使はずに變つた經驗を積んだらどうかと考へる。變つた經驗もいゝが、之を享樂氣分でやることは餘り面白くない。

變つた經驗を、眞劍に。而して之に由て我が生活内容を豐富にする樣に。一言にして約すれば、廣く人生を體驗する樣に。是れ我々の青年諸君にすゝむる最良の夏休み利用法である。

中央公論



第卅七年第九號

八月號

第四百十二號

世界平和の理想に因みて諸家の文化主義を檢討す

田中王堂

下批判

一　土田杏村氏の文化主義

今日、口に、筆に、文化主義、若しくは、文化生活を鼓吹し、宣傳して居る者、實に多士濟々たるの概がある。然し、中に就き、學欲の豐潤なることに於て、見界の博宏なることに於て、そして、意氣の旺盛なることに於て、其の尤なる

ものを求めるならば、土田杏村氏の如きは確かに、其等の、しかも、其等の最初の一人であらねばならぬ。今を距ること三年前、彼れが雑誌『文化』を創刊するに方つて、其れの綱領として掲げたものの中に、わたくし共は次の言葉を見出だすのである。

　現時我が國に盛んなる文化批評の言論を見るに概ね此れに二類の謬想者あり。一は單に特殊文化科學の原理を應用して、此の生きたる全人生の價値問題を決定せんとし、其の背後に哲理より出でたる人生觀の體系を缺く政治學者、經濟學者、社會學者なり。他は嚴密學問としての哲學の素養を有するも、しかもなほ時勢批評の勇氣と着眼とを缺き、文化批評家の言論に哲學上の謬想あるを指摘するに止まりて、漫然彼等を冷笑し去らんとする哲學者なり。共に此れ思想問題を論ずるものの誤れる處置にあらずして何ぞ。蓋し前者は人間を愛することを知りて未だ思想を愛することを知らず、後者は思想を愛することを知りて未だ人間を愛することを知らざるの致すところにあらざるか否か。余輩は識乏しく見淺しと雖も、竊かに思ひを此處に潜むもの、幸ひに大方の助力と奬勵とによりて、幾分なりとも此の兩者の長處を併せ、弊處を碎き得ば、欣幸此れに過ぎたるもの無からんとす。

土田氏はかゝる衿持と抱負とを以て、文化批評に從事して居るのである。そして、誰れにしても、この三年間、彼れの事業の進行に留意し、其れの意義を理會し得た者は、一人として、おのれの力量とおのれに賦せられた天職との自覺が彼れを驅りて一個の批評家として立たしめたのであることを承認するに躊躇するものはあるまい。實に、一個の批評家としての彼れはおのれを知るの明あり、又、おのれを欺かざるの人である。

土田氏は本年五月發行の『文化』に於て、『カント哲學と社會問題』と題する一つの論文を載せ、其れの小引の中で、『現今社會問題の解決に當り、カント哲學の地位は益々重要のものになつた』と言つて居る。この一句は移して以て文

化批評家としての彼れの事業の注脚とすることが出來ると思ふ。彼れが一個の社會評論家となつたのは、大部分、彼れの性格に依つて決定されたのであらう。彼れが一個のカント主義者となつたのは、大部分、偶然の機會に依つて決定されたのである。然しながら、彼れが既にカント主義に歸依し、現に、わが國に於て最も强硬なる型のカント主義者として文化批評に從事して居るのは、つまり、獨りカント主義に憑據することに依りてのみ、嚴密なる意味に於ける文化批評は可能であると彼れの考へた結果であるに相違ない。

彼れは、彼れ自づから標榜して居る如く、學究としては、小心翼々として、その始め、カントに依つて提唱され、その後、新カント派と稱する人々に依つて祖述され、(或る意味に於ては)洗練された學說、若しくは、人生觀を解說し、敷衍して居るに過ぎない。されば、わたくし共が彼れの學說、若しくは、人生觀に於て、尠しでも獨創のものを見出ださうとすることは理由なき事である。それで、若しわたくし共にして彼れの事業に於て何等かの獨自なものを見出ださうとするならば、其れは、彼れが現在のわたくし共の生活に對する文化批評の方便として、其の學說、若しくは、人生觀を應用して居る精神と態度とに於てされねばならぬ。隨つて、彼れの事業の價値に對するわたくし共の批評は、主として、何故に彼れは現在のわたくし共の生活に對する文化批評の原理として、カント主義を採用して居るか、如何なる風に其れを適用して居るかといふ二點に向けられねばならぬ。

今日、わが國に於ては、獨逸哲學は、特に、カント主義はその全盛を極めて居る。自分では殆ど全く考へることをせず、たゞ、他人の考へ、且つ書いた書物を讀むことを哲學であると心得違ひをして居る輩は世間に澤山ある。彼等口耳の徒に依つては、哲學とし言へば、其れは獨逸哲學であつて、獨逸哲學の外には哲學の名に價するものは一つもないやうに想像されて居る。この機運に乘じて、獨逸哲學、特に、新カント主義に關する譯書は可なりに數多く出た。今日に

於ては、未だ一度も、眞面目に生活と哲學との關係を考へて見たこともなく、如何なる社會理想に依つて、如何なる體系を有する哲學が養生されるかをも考へて見たこともない、極めて無邪氣な、そして、無智な青年までが、たゞ言葉の上だけでは、容易にアプリオリとか、價値とか、當爲とか、理想とかいふものを可成り分別くさく語るのである。それなら、彼等は其等の武器（？）を以て、何處まで正確に彼等を取り卷く現代の生活の眞相を觀察し、どれだけ的確に其れに含まれた缺陷を匡正する覺悟を得ることになつたかと言ふと、彼等は一向にさういふものを得て居るわけではない。彼等は悉く樣に依りて胡盧を描いて居るのである。彼等は既成の形式を具へた哲學を記誦すればするほど、ますます、彼等の聰明は光らずに、反つて曇るのである。彼等が斯くの如くなるの罪は、彼等にあるか、彼等を敎へる者にあるか、抑も、獨逸哲學そのものにあるかは、こゝでは問はないこととするが、兎に角、この事實からしても、單に獨逸哲學を、新カント主義を解說し、敷衍するだけでは、わが文化の發展に對して大した效能はないやうに思はれるのである。

わたくし共に取つての最善は、最も優れてわたくし共の要求を滿たす、獨自の哲學を有つことである。若し、不幸にして現にわたくし共がさういふものを有つて居らないならば、第二の善として一日も早くさういふものを、有つやうに心懸け、努力することである。この目的を達する方便としては、プラグマチズムを參考とするもよからう、ベルグソン主義を參考とするのもよからう、新カント主義を參考とするもよからう、場合に依つては、プレトオ主義、アリストオトル主義をさへ參考とするのも、決して無意味であるとわたくしは考へない。然し、さうする前に、わたくし共が、くれぐれも肝に銘さなければならない一事は、現にわたくし共の文化に含まれた缺陷は何んであるか、隨つて、如何にしたならば、如何なる方法に依つたならば、如何なる方法に依らなければ、到底、其れは匡正され得ないかといふことであ

る。この一事が明瞭になつた後、わたくし共の生活の自覺として一つの哲學を建設するために、過去に於て出現した、若しくは、他の國民に依つて養成された哲學が參考とされることになれば、如何なる哲學が參考とされるにしても、其れはおのづから批判の精神と取捨の用心とを以てなされることになるから、參考とされるものは固定的に全體として取られないで、分解され、流動化されて取られることになる。かういふ風に取られることになつて、始めて、過去に出現した、若しくは、他の國民に依つて養成された如何なる哲學が取られるにしても、始めて一つの理由を有ち、一つの意義をなすといふものである。この見地よりして、わたくしは今日わが國に於て哲學研究者と自稱する人々の多くが盲目的に、奴隷的に、過去に於て出現した、若しくは、他の國民に依つて養成された哲學を、全體として固定的に傳習しながら、互に異を樹て、黨を結んで辯難と排斥とを事として居るのを愚なりとし、陋なりとする者である。彼等が、各、わが佛尊として一心に信奉して居るものも、畢竟するに、其の初め、それぞれわたくし共のとは異なつた時代に於て、わたくし共のとは異つた要求を滿たすために、著想され、完成された哲學ではないか。彼等のかういふ爲體を目撃する時、わたくしは彼等が果して哲學といふものの成立と作用とに開眼されて居るか、どうかをわたくしは疑はざるを得ないのである。

土田杏村氏はわが國の文化の研究を以て、刻下に於ける最緊要事となし、之れがために日本文化學院の創設を提唱して居られる。わたくしは彼れの意を諒とし、彼れの志を偉なりとする者である。たゞ、わたくしの怪訝に堪えぬことは、この目的を達するために彼れが現に取つて居る方法と態度とである。

わが國の文化の發達に資する目的を以て、彼れは、頻りに、一方に於ては、現に外國に於て起りつゝある學說や、運動や、制度を紹介し、說明すると同時に、他の一方に於ては、佛教々理のやうなものに對してまでも新らしき解釋を試み

ようとして居る。是等のものは、窮極、わが國の文化を建設する上に於て、それぞれ重大なる關係あるものと彼れは思惟して居るからであらう。たゞ、彼れの此等の試に對して、常にわたくしが不滿に感ずるのは、非難したいと思ふのは、其等の意義と價値とが常に新カント主義の見地より批判され、宣告されて居ることである。彼れに在つては、新カント主義が『萬物の尺度』となつて居ることである。かうすることは、今日の彼れとしては洵に已を得ないことであらうが、其れは果して文化批評家たる彼れの素志であらうか。

新カント主義は人間の文化を考察し、批判する機關としての最後のものであらうか。其れはカントが彼れの批判主義を創設した時代の傳統と國民性とを繼承して居る獨逸人に取つて最後のものであるとしても、(其れの祖國に於ても、永くさうであり得まいといふ豫見はわたくしに十分あるが、)わたくし共日本人に取つて最後のものであらうか。此れは頗る疑はしい。わたくしとて、或る意味に於て、獨逸人が哲學に於ける天才の國民であるといふことは承認する。然し、獨逸の哲學はそのまゝでは、畢竟するに、獨逸國民の哲學である、獨逸國民の哲學たるに限られて居る。されば其れは佛蘭西人に依つて、英國人に依つて、乃至、米國人に依つて研究されるとはあるが、其れが、わが國に於て流行して居る意味に於て、是等の國に於て流行したことは一度でもない。然し、この事實あるがために、是等の國民はわたくし共日本國民——何んでも新らしものとさへ言へば、ジエムスにしても、ベルグソンにしても、オイケンにしても、乃至、ラツセルにしても、自分等の要求を標準として彼等の思想の意義と價値とを限定しようとせずして、たゞ、無上に嬉しがり、有頂天になつて擔ぎ廻る日本國民——より哲學思索に於て幼稚であるからとするのは早計に失するであらう。つまり、是等の國民にあつては、生活と哲學とが密接した關係に於て考へられるため、其等の國民性に依つて支持され、其れを代表して居る哲學研究者等は自分の、及び、彼等の同胞の生活と獨逸哲學との間に、大なる齟齬のあるを意識するか

らである。英國の哲學者の中で、トマス・グリインは最も多く獨逸の觀念論の影響を受けた學者であつた。然し、彼れは其れを自分のものにするためには、先づ其れを英國化することを忘れなかつた。ブラツドレイは俗に新ヘエゲル主義者と呼ばれて居る。然し、彼れには英國式經驗主義の要素は多分に含まれて居つた。ヘエゲル主義者として養成されたヂユウエイは、一米國人として、おのれの天職に忠なるためには産業民主々義の結晶たるプラグマチストにまで轉化せざるを得なかつたのである。

土田杏村氏は、『新理想主義の哲學は此の數年來殆ど全く一般に普及されて了つたのである』と言ひ、又、『私はたゞ此の如き〔唯物論哲學に基ける〕人生觀の支持者に對して、我國の哲學界は其等の素朴的な問題に苦勞しないほど今は生長して了つて居るといふだけの事である』（『文化主義原論』第一編、第一章社會改造の原理頁四二―四三）と言つて居る。何人にしても、苟くも正しき哲學上の薫陶を受けた者がマアキシズムを其のまゝ受け取ることの出來ないのは當然である。然し、若しこゝに彼れが新理想主義と呼んで居るところのものは新カント主義に他ならないのであるならば、其れの立場よりマアキシズムに反對するのは、纔かにマアクス自身が自分の主張に對する聲言を纔かに其れの表記價に取つて形式的に其れに反對して居るのであつて、其れが起つた社會組織の背景より其れの志向を解釋し、實質的に、其れの眞價に對して反對して居るのでないことをわたくしは懼れる者である。其れから、又、彼れがこゝで揚言して居る如く、眞に新カント主義がこの數年に亘つてそんなに普及されたものならば、其の事實は、反つて、わが靑年の哲學に對する無自覺を語つて居るものではないかとわたくしは懼れる者である。何故ならば、わたくしの考へるところでは、わが國が十分なる自覺を以て新カント主義を受け入れるとしては、先づ其れを相當に變更しなければならぬ狀態にあり、要求を有つて居るからである。

こゝでわたくしが更めて言ふまでもなく、カントは曠世の偉大なる思想家であつたに相違ない。然し、彼れの眞のメリツトを知らうとするならば、わたくし共は彼れをして批判哲學を建設するに至らしめた彼れの動機を、其れの背景としてかゝることを忽諸に付してはならぬとわたくしは信ずる。彼れの動機は二重のものであつた。それはヒユウムの經驗説に依つて獨斷論の眠りより搖り起されながら、ヒユウムに依つて始められた追究を一層徹底さして、ヒユウムに取つて尙ほ一つの謎として止まつて居た『習慣』の組織を分解して、經驗はヒユウムの想像したやうに、決して單なる感覺のみからは成立しない。それは、人間の心に特有のはたらきが、外より來たる感覺を或る風に組織することに依つて、始めて成立するのである。わたくし共の知る客觀は主觀のはたらきに依つて始めて構造されるのであるといふことを證明するのは彼れの動機の一面であつた。然し、その奥に彼れにはパイヤテイズムの一信徒として、基督教に對する信仰を彼れ自づからが組み立つた認識條件の制裁の外に置かうとする欲求があつたのである。そして、この欲求に根柢を、若しくは、根柢らしいものを與へようとしたのが、彼れの動機の他の一面であつた。彼れが悟性のはたらきと理性のはたらきとの間に無理な區別を立てゝ居るのも、全く彼れのこの私の希望から影響された結果である。そして、悟性の司る認識の對象の材料は直感として外から與へられるものでなければならぬ。理性の司る思惟の對象はそれの材料として外から與へられた直感がなくとも、そこに矛盾が含まれなければ十分に成立するとカントは言ふのである。それを悟性と呼ぶにしても、若しくは、理性と呼ぶにしても、何故にカントは人間の生活の一切を積極的に認識の世界にだけ限らないで、更に、其れに消極的に思惟の世界を許したのであるか。さうしては、言説の上で、形而上學を排斥しながら、事實の上では、其れを取り入れることになりはしないか。事件は其れだけに止まらない。彼れは『純粹理性批判』に於て消極的に許したものを、『實性理性批判』に於ては積極的に主張するに至つた。是れでは、ヒユムに依つて獨斷論の眠よ

り捲り起されたといふ彼れの告白も餘程怪しいものになつて來る。兎に角、カントの哲學に相扞挌する是等の二つの側面があるのであつて、是等が（わたくしから見れば）驚くべき詭辯を以て結び付けられて居るのであるから、事件は極めて面倒になる。

或る人は、若しカントの三『批判』は其等の各に用ゐられた三つの原理が融合されて一つの批判となされたならば、そこに、始めて人間の生活に關する完全なる理論が出來ると言つた。三つの批判を融合することはさて置き、前の二つの批判だけでも適當に融合されたならば、現に在るものよりも、人間の生活に關して一層完全な理論が出來るのである。然しさうするにしても、二つの中の孰づれを基本として融合を圖るべきかが問題である。何故ならば、孰づれを力說するかに依つて、其の結果は大いに異なるものとなるからである。

前に尠しく言及した通り、（こゝには、極めて興味ある其れの歴史的、論理的考察は一切省くとして、）認識論は哲學が形而上學より再び論理學に復歸せんとする途中に於て其れが暫らく取る形式である。かういふわけで、形而上學と認識論との間には一枚の薄紙の隔りしかない。されば、形而上學と認識論との間には、（このことはカントの其れに就いても言はれ得ることであるが、）情操の上に於て共通の點が多い。それでは、この共通の點とは何んであるか。其れは、兩者は不思議にも人間の活動の全體に信を置かずして、纔かに其れの一部に信を置かうとすることである。強いて兩者の間に差別を立てようとするならば、形而上學に在つては、この一部と全體との關係を超絶的（transcendent）のものとするのに、認識論に在つては、其れを超越的（transcendental）のものとして居ると言へないこともない。是れは認識論者が努めて兩者の間に立てる差別である。然し、既に情操に於て殆ど同一であるのであるから、認識論者が實際の問題を取り扱かうことになり、實行上の情熱が加はつて來ると、（現にわが國に於ても、土田杏村氏や阿部次郎氏の所爲に照らして

も解かる通り）、彼等は認識論者として議論して居るつもりで、何時か形而上學者になつて居る。

わたくしの主張する、主張して人生の批判と改造を圖らうとする論理學は、全然、形而上學や認識論とその軌を異にする。其れは人間の活動の全體に信を置くことを以て其れの特徴とする。認識に於ても道德に於ても、其れのはたらきに拘はず總べての要素に信を置くのである。そして、統一するものと統一されるものとは、其れが人間的であるといふ單純な事由から、その全體が暫らく取る役（ロオル）に過ぎないとするのである。

なる程、人生批判の道具として、過去に於ては、形而上學の必要であつた時代もあつたし、認識論の必要な時代もあつた。現在に於ても、國柄に依つては（例へば獨逸の如き）認識論が必要とされることもあらう。然しながら、わたくし共日本人は、折角わが同胞の間に芽さしかけた實驗主義や、デモクラシイの精神を培養して行くために、生活批判の道具として、飽くまで形而上學や、認識論を排斥して、さきにわたくしが說明した意味に於ての認識論を取らねばならぬ。

わたくしのかういふ平常の確信から、こゝに或る人があつて、彼れの性格や敎養から（と言つても、その實は偶然の機會から來たる敎養が主なものとなつて居るが）、カントの、若しくは、新カント派の認識論より一層優れたものを有つて居らないために、其等を以て人生批判の道具としようとするならば、わくしは彼れに對つて、かう忠告しなければならない『あなたの志は如何にも殊勝である。十分にやつて貰ひたい。然し、あなたの其れに用ゐようとする道具は惡い。然し、其れに優れた道具の持ち合はせがないと言ふならば、止むを得ないから、成りたけ、其れを形而上學の方へ近寄らせずに、論理學の方へ近寄らせるやうに心懸けなさい』と。

わたくしは平常土田氏の才學を推賞して措かざる者である。わたくしは未だ十分に現はれざる多大の光輝を彼れの前

途に期待して居る者である。然し、現在の彼れは、攻學の精神に於て、宣傳の態度に於て、確かに邪路に陷つて居るとわたくしは思ふ。何を指して、わたくしは彼れが邪路に陷つて居ると言ふか。彼れが新カント主義に囚はれて居るのみならず、其れを不必要に形而上學的に解釋し、宣傳して居ることをわたくしは指すのである。わたくしのこの斷言が十分の根柢を有するものであることを明らかにするために、彼れの著書に於て重疊頻出する實例より二つ三つを引いて見よう。

　我々の自我の中には、我ならざる我が潛在して居る。即ち此れを無我の我と呼んでもよい。其處は即ち人格の品位の依附點である。我々は此の人格の品位に禮讃し、無我の我の命ずる聲に聞き、心の中の見えざる神に奉仕しよう。其れが即ち我々の現代に處する一本の道途である。多少極端な樣ではあるが、私は今「獨裁」といふ言葉を使用するとするならば、「理想の獨裁」こそ我々の進む可き途だといつてもよい。蓋し「獨裁」といふ言葉の主人公となるべきもの、我々の人生の理想の外には無いからである。現今我が國の一部の思想家が理想の代りに幸福を正義の代りに力を置き換へようと爲しつゝあるを見て、私は遺憾とするものである。（『文化主義原論』第二編第六章、『勞働概念と理想主義』一頁一五五。）

又、

　他によつて制約せらるゝものよりも、他を制約するものは、我々の意識のより高貴なる、より本質的なるものである。隨つて我々が、人間としての「我」を何處に求む可きかと考へた時に、經驗的意識を其れなりとせず、此れを先驗的意識の根柢に求めようとするのは當然の仕方である。若しも經驗的個人を眞の「我」なりとすれば、「我」は全然に自然物の一塊であり、外界の諸物と等しく因果必然的に經過し去る。何處にも人間としての「我」に求めること

が出來ない。(『文化』第四卷、五月號、『新理想主義と哲學概說』頁四〇—四一。)

かういふ風に、人間の生活のはたらきの原理を說明しては、其れを靈と肉、若しくは、天理と人欲といふものの對立であり、反抗であるとし、正しき行爲は前者が後者を壓服することに依つて始めて得られるのであると說明した最も舊式なる形而上學と何んの擇ぶところもないではないか。かういふ見方の誤謬であることは、其れが日夜に行はれて居る生活の事實を適切に說明し得ないことでわかる。若し人間の生活が眞に土田氏の想像して居るやうな原理で支配されて居るならば、わたくし共が或る場合に方つて、一つの行爲の方針と內容とを決定するために、何故に反省と苦鬪とをするのであるか。又、さうしたところで、どれだけの效能があるのであるが。誤れる哲學の缺點の總べては、其れが在るがまゝの生活のはたらき振りを正確に、言ひ換へれば、其れの改造に對して適切なヒントを與へ得るやうに說明し得ないことである。何故ならば、若し哲學に何等かの役目があるとするならば、さうすることが其れの總べてであるからである。されば若し世の中に哲學の嫌ひな人々があるならば、哲學の研究者たるものは、(彼等にさうするだけの聰明と誠實とがなほ殘つて居るとして、)自分等の所爲に對しても三省して見なければなるまいと思ふ。

文化批評家としての土田杏村氏の志向は可なりに正しい。彼れの志向の可なりに正しいことは昨年五月十七日に彼れが中央新聞に寄せた『藝術生活と經濟生活』と題する一論文だけでも優に立證して居る。これは極めて短かいものであつたが、極めて結構なものであつた。然し、輪廓としては正しい彼れの志向も、一旦其れに內容を盛ることになると、俟ちカントや、新カント派の學說、若しくは、人生觀に禍されて、實際の人生に關する批判としては、矛盾と破綻と橫溢して、人をして讀むに堪えざらしむるものがある。そして、一層惡いことには、彼れはそれに氣付かずして得々として居ることである。彼れが理性の超然性を說き、理想の無限性を說き、自然と價値との(やゝもすれば本質的に近いり

ののやうな）對立を説き、經驗的の品性より離れた人格の存在を説き、そして健全なる生活の要素としてあらゆる種の幸福と利害の念とを極力排斥して居る如きは、わたくしよりすれば悉く社會批評として彼れの評論を全體として殆ど無意味に陷らしめて居るのである。是等の點になると、彼れは、たゞ、他の新カント主義者よりも、一層忠實に、極言すれば、一層盲目的に、一層奴隷的に、新カント主義を祖述して居るに過ぎないのであるが、現在の日本に於て、文化批評家として彼れがさうして居るのが惡いのである。わたくしは、彼れのさうするのを見て、わたくしが平生信頼して居る彼れの聡敏を疑はざるを得ない。

カントが人間のはたらきを『先驗的に綜合的である』と見たのは如何にも當時としては卓越した發見である。然しながら、この原理を彼れの知識説に於て超越的のものとし、彼れの倫理説に於て更に其れを超絶的なものとして了つたところに、彼れの誤謬がある。彼れの倫理説は意思の自由に絶對價値を置いて、意思の自由のはたらきを高調しようとしたのであるが、彼れはこの目的のために、實際に於て、わたくし共の生活に織りこまれて居る經驗的要素を排外して、そこに純粹なる形に於て、意思のはたらきを見ようとする。かういふ倫理説に據つて生活の方針を案出しようとするのは、特に現代の如く錯雜、混沌を極めて居る社會組織の中で生活することを學ばうとするのは、疊の上で水泳を習はうとするよりも、もつと迂遠なものである。カントが形而上學の所爲を批難して、其れを眞空の中に於て飛ばうと志す鳩に比したが、カントの倫理説に據つて現代に生きて行かうとする人々は、空氣の中で飛ぶがために、先づ眞空に於て其れを習つて居る鳩のやうなものである。

幸福の欲求が生活の一つの重大なる要素であり、隨つて、其れが永久に人間の生活より取り除かれないものならば、其れのはたらきを一つの重大なる要素として認めた上、始めて人間の生活は具體的に整頓され得るといふものである。

そして、歴史と現存の傾向とは人間性の中にはさうして幸福の欲求の整頓される原理のあることを十分に證明する。然し、わたくしがさう言へば土田氏は相變らずカントの城砦に立て籠つて、『否、さう考へるのは間違つて居る。幸福の欲求はどこまでも自然的のものである。其れにおのれを整頓する原理の含まれて居る筈はない。それをするのは、幸福の欲求の外にあつて、其れを壓迫する理性であると難ずるであらう。』(『文化主義原論』第一編、第一章、『社會改造の原理』頁六五——七二參照)と。然し、わたくしは人間の欲求がさう分子的のものであるとは信じ得ない。其れは、あらゆる人間のはたらきと同じやうに、經驗に依つて組織され得るものであり、現に、組織されて居るとわたくしは信じて居る。そして、わたくしからすれば、欲求の統一されたのが理想そのものなのである。兎に角、カントが言つたから正しいとか、わたくしが考へるから間違つて居るとかいふことにはならぬ。孰づれにしても、實際の生活を說明する方法である。實際に人間の生活のはたらき振りを拔ぬ適切に說明して、其れの改造と統一とに役立つ見方、考へ方が方法として正しいのである。これを外にして學說、若しくは、人生觀の眞僞を批判する標準は一つもあり得ない。

利害の念に關しても同樣である。驚くべき、寒心すべき誤解からして、其れが協同生活に於て不必要に多くの反感と爭鬪とを起して居ることは事實である。然し、其れを全然協同生活より排外して了つて、其れの融和を圖らうとすることに何んの意味があるか。今日、利害の念としてはたらいて居るものの大部分を學問や、藝術や、產業の創造に向けることが出來るとしても、尙ほ個人と個人との關係のある以上は、或る種の利害が社會的の形に於て、永久に殘ると見なければならない。若しさうであるならば、事實を在るまゝに正視して、公正に其の融和を圖ることが唯一の賢明な方法ではないか。そして、やり方に依つては、さういふことの可能性が既に協同生活の中に假定されて居ることは、現實と現存の傾向が優に證明するところである。ソクラテイスのソフィスト等に對應した論法の眞理もこゝにあつた。わたくし

がかう言つたならば、土田氏からは矢張り前と同樣な非難が起るであらう。(同上、頁六二―六三。)その場合には、わたくしとしては前の答辯を繰り返す外に道はない。

重ねて言ふが、土田杏村氏は學說とし、人生觀としては獨自の何物をも有つて居らない。されば、彼れの事業に何等かの特徵があるといふならば、それは、カントの、若しくは、新カント派の思想を頑强に、時代錯誤的に敷衍し、誇張して、其れを以てわが國の文化の改造を企てゝ居るところにあるのである。それであるから、彼れの學說、若しくは、人生觀を批評しようとすることになれば、自然、わたくしはカントの若しくはカント派の思想にまで溯らねばならぬ。然し正面よりさういふことをするのは、初めからこの論文の目的ではなかつた。然しながら彼れの思想が如何に超絕的のものになつて居るか、隨つて、其れが如何にわたくし共の生活の文化批評として不適當なものであるかを示すために、も一度、わたくしは彼れの言葉より引用しなければならない。それは、認識上の、及び、道德上の眞理の性質に關する彼れの理會に關するものである。其れはかうである。

> 認識の範圍では、眞は範圍の判斷の理想となる絕對價値だ。此れを換言すれば、凡そ我々に認識なるものありとすれば、其れは眞でなければならぬ。しかも絕對に眞でなければならぬ。時代と共に變遷し、改竄せらるゝ樣なのは眞理で無い。又甲乙、其の見るところに隨つて或は眞であるとし、或は僞であるとする如きものも眞理では無い。眞理は世の何人に對してゞも眞理でなければならぬ。否な今現に人生に生息する何億かの人間に對して眞なるのみならず、將來生れ來る無限の人間に對して絕對に眞でなければならぬ。卽ち眞理は永遠不變的のものだ。普遍妥當的のものだ。(『文化』第四卷、五月號『理想の普遍妥當性』頁一二一。)

又、

我々は常に自己の主觀的判斷に隨つて、其の善しと信ずるところを行爲する。其の場合の信條は一個の實踐的原理である。併し其の實踐的原理は、神ならぬ我々、經驗的の人間によつて作られたものなるが故に、全く客觀的の價値標準に立つて見て、誤り無きものなるや否や、容易に決定は出來ぬ。此れは科學の上の眞理にもある。ニユートンが正しいか、アインシュタインが正しいか。何れも我々經驗的の個人の考察にかゝる眞理ならば、其は客觀的に見て永遠不變の眞理なるや否や、保障の限りでは無い。ニユートンの理論、アインシュタインの理論は、其のまゝに眞ではなく、此等を批判して其の正否を決定する標準が眞なのである。眞價値は、永遠に不變であり、普遍に妥當するが、現實の人間によつて作られた眞理には動搖がある。(同上『新理想主義倫理學概說』頁二八。)

かういふ考へ方はカント主義の埒內では通るかも知れないが、其れの埒外では、一向に通らぬものである。かう說いては、先驗的であるべき筈のものが、性來的のものとなるから、カント主義者の中にもこのまゝでは受け取らぬ者が多いであらう。かういふ考へ方は全然虛罔である、空虛である。一體、カントに依つて立てられた論理主義と言ふものが頗る怪しいもので、其れは形式的だと言ひながら、其れを說明することになると、何時か實質的になつて了ふ。彼等の主張に從つて、認識の、若しくは、道德の眞僞を批判するものは普遍妥當的の眞理でなければならない。其れに依つて總べての思想や行爲が批判されるのであると言つても、現在、何人の心に於ても、そんなものは存在し、はたらいて居るものではない。されば、結局は、各個人が彼れの屬する社會の文化より攝取したものと、彼れが彼れ自身の經驗と反省とに依つて所得したものとを標準として、個人として社會人として總べての、思想と行爲とを決定して居るのである。いくら堀り下げても、此れ以外に人間の生活の中に、或は、心の中に、何物でも見出だされようとは思はれない。

それでは、相對主義に墮して了ふ、とわたくしの反對者は言ふであらう。如何にも、かう考へるのは相對主義の見地で

ある。然し、わたくしは相對主義を懼れる者ではない。わたくしの考へでは、相對主義こそ、(言葉の上の矛盾が許されるならば)眞の絶對主義であるのである。相對主義は生活の機關として發生し、絶えず、其れの効果に依つて、其れの眞理が證明され、其れの缺陷が補正されて居る。されば、わたくし共にして人間の生活そのものを信頼し得る限り、わたくし共は相對主義をも信頼し得なければならぬ筈である。わたくし共の生活の方針として、相對主義の他に信頼するものを求めてはならぬ。

カントの生活には彼れの最初の企てであつた批判主義の十分に徹底されなかつた箇處があつたために、基督教の迷信に依つて養成された彼れの情操に或る surd が取り殘されたのである。それが今日カント主義者の累を爲して居るのである。わたくし共は、この surd を溶解し、整頓して、其れをして、わたくし共の生活に對して或るはたらきを有たせるやうにしなければならぬ。

土田杏村氏はかう言ふかも知れない。『生活批判の哲學としてカント主義が一番正確なものを自分に與へるから、自分はそれを取つたのである。』と然し其れは、土田氏がわたくし共の見るやうな歴史を作り出し、現にはたらいて居る人間の生活全體を信ずることが足らないからである。彼れにして十分に其れを信ずるならば、彼れと雖も、カント主義よりも、もつと親切に、もつと忠實に、人間の生活を鑑賞し、評價して居るものが別にあり得ることに氣付くであらう。

二　左右田喜一郎氏の文化主義

希臘の悲劇家の苦心であり、同時に、彼等の矜りであつたのは、ホオマアとか、ヘシオドとかいふ天才に依つて創造された神話、若しくは、傳説の極めて狹く限られた範圍の中に跼蹐しながら、出來るだけ忠實に其等の輪廓を保留しな

がら、その内で獨自の美と道德的意義とを發揮することであつた。近世の初期に於て流行したソンネットの作者等の興味も、あの嚴格な、そして、窮屈な形式を鄭重しながら、その内で、悠揚として自身の情緒を抒べるところにあつたのである。世に神學者とか、經典解釋者とか呼ばれる人々が、大體、傳統の範圍を出でず、其れの經文に依つて說かれる人生觀の價値に對しては、一向に批判を試みようとしないことは勿論のこと、それまでに推積されて來たいろいろの解釋の權威に對してさへも反對を企てやうともしないで、其等を無雜作に肯定しながら、今日、わたくし共から見れば、纖かに割毛に等しき仕事に苦心慘憺たるもののあつたのも、つまり、彼等には其れ以外の、若しくは、其れ以上のことをするだけの叡智が缺けて居たからであるとばかりとは言はれない。希臘の悲劇家の心や、ソンネットの作者の心を支配して居た興味が、亦、主として彼等の心を支配して居たからである。必要なる改造に氣付かず、又、それを敢てせざるまでに、極端にこの興味に支配されて居る人々を、わたくし共は（こゝには彼等を特に文化に關聯さして、そして、創造の人に對照して）デカダン、卽ち、爛熟の人と呼ぶのである。

今日になつても、この興味はわたくし共の心の中から全然過ぎ去つて了つたわけではない。特に學問や藝術に從事する多くの人々の心に於て、この興味が强くはたらいて居るのをわたくし共は見るのである。然し、仔細に點檢すると、苟くも創造しなければ止まれない天才は別として、天才以外の人々に於ては、この興味に支配される多少は必ずしもその人の才能の高下には比例しないで、其れは、主として、その人の性格と彼れの學ぶところの學問なり、藝術なりの流派の構造及び精神とに依つて決定されるやうに思はれる。わたくしはこの實例を左右田喜一郎氏に於て見るのである。彼れは卓越した才能を有して居る。然し、彼れは彼れの性格と學ぶところの哲學に依つてなほ一個の爛熟の人となつて居るのである。

わたくしはまだ親しく左右田喜一郎氏の爲人を審かにするの機會を有たぬ。然し、わたくしが彼れの著書を通して彼れの風丰を想見するに、彼れは一身にして學者と紳士とを兼ねたものの好箇の一典型であらう。一方に於ては、謙虚ますます益を求めて止まないと同時に、他の一方に於ては、毅然としておのれの信ずるところのものを取つて動かざる彼れの態度には、確かに人をして敬畏せしむるものがある。

可なりに讀みづらきまでに紆餘曲折を極めた彼れの文體を通じて現はれる辯證家としての彼れの天分は決して貧弱なものではない。大體から言へば、彼れも亦リツケルトの思索方法を紹述して居る一人であるに相違ない。然し、彼れは他の多くの新カント主義者の所爲に倣はず、リツケルトの思想の單なる信奉者、若しくは、解釋者たるに滿足せずして、彼れに獨自の理會なり其れの志向を改釋し、其れの缺陷を充塡しようと努めて居るやうである。この事實あるに拘はらず、畢竟するに、彼れは新カント主義者として終始するの人である。彼れの努力はリツケルトに依りて作られた埒外に自由を求めるためのものではなくして、その埒内に安住の地を得ようとするためのものである。されば、リツケルトの思想に對して同意を表することの出來ないわたくしが、細目に於ては兎に角、その大綱に於てリツケルトと其の揆を一にする左右田氏の思想に對して同意を表することの出來ないのは理の當然である。

左右田氏の哲學は彼れの師、リツケルトの業を承けて文化の哲學である。謂ふところの論理主義に依つて文化の意義と構造とを究明することを唯一の目的とする哲學である。されば、彼れが著はすところの文章は、直接に、若しくは、間接に、文化を以て其れの題目としないものは一つもない。是等のものの言説の歸着するところは至つて簡單であるが、其等が推理し、辯證する經路は可なりに多端となり、可なりに精細を極めたものとなつて居る。こゝには彼れの「文化價値と極限概念」一卷を、特に其れの中に收められた「價値哲學より見たる生存權論」と「文化主義の論理」と

を中心目標として彼れの文化主義に對してわたくしの意見を述べて見ようとおもふ。

文化の性質に關する彼れの見解には何等の新奇なものは含まれて居らぬ。それはリッケルトの見解そのものである。そして、リッケルトが文化の性質を如何に理會して居るかといふことは今日に於ては周知の事に屬する。然し、こゝに讀者の便宜のために、其れに關して左右田氏の著書よりの一引證に依つて、彼れをして自づから說明せしめて置かう。

所謂文化とは自然に對する語である。何等かの意味に於て與へられたる自然の事實を或一定の規範に照し之を純化し、窮極に於て其の理想とする所を實現せんとする過程の全體を稱して吾等は之を文化と呼ぶ。之を其の內容につきて思へば、各限られたる範圍に於ける一方的努力の過程に於ける所產は即ち吾等が呼んで藝術となすもの、學問となすもの、宗敎となすもの、道德となすもの、技術となすもの、法律となすもの、經濟となすものである。即ちこれ等の文化財 (Kulturgüter) は文化生活全般の裡に於ける一方的努力の所產である。其の各々が或一定の規範實現に對して相互に補充的に且協働的に各々所有の使命を有するものなりとの意義に於て、即ち之を通俗的に云へば有機的の組織となすものなりとの意味に於て此等の文化財の總體を呼んで吾等は之を文化と稱するのである。此の如き文化は價値實現の過程なりと見らるゝに於てのみ其の全き意味が存する。かくして初めて自然に對峙するものとして其の意識を有し得べきである。反之文化の歸趣、文化の目標、依つて以て文化をして意義あらしむる當爲は即ち文化價値である。一切の人格は此の如き文化價値實現の過程に於て一以て他に代置し得べからざる其自らの價値を保有し得と見らるゝに於て、語を換へて曰へば一切の人格は文化の生產、創造にたづさはることによつて其自らの重要と價値とを發揚するに於て其自身固有の意義が見出し得らる。人格とは文化價値と相對してのみ意味がある。文化價値は其自らの論理を內在的に含み得る客觀であり人格は之をして抑々意味あらしむる主觀である。人格なきの文化價値はなく、文

化價値なきの人格はあり得ない。文化價値に對せざるものは自然人であつて、人格は唯文化人に存するのみである。此の如き意味に於て解せられたる一切の人格が、文化價値實現の過程に於て假令其の中の一個でも其の過程の表面以下に埋沒せらるゝ事なく、悉く皆其の表面に於て其自身固有の位置を占め、一義的且一律的に一列に配置せられ、而して其の窮極に於て儼として目標たり、規範たる文化價値が立ち、而かも其の有する論理的普遍妥當性が此等一切の人格によつて事實上にも內容的に實現せらるゝことを求むるものは即ち余が茲處に提唱せんと欲する文化主義である。言葉を換ふれば文化價値の哲學を基礎として一切の人格、一切の文化を認承せんとする「ヒューマニズムス」であり、人格主義である。(『文化價値と極限概念』第一編『價値哲學研究』頁五八―六〇。)

是れは、如何にも巧みに、そして、如何にも簡明に、リッケルトの根本思想に基づく文化主義の意義を闡明したものである。平生、哲學思索の特徴に嫺れない人々に在つては、或は、この見解の中に含まれた根本假定が如何なるものであるかを摘發することが出來ないために、氏の文化主義なるものが左右田氏に依りてこのやうに說明されたならば、彼れのこの見解をたゞ至極尤ものものとして受取らないとも限らない。そして、わたくし共が現に見る如き人間の生活の構成とはたらき振りとを妥當に說明するものとして、かゝる見解の外に他に一つでもあり得ないと速了しないとも限らない。然し、わたくしとしては、彼れのこの見解をさう無雜作に受け取り得ないのである、さうは輕卒に速了し得ないのである。

わたくしが世間の新カント主義者や、新カント主義を盲目的に、沒批判的に、尊信して居る人々のやうに、左右田氏のこの見解を直ちに採つて、わたくしの生活信條とし得ないのは、さうすることの出來ないのは、わたくしには其れの中に含まれて居る根本假定に對して異議があり、隨つて、其れより引き出される歸結に對して異議があるからである。

それでは、其れに對してわたくしが異議を挾む根本假定とは何んであるか。も一度、彼れをして、彼れ自らの言葉を以て其れを說明せしめて見よう。

惟ふに今吾等が當面の問題とせる一主義を貶して他主義を擧ぐるに當つて、此の如き價値判斷をなすに必要なる論理的「アプリオリ」たる規範、當爲は、此等の內容が依つて以て上下の階層をなして一義的に一列に配置し得べき樣の目標でなければならぬ。卽ち此等の內容たる諸主義を或一定の觀點から見て之を純化しつゝ進む過程の窮極に立てる一個の「イデー」でなければならぬ。余が他の機會に於て述べし語を藉りて曰へば、此の如き「アプリオリ」は內容を純化する過程に於て其の一方的高昇の極限概念として見らるべき「イデー」であり「ゾルレン」(當爲)であり「ノルム」(規範)である。(同上、頁五六。)

『……此の如き「アプリオリ」は內容を純化する過程に於て其の一方的高昇の極限概念として見らるべき「イデー」であり「ゾルレン」(當爲)であり「ノルム」(規範)である。』! このやうな作用を其れの性質とする「イデー」や「ゾルレン」や「ノルム」が現にわたくし共の生活を統一する標準となつてはたらいて居るといふ彼れの根本假定にわたくしは異議あるものである。「イデー」といふもの「ゾルレン」といふもの、「ノルム」といふものも、其れの性質の解釋次第に依つては、其れをわたくしが見て以て正しとする生活の原理と出來ないこともないが、彼れは、さうすることを許さぬであらう、若しさうしたならば、彼れに取つて、其れは、已に生活の原理とはならないものとなるのであらう。何故ならば、プレトオを同じイデーの發見者とし、カントを其れの完成者として、左右田氏は『世界の凡ゆる文化が一朝にして消え去るとも、吾等に Platon とKant とが殘さるゝならば、吾等は之によつて能く永久に人文の記錄を再生せしめ得るであらう。……… Platonが Ideen 界の頂上に善を置きたる思想は正しき傳統を通して Kant に至りて當爲(Sollen)

となつた。』(同上、『價値の體系』頁八九。)と言つて居り、觀て居るからである。

プレトオの理念は、隨つて、其れの主宰者たる善は彼れがソクラテイスの誤れる論理を襲套し、そして、多分には、一詩人としての遊戯氣分を以て其れを神話化した結果に過ぎない。概念を知覺の中に見出ださうとするソクラテイスの歸納法には、確かに缺陷があつた。彼れは知覺全體のはたらきの意義に其れを求めずして、其れに含まれた、然し、特殊のはたらきを有つものとして概念を求めたからである。

わたくしは、こゝに、ソクラテイスが好んで引いた實例を用ゐて、彼れの誤謬が如何なるものであつたかを尠しく説明して見よう。

政治家や、大工や、詩人が一つの協同團體の中にあつて、一つの協同生活を營むことの出來るのは、彼等は、各、異なつた仕事に從事して居るやうではあるが、彼等の生活を分析して見ると、其等の各は、他の點で、どんなに異なつた要素から成り立つて居るにしても、尠なくとも、租税を納めるとか、兵役に就くとか、子弟を教育するとかいふことだけは、共通のものとして彼等の總べての生活に含まれて居る。この事實を論理の言葉に翻譯するならば、彼等の各の生活を組織しながら其れに獨特な要素は、悉く知覺である。獨り其等の總てに共通の要素だけが概念である。そして、この概念たる彼等の總べての生活に共通する要素だけが彼等の各の生活の間に存在する正義や善の根柢となるのであるとソクラテイスは説いたのである。然しながら、是れは、ソクラテイスの誤解であつた。政治家が政治を執り、詩人が詩を作り、大工が家を建てることだけに從事して居て、生活することが彼等自身に可能であり、他人に依つて必要とされるのは、彼等が一つの協同團體に屬し、そこに、一つの協同生活を營んで居る結果である。されば、彼等の正義、若しくは、善は、即ち彼等の社會的意義は、一人、一人の生活全體と、他の人々の生活全體との間に存在する相互の關係に求められ

ねばならなかつたのである。かうすることを論理學の言葉に飜譯すれば、概念は知覺全體のはたらきの意義に求められなければならなかつたのである。

然し、不幸なことには、プレトオは彼れの師より、この誤つた論理を承け繼ぎ、そして、更に不幸なことには、其れが誤まれるものであることに氣付かなかつたのである。知覺は混沌として統一すべからざるものである。獨り、概念だけが統一され得る根柢を有つたものである。そして、彼れは彼れが見て居た實際の生活の中にそんな概念を見出ださうとした。然し、そんなもののありやう筈はないから、彼れはそれを見出すことが出來なかつた。彼れの現に見出し得る概念は知覺と錯綜して多少不純となつたばかりであつた。それで、純粹の概念を求める彼れの憧憬は知覺と概念との關係を發生的に想像することに依つて慰安を得ようとすることになつた。この自然の結果として實際の生活、即ち、この現象界に於ては、總べての物は知覺の形を取つて居る。然し、わたくし共の經驗しない世界、即ち、本體界に於ては知覺の形を以てわたくし共に依つて經驗される其等のものは、一度純粹の形に於て概念として存在したに相違ないと推理するよりも、寧ろ想像するに至つたのである。そして、さう想像して彼れは、一詩人としての彼れの憧憬に滿足を與へたのである。かうして出來たものが、Ideen 即ち、理念である、（現象界に於ける總べての物の）原型である。善とは（物に就いての彼れの考へ方は、彼れの師よりの傳統を守つて總べて倫理的であつたから）是等の創造された、若しくは、捏造された原型の間の作用關係の統一されたものの表現に過ぎない。

かういふ風に、其れの系圖を探ねて來ると、如何ほど Cohen がプレトオを純粹思惟の開祖として稱揚しても、彼れの理念といふものは大して有り難いものではないやうである。成る程、其れは、始めから（想像の上に於てだけではあるが）一切知覺の要素を排示して出來たものであるから、其れは純粹概念であるに相違ない。然し、如何に其れが純粹で

あつても、否、其れが純粹であればあるほど、わたくし共の實際生活には役に立たないものとなつて了ふ。『世界の凡ゆる文化が一朝にして消え去るとも、吾等に Platon と Kant とが殘さるゝならば、吾等は之によつて能く永久に、人文の記錄を再生せしめ得るであらう。』と左右田氏は如何にもえらさうに揚言して居る。わたくしと雖も、見方に依つては、左右田氏のこの揚言に裏書きしないこともない。然し、それは、コオエンが發見したと言はれて居るやうなものとは全然違つた見方を取つてのことである。そして、この見方は偏狹なる、不自然なる、カント主義、若しくは、新カント主義の埒内に跼蹐して居る人達の到底思ひも付かぬものなのである。

カント主義、若しくは、新カント主義のカントの思想全體に對する關係は、丁度プレトオ主義、若しくは、新プレトオ主義のプレトオの思想全體に對する關係に於けるやうなものだとわたくしは考へて居る。カントに於ても、プレトオに於ても、わたくし共が就いて學ばなければならぬ、又、學ぶだけの價値のあるのは、俗に、彼等の思索の歸結として取られて居るところではなくして、其れは、其等がいろいろの矛盾と錯誤とに陷つてゐるに拘はらず、カントにしても、プレトオにしても、おのれの生きた時代の生活理想を代表しようと苦鬪してゐたことの結晶であるところにあるのであるが、兩方の主義者には、この意味の深さと有難さとが一向に解らないのである。わたくしが見方からして、左右田氏のこの揚言に裏書き出來るといふのは、極めて柔軟な、極めて自由な、そして、極めて豐潤な解釋をプレトオとカントとの上に施し、プレトオをして古代人の生活に含まれた意義を代表せしめ、カントをして十八世紀より十九世紀に亘る近世人の生活に含まれた意義を代表せしめてのことである。決して單にプレトオを Ideen の世界の創造者としての資格より見、カントを Sollen の境の唱道者としての資格より見てのことではない。

然し、プレトオを單なる Ideen の世界の創造者として見、カントを單なる Sollen の境の唱導者として見て來ると、一

方は或るものを創始し、他の一方は其れを完成したと見らるるまでに、兩者の間に共通點の見出だされて來るのは左右田氏の言の如くである。何故ならば、先入主の偏見より、生活のはたらき振りの眞相を誤解し、其れを組織する成分を無理に、不自然に、感覺的要素と超感覺的要素との二つに引き離し、後者が前者に君臨し、前者を律するところに、始めて、人間の生活が成り立つとすることになるからである。わたくしからすると、人間の生活のはたらき振りをかういふ風に理會しては、其れはどうしても生活そのものの中に其れの原理を見出だそうとすることにはならないで、それを生活の外に立しようとすることになるからである。こゝに、彼等が、揃つて盲目なる優越感に囚はれし、論理主義者の誤謬が伏在する。眞にわたくし共にしてカントの思索の歸結だけをそのまゝ受け取らないで、其れをしてそこに至らしめた動機と、其れがそこに至るまでの經路との意義を十分に理會し、鑑賞するだけの聰明と自由の精神とがあるならば、彼れに依つて建設された論理主義もわたくし共に與ふべき多くの貴き教訓を有つて居ることは疑はれない。然し、其れは、當初、カントに依り夙に、誤れる心理學的二元觀に立つて形付けをされて了つた。カントの後になつて、論理主義は纖細となり、或る意味に於ては、カントに依つて犯された過失は訂正されたとも言はれ得よう。然し、わたくしからすれば、當初カントに依つて假定された心理學的二元觀の缺陷は或は深められたことはあらうが、決して、其れは、取り除かれては居らない。カントの陷つた心理學的二元觀の誤謬は（認識の様式としては）ヒユウムの不徹底な分析をそのまゝ受け取り、更に、道徳の様式に於ては其れを古代の宗教が立てた靈肉觀を以て誇張した結果であるが、今日の論理主義は、之れが改造を試みないで、大體に於て、其れを襲套して居るのである。

新カント主義者の努力は正しい方向を取つて居ることをわたくしは認める。然し、わたくしは、端的に人間の生活、其のものに面し、其れを正解することに依つて、新たに人間に關する正しき理論を立しようとするだけの勇氣と聰明と

の彼等に闕くるあるを彼等のために惜しむ者である。斯くして、彼等の努力の大部分は、（わたくしから見れば、）信徒の敬虔なる精神を以て、徒らに傳統の約束の內に止りながら、彼等の經驗に依つて敎へられた事實と、その學說の輪廓との間に見出だされる扞格を彌縫して行かうとすることに費やされて居る。リツケルトにして既にさうである。彼れの弟子たる左右田氏にしてさうであるのは別に怪しむに足らない。彼れの謂ふところの『極限概念の哲學』はかゝる努力の一結晶に過ぎない。

わたくしは、意味の取りやうに依つては、當爲と存在とを對立させ、文化は當爲が存在を醇化して行く過程であるといふ左右田氏の意見に必らずしも反對しない。然し、左右田氏がこの過程を以て（新カント派の人々に特有の解釋に隨つて、）倏ち共れをプレトオ式の、若しくは、カント式の Ideen の發動と見て了ふところにわたくしは反對するのである。何故ならば、さうして了つては、人間の生活の價値の實現を無窮の未來に於て求めることになつて、現在に於て、時々刻々に實現されて居る價値をたゞにそこに達する段階としての外は、全然、見落すことになるからである。かういふ考へ方は、確かに、わたくし共の實際の意識とコンヴイクションとに反するものであるとわたくしは斷ずる者である。ニイチエのやうな、一面、あれほどまでに現實を尊重すると揚言した人でも、なほ、彼れの超人說に於て、理想の實現を空漠たる未來の中に求めることに於て大變な誤謬に陷つたのであるから、カントの遺鉢を繼いだ新カント派の人々がそれほどの誤謬に陷つて居るのに何んの不思議もない筈である。

當爲と存在との對立することは、そして、當爲が存在を醇化して行くことは、わたくし共に取つて生活の根本事實であると見られ得る。然し、是等はわたくし共が生活して行く上に、時々刻々にわたくし共の生活の中から派出する對立である。何も永久に亘つて存在といふ一定した領分があつて、共れを當爲がだんだんに征服して行つて居るのではな

い。(かういふ風に言つては、新カント主義の人々が無論承認しないであらうが)、彼等がさういふ考へ方を採るのはカントを通して基督教の人生觀が、猶ほ、彼等の心を暗々裡に支配して居るからである。事實、わたくし共の各は個人として、社會の一員として、時々刻々にそれぞれ價値を實現して居る。それは、一つの判斷が終結された時、一つの行爲が決定された時、一つの計畫が完了された時に於てである。わたくし共は、個人的にも、團體的にも、續いて生きて行く者であるから、當爲に依つて一つの存在が征服されても、まだ存在の總べてが征服されて了つたわけではない。然し、存在の征服し盡されずに殘る部分と見えるものは、その實、さきに當爲が征服した所産そのものであつて、新らしい一つの存在である。

野蠻人と雖も、文化人と等しく、生活して居る以上は其れ相應に價値を實現して居る、彼等が一つの判斷を終結した時に、一つの行爲を結定した時に、一つの計畫を完了した時に、彼等が意識する滿足がそれである。かういふわけであるから、文化人の生活に限つて價値があるなどといふことはない。たゞ、野蠻人が用ゐて彼等のために價値を實現して居る方便は、文化人に取つては方便にはならないといふだけの話である。文化人は彼等の產業や、學問や、道德に依つて彼等のために價値を實現して居るならば、野蠻人は彼等の神話や、魔法や、戰爭や、遊戲に依つて彼等のために價値を實現して居るのである。意味としては、是等の兩方の間に何等の差等もない。

かういふわけで生存權は價値の根柢とはなるが價値とはならないといふ彼れの主張は、全く彼れが價値の性質を誤解して、其れは獨り遠き未來に於て完結されるか、或は、現代に於けるよりも遙かに其れに近づくものとして居る空想から、來て居るのである。そして、其れはリツケルトの歷史哲學に誤られたものであることは言ふまでもない。

左右田氏は、藝術、學問、宗教、道德、技術、法律、經濟等を文化の內容を組織するものとして、是等を文化財と呼

んで居る。そして、其等が方便とされて永遠の過程に於て實現されるものが文化である。然し、現在、協同團體を組織して居る總べての人々が、各、是等の文化財の孰づれかを創造して居るとは言はれない。然し、價値は是等のものに限つて見出だされるのであるから、彼等の或るものに生存權を保障するといふことは、價値でなくして、其れを創造せしめる準備に過ぎないと左右田氏は謂ふのである。然し、わたくしに言はせれば、是等のものは價値の主體ではなくして、客體である。若し、强いて其れを價値といふならば、其れは一次的の價値ではなくして、二次的の價値である。

それならば、一次的の價値たるものは何んであるか。

其れは一つの協同團體を組織することに依つて、其れからおのれの生活の保障と利益とを得ようとして居る人々の生活そのものでなければならない。

一次的の價値は、人間にあつては（總べての生物にあつてもさうであらうが）彼れの生活に作なふ意識の最も根本的のものである。隨つて全然不合理的のものである。多分、何人にしても其れの理由は說明出來まいが、わたくし共には生の欲求と執着とがある。わたくし共の生活が維持され、助長されゝば、わたくし共はその事實を價値と感じ、反對に、其れが阻害されゝばわたくし共は其れを價値の否定と感ずる。リツケルト派の人々に依つて認識上の價値と見做されて居るものも、其れの根源を索ぬれば、こゝより發して居るに相違ない。されば、一つの協同團體を組織することに依つておのれの生活の保障と利益とを受けることを期待して居る人々が、その協同團體に依つてそれぞれ生存權を獲るといふことは當然である。左右田氏の想像するやうに、彼等の或るものはまだ文化財の或るものを創造するに到らない。が、總べての人々は人間であるといふ簡單なる事由より、他日さういふものを創造することが出來るであらうといふ假定の下に、彼等の生存權が保障されるのではなくして、單に、協同團體の成員であるがために、彼等の生存權は保障されるの

である。

尤も、協同團體に入り來る總べての人々は、さうすることに依つて其れより自分が利益を受けると同時に、其れの利益を增進する約束の下に、そこに安んじて生活して居る以上は、彼れに內具の價値は、この協同生活の普遍の目的より批判されて絕對的のものより相對的のものとならねばならぬ。例へば、協同團體の利益を破壞するやうな或る人の行爲は、彼れ自づからに取つては、どれだけ價値のあるものであつても、彼れの屬する協同團體よりは制限され、或は、禁壓されなければならぬといふわけである。

一つの協同團體を組織して居る者は、誰れにしても、彼れの社交的本能よりさうして居るのであるから、その協同團體より自分の一次的の價値を保障されると同時に、私の利益のために其れの公の利益を破壞して顧ざる惡人の外は、彼等が協同生活を營んで居るといふ單なる事實に依つて、自づから、其れに對して、其れの文化のためには、即ち、一層住み善き環境を造るためには、それぞれ應分の貢献をして居るのである。そして、其等の貢献が或る天才に依つて拮撥され、醇化されて、產業、學問、藝術、法律等が創造されるのである。然し、現に其等を目に見えて創造しない、又、創造することの出來ない人々が其れの團員の多數を占めて居ると言つても、文化的に見て、彼等の生活には何等の價値もないものであると、どうして言ふことが出來ようか。

本能を生活の道具として生活を始める動物に在つては、生活するといふことは與料（datum）であるが、衝動を其れの道具として生活を始める人間に在つては、生活するといふことは課せられた問題（problem）である。（わたくしはこゝにこれに關して細論に入ることの出來ないのを遺憾とするが）つまり、產業とか、藝術とか、學問とか、政治とか、道德とかいふものは、この課せられた問題を解決するために、人間がさきの衝動を醇化して工夫したものである。され

ば、是等のものが、彼れに取つて價値であるには相違ないが、其れが價値たり得るのは、遠き未來に於て達成されると想像される文化のためではなくして、一次的の價値たる彼れの生活欲を充たす方便となり得るからである。

多數決を是認する論理が、全然、誤つた原理の上に立てられて居るといふ左右田氏の意見に對しては、わたくしは彼れの歸結に全然同意する。然し、これはわたくしが彼れの文化主義に含まれた假定を受け取つて居るからではない、わたくしは人間の生活の原理として、哲人主義を執つて居るからである。わたくしが、何故に生活の原理の正しき說明として哲人主義を取つて居るかの理由に至つては、わたくしは、こゝに細叙する暇を有つて居らぬ。詳しいことは、さきにわたくしが公表した『代表と卓越』と題する一論文に就いて見て貰ひたい。

然し、その要旨を一口に言つて見れば、人間の生活は其れが個人的のものであつても、社會的のものであつても、代償（Substitution）即ち、代表（Representation）の原理に依つて統一されて居る。代償とは其れの行はれる經過に與へられた名稱であつて、代表とは其れの意義に與へられる名稱である。個人の生活に於ても、社會生活に於ても、この原理を外にして人間の生活に含まれた雜多の要素が統一に歸する原理は他に一つもあり得ない。この原理は合議の形式を通して卓越性が發見、若しくは、創造され、卓越性が主權を司るに至る原理であるから、わたくしのやうに、カント學派に屬する人々の主張にかゝる理性が感性を支配して行くことに依つて生活は統一されるといふ獨裁主義より轉化した神話を信じないものに取つては、生活を統一する原理として代償、即ち、代表の原理を取る外に道はないのである。この原理をわたくしは哲人主義と呼んだのである。さうすると、上古より近代に至るまで、苟くも人間の生活を支配して來たものは、其れが專制社會に行はれると、代議社會に行はれるとに論なく、悉く、この原理であつたやうに思はれる。時代時代で變はつて來たのは僅かに其れの外形、即ち、手續きに過ぎなかつたのである。

わたくしの多數決是認の論理に反對するのは、尠なくとも、其れが形式的に取られた時に、其れは哲人主義の原理と抵觸する假定の上に立つて居るからである。わたくしは、こゝに、特に形式的に取られた時にと注意して置く、何故ならば、其れが實質的に實際の生活に應用せらるることになり、さうして、そこに出來るだけの効果を擧げなければならないことになれば、自然、其れは人間の生活の根本原理たる哲人主義の原理に依りて運用されなければならないからである。さう考へるのが眞理であることは、表面多數決是認の論理の上に組織されて居るあらゆる合議體、例へば學校とか、會社とか、協會とか、議會とかいふものは如何にはたらいて居るかを見れば、直ぐにも解かることである。是等の孰づれもは、それぞれ賢愚の差あり、熟練、不熟練の相違を有するメンバアに依つて組織されて居る。そして、其等のメンバアの各は規定の上では悉く一以上でもなく、一以下でもなく、たゞ、一の價値ある、一票の投票權を有つて居るだけである。然しながら、哲人主義の原理に隨つて、大抵の場合に於ては、賢き者は愚なる者を率ゐ、不熟練者は熟練者に歸依して其の成績を擧げて居る。何故ならば、一つの協同生活を組織するメンバアに取つて、さうはたらくことが（カント主義者の好きな言葉を藉りれば、）つまり、アプリオリであるからである。

或る人は、わたくしのこの説明を聞いて、多數決是認の論理の下でもそのやうに哲人主義の原理がはたらいて居るならば、多數決是認の論理は別に非難さるべき理由はないではないかと言ふかも知れない。然し、その下に哲人主義の原理が行はれるのには、多數決是認の論理が正しいために行はれるのではなくして、其れが間違つて居るに拘はらず行はれるのである。事實さうであるとしたならば、始めから哲人主義を人間の生活の根本原理として、最も善く其の効力を發揮するやうな機關や、制度を組織することが最も賢い道なのである。さうすると、何故人間の生活の根本原理と抵觸し、隨つて、其れのはたらきを鈍らせるやうな多數決是認の論理が十八世紀より十九世紀にかけて、當時の指導者に依

つて唱道され、そして、其れが忽ちにしてあらゆる合議體に依つて、其等の信條として採用されるに至つたかといふことが問題となる。この出來事其れがさらされた志向と經路こそ文化主義者の研究に價する一題目であるとわたくしは考へる。多數決是認の論理は、今、わたくしが説明した通り、協同生活に於て卓越者を發見し、彼等の才能を利用して行く方法として最も優れたものではない。然しながら、特權階級の專横を憤り、其れに反抗して起つた民衆が、少數獨裁の論理を排斥して其れに代はるべきものを求めた時に、(そこには行き掛り上、感情も空想も大分はいつて居たが、)多數決是認の論理が其れであると當時の指導者に依つて無雜作に考へられたのであつた。實際の生活に於て、彼等の得て居た經驗と智慧とから、この論理の下にでも、哲人主義のはたらく餘地のあることは彼等に依つて假定されて居たのである。彼等は多數決是認の論理に據つたからとて、其れが哲人主義の原理を人間の生活外に驅逐して了はうと考へたのではない。哲人主義の原理は少數獨裁の論理の下に於てよりも多數決是認の論理の下に於ての方が一層直接に、一層圓滑にはたらくと彼等は考へたのである。

左右田氏は多數決是認の論理を攻撃して、『此くの如くして、遂に個人は單に社會の一員としてのみ重要を有し而して單に數量上の一員としてのみの重要を有するに過ぎざらんとするの勢にある。』(同上、『價値哲學より觀たる生存權論』頁八。)と言つて居る。それでは必しも多數決是認の論理の志向も其れの實際のはたらき振りも理會して居らない人の言葉としか取れない。

然し、これはほんの一つの例であつて、概して論理主義者といふものは凡べてのものに對して、これに類した淺薄な斷定をするものである。かういふ風に考へたり、言つたりするのが哲學研究者の職分であるならば、少なくともわたくしだけは其等の一人でありたくない。是れでは、哲學といふものが何んのために人間に依つて工夫されたか、哲學研究

者といふものが何んのためにあるか解らなくなるではないか。

公平に見て、獨逸人に依つて涵養された哲學にはわたくし共が取つて以て參考とし得る優れた特徴がある。そして、其れは、他の國民に依つて涵養された哲學には容易に見出だされることの出來ない特徴である。物事を理會するのに、觀察に依つて其れの外的態容よりせずして、省察に依つて其れの內的精神よりしようとすることが其れである。かうする結果として、二つの重要なる眞理が發見されたのであつた。其れの一つは個々のものの加は一つの全體をなさない。其等が一つの全體を作り得るためには、全體性は始めから或る風に、其等の各々に含まれて居ると觀なければならぬといふことである。其れのも一つは、一つの活動の或る段階にある性質を理會しようとするならば、その上に位する段階に於て現れる意義は、既に、其れに於て含まれて居るものと見なければならぬといふことである。是等は確かに獨逸の哲學思想がわたくし共に與へ得る最も貴き暗示である。然し、わたくしにして、正しくこの暗示を利用しようとするならば、わたくし共は、經驗に依つて是等のものの應用の方法と範圍とを嚴密に限定しなければならぬ。わたくし共にして、一度、其等の意義を客觀的條件に依つて制限することを怠り、擅まゝに主觀的欲求に依つて、其れの價値を無制限に擴張することになると、其の結果は、支離滅裂にして、終に拾收すべからざるものとなるのである。こゝよりイデイ宗が生ずる。

左右田氏の文化主義に見出だされる缺陷の總べては、彼れがイデイ宗の一信徒として、現在の生活に於て時々刻々に實現されて居る價値が文化であることに氣付かずして、其れは、獨り遠き未來の生活に到つて(其れがどういふ風にであるかは、彼自身としても豫想出來ないが、)實現されるものと空想して居るところにあるのである。

三　大山郁夫氏と長谷川如是閑氏との文化主義

わたくしが學生時代に教科書の一つとしてハイネの『ヘルツ山旅行記』が用ゐられて居た。これは大分古いことであるから、其れの印象の中で、今、殘つて居るのは、其れは獨逸語で書かれて居るに拘はらず、月並の獨逸文に似ず、其れの句法が輕快であり、奇警な諷刺に滿ちて居たぐらゐのものである。然し、その初めの方に出て居る、彼れがゲッテインゲン大學教授の鈍重と形式主義とを嘲つた一節だけは覺えて居る。其れは、ゲッティンゲン大學教授は何事を觀察し、何事を議論するにしても、いつでも一般原理といふものから出立しなければ氣がすまない。例へば、彼等がゲッティンゲンの町の婦人の足の恰好に就いて品評をするとすると、彼等は足一般、動物の足、人類の足、歐羅巴人の足といふ順序で書いて行つて、終にゲッティンゲンの婦人の足にまで達する方法を取らなければ氣がすまぬ、といふのであつた。ゲッティンゲンの婦人の足の恰好の品評めでさへ獨逸の學者に取り扱はせればこの通りである。彼等が文化の構成や意義を取り扱かふに方つて、彼等が、兎角、(彼等の其等に與へた意味に隨つて)アプリオリや、當爲や、理想に陷沒して當の目的よりタンジエントに飛び去つて了ふのに別に不思議はない。

獨逸の學者がどういふ風に文化といふものの意義と構造とを觀察し、研究して居るも、其れに關してはさしてわたくしの關心する事ではない。たゞ、わが國の思想家、評論家たる者が、わが國の文化を進捗することを彼等の目的としながら、一向に獨逸の學者の所爲を模倣し、さうして居りさへすれば、其れがわが國の文化の進捗のために一つの魔法使ひの杖の役目を充たすと彼等が盲信して居ることに對しては大に關心するところなきを得ない。

獨逸の學者に取つては、獨逸國民の建設し、完成して來た文化の外に、一層正確に言へば、彼等の傳統となつた哲學

的觀點に立ち、そこより瞻望した文化の外に文化と名付けらるべきものはこの世界に一つもないのであるから、彼等としては、文化の構造と意義とを考察するに、異なる時代や異なる國民性を無視しても差支へないのであるが、わたくし共のやうに若しわたくし共にして何か意義あるやうに、文化に就いて語らうとするならば、其れは、必然に、異なる時代に依つて異なり、異なる國民性に依つては異なるものとして語らなければならぬと信じて居る者に取つては、時代的であり、國民的であることを其れの必須條件であると考へねばならぬ。

さうすると、今日、わが國に於ける文化論者の大多數が、概して、時代と國民性とを超越して論じて居る間に於て、是等の必須條件に即して、其れの意義を求めて居る者が幾人でもあるならば、わたくしは空谷に跫音を聞くの喜を以て彼等の言說を迎へなければならぬ。大山郁夫氏と長谷川如是閑氏とは斯くの如き人である。然し、わたくしの是等兩人に對する態度は、どこまでも檢討であり、批判である。彼等の思索方法の輪廓がわたくしの求めて居るものにやゝ近いと言つても、たゞそれだけでもつて、わたくしは其れに盛られた內容を無條件で受け取るわけにいかぬ。

大山郁夫氏と長谷川如是閑氏とが數年來協同で雜誌『我等』を發行して居た事實よりして、是等兩人の間には大分共通のものがあるであらうとわたくしは推察はして居た。親しく彼等の著作を讀むに及んで、彼等の思想に共通するところのものは、わたくしの推察以上であつたことをわたくしは見出だしたのである。大山氏が獨逸の超越主義に反對する如く、長谷川氏も、亦、共に反對して居る。又、さうである自然の結果として、（今日、人間の生活を說明する見方としては、大體から言つて、超越說を外にしては進化論より外にないから）長谷川氏が進化論的の見方を採用して居る如く、大山氏も、亦、其れを採用して居る。其の他、現代に於けるわたくし共の生活を顯現力としてのブルジョアの文化と、潛在力としてのプロレタリアットの文化との交錯より成り立つと解釋して居るところにも、両者が何故に滅び、後

者が何故に與らなければならぬかの問に對して與へらるる答にも是等二人は一致して居るのである。

されば、長谷川氏の著『現代社會批判』の緒言に於て、そこに收められた諸論文を通して彼れが取つた態度を說明して、

それは、社會がその過程の或る期間に於て、或る階級的構成を持つた爲めに發した特殊の意識によつて、永久に目的づけられるものであるかの如く思惟する一般の見地に反對して、さういふ特殊の意識そのものは、それを作り上げた社會事實と同じく、それ自からを完成せしむると共に、それ自からを崩壞せしめる有機的構成を持つたものであるといふ進化の事實を認識することを出立點とした態度なのです。

と語つて居るが、其の表現には多少の相違は生ずるとしても、是等の言葉は直ちに之れを移して大山氏の著書の緒言としても、彼れに於て大して異存のないものであらうと思はれる。

わたくしが親炙した論文の範圍で言ふならば、大山氏のものも長谷川氏のものも、等しく essays であつて、treatises ではない。隨つて、是等の論文を獨逸の學風に囚へられた人々が讀むならば、其等は悉く『學的』形式を缺いたものとして、是等の論文の據つて成る原理の確實性と推理の到徹性とを疑がふ者は確かにあらう。然し、若しさういふ人があるならば、彼れは思想に於ても文事に於ても、素人であると言はねばならぬ。わたくしとしては、そこに可なりに豐富なる材料と、其れに對する可なりに銳敏なる考察と、其れより引き出された可なりに適確な結論との含まれて居ることを認めるのに吝ならざる者である。

大山氏と長谷川氏とは既に異體である。隨つて文字通りに同心たることは出來ない。彼等は殆ど同じ興味を以て自分等の上に問題を課し、殆ど同じ興味を以て其れの解決に努めて居るが、比較的に言へば、大山氏は心理的分析に於て長

と、長谷川氏は發展的理會に於て優れて居るやうである。

大山氏に取つても長谷川氏に取つても、題目も單純であり、之れが解釋の方法も單純である。隨つて、是等は至極簡單な言葉で言ひ盡すことが出來る。其れはかうである。

文化とは或る時代に於ける生活の樣式のことである。然し、事實として、これまで異なる時代は異なる生活樣式を有つて來た。事實さうであるのは、一つの生活樣式は、其れがどんなものであらうとも、そのまゝでは長続きをしない性質をおのれの中に藏して居るものであるからである。それで、文化の樣式は絕えず新陳代謝して居る。是れが人間の生活の法則と知つたならば、舊い文化が滅びるのの何も悲しむに足らないことは、新らしい文化の起ることの何も怖れるに足りないのと同樣である。一面より見て、舊い文化の崩壞は他の一面より見て、新らしい文化の發生、若しくは、勃興である。然し、舊い文化は一つの階級に依つて支持され、新らしい文化は他の一つの階級に依つて支持されるから、そこに社會そのものの進行より見れば、春去つて秋來り、花落ちて實結ぶと尠しも變りない自然的の、若しくは、必至的の出來事であるが、たゞ、其等に依つて代表される階級に屬する人々に取つては生死の大問題として取られることになるのである。そして、刻下に於ては、舊き文化を代表する階級はブルジョアの階級であり、新らしき文化を代表する階級はプロレタリアットの階級である。それであるから、是等の二つの階級の孰づれに屬する人にせよ、又、是等の階級の孰づれにも屬せざる人にせよ、現代の社會に棲息する者は、誰れにしても彼れの義務として腐爛したブルジョアの階級をして一日も早く崩壞に歸せしめ、將に興隆しつゝあるプロレタリアットの階級をして一刻も早く當面の主人公たらしむることに努むべきである。然し、この事柄が容易に運んで行かないで、そこに案外の故障の存するのは、プロレタリアットの階級に依つて取つて代はらるべき運命の下にあるブルジョアの階級は無理をしても、出來るならばおのれの權

力を永久にでも保持したいといふ感情に支配され、又、さうするためにはいろいろの武器を有つて居るのに反して、ブルジョアの階級に取つて代はる使命を帶びたプロレタリアットの階級ではおのれの當然の權利を行使するだけの實力を有たず、又、おのれの使命の意義をさへも自覺するに至つて居ない。斯くして、一日速かに滅亡すればそれだけ、人類一般に取つて利益であるブルジョアは依然として當面の主人公であり、一日遲く奈落の底に留まれば、それだけ人類一般に取つて損害であるプロレタリアットのなかなか舞臺の上に登つて顯著な役を演ずることが出來ない。こゝに、現にわたくし共が見るやうないろいろの形に於て、虛僞と、過誤と、罪惡とが社會生活に於て化醸せられ、横溢して居るのである。

かういふ風に、大山氏と長谷川氏とは、現代に於ける社會の事相を觀察し、評價して居るのである。彼等が、各、一個の評論家として、何をおのれの天職と思惟して居るかは、多言を要しない。其れは、つまり、ブルジョアの階級に屬する人々と、プロレタリアットの階級に屬する人々と、乃至、直接にどちらの階級にも屬せざる總べての人々とを通して、彼等をして、一般に是等の虛僞と過誤と罪惡とが如何にして生じたか、如何に恐ろしきものであるかを十分に感得せしむることに依つて、この必至の變遷を促進し、そして、人力に許される限り、一方より、他の一方への過渡を圓滑に、隨つて、消耗尠きものとしようとするところにあるのである。

若しもわたくしのこの解釋と推定とが、事の眞相を得て居るものであるならば、大山氏にしても、長谷川氏にしても、社會生活の說明として、進化說を採つて居るとはいつても、嚴密には、ヘエゲルに依つて着想され、更にマアクスに依つて改釋され、改變された形に於て其れを採つて居るのである。言ひ換へれば、汎義に於けるマアクス主義の歸依者として、階級鬪爭の原理に據つて、現代に於ける文化の諸現象を理會しようとして居るのである。

わたくしは、或る人が強ひてさう說明しようと望むならば、現代の社會生活の中には、特に其れの經濟の側面に於て

は、確かに、階級闘争の概念を以て説明出來る現象が多分に見出だされて居ることを全然否定はしない。たゞ、わたくしは、其れを以て文化としての現代の社會生活の總べての現象が説明出來るか、どうかを疑ふだけである。わたくしは、是等の現象を説明するためには、一層根本的の原理があるのであつて、階級闘争と觀られるものの如きは、畢竟するに、たまたま其れの一つの側相に過ぎないのではないかを疑ふ者である。

現代の文化（若しくは、彼等の解釋に隨つて極言するならば、非文化）の缺陥を互に扞格する利害と理想とを有するブルジョアの階級とプロレタリアットの階級との爭鬪に起因するものとし、其れを匡濟して一層完全なる一層合理的なる文化たらしめるの道は、獨り前者の利害と理想とをして後者の其等に降服せしめるにあるとする根本觀念に關しては、大山氏と長谷川氏との間に何等の相違も見出だされない。たゞ、彼等が同一事實と見做すものに對して、各、觀點を異にし、隨つて、力說點を異にするところから、彼等の理會を通じて生ずる結果、即ち、其れの意義に至つては多少異なつて來ないわけにいかぬ。それで、兩者の所說に含まれた誤謬を的確に指適し、適切に其等を是正するには、彼等の意見を別々に檢討する方法に依ることをわたくしは便利と考へる。そして、（前にも尠しく言及したやうに）長谷川氏の議論は一種の歴史觀に基づいて概括的であり、事實的であつて、大山氏の議論は一種の社會心理說に據つて分析的であり、内觀的であるから、わたくしは長谷川氏より始めて大山氏に移るのを自然の順序であると考へる。

歴史の記錄に於て、それとははつきり見出だすことは出來ないが、後世に至つて出現した反省的デモクラシイに對照して、素朴的デモクラシイとも呼ばるべきものの行はれて居た社會狀態のあつたことをわたくし共は想像し得る。この狀態に於ては『一人の紳士もなく、アダムは耕し、イヴは紡いだ』のであつた。そこには、また、賢愚の差より來たる治者と被治者との區別もなく、才能の適應性の相違より來たる職業の分擔と協同とさへも十分に行はれなかつたのであ

る。この狀態はあらゆる新開地の初期に於てわたくし共が、現に見出だすところのものである。

然し、協同生活が或る程度に組織されて來るに及んで、其れのエコノミイより賢愚の差より治者と被治者との區別は生じ、才能の適應性の相違より職業の分擔と協同とは必要とされることになつた。是れが最も自然の形に於ける階級の起原である。この形に於ける階級は、適材が適處に置かれる、若しくは、適處を占めることより自然に生じたのであるから、その性質は全然個人的のものであつた。膂力强大にして勇猛の氣象に富んだ者は外に出て狩獵や戰爭に奔命する武士となり、體格も虛弱であり、性質も沈靜であつたため山野に馳驅することには不適當であつたが、不思議に自然の中にと等しく人生の中に含まれた美に對しては異常な敏感と靈覺とを有つて居た者は家に止まつて彼等の觀照を布片に畫き、或は、木片に刻んで其の尊き體驗を自づから樂しみ、他にも分つて藝術家となり、其の勇氣に於て前者の如く長じたところもなく、其の美感に於て後者の如く優れたところもなかつたが、能く、だんだんに堆積し、變化し來たつた風習や慣例を記憶し、新たに解決の要せられる事件が發生した時に、其等の風習や慣例を參照しながら公衆が納得出來るやうに其等を裁斷するの知力と意力とを具へて居た者は彼等に推されて司法者となり、行政者となつたのである。是等の種の人々の中間に在つて、彼等ほど一方に斬出した卓越性に惠まれざる多數の民衆と雖も、てんでに其の境遇と才能の適應性とに隨つて、それぞれ、家を建てる大工となり、衣服を織る機屋となり、地より食物を採る農夫となつた。斯くして同じ職業に從事する人々は、彼等に共通の利害と類似の感情とからして、知らず識らず一つの階級を形造ることになる。そして、それが社會生活のエコノミイに依つて統制される限り、才能の適、不適に依つて其等を組織する要素の間には、絕えず集散離合が行はれて居るわけであるから、階級といふものの存在から生ずる弊害は大してない理窟である。

然しながら、一度異なる職業を代表する異なる階級が形造られて來ると、其等を組織する要素たる個人は流動的に、作用的に、社會生活のエコノミイに依つて統制されずに、彼等は固定的に、反作用的に、彼等の意思に依つて、そして、時としては社會生活のエコノミイに逆行してまでもおのれを或る地位に支持しようとする傾向が沈澱することになる。是れには二つの原因がある。其れの一つは實利より來たるものであり、其れの他の一つは私欲より來たるものである。（こゝには、遺傳の問題には觸れないとしても。）總べての種の職業の發達には特別の修養の肝要なことは顯著な事實である。そして、嚴格な修養は其れを專門とする人々の子弟か、師として彼等を慕つて集まる少數の門人の外には廣く行はれにくいものである。それが階級を組織する要素の世襲的となる主なる原因である。これは全然實利より來たるものであるから、別に非難すべきものではないが、この外に、私欲より來たるものがある。或る職業に關して天才と勤勉とを兼ねた一人の改革家が出て其れの上に偉大な改革を施すと、過去に於ては、さういふ改革家の多くは社會上に於けるおのれの名譽と特權とを保護する考から、（この考は愚でもあり、間違つても居たのであるが、）彼等が其れの改革にまで達した經過、若しくは方法を世間に秘して、僅かに、其れを彼等の子弟と極めて少數なる彼等の門人とにだけ啓いたのである。酷だしきになると、自分の名跡を繼ぐ長子に限つてだけ其れを啓いたのである。

斯くて適材を適處に置くことを目的として起つた階級は、往々不適材が不適處を占める手段にまで墮することになつた。この事實あるに拘はらず、合理的たることを其れの精神とする社會生活のエコノミイはいろいろの障礙と戰ひながらも、絶えずはたらいて居るのであるから、兵力や法力の濫用に依つておのれの私欲を擁護しようとした爲政者の階級の間に於てでさへも、長く不適者の不適處に止まることは許されなかつたのである。劣者はいつか優者におのれの地位を讓らなければならなかつたのであつた。そして、劣者と優者との間に行はれた代謝は常に競爭の形を以て行はれ

たことは事實である。然し、大體から見て、それは其の時代時代の要求を背景として個人の卓越性の競爭であつた。同じ階級に屬する人々の間にも競爭は行はれ、稀には、一つの階級から出た人々と他の階級に屬する人々との間にも競爭は行はれた。が、階級と階級との間の鬪爭といふことは比較的に最近に起つた事柄であつて、古代や中世を通じて、人間が經驗もせず著想することさへもしなかつたものである。

忠實に考察すれば、古代と中世とを通じて文化の進化はあつた。自然主義の上に立つた文化が亡びて、超自然主義の理想の上に立つた文化が起つたのは、之れが何よりの證據である。然しながら、斯かる文化の推移は、決して階級鬪爭に依つて惹き起されたものではなかつた。されば、いつの時代に於ても、舊き文化が力を失して新らしき文化が勢を得るのは、悉とく階級鬪爭の結果であるとするのは事實に合はぬ僻見である。立、對、合の永遠に亙る反復を以て、人間の活動一般の樣式としたヘエゲルの意見も、直ちに其れを移して、文字通りに彼れの文化の進行の樣式とする時は、牽强附會たるを免かれないが、更に、其れが階級鬪爭の形を通して現はれるとするに至つては、たゞ牽强附會の程度を增すばかりである。

それではどうしい文化がだんだんに亡び行き、新らしい文化がだんだん興つて來るか。

こゝに、人間の有てる性情と、彼れの置れた環境との融合を、一層詳しく言へば、彼れの置かれた環境を材料として、彼れの有てる欲望を實現する經過を彼れの生活と呼ぶならば、其れは、彼れの生活の中に時々刻々に生ずる矛盾を整齊する努力の結果に他ならない。環境の組織も絕えず變化して居るし、欲望の性質も絕えず變化して居るが、是等は多くの場合に於て、同じ方向に向つて、同じ速度に變化して居らないから、是等の二つを包含して其れの要素とする生活の中には、必然に、矛盾は時々刻々に生ずることになる。そこで、わたくし共は思索と行爲とに依りて、絕えず其等の矛盾

を解決して居る。從つて、わたくし共の生活の樣式も絕えず變化して居るし、又、變化して居らなければならない筈である。

然しながら、人間といふものは本來至つて無精な者であるから、矛盾を解決すると言つても、通例、その日、その日を暮して行くのに必要なだけにしか解決して居らない。解決される度每に、生活の方針は工夫されるが、其等は一貫した原理に據つて工夫されるのではない。この自然の結果として、斯くして工夫された方針と方針との間に多少の扞格なきを保し難い。ところで、わたくし共の生活を圓滑にし、敏活にして、其れをして成りたけ尠しの犧牲を以て成りたけ多くの効果を擧げさせるためには、わたくし共は互に扞格するところある是等の生活の方針に含れた志向を基本として、隨時、其等を精算し、統一して行かなければならない。事實の上では、一思索、一行爲每に舊き文化は亡び、新らしき文化は興つて居るのであるが、形式の上では、二十年、五十年、百年、乃至五百年を一期として、その間に後から後からと推積され、紛糾する生活の方針が精算され、統一される前後に至つて、舊き文化が亡び、新らしき文化が興つと知覺され、認識されるのである。そして、文化とは生活の機關たる言語や、風俗や、制度や、道德や、政治や、産業や、藝術や、學問の總稱であるから、舊き文化が亡び、新らしき文化が興るとは、つまり是等のものに關する或る樣式が亡び、或る樣式が興ることを指すのである。

舊い文化はだんだんに亡び行き、新らしき文化がだんだんに興つて來るのが人間の生活の約束であるとは言つても、人間の全歷史を通じて、卓越して特殊の意味でこの概念の應用され得る、應用されなければならぬ一つの時期があつた。其れは歷史家に依つて文藝復興と呼ばれたものである。其れの起因や構造を、こゝで、細叙して居るわけにはいかぬが、其れの精神を一口に言つて見れば、前代未聞の風に、程度に、人間が自分の欲望の尊貴と其れを滿たす力量の權威とを

自覺した結果として、古代人が自然や人生を finite のもの、即ち、既定の様式を有つたものと觀たのに反して、當時の人々は其れを infinite のもの、即ち、是れより先き、人間の興味と努力とに依つて樣式を與へるべきものと觀たことである。この新らしく得た自覺と觀點とより、彼等は彼等の欲求の赴くところに隨つて、有りに自然と人生とに關して新らしき改釋、若しくは、改造を試み出した。この成績は、科學や、藝術や、産業や、政治や、信仰や、社會生活の革新となつて現はれたのである。然し、この新らしく得た觀點と自覺とが人間の生活のあらゆる成分と側面とに浸潤し、其等を到徹して、燦爛たる光輝を發したのは、漸く十九世紀に至つてのことであつた。ロックの政治論と、ルウソオの社會說と、佛蘭西革命とは其れの精華である。

大觀すれば歷史あつて以來、人間の文化の進行は自己解放の一事に限られて來たのである。言ひ換へれば、彼れの有てる性情を以て、彼れの置かれた環境を出來るだけ善く利用することに依つて、出來るだけ多くの滿足を獲得しようとする一事に限られて來たのである。時としては、希臘人の文化の如く、人類の多數者の幸福を犧牲にして、始めて完成されることが出來ると考へられた種の文化の涵養されたこともあるが、それは、たゞ、其の種の文化を主張した人々が人間の性情と協同生活の性質とを十分に理會して居なかつた偶然の結果に過ぎないのであつて、是れとて、其れの志向はやはり自己解放の一事に限られて居たのである。それで、この目的を成就するために、其れの障礙となつたものは、その時代、時代に依つて異なつたが、其れが如何なるものであるかに拘はらず、人間の文化の進行は、一向にそれを除去することを努めて來たといふだけのことである。

成るほど、ロックの政治論も、ルウソオの社會說も、佛蘭西革命も、特權階級の打破を其れの主眼としては居るが、それは、ほんの手段であつて、其れの目的ではなかつたのである。其等がその目的としたのは、自由、即ち個人の才能

の出來るだけ拘束なき開發にあつたのである。たゞ、この理想を實現するに方つて、當時の特權階級の存在と專橫とは、其れに對つて最も大なる障礙であり、脅威であると考へたから、其等は其れの打破に其等の全力を傾注したのである。佛蘭西革命が其れの格言として、自由と平等とを力說するに止まらず、其等に附け加へて、悌愛を高調したのでも、其等の理想としたところのものがどんなものであつたかを容易に髣髴することが出來るではないか。

古來、平等と悌愛とを藉りずして、眞の自由、卽ち、形式的ではなく、本質的の自由の成立した例はない。然しながら、ロツクにしても、ルウソオにしても、佛蘭西革命の人々にしても、彼等が自由を力說するほど、平等や悌愛を高調しなかつたことは事實である。特に、悌愛を高調することに於て闕如するところの多かつたのは事實である。この彼等のたまたまの不用意より、彼等の理想は其れと表面非常に反對する狀態を馴致した。彼等は平等と悌愛とを實現する準備として、自由を說いたのであるが、自由を說くことが、反つて、不平等と不悌愛とを鼓吹することになつた。その結果より見れば、彼等の理想の敵たる一つの特權階級を打破することは、其れに代へるに彼等の理想の一層大なる敵たる他の特權階級を以てすることとなつたのである。それは、彼等としては意識しなかつたのであるが、彼等の見解には二つの誤謬が含まれて居つたからである。其等の一つは、彼等が餘りにあるまゝの人間性を理想化して居たことである。其等の他の一つは、是れより將に勃興しようとして居た科學と機械との性質と其等の勢力の及ぶ範圍とを豫想し得なかつたことである。

當時、貴族とか僧侶とかいふ特權階級に壓迫されて居た中流階級に屬する人々は、改革家等が想像したほどはまだ善良になつては居らなかつた。彼等が特權階級の壓迫より脫して、新たに自由を獲得するや、否や、その自由は平等と悌愛とを含めて、若しくは、其等にまで發展さして、始めて、其れの目的が完成されるものであることを理會するに至ら

なかつた。言ひ換へれば、彼等が自由を獲得した瞬間に於て、彼等は、其れに依つて同時に自分の生活を改善する權利を享有し、自分と等しく同じ協同生活に屬する總べての他の人々の生活を改善する義務を賦課された厳粛なる事實に氣付かなかつた。それで、彼等は法律に依つて彼等の私欲の保護を得、科學と機械との方便を藉りて勝手に其れを振舞ふことになつたのである。

當時の改革者は悉くヒユウマニストであつた。彼等の心の中には、人類愛の外、何物もなかつた。最廣義に於て、最狹義に於て、『最大多數の最大幸福』は確かに彼等に取つて唯一の信條であつた。彼等が現存の特權階級を打破したのは、未來に於て、他の、そして、その結果に於て、一層惡き特權階級を擁立するためではなかつた。たゞ、彼等自づからが善良であつたために、餘りに善良であつたために、一般民衆の善良性を過信し、科學と機械との正用性を過信したのである。わたくし共は『過を見て其の仁を知る』のである。わたくし共は是等の改革者が彼等の同胞の善良性と科學と機械との正用性を過信したのを見て、ますます彼等の崇高なる品性を禮讃する者ではあるが、若し彼等にして、も少し、在りのまゝの一般民衆の心意氣を洞察し、其れに依つて誤用され得る科學と機械との生活に及ぼす影響を逆賭することが出來たならば、現にわたくし共が嘗めつゝある慘禍の十中の七八までは醸されずにすんだであらうと考へて、善意から來たつた、然し、輕率なる彼等の樂觀に對して多少の憾みなきを得ない。實に、當時社會に見出だされたあらゆる弊害に對する萬能藥として彼等が主張し、宣傳した Laissez faire は彼等が彼等の同胞の善良性と、科學と機械との正用性を過信した過失に他ならない。

Vox populi, vox dei (民の聲は神の聲なり)は當時の改革者の間の合言葉であつた。然し、この信仰の下に新らしき計畫が進行されて行くにつれて、民の聲はやはり民の聲であつたことが、即ち、往々眞理と誤謬とを併はせ含んだもの

であることが發見されたのである。然し、彼等改革者は、幸か、不幸か、その現實暴露の悲哀を味ふに及ばずしてこの世を逝いたのであつた。

經濟學の開祖たるアダム・スミスもヒユウマニストとして、人間の善良性と科學と機械との正用性を過信した一人であつた。彼れの學說に於て、彼れは富を增殖する方法を攻究するに熱心であつた割りに、其れを如何分配するかの方策を考慮するに冷淡であつたことは顯著な事實である。然し、是れは、富が增殖されさへすれば、其れは如何なる風に分配されるとも差し支へないと彼れが考へたからではない。彼はどこまでも人間性の善良なることに信を置いて居たから、富が增殖されゝば、その後は、人間の善良性に放任しても、その富は自づから協同生活を組織する總べての個人の間に公正に分配されるものと考へて居たからである。然し、スミスのこの寬裕なる期待は美事に裏切られた。新たに自由を得て特權階級に反抗した人々は、更に其の自由に依つて自分を新たなる特權階級にして了つた。舊き特權階級と新らしき特權階級との間には、名分の上だけでは多大の相違はあつたが、實質の上では大した相違のないものとなつた。おのれの利益と卓越とを增進し、擁護する一事に彼等の心を集中して居ることは、兩者に共通の特徵である。たゞ、この目的を達する方便として、舊き特權階級は兵權と敎權とを用ゐたのに、新らしき特權階級は金權を用ゐたのであつた。

今日、ブルジヨアと呼ばれて居る人々は、精神的に、(そして、彼等の或る者は肉體的にも)嘗て當時の特權階級を倒しながら、自づからさきの特權階級と地位を僭した人々の子孫である。彼等は精神上に於ける、(若しくは肉體上に於ける) 彼等の祖先の所爲に倣つて、Laissez faire に含まれた消極的意義を主張することだけを知つて、其れに含まれた積極的意義を實行することを怠つて居る人々である。天運循環して、今や、彼等は彼等の壓迫の下に奄々たる氣息を續けて居るプロレタリアツトの反抗に出會ひ、彼等より當面の主人公たるの權利の讓り渡しを强請されて居るのも、極

めて至當な事であると言はねばならぬ。

然し、上下四千年の歴史を通じて、たゞ一度このエピソオドが起つたために、其れの起つた前後の事情を些しも考察することなく、其れを無制限に一般化して出來たマアクスの歴史觀にどれだけの根柢があるであらうか。マアクス主義の信者は、さきに中流階級に對して貴族や僧侶が閲した運命は、今日、及び今後に於て、プロレタリアットの階級に對して、ブルジョアの階級が閲する運命であると信じて居るが、彼等のこの信仰にどれだけの根柢があるであらうか。

上古と、中世と、近代とを通じて、文化の様式の推移して來たことは、何人と雖も認めなければならぬ儼たる事實である。サンタヤナは、嘗て、是等の様式の各に配するに自然主義、超自然主義、ロオマンテイシズムの稱呼を以てした。わたくしは或る處で是等の様式の各に配するにクラシシズム、ロオマンチシズム、シムボリズムの稱呼を以てしたのであつた。是等の二つの稱呼の系統は大同にして小異なる二種の解釋に由來するのである。孰づれにしても、等しく人間の生活の表現であるに拘はらず、上古に於けると、中世に於けると、近代に於けるとの差異より、其れの表現に是等の相違の生じたことを認めるのは、人間の文化を全體として理會する上に便利であると考へるからである。つまり、是等の様式の相違は、人間が自己を解放する道程に於て、彼れの欲望を整頓する方法の相違するに歸することが出來るのである。然し、斯くの如き文化の推移は、いつでも階級鬪爭の形を通して實現されて來たといふことは事實ではない。文化は階級鬪爭の形を通して推移して行くものであるといふ假定の比較的に都合よく當てはまるのは、(其れも、文化の多くの横斷の中の二つである政治と經濟とに限つてではあるが、)獨り、佛蘭西革命以後に於ける其れであらう。何故ならば、今日の特權階級たるブルジョアは、當時の特權階級たる貴族や僧侶を敵として戰ひ、そして、終に彼等の天下を奪つて其れを自分の天下としたからである。

わたくしは文化の様式は推移するといふことを信ずる者である。又、或る時代に於て工夫される、若しくは、結晶する文化の様式は、其れが長く固執されて時勢の要求に應ずるやうに適當に改造されて行かないならば、其れは必らず早晩おのれの中より壊崩を胚胎するに至るといふことをも信ずる者である。

然しながら、同時に、わたくしは長谷川氏が考へるやうに、歴史上の事實として、若しくは、其等より歸納されたる法則として、如何なる社會に於ても、そこには反對の利害と、反對の情操とを有つ二つの階級があつて互に對立し、其等の利害を代表し、其等の情操の表現である二つの文化があつて互に對立する。一方の階級は過去に屬するが故に、其れに特有な文化と共に滅亡に赴いて居るのに、他の一方の階級は未來に屬するが故に、其れに特有な文化と共に興隆に向つて居る。是等の二つの階級は物理の法則で決定された如く、さういふ運命に服する外に道はないのである。一方の階級が滅亡を逃れることの出來ないのは、丁度、他の一方の階級が興隆を避けることの出來ないのと同樣である。かういふわけであるから、滅亡に赴いて居る階級が興隆に向つて居る階級に對して取らなければならない態度は唯一つしかない。其れは、前者が後者に素直に、潔く、降服することである。そして、現代に於てはブルジョアの階級と其れの文化とは滅亡に赴いて居るものであり、プロレタリアットと其れの文化とは興隆に向つて居るものであると考へることの出來ない者である。現代の文化の特徴と、其れの趨歸とをかういふ風に言ひ表はすことにすると、その言ひ表はし方に、多くの誇張と、不正確と、不徹底とが含まれるがために、一つの眞理を語らんとして、反つて多くの虚僞を傳へることになる。例へば、

生命とは、舊組織の分解から新組織の發生して行く過程をいふのであるから、それは同時に、發生であり、又死滅である。一つの組織が、死滅の經過を取りつゝある事は、とりもなほさず新らしい組織を作り出しつゝあることである。

(『現代社會批判』第一編、第四章、『現代文化に對する民衆化の意義』頁一〇九。)といふことや、

一定の性質で連續した社會狀態の下に發生した信仰や、智識や、感情やの練磨が頂點に達した今日の精練された文化は、必然に、その機制のうちに、排泄物の蓄積があり、組織の分化があり、自然、新轉化を產み出す機能を持つたものでなければならない。(同上、頁一一〇。)

といふやうなことは、今日に於ては、ほんのツルイズムにしか過ぎない。然し、彼れがこの事實に一つの解釋を與へ、

が封建制度を倒して新組織の下に活きやうとした人々も、さういふ氣運を何處で作つたかといへば、矢張り封建制度そのもの丶壞滅して行く經過のうちに於てである。彼等と舊武士とは、別々の天地に產れたり育つたりしたのではなく、全く同一の天地間の同時代の人間なのである。さうして一方は、固定した舊組織に囚はれて、その思想感情の固定方面を代表し、他の一方は、舊組織崩壞の過程に順應して、その思想感情の進化方面を代表することになつたのである。現在の社會の總般的民衆化に於て、たゞ頹廢的醜惡のみを感得してゐる人々は、その前者に屬してゐるのである。

同時代の人々の間に、何うして右のやうな分岐を生ずるかといへば、一定の進化過程を取りつゝある社會組織の下では、一方に於て、その生存を既に硬化した社會組織に繫いでゐる人々があると同時に、他方には、そこから發生しつつある新組織に、その生存を求めてゐる人々があるからである。前者の思想感情は、硬化した舊組織から發生し、その組織の下で可能なものであり、後者のそれは、舊組織の分解から發生し、新組織の下に可能なものなのである。(同上頁一一二。)

古き文化と新らしき文化とがそれぞれおのれの利益を標準として、二つの對立する階級に依つて固守されるといふ風に、

其れを敷衍することになると、實際の事實に翻譯して多くの虚僞を傳へることになるとわたくしは言ふのである。

早い話が、この一般法則の、若しくは一般傾向の一つの例證として彼れが引いたわが國に於ける維新の改革は、決して、彼れがこゝで說いて居るやうに、相尅する二つの階級の爭鬪の結果として出現したのではない。さういふ風に觀ようとするのは、强いてマアクスの歷史觀に據つて歪められた觀點と情操とを以て、非常な無理をして當時の事實と事情とを曲解するものである。彼れは『彼等と舊武士』と言つて、一方に於て舊制度を固守しようとして居た『舊武士』があり、他の一方に於て、其れを破壞して新らしき制度を發生させようとして居た『彼等』があつたやうに語つて居るのである。こゝに彼れが『彼等』と呼んで居る者は、抑も、如何なる階級であつたであらうか。彼れの理論に當てはまるやうにするのには、『彼等』は、當時、武士の階級以外にあり、以下にあつた農夫か商人かであつたとせねばならぬ。然し、事實、當時の農夫や商人が當時の武士に反抗して、新らしき文化の發展に努めたといふやうなことは、わたくしからすれば、一つの純然たる虚罔である。あれは、全然、武士の階級に依つて成就されたものである。なるほど、武士の階級の間に在つて、其の見解を異にするところから、個人としては鎖國を國是として主張する者と、開港を國是として主張する者があり、形式に於ては、鎖國黨が勝つて開港黨が敗け、實質に於ては、鎖國黨が敗け、開港黨が勝つた結果として、多くの迂餘曲折を經、多くの誤謬や過失を重ねた後、終に、舊き文化は倒れて新らしき文化の起ることになつたが、この改革が、全然、武士の一階級に依つて始められ、彼等に依て終結されたことは事實である。同じく武士の階級に屬しながら、一藩の中にも、舊き文化の支持者と新らしき文化の主張者とはあり、又、(伊藤公や、井上侯の場合のやうに)同一人にして、先きには、舊き文化の支持者であり、後に到つて、翻然として悟つて、新らしき文化の主張者となつた者もある。かういふわけであるから、長谷川氏が彼れの理論に基礎づけるために、其れの一事例として、わが國の維新の

改革を引いたのは、彼れに取つては偶然の不覺に過ぎなかつたにしても、兎に角、斯かる事實の存在は、現代に到つても、大きな規模に於ける舊き文化と新らしき文化との代謝が、必ずしも階級爭鬪の形に依つて行はれるものでないといふことの的確なる立證の一つとなると思ふ。

十九世紀に入るまでは、(現代的の意味に於て)資本家に相當する階級もなく、勞働者の階級に相當するものもなかつた。唯、あつたところのものは、師匠と、極めて少數に限られた彼等の徒弟とだけであつた。そして、概して言へば、師匠の興味は出來るだけ善い物を作つて其れを社會に供給することに集中され、徒弟の興味は彼等の師匠に就いて出來るだけ善く自分の技術を練磨することに集中されて居たのであつた。若し、師匠にして彼れの製作に對して高き代價を要求することがあつたならば、其れは、其等の製作の卓越性の指標としてであつた。然しながら、一方に於て、契約の自由を保障する法律が實施され、他の一方に於て、科學と機機とが産業に應用されるやうになると、この狀態は急劇に一變されることになつた。

或る場合に於て、初め或る目的の手段であつたものが、その目的より離れて一つの獨立した目的とされるのは、人間の性情に固有する一つの特徵であるやうに思はれる。世に謂ふところの學問のための學問、藝術のための藝術といふやうなものは、皆、手段の目的と化したものである。この場合に於ては、法律の保護と科學及び機械の應用とに依つて、其等の師匠は從來よりも富を獲得することが容易になつたために、彼等の中心興味は品物の製作の方より富の蓄積の方へ移つて了つた。

既に師匠の中心興味にして富の蓄積に移つて了つた以上は、どうして、彼等の弟子の中心興味だけが、高き賃銀を排斥して、技術の練磨に止まり得ようぞ。斯くして、ラッセルの言葉を藉りれば、所有の欲望は永久に創造の衝動を窒息

させることになつたのである。このやうに一變した狀態に於て、現代的の意味に於ける資本家と勞働者との二つの階級は馴致されたのである。其れの精神は、卽ち、產業の資本主義化若しくは、商業主義化と呼ばれるところのものである。

總べの手段は其れの目的より獨立して其れ自づからに一つの目的となつて來ると、其れの性質はその前にあつた時とは非常に異なつたものとなる。其れは生活に對して生活全體の要求を標準として統制原理を失ふからである。この意味に於て、其れのはたらきを機械作用と呼べば、呼べないことはない。されば、社會主義者が現代に於ける資本家と勞働者との間の關係を機械作用と見做してゐることには相當な理由がある。長谷川氏も、彼等の見解を襲套して、其れを機械作用と見做して居る一人である。彼れは、『けれども、社會の機械作用は、まるで物理の法則の樣に執念く、人間を機械化しやうとしてゐる。物理の法則を無視して家の組立てをすることが出來ないやうに、この機械作用を無視して社會を考へることは出來ない。』『これは、資本家各自の意思目的から發生したことではなく、社會の機械作用が產んだ現象なのである。』などと言つて居る。

產業の資本主義化、若しくは、商業主義化が、同時に、資本家と勞働者とを墮落せしめ、延いて彼等の關係を惡化したことは事實である。そして、資本家は强者であり、勞働者は弱者であるがために、資本家は之れが直接の責任の大部分を負擔しなければならぬことは言ふまでもない。

されど、かやうにして、一旦、資本家と勞働者とが墮落し、一旦、兩者の關係が惡化された以上は、勞働者が資本家の壓迫のために極端なる困苦と屈辱とに陷つた末、窮鼠猫を噛むの態度に出でて、憤然蹶起して資本家に反抗し、彼等にして、資本家の擁護のためとしてのみ存在する現在のあらゆる制度を其れの根本より破棄するまでは、彼等の間の悲しむべき關係は、其の機械作用に依つてますます惡くなればとて、尠しも善くなることなく、永久に存續せねばならぬ。然し、

勞働者が階級爭鬪の形を通して當面の主人公となりさへすれば、ここに、何んの作爲を用ゐず、何んの工夫を施さずして、賃金世界は立ちどころに出現するといふ長谷川氏の意見には、わたしはどうしても同意出來ぬ者である。

一體、社會の機械作用なるものは、其れが單に習慣や情操に止まるにしても、或は、其れが進んで制度の形を取るにしても、如何にして構成されるに至るか。

其れは、或る目的のための手段であるものが、其れより離れて一つの獨立した目的と化するからである。そして、手段の有ち得る價値は、其れ自づからの價値ではなくして、目的の有つて居る價値の反映に過ぎないのに、其れが手段其れ自づからの價値と誤解された結果である、言ひ換へれば、部分が全體と取り違へられた結果である。

然しながら、人間が彼れの生活を續けて行く以上は、一時、手段が其れの目的より離れ、部分が全體と取違へられることがあつても、永久に、そんな間違つた意識や、評價で彼れは生活して行けるものではない。彼れが人間であり、人間性を保持する限りは、かういふ間違つた意識や、評價は彼れに十分な滿足を齎らさないところから、否、矛盾と空虛との感じを抱かせるところから、彼れはいつか復、生活の根本原理に立ち歸らざるを得ない。つまり、一時、手段は其れの目的より離れるやうに見えても、永久に、根本的に、其れより離れ切ることは出來ないものなのである。隨つて、一時、部分は全體の位置を奪つたやうに見えても、いつか、其れの正しい位置に引き戻されるものである。こゝで、わたくしが語つて居ることは、享樂主義者や肉欲主義者の生活に於てわたくし共が絕えず目擊する事實に他ならない。世に、藝術のための藝術、學問のための學問と呼ばれるものが、或る範圍を限つての外は、生活より離れることが出來ないで、一歩でも、斯かる範圍の外に逸しようとすると、其等は、便ち其等の本來の位置に引き戻されるのは、この根本原理があるからである。それで、現在の資本家階級と勞働者階級との間の關係が機械作用としてはたらいて居ると言つても、其

れの意味は特殊に解釋されねばならぬ。本當の機械でさへも、人間の意思に依つて、其れをして或る目的を達せさせるために工夫されたものである。されば、目的が變はるに隨つて、絶えず、其れの當初の志向に依つて破棄され、改造されて居るではないか。まして、單なる形容として機械作用と呼ばれた資本家と勞働者との間の關係が、彼等が協同生活を營む本來の目的よりして、相方に取つて不都合であり、不合理であると觀られるに至つても、なほ、相方の意思で左右出來ないやうに、制度として永久に存續して行かなければならぬといふことは、わたくしの一向に合點の出來ぬ空想である。

長谷川氏は『如何なるイズムが最も實現の可能性を持つか、又社會の實際が如何なるイズムの方へと傾きつゝあるか、それはいづれであるにしても、階級的意識の固執が軍國的戰爭に於けると同じ超道徳的範疇内の爭にまで發展しつゝあることは事實である。』と言つて居る。然し、是れは、どこまで事實に合する解釋であらうか。事實は、寧ろ（わたくし共は希望するほど、迅速でもないし、徹底的でもないが）反對の傾向にあると、わたくしは理會して居る。長谷川氏が現存の事實をさう解釋するのは、強いてさう解釋しようとするのは、彼れが一つの僻見と、一つの迷信、然かも、極めてロオマンチックな迷信とに支配されて居るからである。一つの僻見とは、人間は、一度、過失に陷れば、其れは永久に彼れを縛る鐵則となつて、反省の力でも若くは、何んの力でも、彼れは到底其れより脱することは出來ないとして居ることである。一つの迷信とは、社會が全然無階級のものとならなければ、いつまで經つても階級鬪爭の止む期は來ない。其れには、資本家の階級が勞働者の階級に降服して、必然に『プロレタリアットの獨裁』の日を通過しなければならぬ。然し、斯かる日をして確實に、そして、一日も速かに來らしめんには、現代の資本家の階級をして、成るたけ頑冥に、成るたけ强固に、彼等の傳統と信條とを保持せしめねばならぬとして居ることとである。わたくしは現存の事實を誤

釋するものとしてこの僻見を排し、未來に於て到底實現され得ないものとして、この迷信を斥けるものである。

一體、わたくしからすれば、資本家と勞働者との間に生ずる利害の衝突を、（よし、共れが、時としては、どんな形態を取るにしても）階級鬪爭の名稱を以て共れを呼ぶことからが妥貼を缺くことの甚しきものなのである。若し人間と人間との間に生ずる關係の中、一つでも正しく鬪爭の名稱を以て呼ばれ得るものがあるならば、そこには純然たる敵對意志だけあつて共同利害の爲めに成り立つて居る何等の協同行爲のない場合、例へば、野蠻人と彼等の土地を旅行する文明人との間に生ずる關係の場合とか、たとひ一時であるとはいへ、敵對行動の中にある一つの國民と他の一つの國民との間に生ずる關係の場合とだけに限られねばならぬとわたくしは考へる。事實として、資本家と勞働者との間の關係は、共同利害の爲めに成り立つた協同行爲の關係である。されば、出來得る限りの方法を以て、敵の勢力に出來得る限りの損害を與へることを唯一の目的として居る戰爭の概念を當て嵌めることは、當て嵌めて、さうして、之れが透徹した解決を求めようとすることとは、全然、其の當を失することとわたくしは考へる。

總べて、永久に亙つて、全體として共同の目的を有しながら一時に於て、部分として利害の衝突を來たす活動、若しくは、事業に在つては、其等の衝突を調和する方法としては、爭議あり、討議あるのみである。そして、資本家と勞働者との間に生ずる利害の衝突は、確かに、この種のものである。隨つて、其等を調和する方法は兩方をして彼等の共同事業の性質を理會し得るだけの同等の聰明と、共れを尊重し得るだけの同等の德性を有たせた後、兩方に對等の權利と地位とを與へて、利害の共通の觀點より、各、全體を構成するメンバアとして共れを爭議し、討議せしむることであらねばならぬ。かうして、始めて、わたくし共は形式に於てのではなく、實質に於ての黄金世界の實現に近づくことが出來るといふものである。

わたくし共が等しく理想として、之れが實現に努めなければならない黄金世界は、そこに其れを組織する總べてのメンバアは、彼等の幸福と、彼等の才能の開發とのために機會の均等を得て、偶然に基づける階級の差別は一掃され、本質に據る適應性の分業の按排された社會でなければならぬ。然し、斯くの如き社會は闘爭の形を通して、闘爭の精神を以てしては、到底、實現され得るのもではなくして、爭議、若しくは、討議の形を通して、爭議、若しくは、討議の精神を以てしてのみ實現され得るものとわたくしは斷言する。今日、資本家が如何にその金力に於て勝るとも、勞働者をして資本家に降服せしむることは固より不可である。それかと言つて、如何に勞働者がその數力に於て長ずるとも、資本家をして勞働者に降服せしむることの可なる所以をわたくしは知らぬ者である。何故ならば、そんなことをして社會主義者の無雜作に空想する如く、わたくし共が現に有てる文化とは非常に異なつて、善き、美しき、そして、全き文化は忽然として出現するものでないに定まつて居るからである。

ブルジョアも、プロレタリアットも、二十世紀に於ける人間である。ブルジョアが人間以下でないことは、プロレタリアットが人間以上でないことと同樣である。ブルジョアを惡魔とし、プロレタリアットを善神として、若し後者に或る缺陷があるたらば、其れの一切に對してはブルジョアは其の責に任ずべきものであるとするのは一つの神話に過ぎない。リカアドオに依つて經濟説として創始され、マアクスに依つて歴史觀として完成された神話に過ぎない。

若し doctrinaires といふことが、現存の事實を一層明瞭に、一層正確に見るために或る理論を藉りるのでなくして、或る理論を有つがために、反つて、現存の事實を一層不明瞭に、一層不正確に見ることしか出來なくなつた人の謂であるならば、わたくしは多くの doctrinaires をカント主義者の中に見出だすのみならず、マアクス主義者の中にも見出だすのである。そして、長谷川氏と大山氏とはマアクス主義型の doctrinaires である。ラスキンは千人考へることの

出來る人のある中で、見ることの出來る人は一人しかないと言つた。是れを以ても、見ることの出來る人の極めて稀有であることは明らかである。が、新らしき文化の發展に關して、見ることの出來る人は、考へることしか出來ない人よりも無限に大切である。何故ならば、文化の謂ふところのコペルニカス式轉換は、獨り、この種の人々に依つてのみ爲され得るものであるからである。

こゝに大山氏が一個の村學究であるか、ないかを直截に證明して居るやうにわたくしに思はれる一節がある。其れは、彼れの『民衆文化の世界へ』と題する一つの論文の中に見出だされるものである。

我等が、明治、大正の文化を客觀するとき、そこに沈滯、頽廢の空氣の鬱積してゐるのを見ないで濟まされようか。成る程、明治維新以來の西洋の學藝や、制度の移入に依つて、殊にその前の如何なる時代の工藝生活の上にもなかつた種類の西洋式機械文明の模倣に依つて、その細部には幾多の複雜な新局面の展開してゐるのを見るけれども、しかも、それを全體として大觀するとき、我等はそこに、何等の創造的精神の躍動を見ることが出來ないのみならず、寧ろ、衰頽期の標徴をまざまざと認めない譯には行かないのである。

と彼れは語つて居る。そして、是れは『この狀態の上に一つの變革が起つて居て、文化價値の享有者としてのパトロン等が、いつの間にか、文化價値の創造者に對しての指揮者となつて居るのである。この時から、當該文化生活は、その頽廢期に向つて駸々として歩調を早めるのである』(『民衆文化の世界へ』)ことの眞理である一つの實例として擧げて居るのである。然しそれとしては、何人にしても多少突梯の感に打たれざるを得ないであらうと、わたくしは想ふのである。

こゝで、大山氏の語つて居ることは大ざつぱに過ぎて、彼れが如何なる事實を標的としてこんな風に語つて居るのであるか、一向に捕捉し難いが、兎に角、彼れが明治大正の文化と言つて居る以上は、其れがわたくし共の生活の表現た

る文化、卽ち、わたくし共の生活の機關となつて居る文化を指して居ることだけは確實である。そこに、『創造的精神の躍動』の大して見らるべきもののないことだけはわたくしも認めるが、之れが原因の解釋に至つては、わたくしは全然大山氏とは異なつた意見を抱く者である。（昨年十一月發行、中央公論所載、拙文『刻下に於ける神話化の源流を究明す』參照。）こゝには、この事に關してわたくしの意見を詳述する暇を有たぬが、其れは、そこに見出だされる缺陷はわが同胞が彼等の文化の爛熟期に入つたためではなくして、それが幼稚期にあるためである、幼稚期にありながら、夙に邪路に入つたためである。それであるから、大山氏が頽廢期の標徴と見て居るものは、わたくしからすれば未熟の標徴であるのである。前にわたくしが引用した節の次に來たる節に於て、彼れは、『產業生活に於て勞働者達が、その創造事業に何等の創意を貢獻することを許されないで、唯、資本階級及びそれに直接に奉仕して居る一部の知識階級の人達の命令の下に、全然機械的に勞働して居るといつたやうな狀態は、多少の程度に於て、藝術界、教育界、政治界、宗教界、及び其他の文化生活の各界各部面に於て、明瞭にこれを認知することが出來るのである。』と語つて居る。是れも、その前後の關係より、わが國の現狀（と彼れの想像するもの）に就いてなされた考察と推せられるが、現在の勞働者が、彼等の從事する產業に何等の創意を貢獻することの出來ないのは、資本家階級と彼等に奉仕して居る一部の知識階級が其れを許さないからであるといふ彼れの解釋は、如何なる事實に據り、如何なる方法で歸納して出來たものであるか。概して言へば、現在の勞働者には何等の創意をも沈澱させるに必要なる何等の素地もないではないか、そして、それの淵源は資本家と勞働者との間の關係といふやうなものよりも、もつと、もつと遙かに遠いところにあるのである。藝術や、教育や、政治や、宗教に於て創意と呼ばるべきものの殆ど皆無なのも、其れの原因は、主として資本家が其等の當時者に及ぼす惡影響から來たつて居るのであると考察するのは、餘りに牽強附會に過ぎるやうに思はれる。

大山氏のこの考へ方、論じ方から行くと、わが國の學問研究に創意のないのも資本家の壓迫の結果であるといふことにもならうが、いくら惡い資本家でも、そこまで責任を持たせられてはやり切れまいと想はれるのである。わが國に於て、獨創の權威を有つた學者の一向に出ないのには、他に一層顯著な原因のあることを大山氏と雖も十分に承知して居らなければならぬ筈である。

一體、わが國の文化は、今日、文明國の各が、例へば、英國が、佛蘭西が、獨逸が、文化が獨自のものであるといふ意味以上に獨自のものである。さうであるのは、其れの有つた不思議な閲歴と構成とから來たつて居るのである。隨つて、其れの特徴を理會するのには、西洋人が西洋の文化を考察して到達した結論、特に、マアクス主義者が彼等の偏頗な、そして、硬直な理論を通して其れを考察して到達した結論を一概に、無雜作に適用するだけでは、わが國の文化の特徴を理會することは出來ない。わが國の文化の特徴を理會するには、獨立の精神と、柔軟な情操と、高邁な、そして、豐潤な見識が必要とされるのである。

さきに、わたくしは長谷川氏の見解に就ては既に多くの言を費したのであつた。そして、事實として、長谷川氏と大山氏とは彼等の根本思想に於て共通するものの多くを有つて居るのであるから、直接にわたくしが長谷川氏の見解を批判したことは、間接に大山氏の其れを批判したことにもなるのである。されば、これより先き、大山氏の見解に關するわたくしの考察は、主として、彼れが力說して倦むことを知らざる差別と平等とに就いてのものに限られるであらう。

「長谷川氏はこれまで人間が實現した文化の三段階の特徴を、其れの信仰の方面から觀察すると言つて、第一段階に於ける其れは、神に對する信仰であつた、第二段階に於ける其れは、英雄に對する崇拜であつた。第三段階に於ける其れは、自分より優れた神をも信仰せず、英雄をも崇拜せず、たゞ、自分の實力に對する信頼だけである。然し、斯くして

彼れが最後に到着した信仰も、其れが法外に主張され、誇張されるに及んで、彼れの文化はやはり階級的のものとなつて了つた結果、今や、人間は彼れの個人性よりも一層彼れの社會性を尊重することに依つて、更に新たに一轉機を見出ださうとして居る。この新らしき傾向の特徴は共産主義的であり、社會主義的であり、無政府主義的であることである。然し、この新らしき傾向は、必然に、無殘に個人性を虐待することになるから、既にこの運動に對する新らしき反動が見出だされて來たと言つて、長谷川氏は不思議にも、『その次ぎに、新しい文化に現はれる反動的現象として、今現にその兆を示してゐるのは、偉人の復活である。』と語り、又、『この要求は、理想主義の復活に根ざしてゐることといふまでもない。』と語つて居る。

事實、あるものなら、其れをあると認めるより外に道はない。然しながら、長谷川氏にして、人間が是れまで、四五千年の間、閲歴し來たつた道程を三つの段階に分つた照準よりすれば、彼れが新らしい現象と認める是等の傾向を復活と呼ぶのは間違つて居る。彼れが、さうするのは、丁度、一つの峻嶺を遠い距離より眺めた時の印象と、親しくその山に登つて、急坂を攀ぢ、坦道を歩み、絶壁を下る時の經驗とを混同して語るやうなものである。彼れにして、どこまでも、さきに定めた照準に依據して終始しようとするならば、是等の現象は、やはり、第三段階に到つて人間が取つた自分の實力に對する信賴の增長であり、進展であるとせねばならぬのである。

この一點に關しては、大山氏の見解の方が遙かに徹底して居り、随つて合理的であると思はれる。何故ならば、彼れは、天才主義、英雄崇拜の情操がなほ多分に現代人の生活を支配して居るのは、過去に於て行はれた生活様式の殘骸であるとして居るからである。たゞ其れの意義の解釋に至つて、わたくしは大山氏とは大に異なつた意見を抱いて居る者である。大山氏はデモクラシイの眞髓は人間の心の中に平等感を植え付けるにある。随つて、デモクラシイと差別感と

は、氷炭相容れざる概念であるといふやうに見て居るが、わたくしからすれば、平等感の鼓吹は（毒を以て毒を制する應急の方法として）デモクラシイの起點ではあつたが、決して、其れの歸著點ではないのである、あつてはならぬのである。過去に於て現はれた形に於ては、天才主義も英雄崇拜も、今日、わたくし共の有てる情操からすれば、如何にも幼稚でもあり、醜悪でもあるに相違ない。然し、其等は悉く、人間の心に永遠性を有つた差別感が其の時代、その時代の文化の様式につれて、不完全に現はれたものであるから、若し其等が、今日に到つても、なほ或る形に於て人間の心を支配して居るならば、其等は一時の反動とか、過去の遺物とかを以て目さるべきものよりも、わたくし共に取つて、もつと悠永なる指標價値を有つたものでなければならない。彼れは次のやうに言つて居る、

デモクラシイと天才主義―　それは極端と極端との對照ではないか？いふまでもなく、「平等」の概念をその主要構成要素の一つとしてゐるデモクラシーは、特に『差別』の一點を高調する天才主義とは、既にその出發點に於て、根本的に相容れない或る物を包含してゐるのである。（『中央公論』所載、『天才主義と現代の政治及び社會生活』）

然し、何故に彼れはこのやうに、デモクラシーと天才主義とを相容れないものとするかと言へば、それは、彼れの理會に隨へば、「彼等」（普通一般の人々）が「天才」といふ言葉に對する場合は、理性からするよりも、寧ろ感情からするのである。彼等はそれ故に、「天才」からは常に超人的示現を豫期するのである」（『中央公論』所載、『現代文化生活に於ける天才主義』）からである。そして、彼等がさういふ情操を有つ間は、往々にして天才主義が『………如何なる主義にせよ、苟しくもそれが適當にデモクラシーの名を以て呼ばれるものである限りは、それは、社會の大多數者が、如何なる意味に於てゞにせよ、或る特殊の少數者の集團の支配の下に置かれるといつたやうな狀態を寛容することが出來ないものでなければならないのである。社會に於ける或る特殊の集團が全然支配者の地位を占めて、その他のすべての集團

や個人が全然被支配者の地位に置かれるといつたやうな組織に對しては、少くとも主義に於てでも挑戰することが各種のデモクラシーに共通する唯一の特徴…………』(『中央公論』所載、『天才主義と現代の政治及び社會生活』)を破壞する虞があるからである。

今日、天才の意義に關して一般民衆に依つて與へられて居る解釋の中には、大山氏が指摘して居るものに適中するものはないでもない。然し、これとても、もともと、其れの有てる實利に基づける解釋の一時神秘化されたものに過ぎないから、現代に於けるが如く、人間の叡智が急劇に開發されて行く時代に方つては、一旦、其の實利より遊離し、沈澱した神秘は彼れの實驗に依つて溶解され、終には、其れの本原に吸收されて了ふことに定まつて居る、吸收されて了はないまでも、其れに對して絕えず一つの指標價値を失はないで行けるやうになるに定まつて居る。現に、天才が尊重されるやうになれば、其れは其れの有てる實利に基づける解釋の下にであることをわたくしは信ずる者である。

さうすると、デモクラシーと天才主義とは何故に一致することの出來ない二つの觀念であるかを理會するに、わたくしは苦しむ者である。わたくしからすれば、眞のデモクラシーの下に於てのみ、天才は發揮され、そして、最も善く利用されるのである。

政治の一事に限つて言つても、現代の社會が、上古の、若しくは、中世の社會に優れて居るのは、其れが專制政治に代へるに代議政治を以てしたのであつて、又、代議政治が如何なる理由で專制政治に優れて居るかと言へば、專制政治に比して、其れが一層適切に選擧の方法に依つて天才卽ち、適材を發見し、一層敏活に合議の制度に依つて天才、卽ち適材のはたらきを發揮することが出來るからである。

天才と言つても、その種類にはいろいろある。そして、社會生活はいろいろの種類の職業や活動の協同と、交錯と響應

とに依つて成り立つて居るものであつて、總べての職業、若しくは、活動は、各、一つの中心點を以て互に喰ひ違つて居るのであるから、或る一人は彼れの優れた才能に依つて一つの職業、若しくは、活動を中心とする一つの集團の中に他を率ゐながら、他の集團に於ては彼れに優れた才能を有つた他人に依つて率ゐられることになる。つまり、自由社會に於ては天才とは、或る一つの人格全體に與へられた名稱ではなくして、その人格の有てる才能の一側面に與へられた名稱であるのである。さうしたならば、大山氏の想像するやうに、天才を尊重し、利用することが、どうして治者と被治者との二階級を馴致することになるかは、わたくしの到底理會することの出來ないことである。

わたくし共の理性に遵へて、無階級の社會の實現されることが合理的であるならば、わたくし共は全力を盡して一日も速かに其れの實現されることに努力せねばならぬ。然し、さうなつた場合に於てでも、賢愚の差と、才能の適應性の相違とが、この世よりその跡を絶つとは豫想出來ない。さうすると、人間の勞働は、どんなことをしても、永久に其れから或る質と量との苦痛が全然とり除かれないものならば、總べての人が均等に其れを負擔するといふことは、たとへ公正のわたくし共に命ずるところである。然し、總べての人々が一日の中、一月の中、若しくは、一年の中、時間の或る數を均等に勞働に費すことになつても、社會生活のエコノミイより適材は適處に置かれ、各人は彼れの才能の卓越性と適應性とに随つて、それぞれ專門の職業に從事し、そして、同じ職業の中でも、卓越者は低劣者を率ゐて行くであらう。否、後者は前者を仰いで行くであらう。

平等に關するわたしの觀念は社會生活がかうなつた曉に、或は、其れに達する前でも、『近松やゲエテ』をして勞働に服せしむるに反對しないが、其れと同時に、彼等に固有する天才をして十分に其れの發達を遂げしめ、社會一般をして其等を利用せしむることに反對せぬものである。

四、其の他の二三氏の文化主義

以上、文化主義の主張者、若しくは、宣傳者として檢討して來た諸氏の外に、なほ同じく其れの主張者若しくは、宣傳者としてそれぞれ、一つの特色を以て一方の重鎭たるを失はない二三氏がある。桑木嚴翼氏、金子筑水氏、阿部次郎氏等が其等の尤なるものである。わたくしの當初計畫したる事業はほゞ完結された。が、是等の人々に對して敬意を表するためにでも、わたくしは彼等の議論から受けた感銘に就いて一言も語るところがなくして、このまゝ筆を擱めるわけに行かぬ。

桑木嚴翼氏は獨逸觀念論の歸依者として、殊に、リツケルト系の其れの歸依者として世に知られて居る一人である。彼れの著書の中で、最近にわたくしの讀んだのは、極めて通俗の形に於て文化主義に關する彼れの懷抱を說いて居る『文化主義と社會問題』と題する一卷だけである。この一卷を通して、わたくしの窺ひ得たところでは、獨逸思想を其れの根柢とする他の文化主義者の態度に似ず、文化の意義を講ずる彼れの態度は可なりに通達であり、寛厚である。（この書に現はれて居るところだけでは）彼れの說くところが極めて卑近であり、平明である結果として、其れが到徹と緊練とを缺くがために、世には、或は哲學研究者としての彼れの資格に疑を挾む者があるかも知れぬ。然し、それは學問に苦勞をしたことのない人の皮相の見といふものであらう。たゞ、わたくしが彼れに就いて怪訝に堪えない一事は、彼れが獨逸の國民以外の他の國民に依つて涵養された文化と、其等の結晶たる思想とに對して、これほどまでに自由な觀賞をなし得る風懷を有ちながら、どうして彼れの心の中に矛盾を感ずることなしに、彼れは、なほ、依然として、其の舊態を改めず、晏如として、リツケルトの一信徒たるに止まり得るかといふことだけである。

金子筑水氏より彼れの文化主義を檢討する材料としてわたくしに送られた文章は、悉く今日に於け　わが國の文化の

缺陷を塡補するには、藝術、殊に、文藝を中心とした文化を鼓吹するにあると主張し、この主張の意味を説明するものに限られて居た。そして、極めて輕くではあるが、彼れは、藝術を若しくは、文藝を中心とした文化の價値を高調すると同時に、完全なる文化生活が必要とする其れの他の機關の價値をも全然無視して居るものでないといふことを附け加へる周到なる用心を缺かなかつた。然し、彼の中心思想に隨へば、藝術、若しくは、文藝が其れの基調をなさねばならぬといふのである。彼れは久しく希臘文化の研究に沈潛して居た者であるから、多分、彼れは暗示をそこから得たのであらう。彼れが藝術、若しくは、文藝を中心とした文化生活をわが同胞に對つて鼓吹しながら、藝術生活に於ては古今獨歩の天才であつた希臘の國民の生活に其の範を求めて居るのは彼等に取つて幸福であると言はねばならぬ。

然しながら、希臘の國民は、現代的の意味に於ては、産業も、科學も、全然有たなかつたものである。未來に到つてはいざ知らず、刻下に於ては、孰づれの文明國民に取つても、産業と科學とが其れの生活を形造る最も重大なる要素となつて居ることは爭はれない。若しわたくしが金子氏の主張して居る文化主義に不滿の點が一つでもあるならば、其れは、現代生活に於て、否、わたくし共日本國民の要求を標準として、科學と産業との價値を閑却して居るといふことである、閑却しないまでも、其れが當然認識されなければならない程度に認識されて居ないといふことだけである。若し彼れにして近世生活に於ける科學と産業との意義に徹底した後、其等と相當な比例に於て藝術、若しくは文藝の價値を力説したならば、彼れの言論には一層の權威が生ずるに相違ないとわたくしは考へる。

阿部次郎氏は一個の哲學研究者としてよりも、一個の道德家として優れて居る。一個の道德家としての彼れの技倆は決して平凡であるとは言へない。彼れは哲學者としては常に間違つた假定より出發して居るが、道德家としては通例、正しい結論に到達して居る。彼れは、今日、わが國に於ける哲學研究者の多數の顰に倣つて、やはり、獨逸觀念論に依つ

て養成された、（或は養成されたと自づから想像して居る）一人である。然し、其れに似ず、彼れは、今日に至るまで、自由な氣分と社會の出來事に對する純眞な興味とを保持して來た。これは、多分、彼れの品性の然らしめるところであらう。

わたくしが考察するところでは、彼れの人格主義の原理（と自づから信じて居るもの）と、其れの應用とは、全然別のものである。その原理があるがために、彼れは人生の諸相に對して正確な批判をして居るのでなくして、其れがあるに拘はらず、其れに誤まられざる彼れの才能が彼れをしてさうせしめて居るのである。丁度、巧妙な易者が彼れの正當な判斷を易理に歸して居るが、その實は、其れに役立つて居るのは世間と人間とに對して彼れが有つて居る彼れの非凡な智識と直覺とであるやうに、それであるから、若し阿部氏にして、一朝、普遍的、先見的原理といふやうな馬鹿氣たものを見限つたならば、彼れは一層優れた道德家になるであらうとわたくしは推測する。

婦人問題の醫學的觀察

醫學博士
文學博士　富士川游

一

マリー、エブネル、エッシエンバッハは、所謂婦人運動が世に現はれたのは、女子が書物を讀みて、嶄新の知識を得るやうになつてから以來のことであると言つて居る。これと同樣の議論は他の人々からも唱道せらるることが多いが、しかしながら、それは事實に遠いものである。所謂婦人運動は人類が地球の上に現はれたるときから既に存在して居るところの男女問題から出發したもので、その淵源は久遠の昔時にあり、それが漸次に發展して、遂に今日の狀況に達したものである。男女兩性の分化するに從ひて、男子と女子との關係が動搖を致すこと益々甚しきによりて、所謂婦人運動が人類の意識に上ぼり、それが表現の能力の増加すると共に多數の人々の思考界に入り來つたものである。それ故に、婦人運動はその根本より見れば、生物學上のものであるが、それが社會的生活の條件の進歩するに從ひて幾多の爭鬪が續けられて、遂に社會的現象として現はるるに至つたのであるから、近代の婦人運動は、マックス、ヒルシユが言ふが如くに、男女問題の政治化せるものである。實に近代の婦人運動の主要なる現象として見るべきものは男子と同樣の地位に女子を置くことで、すなはち法律上、倫理上、社會上、經濟上及び政治上に於ける女子の地位を男子と同樣にすることを期するのである。從てこれに關涉するところの問題たとへば敎育の如きは、婦人運動の要項とせらるるところであるが、この意味に於いての婦人運動は希臘及び羅馬にも既に行はれた。紀元前六百年頃レスボスに出でたる女詩人サツフオはこの運動者の最初のものであらう。プラトン及びアリストテレスの如き哲學者は女子の自然並に社會に於ける位置を說て居るが、殊にプラトンは女子の解放を唱へ、職業の自由と、又すべての公職に於ける女子の同權を主張して居る。アリストフアーネスの喜劇の中にも女子の權利に關することが述べられて居り、オイリ

ピデスの論文の中には希臘の女子が高等の精神教育を禁ぜられたことに對しての抗議が載せられてゐる。羅馬にありては女子の位置は希臘に比しては優越して居つたが、當時の女子には多くは教育が施されず、家內にあつて紡績するやうなことが强られて居つた。それ故に婚禮の時には、將來の作業を表示するために上皮と紡錘が持參せられるやうなこともあつた。兎も角も、羅馬にて結婚したる女子の國は家庭內で、家事といふことがその主務であつた。しかしながら、此の如き强制から解放せられむとして、示威運動を起した例もある。又それがために團結を作つた場合もある。現に紀元後百年代に羅馬に主婦團體(Conventus matronarum)が創立せられた。

二

ギレルモ、フエルレロスが言ふ所に據ると、羅馬帝國時代にありて、女子は妻として又母として、國家の事業の上に著甚の感作を及ばして居つた。配偶を撰ぶことは娘の少さきときにその父のするところで、それは全く政治上の動機に基づいたものであつた。男子は十八歳と二十歳との間に於て、女子は十三歳と十五歳との間に於て結婚したのであるが離別することも結婚と同じやうに政治上の隨意であつた、若し夫の政治上の利益がそれと協和せぬ場合、妻に何等かの過失が無ければそれを離別することは出來ぬことになつて居つた。離別狀を書く權利は夫のみでなく、その父もこれを持つて居つた。政治以外の生活にありては男子と同等の位置を占めるところの女子は此の如くにして政治上の目的に使はれた。その自然の結果として女子の側に强劇の反應が現はれて、女子はその位置を固定せむとするために大膽と奸計とを以て政治上の生活に這入た。もとより彼等には政治上及び經濟上の責任が無かつたから屢々不條理の事が行はれたが、しかしながら、羅馬古代に於ける女子の中に人格的の感作の偉大であつたもの及び政治的權力の强かつたものが澤山居つたといふとは歷史上に昭乎たる事實である。男子と競爭してそれを征服せむがために自然から與へられたる武器を用ひたが、若しそれが缺如した場合には奸計と、性慾的の技術とによりてこれを補充した、後に至りてユスチニヌス法典が出來て女子の法律上の位置は高められたが、しかしながらアリストテレスが女子を以て一とつの物質のやうに看做し男子に比して大に下等のものであると言つた考は此時にも多數の人々の頭にもありて、女子は輕侮せられた。基督教の時代にもこの考は移りて、長い間、女子は惡魔が好みて住するところであると言はれ、トーマス、フオン、アクイノはアリストテレスに則て、女

子は毀損せられたる男子であると做し、その門人のコロンナの如きは「女子は迅速に生長するところの悪草なり」と痛罵して居る。所が西暦紀元後十三世紀の頃よりして漸次に女子の經濟上の動力が現はれるやうになつて、それがために女子の生活の上の社會に於ける位置の上に、決定的の作用が認められるやうになつた、それは女子の數が男子に比して多大になつたといふことと、もつと重要なることは未婚者の數の著しく增加したといふことである。一千三百八十五年獨逸のフランクフルトの調査では男子一千人に對して女子が一千百人を算し、一千四百四十九年同じくニュルンベルグの調査では男一千人に對して女子の數が一千百六十八人であつた。それがために、女子が結婚によりてその身を立てるといふことが困難となつたために、勢ひ已むことを得ず、女子がその生活の維持のために職業を求めねばならぬやうになつたのである。

三

此の如くにして、女子は始め結婚によりて身を立て、結婚が困難になつてからは、職業を求めることによりてこの生活を維持することを得たが、しかしながら結婚することも出來ず、職業を得ることも容易でないといふやうな女子の數も尠なくなかつた。それ故に此等の女子をして寺院から扶持を受けて僅に生活を營ましめることが出來るやうに、女子の團結が出來て、資金を集めてその事が計畫せられた。貧困の女子には宗教家が設立したところの收容所に這入り、然らざるものは地方を巡行した、十五世紀の頃になりては結婚と風俗との連鎖は緩るくなりて、結婚したる女子といへどもその生活は確乎たるものではなかつた。女子の教育は西暦紀元五世紀の頃ヒーロニムスが立案して計劃するところがあつたにも拘らず、その狀況は誠に悲慘のもので、カール大王の娘の如きは相當の科學的教育を受けたといはるるが、王侯貴族は別として國民の全體に就て見れば、女子の教育は全く等閑に附せられて居つた。カール大王の國が亡びてから後、女子の教育は漸次に進步の域に進み、女子僧寮が女子教育の場となりて、女子の學者も輩出するやうになつた。十二世紀からは女子の教育は僧侶的よりして世界的となり、十四世紀の終に至りて佛國の女子記者クリスチンは女子の高等教育を必要とする旨を唱道した。十五世紀の頃、獨逸のフランクフルトには十五名の女醫が居り、それが當時の人々の尊敬を受け、又租稅を輕減せられて居つたために業務の成績も佳良であつたといふことが傳へれて居る。十七世紀から十八世紀に至りては、殊に獨逸にありて、女子の地位は從前に比して大に高め

られた。これに依りて見ると、所謂婦人運動といふものが近代の產物であるといふことは事實でなく、又それが現代の精神から產れたものであるといふことも誤謬である。前段に記述したる略史によりても明なるが如くに、所謂婦人運動はその源を古代に發したもので、それが、各個時代の人々の意識に上ぼりて、遂に社會的運動となつたもので、文藝復興時代にありて、殊に伊太利の論著の中には婦人問題、就中女子の教育につきて哲學的に論述したものが尠なくない。從つて女子にして科學の研究に從事したものも尠なくなかつた。獨逸にありては、これに反して、女子の解放といふことは唱道せられず、人文主義はただ大學の域內に留まりて國民の間にも又貴族の中にも行はれず、女子を以て自然の缺陷及び誤謬であるとまで大にこれを賤しめた有樣であるから、教育のことなどには無論重きを置く筈がなく十七世紀の終頃でも、學者社會の夫人及び女子が學問するためには外國の大學を訪問せねばならぬのであつた。ルウソーが出て、始めて婦人運動は一方の代表者を得て、女子の知識と能力とを增進することに努力することを得たのである。

四

輓近の婦人運動の狀況を瞥見するに、それは各國に於て、多少其趣を異にする。英國及び米國にありては佛國の思想家、殊にコンドルシエーなどの考に基づきて女子の政治的同權を求むることを主眼とするが故に、その婦人運動は男子に對しての政治的競爭を標徵として居る。一千七百九十二年マリー、ウオルストンクラフトは溫和なる婦人運動を唱道したが、これはその後に於ける英國の婦人運動論者のために忘却せられた。女子の選擧權獲得のために野蠻的なる騷擾が常に反復せられるのを認める。ただ今回の戰爭のために我々はこの演劇を見るの機會がない。佛國にありては女子の人權が、革命の際に、未曾有の豪氣を以て防禦せられたやうのことはあるが、全體佛國にありては女子は尊敬を拂はれて居り、又著大の感化を得て居つたから女子解放のためにとて特別の運動を起すの必要が認められなかつたやうである。今日では佛國の女子は一面にありて、裁判所に辯護士として、病院に醫師として、大學に講師として、又政府の官吏として、或は技術家として、相應に活動して居るにも拘ず、一面にありてはナポレオン法典の下に立ちて、その反女子的の法令に拘束せられて居る。獨逸に於ける婦人運動は一千八百七十年代より始まりて、始めは男子に對する競爭を標徵して居つたが、心理學的、社會學的及び生物學的の根據からして、それが他の方面に向ひて進路を轉ずるやうになつた。婦人運動が

起りて長い間、婦人運動の議論は哲學及び心理學の方面よりして立てられて居つたのが、近頃になつてから、社會學と生物學との知識とに論據を置くようになり、それが爲に婦人運動の社會學と生物學とは共運動の上に科學的の基礎を與へるやうになつた。今日の處では、獨逸の婦人運動は女子の純粹人格的利益と國民全體及び國家の利益との間を平而にするといふヿに根本が據られて、それまでの婦人運動が度を過して居つた點と、有害的であつた點と瑕疵と認められたる點とは除却せられて、女子の人格の發展の上にその權利の相當なるものを要求するヿ、女子が職業を求めるヿを得るやうに、その道を開放するヿ、及び女子の作業に相當して法律上及び風習上の獨立を得るやうにとの諸項が婦人運動の標徴となつた。それ故に、男子と女子との間の差別を抹殺するやうなヿをせず、生物學上の事實として女子と男子とは對立するものであり、又そこに生活の緊張力が存在するものであるといふことが認められるやうになつた。男子と女子とは共に自然的に限定せられたもので、兩方が共に人類の種を保存するの責務を持つて居るが、殊に女子のこれに關する任務は重いものであるといふ生物學上の事實が明になつて、これは固より生物界のすべてを通じて分配せられたる代擔であるから我々人類の力にてこれを變化することは出來ぬといふヿが知られた。今日の獨逸の婦人運動は正にこの見地の上に立つて居る。

五

獨逸に於ける婦人運動の第一著手として創立せられたる獨逸婦人總會(Allgemeiner deutschen Frauenverein)の趣意書の中には『婦人運動は男女兩性の身體的及び精神的殊別の事實の上に其要求の基礎を求ねばならぬ。それ故に婦人運動は男子と女子との同一價値の共同作用によりて文化的進歩に貢献するヿを期せねばならぬ。』といひ、又『婦人運動は既婚の女子に對しては結婚及び母性に附帶せる義務的作業を以てその第一の職業であると認める』と述べて居る。之によりて見ると獨逸の婦人運動は、國民全體に對する個人的及び社會的關係を整ふる爲の權利を求めるヿを期圖する者である。從てそれに對する女子の能力を備進する爲の教育及び作業を解放せられねばならぬと主張するのである。それ故に之を米國の婦人運動に比して共間に著しき差別が認られるが、之は獨逸の科學の思想が根本的であると、獨逸國民の感情があまりに發揚的でない爲と、又一つは兩國の間に經濟上の事情の相異があるためで、ハーヴエロック、エリスが、獨逸の婦人運動はこれを米國のものに反對して、感情を離れて居るといふのは確かに一部分の事實である。米國にありて、

婦人運動及び女子文化が殆ど女子の生活の全體を成すやうに見ゆるほどに隆盛なるは米國の經濟上の條件に關渉することが多いのでこれを證明するためにここに各國に於ける女子の職業の統計を引用する。

近頃マックス、ヒルシュが示せる統計に據ると、歐洲及び米國に於ける女子が職業的作業に從事する數は左の通である。

女子一〇〇人につきて職業的作業に從事する女子の數

墺太利	一九〇〇年	四二・八
佛國	一九〇六年	三九・〇
伊太利	一九〇一年	三二・〇
獨逸	一九〇七年	三〇・四
瑞西	一九〇〇年	二九・五
白耳義	一九〇〇年	二八・一
嗹馬	一九〇一年	二八・一
英蘭及蘇格蘭	一九一一年	二五・一
諾威	一九〇〇年	二四・〇
瑞典	一九〇〇年	二一・〇
和蘭	一九〇九年	一八・〇
米國	一九〇〇年	一四・三
西班牙	一九〇〇年	一四・二
露西亞	一八九七年	八・四

又その職業の中にて、自由業に從事するものの數と、その家族狀態とを見るに

國名	年紀	職業に從事するものの數（女子人口の%）	自由業（職業女子の%）	職業女子一〇〇人中 未婚	結婚	離婚又は寡婦	結婚者一〇〇人中に對して
英蘭	一九〇一	二五・一	七・七	七八	二二		七・六
和蘭	一九〇九	一八・〇	七・七	七六・六	二三・四		七・五
嗹馬	一九〇一	二八・一	三・五	七一・七	六・〇	二二・三	七・五
米國	一九〇〇	一四・三	八・一	六六・一	一五・五	一八・四	八・五
瑞西	一九〇〇	二九・五	五・〇	六五・一		三四・九	七・三
獨逸	一九〇七	三〇・四	三・〇	五九・四	二九・七	一〇・九	七・八
墺太利	一九〇〇	四二・八	一一・三	四四・七	四一・四	一三・九	七・六
諾威	一九〇〇	二四・〇	三・一	四一・五	四六・八	一一・六	六・二
佛國	一九〇六	三九・〇	三・八	三五・一	五二・二	一一・九	七・八

この統計に據りて見ると、歐洲各國に於ける職業女子の數は墺太利の四二・八%が最大で露西亞の八・四%が最小である。この統計は今から十年乃至二十年前のものであるから、今日の所ではこれよりも更に增加して居る筈である。又この統計には示されて居らぬが、女子職業者の數が年次を逐て增加するとは爭ふべからざる事實である。こゝに特に自由職業の數に就て見るに、一九〇七年獨逸にありては全職業女子の僅に三%が自由職業に從事せるに對して一九〇〇年米國にありては八・一%の多數が自由職業に從事して居る。總體女子職業者の數は獨逸三〇・

四%に對して米國一四・三%なるに、その中で、自由職業に從事するものの數は米國は獨逸に比して三倍の多きを示して居る。又結婚者が職業に從事するものは米國にありては一五・五%あるに對して獨逸では二九・七%の多數を示して居る。これに反して離婚者又は寡婦の職業に從事するものは米國の一八・四%に對して獨逸は一〇・九を示して居る。これによりて見ると、米國の婦人問題は主に未婚者及び寡婦の問題であるといふことに著目せねばならぬ。英國にありては女子職業者の狀況は米國に於けると略ぼ同樣であるが、墺太利、諾威及び佛國にありては、女子職業者は未婚者に於けると同樣に既婚者にも多數である。これに據りて、女子の職業といふものが、精神的の事情よりも、經濟的の事情に關することの著しいものであるといふことが明かであらう。

六

此の如く、女子の職業が婦人問題の要部を占むる間に、近頃に至りて、女子の大學學修といふことが漸次に婦人問題として重要の地位を示すに至つた。獨逸にて女子の大學に入ることを許したのは一千九百年バーデンを以て始とし、その時入學せる人僅に六名であつたが、一千九百十七年冬學期にてはプロイセン、ヘツゼン、エルサス、ロートリンゲン（戰爭後は佛國の領分に歸したが）の諸大學に六千二百十五人の女子學生が居り、正に全學生の九・七%は女子であつた。これを學修の科目に就て見るに次の通であつた。

神學科	一七	哲學科	四四三七
法科	一一九		
醫科	一六四二		

哲學科を更に細別すると

哲學、史學	二八九四	理財科	三二八
數學、自然科學	一〇六八	齒科	一〇〇
化學、藥學	四七		

米國にありては獨逸よりも早く、一千八百五十五年「ハーヴアード」大學は已に女子の入學を許し、同じく七十年代には「エール」、「ジョンス、ホプキンス」及び「コロムビア」等諸大學も女子の入學を許すやうになつた。英國、佛國及び露西亞にありても一千八百七十年代に女子の大學に入ることを許し、瑞西は一千八百七十三年に大學の規定を改め、一千八百九十年に至りて女子の大學に入ることを許した。瑞典にては一千八百七十年女子の醫科大學に入ることを許し、一千八百九十八年に至りて法科大學に入ることを許した。諾威にては一千八百八十二年女子の大學に入ることを許し、一千九百十三年には一千

七百名の女子大學生を算するに至つた。マツクスヒルシユが獨逸に於ける女子の大學生の年齢、家庭地位、職業、學修の目的、豫備學修等につきて調査せるものを見るに

年齢　三十歳以上一一・二三%　二十歳乃至三十歳八一・三四%　二十歳以下七・四三%

家庭地位　離婚、寡婦〇・六五%　既婚三・三二%
未婚九六・〇三%

家庭職業　美術家〇・四八%　手工家三・六六%
資本家三・六九%　官吏三・七六%　農業三・八八%
工業家四・七五%　小學校教員五・九%　中等及び
下級官吏一〇・九三%　商賈、銀行員二一、四二%
大學職員四一・〇五%

學修の目的　補修八・七四%　ドクトル試驗準備
九・八%　教員檢定試驗準備二四・三七%
大學專門科試驗を受るため五三・三二%

豫備學修　「オーバーレアールシユーレ」六・二七%
「ギムナシウム」一一、六二%　教員試驗及第二四・
六九%「レヤールギムナジウム」五二・四五%

これによりて、獨逸に於けて女子の大學の學修の狀況が窺はれるのである。

七

女子が高等教育を受るにつきて、如何の影響をその身體に及ぼすかといふことに關してはまだ十分の調査が無い。しかしながら、これを小學校に於ける事實に徴するに、女子は學校病に對して男子よりも不良の境遇にあるものである。フオン、ドリガルスキーの調査に據ると、學校兒童の一・一%は心臟病に罹り、又五・一%は輕度の心臟障碍に罹りて居るものであるが、その中、女子は男子に比して凡そ二三倍ほど多く心臟病に罹るものである。又貧血性心臟雜音を呈するものは女子の方に男子の二倍ほど多い。男子にありて貧血及び萎黄病に罹るものは二三・八%であるのに對して女子では三二%の多數を示して居る。ベルシヤウの調査に據ると、女子の貧血は男子に比して九・七%多く、又女子の腺病は男子に比して一・二%ほど多い。此の如くに、小學兒童にありては、女子の貧血は男子に比して約三倍ほども多いのに對して中等學校の生徒になると、女子と男子との貧血の數は略ぼ同一になる。すなはち女子の貧血と萎黄病とは中等學校の年齢になると佳良の狀態を呈するものである。しかるに神經病的體質はこの年齢になりて著しく女子の方に現はれ、男子三・三%に對して女子一・〇二%となる。殊に生殖機

能成熟の期は女子の身體の上に一大變動を起すものであるが、從來、月經の來潮とその退止とにつきてのみ注意が拂はれて、月經來潮の前から已に始まるところの生殖機能の成熟につきては忽諸に附せられたために、ここに幾多の障碍が現はれる。その中に就きて、神經性及び神經病的體質の女子が增加するといふことは明かにこれに歸因するものといはねばならぬ。ツヂーは嘗て生殖機能成熟期にある女子の精神作用に於ける變常を研究して、これを獨逸兒童研究雜誌に報告したが、その說に據ると、此の年齡期に於ける女子の些も障碍を現はさざるものは極めて少數で、大多數のものは身體倦怠、頭痛、眩暈、腹痛、睡眠不安、多夢等を呈し、この精神作用の變常は、無力型、苦悶型、憤怒型（剌戟型）、忘想型の四種に區別することが出來るといふことである。此等のものは固より一時性のものであるが、これに對する取扱が不適當である場合には、その變常は永久に留まりて消散せぬことがある。それ故に此の如き變常は生理的から病理的への移行性のものであるといはねばならぬ。實に此の年齡期に於ける女子の性情は精緻なる器械のやうなもので、之れを取扱ふことが不適當である場合には容易に破損するものである。

八

ブムの說に據ると、中等學校時代に於ける精神的作業の努力は身體の發育の上に著しき影響を及ぼすもので、女子にありては男子よりもこの影響が一層甚しく、それがために現はれたる障碍は永久に殘りて恢復することが出來ぬといふことであるが、しかしながら此の如き單一の觀察によりてこの問題を解決することは出來ぬ。シュワルベは各處の學校に照會して女子學生につきての經驗を蒐集したが、それに據ると、學校に於ける修學は左ほど重大の疲勞を起すほどでは無かつた。從つてそれがために持續的に身體の健康を損害することは無かつた。マックス、ヒルシュは大學にある女子學生に質問書を發し、大學の修學及び職業が健康の上に何等かの影響を及ぼしたか否かを返答せしめたが、三名の女子學生にありて最後の學年に近視の初徵を認めたといひ、二十八歲の一女子學生は十七歲の時に病氣のために學校を退き、七年間靜養して、再び學校生活に入りしも健康の上に何等の障碍をも覺えぬといひ、三名の女子學生にありては、中等學校時代に現はれた神經衰弱及び貧血が大學生活に入つてから消散したといつて居る。二十八歲の女子法律家は卒業試驗の時には身體及び神經力の衰憊を覺えたが、この後

これは全く恢復して今は全く障碍を感ぜぬと告白して居る。二十六歳なる女子學生は學修によりての障碍は適當の生活方法を嚴行することによりて速かに消散せしめることが出來ると答へて居る。大體に於て女子大學生の學修によりての障碍は著しく感ぜられぬのであるが、しかしながら女子學生にありては男子學生に異なりて、家庭的義務のために負擔が重く、大學生活をするに方りても、女子は兩親の家庭にありて、種々の義務的作業に從事せねばならぬ狀況にあるがために、それによりて身體及び精神の疲勞を致すことの著しいといふことを看過してはならぬ。此の如く女子の大學の學修にありては身體の障碍を覺ふることが著しくないのに反して、それより前の準備時代にありては著しき身體の障碍が認められる。それは前にも言つた通ほりに、この年齢期の身體の變常に基づくものであるが、それに加へて、精神上の不安、目的を達せんとするための努力、過度の勉强及び病的の注意等が相重さなりて、精神作用の緊張過度を致し、それによりて神經系統並にそれと親密の關係を有する内分泌腺の障碍を起すに至るものである。殊に性的發育の障碍は甚だ著明である。これを要するに、生殖機能成熟期に於ける女子の身體的及び精神的過度緊張は絕對的に障碍性であるといはねばならぬが、大學時代にありては此の如き身體的及び精神的過度緊張はこれを認むることが出來ぬ。それ故に、醫學上より見て、女子の大學の學修は決して不良の結果を致すものでないといふことは明かである。但しこの場合にありても過勞を防がねばならぬといふことは固より論の無い次第である。

九

大學の學修と、職業と及び健康との間の關係を示すために、マックス、ヒルシュは次の如き統計を掲げて居る。

大學の學修と職業とが健康の上に及ぼす影響（%にて示す）

	健康狀態 障碍	障碍なし	改善	不定
醫師	七・三	七三・九	一七・四	一・四
教學及び自然科學家	六・一	七五・八	一七・四	〇・七
其他	八・三	七七・三	一二・七	一・七
全體	七・二	七五・七	一五・八	一・三
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

大學の學修を畢りて職業に就きたるものの健康の上に大學の學修と職業とが及ぼす影響（%

にて示す)

	健康狀態			
	障碍	障碍なし	改善	不定
醫師	七・八	七一・二	一九・二	一・八
數學及び自然科學家	四・五	六九・九	二五・〇	〇・六
其他	八・九	七四・七	一六・四	—
全體	七・〇	七一・八	二〇・四	〇・八
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

この統計に據りて見ると、大學の學修が進歩するに從ひ障碍は益々少なくなり、それに反して健康の狀態の改善せらるゝものが愈々多くなる(一五、八%に對して二〇、四〇%)といふ事實が明かである。

それから、職業と結婚とが一致せる場合に就て、健康上の影響を見るに。

大學の學修及び職業が結婚者職業に及ぼす影響(%にて示す)

	健康狀態			
	障碍	障碍なし	改善	不定
醫師	八・一	六二・九	二五・八	三・二
數學及び自然科學家	—	三三・三	六六・七	—
其他	一五・六	六八・八	一五・六	—
全體	一〇・〇	六三・〇	二五・〇	二・〇
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

この統計に據りて見ると、結婚して職業に從事せる場合には健康の障碍を受けることも增加するが、健康の改善を致すことも亦增加する。

此の如き事實に徴するに、女子の學修と職業とが健康の上に及ぼすところの影響は男子に比してより重大であるといふことは出來ぬ。これに加ふるに、女子の身體が抵抗力を有することの著しいといふことは、疑を容れぬところで、シヤーフハウゼン等の研究に據ると、これは女子の身體に色素の多いといふことに歸著するものであるが、シヤーフハウゼン等は、暗色の皮膚と暗色の眼とを有するものの數は男子よりも女子に多いといふことを引いてその說を證明して居る。それは兎も角も、女子の抵抗力が男子に比して著しいといふことは疑のない次第で、女子の大學の學修はこれを女子の他の職業に比して健康を害することの僅微なるは異議を挾むべき餘地が無い。

一〇

女子の解放は、女子をして眞實の母性たることの覺醒をなさしむるにあると、フアン、ベーク、エン、ドンクが言つたことは、正に今日の婦人運動の標語として差支ないもので、獨逸に

於ける、婦人運動の主旨とするところは、女子をして、結婚女子として、又母性としての任務を適當に又十分に遂行せしむるがために智力と義務感情と勢力緊張とを助長せしむるの目的を以て、それに對して高等の教育を施すべきものであると主張するのである。それ故に、今日の婦人運動は哲學的及び心理學的の範圍に屬することは尠なくて、社會學的及び生物學的に研究すべきことが多くなつたのである。此の如き女子の解放につきて、固よりこれに反對すべき正當の理由はあることなく、つとめてこれを贊助すべきは人類全體の幸福を増加する上から見て必要であるが、しかしながら、これに伴なふところの生物學的の危險にも多大の注意を拂はねばならぬことであり、又その實行に際しての衞生的方面をも忽諸に附してはならぬことである。

軍部大臣開放論

——(陸軍某要路者の反對意見を讀みて)——

水野廣德

陸海軍大臣を軍人以外に開放することの必要は、帝國憲法の條章に徴するも、其の精神に照らすも、又實際憲政の運用より考ふるも最早や議論の餘地はない、之が爲め第四十五議會に於ては衆議院の全院一致を以て之に關する建議案が可決せられた程である。吾人は政府が國民意志の唯一代表機關たる衆議院の此の決議を尊重して之を實現せんことを期待して居つた。否な今尙期待して居る、然る處過日の都下新聞紙上に陸軍某要路の談として陸海軍の共同反對意見なるものが掲げられて居た。陸海軍が共同であらうと、陸軍單獨であらうと、そんなことは意とするに足らない。陸海軍共同とすれば陸軍も海軍も共に國民の意志要望を無視するものとして等しく國民の怨府となるばかりである。紙上に現はれたる反對意見なるものを見るに、陸軍要路者の言としては、其の論旨あまりに貧弱で、あまりに不徹底で、到底吾人の首肯し能はざる處である。殊に多くの點に於て我

田引水の御都合論を見ることを甚だ遺憾とする、吾人は陸軍要路者の意見を直接聞いたものでないから、新聞紙の記事（六月二一日東京朝日新聞參照）を基礎として要路者の言に對する私見を述べて見たい。

世間では普通陸海軍大臣文官制と稱へて居るが、法規上より言へば現在に於ても既に陸海軍大臣は武官でなく文官である。陸海軍の名簿を見れば大臣及次官は文官の部に掲げてある。次少將（高等官第二等相當）たる次官が高等官一等に叙せられることとあるを見ても、文官たることが明らかである。唯軍人で文官を兼ねて居るに過ぎないのである。故に具體的に言へば陸海軍大臣文官制と云ふよりも、軍務大臣武官專任制廢止とでも云ふべきである。執筆上の便宜に從ひ玆には軍務大臣開放の文官を用ゐた。日本の陸海軍省官制に從へば大臣は陸海軍大中將を以て任ずる規定あるが爲め、大臣は名は文官と稱するも實は大中將に限られて居る。吾人の主張は此の「大中將に限る」と云ふ規定を廢止し、軍人非軍人を通じて適材を任用せよと云ふのである。

陸軍某要路者は反對意見の劈頭に於て

「陸海軍大臣文官制に關する論旨が動もすれば國家利益に立脚しないで或は机上の空論に趨り或は軍部惡さのあまり、所謂惜惡的の感情に流るゝのは誠に遺憾である。」

と語つてゐる。之は要路子の不誠意或は色眼鏡的の觀察である。今少し我執を去つて虛心坦懷ならんことを望むものである。吾人よりすれば文官制に反對する要路子の如きこそ、却て國家の利害に立脚しないで自家權勢に執着せるの觀がある。併し此の問題は要路子の言へる如く單に國防能力を支配する上に於てのみならず、國政運用上重大なる關係を有するが爲め我利私心を棄て公明正大なる國家心を以て愼重考究すべきである。徒らに軍事當局に於ても從來の如き我田引水的なる誤魔化し的態度を改め誠意を以て國民に說明して貰ひ度い。今日の國民は最早や某要路者の想像せるが如き程愚衆ではない。

要路子は

「陸海軍大臣は國務大臣であると同時に至尊統帥權の奉行者であるが故に統帥關係事項を奉行する場合には特種の地位に置かれてある」

と言つて居る。陸海軍大臣が國務大臣以外の特種地位に置かれてあるとは意味甚だ不明確で諒解し難い點である。而して陸海軍大臣のみが統帥權の奉行者であると云ふことは日本の憲法法律の何れの部にも規定されて居ない。唯内閣官制第七條に於て「事の軍機軍令に關するものは云々」の項目あるばかりで、之

とても統帥なる文字は一つも用ゐられて居ない。從ふて總理大臣は統帥權を奉行するを得ずと斷定することは出來ない。常識より考ふるも陸海軍大臣が奉行し得るものを内閣の首班者たる總理大臣が奉行し得ぬとすれば、是れ明らかに總理大臣に對する大權の不信任を意味するものである。併しながら此の問題は「統帥權とは何ぞや」と云ふことを決定すれば自然に解決せらるべき性質のものである。

次に要路子は

「我が憲法の精神に於て統帥關係事項は一般國務と區別し之を獨立せしめてある關係から之に關しては(陸海軍大臣は)國務大臣としての責任が無い事になつて居る」

と說いて居る、之が本問題を解決すべき最も重要なる關鍵である。抑も統帥權は果して一般國務以外に獨立してゐるものであるや否や、卽ち内閣所掌の政務に屬するや否やが議論の分岐點である。要路子が統帥權の獨立を唱ふる根據は恐らく憲法第十一條の「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」とある條項に存するものと思はれる。若し此の條項あるが爲めに統帥權ノ獨立を唱へ得るならば、憲法第十五條には「天皇ハ爵位勳章及其他ノ榮典ヲ授與ス」とあり、又第十六條には「天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ズ」とあるよりして、是等も亦恩賞權の獨立、赦免權の獨立により、一般國務と區別して總理大臣と雖ども與かり知らずして濟むことになる譯である。恩賞赦免に對して總理大臣すらも關知せず從ふて其の責に任ぜずとせば、抑も誰が其の責に任ずるものであるか。斯くの如き明らかに累を皇室に及ぼすものである。併し實際に於ては、憲法の條項上統帥權と同一の資格を有する恩賞赦免に關する條項は一般國務として内閣の所掌に屬して居るではないか。之を以て單に憲法の個條書のみを以て統帥權の獨立を唱ふるは根本に於て誤つて居る。寧ろ憲法の精神に反するものと云ふべきである。

然らば此の以外に統帥權の獨立を唱ふる根據は何處に在るか。是亦日本の憲法法律の何處を捜がしても斯くの如き規定の存することを發見しない。是に於てか軍事當局者は動もすれば統帥權の獨立は帝國古來の習慣であると稱へて居る。古來の習慣がどうあらうと、仕來りがどうあらうと、苟くも一たび憲法を制定發布せられたる以上は、憲法に反する習慣や仕來りは特に成文の規定あるもの丶外當然廢棄せらるべきものである。憲法布かれて已に三十餘年賢明なるべき陸軍要路者までが是等頑迷者の顰みに倣ふて今尙ほ臆面もなく、我國建國以來の文武並立の制度慣習を破る……など丶と云ふを聞くに至りては轉た悲哀を感ぜざるを得ない。

殊に要路子の言として驚くべきは、統帥關係事項に關しては陸海軍大臣は國務大臣としての責任が無いと云ふことである。之に依れば陸海軍大臣は半分は國務大臣で半分は國務大臣で無いと云ふことになる。憲法第五十五條には「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シテ其ノ責ニ任ズ」と明らかに規定せられ、統帥關係事項であらうが何であらうが總て悉く國務大臣として其の責に任ずるものが至當であると信じて疑はない。統帥權なるものを不合理に獨立せしめんとするが爲め、陸海軍大臣をして斯くの如き一身兩頭の化物たらしむるに至るものである。從ふて尼港事件の如き數百の同胞を兇刃に斃し而かも恬として恥ぢさる無責任行爲が現はれるのであると思ふ。

次に軍務大臣開放の方法としては、吾人は大體に於て要路子の掲げたる兩案即ち

第一條

陸海軍大臣が文官たると武官たるとに論なく、統帥事項に就きては飽迄國務上の責任を帶ばない事として陸海軍大臣任用範圍を擴張す

第二案

軍隊の指揮、作戰計畫と云ふ如き純軍事上の事項は參謀總長、軍令部長をして專行せしめ苟くも國務に關係ある統帥事項は、一般政務に屬せしめ帷幄上奏の制を廢す

の中第二案を主張するものである。之に對し要路子は「兩案共夫々の理由を有し又相當利益する處あるであらうが」と云へるは其卒直なる告白に對して敬意を表する。然るに要路子は更に語を繼いで「之が爲めに生ずる弊害は實に莫大なもので國家の爲めに大不利益であると斷言して憚らない」と云へるに至りては、斷じ方があまりに早計であると思ふ。要路子は其の理由として軍務大臣開放に伴ふ四個條の弊害と之に對する事例とを擧げて居る。而して弊害の第一としては

動もすれば統帥の獨立が完全に保たれないと云ふことである。即ち政務軍務混合の結果戰時迄も政畧と軍畧とが互に相錯綜し軍の統帥が不知不識の間に政畧の爲めに引き摺られ其の獨立の權能を失ふに至るのである。

と云つて居る。統帥は必ずしも現在我國に於けるが如く過度に而かも不條理に獨立せしめ置く必要は毫も認めない。策戰用兵の權さへ一般政務外に獨立して居れば平時は勿論戰時と雖ども戰爭遂行上少しも差支はないのである。政務と軍務との混合は制度の改廢に依つて之を避くることが出來る。現に歐米諸國に於ては立派に之を行つて居るではないか。次に國際關係が複雜となり戰爭が國民化するに從ひ、內外に對する政畧と軍畧と

の錯綜するは自然の産物で、如何なる制度と雖も之を免れることが出來ない。殊に外交政界に於て然りである。されば軍界の爲めに政界を犧牲にすべき場合もある代りに政界の爲めに軍界を犧牲にすべき場合も生ずるのであらう。斯かる場合に於て統帥の獨立を盾とし軍界の爲めに常に政界を犧牲に供する如きことあらば往々戰爭の大局を破壞し國家に大害を生ずる虞がある。國際關係錯綜の結果、今後の戰爭は軍界よりも寧ろ政界に重きを置くことが必要となるであらうと思はれる。此の點に關して吾人は要路子と全然正反對の憂慮を抱いて居るものである。要路子は普佛戰爭を例に引いて居るが同戰爭に於ては政界が軍界を禍したる形跡が無いでもない。併しながら之と反對に歐洲戰爭に於て獨逸は軍略の爲めに殆んど總ての政略を犧牲として而して敗れた。又要路子は統帥權の貴重なることを說く爲めに今回歐洲戰の初期に於ける戰敗に鑒みて英首相ロイドジョージ氏が「必要の前には英帝國の尊嚴も亦忍ばねばならぬ」と絕叫し、英陸軍の統帥權を佛主將フォッシュ將軍に委したのは破天荒の事で之が聯合軍戰捷の基礎であつた云々」と云つて居るが、歐洲戰爭中英國陸軍が佛國元帥に委ねる統帥權なるものは今日要路子の唱ふる如き廣汎なる統帥權にあらずして、唯單に戰場に於ける軍隊の指揮命令權に過ぎなかつたのである。青島戰に於ても英國艦隊は日本艦隊長官の指揮下に屬して居つたのであるから、此事は必ずしも破天荒と稱する程の出來事でもない。故に軍隊の指揮命令即ち作戰用兵に關する事は、統帥の統一を期する爲め之を戰爭専門の軍人の掌中に屬せしめ置くことは必要であるが、其の他の統帥事項は之を一般政務に繰り入れて差支ないのである。從ふて軍人のみに専屬せしめ置く必要はない。現在陸海軍兩省の所掌に屬する統帥事項の大部分は必ずしも軍人大臣を要しないのである。

第二の弊害として要路子は

政爭外に超然たるべき軍隊をして政黨的色彩を帶ばしむること

を擧げて居る。之は要路子の推想であるから辯駁する程の必要を認めないが、我が國現在政界の狀態より推せば幾分其の懸念が無いでもない。併し英米等に於ける實例に徵すれば軍人にあらざる軍部大臣を有する此等の國の軍隊が政黨化せることを聞かない。のみならず我が國に於ても二十萬の從業員を有する鐵道事務が政黨化したる形跡を認めない。故に此の問題は人其の當を得且つ國民の監視嚴なれば左程憂慮するには足らないと信ずる。夫よりも日本國民は今や寧ろ軍閥の跋扈に苦しんで居る。要路子は先年英國に於ける鐵道大同盟罷業の起つた際、

政府は陸海軍大臣の名を以て各軍管區司令官に向ひ、兵卒が罷業鎭定に應ずるであらうか否やを問ひ合はせたることを以て、軍隊の政爭的弊害の一端として說いて居る。英國に於ては同盟罷業は法律に依つて認められたる勞働者の權利である。國民が正當の權利を行使するに當り政府が猥りに國家の軍隊を以て暴力的に壓迫する如きは不法の甚だしきもので、軍事當局者が兵卒の意向を尋ねたるは當然である。之を以て直に軍隊の政黨化と云ふことは出來ない。流石に民意を重んずる英國政府の此の立憲的態度に對して敬服せざるを得ない。若し之が日本ならば何んなことをやるか判つたものじやない。

要路子の唱ふる第三の弊害は

「文官大臣は國防の充實を計る事が甚だ困難である。平時比較的不急な軍備を閑却して政黨自關係の方に重きを置くは人情の常である」

と云ふことである。隨分思ひ切つて人を馬鹿にした言葉である。人情論より云へば軍人大臣が國防充實の名の下に全然不要なる軍備を擴張したがるのも人情と云はねばならぬ。國民は軍人の此の人情の厚きに閉口して居るのである。現在とても軍事當局者は表面軍縮に贊意を表しながら裏面に於ては種々の手段を以て軍縮反對を田舍者に宣傳して居る。要路子が政黨弊の一例として引きたる某國に於ける要塞の彈藥が政黨の運動費に化して居たと云ふ不正事件は何れの國の事かは知らぬが、軍事上に於ける不正事件の最も多く行はれたるは軍閥の最も跋扈したる帝政時代の露國であることを忘れては困まる。軍閥の跋扈する或國に於ては隣國に對する陰謀費の出處が常に軍事官憲であることは世人の熟知せる處である。

第四の弊害として要路子

「陸軍に屬僚政治が出現することである。大臣は單に內閣や議會に對する辯護人たるに過ぎないので實際の事務は悉く屬僚に委すの外あるまい」

と云ひ、其の例として米國前陸軍卿ベーカー氏や露國前陸相ダチコフ氏等を擧げて居るが、陸軍大臣として歐洲大戰の難局を切り拔けたロイド、ジョージのあることを忘れて居る。併し日本の陸海軍の如く外國新聞の飜譯すらも秘密扱にせんとする國に於ては、一般國民（政治家を含む）に軍事知識の缺如せるは自然の結果で、或る期間は幾分屬僚政治の行はるることも止むを得ぬかも知れぬ。併しながら大山さんでも陸軍大臣が勤まり、西鄕さんでも海軍大臣が勤まりたるを思へば此の點も左程憂ゝるに足らないであらう。機關雜誌の賣高に依つて聯隊長や聯隊區司令官を考課する樣な賢明過ぎる大臣も却て困まるから。

之を要するに總ての改革には其の當初必ず多少の弊害と缺點の伴ふは免れない。吾人と雖ども軍部大臣を軍人以外に開放するを以て百利ありて一害なしとは言はない。併し此の改革を斷行するにあらざれば我が國には永久に立憲的政治を行ふことが出來ないのである。況んや利は害を償ふて餘りあるに於ておやである。陸海軍人が武官大臣專任制の要塞內に立籠つて同盟拒任を爲せば、如何なる人も內閣を組織若くは維持することは不可能である。陸海軍當局者にして眞に國防軍備の必要を思ふならば先づ國家を立憲的に打ち立てることを考へねばならぬ。立憲的なる全國民の後援と支持なき軍備や軍隊は砂上の樓閣と等しく强風一過すれば忽ち根本的に崩れて仕舞ふ。盲從的大和魂なを當にすべき時代ではない。

最後に要路子は

「我が國は矢張り傳統的の歷史を重んじ文武並立主義を執り專任武官制の現狀を維持するのが最良策である。」

と述べて居る。歷史は溫古知新の點に於て尊重すべきである。傳統は弊害なき範圍に於て保維すべきである。憲法の前には千年の歷史も傳統も三文の價値も無い。憲法よりも傳統的歷史が大切ならば我國の政治の如きも封建時代に引き戻すべきである。加之文武並立主義は理想としては善良の制度ならんも實際の政治としては、平時に在ては文武の權勢爭奪となり權力の割據となり、戰時難局に處すれば兩者の反目となり嫉視となるを免れない。現在我國に於ける二重外交の如きは疑もなく此の文武權勢爭奪の顯現に外ならないのである。ルーデンドルフの大戰回顧錄を讀めば、獨逸軍の衰敗期に於ける文武の反目軋轢が如何に大にして如何に戰局に禍せしかを窺ふことが出來る。一國の政治は武權に統一するか、文權に統一するか、何れか一方を擇ぶべきである。文武並立の如きは現代人間の性情を閑却したる机上の政論に過ぎずして、國政を圓滑に運用して國利民福を增進するの道で然ない。

國家より見る時は軍人は戰爭を行ふの爲めの技師である。之を鐵道に譬ふれば、某地より某地へ鐵道を敷設するに當り、停車場を何處に設けるとか、廣軌狹軌單線副線何れにするとかを決定するものは鐵道の政務である。技師は其の專門的技術の上より見て、能否利害の意見を述べることは素より必要である。併しながら技師自身が其の專門知識のみに立脚して、地方の[illegible]海的軍備等を考慮せず勝手に線路を決定する如きことあらば、其の鐵道は多くの場合に於て充分の能率を揚げることは出來ない。技師としての任務は線路の決定にあらずして、既に決定せられたる計畫を實施する爲め、地形其他を考査して線路は如何

に敷設すべきか、材料は如何なるものを使用すべきか等の點である。戰爭の技師たる軍人も亦、國家の政務として決定せられたる國防軍備の計畫に從ひ、如何に軍隊を編制すべきか、如何なる兵器を使用すべきか等の技術上の知識に依つて計畫軍備を最も有效に、最も高率に、實施運用すれば宜いのである。素より國防計畫を決定するに當り其の專門的知識に基づく意見を提示することは必要である。然るに我が國に於ては戰爭技師たる軍人が不合理なる統帥權の獨立や帷幄奏上權を振り廻はし、國防計畫の根本政務までも自家の掌中に壟斷し、以て國政の運用を阻害せんとする如きは許すべからざる不法と云ふべきである。

今回發表せられたる陸海軍の縮小計畫の如きは姑息彌縫無意義不徹底を極めたもので、議會を蔑視し國民を無視すること甚だしきものである。要路子の言と云ひ、軍縮計畫と云ひ、國民を代表すると云はるゝ議會は之に對して如何なる態度を取らんとするか。若し此儘泣き寢入とならば、議會も、國民も、軍閥に頭を蹴られ面に唾せられても恥とせざる無神經と云ふべきである。併しながら軍部大臣武官專任制の堅壁を打破するにあらざれば、國民も議會も此の屈辱より脫することは出來ない。

官吏の廢休を斷行して、因襲や慣習に捉はれざることを示したる加藤首相にして、更に大英斷を以て軍部大臣の開放を敢行せば、變態內閣、特權內閣、非立憲內閣の誹を償ひ罪を贖ふに足りるであらう。

（了）

エスペラントを中等學校に課するの議

井上萬壽藏

（一）

『最小の勞費を以て最大の效果を擧ぐ』と云ふ事は近代の獨逸の經濟學者が特に『經濟の本則』と呼んで說明する所であるが、此の原則は人類が發生以來知らず識らず踐行して所謂今日の文化なる物を建設するに至つた基礎たる心理作用であつて寧ろ人

間本然の性能とも呼ぶべき物であらう。啻に物質界に止らず精神的文化のあらゆる分野に於ても均しく右原則の支配を見る。本來の目的を遂げんが爲にする手段の犠牲の小なる事は目的の達成の促進であり、活動範圍の擴大である。犠牲の大なる事は能率の減退であり、屢々本來の目的を逸せしめる。

言語は手段である。表情の筋肉運動の外達意手段としては只間投詞のみを有してゐた原始人類がやがてことばを持ち口舌を以て自己を表現し耳を以て之を受け容れた。更に人間の欲望は進化して遂に對話のみによる達意を以て滿足せず、空間、時間を超越して自己表現をなさんが爲に文字を持ち、遠隔の地からの便りをゐながらにして讀み、今にして遼遠の古を知り得ることとなり、こゝに人間の表現手段たる言語は著しき發展を遂ぐると同時に人類の文化は之に伴つて永遠の完成に向つて一躍進を遂げた。人類の過去を有史前後で分けると云ふ事は即ち言語成立の前後で分つ事を意味し、その前代の悠久なる年月に比してその後代の人類の文化の速度の大を見るならば、手段たる言語の偉大なる功績を思はぬ譯にゆかぬ。

（二）

言語は上述の如く自己表現の手段であり、又他の表現を受け容れるに依る自己完成の手段である。言語の學習は言語學者の研究を除いては、何れも言語そのものを目的とするのではない。故にある言語の學習の價値は常にその言語の手段としての價値を以て計ることが出來る。

我國の初等普通教育はその勞費の大半を國語教育に傾けてゐる。南洋の委任統治地域の土人にまでむづかしい日本語を教ることの可否は別論として苟も日本人として日本に生きる爲には日本語を操ることは必須要件である。日本語を理解することは差し當り缺くべからざる生活手段である。從て國語教育の重大なる價値と使命とを否定することは出來ぬ。併し乍ら困難複雜を極めてゐる日本語なる手段のみに汲々たる初等教育は遂に可憐なる兒童の各種の能力を逼塞せしめ、その旺盛なる知識慾を搾取しては、漢字の一點一畫や假名遣の區別や候文體や古文體などの記憶に振り向ける。日本の兒童がむづかしい言葉に頭を惱めてゐる間に、歐米の兒童は廣い知識を吸收して個性の訓練陶冶に就き、本來の能力の發揮に向ふの餘裕がある。茲に重大なる教育問題があり、依て必然の勢として國民文化に對する障礙の解決を叫んで、漢字制限や、假名文字、羅馬字國字論等の運動が起つた。

併し教育界の言語上の難問は右に止らぬ。我國の中等普通教

育はその努力の過半を外國語殊に英語の爲に割いてゐる。手段の爲にする犧牲が學生を如何に無益に苦しめるかは初等教育に優るとも劣らぬ。義務教育を了へた者は科學方面の知識訓練は乏しいにしてもともかく新聞雜誌位は讀破出來る。處が中學を了へた者の外國語の知識はどうであらうか。本來中學に外國語を必修課目として課する理由は勿論自己完成の一手段を得せしめんが爲であることは中學校令施行規則第四條が「外國語ハ普通ノ英語、獨語又ハ佛語ヲ了解シ、且之ヲ運用スルノ能ヲ得シメ、兼テ智德ノ增進ニ資スルヲ以テ要旨トス」とあるに見て明である。併し乍ら中學五年間の學習の結果生半可な了解位が精々で運用は愚か日常の使用にも間に合はぬが多く、外國語による智德の增進などは思ひもよらぬ。生來非常な天稟を享けた者が、幸か不幸か他の多くの學習の爲の時間を割愛して專心努力し得た者が偶々新刊書を曲りなりに讀める位なものである。女學校の英語等に至つては罐詰を倒に置かずに濟む丈の效能しかないと云ふのは必しも酷評ではあるまい。かくて數千時間を費す手段の爲の努力は遂に目的に到達することなしに痛ましい徒勞に終つてゐる。全國四十餘萬の少年男女が中學校に於て外國語の學習の爲腦力を消耗し、疲れ切つて學校を出た揚句、高等程度の學校に入らうと思ふと否が應でも外國語の試驗を通過せねばならぬ。力を竭して縁もない餘所の國の言葉を覺え、不規則な發音や舊時代の無意義なる傳統に滿されたる不可思議な文法規則を諳誦するにあらざれば憧れの高等學府の扉は叩けども開かれぬ。禍なる男女學生が人眞似の鸚鵡の樣に外國人の口吻を似もつかぬ口つきで機械的に繰返しつゝ、結局は多くを役立たせずに終つて了ふべき目的を行手に認め乍ら尚も堪え難き重荷を强いられる目も當てられぬ悲慘を見るとき、我々はそゞろにかの希臘神話にあるコリント王シシフスが多くの罪の贖ひに大きな岩を險しい峯に轉がし上げねばならなかつたと云ふ浮ぶ瀨のない生涯を思ひ出さずに居られぬ。支那の傳說に山を移したと云ふ愚公の如く目的に到達し得るものは事實寥々たるものであると思ふ。

困難な手段に躊躇する結果は右の如くそれ自身の目的を逸する外、各人の本來の能力を蔽ひ、天才發揮の機會を奪つて了ふことも少くない。韓非子に『人皆寐則盲者不知、皆默則暗者不知』と云つてゐるのは立論法は逆であるが恰も我が國普通教育の一面を語つて遺憾なきものと云へよう。

以上は一般に外國語として論じたのであるが、中學校令の認むる外國語中實際課せられてゐるのは主として英語で獨佛語を課するものは極めて稀である。前號の拙稿論文に於ても我國の

英語崇拜の病膏肓に入つてゐることを指摘したが、子供でも英語と云ふことは知つて居り横文字さへ見れば英語と云ふ。ある名家の夫人が『私の娘は學校で佛蘭西の英語を習つてゐます』と云つたと云ふことは一つ話となつてゐるが、ある有名な國粹論者が帝展に入選した洋畫の中英語で署名し、英語で日附を書いた者が何人あると云ふ統計を取つたと云ふ話もある。鎌倉の某理髪店の看板に Headcutter とあつたと云ふ事は已に人口に膾炙した笑草であり、革具店の軒先に bug と書いてあるのを見て日本人に南京蟲の用途を尋ねた外國人もあると云ふ。英語國以外の外國人は日本に來るに先つて必ず英語を學んで置くと云ふがさもあるべき事である。我國の中等學校が現實に殆ど悉く英語を課してゐると云ふのも、一面現代のアングロサクソン文化の繁榮を語り英語國の政治上經濟上の優越を語る外、實に上述の我國の病癖たる英語萬能主義の沿革に基くのである。而もその英語萬能主義の由來は啻に日本の鎖國の扉を最初に叩いた者が英語國民であつたと云ふ樣な偶然のみでなく、明治前半に我國各地に於て經濟的勢力を扶植した者が多く進取的な英人であり、領事裁判の憂き目を脱せんが爲の條約改正の準備として普及せられた歐化想は專ら英語宣傳に努め、果は民衆を指導すべき爲政者までが、『國語廢止、英語採用策』を企みるにさへ至つたと云ふ冷汗の出る樣な歷史を回顧すれば、今日尚隱然を依つて人心を支配してゐる英語崇拜熱に頷けるのである。新しい詩と稱するものが漢字の側に見當違の片假名を振らねば氣が利かぬ樣に見えたり、代議士の演說中アクセント違ひの英語を濫發される聞き辛さに『日本語で願ひます』等と注意するのは尙野暮の骨頂とせられるのも無理はない。かくして我國の青年學生は明けても暮れても外國語殊に英語に大切な頭惱を疲らす樣に運命づけられてゐるのである。

(三)

我國教育界の暗礁の一が國語問題であり一が外國語問題であり、二者共に我國文化の針路に横はる大障礙なることを右に述べた。然るに前者は近年之を憂慮する者も多く、世間も相當に注目し初めた樣であるが、外國語問題に至つては均しく見逃すべからざる難問であり、均しく急を要する事案であり乍ら、一般世間は恰も必然の運命なるかの如く冷かに構へて問題にしようともせぬ。それは餘りに無責任な諦めの態度であり、餘りに不親切な等閑である。

論するにその人多き國語問題は姑く別論として我々は玆に我國の外國語問題の解決策として國際語エスペラントを提唱せさ

るを得ぬ。抑も國際語は、外國語問題に惱み來つた我國の如き國に於てこそ發案唱道すべきものであつた。併し外國語陶酔の我國にはその勇敢は望むべくもなかつた間に、かのケンブリッヂ大學の博言博士マイヤー教授が『二十世紀のコロンブスなり』とまで激賞したザメンホフ博士の驚くべき犠牲と勇敢とによつて完全な國際語が發案公表せられてより三十五年、その間時代の先驅者が血の滲む樣な奮鬪を續けた結果、今やその實際上の效用が遺憾なく裏書さるゝに至つた。他の方面は暫く措き本問題に關係ある教育方面に就て見てもエスペラントを諸公立學校に必修又は隨意の科目として課して居る國は英獨佛を初め伊、露、瑞、チエツクブルガリヤ等頗る多く、殊に本來優勢なる國語の持主たる英佛二國が教育方面に於て夙に國際語を唱道し自國語は自國人のものであつて國外に強ゆべきものでなく國際關係に於ては專らエスペラントを用ふべき事を主唱して居るといふ一事は國際聯盟の本年九月の總會が『全世界人民間の直接理解を容易ならしむる目的を以て國際補助語エスペラントを各國公立學校に於て教授すること』の提案を討議する機運に臨み乍ら、尙英語萬能の夢を見てゐる近眼なる東方の一强國の國民が頂門の一針として大いに注目すべき點であらう。最近帝大エスペラント會の發議により都下十四の學生エスペラント會を糾合して東京學生エスペラント聯盟の設立を見た事はやゝ人意を强うするに足るが、國民全體として尙無關心と冷淡の態度を見るのは遺憾である。

玆に此の問題に就いて特筆せねばならぬ事は去る四月十八日より二十日まで瑞西ジエネヴア國際聯盟事務局に於て開かれたる『學校に於けるエスペラントの採用に關する國際會議』である。右は二十八箇國より代表九十八名が參集し、並に國際聯盟國際勞働局赤十字同盟、その他二十五の重要なる團體（主として國際團體）が公に代表せられ、會議に於ては各國に於けるエスペラント教授の實驗に基いて多くの報告や決議がなされた。我が外務省より代表として宇佐美事務官、日本エスペラント學會の代表として河西事務官文部省への報告を委託されたる藤澤聯盟書記官が出席した。澤柳博士及び下村文部書記官は聯盟事務次長新渡戸博士に書を寄せて會議に對して何分の援助を請ふ所があつたと云ふ。特記すべきは右會議は公用語として一切エスペラントを用ひた事で、我が代表のエスペラントによる引け目なき應酬は多くの出席者にエスペラントの優秀と國際語として難點なきことの深き感銘を與へたと云ふ。右會議の内容に就て詳細に論述する遑がないが、チエツクスロヴアキア國代表カマリト博士の感想の一節に『多くの國々に於て少年男女に

エスペラントを教授した成績の報告を綜合するにエスペラントの平易と云ふことは決して誇張的浮說ではないと云ふ事が確證せられた。』と云ひ又『エスペラントの學習が母國語外國語、古典語等の學習、地理、外國歷史の研究等に裨益する點に就ても出席者は多くの事實の前に成程と頷けた』と誌してゐる。議事錄によれば二日目の教授法に關する討議に當つて獨逸代表ディーテルレ博士の報告に十二歲乃至十三歲の學童が最初一年一週に二時間、翌年一週一時間の學習で完全な成績を擧げ得た事を述べ、殊に面白い事は倫敦のパットラー氏が同日、學童の年齡に關する討議に當つて、彼自身の子供等が生れ落ちるとから何れもエスペラントでばかり教育したに拘らず、就學後英語を學ぶや彼等は揃つて皆首席を占めたと云ふ興味ある經驗を物語つた

右會議に於てなされた決議の中特に重要なのは二十日に可決した英國エスペラント協會の提案に係る『全世界の教育者に對する宣言』である。左に全文を譯出しよう。

『吾人二十八箇國の教育者並びに十六箇國政府の公の代表者はジェネヴァに於ける國際聯盟事務局に參集し人類の理智に光明を與ふべき事業の協力者に友情を以て挨拶す。

吾人はこの文化世界を蔽ふ遺憾なる現況の根柢は民と民とを切り離すかの無諒解と不信とに存することを確信す。

吾人はこの不幸に對する唯一の有效なる救濟策は國際聯盟が實現を期する人類心養成と國際近接主義の實現とにありと確信す。

吾人は國際補助語エスペラントを以て世界改造問題の解決に對する最も價値ある貢獻の一なるを思ひ、そが凡ての文化國に於て各國民の自然語の傍に教育綱目の一をなさざるべからざることを確信す。

吾人は諸君に各國に於けるエスペラント教育の經驗を勸告せんと欲す。

吾人はエスペラントは言語を必要とするあらゆる演述記述の目的の爲めの實際的使用に充分適當するのみならず、教育材料として同語の價値を證する幾多の注意すべき特質を具ふることを確證せり。

同語は母國語の正確なる使用に裨益するの價値あり。そは母國語の發音の美化し、語辭選擇法の進步し、語義の觀念の的確となり、文法上の原則の理解の明晰となれる事に照して明なりとす。

エスペラントは近代語、古典語の學習を容易ならしめ授業時間を節約せしめ、文法形式を明瞭にし、共通的語幹を供給し學童の理智をして數ヶ國語を以て表意することに習熟せしめ各種

語學の習得を促進す。

吾人の見る所によれば、エスペラントは兒童に對し、母國語に次いで第一に敎授すべきものにして初年級の課程に編入すべきものとす。エスペラントは早く敎育を離るゝの已むなき學童にも實用に供し得べき第二語の完全なる知識を與ふべく、進んで上級敎育を受くる者には他の語學習得の能力を賦與し、之が爲理智の豫備的訓練を供すること多大なり。從つて時間の節約を來し、以て語學習得の促進を容易ならしめ、或は生來語學に適せざるものは餘力を他の適當なる學課に注ぐを得べし。

エスペラントの知識は吾人の學童に對し地理、世界歴史進んでは更に倫理敎育に於ても、より確實なる知識と趣味とを呼び起し、外國々民及びその風習、文學美術等に對しより大なるより同情ある興味を覺えしめることを確證せり。エスペラントは兒童に全世界平和の思想を養成し、彼等に國際聯盟の理想の感銘を愈々深からしむ、この一事は殊に國を異にする兒童間の手紙、繪葉書、圖畫等の交換により、又エスペラントの國際的刊行物を讀む事により、又外國の文學を研究することによりて實現せらる。數月の學習の後には既に通信し得べく、この多數國間の通信による道德上の效果は多大なるべし。

一週二時間の課業により學童は一年間にして、他の語學に於て三年を費すも尚到底得られざるべき實用的知識を獲得することを得。

吾人はこの宣言に對する諸君の愼重な考慮を請ひ、諸君の國に於てエスペラントの敎授を、啻に商業、科學その他國際活動の各分野に於ける實用の爲のみならず、又以て國際聯盟の眞の目的たる世界民族の友誼的交渉を誘導する具としての道德的の爲に促進に努力せられん事を衷心より慫慂す。

右宣言は從來各國に於てなされたる多くの實驗に根據してエスペラントの敎育上の效用を最も要領よくまとめて吾人に確信を與ふるものである。故に右を以て大體の諒解を得られたくエスペラント史上に有名なる一九一六年乃至一七年に試みられたEccles-Eksperimento や我國成蹊中學に於ける經驗やその他の興味ある實驗を數字によつて一々紹介するの煩を省き結論に急ぎたい。

(四)

上述の國際會議の結果はエスペラントに對するあらゆる反駁をして沈默せしむるの力を持つてゐる。尚來るべき國際聯盟總會に於ける討議に就ても、偶々現實の國際聯盟が或は案外信頼すべきものでなく一二强國の傀儡に過ぎぬと見る者があるとせ

ば、尚更その様な國際聯盟が敢て弱小國にも平等の權利を擔保する結果となる所のエスペラント教育と云ふ事を決議するに至つたと云ふ事自身が注目すべき事でもあり、又喜ぶべき事でもありはせぬか。

聯盟總會の決議通過はもとより我々が切望して已まない所であるが、右決議の如何に拘らず、我が國民はこの問題に就て準備する所あるべきである。我國無數の學生が從來惱みに惱んだ外國語問題といふ一大障礙の解決策が今や完全なる審議を經て我々の眼前に提供せられてゐるのである。

前述の宣言によつても明なるごとくエスペラントを我が普通教育の課目に編するならば、次の如き效用があること疑ない。

(一)、平易なる第二語によつて世界の文化を吸收出來る。若し英語のみを學習せしむるときは偶天才があつても尚アングロサクソンの文化を覗く事しか出來ぬ。英語を通じて見る他の諸國の文化は皆英化せられて眼に映じその本來の色調を傳へることは出來ぬ。中立語たるエスペラントは特種の色彩を持つて居らぬ爲、各本國の色調を最も自由に傳へる特色を持つてゐる。世界の各民族に直接の親みを持ち國際心養成に資することも亦此の特色あるが故に可能なのである。

(二)、言語の組織に關する根本觀念を養成する效能がある。我々の友人にもエスペラントを始めて漸く日本語の文法がよく解つたと云つてゐるものが少くない。殊に近代語學習には有益なる準備となり、假に國際語の外、尚或る一民族を專門に研究せんが爲に特定の國の國語を學習する場合に當つても非常なる效果を奏することに就ては我々の仲間にも既に多くの體驗者がある。

(三)、思想發表手段として最も容易な物である。我國の科學者が自己の研究發表等の結果を報ずる論文を日本語で書いては世界に問ふ譯にもゆかぬので已むなく六かしい歐洲語で書く爲に論文作成のみに莫大の時を費し結局發表が後れて折角の研究をフイにして了ふ事も少なくないと云ふ。エスペラントを普通教育に課すると云ふ事は我が國民が自己を世界に發表する爲の最も便宜な手段を與へる事であり、延ては日本文化を正當に海外に紹介し國際融和の一助にも資することになる。

右は主なる三點を擧げたのみであるが、此丈で見てもエスペラントを教育に採用することの必要とその必要の緊急なることは明であらう。殊に海外に於けるエスペラントの現況を聞いては今卽時に採用するも尚且つ遲きを嘆ずるのである。

只玆に一應注意すべき事は、エスペラントは平易なりとは云

へ、歐米諸國と全く同樣の條件の下に扱ふことは出來ぬ。語彙文體等の習熟には相當の努力を必要とすることは云ふまでもない。但し文法の柢性が日本人に取りて頗る理解し易きことは前號の論文に於て述ぶる如くである。

以下に平易の程度に就て二三の實例を揭げて參考に供する。その一は昨年春東京市外の千駄ヶ谷の文化青年團主催の下にエスペラント講習會が催され、自分も招かれて講師となつたが、二組を設けてその一には外國語の素養の全然ない者を集めた。一週二時間三ヶ月繼續したのであるが講習の終りにはかなりの讀解力を得たのみならず、その中の一人は日比谷公園で不圖出遇つた自分に向つてエスペラントで話し掛けた。その後數日の中に彼はエスペラントの會合に出席して自由に理解もし語りもするに至つたのである。その二は新聞の記事にも表れたから注意深い讀者の記憶には新であらうと思ふが、本年二月より三ヶ月中央勞働學院と云ふ純粹なる筋肉勞働者の學校に於てエスペラント科を設け一週一時間エスペラント學會の小坂狷二氏が苦辛して敎授したところ三ヶ月後の卒業式には右講習の參加者を代表して一勞働者はエスペラントで祝辭を述べた。これも驚くべき挿話である。尙その三として成蹊中學の二年生以上の有志に敎へた經驗を聞くに、文法の活用が非常に速に進步し、類推の能力が愉快な程發揮されると云ふ。トルストイ物の飜譯などは容易に且つ正確に理解し、敎授開始後數時間後に課した宿題が殆ど文法上の誤なき成蹟であり、殊に講習生が遺失したエスペラント書きの手紙の文體の美しさは偶にそれを拾得した講師を驚喜せしめたと云ふ。尙同じく中學生の講習としては最近順天中學生の有志者數十名が每週四時間一箇月の課業で皆相當のエスペランテイストになり果せたとは講師の語る所である。最後にその四として自分の友人で已に英獨佛を相當習得した者がエスペラント講習に始めて出席した即日、二時間の講義の後に自分にエスペラントで葉書を書いてよこしたが、誤僅か二三に過ぎなかつたのに驚いた。以上の僅かな實例によつつて豫備知識の程度によつて段階はあるが、併し日本人に取つてもエスペラントは豫想外に容易なものであると云ふ事を示し得たと思ふ。

（五）

エスペラントの平易と敎育上の效用とが右の如くでありとすればその本來の性質と考へ合せれば、普通敎育に於ては國語の外には言語としてはエスペラントのみを課し他の語學に有志者の隨意に放任すれば十分である譯であり理想としては正にさうなくてはならぬ。又外國に於ては中等學校の外に小學校に之を

課するのが普通であり、我國に於ても結局はその程度に到達することを急がねばならぬ。併し自分は今こゝに直ちに行ひ得べき、過渡期に相應な一實行案を掲げて見たい。それは中學校並びに高等小學校の一年二年に於てエスペラントのみを課し三年以上に於ては他の外國語を課するのである。二年間を充分に用ひてエスペラントを教授するならば二年間の後には完全に習得せらるゝこと疑なく、その後三年間に學ぶ他の外國語の成績が從來の五年間學習の結果よりも優秀なるべきは英國小學校に於て夙に行はれた古典語教育に對するエスペラントの效果の實驗によつても想像し得ると思ふ。尚右の結論を確める爲に小坂工學士の例を掲げるならば、同氏は幼年學校を病氣で退學後僅か一年間英語を學習したのみで第一高等學校に入學し得たのみならず、入學後も英語の成績拔群であつて屢先生をやり込めた事さへあると云ふがその然る所以のものは同氏がその以前にエスペラントを習得してゐた御蔭であることは同氏の告白する所である。而して二年間に習得されたエスペラントの知識は其後の充分の活用によつて益々完成され、かの中學令に所謂『兼テ知徳ノ增進ニ資スル』こと偉大なるものあるを信ずる。

エスペラントの教師の需要を滿すが爲めには英語等の外國語の教師を數週の研究と一定の檢定とによつて兼任せしめ或は專任せしむることの可能なることは外國の實驗例が語つてゐる。

旺盛なる知識慾と洋々として蒼海の如き希望とを懷いて初めて中等學校の門を潜る少年等の嚮ける目は新なる知識の吸收によつて自己を完成せんとする抱負に燃えてゐる。その抱負を、その希望を、あのどう考へても不合理な、英文法なる不規則を極めた怪物で幻滅に陥れることは餘りに無殘である。I am かと思ふと you are であり he is であり man の複數が men かと思ふと child の複數は children であると云ふ樣な事があの換へ難い記憶力に蝕んで行く事は堪えられぬ事であらねばならぬ、あの彈力ある頭腦をこの平易にして美しい、合理的にして效用莫大なるエスペラントで訓練するとが、如何に有意義であり即時に實行すべき急務であるかは論理上必然の歸結である。

かくの如くにしてかの經濟の本則に適ひ、以て教育上の一大障礙を除き得て、一には文化のより健全なる發達に寄與し二には外に我が文化を正當に理解せしむるの理想、延ては國際間の隔意なき諒解の理想に一歩を進むるを得るものと云はねばならぬ。——尚エスペラントの一般的現況については前號のを參照ありたい——

(大正十一、七、稿)

銷夏の好讀物

夏目漱石の傑作を讀まずや!!

■吾輩は猫である（縮刷）

八拾壹版

袖珍函入
洋裝布製
定價金貳圓
書留送料十八錢

此の小説は一代の文豪夏目氏の代表的傑作で此れを讀まないでは日本の文壇を語る資格がないと言はれるまで有名になつてゐる作です

■漾虚集（縮刷）

八版

袖珍函入
洋裝厚表製
定價金壹圓五拾錢
書留送料十三錢

收める所、倫敦塔、カーライル博物館、幻影の盾、琴のそら音、一夜、薤露行、趣味の遺傳等主として中央公論で發表したものを蒐めてゐる

■文學論（縮刷）

拾參版

袖珍函入
洋裝布製
定價金貳圓廿錢
書留送料十八錢

漱石氏が帝大文科生に二年間講述したもので悉く氏獨特の科學的偉大なる思索に成れるものである 文學愛好者よ來つて聞け！

■行人（縮刷）

拾七版

袖珍函入
洋裝布製
定價金壹圓八拾錢
書留送料十八錢

收める所、友達、兄、歸つてから、塵勞の四篇、最文學的趣味に滿ち〳〵て讀んで行く中に流石一代の文豪を髣髴せしめるものがある

東京日本橋通一丁目角
大倉書店
振替東京二二八番
電話本局二四〇四・廿一四番



趣味眼に映ずる朝鮮

黒頭巾

其一

◉五月十九夕、星、明らかにして、月、無し。吾輩ひとり飄然として、新羅丸に搭じ、關門海峽を解纜して、游鮮の途に上る。莫逆の諸友、送つて岸頭に立てり。

◉海峽、右は下關、左は門司、大里より北九州一帶の都市、兩岸の都市、相擁して海に臨み、岸上の電燈、たとへば千萬顆の眞珠を散して、光明に映發せしめたらんがごとし。燦光、森然として、行く者、送る者の顏色を浮べ出して、碧波に照らさしむ。

◉汽笛、長鳴して、船、そぞろに岸を遠ざかりゆく。行く者は欄干に倚り、送る者は、埠頭につまだてて、相呼び、相應じて萬頃の波光、動搖し、千萬顆の眞珠、悉く閃めき輝やく。

◉海峽は、島山、四周して、忽ち見れば、畵かれたる山中の湖のごとし。夜、おぼろにして、山影、帆影、べて淡墨を撥するに似たり、天には無數の星を鏤ばめ、海には千萬の光を點じ滿幅の光明乾坤、恰も海底の龍宮を波上に移すに異ならず。かくの如き佳絶の光景、まぼろしにあらず。却つて、吾生は、これ夢なるかと疑ふ。

◉朝鮮人の海游記に、海峽の印象を記して、かくの如き絶景をば、緑頂の小兒と、黒齒の娘とに耦坐せしめて抹殺し盡すは、造物者、果して何の意ぞと、いへり。緑頂は、おけし頭、黒齒

は、おはぐろを染めたるなり。吾輩、甲板に立ちて、波上の龍宮を眺めつつ、此の一節を思ひ出して微笑す。

●日本に於ける、朝鮮人の、修好紀行の傑作は、此の海游記なり。著者は申青川、二百年前、一代の文人なり。彼を、二百年後に再生して、今の海峡を見せしめば、果して奈何の感をなすべき。

●今、それ一葉の小舟に駕し、滄溟を凌ぎ、遠く異國に來りて計らず、此の佳絶の光景に逢着するに及んで、多感、多恨の文人、愛著、措く能はざるもの、また宜なりといふべし。而して當年、彼は上國にして、我はいわゆる蠻夷なり。彼が、この好風景を、緑頂兒黒齒娘に委し去るを惜み、これを以て、興趣、湧くことかぎりなし。申青川が海游記に、油の乗りたるは、海峡の好風景、先づ、その詩情を皷舞したるに由らずんばあらず。

【其二】

●早曉、目覺む。船窓より望めば、右に、島嶼、汀々、曉光に浮ぶ。急に甲板に上る。天晴、海濶、一碧萬里、朝鮮の山、すでに眼前にあり。島は釜山の五六島なり。すでにして船、悠然として、絶影島の右を過ぎ、釜山港に入る。

●棧橋に立ちて、吾輩の名を呼ぶ者あり、鳩谷韓陽、新知の操觚者なり。吾輩生來、初めて、朝鮮に來りて、釜山の好風景を觀、初めて斯人を識る。故に、特に、その名を標出して記念となす。

●海游記、三宅緝明、申青川を訪ふ。緝明は滄溟と號す。滄溟は李于鱗の號、于鱗當代の文壇を風靡す。青川問ふ、君、登于鱗を慕ひて、かく名づけたるか。緝明答ふ、僕、豈、滄溟を慕はんや。滄溟を渡つて來れる者を慕ふのみと。一時の機才、青川を驚かす。

●當年、實に、小舟に乗つて、滄溟を渡るの艱危、想像するに餘あり。滄溟を渡るといふそれだけにて、すでに欣慕するに足る。今、關釜の連絡船、僅かに十時間、夜航、一睡の間に、滄溟去つて青山來る。吾輩、游鮮の志、すでに十年、今に於て、好機漸く來るといへども、此に至つて、早く、滄溟を渡らざりしを悔ゆるの情、無き能はず。

●釜山の港灣、雄大の形勢あり、絶影島の翠光、嚴島よりも美なり。從來、朝鮮を論ずるもの、禿山を説くのみにして、風景美に及ぼさず、金剛山を説くといへども、釜山港を言はず。東亞の貿易上に於ける釜山の地位、多くいふを要せず。その風景美、世人、却つて知らさるなり。

●吾輩、朝鮮に入る、趣味の第一印象は、その好風景にあり。

釜山に次ぐに洛東江來る。白衣の人、青山に映ずるも亦た興趣を引く。白衣の清味は、薄暮にあり。暮色、山野に滿つるころ、白衣の人、牛を逐ふて、暮靄のうちを行く。畫趣を以てすれば、朝鮮は、水彩畫の國、暮靄の白衣は、須らく胡粉を以て點出すべし。

◉朝、釜山を發して、夕に京城に入る。その間、山川、草木、見るもの、聞くもの、一として感興を引かざるはなし。洛東江と別るるの後青山、盡きて、禿山來る。

◉京城に逗留すること僅に二日、概ね、その山川を觀て、その人物を見ず。廿二夜半、出發して北行し、廿三曉、平壤に著る。觀光一泊、翌曉、去つて新義州に向ふ。新義州より義州に至り更に、鴨綠江に沿ふて上ること十一里、淸城鎭より江を渡つて長甸河口に至る。その夜、義州に宿し、翌日、再び江を過ぎて安東縣に至り、暮風に、新義州を發して、南下し、開城に至る。

◉開城に遊ぶこと一日、暮に發して、京城を過ぐ。南大門驛に親戚諸友、多く送り來る。此行、極めて、匆忙、日程、また頗る多し。而して行程、往くに夜行するところは、返るに晝行し、海の曉に、その正面より見たる釜山を、山の曉に、その背後より觀る。

其三

◉海峽より一夜にして、釜山に往くを得るを見れば、本土の人朝鮮を以て、別莊と爲すを妨げず、況んや風趣の富、彼の如きあり。心機、爲に一轉して、以て、互に、趣味を養ふを得べし。

◉朝鮮の左を表とし、右を裏とすれば、裏は金剛山に至り、表は鴨綠江に至り、ともに山水の大觀を致す。裏に山多く、表には川多し。山、概ね奇、川は皆、美くし。而して古來、半島の命脈、その表に存し、盛衰の機、悉く表にあり。

◉箕子は邈焉たり。平壤は箕城と稱し、箕子の廟、なほ存すれども、その事、未だ徴すべきなし。樂浪郡の後、高句麗あり、三韓あり、高麗、始めて半島を統一して、次ぐに李朝を以てす、今、京城に至るまで、首府は、みな表にあり。朝鮮の左は、その顔にして、右は、その背なり。金剛山は、その脊中にありしが故に、久しく著はれず。

◉表朝鮮を一貫するものは、鐵道あり。鐵道に沿ふてポプラあり。釜山より鴨綠江に至るまで。ポプラの綠、南より北に、一線に續く。或は、朝鮮をポプラの國といふ。譬へば、顏に髭あるが如し。ポプラは髭なり。

◉鐵道を離れてポプラなし。ポプラの栽培を宣傳したるものは鐵道なり。趣味より見れば、ポプラは、半島に於ける文明の軌道ならずんばあらず。

◉ポプラに伴れてアカシヤあり。ポプラは絲の如く、アカシヤの白花、その流蘇なり。釜山にて、アカシヤの花、その盛りを過ぎ、新義州にては、未だ、その蕾なし。朝鮮の緯度は、アカシヤの花に描かる。

◉扶餘、慶州よりして、漢陽、開城、それより平壤に及ぶ。古文明の點線を綴るものは、今の鐵道なり。鐵道は新文明を將來す。古文明と、新文明と、あざなへる繩のように、裏朝鮮に、縦に、浮ぶ。

◉朝鮮の山、すでに禿す。古文明は、禿山に留まり、新文明はポプラ、アカシヤの蔭に培はれつつあり。古文明を宣揚するの鍵は、發掘によりて開かれ、新文明を鼓舞するの鍵は、移植によりて解かるべし。

◉半島の歴史は、表朝鮮にあり。高麗燒も、人蔘も、古佛像もみな表朝鮮にあり。學問、人物、また皆、表より出づ。鄭夢周も、李退溪も、李舜臣も皆、表の人なり。裏には唯だ金剛山あり。古朝鮮の文化は表に存し新半島の趣味は、金剛山に活く。

◉半島の五千年、その地理的形勢は、自から事大主義を訓致せずんばあらず。事大主義の雰圍氣のうちに、雄傑の象徴あるべきなし。此の如き世の中に、金剛山は出現せず。金剛山は、超然として、裏朝鮮に隠くれ、巍々、堂々として、事大主義を默笑しつつありしなり。

其四

◉洋々たる鴨綠江の水、大陸勢力の侵入を防ぐに足らず。事大主義の雰圍氣、半島に磅礴すること五千年。その雰圍氣の濃厚を加うるに隨ひ、首府、北より南に移る。

◉首府の南移は、半島が、大陸に壓迫されたることを象徴する事實なり。故に、その南移するごとに、首府の形象、漸く雄大を缺くに至る。

◉平壤は、大同江に據り、廣野を控え、遙に黄海に臨み、北より南を制す。平壤には、やや東京の氣分あり。漢陽には京都の氣分あり。

◉開城は、奈良に比すべくして、一種、特立の氣象あり。麗朝の大祖、初めて半島を統一す、有爲の氣分、なほ存するもか。慶州、扶餘は、古美術の都として知らる、寧ろ奈良に比すべし。

◉開城は、藝術を以て立つこと、江州商人に對照すべし。故に

頑固にして、堅忍、自から守つて屈せず。李朝五百年、その國初以來、開城人の懐柔には、努力せしと見ゆ。

●吾輩早曉開城に下車すれば、大なる笠に白き被布を垂れたる婦人の姿、朝霧に浮びて見ゆ。男は、大笠を、女は笠端に被布を垂るるは、五百年來の風習、蓋し喪服なり。高麗朝の滅亡の爲に、彼等は、喪に服し、李朝を謳歌せず。生産を獎勵して、獨立自營の勢を張る。半島のうちにて、開城人、恐らくは尤も頑强なるべし。最近、二三年前、男の大笠を廢し、婦人のみ、なほ被布を垂るること、日本の昔繪を見る心地す。

●高麗朝の亡ぶるや、名臣、鄭夢周あり。杜門洞あり、遺臣七十餘人、洞を杜いで李朝に服せず。開城に名節の遺蹟少からず、開城人の頑强は愛すべし。

●然れども、開城人、能く、その頑强を維持するを得るは、生産力あればなり。陶淵明は大節の士、歸去來辭を賦し、悠々として、滿天下の詠嘆に超越するを得たるは、五畝の田園ありたればなり。

●吾輩開城に來りて、端無く、水戸學を想起す。水戸學の盛時圃隱集、未だ日本に來らず、圃隱集は、鄭夢周の遺稿、その百死歌、萬世に朽ちず、義公をして讀ましめば、必らず石に勒して、碑を建てしならん。水戸は、名節の樂府なりしも、生産力を缺く、開城の今日あるを想へば、水戸のために惜まずんばあらず。

●開城、南大門の樓上に大梵鐘あり。高麗朝の末期、元人の名工の鑄造するところ、元と演福寺にありしを、移して此に置く。元式の銅鐘として、代表作たるを失はず。

●此の鐘と、慶州鐘閣の鐘、廣州、鍾閣の鐘、及び京城に於ける東本願寺出張所の鐘と、合せて、朝鮮の四名鐘となすといふ慶州のは、支那、唐代、古美術の模倣、鐘肩の線、優美に垂れこれは塞外れ、剛健の氣象あらはれ、鐘肩、强く張つて、力の象徴を示す。半島古美術の痛快なるものの一とす

●此の巨鐘に、好談柄あり。その一面に、皇帝萬歲と彫り、他の一面に、國王千秋と彫れり。皇帝は元の皇帝にして、國王は勿論、朝鮮王なり。萬歲と千秋との二語に、大陸と半島との、政治的關係の、一切の意味、おもしろく趣味的に表現さる。

其五

●事大主義は、偉大の精神の標なり。偉大の精神は、形式的の氣風を生む。事大者が則ち、偉大者なるは、むかしの事大的の嫁の理想は、偉大なる姑たるにありしと同じ。此の如き、家庭の雰圍氣は、一切、凡べて形式的ならずんばあらず。されば、古朝鮮の事大主義を裏付けるものは偉大の精神なり。

◉尊大の精神を象徴するものは、建築、坐臥、禮法、その他、一切の社會的事象にあらはる。古朝鮮の遺風は、尊大の精神なり。實力を自覺せざりしが故なり。されば、朝鮮人の日本に於ける修好紀行には、すべて、此の意味あり。

◉支那は、文明の先進國にして、その周圍には、後進國ばかりなりし故に、尊大、自負の氣習、夙に、國民性となれり、古朝鮮も、また支那に接近して、その氣習に傳染したりしことも疑無し。

◉半島に於ける事大主義の對象は、最近、五十年に至つて、目まぐるしきほどの變遷をなせり。支那、露西亞、續いて米國に至る。今日不逞鮮人といふは、米國の勢力に事大するものなり。

◉米國の幻影は、大きく半島にひろがる。吾輩の經歷するところ、京城に、開城に、及び平壤に赤煉瓦の美觀は、概ね外國人にして、その大部分は、米國人なり。

◉英米人の勢力は、基督教の布教に由つて、併せて宣傳さる。朝鮮に於ける基督教の播布は、約百五十年來の事に屬し、その初は、日本に於けると同じく、漢譯に依つて、支那より輸入したり。

◉基督教は、當時、半島の學者に尊信せられて、流布するに至りしも、それが祖先禮拜を禁ずるの宗教たるを知るに及び、政府は、極力、漢譯書の輸入を禁じ、その布教を禁遏したること、維新前に於ける日本と同じ。

◉基督教が、朝鮮と支那との間の問題に留まりし時は、なほ簡單なる問題なりしも、半島が、世界的空氣に觸るるに及んで、此の問題は頗る複雜となれり。若し、半島に於ける、今日までの、基督教の發達の歷史を、各方面より研究せば、趣味多き信仰史を得べし。

◉半島に於て、百五十年前、卒然として、儒者が、基督教に共鳴したるは、教義が易簡にして、眞摯なればなるべし。大陸及び半島の儒教、佛教ともに易簡の道を失ひ、人心の根柢に於ける權威にあらざりし。人心、實は、新らしき易簡の教に饑えたるとき、偶、基督教、五月雨の一夜の月光の如くに、流入したりしなるべし。

◉若し、釋迦、基督自から來りて、布教せしならば、問題は、唯だ、專ら性靈の上にのみ有るべし。然れども、いろ／＼の國の宣教師、入り來りて、その後光に、本國の勢力、光かるときは、信仰問題の、影響するところ、政治的色彩を帶びずして已むべきにあらず。

◉平壤に、基督教迫害紀念碑あり。大院君は、その豪放なる性格の力に任かせて、基督教を迫害したり。これ、その記念の一

なり。大院君が基督教徒を虐殺したるは、吾が維新前二年に當る。島原の戰爭に後るること、三百年。知るべし、半島に於ける基督教は、東洋に於ける尤も若き歷史を有することを。

●最初の統監公伊藤以來、布教の自由に放任し、吾が政府が、基督教徒を迫害したることあらず。一面に於ても、宣教師が、半島の文化開發に貢献したるの功勞を認むべし。

●不逞鮮人が獨立の空想は、事大主義に裏付けつつある偉大精神の反映なり。事大主義の對象が、東洋より世界にひろがり、その眼前に望みしは米國人なり。

●歐洲大戰の終局の舞臺に出現したるウイルソンは、彼等の眼中に大英雄として見らる、ウヰルソンの提唱したる國際連盟は朝鮮の獨立を、成就せしむべき救世主とも思はれしといふ。

●空想は幻影を生ぜずんば已まず。大戰後、ウヰルソンの全盛時、ウヰルソン、飛行機に搭し、太平洋を高飛して、半島に遠來すべしと流言あり。此の事、ウヰルソンの耳には達せしや、否やを知らず。

●ダヌンチオ、飛行機に駕して、日本に來るの報は、幻影にてはあらざりし。その部下、現に、鵬翼を鼓して、日本に來れり。ダヌンチオ、若し日本に來りしならば、朝鮮にも行きしなるべし、ダヌンチオの理想は、朝鮮人の頭中に、ウヰルソンの幻影を與へたるなり。

●高山の頂に、濃霧のうち、巨人の幻影を映出することあり。一手を揮り、足を踏み、大空に離覗す。まさしく是れ一個の巨人なり。現に、目前に横たはりつつ、行けども、行けども、遥かづかれず。

●半島の空に浮び出でたる飛行機上のウヰルソンの幻影は、まさに、巨人たりしならずんばあらず。霧、消え、日出で、巨人滅するに及び、朝鮮人、頭中の幻影も、亦た亡ぶ。

●巨人、朝鮮を語れば、直ちに禿山をいふ。半島の山、むかしより禿盡したるにあらず。景福宮の慶會樓は、大院君が、大木を半島に徴發したるもの、唯だ、その一例に過ぎず、その餘、名勝、遺蹟に存する大建築に、古朝鮮の喬木を想ふべし。

●古朝鮮、蓋し山林を尊び、林政にも努力したるの跡なきにあらず。今、吾輩の邂逅せし兩班、多く、その少年時までも、四邊に青山ありしことを語るものあり。

●朝鮮の禿山の要因、一にして足らざるべし。その一は、林政の衰微して、濫伐の行はれし事、その二は、温突の流布の爲に枯枝、落葉のみならず、進んで雜木を切り倒し、山、青くなる

の暇なき事、その三は則ち松樹の毛蟲なり。

◉朝鮮に砂山多し。砂防工事を以て、山を青くせんとするの努力は、未だ毛生薬ほどの、顯著なる効果を見るに至らざるも、坊主の還俗したらんように、漸く、全頭に青味を帶び、やがて、滿川の翠色を呈するも遠きにあらざるべし。

◉温突は朝鮮の名物、いふまでもなし。日本人は、座敷の上に炬燵をおき、炬燵の中に入れども、朝鮮人は炬燵の上に坐す。寧ろ滿室を以てストウブの上に置くものといふべく、或は、ストウブの上に建てられたる家といふを妨げず。

◉吾輩、未だ温突の發達に關して、委曲を知ずといへども、温突が滿洲地方より南下し來りしは疑なし。大陸高原の防寒具、温突の陣を張るに若くなし。

◉夏に至つてもなほ温突を焚く、必ずしも防寒のみにあらず、併せて乾室に用う。その燃料としての落葉、枯木、絶えず牛背に載せて、夏も、冬も、京城の繁華區にも、つねに、その往來するを見る。

◉温突滅林説を唱うる者あれども、山林を衰亡せしむるは、温突よりも亂伐にあり。亂伐の後これを培養せざるにあり。伐採ありて養林なし。栽培せざりしが故に、朝鮮に、自然林ありて養殖林なし。

◉朝鮮の人物は、喬木と同じく、すべて自然生なり、豪傑の蝟起するは譬へば、深山の大木あるが如し。教育の進まざりしは、養林の發達せざりしと同じ。

◉養林なしとて、大木なしといふ可らず。教育の制、開けざればとて、國に豪傑なしといふ可らず。豪傑は、教育に由つて出るにあらず。

◉朝鮮には、自然の大木ありて、養林なし。隨つて用材、遍ねからず。故に、往々にして、大厦、高樓の宮殿を造るを得べし。人家、概ね矮陋なるを免かれず。

◉李退溪は、朱子學の泰斗なり。若し、朝鮮の學問にして、尤も多く日本に影響を與へしものはといはば、退溪なるべし。弘法大師が密教を整理したるように、李退溪は朱子學を整理したり。然れども、古朝鮮に、教育の觀念、乏しかりしが故に、退溪の學説が人物養成に貢献したるは日本に於てなり。

◉毛蟲の害、輓近、頗る盛んにして、これを驅逐し盡すは容易にあらず。朝鮮の山、多くは小松ばかりにして、小松に、皆、毛虫あり。或專門家は、小松を間引いて雜木を雜栽し、以て、毛虫の勢を殺ぐ可といふ者あり。然れども、此の事、實際には容易ならず。譬へば、髭を一本おきに剃らして、これを剃らんとするが如くなるべし。

其七

●釜山より新義洲に至るの間、鐵道幹線は本洲に於ける東海道といふ如く、晴れがましき宣傳の舞臺なり。此の間釜山より京城に至るまで、村落、貧弱にして、人家、殊に、矮小を極む。朝鮮にても、尤も見すぼらしきところを、内外人に展覽しつつあり。故に、釜山よりして、朝鮮に入る者、先づ人家の小なるに驚き、且つ侮る。

●朝鮮にて、速かに改良したきものは、釜山、京城間の村落なるべし。改良には、自から要領あり。内外に、朝鮮を宣傳するには、總督府、先づ、家屋改造に着手せずんばある可からず。

●此の事、旅客の感想に切なれども、實行に容易ならず。その第一着手は、停車場の附近よりして始むるを要す。

●朝鮮の民舍は、もとより茅舍なり。日本人は、茅屋の一語を、謙遜辭として、使用すれども、日本にては、茅屋、必ずしも矮舍ならず、堂々たる大厦も亦茅屋あり。朝鮮にては、茅屋は則ち矮舍なること、琉球に於けると同じ、朝鮮にての上舍は必らず瓦屋なり。

●容膝廬の一語を、久しく聞く。誇張とのみ思ひしが、身幹の長大なる朝鮮人の爲には、あの矮屋は、事實に於て、容膝居たらずんばあらず。敷居、低くして大地を嘗め、軒、垂れて、彼等の耳よりも下がる。

●彼等は、頭を下げて出入し、小室の中、皆踞坐す。神輿の稍大なるもの、則ち、彼等の容膝居なるべし。

●聞く、盧子は、それを形容して菌の家といへり。菌の家といふは、專ら、茅屋の印象を言ふ。その部落は、これを千本しめじにも譬ふべきか。若し、その實地よりすれば容膝居といふべく、人間と矮舍との關係を象徴すれば、蝸廬の古語は當れるなるべし。人間は、蝸牛が、その殼に居るごとく、家一杯に住居するなり。

●かくの如き菌の家を作るは、用材の少きと、なほ溫突を必要とする爲となり。然れども、究竟、文化の低かりしに歸著す。

●溫突を有効ならしむるには、家を小さくし、天井を低くするを必要とす。民舍の生命は溫突にあり。巨大なる炬燵を作り、その櫓に壁を塗り、家となしたるが、溫突の家なりと視做すも可し。

●民舍の腰に、土管あり、斜めに、天に向つて烟を吐く。朝起して、村落を望めば、草の屋根より淡き烟登る。野色に映じて畫くべし。朝鮮人の身邊、つねに烟を吐くものは、その長き烟管と、ヲンドルの土管となり。朝鮮に活火山なし。烟は、つね

に民舍の腰より噴く。

其八

●民舍に雨戸なし、唯だ障子のみなり。障子に、厚く、黄き朝鮮紙を張る。月色、紙窓に映ず。雨氣、寒威も亦透る。夏は可し。冬は寒からずやと問へば、毫も、不便を覺えずと答ふ。

●雨戸無き紙窓の民舍は、日本海を包圍す。裏日本の沿岸、到るところ、古民舍、概ね雨戸なし。越後に行くに、地主の家、雪中、紙窓のみにて雨戸なし。雪多き故に、採光の爲めなりといふ。信州、長野の町の如き、雪、少なけれども、紙窓のみなり。

●凡そ、裏日本には概して雨戸なし。雨戸あるは、近來の改造家屋に屬す。採光といふは、むしろ第一の目的にあらず。一つには、文化の低かりしと、一には、炬燵の爲となるべし。

●炬燵と、ヲンドルとの圏線が、描きなすもの則ち日本海ならずんばあらず。その上氣を防ぐ爲に、紙窓を可しとす。

●然れども、矮き菌の家の蓋がりたるを見るとき、吾輩は、如何にして、彼等が、生命、財産を保全するやを思はずんばあらず。

●菌の家は、全然、無防禦なり。固より財産を、此の家に貯うるを得ず。財産あれば、此の家に居る可らず。若し、菌の家に金銀を藏せんとせば、勢、これを地に蓄へて、床下に匿くすの窮策に出でざるを得ざるべし。

●強盗の前には、家無しと同じ。戸ささぬ御代の一語は、半島に於ては、意味を爲さず。

●此の、溫突に蒸さるる矮舍に居り、寒棲して、蟄居す。不活潑ならざるを得ず。不活潑は、やがて氣力の頽敗、風紀の義非を馴致せずんばあらざるべし。

●吾輩の所見を以てすれば、朝鮮の改造は、先づ、その蝸廬より始むるを要す。此の事、政治、經濟、社會、民風の上に重大なる關係あり。此の蝸廬は、古朝鮮の弊政の記念的象徵たらずんばあらず。弊政の下に、人民、唯だ、その日を送り、併せてその生を送るが爲には、蓋蝸に安んずるを得策とすべし。

其九

●古朝鮮に趣味少し。庭園なし。盆栽なし。殊に草花を栽ゑず。本州の農家、貧の先きに一坪の花壇を作るが如々は、半島には到底、見られず。朝鮮の民舍には、家の中に床の間なし。花瓶なし。盆花なし。越後には、積雪中、菊花を軒下に栽培するあり。朝鮮にはたとへ花ありとも、花瓶を置くべき床の間なし。

●富人は、往々、盆栽を愛することあり。それとても草花はなし。ケヤキか、柘榴花の類に過ぎず、隨つて植木屋なし。蝸盧の中、雜然として家具を並べ、趣味は蕭然たり。

●古朝鮮は李花の國、梨花も亦た多し。蓮花もあり、牡丹もあり、菊花も亦たあり。然れども、これ等のもの、王公にありて、民舍にはなし。勞働者は、すべて無趣味なり。半島にありては、趣味は白髪と同じからず。何人の頭にも來るといふわけにあらず。

●むかしの高麗燒を見れば、模樣に、唐草花鳥あり。花にもいろ〳〵あり。その器別よりすれば、水差も、花瓶も亦たあり。然れども、高麗燒は、王公の趣味にして、民間の藝術にあらず。

●朝鮮にては、無趣味は下層に沈澱し、趣味は、皆、上層に浮びたり。趣味は、貴族にして、勞働は平民なり。すでに、兩班といへば、緩歩して、悠然として迫らず。その一擧手、一投足にも皆、法あり。急歩するものに、貴族なし。

●社會に通じての趣味といへば、唯だ文字なるべし。宮殿には書畫、充滿す。扁額多くして、繪馬堂の如し。民舍には、畫稀にして、書のみなり。名句、格言を、やたらに、額に、聯に、或は柱に、壁に、板なれば、紙に書して貼りつく。

●半島を旅行すれば、名句、金言にむせるなるべし。此の習風支那より傳へて、半島に入り、日本に傳來す。九尺二間の陋屋にも、襖に古詩など、書きたてたるが、うるさしと、かねて思ひしも、朝鮮にては、それどころにあらず。その量も、細かに論ずれば、支那には及ばざるべきも、日本にては、對比すべきなし。

●平和博の、朝鮮館の入口の、一聯に、洗硯魚吞墨の句あり。實に、朝鮮の魚どもは、墨を吐いて、字を、藻草に書くにやあらん。文字は、家にも、壁にも、山にも、川にも滿ちて、半島の天地、目を開けば、乃ち文字あり。

●東洋人は、文字に中毒し、文字なければ生きられず。文字は趣味にして、實用にあらず。文字を崇拜し、文字を驅使せず。

●吾輩、朝鮮を旅行すること、旬日に充たさるに、文字に食滯し、歸京の後、なるべく文字の懸物を床の間に掛ける習慣をも節減したきものと思ふに至れり。麗々しき文字が胸に痞へたるるべし。

其十

●日鮮の同祖なるべし。然れども、數千年に亘る政治の相違は二者の趣味をして、全然、別系に出るが如くならしむ。譬へば

茶の湯の如き、世人、動もすれば、これを東洋的と稱す。然れども、支那にも、朝鮮にも、茶あり、茶の湯なし、相似たるものもなし。茶の湯は、純然たる日本趣味なり。

●大陸には、小亭多し。趣味としての亭は愛すべし。然れども日本の茶席に對照すべき氣分のものを見ず。茶席は、床の間と活花と、庭園とを要素とし、茶を以て、これに生命を附與す。

●朝鮮には、すべて、如上の要素を缺如す。茶をして靈あらしむべき、趣味の舞臺なし。朝鮮人、また實に、多くの茶を喫せず、民舍にては、概ね湯もしくは、水を飲むこと多し。これを以て見れば、茶の木は支那を本とすれども、茶の國は則ち日本なるべし。

●朝鮮人は、烟草に耽溺す。酒は、第二、茶は、また更に、その次なり。坐臥、行動すべて烟草ならざるはなし。白衣を著て火皿の大なる長烟管に、烟を吹かせつつ、語り、且つ行く。勞働者も、手に長烟管を離さず。

●長烟管は、古朝鮮を象徴す。輓近、卷烟草の流行と共に、烟管、漸く、短かく、短かくなりゆく。短烟管は新文化を象徴す。烟管の短かくなるは、朝鮮の改造なり。

●野道にも、田畑中にも、町の軒下にも、朝鮮人は、横さまに臥して、ゴロ／＼晝寢するを厭はず、車馬、その耳を掠むれども驚かざるものあり。晝寢すといへども、烟管を離さず。

●朝鮮は、烟草の國ともいふべし。地味は、烟草に適すらし。あの長烟管の火皿に詰め込む烟草は、粗にして臭あり、辛辣なりといへども、それは製法の拙なるが爲にして、烟草には良種少からず。

●烟草と、妓生とは、平壤人の誇稱するところなり。吾輩、開城の富豪、金元培を訪ひしとき、平壤烟草の特製せるものを得る。シガーの榴彈の如く、頗る趣味あり。今上陛下の烟草は、平壤産の最上なるものと聞く。

●平壤の烟草は小さし。特色は、その風味にあり。試みに、分烟草を移植すれば、その芳香を失はずして、形は小さくなるべし。

●烟管は、唯だ一種の長烟管、而して烟具といふべきもの、何等特筆に値するものなし。火打袋に似たる烟草袋あり。油紙よりのものを以て作り、勞働者の腰に懸く。

●烟草の趣味、一半はパイプに存すること、譬へば、酒の趣味半ばは盃にあるが如し。朝鮮人が、軍隊の劍の如く、一定の形式に由つて制作されたる、唯だ一種の長烟管を携ふるのみなるを見れば、烟草にあらはれたる半島人は、無趣味なり。

●吾輩、未だ朝鮮酒の芳醇なるものを得ず。旗亭、到るところ

にあり。或はいふ、酒幕に入るにあらざれば、朝鮮趣味に徹底するものにあらずと。酒幕には概ね垢拔けしたる主婦あり、酒を賣り併せて笑を賣る。此の行甚だ匆忙たるに、汽車の窓より酒幕を見るを得たるは、尚ほ幸とすべし。

◉麺の塊は、磊々として、八百屋などの店頭に横たはる。それを見れば、朝鮮、地酒の趣味推知するに難からず。

其十一

◉朝鮮には梅花、極めて稀なり。今あるものは、本洲よりの輸入なり。むかしは、今よりも多かりしやも知れず。伊達政宗が盆栽として持歸りしといふ老梅、仙臺にありしと聞く。

◉水原の花山、龍珠寺は、半島の名刹、その園中に、唯だ一株の老梅ありといふ。その餘、梅の名木、語るべきものなし。古來、朝朝の詩、謠ともに、支那の梅花を描く。實際に於ては、概ね、見たることなくして謠き、且つ詠ずること、日本の謠人獅子を描くと同じかりしたるべし。

◉鄭夢周、日本に使す。北九州に滯在し、關東までは行かず、太宰府あたりの景趣を詠じたるが多く、そのうち、殊に、梅花を珍重するを想見す。梅樹を持ち歸つて、故國に栽ゑんことを希ひし詩あり、觀音寺に遊ぶ詩、ともに梅花を詠ず。

◉吾國の菅公に似たるは、鄭夢周なるべし。その人、梅花を愛し、觀音寺の鐘聲を聽くこと半歲、また一奇緣といふべし。但だ集中、菅公を詠ずるの詩なきを惜む。太宰府に、淹游して、その事を聞かざりしにはあらざるべし。詩、恐らくは逸したるならん。

◉李花多く、楊柳多し。平原の大木には、ケヤキ、公孫樹、或は槐などなり。

◉大木には、悉く七五三繩を張る。朝鮮人、大木を崇拜し、七五三繩の、まわりに集りて、その威靈を祀る。稍、大なる木には、必らず七五三繩あり。むかしは、名山を封じ、名木に位を授く。李朝は、西鮮の人物を重用せざるを以て、名木は、時として、西鮮人よりも高位に登ることあり。

◉七五三繩を張るは、半島の風習、而して位を授くるは、支那風の模倣なるべし。

其十二

◉欅でも、朝鮮欅といふ。何物にも、朝鮮の二字を冠するは、宣傳とも見え、自慢とも見ゆ。但し、同じく漢字を書せしむるも、朝鮮人は、支那以外に、自から一種の風格を有す。人事、天然、渾べて、半島の色調なくんばあらず。

●吾輩は、朝鮮の自然は、愛す。空氣、澄明、天、清くして、尤 月を觀るに好し。琉球は、自から稱して月國といふ。水蒸氣に富み、月より露の滴たるを覺ゆ。朝鮮は、これに反し水蒸氣、少く、月色、銀の如し。

●朝鮮の乾坤、本來讀書子に適す。水蒸氣少きを以て、氣分、つねに爽快。平生、頭痛を病む者といへども、此の國に來て頭の重きを覺ゆることなければなり。此の天地をして、古來、學問、思想の國たらしめざりしは惜しむべし。

●文化は民族精神の發揚なり。事大主義の下に、民族精神、伸ぶべき理なし。專制的、階級的政治の下に、燦爛たる文化の花開く筈なし。

●蓋し、生民、自から自由の氣を有す。これ天賦なり。斯氣を伸びしむるを以て善政となす。自由の氣を抑へるは、西瓜を水底に沈めんとするよりも難し。遂に、浮上の一路を求めて已む可らず。然れども眞直に、浮び上るを得ざるを以て、弊政の民は必らず拗ねる。壓迫されたる人民には、必らず反抗の精神あり。

●政治は酒を醸すが如し。壓制は、酒を腐らして酢とならしむ。酢となるものの罪にあらず。壓制の罪なり。

●朝鮮と名のつくものの中にては、第一に、月、第二に鶴。朝鮮鴉も亦た本州の鴉より美なり、朝鮮鴉は鵲（カササギ）なるべし。九州殊に、肥前にもあり。その鳴聲、かち／＼と聞ゆるを以て、鍋島侯、齎らし歸りたるなりといふ。

●雪、消え、鶴去るの後、鷺も亦た多し。白鷺、水田より飛んで青天に上る。半島の畫趣の一とす。

●朝鮮の天帝は、鶴を右にし、虎を左にす。されば、朝鮮は、鶴の國にして、また虎の國なり。朝鮮の名物に、鶴脛と虎皮とを賣る。鶴脛を揭げて、鷺脛を賣るも少からず。虎皮に坐し、丹頂の鶴を撫して遊ぶは、趣味の半島人の理想なるべし

●古朝鮮の文化は、虎を驅逐するに足らざりし。虎あり、豹あり、熊あり、箕子以後、三千五百年、當時の猛獸圈なほ存す。臥榻の傍、猛獸を居らしむ可らず。猛獸を掃蕩するは仁政なり。

●虎、豹よりも怖るべきは、ヌクテと山猫となり。山猫は、瘠せて、丈高く、脚長し。耳は竹を削つたる如し。爛々たる、その眼。一見陰悽の氣、人に迫る。古來、日本に、化猫の話多しといへども、これほどの凄さを想像せず。鍋島の猫といふとも山猫の敵にはあらざるべし。

●山猫は、人を見ばれ遁る。實は、恐るるに足らず。陰慘、凄壯、醜惡などの權化と見れば可なり。眞に怖るべきものは、唯

だヌクテなり。ヌクテは虎豹より猛もなり。朝鮮の雰圍氣を攪亂する魔手を象徴するものは、ヌクテなり。

●朝鮮のヌクテは則ち狼にして、日本の狼と異ならずといふ。吾輩は動物學者にあらずといへども、ヌクテは日本の狼とは同じからざるを疑ふ。諦視するに、その風神、自から多少の相異あり、日本の狼よりも、更に、犬に類似す、解剖上の特徵、少しとするも、その性習に至つては、日本の狼と同視す可らず。ヌクテを譯するに、狼を以てせば、これこそ、特に、二字を冠して、朝鮮狼となさずんばある可らず。

●ヌクテは、巨眼、鐵頤、その口は耳まで裂け、高材、逸脚にして、輕捷、譬ふるに物なく、その歩するや、足、地に著かず、脚に、風を含んで、宙宇を行く。鐵蹄のヌクテを見るだけにて、その慓悍無雙なるを想像するに餘あり。

●古より群狼と稱すれども、ヌクテは、群をなさず。單軍、孤行するの概あり。赤兒を奪ひ、牛馬を一擊に斃す。行くこと風の如く、健速にして、所在、測られず、これを追躡すること難し。故に、その一たび出沒するや、被害の範圍、少くとも四五十里に及ぶ。

●不逞鮮人は銃器を執る。ヌクテは則ち空拳にして横行す。その潜んで、深山幽谷に據るは同じ。今や、不逞の氣、殆んど静平に歸す。生民の爲に、敢てヌクテを殘存せしむること勿れ。

●朝鮮といへば、清正の虎狩を聯想せしむ。世人、未だヌクテ狩を知らず。清正は、ヌクテ狩を爲さざりしにや。ヌクテは多く小兒を捕ふ、弓箭に向つて來らず。

●最近、釜山にヌクテ出沒するあり。乃ち、釜山人、萬二三千人、大擧してヌクテ狩を爲すの擧あり。これだけの人數は、日獨戰の青島攻圍に於けるよりも多し。蓋し、ヌクテに對する、未曾有の大討伐なるべし。

●先年、山本唯三郎、朝鮮に虎狩を試みて、成金を誇示せしことあり。若し、ヌクテ狩を爲せしならんには、その陰德、まさに顯彰ある可かりし。虎皮は、美なるを以て、獵夫も、なほ、これを爲す、必ずしも奇とするに足らず。

●或はいふ、村家、小兒、夜出でて尿するとき、ヌクテ後より摩り寄り、押して、稍、家を遠ざかるに及び、乃ち卒然、咬へ去る。その初より咬へざるは、その聲を擧げて啼き、人を喚起すを恐るればなるべしと。

●此の如きは、ヌクテを靈ならしむるの傳奇たるに過ぎず。また以て、ヌクテの威力を想像すべし。人道よりすれば、先づ、ヌクテ狩を爲さずんばある可らず、虎狩は、むしろ道樂なり。

其十三

●暮色に、京城に入る、郭外の電燈、花の開くが如し。南大門は燦々たり。大通りは、大都市の景象あり、而して白衣の人、電車に溢る。芳郎雄島悌軒苗洞の諸君、來り迎ふ。芳、雄二君と旗亭、千代本に上る。淺酌、閑話、細かに半島の風物を說いて五更に至る。賓に宴に侍するの妓、皆、自ら稱して大阪の產といふ。

●京城の淹留、苗洞の家を主とす。夫人、則ち吾輩の妻の姉なり。今春、亡す。遺影を拜し、主人と往事を話して鷄鳴に近し。人間、生るるところ、不朽の家にあらず、魂、歸するところ、則ち永遠の鄉土となす。斯生、雲の如し、變化、頃刻も測られず、唯だ、それ不滅の信仰あり、乃ち、到るところの山河、吾鄉に非るはなきなり。

●朝悌軒先づ來る。烟草を持贈す、吾輩に烟癖あるを知ればなり。名山、大川は、必らず名烟を口にして翫賞すべし。酒は、その次なり。悌軒、頻りに金剛山を說く。吾輩も亦た、ひそかに山靈に告ぐ。他日、烟草の太だ美なるものを多く、懷ろに、以て、一萬二千峰の絕巓に雲遊せんことを期す。名烟の芳香を以て、その靈峯、絕奇の巨皷を薰ぜんことを冀ふ。

●主人及び諸君と、南山に登り、京城を俯瞰す。山野の風光を以てすれば「趣味の都」たるを失はず。北山、南山、相對して大都を擁し、綠樹の邱陵、煉瓦町の間に出沒す。樹色、兩山と相映じ、翠葉、瓦色と相まぢる。すべて是れ、京城を擧げて、廣野に造られたる一大名苑の景趣として觀るべし。

●李王の宮殿は、北山の麓にあり。北山を負ひ、南山に面するは半島王宮の制、皆然り。山を控えて城となすものなり。宮殿は太平を樂むべし、有事の日、乃ち山城に據る。山腹には、石壁蜿延として、めぐる。

●青天に聳ゆる、崢嶸たる北漢山は、實に、京城の美觀とす。むしろ京城趣味の王なるべし。此の山の美なければ、京城の繁華、今に倍すとも、趣味の都たるを得ず。

●北漢山は、いづれの方面より見るも美なり。中腹以下に綠樹あり、山頂、巖壁、やや薄紫色を帶び、朝陽、夕陽に映じて山色、雲影ともに、畫くよりも麗はし。山形は、妙義山に似てその頂、縹緲として雲に入り、その根、東西にひろがり、裾野を引くこと長し。

●京城の町を觀る。支那人街、及び朝鮮人街を歷訪し、清溪水を過ぐ。京都の鴨川に比すべくして、これは席上に墨汁を覆へして、滯つて流れざるがごとし。

◉昌德宮に至り、博物館を見る。門を入つて、右折すれば、櫻樹の幽溪を過ぐ。春風に、花の洞道を現出するなるべし。葉繁枝垂れ、生々茂育の情、朝鮮も、本來櫻花國たるを知る。朝鮮の古詩、梅花を詠ずるもの少からず。梅花はた朝鮮の趣味たりしなるべし、今、梅花、極めて稀なり。櫻花、半島に普及するは遠きにあらず。

其十四

◉李王家の博物館は、朝鮮古文明の縮圖ならずんばあらず。眼前の朝鮮とは、別乾坤なり、五百年前、藝術の盛、かくの如し。當年半島人の血管に宿りし美神、今、去つて何の處にある。

◉藝術は花にして、美感は、その根なり。藝術の花は、野の花にあらず。葉凋みて野の花、なほ存するものなり。美感の根、枯るといへども、藝術の花、長へに開きてあり。朝鮮人は、その古美術を誇るを得べし。

◉佛教美術を看て、慶州を想ふ、むかし、大陸の藝術、半島を經由して日本に來る。半島人、殆んど忠實に、大陸を模倣す。故に、唐代文化の面影、なほ半島に見るべし。

◉朝鮮文化の根柢を爲すものは、渉唐の文明なり。故に、朝鮮人、塞外民族を蔑視す。その力及ばずといへども、その心に服せず。故に、元人の文化、多く朝鮮に感化を與へず。これを以て、宋朝亡ぶるの後、朝鮮人、その文化の師授を失ふ。宋以後半島の藝術、漸く衰ふ。宋亡び、高麗亡ぶ。元以後、李朝藝術の振はざる所以なるべし。

◉李朝の後半は、淸朝に隷屬すといへども、李朝、自から愛新覺羅氏を尊ばず、故に、李朝は淸朝の正朔を奉ぜず。年號は、明の崇禎年號を延長し、或は、王の即位幾年と記す。

◉支那人の所謂正朔觀よりすれば、年號の存するところ、國未だ亡びず。明朝は、長らく半島に存したりといふを得る

◉淸朝、此の事を知らざるにあらざるべし。然れども、意に介せざるが如く、正朔を、半島に押賣せず。また以て、支那人の襟懷、漠然として、大なるものあるを見るべし。

◉此の事、他の一面より見れば、偶、朝鮮人の民族性の特異なるものあるを認む。既に、その心に、塞外人を卑んで、その正朔を奉ぜずは、須らく美辭を擇んで、自國の年號を作るべし。すでに滅亡したる明朝の年號を奉ずるは何の爲か。

◉抑李朝が、明の年號を固守したるは、これを以て、自ら中華文明の國土たることを誇示するの意味もあるべし。然れども、その根柢には、事大主義の潜在するあり。此の事、蓋し明朝に對するの貞操にはあらず。既に亡びたる明朝の文化に倚賴する所

以にして、自から文化的獨立心を缺くに由らずんばあらず。

其十五

●李王家の動物園と植物園とは、朝鮮の誇とす。植物園の精華は、その温室にあり。温室の高大なる、唯だ一棟の建築としては、東洋第一といふも過稱にあらざるべし。動物園も、またコセ／＼せず。上野の動物園に比すれば、寛大の氣分あり。

●温室の中、バナナの實、ふさ／＼として垂れ綠蔭のうち、半藤の圓池あり、池をめぐるに盛土を以てし、それ／＼めぐつて、熱帶植物の翠色、人衣を染む。窓外の、天光、雲影、高き玻璃窓を透して、躍水に映ず。池の周圍に、卓を置き、李王、ときに來りて、午餐會をなすと聞く。

●侯大隈は、しば／＼温室の會をなせしが、温室の大小は暫く措き、此の如き、池邊の食卓なし。ひそかに惟ふて、李王の文化生活、此の温室の午餐會を以て、趣味の、尤も潤澤なるものとなすべし。

●動物園の奇物は、河馬と、猩々となすべし。然れども、その尤も美なる物は、朝鮮雉を推すべきか。朝鮮雉は羽毛の艶冶なるは譬へば火紅、淡紫の糸を以て、錦に刺繍するが如き物あり、朝鮮にて重寶なる物は、朝鮮雉と、妓生との二つならずんばあらず。

●朝鮮は、さすがに鶴の國、此の苑中にも、鶴の庭あり。別に群禽の池園は、大なる池の上に、半空に鐵網を張る。白鳥、羣をなして悠々として行く。さながら鷁首の舟隊を送るが如く、自から王者の園池なり。白鳥は、元來、平民の鳥にあらず。

●池畔に、大小、いろ／＼雜禽羣棲し、白鶴、數十羽あり、時に翼を張つて飛ぶ。池邊に亭あり、王妃、ときに游憩の所とす。此の亭、また東洋に求め易からず。

●吾輩、諸友と、禽舍を過ぐ。双鶴、その雛を養ふを見る。雛、可憐にして、鶏雛のごとし。これに餌を與ふれば、躊躇して啄を下さず。母鶴、乃ち、啄を以て、これを三斷して食はしむ。吾輩、諸友と看て飽かず。暫らく檻外に立ちて見る。

●朝鮮の動物園は、河馬の生育に適す。未だ、その何の故たるを詳かにせず。その生兒の健たるもの、かはる／＼、これを歐洲の動物園に送る。今、少兒あり。

●河馬は、魚の如く、水中に眠る。恐らくは、造物者の失策なるべし、その醜肥なるは、比類を見ず。然れども、河馬の子は自から子供らしく、無邪氣の表情を爲すも、可愛らし。

●朝鮮は寒天なれば河馬の棲めるは、澀滯なり。河馬の本性より見れば、浴を爲せるものにして、朝鮮人より見れば、動物園の河馬は、つねに、温泉浴をなしつゝあるものなり。例へ

ば、那須岳の溫泉川に棲める鯉の如し。寒風に放在されたる溫水に活きるは、此の鯉と、此の河馬と相似たり。

◉然れども、此の河馬は、那須山中の鯉の如くに、常住、溫水のなかばかりに居るに非ず。むしろ朝鮮人の溫突に住すると相類せずんばあらざるべし。

◉此の日、吾輩、偶、喜劇を見たり。象の散歩場、木柵の窓、ぐつて入り、象の室を窺はんとす。惡意あるにはあらず好奇二人を並ばしむるを得べし。ときに、五六の田舍兒あり、柵を潜の故なるべし。闖入者の足音、聞へたるか、大鼻、巨脚の先生徐ろに鼻をふりまはしつゝ、入口に、一杯になつて出で來る。闖入者その不意を打たれ、あわてゝ退却すれども、右往、左往に奔つて、なほ柵内に留まる。

◉此の場合、遠近の觀衆、一齊に、柵外に集まり、氣を揉めども、如何とも爲すべきなし。象は、目に、少しく憤を含んで、白衣の群をノソリ〳〵追ひまわし、漸く、歩を急にするころ、白衣、辛うじて悉く柵外に逸す。初めより追及するの難かりしにあらず。大鼻公、唯だ、その威力を誇示するを以て滿足するもの如く、事、畢つて悠然として還る。此の如きの光景、此のの國史に稀有の事なるべく、また以て、觀光の餘興となすべし。

其十六

◉總督府の病院は看て過ぐ。鍾路街に至り、パゴダ公園に游ぶ。パゴダは蠟石塔なり。その各層、各方面に悉く佛像を刻す。その精巧にして、雅致ある、夙に歐洲人に知らる。芳郎、乃ち吾輩を塔下に立たしめて撮影す。塔は、吾輩の三倍の高さあり。

◉相傳ふ、加藤淸正、此の塔を本國に齎らし歸らんとせり。その最高層の二三段を地上におろしたるは、その爲なりと。淸正がその事を中止したるは、運搬の容易ならざるものあるが爲に、敢て、或は、此の藝術を毀損するあらんことを恐れたるなるか、また、或は、彼の敬虔なる信仰者たるが故に、此の佛塔を運び去るを不可なりと思ひつきたるなりしか。

◉吾輩想ふに、若し、秀吉をして、ナポレオンならしめば、第一回、征韓役の講和條約の中に、必らずや、朝鮮古美術の傑作を大半、押收するの一要項ありしならずんばあらず、その事、必ずしも實現し難からず。假りに、かくの如くならしめば朝鮮は、古美術の國としての聲價を保つ能はざりしや、知るべし。

◉秀吉が、美術の保護者たりしは、ナポレオンに讓らず。桃山の美術は、ナポレオン王室の美術に勝れり、ダノン及び、ダロ

等の畫は、山葉の畫を凌駕するを得ざるなり。

●ナポレオンは、戰勝ごとに、その講和條約のうちに、必らずその國の藝術の代表作を、多く押收するの一要項を加ふるを例とせり。かくの如くして、蒐集したる藝術はやがて、佛蘭西をして、美術國たらしむに至れり。故に、佛蘭西の藝術の興隆はナポレオンの分捕美術に起源す。

●秀吉のとき、朝鮮に於ける、古美術の盛、實に、燦爛たる光彩を有す。秀吉をして、垂涎せしむるに足るもの、甚だ多し。然れども、秀吉は、特に、分捕美術の命令を下したることなし。

●朝鮮役の結果、吾が邦に輸入したる半島美術と、その美術品とは必ずしも少しとなさず。然れども、これを、ナポレオンの分捕美術に比すれば、固より言ふに足らざるなり。

●電車にて、朝鮮館に往き、いろ／＼のみやげものを求む、長烟管は、吾輩の、かねて希望したるものなりし。朝鮮館は、宮殿の古建築に擬し、その粗製なるが爲に、ケバ／＼しき色調を用ゆ。三階に登り、ソーダ水を喫し、佛蘭西館を望む。緑樹の丘見え、町を越えて涼風來る。

●書肆に、朝鮮研究に關するものを求め、朝鮮本及び法帖等を見る、法帖は、廉價、そのうちに花山龍珠寺の祈福帖、一卷、朝鮮式の大本、御製御筆のもの、聊か記念とすべし。眞筆一卷その作家の精麗なる、日本人の及ぶところにあらず。日本人敏速に家を作る。寧ろあはただし。兩班が道を行くの氣分を以て、書くにあらざれば、作字の溫秀なるを得ざるべし。

●異郷に旅行して、骨董舗を冷觀するは、また一の快樂ならずんばあらず。日本人の店よりも、殊に、支那人の店がおもしろし。品數も多く、聞くに隨つて答へ、煩を厭はず。日本人の、店主の、冷觀されて、容易に、佛頂面をなすと同じからず

●苗洞、東道して、支那料理の金谷園に至る。麗はしく夕陽に映ずる北漢山の山色を眺めつつ、飲み、且つ語る。紫雲、山頂に擁曳し、夜の幕徐ろに下る。

其十七

●翌日、雨。朝、芳郎來り、誘ふて、景福宮に至る。雨中の北漢山、皴法いよ／＼美なり。譬へば、秀潤なる墨色を以て描ける名畫の如し。光華門前、古の政廳、遺址なほ存す。

●勤政殿は、則ち紫宸殿なるべし。宮殿の制、吾が王朝の如し。殿宇は高壯なれども、硝子窓を見馴れたる目には、その紙障たるが、異様に思はる。

●朝鮮、建築の傑作を推すべきは、慶會樓ならずんばあらざる

べし。土間より生え抜きたるようの、高大なる六本八列の白石柱、間隔を保ちつつ、高く、朱欄、宏棟の巨樓を支へて、半空に聳ゆ。樓上は唯だ一階、唯だ一室の大廣間。高き屋根と高き柱との均衡と、白柱、朱欄瓦色との色彩との、二つが相得て、非常に豪壯なる氣分を與ふ。

●慶會樓は、ひろ／＼したる宮苑の中に突兀として峙ち、堦下に、園林の翠色を映じ、樓上に、北漢山の山光を含む、居然として宮苑趣味の王者なり。浮雲、菱に漂ひ影は蓮池に蘸す。

●むかし此の樓上に、盛宴を張つて、國賓を饗す。國賓、樓上の中央に坐すれば、長風、遠く北漢山巓より度り來り、襟懷、八荒にひろがる。眼前の佳肴、玉の如く、舞妓すべて蝶の如し。國賓は、飲まざるに、先づ、此の雰圍氣に醉ふて、陶然として顔の崩るるを覺えざりしなるべし。

●交際は藝術なり。藝術は氣分なり。慶會樓上の外交は、眞に藝術たるを失はず。慶會樓は名畫の如し。これを眺めつつあれば、樓に登らずといへども、此の藝術的の雰圍氣を味ふに足る。

●日本の名建築、その一階、平坐敷なるもの、椽の高きは少し。椽に坐して庭園を賞するを目標とす。故に、花卉、庭石すべて觀望の水平線にあり。慶會樓は、一階なりといへども、則ち、高く半空に描き出で、眼を、山巓と、水平線上に置く。

●舊劇には、山門のセリ上げあり。慶會樓は、恰もセリ上げの趣味なくんばあらず。此の廣々したる宮園のなかに、大なる蓮池を控え、足場を測りて、堂々たる朱欄宏棟の、英雄的建物をセリ上げたるものとも見るべく、そのセリ上がりたる刹那、滿苑の草、木、遠近の山川、齊しく、まさに、無言の喝采を浴びたるなるべし。

●南洋、新嘉坡などには、濕分を防ぐが爲に、堦下の柱、一丈高く平坐敷を捧げ上ぐ。夜は則ち、猛虎、山より出でて堦下を往來するあり。慶會樓は、偶然に、新嘉坡式の壯大なるものなり。

●朝鮮は虎の國なり。若し、虎群を、此の堦下に放ち、堦上に玉杯を擧げて、涼風に一笑せば、半島の英雄的氣分、これに過ぐるはなかるべし。

其十八

●吾輩は、轉じて閔妃の遺跡を尋ぬ。當年の事、詳かに、これを識る者なし。深井あり、或はいふ、香魂を此に藏む。或はいふ、艶屍を後林の夜烟と化せしむと。渾べて、これ秘史にして、また稀有の小説なり。唯だ、池畔に、閔妃の宴息所あり。池畔

柳蔭深く垂れ、畫眉なほ在るかと疑ふ。池の中央に、島あり、亭を設く。池中に畫舫を置く。曉烟、月夕、此に游宴するの追想するに餘あり。

◉楊柳青々、直ちに後苑の松邱に續く。松邱の深さ、知る可し。翠色重疊して北漢山の麓を浸す。かくの如き園林、天下、眞に求めがたかるべし。

◉後苑より左折して北門に至る。別に、不淨門あり、他方の松林に通ず。北門のうち、人家數戸、朝鮮人にして、園林の守吏なり。むかし、此の如きの人、王宮に咫尺するを夢想するだに、得ざりし。今や、李王は、去つて昌德宮にあり、彼等、乃ち宮址に住し、日夕、かくの如きの名花の中に居る。若し彼等をして、むかしの宮嬪ならしめば、雨中に立ち盡すとも、當年の事を問かんものを。

◉宮苑を行き遍ねくして、趣味、盡くることなし。古風を拾ふも、なほ感興あり。勤政殿の後に思政殿あり。その餘、光景、悉く記さず。

◉朝鮮は、一に、靑丘といふ。その名ありて、今、空しく禿山多し。此に來りて見れば、綠葉、苑に漲る。靑丘は則ち王宮にあるなり。宮殿は、宏壯にして、此の中に居れば、「菌の家」を想像しがたし。

◉朝鮮に、凡そ、あらゆる權力、金力、及び、光榮と趣味とを一所に集めたるものは、則ち、此の北漢山の麓ならずんばあらず。權力を統一するものは王者なり。王者の權は分つ可らざるなり。快樂と趣味とは、民と、これを共にせざる可らず。

◉吾輩、大陸に於ける王者の盛衰、興亡の跡を徴するに、人生の、すべての快樂とするもの、王者の一身に集注するは、則ち永續せざる所以なる事を思ふ。力なき者は、讋伏すべく、力ある者、稀に出るときは、則ち代はつて王者たらんとするなり。此に於て、回頭して、三千一系、連綿として不朽なる所以のもの、王者と人民と、その光榮と、趣味とを分つに依ることを思はずんばあらざるなり。

◉雨に、景福宮を出で、朝鮮ホテルに至る。京城の操觚者、諸君、吾輩の爲め午餐會を開く。文辭の交は淡として水の如し。一見、互に、直ちに肝膽を吐く。談笑、春の如く、斯身、帝京を出でて、千里外にあることを忘る。また以て、此の行の一快事として、諸君に謝せざる可らず。

◉ホテルに、男爵原俊丸に邂逅す。彼、今春、上院に於ける高橋首相の二枚舌問題の、點火線として知らる。吾輩の京城に來りしとき、總督、總監、みな在らず。暫らく政治上の無風帶に入る。偶、彼を見るに及んで、中央の政壇を回想するを得るを

喜ぶ。

●微雨に、再び、昌德宮に向ふ。植物園より入つて、李王家の秘苑を見るが爲なり。昨日、南山より望むに、昌德宮の東北一帶、樹色深々として、森、海のごとし。秘苑は、則ち、それなり。

●朝鮮に來りて、秘苑を見るにあらざれば、趣味を窮めたりといふを得ず。秘苑は則ち內苑なり。李王の逍遙するところなり。朝鮮に於ける趣味に點眼するものなり。

其十九

●秘苑は、春秋に、雪に、月に、皆、宜ろしからん。溪谷より遠山の雪を見るとき、月色、林間を透すとき、ともに憧憬するに堪ゆ。僅に、二時間に充たざりし觀賞といへどもその趣味を追想するに、恍惚として、言句を忘れしむるに足る。

●吾輩、秘苑に逍遙するとき、微雨、情を添え、偏へに欣然として林壑と契合し、歸路を失するの思あり。林邱を攀ぢ、幽溪を下り、興趣、到るところに、忽ち新なり。日色、深林を隔てて涼、水のごとし。閑古鳥、頻りに啼く。

●一景改まるごとに、蹊に椅り、池に臨みて亭榭を構ふ。亭榭の名、今、一々、記せず、皆、悠游して、以て、塵緣を絕つに足らずんばあらず。

●蔚然として、峯に聳ゆるの喬木。青波のごとくに松林を浸たす、雜木の森。而して花卉の、精彩を映發するあり、その配合調和ともに渾然として作爲の痕なく、天然の妙構を成す。殊に嵐氣の秀潤なるがために、靜閑なれども、寂寞たらず。此の如き山居、一時の雅懷に留らず、たとへ孤棲すとも、吾に、就辭せざるべし。

●諸友と語りつつ林邱を巡る。綠陰の滴露、ときに顏を掠め、野花、計らず肩に觸る。徑路、緩やかに高下し、踈橋、小泉、豫め約する如くに、出沒するあり。眼界、寬やかに、心舒ぶ。歩々、移るに隨つて生面を開く。

●溪間に、李王の用水あり甘にして冷なり、茗を煮、飯を炊ぐに供す。これを鐵盤の筒に納め、嚴封して、以て、これを守ること仙藥の如くす。

●飛泉あり、小さくして名高き京都の清水瀧よりも瘠せたり。石壁に、題して、飛流三尺逆落一九天云來といふ。支那人といへどもその誇張に驚く。

●吾輩の一行を案內しつつある朝鮮人の小吏、なほ青年なり。高邱に登るに、あるきながら、兩手を、合掌して、口に當て、吹いて、閑古鳥を呼ぶ。カツポー!、カツポー!、鳥と人と相

應じて鳴く。

●微雨、淡雲、なほ纏綿として秘苑に迷ふ。吾輩、苑を出でて李王の宮殿に行く。仁政殿は李王の正殿なり。燦爛たる龍鳳、玉座を繞る。殿に續き、西廊に玉突室あり、王は、今まで、午後の日課として玉突を、試み玉ふ。玉座を撫すれば、王去つてなほ時を經ざるを知るべし。

●導者、吾輩をして奉伺帳に記せしむ。帳を檢するに、勳位者のみなり。吾輩は、布衣の黑頭巾にして、肩書の記すべきなし。乃ち、肩書に換へて、奉伺御機嫌と書す。

●李王には政務なし。閑日月を送り玉ふ。秘苑の逍遙溫室の午餐及び午後の玉突など、日を期し、時を刻して、日々、その正しく繰返して行はれて、違はざること、度、量、衡の如しといふ。むかしは、聖王、禹、身を以て規度となすといへり。李王は則ち閑散なる禹ならずんばあらず。乃ち奉仕帳も亦た、定時その台覽に供するものといふ。併せて、王の爲に、破寂の一端となすものなるべし。

●吾輩、すでに景福宮を訪ひ、秘苑を見、また仁政殿に上る。半島に於ける古王者の業とするところのもの、概ね、これを經歷せり。況んや、玉坐を撫し、王者の水を飲む。僅に、晴と雨と、二日の間に過ぎずといへども、また是れ、居然たる趣味の王者たらずんばあらず。

●仁政殿を去つて、遠く、町に還り、また途に自働車を馳せて奬忠壇の公園に至る。限界、一轉して、平民の舞臺に上る。雨已み、青山綠水、自から風情あり。五月の末なれども、紫藤花盛んに開く。

●芳郎、雄郎、吾輩を導き、歩して小邱を超え、再び町に入る。途、柳街を過ぐ。艶女、裝を凝らして、夕凉に徘徊す。まさに、白馬、銀鞍の公子を待つならん。公子、もし珊瑚鞭を遺却せば、柳條を折つて、鞭ち來るなるべし。北漢山の山色、漸く紫に、夕陽、漢陽の野に滿つ。

●吾輩、苗洞に還りて、靜かに、その一家と、晩餐を共にし、半宵の清話を樂しむの後、夜半急行車に搭して、北行の途に上らんとす。乃ち、柳街を過ぐるも、亦た、倉卒として、急行ならざるを得ず。

●雄郎一笑す。花を觀るは、女を見るが如し。遠くして濛然、近くして華やかなり。乃ち自ら嚮導して、狹巷、小區も、これを歷觀すること、展覽會を見るよりも忙はし。狹巷の小樓、三室の家にも粉黛漲ぎる。譬へば、堤上、野薔薇の咲き滿つるが如し。むしろ遠く望むを妍なりとす。

●吾輩、思ふ。人生の適意、豈、王者たるにあらんや。瑞西の

睡蓮花、咲いて、麗はしく榮ゆれども、水を離るる能はず。喬木の五位鷺、高く、梢に巣うは天國に近づくにあらず、銃丸を恐るるが爲なり。

◉吾輩、昨來、多く、五位鷺と睡蓮花とを見たるに、必ずしも羨むべきを見ず。唯だ、天半の雲と、溪間の水とのみ、羨むべし。蓋し、天下の廣きを以て、毫も累せらるるところ無く、行くべきに行き、止まるべきに止まり、天地を以て、自由の舞臺となすを得ば、斯生、則ち、一百年、一布衣に過ぎずとも、生前の願、自ら足る。死しては、趣味界に南面王たるべきなり。趣味魂、養ひ得て、害ふことなければ、生死を超越し宇宙の間に塞がるべし。

其二十

◉早曉、平壤に著す。崔順貞と暫らく手を分ち、曉霧に、俥を馳せて三松旅館に投ず。大每新聞社の人々、三松を推稱して、鴨綠江以南、懇切第一の旅館といふ。頃ろ、朝鮮の人皆夏服にして、吾輩のみ冬服なるべし。それにても曉寒、人をして殆んど戰慄せしむ。暫らく火鉢の側に臥して、寒を防ぎ、且つ、睡を補ふ。●朝、益城、壺南、及び崔順貞來る。益城は大每の特派員、壺南は大寶捌人にして、壺阪の人。崔は平壤の兩班。昨夜初めて相識となる、吾輩の爲に、星雲樓に東道せんことを約するもの。

◉新知の三友と、先づ商業會議所に往き、公會堂の樓に登り、平壤の市區、山川を展望し、日淸戰の戰蹟を指點す。此の地、山遠く、野廣くして、形勝、漢陽よりも雄大なり。吾輩嘗て、當年の錦繪を撿するに、平壤戰の畫に、大蘇鐵などを描き添たるものありしを思ひ出す。平壤は、寒國にして、栗あり大蘇鐵なし、その頃、邦人、甚だしく、平壤を異域と思ひしなり。

◉鮮人の女學校、小學校及び孔子廟を觀る。轉じて、米國人宣敎師の一區を視察す。學校にては、各敎場を參觀す。京城にて調査したる日鮮、女學生の體格、比較表を閲するに、身長、體重に於て、日人、ともに優れたるものあり。然れども、今、此の學校に見るに、身長、拔群のもの少からず。由來、鮮人、概ね長身逸脚にして、男子の平均體格は、日人よりも長大なり。女は、それほどにてはなし。

◉繁華なる鮮人街を過ぎ、自働車を去つて狹き路次に入る。路次の陰濕なるは甚だし。殊に、昨日の大雨を經て、泥濘、靴を奪ふ。た方、忽ち矮屋を拔き、朱樓の聳ゆるを望む。扁して、箕城星雲樓といふ。菌の家の中に、此の粉壁、朱欄あり。その中に、妓生を畜ふ。俚諺にいはゆる塵塚の鶴といふは、則ち妓生

なるべし。

●星雲樓の門庭、半ば乾ける泥田にも似たり。陋巷の兒女、雜然として嘉戯す。これ則ち朝鮮妓生の第一樓にして、此の中に、欄間に畫かれし天人のような麗人の居るを想像し易からず。

●樓上は、妓生のお座部屋。樓下の正面は板間にして則ち教場なり。星雲樓は、則ち妓生學校にして、歌舞音曲を教ゆ。教場の一隅に假場あり、妓生の券番を兼ぬ。朝鮮妓生登龍門は、譬へば劍工の鍛冶場と同じく、此の如き、雜然たる舞臺にあり。

◉吾輩の前に卓子を置き、倚子に凭る。諸友、傍に並ぶ、大妓、小妓、雜然として出入し、椽端には、路次の男女、集まり觀る。此の時の情調、頗る好奇の詩趣を催うさしむ。庭前、一箇の花弁無く、卓上一瓶の生花あらず。風の吹く花瓣の花の如く、妓生、動いて已まず。

其廿一

●星雲樓の扁額に、妓生の由來を記す。その中に、歌舞や、詠歌や、聖人の遺教に出づとし、民風の感化に裨補ありとなす。その言辭、堂々たる口氣、脂粉の氣を帶びず。箕城は、平壤、箕子の國と、稱す。箕子の事は、書者たり。未だ、その詳を知る可らず。

●横笛、堅々、吹いて已まず、太鼓、續き、老妓、三味線を彈く。妓生四人、冠を著け、手に、鈴を帶びたる短劍を振り、羽衣の袂を飜へして、起つて舞う。二人づつ、相對して進退し、悠揚として、旋回しつつ舞う。掌中の劍、鈴、皆、鳴る。項羽の鴻門會を舞うなり。

●妓生の歌舞、ともに緩やかなり。舞、終はつて、小妓續いて踊る。續いて歌う。すべて是れ、教坊、第一流の選と稱す。平壤の名花、その半を一堂に集む。

●妓生、むかし官妓といふ。官事なくして官位あり、位、頗る高きに上る。庶民は、官妓を聘す可らず。郡守の起居その大半は、官妓と共にす。官妓の細胞、緣族これに由つて、皆、勢を生ず。知るべし韓の國は則ち官妓の國たりしことを。今や則ち官妓、一變して妓生となる。これ、警理するに券番を以てす。然れども、妓生の氣分が[illegible]と異なるは、沒落後の、士族の娘と、町家の娘との如くなるべし。

●妓生は梅花の如し、芳香を以て愛せらる。その名流に至つては容易に來らず、その來るも、粧を施し、衣を整へ、代參に赴かんとする御殿女中の如し。その輕々しからざるが、妓生の聲價なり。

●濃く粧ほひたる雪の妓生は、吾輩、未だ見ず。凉風の妓生は

柔脂にして、軟らかなる肩より垂るる軽羅の筒袖、釣鐘草の花のやうに、ひろがれる、その裳。世のつねの、日本の花には比すべくもあらず。櫻、桃、牡丹、海棠、みな日本の女なり。すぐれたる妓生の印象は、新らしき高山植物の花にも比すべし。

◉然れども、妓生は、古文學の女ならずんばあらず。強き電球の光よりも、軟らかなる蠟燭の華燭に照らされて、その眞味の映えまさるべき女なり。

◉自働車を招けども、期に合せず。乃ち、大同門を觀、江に沿ひ、歩して、牡丹台に行く。崔順貞、東道して、一々、說明す。高山植物の白花、三輪、俥を馳つて、追越して過ぐ。パラソルを傾け、妓笑して、何とか言ふ。先きに鴻門會を劍舞せし女なり。崔、譯していふ。「おひろいになつて、おあついでせう。」車上の傘影江波に映じつつ遠く行く。花影の江を溯ぼるが如し。蓋し聘する者は歩し、聘せらるる者は駕す。駕する者、汗なく、歩する者、傘なし。

其廿二

◉牡丹台に到るの前、左岸、石壁、悉く、大官、兩班の名を刻す。百尺の絶崖にも、また姓名あらざるはなし。彫刻の勞、想像すべしその大多數は自家の記念するもの、而して頌徳に屬するものは多からず。他よりするものは、尊稱を附し、自らするものは尊稱なし。

◉是等の姓名、石壁と江流と、ともに永遠にして、身死し、名すでに朽つ。吾輩、唯だ觀察使、閔泳駿の名を記す。崔順貞、少年時、その父、すでに、これを石に刻す。崔は吾輩よりも若し。吾輩、ひそかに、石壁の名字と、彼の顏とを觀る。記念碑の人、吾輩を導いて碑下に至る。一奇縁なり。

◉牡丹台の山を錦繡山といひ、山前の島を綾羅島といふ。綾羅を眺めつつ、錦繡に攀づ。浮碧樓は、危崖の上より大同江を俯瞰す。大江、遠く萬山の中より來り、山勢、漸く伸びて野となり、江流、洋々として天際に赴く。

◉虛子の小說に名ある、お牧の茶屋に上り、江流を望んで杯を擧ぐ。滿を引いて、長途の健康を祈る。偶、高山植物の花、すでに、吾輩に先だちて、乙密台に上り來る。酒間、鴨綠江節を歌ふ。國語を聽くを解すれども、語るに馴れず、筆を把つて、菊花を畫く。琴、書畫は、妓生の餘技にあらず、本業の一なり。

◉玄武門を見て、乙密台に上る。平壤の雄觀、第一とす。大江の左岸に遠く小野田セメントの烟突を望む。台下には、箕子の陵あり。再び浮碧樓に下る。永明寺を過ぐ。朝鮮、名刹の一、今

一小菴のみ、古瓦の斷片、當年の面影を語る。

●舟を放つて、大同江を下る。綾羅島の柳蔭に畫舫多し。今日連雨、新に晴れ、滿城の人、游意動くらし。平壤の享樂は江上にあり。青年の小艇を操つるもの、輕舸に、妓生を載せて牡丹台下に急ぐもの、絃聲、偏へに、島に沿ふて多し。うちに一舫、皆、女あり、皆、老大なり、置酒して歌舞す。一人、舞うて已まず、興、動いて抑ゆ可らざるなるべし。多くは、これ妓生、老いて人の婦となれるもの。吾が舟中より諦視するを知れるか、忽ち、簾を下す。江風、簾を透して、舞影、模糊たり。

●大同江は、澄江、練の如し。月夕、舟、江に滿ち、歌聲、悉く月を帶ぶるとき、平壤の趣味、これに過ぐるはなし。今日、水增し、濁流、水底を見ず。空しく練光亭を望む。亭下、無數の女、礫に坐し、江水に臨みて、衣を洗ふ。衣を水に浸し、短棒を以て石上に叩く。木石の音、砧かと思ふ。砧の律呂、長江に響いて、岸上の家、皆、動ぐ。

●益城と、共に山田釘次郎を訪ふ。本業は執達吏元と名古屋の人、今、好古家を以て知らる。門瓦、皆、古瓦を以て葺く。門を入れば、壁に沿ふて、古瓦の棚あり、その數を知らず、堂に上れば、悉く古器、古瓦、すべて平壤附近の發掘に係るもの。樂浪郡より高勾麗に至る。上古の文化の結晶、すべて暮色の中に浮ぶ。

●漢、此に、樂浪郡を置く、すでに二千年。高勾麗の起るも、また千五百年。半島、最古の文明、此地にあり。遺址、多くは畑となり、土器、瓦片鍬先より、世に出づ。山田は、蒐集、なほ未だ十年に滿たず、蔚然たる古物の富、半島、稀有の人といふべし。彼は、切に、火難を恐る。此の如き、學術上の寶須らく保全せざる可らず。今日に於ては、朝鮮最古の文化、山田の書齋に在り。

●海州は朝鮮に於ける硯の名所なり。山田は、古瓦を海州に送り、瓦硯を作らしむ。吾輩に、樂浪郡の平瓦、高勾麗の丸瓦との、二片を贈り、その大を墨とし、小を筆と爲すを勸む。吾輩をして、これを用ひて、以て、朝鮮論を起草せしめんとするなるべし。

●二千年後に生れて、二千年前の硯を用ふ、今より二千年の後に、此の硯、或は存するならん。その人、その筆、何ぞ存するを得んや。筆は、英雄。硯は、則ち英雄志を逞しくするの舞臺、英雄は夢となり、山河、空しく長へに存す。山田が瓦硯を作る意、如何。

●山田の古器、多く此に錄せず。吾輩、特に、上古の錢型、頗る珍重すべきものを擇び、撮影して、研究の資料とす。平壤の新生命は、工業にあり。その最古の文明と、ともに、大同江に據

れるを見るときは、大同江は、平壤の血管なりといふべし。而してその新らしき血球は、則ち工業なり。平壤の生命は、その新血球に由つて、甦へりつつあり。

其廿三

●吾輩、鴨綠江畔に於ける、初め多きを期せず。唯だ統軍亭に上り、大鐵橋を渡らんことを樂めるのみ。曉に、平壤を發して、午前に新義州に至る。國境氣分、客心を緊張せしむ。興趣、頗ぶる動く。小川鴨江來え、鴨江日報の主筆なり。善卿晉硯、藤軒知事の命を承けて來り、三人ともに、驛前の樓上に語る。善卿地圖を展べて、江 流域を指點し、趣味の可境を說く。蓋し、善卿は、鴨綠江に於ける富樫介ならずんばあらざるべし。吾が半島の國境における趣味の關守なり。

●義州に到る。藤軒知事及び、磯野、石黑、劉、鴨江諸君と、知事官舍に語る。瓶裏の白櫻花、吾が朱顏を照らす。今年、櫻花早かりし。東京は三月のなかば既に開く。吾輩、東京より櫻花に伴うて南下し、海峽に至る。五月、晚櫻花も亦た落盡して、綠陰をなす。北遊して、鴨綠江に到つて、忽ち、此の花に逢ふ。一年の中、春、再び來る。

●午後四點鐘、善卿、再び吾輩を導き、自働車を驅つて、江岸を溯ほる。行く〳〵江岸の警備を視る。二里にして、駐在所を設く、到るところの駐在所、悉く車を駐めて視察す。四里ばかりにして、玉江鎭に至り、初めて鴨綠江を見る。

●岡に上り、鴨綠江を望む。大江は澎湃として眼前に湧き、乾坤を容る。吾輩、數日來頗る睡眠に飢ゆ、さきに藤軒と、連りに、ヘルビンのウオツカを乾杯し、半醉、陶然として車に上る。車中、勉強して睡魔を拂る。今、此に至つて、豁然として醒む。神氣爽快。一點の睡魔を留めず、秋曉、眠足つて覺めたるが如く、禪僧の悟れるが如し。江神、忽ち吾輩に開悟の機を與ふるなり。

●江波、平野を浸し、長風、白帆を吹き送る。風、逆に江を吹いて、帆影、皆、江に向つて溯ぼる。天際の遠山すべて堤防の如く、白帆のかげより見ゆ。

●江岸、所々、支那人の筏を繫ぐ。筏の上には屋を構へ、一家みな栖る。鷄犬も亦た伴ふ。吾輩、此の筏を思ふ。若し、それに乘つて、一日を江上に送るあらば、また斯生の一奇游たるを失はず。

●鷄、鳴いて、日は江波より上る。犬は、波間の魚を見るに馴る。筏は、舷なし、舷の、極めて低きなり。置酒して殘月に歌へば、月は遠波を照らし、波光杯中に滿つ。波に枕し、大魚、

躍つて、頭上を越ゆ。

●支那筏よりも、日本筏を簡便とす。然れども日本筏は下ること急にして乗り易からず。若し支那人をして、日本筏を御せしめば、その八人を要するところ、日本人は、一人にして、これを能くす。算盤の上にては、日本人、支那人に勝たず、筏の上にては、支那人、則ち日本人の敵にあらず。

●上流の大森林は、天與の富源、それを開拓する爲に、初めて日本筏を江に浮ぶ。江上の大自然のうちに、大膽なる舟夫が、筏を流しつつ、放漫に歌うが、則ち鴨綠江節なり。筏の上には楽器なし。水平線に垂るる青空。青空にまじる波の音、水の光。滿目の波濤にゆられゆく脚下の筏、およそ、これ等の大自然の雰圍氣が、自から律調をなす。故に鴨綠江節を聞けば、鴨綠江の波の音聞ゆ。鴨綠江節は、鴨綠江のレコードなり。

●日支、兩境の雰圍氣を、雄辯に語りつつあるのもは鴨綠江なり。抑も、レコードだけを聞いて、雄辯の權威を論ず可らず。鴨綠江節ばかりを聞きし者、國境の大演壇を占領しつつある鴨綠江の壯大なる雄辯に接するときは、何人も、此の偉大なる自然の雄辯家を喝采せさる能はず。

●江岸の新道は、帶の如く、岡の腰にあり。吾が車は、江波に沿ふて、新道を見上げつつ、舊道を馳す。舊道は、道路にあらず、河原なり。河原なれども、野原の如し。

●滿城鎭は、義州を去る十一里、此の地方の中心地にして、對岸の長甸河口と相望む。新義州より上流、此に至つて、始めて兩國の交際機關あり。河幅、少しく狹まり、連山俄に迫まる。これより上流を望めば、兩岸の山、江を隔てて、互に手を伸べ大江は、千山萬岳を押し分けて流る。若し、大江を移すことを得ば、兩岸の萬山、一齊に握手するなるべし。

其廿四

●滿城鎭より輕舸を馳せて、長甸河口に航す。風、下より吹いて、江流を支え、舟、一直線に、江を横ぎる、平日、此の風なければ、江を渡るには、流急にして、舟路恰も長方形の對角線の如くなるべしといふ。

●國異なれば、乾坤、同じからず。一たび江を渡れば、風物、皆、異なり。雰圍氣を組織するリズム、一變するを見るは、頗る興味あり。長江が國を別つは、則ち乾坤を分つ所以なり。乾坤唯だ人に依る。乾坤の異なるは、民族、異なるなり。

●歸路、舟、箭の如く、再び滿城鎭に航す。郵便局長及び小學校長、來り訪ひ、切に、吾輩に、一宿を勸む。吾輩、鴨綠江の壯觀を喜ぶ。生來、未だ此の壯游あらざるなり。而して帝京を去

つて二千里國境の僻陬に居る諸君を偲む。若し相携へて、江上の樓に登り、燭を剪つて、風物を語り、酒を把つて河伯に勸め、江聲に枕し一、一夜を送らば、河伯、必らず夢に入り來らん。藤軒、約して吾輩を待つを以て、立談の間、杯を擧げて健康を祈り、暮風に自働車に乘る。月無く、江聲、暗夜を揺がす。

◉警察官の防寒外套を借り、吾が冬服の上に纏ふ、適意にして毫も、その重きを覺えず、江上の寒冷なるを知るべし。江に沿ふて馳す。星光、江に落ちて、江波、微に白し。

◉異郷に往き、無數、不知の人を見るは、譬へば水濱の石を見るが如し。語ることありといへども、因縁淺し。その名を識り、その心を語るの人、初めて不滅の印象あり。他年、互に、その面を忘るるとも、宿縁殘る。目に觸るるものは、その心に物理的變化を起すのみ。心に觸るるものは、始めて、心に、化學的變化を生ず。化學的結合にあらざれば、交友といふ可らず。然れども、交友、必ずしも人と人とのみにあらず。一花一草、語らず、笑はず。能く人を留むることあり。山水、木石も亦た、人と深契を結ぶに足るなり。

◉夜風に、江岸に、自働車を奔らす。僻村、人に逢ふことなし、十一里の間、唯だ朝鮮人一人に、山中に逢ひしのみ。八時半に、清城鎭を發し、十時半に義州に還る。

◉江岸の警察官、治安の外、國境の警備に任ず。不逞鮮人の江を渡るを備へ、併せて、貿易品の密輸入を防ぐ。攻る者、隙無し。守る者、乃ち晝夜を舍くを得ず。警察官、卷ゲートルを著け、騎兵銃を携ふ。江岸一帶、太平のうちに戒嚴令を布きつつあるなり。

◉吾が自働車、過ぐるところ駐在所より、氣ヲ付ケの號令聞え、警察官、銃を立て、敬禮を表す。車中に、善卿在るを以てなり。善卿、これに答へ、且つ、鼓舞の一言を發す。

◉吾輩、駐在所の壁上、必らず伊勢大廟、及び石淸水八幡宮の神符を貼するを見て、善卿に問ふ前任の警察部長、石黑英彦國境を守るは、神明の加護あるにあらざれば不可なりとし、神符を頒つといふ。吾輩、つねに守袋を肩にす。此に於て、これを善卿に示す、蓋し、神符に靈あるに非ず。神威の象徴なり。これに依つて、神明を忘れざるなり。鴨綠江の流域、百六十里。赫々たる神威、これを加護す。況んや、警備の緊張、此の如きあり、今後の計、偏に、地力と文化との開發に存せずんばあらざるべし。

◉趣味の鴨綠江は、玆に說き盡さず。吾輩、他日、更に、これを闡明するの機あるべし。嚴冬のとき、大江、全く氷結し、江上に、自働車を奔らすべし。朝鮮人の古詩に、氷、橋となるといふもの、則ちこれなり。此の時、鴨綠江は下界に沈み、日支、兩

國結んで上界の一大銀世界を現出す。吾輩、亦た此の時を以て、縦に、百六十里、江上に、自働車を馳せて、その上流を窮め、氷花の滿開する大森林帶を見んことを希ふ。

其廿五

●統軍亭に登臨するは、義州に於ける第一快心事なり。鴨綠江を隔てて、遙かに九連城を望む。山野茫々、脚下に展開し、國境の形勢、眼中にあり。此に立てば、雄心、勃然として生ず。善卿、乃ち、亭を背景として、吾輩を撮影し、記念となさしむ。

●秀吉は馬を鴨綠江に飲ましむるの志ありて果さず。日清戰のとき、公山縣、初めて統軍亭に上り、三軍を指揮す。秀吉の英魂、知るあらば、山縣を、極めて果報者と思ふなるべし。山縣は、平生、秀吉を崇拜し、その斷簡、零墨をも見んことを思ふ。馬を統軍亭に立るの日、定めて秀吉を追想せしならん。抑、統軍亭の名、太だ雄偉なり。

●朝、善卿來り、導いて、警察官の訓練を視察し、警察部に至りて、不逞鮮人に關する戰利品を一覽し、藤軒及び磯野、劉の諸君に告別し、英庵、善卿、鴨江等と、新義州に到り、大鐵橋を渡つて、安東縣に入る。橋畔のアカシヤ、未だ若葉のみにして、花には遠し。

●藤軒の多才にして、鮮語に巧なるは、義州に於ける、記念すべきものの一なり。彼、初めて、朝鮮に來り、月餘にして、早く、既に、鮮語を以て演說し、朝鮮人を悅ばしむ。今や、諧謔諷刺の微といへども、なほ能くせざるはなく、兩班にも、妓生にも、齊しく警句を鬪はすを得る。吾輩、生來、特に、語學の才に乏し、これを以て、殊に彼に、健羨す。

●國境の州を平安北道といふ。平安は理想なり。然れども、道廳の任、牧民のみに留まらず、國交に關するの事、殊に繁し。これ、平安北道を以て、吾國、地方官に於ける特異の地位となす所以。藤軒及び諸君の健在を祈る。

●鴨綠江の大鐵橋は、その長大なると、開閉するとを以て著聞す。此日、晴天なれども强風なるを以て開閉せず。艇に乘じて、江に浮ばんと期せしも、干潮を以て果さず。

●安東縣より日本を望むも興味多し。昨日、善卿、嚮導して、長甸河口に於ける支那の知事、警備隊司令、稅關等を歷游して、交驩し、此日、英菴の紹介を以て、道尹、領事、副領事等と交驩す。一晝夜の中、再び此の奇游を得る。見聞の富、豫期以上に出づ。

●吾輩、既に江を渡る。これより奉天に游ぶは一投足のみ。食

指、大に動く。先考の忌辰、展痾の豫期あるを以て、再び江を渡りて、南歸す。善卿、鴨江と、昨午前、此に邂ひ、今夕、此に手を分つ。鴨綠江を媒となして、彼我の交、十年、舊知の情無くんばあらず。互に帽を揮り、相望む。吾車、次第に南下す。

其廿六

◉趣味論の難きは、紙切の曲藝のごとくなるべし。指端より、觀念の迸るようにならされば能はず。

◉開城は、既に故都となれりといへども、趣味の朝鮮には、依然として、活ける一の中心たるを失はず。感覺に映ずる開城は、恐らくは、尤も和らかにして、美くしきものなるべし、此の意味に於て、吾輩は、開城を推稱す。

◉開城は、高麗の都にして、その故宮を滿月臺といふ。宮は、北山を負ひ南山に面す。その制、漢陽と同じ。實は、本朝が高麗を奪ひて、都を漢陽に移すといへども、なほ、その舊制に倣ふ。始めて半島を統一するものは高麗。而して開城に都すること五百年。これを今日までの歷史に徵すれば、半島に於ける創造力の權威は開城にあるべし。高麗の後、李朝、五百年の間、開城人の、尤も制服しがたく、その懷柔に苦心したる所以ならずんばあらず。

◉創造に富めるものは、獨立心、強し。開城人は頑固なりと稱せらる。實は、獨立心の强きにも依る。故に、その文化を開發せば、その發達も亦た頗る有望なるべし。

◉開城人は、本洲に於ける、江州人の如し、その創造力は富に傾注す。李朝五百年の間、開城が、遂に漢陽の下風に立たざるの觀ありしは、富の力に依る。高麗は亡ぶといへども、開城は經濟的に、獨立を失はず。實は、開城人、すでに政治上に伸ぶる能はずして、その活路を富に求めたるものならずんばあらざるべし。

◉開城は、昔、高麗燒あり。今、人蔘あり。高麗燒の陶土は、開城の原產にはあらざるべし、然れども、その藝術は開城人に歸せざる可らず。高麗の文化は高麗燒に象徵せらる。故に、高麗の滅後、李朝に、その藝術傳はらず。

◉高麗の末期に、政治上、文治派と軍閥派とあり。軍閥派は、文治派の統領たる鄭夢周を暗殺して、天下を奪ふといへども人臣、未だ、高麗を離れず。李朝は、漢陽に移り、再び、開城に歸り、太宗に至り、遂に、漢陽に定まるといへども、李朝が開城人に對するは、つねに妥協的の態度あり。

◉開城に於ける崇拜の中心は鄭夢周なり。その遺宅は、崧陽書

院となり、殉節の地、善竹橋は完全に保存せられ、その傍に涙碑あり、碑上、涙痕、つねに乾かず。橋上の濺血、今に至りてなほ紅なりと稱す。

●李朝が、かくの如く、開城人に、鄭夢周を崇拜するを許すは何ぞや。これ恰も、彼が、鄭を殺して、高麗を奪ひしの不當なるを、告白すると同じ。北朝は、楠氏を神とするを許さず。德川氏は、石田三成を神とするを許さざりし。

●李朝は、後年に至りては、開城人の聲に和して、鄭夢周を表彰し、善竹橋のほとりに、御製の追慕碑を立つるに至る。開城人の機嫌をとり、これを操縱すといふかも知れざれども、畢竟安協政策たるを失はず。抑、開城人が、鄭を崇拜するは、李朝に對する反抗の意思を發表するものなり。而して遂に、李朝をして、妥協の已むなきに至らしむるは、李朝に、壓力なく、開城人に獨立心の强きを見る。

●高麗の亡ぶるや、開城の志士、李朝に降るを肯んぜず、一洞に籠もり、門を杜いで出でざるあり、これを杜門洞と稱す。

其廿七

●杜門洞は多く世間に知られず、開城の名所をいへば、何人も先づ善竹橋を說く。善竹橋の外、なほ說くべきもの少からず。

不朝峡は、義士、七十二人、李朝に從はず、峡を踰えて去りしところ。登樂岩は、孫登、河樂の二士、宮闕を遥拜して、別を惜み、頭を岩に碎いて、高麗朝に殉死せしところ、近時、これを荒草の中に發見す。およそ高麗の末路は悲壯、慘憺として、頗る詩的なり。

●善竹橋のほとりにある、李朝の、英宗及び最近、李大王の二代の、御製御筆の碑は、年代の相距る百三十年。二碑の藝術味に顯著なる優劣あり、近代、朝鮮藝術の沈衰を象徴すべき好對照なり。

●開城に游ぶ者は、名勝に於ては、滿月臺と、善竹橋とを見ざる可らず。高麗大祖の陵は稍遠し。朴淵の瀑布は近時漸く著はる。朴淵の外、開城の名勝は、概ね、松岳山を中心とす。松岳山は北山なり、京城に北漢山あるに對照すべし。山麓の彩霞洞は幽邃にして愛すべし。成均館は、高麗朝の國學の遺蹟、その規模なほ想見すべし。

●吾輩成均館を訪ひその書庫を觀るに、その規模は大ならず。盛時といへども、藏書の富、推して知るべし。且つ、藏書の整理法見るべきなく、閲讀の便といふよりは、保存を主とす。此の事吾輩、ひとり、開城に於ていふのみにあらず、東洋、古來の風習、概ね然らざるはなし。これを以て、大家の死後、更に

一大家の蝟起するに至るまでは、その藏書は、事實に於て、高閣に束ねらる。書庫を併せて、遺蹟となる。偶、吾輩、成均館に來りしとき、高麗は、古活字の國、文學の國たるを以て、偶此の事を、痛切に思ひ到る。

●南大門に登りて観れば、街路、行人織るが如し。開城の殷盛なるを見るべし。開城の名物、第一、人參、これは世界的といふべし。次は、白菜、次は、桃と栗。栗は本洲には、平壤栗のみ聞ゆ。朝鮮にては開城も相讓らず。開城の栗は大きく、平壤の、小さくて、澁皮の剝げやすきとは、特徴、異なり。

●人參は、朝鮮、滿洲を第一とし、日本、支那、米國、これに次ぐ。朝鮮にては、開城及びその附近を第一とす。故に、開城の人參は、世界の人參なり。試みに、その價格を以てするも開城の紅參は頗る群を拔き、對比すべきものなし。然れども、その聲價の高きは、自から、その販路を制限するの傾向なきにあらず。此事、將來、參政の要目たらずんばあらざるべし。

●開城を繞りて、皆、人參畑なり。苗圃を通りぬけて、滿月臺に登る。臺は、松岳山の山腹に在りて、石壘高く、自から壯快の感を與ふ。京城の景福宮とは、別種の印象を與ふる所以。而して瞻星臺の遺址と、臺下の高麗燒陳列館とは、高麗の文化を眼前に、還原せしむるものなり。

其廿八

●開城に於ける趣味の一日は、回憶するに、なほ恍惚たるを覺ゆ。郡守、山崎三郎、面長松元鶴熊、署長佐土原親則の三人、皆新知の友人、吾輩を導いて、金融組合に至り、その倉庫に保管する高麗燒の珍品を展觀し、南大門に登る。敬德宮は、望見するのみにして、往かず、町を見、新らしき高麗燒、則ち松都燒を見、書肆を歴訪し、遂に金元培を訪ふ。

●東京に於ける觀光の外國人、早稻田の大隈邸を訪問するを例とす。開城に於けるは則ち金元培の家を觀るべし。金は開城第一、則ち、また半島に於ける有數の富豪なり。その建築は、純乎たる朝鮮式の極めて精良なるもの、家風の質素なるが爲め、裝飾の美は少しといへども、堅實の感、餘あり。菌の家とまでいはれたる朝鮮に、此の如き、見事なる建築を發見するは、半島の誇たるを失はず。

●郡守山崎、賓客あれば、則ち導いて、此の家を見せしむ。金は外國語を善くせざれども、開明の紳士といふ。支配人は則ち國語に自由なり。此の日、金、不在、たゞ例に由つて、外房、食料庫附屬建物の一切、佛壇及び、庖厨地下室より内房に及ぶ。その堅緻にして、淸潔なるは、頗る好印象を與ふ。

●此の日、金夫人、内房に待ち、主人に代はり應接し、送つて内門に至る。初め郡守、面長、署長、皆な初對面の挨拶をなす。郡守は半島に在ること廿年、錚々たる朝鮮通なり。未だ、堂々たる紳士の家庭を訪ふの際、その夫人に面會したることなし。金氏、從來、内房を縱觀せしむといへども、夫人は隱れて逢はず。夫人が應接、送迎するは、此の時を以て嚆矢とす。

●金夫人が、斷じて、これを爲せるは、朝鮮の舊習を破り、現代の新空氣に觸れたるものにして、朝鮮、特に開城に於ては特筆すべきことなるべし。吾輩幸にして、此の千載一遇の機會に遭遇せるなり。

●郡守、勸めて吾輩にホミイを求めしむ。ホミイは、草取鍬なり。日本の鍬と鎌とを調節したるが如く、先端、とがりて、淺く地を穿つ。右手にホミイを揮りつつ、左手に草を拔く。その輕快いふ可らず。由來、朝鮮は、無農具の國、唯だ、草取鍬としてのホミイは、恐らくは世界無比たるを失はず。

●支那及び朝鮮街に於ける第一の印象は、不潔の一事なり、唯だ、ひとり開城は清潔、洗ふが如し。人口約六萬の都市、その裏町、小さき路次に入るも、なほ、皆、徹底的に清潔なり。本州の都市といへども、此の如く清らかなるは少し。その土地の花崗岩の砂土にして清麗なると、民力の殷盛にして餘裕あるといふ氣風の堅實にして古雅なるとにも依るならん。

其廿九

●開城に弓場三あり。吾輩、觀德亭と虎亭との二を觀る。觀德亭にて、兩班に請ひ、試に射を闘はしむ。亭は邱山にあり、前は、谷を隔てて、百間の外にあり。兩班、五人、半弓を持し、五本の箭を挾んで亭前に並ぶ、その儀、吾が習射と相似たり。弓は半弓。天に向つて射る。箭は彈道を描いて、落ちて的を穿つ、轟然として響く。

●風貌の古典的にして、寛裕なる兩班、箭を放つの姿態は杜詩の翻レ身向レ天仰射レ雲の一句を聯想す。而してその射の巧なるは意表に出づ。五人の中、五發、四中するもの一人、三中するもの一人、二中するもの二人。蓋し朝鮮人の劍戟は、多くいふべきものなし。三百年前、朝鮮役に、吾が勇士の戰ひしものが、多くは、此の箭に中れるならずんばあらざるべし。

●觀德亭より開城を大觀すれば、搗衣の音に滿城、浮ぶかと疑ふ。衣を濯ぐに叩き、乾かして、また叩いて光澤を生ぜしむ。砧の音、晝夜を分たずといふ。若し、月夕に登臨せば、李太白が長安一片月、萬戶擣衣聲の詩趣は則ち、これなるべし。

●善竹橋、崧陽書院を見、鄭夢周の廟に詣り、その肖影を拜る。

堂々たる風采なり。但し圃隱先生集の卷頭に載するものと、稍その印象を異にす。

◉成均館を過ぎ、彩霞洞に遊び、風景を展望して、午餐す。遠く京城の北漢山を後より望む。此の洞も亦た富人の別莊、今や全然開放して遊園となせるもの、金元培といひ、これといひ、また以て開城富人の民衆化せるを見るべし。別莊は、その二階を西洋風の石造とし、下層を朝鮮固有の溫突式となす。

◉署長、所長は、ともに薩摩の人、吾輩と彩霞洞の山中に、ともに大西郷を說く。蓋し朝鮮に大西郷を說くは、彼の靈に告ぐる所以なり。飯後、快然として山を下り、專賣局に至りて、人蔘の標本を觀る。

◉吾輩、釜山に一日を送る。釜山は關門海峽と對照して說くを要す。東萊溫泉には、一游の時を得ざりし。釜山の人、誇稱して東洋一といふ。およそ、關東の人は、容易に關東一、關西の人は大阪以西第一を口にす、日本一といふに止まる。朝鮮にては屢、東洋一の語を聞く。これまた大陸的なるものの一か。釜山港が、東洋的の大港灣たるは論莫し。

◉朝鮮人、古來、官を崇拜す。官人の天下なり。近世の秕政半島の文化を虛勢したるも、亦た職として、これに由る。賣官は、近世、政治の骨子なり。京畿道もしくは郡市附近の郡は小さく

して、その數多し。以て、賣官の株數を增加す。朝鮮の政治史その美なるものは、測候の一事、瞻星臺の如き、測雨器の如き殊に、全國の雨量測定は、歐洲に先んずること二百年、皆、農政の研究に本づくものありといへども、その弊政より見れば、政府は、一の賣官株式會社なりしともいふべし。

◉近年、宦官廢せられて、野に歸る者、妻を娶るに、爭ふて嫁す。官人といふを以てなり。宦官が官人たるは、蝶、蜻蛉が鳥のうちなるが如し。而して元來、宦官に妻の必要なし、これを以て、離婚訴訟、その新妻に由つて提起せらるるもの、少からず。

◉今の總督政治に於て、更に、多く朝鮮人の爲に、官途を開くは、急務の一なるべし。然れども、朝鮮人、官に對する正當の諒解を得しむるは、また更に、半島の文化開發の爲に急要なりとせずんばあらざるべし。

◉孟子いはく、官守無ければ、綽々然として餘裕あらざらんやと吾輩の朝鮮遊は、則ち綽々然として餘裕ありしものなり。

吾輩、此稿を草するとき、微恙あり、筆路、爲に艱澁し頗る餘裕を失す、顧みて自から笑ふに堪えたり、數日來東京は大雨、關西九州殊に甚し。朝鮮は如何、朝鮮は由來、雨の少き國、雨具の無き國、傘といへば僅に帽を覆ふべき小さき傘のみの國。擱筆に際し、朝鮮遊中東道を辱くせる諸君に鳴謝す。

大正十一年七月九日　黑頭巾再記、

昆蟲の音樂

西村眞次

(一)ハーンさんと緣日と鳴く蟲と

一眼は盲いてゐたけれど、一眼は天上の星のやうに輝いてゐたハーンさんの早稻田學園に於ける講義は、どんなに藝術に一生を托しようとする學生たちを喜ばしたか知れやしなかつた。ハーンさんの日本についての短文は、どんなに我邦の讀書子を喜ばしたか知れやしなかつた。けれど一番私を喜ばしたのは、其講義でもなく、其短文でもなく、其昆蟲についての觀察と記述とであつた。今、私の手許にあるものでは、"Exotics and Retrospectivcs" の中に『昆蟲樂師』("Insect-Musicians")の一章があり、"Shadowings" の中に『蟬』("Semi")の一章がある。私には前者の方が氣に入つてゐる。

ハーンさんは『昆蟲音樂者』に於いて、こんな意味のことを云つてゐる。――『日本を訪問するものは、少くとも一箇所は緣日を見て見なければならない。緣日は夜、無數のランプや提灯の火影に映つて、あらゆるものが美しく見える。此經驗を經なければ日本は分るものでない。日本人の日常生活に現はれる美とグロテスクとの不思議の融合、奇妙と可憐との魅力が分るものでない。そこでは色々の面白いものに觸着するけれど、其中で最も注目すべきは蟲賣りの假舍だ。假舍は鳴く蟲の宿りで、そこからは聲の嵐が流れ出る。』

これが例の短い、氣の利いた、日本流の英文で書いてある。ハーンさんは說き進んで、歷史上の觀察、詩文的の記述を費した後、蟲の種類を擧げて一々それに說明を加へた。之が爲めに日本の蟲は有名になつて、歷代の内閣總理大臣の名前などより汎く知れ渡り、且つ永久に殘ることとなつた。

私がハーンさんに傾倒したのは、日本を好意を以て世界に紹介してくれた點にもあつたが、其主因は昆蟲の鳴き聲について特殊の趣味と理解とを持つてゐたからである。其頃、私は昆蟲の研究を道樂にして、それを飼つたり、孵化させたり、解剖し

たり、習性や音聲の研究をしたりしてゐた。今でも此道樂は夏秋の候になると、勃然として頭を擡げて來るのみならず、新聞や雜誌から何か書いてくれとせがまれる。嫌ひではないことであるから、つい釣り出されて西瓜の皮にあくがれたマツムシが、やがて蟲籠の中で自分を發見するやうな目を見る。

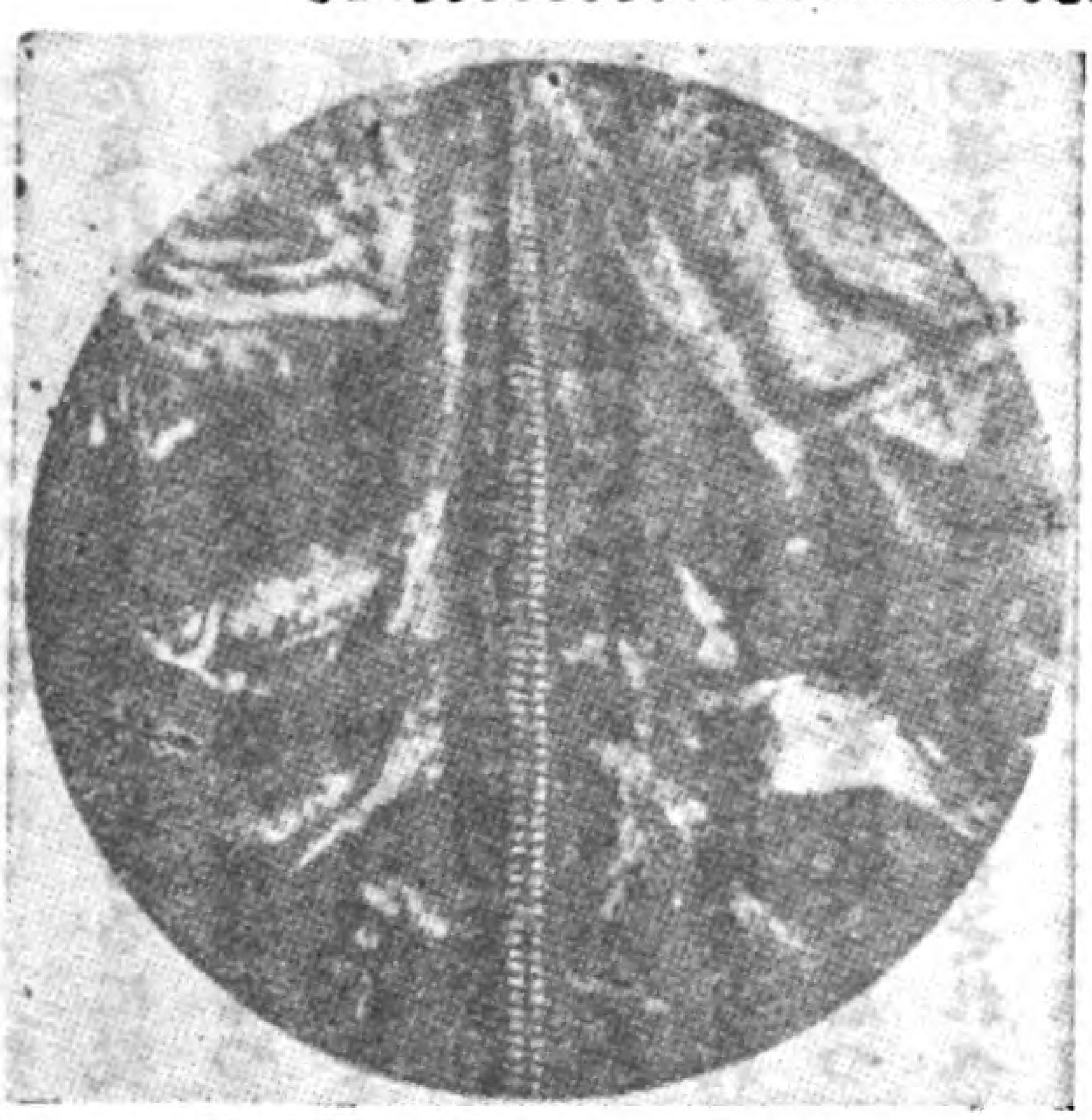
（二）クサヒバリは『銀色』

東京市中では蟲屋から買はなくても、容易に樣々の鳴く蟲を手に入れることが出來る。一番普通なのはエンマコホロギである。秋になると臺所の中まで入つて來るが、夏の中は垣根だの、石垣の間だのに居る。エンマコホロギの顏を廓大鏡で見ると、恐ろしい面構へをしてゐるけれど、肉眼で見ると眼元が如何にもしほらしい。此昆蟲は前翅二枚、後翅二枚、合はせて四枚の翅を持つてゐるが、鳴く時には左右の前翅を摩り合はせて啼く。右前翅の基部に近いところに鑢狀部（第一圖矢印）といふのがあり、それを左前翅の硬質部に摩擦して鳴くのである。鑢狀部を擴大して見ると、アプト式のレールのやうに缺刻（第二圖）がある。

エンマコホロギより〻美くしい鳴き聲を持つてゐるのはクサヒバリである。クサヒバリはカンタンと共に、蟋蟀科に屬する昆蟲の中でも最小さいもので、身長は僅かに二分乃至三分であるから、大まかな人には眼に入らぬほどである。私は子供の時から此蟲を捕へるのに苦心したが、芝生などには此蟲が



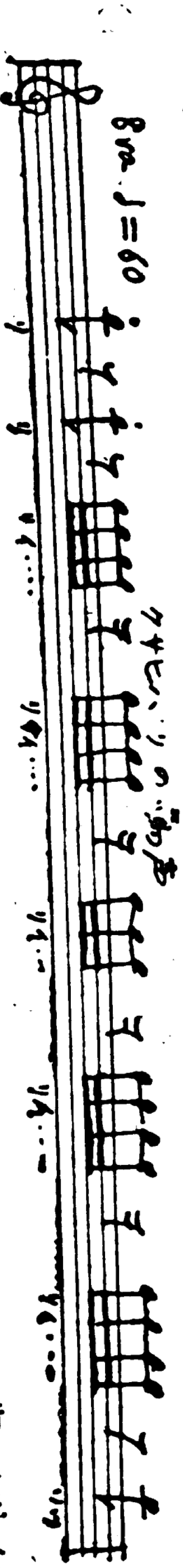
第一圖　コホロギ右前翅裏面



第二圖　コホロギ翅の鑢狀部

一ぱい居るから、まづ手で一撫で芝生の上を撫で、しばらく見詰めてゐると、下の方から驚かされて小さい、黒い、ヒメコホロギを更に小さくした蟲が匍ひ上つて來る。それがクサヒバリである。これの發音器はまだ調べて見ないけれども、大體に於いてエンマコホロギなどゝ同じであらう。蟲の鳴くのは雄であつて、雌は一切鳴かない。雄の翅には美くしい旋滑文樣があるけれども、雌のそれには菱形の格子文樣があるだけである。クサヒバリは二寸と一寸五分との籠に入れて飼ふ、餌は茄子か胡瓜でよい、少量の砂を入れてやると聲がよくなるといふ。

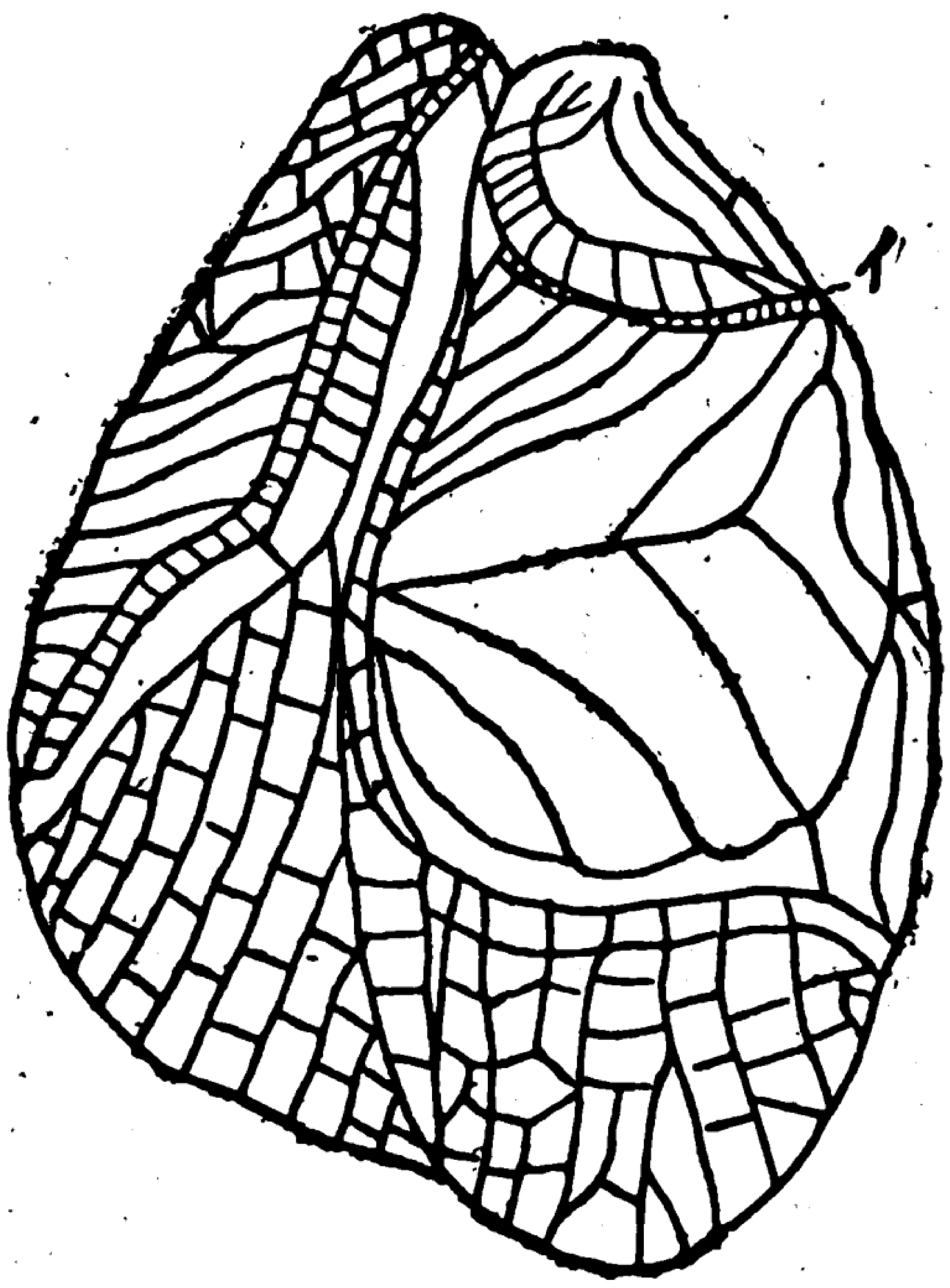
此小さい『點』のやうな昆蟲が、音樂を奏し始めるのは、日の暮れに暑さが衰へて、涼しい風の吹き始める頃からである。書齋へでも置いて見給へ。『此小さい靈魂は蘇つて、室の中は幽かな、何ともいへない玄妙の音樂――たとへば小さい〳〵電鈴の鳴る時にひゞくやうな、薄い〳〵銀色を帶びた音の漣――で充たされるであらう。夜が更けるに從つて、冴えまさる其聲は、家屋全體が時には不思議の共鳴につれて震ひ動くかと思はれるばかりの高調に達し、時には極めて幽かな、眼に見えない聲の綾かと思はれるばかりに細つて行く。いづれにしても、其聲は物に透る性質を帶んでゐる。』からハーンさんは云つてゐる。私は若い時、夜つぴて此聲に聞きとれて、一刻も眠らなかつたことがあつた。故郷の母を懷ひ、なつかしい姉を偲び、其外色々の事を思ひ泛べて、それからそれへと聯想が續いた果て、亡くなつた兄のことなどを考へると、其幽かな聲が冥土から傳はつて來るのではないかといふやうな感じが起つた。ハーンさんは其聲を『銀色』だといつたが、私はそれを『冥土の音樂』だと聞いた。



リイ、リイ、リイと、小さい翅を打ち振り〳〵鳴く聲は、微かながらも鋭くて、耳に入らないほどの顫へが人の心を悲哀と沈默と暗愁とに誘ひ入れてしまふ。シエレイもいつたやうに、『夜』は『死』の同胞であり、クサヒバリは『夜』の同胞である。コホロギ科の昆蟲は、明るさよりも暗さを好み、晝よりも夜を好む習性を持つてゐる。聞く人々の聯想のみではなく、其音色それ自身が既に哀傷であるやうに私には思はれる。

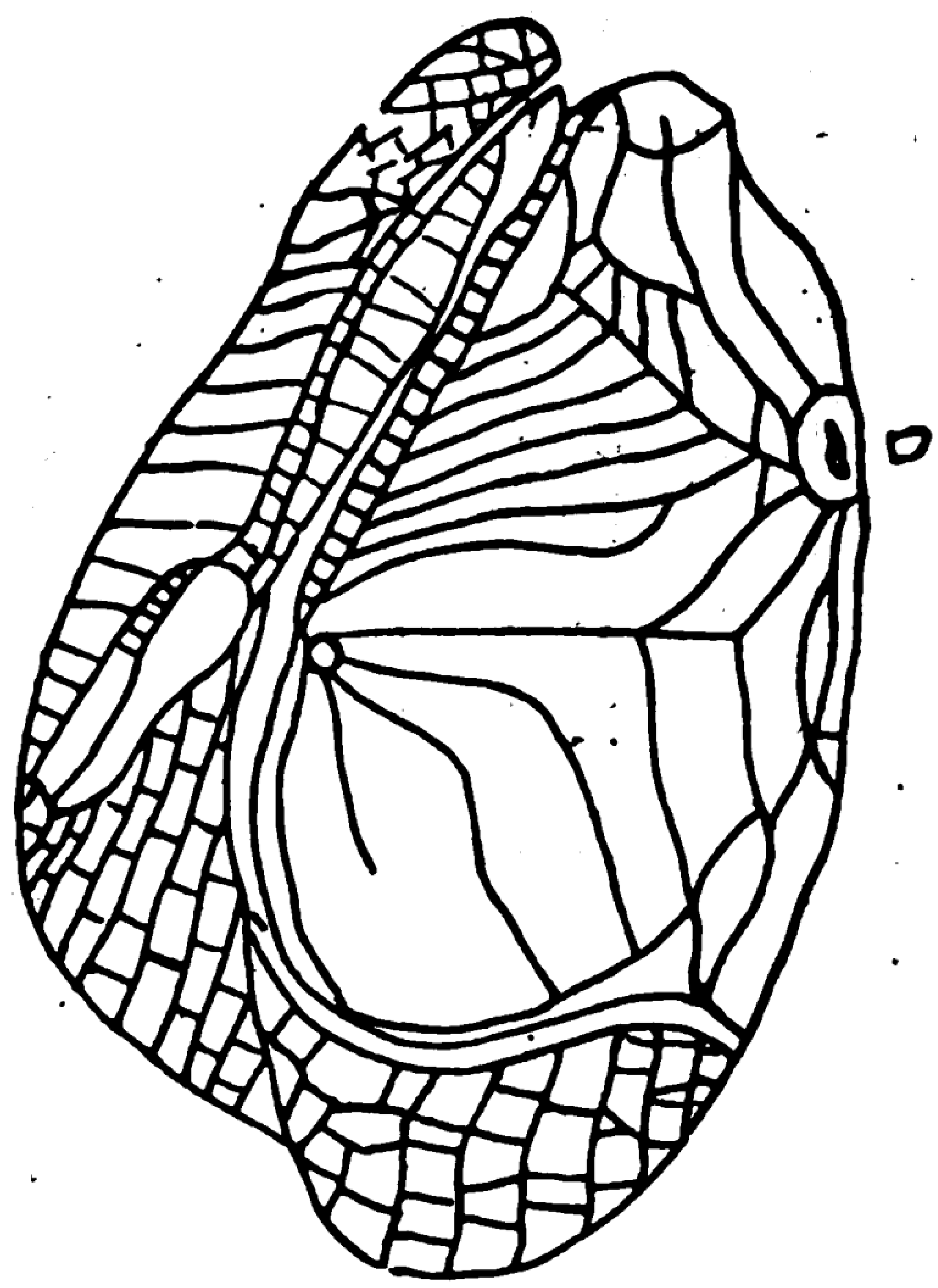
(三)スズムシの發音器

蟋蟀科の中には鳴き聲の美しいものが多く、クサヒバリも可也賞美せられて居るが、最も曲節に富んでゐて音樂的なのはスズムシである。私は曾てスズムシに就いて、仔細に其鳴き方を観察してノートを取つて置いた。此蟲は鳴く時には左右の前翅を直立せしめ、體軀を打振ると同時に、翅の内側の弧形のところを基部に近いところで接觸せしめ、それらを打振つて摩擦せしめる。其時二つの翅が微かに震動して微細な波動を刻む。そこから、あの美しい、清らかな、玉ならば瑠璃を轉ばすやうなリンリンの曲（ノート）が聞えるのである。



第三圖　スズムシ右前翅
(イ)鑢狀部

そこで右前翅をもぎ取つて調べると、内側の基部から横に走つた鑢狀部(第三圖イ)があり、其表面には精緻な凸凹が出來て、ちよつと鑢のやうになつてゐる。次いで左前翅をもぎ取つて其裏面を見ると、耳狀をなせる硬質部(第四圖ロ)一に摩擦部といふのがあつて、それが外縁に沿うて特別に硬く作られ、色が稍々褐色を呈してゐるのを見る。發音の方法はいふまでもなく、此鑢狀部を摩擦部に摩擦せしめるのであるが、硬い兩部が摩擦すると、翅全體が震動して例の清らかな音を立てる。スズムシの聲は振幅も可也大きく、振數もまた多いので、コホロギ科の中では強く且つ高い音の方で、他の噪音に妨げられることがなければ四百呎ぐらゐの距離に聞える。



第四圖　スズムシ左前翅
(ロ)硬質部

スヾムシの鳴聲は通常四斷である。場合によつては多少の相違があるけれども大抵は四斷で、最初の一斷は聲低く、第二、第三は強く鋭く、第四斷に至つて轉廻して調子を下げる。音質は振顫音(トレモロ)で、大きくはないが、細い中にも鋭い感じがする。

Rin — riin — riin — rii ═ Rin — riin — riin — rii ═

かうした風に靜かな夏秋の夜の空氣に、メロヂイの音波をひろげてゆくスヾムシの聲は、進行の速度が遲くて、ゆつたりと迫らぬ趣きがあるが、第二斷、第三斷の間は Crescendo で、最後の一斷は Piano 或は Piano-forte である。音質は非常に露けき場合とか、草葉に翅の運動が妨げられる場合とかの外は、まづ滑らかで、些の濁りを帶んでゐない。與謝野寛さんの若い時分の歌を私は今日でも記憶してゐるが、それは『玉ならば袖に包みておくらばや我が住む野邊の鈴蟲の聲』といふのであつた。此歌の通り、スヾムシの聲は『水晶の音色』とでも云つて置きたい。

(四)英譯小曲『ヒメコホロギ』

一平さんの漫畫は時々子供を育てるのに忙がしい私の妻をにつこりさせる。私に學問の研究が責務であるやうに、妻に兒女の教育が責務であるので、二人は形式に於いてはまるでばらばらなやうな生活を長い間しつゞけて來たが、一平さんの漫畫が機縁で、二人は時々語り合つて破顏一笑する。五六年前のことだつた、例の漫畫の上に『蟋蟀(コホロギ)』とか題した小曲が書いてあつた。文句は忘れたが、

『肩させ、
裾させ、
寒さが來るぞ。
繿縷させ
ちよつとさせ、
針なきや、
買つてさせ。』

といふ風のものであつた。妻の笑顏を見た嬉しさに其晩戲譯を試みたものが殘つてゐる。

"Repair the shoulder!
Repair the skirt!
Cold is coming near.
Repair your tattered clothes!
Repair quickly!
Should you want your needles,

Buy them and repair your clothes!"

ヒメコホロギの鳴き聲は、聞く人の心持でどんなにも聞えるが、昔からツヾレサセと鳴くといつたのは此蟲ではなかつたらうか。英國にもコホロギは澤山ゐるが、大體に於いて Field-cricket と Wood-cricket と Cricket of the Hearth との三つに分ける。第一のものは日本のエンマに當り、第二と第三とはヒメ或はミツカドに類似した小形である。涼しい晩に、ヒメコホロギがヒヨ〳〵〳〵と鳴いてゐるのを聞くと、着物の破れを早く縫はなければならぬような氣がする。

（五）キリギリスと其傳説

夏の暑い盛りにタウモロコシだの、タウキビだのゝ畑で、キリギリスの鳴いてゐるのを聞くと、如何にも暑さうに感じられる。いつかも法隆寺を訪うた時、附近で此蟲の鳴いてゐるのを聞いて、其舊い建造物とぴつたり合致する或物があるやうに思つたことがあつた。キリギリスの聲は、コホロギよりはたしかに男性的であるけれど、どこかに、だるい、眠たげな要素が潜んでゐる。

昔ハタヲリと云つたのはキリギリスのことで、それは鳴聲がギイ、ギイ、ギイ、チヨンと聞え、ちやうど筬と機躡との音に似てゐるから得た名である。キーツの詩に此蟲を謠つた有名なのがある。鳥が暑さに負けて、涼しい森蔭に憩つてゐる時、此蟲が夏の魁をして鳴くので、地上の歌は幸に絶えないと彼れは歌つた。ハーンさんもキリギリスとコホロギとの關係を詩化した傳説について面白く記述してゐる。

キリギリスの鳴聲



『昔、昔、よく働く二人の姉妹があつた。年老つた父親は盲目なので、二人で稼いでそれを養つてゐた。姉は機を織り、妹は着物を縫ふことを仕事としたが、遂には父親が死んでしまつた。あまりの悲しさに娘達は身をいため、自分達も間もなく死んだ。それは或晴れた日の朝であつた。これまで見慣れないものが二人の墓場で音樂を奏でゝゐた。姉の墓では可愛らしい綠色の昆蟲が、機織るやうな聲でギイチヨン、ギイチヨンと鳴いた、それが即ちキリギリスの先祖であつた。妹の墓ではツヅレサセ、ツヅレサセといふやうな聲を出して蟲が鳴いた。それがコホロギの先祖であ

つた。これらの二つの昆蟲が、二人の姉妹の魂から生れたものであることは誰れでも知つてゐる。これらの昆蟲は今日でも昔ながらに鳴き、また娘達は冬の寒い日の來る前に、機場でよく働き、或は着物の破れを繕ふことにしてゐる。』ヘーンさんはキリギリスにハタヲリの名を用ひ、コホロギにキリギリスの名を用ひてゐる。共に古名であつて、今日ではさうは呼ばない。

（六）クツワムシと私の新發見二つ

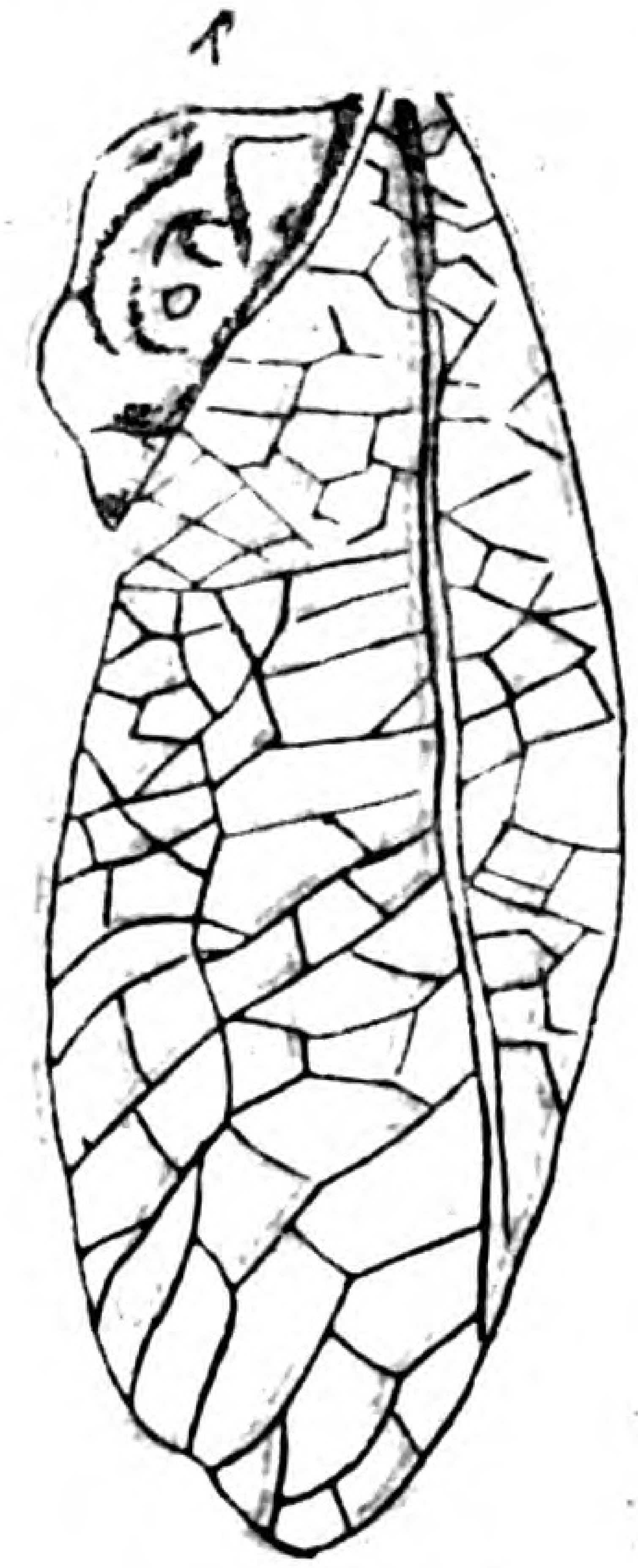
螽蟖科の昆蟲の中で、最も喧ましい、最もせつかちな鳴聲を出すのはクツワムシであらう。鳴聲は聞く人の心持でどうにでも聞えるけれども、昔の人はクツワムシの聲を轡の音に似てゐると聞いたのであらう。和泉式部の歌に『吾背子が駒にまかせて來にけりと聞くに聞かするくつわ蟲かな』とある通り、あのガチヤ／＼曲を轡の音と見立てたからして、クツワムシの名稱が起つたのであつた。

クツワムシの鳴聲が何と聞えるかは、其俗名を調べて見ると分る。一般には此蟲をガチヤ／＼と云つてゐるが、東京の見屋仲間では略してガチヤとも呼んでゐる。支那では紡織兒、或はゴアゴアどいひ、英米では Katydid といふ。各稱の語頭にガ或はゴがいづれにもくつついてゐるところから推すと、此蟲の鳴聲は誰れにもさう聞えるのであつて、如上の名稱はいづれも擬聲であることが知れる。

私は嘗て明治三十七八年役に從軍して、滿洲の野を村から村へと通つたが、戰役の第二年の秋には所謂『塞外』である前仟家窩棚の荒れ果てた小村にゐた。其村は家數が少く、家と家との間には胡瓜畑や南瓜畑があつて、それらの畑ではキリギリスが鳴き、夜に入つて涼しい風が吹き始めると、キリギリスに代つてクツワムシが鳴き出した。其聲が日本のとは少し違ふので、どうかして捕らうと思つたか容易に捕れなかつた。或日苦力の倚んでゐる天幕の傍を通ると、高粱稈で作つた小籠の中に小さな蟲の入つてゐるのが見える。近寄つて見たら、それはクツワムシで、翅が私達の國のものより大分短く、形もいくらか異つてゐた。で、私はそれを寫生して岐阜の名和昆蟲研究所へ送つて置いたら、其報告が密々と『昆蟲世界』第九拾八號（四三六頁）に掲載せられたことを後で知つて、心秘かに愉快に感じたことがあつた。滿洲のクツワムシは身長一寸五分で、全身緑色を呈し、翅が三角形で幅の廣いことが特徴である。

クツワムシは聲が高いだけそれだけ、コホロギなどゝは發音器の構造が異つてゐる。私が七八年前調べて置いたものをノートから拔萃すると大きの如くである。――『クツワムシの發音器

は前翅にある。其雄蟲の右前翅をもぎ取つて見ると、基部が直角に折れて三角形をなしてゐるとが知れる。此三角部は左前翅にもあり、二つが摩擦して發音の作用をするのである。左右兩前翅とも、色は概して綠色を呈してゐる。



第五圖
クツワムシの右前翅
(イ)摩擦部
(ロ)發音鏡

右前翅の三角部(第五圖)は透明で著るしく玻璃樣質を帶び、多少灰褐色を呈してゐるところもある。其中央に當つて、殊に透明な歪圓形の凹狀物がある。これが卽ち昆蟲學者の所謂『發音鏡』で、昆蟲學の泰斗松村松年博士などはこれが左前翅に觸れて發響するといふ風に說いてゐられるが、其實發音鏡(第五圖ロ)は凹んでゐるから摩擦しようがない。左前翅に觸れて音を出すのは、發音鏡の前方にある硬質の凸起物であるに相違ない。だから私は此凸起物を、硬質部或は摩擦部(第五圖イ)と呼ぶとにした。此部が左前翅の鑢狀部と摩擦して發音の作用をなすのである。摩擦部は玻璃樣の透明なもので、其質は頗る堅硬である。

此度は左前翅の三角部を觀ると、其前方に於いて、摩擦部と等しく、玻璃樣の、透明な、微小な帶板狀物がある。此帶板狀物(第六圖ハ)は極めて微密な構造から成つてゐて、肉眼には平滑な面を有するやうに見えるけれど、其實表面は凸凹に富んでゐて、右前翅の硬質部と摩擦してガチャ〱の響きを發するのである。此帶板狀の缺刻を有するものを鑢狀部といふことは、スズムシの場合と同樣である。



第六圖
クツワムシの左前翅
(ハ)鑢狀部

然らば從來發響體と目されてゐた發音響は、何の作用をするかといふと、それは只だ反響の任務を持つてゐるだけで、音樂堂の演奏臺の後にある大壁龕のやうなものである。これらの發響器官は、左右とも破璃樣の透明物質で、蟬科の發響器に見られる薄膜とよく似てゐる。』

こんなことが記されてゐる。廓大鏡だの、顯微鏡だのを使つ

て、せつせと昆蟲の道樂研究をしてゐた日は最早十年以上の昔となつてしまつて、今日では子供が『事によつたら昆蟲學(エントモロジイ)でもやらうかな!?』といふやうになつてゐる。無益なことをしてゐたやうだが、今日人類學の研究に、それらがどれだけ役に立つてゐるか知れやしない。人間には所詮無駄がないのだ。私は一切『過去』を肯定する。

(七)ゴマカミキリの研究

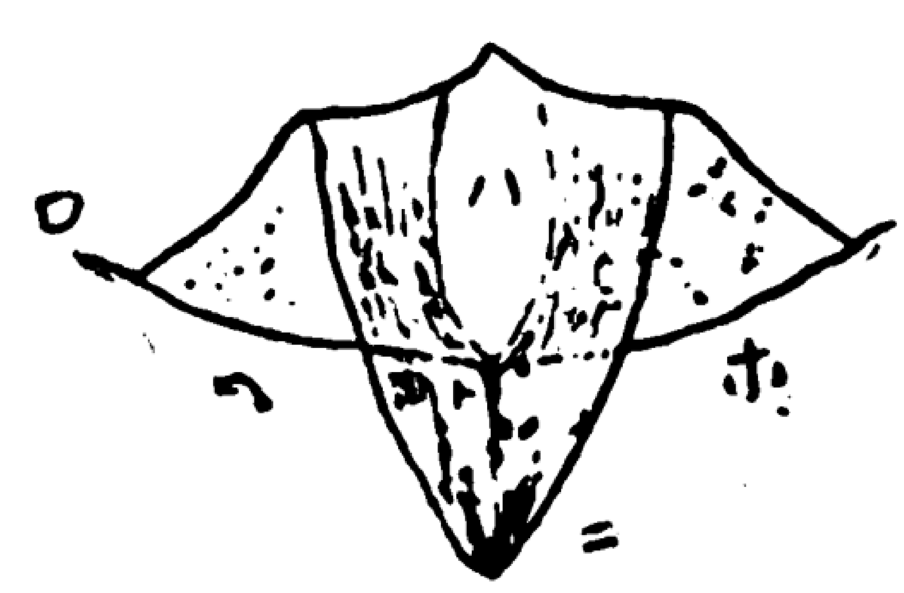
以上は皆直翅目に屬する昆蟲だが、此度は少し品を變へて鞘翅目に屬する天牛科(カミキリ)のゴマカミキリについて述べよう。此昆蟲は、桑、柳、蜜柑などの害蟲で、翅鞘は光澤ある黒色を呈し、白色の紋斑が多い。これは他の同科のものと等しく、胸部の摩擦によつて音を發する。或書には『頭部と胸部との摩擦によつて發音する』と明記してあるけれども、頭部を除いても尚能く鳴くところを觀ると、たしかに胸部の摩擦によつて發音するものである。私は自分を疑ひながら色々實驗をして見て、それが中胸環と前胸環とを摩擦して發見することを確めた。此發音器は主として中胸環の背片にあり、前胸環の背片がいくらかそれを助けてゐる。

例によつて當時のノートから摘要すると、次ぎの如くである。

『發音器の形狀は、曲線の不等邊六角形で、其約三分の二は平生前胸環の裏面に嵌沒して、外面からは見ることが出來ない。此部分は光澤ある黒色を呈してゐるが、外面に現はれてゐる部分は茶褐色を呈し、其質もまた甚だ堅くない。第七圖のイロを綴る線は、露出部と嵌沒部との分界で、此線から下を私は三角部と名づけたが、これは殆ど發音には關係がない。此線から上の中央部が眞の發音器のあるところで、中央のハが最も肝要な部分である。私はこれを摩擦部と呼んでゐるが、硬質部と呼んでも差支がない。

摩擦部は黒色で光澤があり、其長さは約五厘乃至一分である。此部は著しく凸起して摩擦を容易ならしめてゐるが、其左右兩側の後方は三角部と共に微細なる白毛で掩はれてゐる。

又前胸環の背片は、棘刺と棘刺との間にポイント狀の突起物があり、裏面から見ると反對に凹んで空洞をなし、其稍々後方が中胸の摩擦部と觸れて震動する際に微小な音波を反響せしめる作用をする。ひとり此突起物ばかりではなく、前胸環は概し



第七圖
ゴマカミキリの中胸環背片
(イ、ロ)前胸背に掩はるる線
(ハ)摩擦部　(ニ)白色の細毛
(ホ、ヘ)後胸背　(ト)三向線

て蟬の皷膜、氣孔、薄膜などのやうに、反響の幾分を司る反響器と見て差支ない。

ゴマカミキリの發音器、並びに其周圍の背片は、いづれも幾丁質を以て硬化し、加ふるに前中の兩胸環を綴る肉筋は頗る靱强であるから、摩擦の力は甚しく强い。從つて振幅と振數とも甚しく大きく且つ多い。ゴマカミキリの鳴聲が强くて高いのは、全くこれが爲めであつて、イナゴなどは側へも寄れない。此蟲の鳴聲は、ブウ〱或はギイ〱と聞え、强く、高く、耳の底まで沁み入るやうに思はれる。勿論、其聲は優美でないから、これをスズムシやマツムシに比べようがないけれども、內面に不平でも持つてゐるやうな、憤つてゐるやうな、自由を求める煩悶の影が宿つてゐるやうな聲である。スズムシなどに比べると、餘程近代的で、スズムシをベートーヱンに較べれば、これはマスネーにでも較べられようか。』

こんなことが圖入りでごた〱とノートに記されてゐる。私も隨分根氣强く道樂を續けたものであつた。回顧すると、ぞつとするやうな、しかし又、懷かしいやうな氣もする。

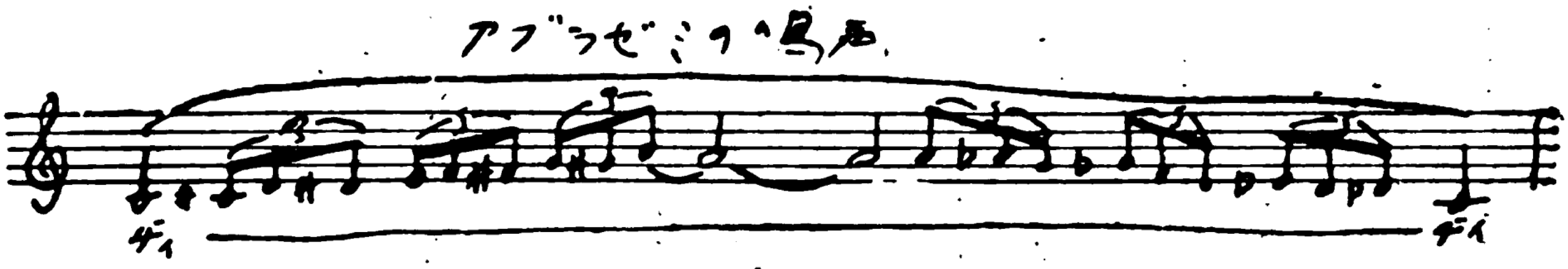
（八）蟬の鳴聲と其曲譜

夏から秋へかけて直翅目と匹敵するに足るだけの樂師を持つてゐるのは、有吻目に屬する蟬科である。此科の中には數多くの鳴く蟲がゐるが、東京などにはゐないものもあつて、私の生態についての研究は全部に行き渡らなかつた。

東京で最も普通なのはミンミン、アブラゼミ、ニイニイゼミの三つであるが、今年は早稻田の研究室でハルゼミの鳴いてゐるのを聞いた。秋になるとヒグラシも鳴き、ツクツクボウシも鳴く。私は、少年の日にあの黑い、輝かしい、胴體の大きいクマゼミが大好きで、毎日〱日に照らされて、眞黑になつてそれを捕り步いた。多い日には一日に十匹も捕つたことがあつた。

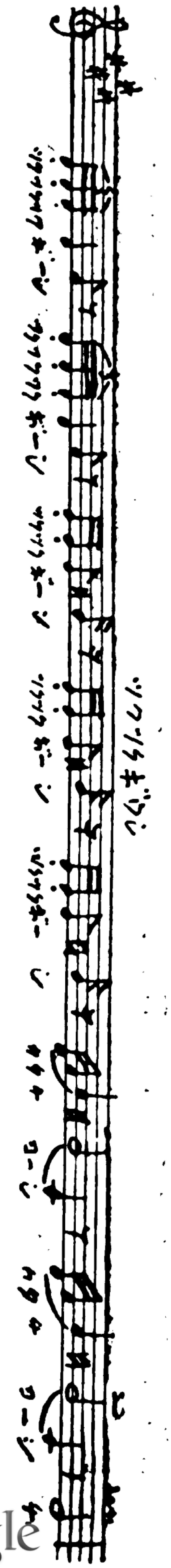
私の子供も矢張り無暗に蟬が好きで、長男が八九歲の時には、自分で黐竿を持ち、妹に蟲籠を下げさせて、お供を連れた長者の格で、每日々々矢來町界隈を練り廻つてゐたのを記憶してゐる。かうして捕つて來た蟬を、彼等は籠に飼つて大小を比較したり、鳴聲を眞似したりしてゐるのを見て、私は遺傳といふものの爭はれないものであることを知り、獨りで莞爾としたことがあつた。

蟬の中ではアブラゼミの鳴き聲が一番簡單である。私の友達の一人小松耕輔さんは、曾て私の爲めに蟬の鳴聲を多少樂化した一曲譜を作つてくれた。其アブラゼミのノートは次ぎの如くである。



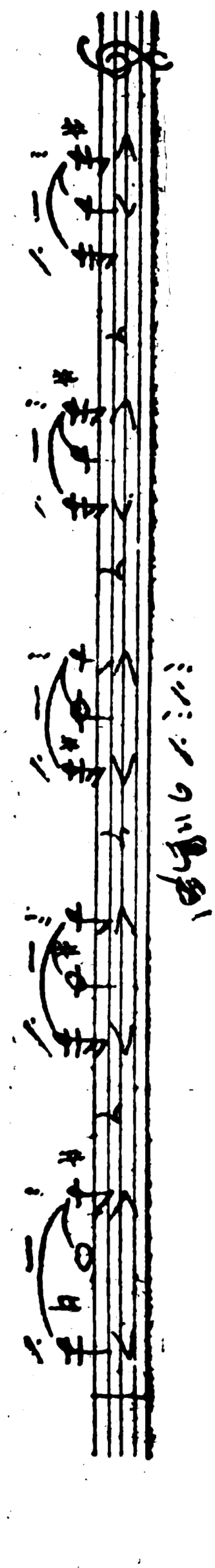
アブラゼミの聲は、豆腐を油揚げしてゐるやうに、熱い、蒸苦しい、骨の髓まで滲み込むほどの壓力に富んでゐる。『あの聲で露が命か油蝉』とは實によく穿つた句である。しかし、かうした聲がさまで不美に感じられないのは、鳴く季節が盛夏であつて、候氣と鳴聲とが一致してゐるからである。若し強ひて蝉の聲を他の何物かで譬へるとしたら、それはたしかに『暑さ』に配することが出來よう、色彩ならば『赤色』に比べることが出來よう。いりつくやうなアブラゼミの聲は、黑い夏には眞平だ。雪に掩はれた冬季に想像して見るのが適はしいほどの聲だ。それほど此昆蟲の聲は壓迫的であり、強烈の力に富んでゐる。

次ぎに掲げたいのはミンミンの鳴き聲である。ミンミンはアブラゼミよりはいくらかメロヂイが整つてゐるが、矢張り簡單なもので、樂的價値はさほどに大きくはない。此蟲の聲はカナカナと同一程度のもので、形式も抑揚も數も殆ど相均しい。今其調曲を多少樂化して次ぎにかゝげる。



これも小松さんが作つてくれたのである。ミンミンはクマゼミと生態がよく似て居り、たゞ色が綠色を呈してゐるのが異つてゐるだけだ。壓迫するやうな、熱烈な音色が、こんもりと繁つた林から洩れて來ると、骨の髓までも暑さが沁み込むやうに感ぜられる。

蝉の中で一番鳴聲の複雜なのはツクツクボウンであらう。此蟲の聲の美くしさは、第一に形式にある、即ち繰返して幾度もやること、音數が一定してゐること、歌の終りに形式の變つた鳴き方をすることなどである。鳴聲は人によつて聞き方が異ふが、普通にはツククツクホウシと鳴くと云はれてゐる。



始めには稍ゝ低くツクツクツクツクボーシを二度ほど繰返し、然る後にツクツクボーシを幾度となく繰返し、終りが近づくとカタキンヨーン、カタキンヨーシと二度鳴いて、最後に捨臺詞のやうにチと鳴いて發音を止めるのが通常である。ツクツクボーシの鳴聲では統一があつて、一番音樂的價値が多いといはれる。終末のカタキンヨーンは如何にも聞き苦しいので、私は此頃それをカタチヨーシと改めることにした。

處によつては、これをツクシコヒシと聞いてゐる。そこから一つの興味の多い說話が生れた。——『昔、昔、筑紫の男が家を遠く離れた旅の空で病んで死んだ。其男の靈魂が秋蟬となつたのであるから、それで筑紫戀し〱と鳴くのである』とハーンさんは極めて簡單に述べてゐる。

ツクツクボウンとカナカナとは形が非常によく似てゐて、素人目にはちよつと分らぬほどである。蟬の中で一番瘦せぎすな、小柄な方で、其鳴聲ば一番大きい。これらの聲は發音器の構造でそれ〱異つた音色を持つてゐるが、概して云へば鱗板といつて、腹についてゐる鱗狀の小板が、長ければ長いだけ聲が清く、銳く、短かければ短いだけ聲が濁つて太いといふことが云へる。これらの蟬の發音器については、朴澤三二さんが詳しく調べて卒業論文にされた。それが先づ蟬の鳴く器械についての研究のオーソリチイであらう。

(九)童謠と蟲聲と音樂と

日本人は安價な享樂に滿足する點に於いて西洋人に優つてゐる。同時に日本人は、西洋人よりも一般に美を解する能力に富んでゐる。車夫が夕燒の空を見て其美に打たれてゐるのを見て、或西洋人は日本の勞働者の美に對する理解の深いのを稱揚し、『これだから日本は美術の邦になつたのだ』といつたといふことを聞いてゐる。ちよつと緣日に往つて見ても分る通り、蟲屋から每晚買はれて行く蟲籠は、皆市民の家に運ばれて其軒先に吊され、無邪氣な少年少女、戀に悶える若者、終日の活動につかれた夫婦、老いと倦怠とに寢られぬ老人——それら全家の人々を夜な〱慰めるのである。江戸時代市民の唯一の文學であつた俳句を見ても、虫の音を謠つたものが甚だ多い。日本人は

蟲の音をちよつと聞いても、直ぐにそれから美感を牽き起すのである。

けれども西洋人にはさうした美を了解する力がない。夕日が赤々と輝いてゐても、秋蟲が美くしく鳴いてゐても、それらから美を味ふことが出來ぬ。日本人は殆ど努力せずして、先天的に自然美を愛し、理解し、受納する力を持つてゐるのである。かうした私達の眼から觀ると、西洋の詩集に蟲の音を歌つたものが比較的に少いことに氣注くであらう。英詩にはキリギリスだの、コオロギだのが出て來るが、それでも其分量は甚だ少い。つまり都市生活、物質文化が西洋人をつめたい、味のない、硬苦しいものにしてしまつたのであらう。

美にあこがれ、美を理解する傾向は、少年の日から養はれなければならぬ。日本の子供が蝶を捕つたり、蜻蛉を釣つたり、鳴く虫を飼つたりするのは、どんな方面から見ても有益なことであるが、比較的に耳の發達してゐない日本人の子供には、先づ色よりも音に對する注意を喚起せしめて、今日以上に音樂を理解せしめなければならぬ。それにはもつと擬聲樂を盛んにして、幼い子供の頭に音樂的興味を起さすに限る。

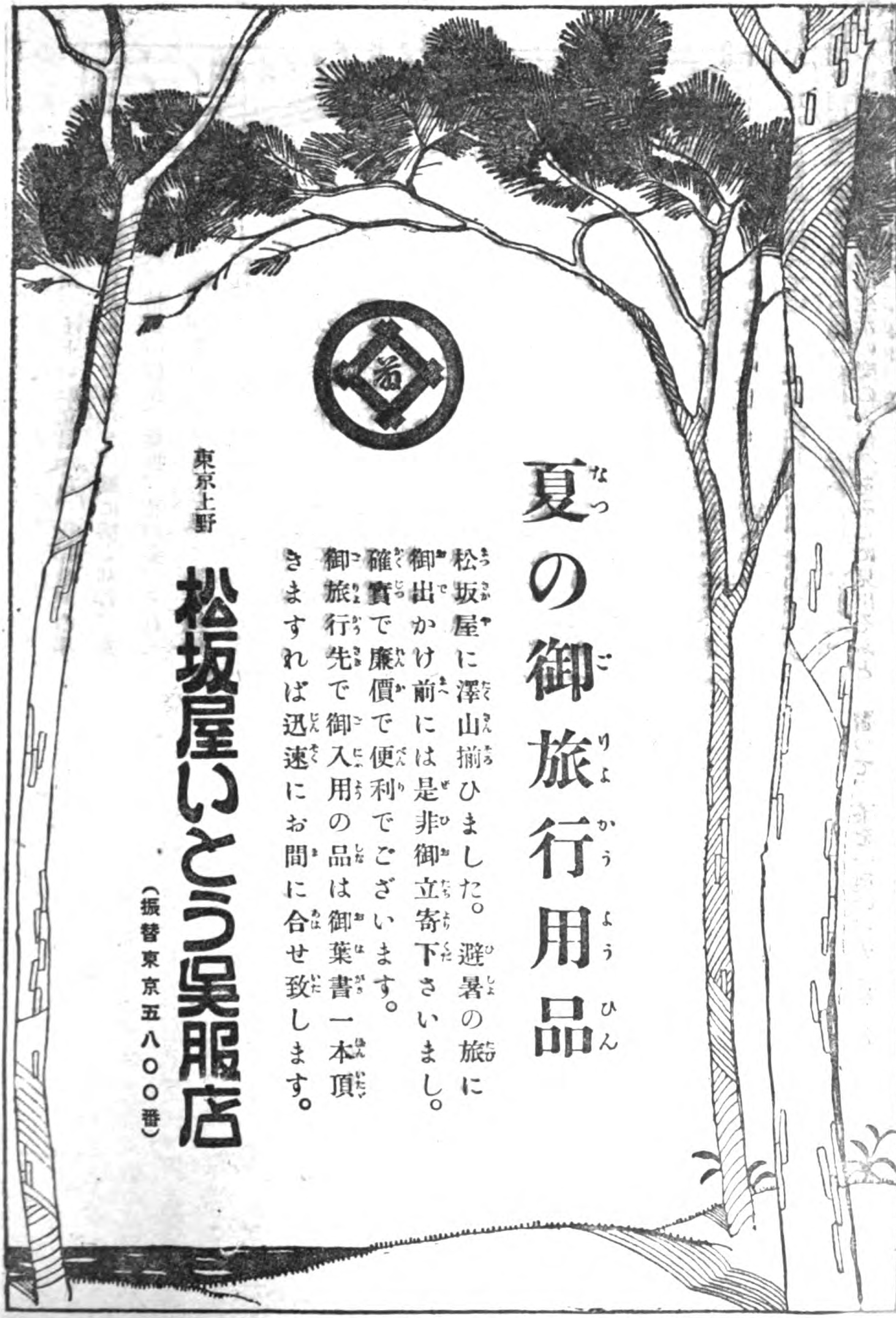
私は童謡については、可也久しい前から注意を拂つてゐるが、大抵の童謡は『大人の童謡』であつて、『子供の童謡』ではない。小學校の教科書の中にもいくらかの歌があり、それらは皆作曲して唱歌としても教へられてゐるが、子供の世界からは少し懸け離れ過ぎてゐるやうである。も少し子供々々した、無邪氣な、聞けば直ぐ分るやうな文句で、其曲節は自然の擬聲であるやうなものが欲しい。鶯の歌や、蟲の歌には、ホウホケキヨーやリーン／＼を使つたものもあるけれども、あの調子をも少し濃厚にしたらどんなものであらうかと思はれる。

音樂者はよく擬聲樂を卑めるけれども、ヘルズオーギの『郭公と蟋蟀』は、ポルカの小品ながらも鳥聲と蟲聲とを藉りて、秋の夕べの荒涼たる氣分を現はして居り、リエイデルの『森林の反響』は、森中で群鳥の啼いてゐる樣を樂化して、云ふに云はれぬ妙味を發揮してゐる。『禍』のシムボルとまで思はれてゐる鴉の聲――あの不快、不吉、『死』を聯想する鴉の聲さへも、天才の手には立派な材料として採用せられてゐるではないか。鴉の啼き聲はオボヱによつて最もよく現はされ、ちやうど木管樂器、或は蘆笛の持つてゐる音に似た性質を帶んでゐるので、樂聖ハイドンは其作オラトリオ『四季』に於いて、鴉の啼聲に顯著の位地を與へてゐる。彼れはたゞに adagio ばかりではなく、長いソロに於いてさへも鴉の啼き聲を用ひてゐる。



かうしたハイドンの立場から、我邦の秋の草原を觀たらどんなであらう。風に搖ぐ刈萱、女郎花、萩、桔梗の枝振、葉振、花の姿、それらの下に可憐の翅を打振り〱して鳴くもろ蟲の聲——それらの色、音、空間の美は、皆これを音樂化してしまふことが出來るではないか。私は曾て試に燕の童謠を作つて、それに燕の鳴聲と似通つた譜をつけて子供に歌はせて見たら、子供らは苦笑しながら其歌を唄ひ試み、段々とそれを自分達に適したやうに改作していつたことがあつた。此經驗から見ても、蟲聲の樂化といふことは有望でもある、また必要でもある。

何しろ昆蟲——小さい昆蟲に親炙するといふことは、色々の點に於いて私達に有益な結果を齎らす。科學的の觀察眼も段々と鋭くなつてゆき、藝術的の鑑賞力も次第に增していつて、そこから色々の、新らしい、從來考へつかなかつたやうなことを思ひ浮べて來る。此晩夏初秋には、せめて一夕の閑を割いて、クサヒバリの鳴々聲にでも耳を傾けて見給へ。必ず云ふに云はれぬ默示をそれから得られるであらう。


夏の御旅行用品
松坂屋に澤山揃ひました。避暑の旅に
御出かけ前には是非御立寄下さいまし。
確實で廉價で便利でございます。
御旅行先で御入用の品は御葉書一本頂
きますれば迅速にお間に合せ致します。
東京上野
松坂屋いとう呉服店
（振替東京五八〇〇番）

千利休論

——茶の湯の考察——

西川一草亭

寢起きするとか飲食其他の用事を辨ずるとか云ふ意味の他に各自の家と云ふ物にはもつと違つた深い意味がある様に思へる

建築家は是を表現の目的物として取扱ふとするが、そんな意味でもなしに、自己の身心を休めるよい休息所であると同時に、其すべてが、廣狹大小は元より形も感じも自分の心にぴつたりあてはまつた、自己の輪廓の擴大した物と云ふ様な意味に、各自の家を見る事は出來ないだろふが、そして生涯にそんな家が持ちたいと思ふのは何も贅澤な意味では無い、人間としては極くあたりまへな要求ではないかと思ふ。

多くの人の中には西行、芭蕉の樣に家を捨てゝ、家に何等の執着を持たずに、一生を放浪の旅に暮して充分に人生の愉悅を味ひ得たろふと思へる人も有るけれども、家に執着を持ち、家の内外をきちんとした氣持のよい物にする事によりて、初めて心の落着きを感じ、人間生活の樂の大部分をそこに見出そふとする人も少く有るまい。そふ云ふ考を最も多量に持ち、且つ夫を實行して多くの追從者を出したのは千利休であると思ふ。

尤も利休には紹鷗、珠光と云ふ一二の先輩が有つて、利休は其の先輩の行爲を學んで、夫を大成したに過ぎない觀はあるけれども兎に角其中の代表的人物と見る事に異論は有るまい。

千利休と云へば誰しも日本の茶の湯を連想するだらふ。今の茶の湯は此利休の茶の湯を傳へた物で、其目的は家を愛し、家の中の生活を整つた、座敷物にする事によりて其すべてを享樂する點に有ると思ふ。併し長い月日の間に其本來の目的を誤つて、可なり不自然な畸形な物になつたのではないかと思ふ。

現今の茶の湯を考察すると夫は二通りに分れて居る。一は只無暗に珍貴な骨董品を集めて其趣味に耽る事と、一は其作法を習つて、茶を一種の行儀作法と解釋する事である。何れも茶

の靜閑な氣分を味ひ樂むと云ふ事は有る様だけれども、餘り一事に拘泥する結果、本來の目的に遠い物になつて居る。成程器物を選擇して氣持ちのよい物を使用すると云ふ事も、生活を享樂するには必要な事だし、夫等の器物の位置、配合を考へて、夫々適當な位置に置いたり、起ち居も成丈け落着いて靜にする事も必要に違ひない。併し一個の茶碗、一本の竹の茶匙に何千圓と云ふ様な大金を懸けて、其品物の優劣で茶の湯の價値を論じたり。丸きり個人の自由を束縛して、柄杓の持ち方から、食事のあとの膳椀の重ね方に迄流義を立てゝ、千百人の人を其型通りにあてはめ様とする様な事は茶の湯の趣意ではない。そんな事は却て生活を整つた、正數物に仕様として、却て是を畸形にする物だと思ふ。

不自然な生活、畸形な生活が茶の湯の生活ではない。

較ゝ正鵠を得るに近い物と雖も、日常生活の形を具へた一つの遊になつて居て、日常生活其物として茶の湯を認めて居ない。私は利休の茶の湯は、日常生活の形を具へた遊びでなくて、直ちに日常生活其物であると思ふ。日常生活の向上、又は改造によりて正しい生活を享樂する事であると思ふ。

茶の湯の行事は可なり多岐に渉つて居て、建築、造園から工藝美術の鑑賞、飲食の調理、起居動作に迄及んで居るが、最簡單に是を說明すると、第一は茶室を設くる事である。其部屋は大小廣狹の差別はあるが、四疊半位の部屋を最も理想的な物として居る。四疊半位の部屋なら、何事も人手を借りずに自分一人で簡單に用事を辨ずる事が出來る。此處に必要な器具を整へ、水を運び、火をおこして客と飲食を共にする事である。其き並べて見るとそんな事は皆日常の茶飯事である。

床に懸物を懸け、花を挿けると云ふ事も、茶人に依りて始められた事でなく、足利以後當時の武家生活の慣例になつて居た事で、茶の湯は只夫を簡易にして、一切の無用な物を省き、室も出來る丈け小さくして、すべての行事を人手をかりずに自分自身に辨じて、そこに日常生活の眞味を味つたのが茶の湯の生活である。そして建築、庭園から、器物の選定、起居、動作の上に迄自己を徹底させて、自己の輪廓の擴大した物と云ふ様な意味に、家の中の生活を自己の趣味、性格にキツチリあてはめたのが利休の茶の湯である。

利休が爐の中の灰の仕方を考へて居た時、偶々どこかの海岸を通り合せて、其砂濱の砂の模様から灰の形を工夫したと云ふ事は可なり有名な話であるが、此一事に見ても利休が如何に些細な點に迄自己を徹底させたかと云ふ事が解るだろう。

一個の茶碗の持つ輪廓の線の堅さ柔かさから、其面の現はす表情の上に迄自己を徹底させて、苟も自己の趣味に合はぬ、自己の性格に合はぬ物は用ひなかつたと云ふ事も想像されるし、茶匙の持ち方、箸の上げ下げ迄自己表現の意味に取扱つたと云ふ想像もつく譯である。此點に於て茶の湯は利休に取つて一つの藝術だつたと云ふ事が云へるだらふ。

利休が茶の湯を創始する上に、最初其考に上つたのは簡素にして要領を得た禪僧の生活であつたと思ふ。今の社會でも、當時の社會でも、家の中の生活に就て要領を得た無駄の無い生活を實行して居た者は極めて少かつたに違ひない。當時は殊に階級の差が甚しかつた上に、戰亂が絕へなかつたから、下層の生活は今よりも或はずつと慘めな無自覺な物であつたに違ひない。家は只起居の用を辨ずる丈けで、夫以上の事は何事も考に上らなかつたろふと思ふ。只或階級の人々のみが、豪華な生活を送り廣々とした殿堂の樣な邸宅を造つて、美術の精華を集め工藝の粹を拔くて、まだまでも滿足を得ず、遠く支那、和蘭の珍貨な器物を寄せ集めて、花の樣な生活を送つて居た事が想像される。東山美術、桃山美術など稱して現存するものも、實は一般社會の好尙が進んで、自然に夫等の藝術を發生した物でなくて、足利氏、豐臣氏など云ふ一家、一族の豪華を極めた生活の裝が殘された物に過ぎない。

而かも其貴族の生活、富者の生活が眞に幸福を得て居たかと云へば、今の貴族社會の生活、富豪の生活から想像しても知れる如く、只徒らに形式に流れて、冗慢無用の事が多く、苦痛を伴ふ事さへ多かつたのを見て、利休が眞に家の中の生活を樂むには、却つて佗の生活、卽ち下層の貧人の生活の爲る事を悟つて此に始めて佗の茶、草庵の茶の湯を提唱して、四疊半、或は二疊、三疊の小庵を建て、破れた茶碗、竹の茶匙でも用を辨ずるとして、極端な簡易生活を工夫して、自ら夫を實行したのであるが、其實行の上に顧みられたのが禪家の生活であつた。有らゆる階級を通じて最も簡素な生活を營んで居るものは僧侶の生活であるが、就中禪僧の夫が最も簡潔にして要領を得て居たと思ふ。

尤も茶の湯を最初に創始したのは南都稱名寺の僧珠光であつて、利休ではない。珠光が自家の僧侶の生活を基礎として、夫に一種の趣味生活を加味して茶の湯を工夫したのであるが、利休が其跡を受けて夫を大成するに就ては、自分も大德寺の古溪和尙？に參禪して親く禪家の生活を體驗して是を茶の湯に應用して居るのに見ても茶の湯の多くの部分が禪家の生活に基礎を置いて見る事が辨せられるだらふ。

利休が茶の湯の上に標語として揭げて居るのは和敬淸寂の四字である。和敬ば人と人との交涉、主客の關係にはめた言葉で、淸寂の二字が茶の湯の全體に懸つて居る、淸潔と閑寂が茶の生命である事を云ひ現はして居る。是こそ日本のすべての藝術、すべての事物の上に最も大きく現はれて居る、日本人の特性で有つて、茶の湯は殊に能く其特殊な性僻を現はして居る。

利休の茶の湯は簡易生活に立脚して、生活の眞の樂みが其簡素な中に有る事を主張すると同時に、貴族階級の形式的な生活に對しては其冗慢無意味な事を反省せしめ、下層の自墮落な無自覺な生活に對しては、其向上開發を計り、すべての人をして家の中の生活を享樂せしむる事が其使命であつたと思ふ。

然るに實際は實生活に何のかゝわりも無く、茶の湯は茶の湯であり、日常生活は日常生活で對立して、茶の湯が簡素な要領を得た物であつても、夫を以て日常生活の改造に資する事も無ければ、日常生活の整理にも役立て居ない。全く別な遊びとされて居る、又全く別な物だと云ふ點に茶の湯の眞の樂みが有るのだとさへ思惟されて居る。繁雜な日常生活の外に、別に一つの靜閑な境地を造つて、其靜閑な別天地を樂み味ふ事が茶の湯の目的だとせられて居る、是は至極尤な見方で、今の世の中に茶の湯の存在する理由はかゝつて此點に有るのである。若し此一事を除けば、茶の湯は實に無用の贅物である、此多忙な世の中にどうしてあんな悠長な時代を無視した遊び事の存在が許されるだらふ。

併し乍ら翻つて利休の生活を考へると利休に茶の湯の生活以外、そんな繁忙な日常生活と云ふ物が別に有つたとは想像されない、少くも利休に取つては茶の湯は其日常生活である、日常生活の外に存在する遊びではなかつたと思ふ。

それならどうして實生活に益する事が無かつたかと云へば、たゞに實生活に裨益する事が無かつた許りでなく、却て世の中に贅澤を奬めて居る樣な反對な結果をもたらして居るかと云へば、茶の湯の眞意、利休の眞意が末流の人々に徹底的に知られて居なかつたと云ふ理由もあるが、一半の責は利休にも有るのである。そして利休にはそんな思想が有つたと見へて、南坊宗啓と云ふ利休の弟子が利休の言葉を一々書留めて置いた南坊錄と云ふ茶間の中にそんな意味の事を話して居る。

兎に角利休は、佗の生活、草庵の生活に人間生活の眞味の有る事は悟つたけれども、そして或點迄夫を實行したけれども、

眞に其處に安住する事が出來ず、豐公の如き權勢家に附隨して豪華な生活の渦中に出入し、其人の意を迎へるに汲々として居た事實の認められる事は、偶々利休の不徹底を證するものだと思ふ。

眞の侘、眞の草庵の生活を實行したのは、利休よりも、利休の孫に當る、千宗旦であつたらしい。宗旦は當時世間から乞食宗旦と云はれた位だから、餘程思ひ切つて侘の生活、貧人の生活を實行し、且つ其處に安住の地を見出した物と思はれる。

豐公が利休を保護したのは、茶の湯を通俗的に世間に弘通させるには便宜が多かつたかも知らぬが、茶の湯の眞味を世間に傳へて、實生活の上に幸福をもたらすには却つて妨になつたと思ふ。

西湖夜話

田中貢太郎

南昌に彭徳孚と云ふ秀才があつた。色の白い面長な顔をした男であつたが、ある時、錢塘にゐる友人を訪ねて行つて、昭慶寺と云ふ寺へ下宿してゐた。

その彭は、ある日西湖の縁を歩いてゐた。それは夏の夕方のことで、水の中では葉を捲いてゐた蓮の葉に涼しい風が吹いて、ぎらぎらする夕陽の光も冷たくなつてゐた。聖因寺の前へ行つたところで、中から若い眼のさめるやうな女が出て來た。十七八に見える碧い著物を著た手足の細そりした女で、一人の老婆が後から來てゐた。その女の眼はちらと彭の顔に來た

『あなたは、何所からゐらつしたんです。』

彭が聲をかけると女は恥かしさうに顔を赤らめたが、そのままその顔を老婆の方にやつて、

『婆や、早く行きませうよ。』

と云つてから向ふの方へと歩いた。彭は引きずられるやうに

老婆の後から隨いて行つた。

すこし行くと女は斜に後を振り返つて、老婆の横から彭を覗くやうにした。女の氣配に彭は顏をあげたが、その拍子に女の視線と視線が合つた。女はきまり惡るさうに周章てて向ふを向いて歩いた。

女の眼の色に親しみを見出した彭は、非常に氣が强くなつて、そのまま隨いて行つたが、女も老婆も不思議に足が早いので、路の曲つてゐる所などでは、時々二人の姿を見失ひさうになつた。

彭はすこしも油斷することが出來なかつた。孤山の麓にある水仙廟がすぐ眼の前に見えて來た。もう陽が入つて西の空が眞紅に夕榮してゐた。女と老婆とは水仙廟の手前から廟に沿うて折れて行つた。その二人の顏に夕榮の色がうつすらと映つてゐた。

みるみる女と老婆は水仙廟の後へと行つたが、そのまま見えなくなつた。彭は女の姿が見えなくなると小走に走つて、廟後へ著くなりぴつたり走ることを止めて、その邊に注意して廻つたが、何所へ行つたのかもう影も見えなかつた。

彭は仕方なしに其所へ立ち止つた。何時の間にか夕榮も消えて四邊が薄暗くなつた中に、水仙廟の建物が黑い繪になつて見えてゐた。

『おい、彭君ぢやないか、』

だしぬけに聲をかける者があつた。彭は吃驚して我に歸つた。それは靈隱寺へ行つてゐた友人であつた。

『ああ、君か、』

『君は、いつたい此所で何をしてゐるんだ、』

彭は女を搜してゐるとも云へないので仕方なしに云つた。

『散歩に來たところなんだ、』

『さうかね。ぢや、一緒に歸らうぢやないか、』

彭は友人と一緒に歸つて來たが、女のことが諦められないので、翌日は朝から孤山の麓へ行つて、彼方此方と探して歩いたがどうしても判らなかつた。人を見付けて聞いてみても、何人も知つてゐる者が無かつた。それでも思ひ切れないので、その翌日もまたその翌日も、毎日のやうに孤山の麓へ行つて日を暮した。

彭はとうとう病氣になつて、飯もろくろく喫はずに寢てゐるやうになつた。と、ある晩、扉を開けて入つて來た者があつた。彭は何人かが來たとは思つたが、顏をあげるのも苦しいのでそのままぢつとしてゐた。

『公主からお迎へにあがりました、』

眼を開けて、寢ると雜兒髷に結ふた女の子が、燈籠を持つて枕許に立つてゐた。しかし彭は相手になるのが面倒であつたからぐるりと寢返をして壁の方を向いてしまつた。

『貴郎が、この間、水仙廟の所でお逢ひになりました、公主からのお迎ひでございます、』

　彭は急に體を起した。

『水仙廟で逢つた公主と云ふんですか、』

『さうでございます、公主から貴郎のお供をして來るやうにと云ふ、お使ひでございます、』

『公主とは、どうした方です、』

『ゐらしてくだされたら、お判りになります、』

『では、行つてみませう、』

　彭が起きて著物を調へると、女の子は先に立つて行つた。外には月が出て凉しい風が吹いてゐた。燈籠の灯はその月の光にぼかされて黄ろく見えてゐた。

　彭は生れ返つたやうな輕い氣持になつてゐた。路は彼方に曲り此方に曲つて行つた。

『やつとまゐりました、』

　彭はその聲に顏をあげて見た。水仙廟の後と思はれる山の麓に樓閣が軒を並べてゐた。女を尋ねて毎日水仙廟のあたりから孤山の頂にかけて歩いてゐた彭は、そんな樓閣を見たことがなかつたので驚いた。

『公主のゐらつしやる所は、別院でございます、私がまゐりますから、そつとゐらしてくださいまし、』

　彭は頷付いて見せた。女の子はすぐ眼の前にあつた朱塗の大きな門を入つて、玉を敷いてあるやうな綺麗な路を行つた。路の兩側には花をつけた草や木が一めんに生へてゐた。椿のやうな花の木もあれば、牡丹のやうな大きな花をつけた草もあつた。白い花をつけた高い木には、凌霄花のやうな黄ろな蔓草の花が星の落ちて來てかかつたやうに咲いてゐた。花の梢から宮殿の軒が見えてゐた。

　路は爪先あがりにあがつてゐた。その路をすこし歩いてゐると、すぐなだらかな路となつた。と、洞穴の口のやうに見える建物の入口が來た。その入口には『水晶城』と云ふ額がかかつてゐた。建物の周圍には水があつて、白や紅の蓮の花が月の光の下に夢見るやうに咲いてゐた。水に臨んで朱塗の欄干も見えてゐた。

　女の子はその中へと入つて行つた。彭もそれに隨いて行つた。其所は窓と云ふ窓は皆水晶で、それに青白い月の光が射してゐた。公主と云はれる彼の女は欄干に凭れて月を看てゐた。

『あの方をお供してまゐりました。』

彼の女は此方を見るなり、すぐ體を起して寄つて來た。

『物好きの坊ちやん、この四五日は、お見えにならないぢやありませんか。』

女はにつと笑ひながら彭の手に自分の手をかけた。彭はきまりが悪いので、微笑するだけで何も云へなかつた。

『すこしお眼にかからない間に、こんなにお痩せになりまして。』

女はかう云つてから傍に立つてゐる女の子の顔を見た。

『あの碧霞漿を一杯持つてお出で。』

女の子はちよと頭をさげた後に、次の室へと行つたが、すぐ盃を捧げて持て來た。彭と手をとり合つてゐた女は、一方の手にそれを取つて彭に渡した。それは紺碧の色をした甘い匂のする物であつた。

『これは綠萼夫人から戴いた物でございます。』

彭はそれを飲みながら不思議な周圍にその眼を向けた。

『此所は何所でせう。』

『此所は廣寒香界でございます、あなたのやうな俗人は、長く此所にゐることは出來ないです、早くお歸りなさい。』

女は冗談に云つて笑つた。彭はもう何の遠慮もゐらなかつた。彼はいきなり女を抱きあげて綺麗な戸張の垂れてゐる室の中へと入つて行つた。

已而蘭麝流丹、女履乞休始止。彭と女とはその後で話をした。彭は匂のある女の體を撫でながら云つた。

『貴女は、合德の生れ返りぢやないんですか。』

女は艶かしさうに笑つた。

『貴郎は、物に怖れない方だから申しますが、私は水仙王の娘で、荷の花の精でございます、貴郎が情の深いことを知りましたから、かうしてお眼にかかることになりましたが、私は舅さんの世話になつております、舅さんは非常に物堅い方ですから、もし舅さんに知れると、もうお眼にかかることが出來ません。どうか舅さんに知れないやうに、夜そつとゐらして、朝も早く夜が明けない内に歸つてください。』

『舅さんは、どうした方です。』

『蟹の王ですよ。今は、この西湖の判官になつてをります。』

朝になつて寺の鐘が鳴りだしたので、彭は急いで起きて歸つて來たが、それからは毎晩のやうに行つて朝早く歸つた。

ある朝、二人が寢すごしたところで、女の保姆がやつて來た。保姆はそれを見るとその足で判官に知らせに行つた。それがために周章てて起きて歸らうとしてゐた彭は、判官の捕卒のため

に縛られて判官の前へ引き出された。判官は黒い頭巾をつけ綠の袍を着てゐた。『罪者をとつ捕へてまゐりました。』

捕卒の一人は後込みする彭を判官の前にと引き据えた。彭はどんな目に會はされることかと思つて生きた心地がしなかつた。判官はその容をにくにくさうに見おろしてゐたが、何を考へたのか急に眼を見張ると共に、急いで壇の上からおりて來た。

『貴君は私の恩人だ、これは相すまんことをして申譯がない。』

判官は急いで彭を縛つた繩を解いたが、彭にはその意味が判らなかつた。

『私は何時か貴君に助けられた者だ。』

彭は女から舅さんは蟹の王であると云はれたことを思ひ出した。彭はふと氣が注いた。彼はある日、友人と二人で南屛へ遊びに行つたが、歸つてゐるとすぐ近くで網を曳いてゐる舟があつた。ちやうど網があがつたところであつたから、どんな魚が捕れるだらうと思つて、中腰になつて網の中を覗いた。網の中には大きな甲羅をした蟹が入つてゐて、それが紫色の鋏をあげて逃げやうとでもするやうに悶掻いてゐた。彼にはこれまで會て一度も見たことのない蟹であつた。彼は何かしらそれに神秘を感じたので、放してやらうと思つて、網舟の傍へ自分の舟を持つて行かした。その結果、彭の金が漁師の手に渡つて、漁師の蟹が彭の舟に來た、彭の舟はやがて網舟を離れたが、再び漁師に獲られる危險の無い所へ來ると蟹を水の中へ入れてやつた。蟹は大きな鋏を前で合はせて人が拱揖するやうな容をした後に沈んで行つた。……

『さあどうか、おあがりください。』

判官が強いて云ふので彭は安心してあがつた。

『甥の室に人が來てゐると云ふので、貴君とは知らずに大變無禮をいたした。時に貴君は何方の生れです。』

『私は南昌の者で彭德孚と申します。』

『貴君は許嫁の人でもありますか。』

『ありません。』

『では、良縁だ、私の甥と結婚して貰ひたい。』

彭はもとより望むところであつた、その席には保姆もゐた。

判官は保姆に云ひつけた。

『あれを呼んで來い。』

保姆は公主を連れて入つて來た。女は恥しさうにして顏をあげなかつた。判官の夫人も共所へ入つて來た。

『この方がわしの恩人じや、あれをお願ひすることにした。』

彭は女と結婚の式をあげて水晶館にゐることになつた。彭は

琴が上手であつた。彭が琴を彈くと女は何時も傍で歌つた。二人はかうした夢のやうな日を二年ばかり送つたが、その翌年の春、西湖の年中行事の一ツになつてゐる。水遊びの日が來た。その日、西湖では舟の競爭があるので、その見物を片がけて遊びに來るものが多かつた。彭も舟で女を連れて出かけて行つた。風の無い暖かな日であつた。向ふからそろそろと漕いで來た一艘の舟があつたが、その舟の中から聲をかけるものがあつた。

『彭君ぢやないか、』

彭は聞き覺えのある聲を聞いて顏をあげた。それは錢塘の友人であつた。

『やあ、』

『君は、いつたい何處を歩いてるんだ、君の家から手紙が來たから、僕はこの間中、君の居所を捜してゐたんだよ、』

その時舟と舟の小縁が、喰付くやうになつて、彭と友人とは手が握れさうになつた。

『それは濟まなかつたね、』

『では手紙を渡すよ、』

友人は手にしてゐた手紙を此方の舟の中へ投げ込んだ。

『有難う、』

『では明日にでもまた逢はふ、やつて來たまへ、』

『ああ、行くよ、』

舟は見る間に行き過ぎてしまつた。彭は急いで手紙を開けて見た。それは母親の病氣を知らして來た物であつた。

『母が病氣だ、』

彭は母の病氣が心配になつて來たが、しかし女と離れるのが苦しいので困つて考へ込んだ。

『お母さんが御病氣なら、お歸りにならなくちやいけません、私も御一緒にまゐります、』

二人は其所から引返して判官の前へと行つた。判官は女の體が弱いと云つて一緒に行くことを許さなかつた。

『これは體が弱いから遠くへは行けない、しかし、お母さんの病氣はもう好くなつてるから心配はないが、貴君は子として度は歸つて來るが好いだらう、』

判官は一粒の丸藥を出して彭に渡した。

『歸つたならこれをお母さんに飲ますが好い、これを飲むと決して年を取らない、』

彭は一人で歸ることにして女に云つた。

『秋には屹と歸つて來る、』

すると女は涙を見せて云つた。

『この二三ケ月、お腹の具合が變でございます、どうか忘れずにゐてください、』

彭はその日出發して故郷へ歸つたが、歸つてみると、母の病氣は癒つてゐた。彭は母を連れて錢塘の方へ來やうとしたが、母が遠くへ出るのを嫌ふので、一人で引返して聖慶寺に寄り、翌日水仙廟の後へと歸つて行つた。

軒を並べてゐた樓閣は影も形もなくなつて榛莽が一めんに繁つてゐた。彭はもし方角が違つたのではないかと思つて、その邊を搜してまはつたが、他にそれらしい建物も見えなかつた。

その内に日が暮れかけた。彭は仕方なしに西冷橋まで歸つて來た。橋を渡らうとしてふと見ると、東の方から見覺のある彼の女がやつて來た。

『彭郎、』

『お前か、』

二人は手を取りあつた。

『家が無くなつてゐるが、どうしたんだ、』

『家が燒けたもんですから、雷峯塔の下へ移りました、』

『さうか、ちつとも知らなかつた、』

二人は其所から舟を雇ふて雷峯塔の下へと行つた。雷峯塔の下には樓閣が軒を並べてゐた。

『彼所ですよ、』

二人は舟をあがつて行つた。朱の柱をした綺麗な室が二人を待つてゐた。女は迎へに出て來た侍女に云ひつけて酒の支度をさした。女はすこし離れてゐる間に濃艶な女になつてゐて、元のやうなおどおどした可憐な姿がなかつた。女はまだ御馳走が終らないのに彭を連れて寢室へと入つて行つた。

女は彭に絡はり付いて離れなかつた。それがために彭は翌日體が起たなかつた。女はすこしも傍を離れないで介抱をした。彭はそれが非常に厭はしかつたがどうすることも出來なかつた。

忽ち戸張をはねあげて入つて來た者があつた。彭は驚いて重い眼を開けた。それは自分の傍にゐる女とすこしも變らない女であつた。入つて來た女は彭の傍へ寄るなりその背を撫でさすりながら泣いた。そして彭の枕許にゐる女に指をさして罵つた。

『この惡魔、私の所天をこんなにしておいて、まだひどいことをしやうと云ふのか、』

彭は二人の顔を見較べてみたが、顔から髮から着物の色合から何方がどうとも見分けることが出來なかつた。

『二人とも何も云ふな、俺はもうすぐ死んぢまふんだ、』

入つて來た女はまた聲を出して泣きだしたが、急になにか思ひだしたやうにそのまま走つて出て行つた。

彭はそのまゝぐつたりとなつてゐた。それはもう夕方であつた。先つきの女が侍女を連れて、それに體の眞黑な頂の丹い鶴を抱かして入つて來た。と、彭の傍にゐた女は體が萎縮したやうになつて其所へ倒れてしまつた。侍女は鶴を放した。その鶴の嘴は倒れた女の頭へと行つた。女の姿は白い大きな蛇になつた。鶴の嘴はその蛇の腹へと行つた。蛇の腹からは小さな玉が出て轉つた。女はその玉を拾つてから彭の眼の前に出した。

『これは、雷峰塔の蛇が、私に化けてゐたもんですよ、私が舅さんに隨いて、瑤池へ行つて、王母にお眼にかかつてゐる留守に、貴郎をたばかつたものですよ、この鶴は、王母の所から借りて來たもんです、貴郎の毒はひどいがこの玉と雄黄とを煉つて飲むと、すぐ癒りますから心配はいりません、』

女は侍女にその玉を渡して藥を拵へて來さした。侍女は次の室へ行つてすぐ藥を拵へて來た。

彭は三日ばかりすると起れるやうになつたので、女と一緒に歸つて行つた。其所はやはり孤山の麓にある水晶館であつた。

女は生れて二月ぐらゐになる子供を抱いて來た。それは女から生れたものであつた。彭は喜んだ。

『この子を來復とつけやう、』

それを聞くと女は泣きだした。

『私はこの子の生長を見ることが出來ませんから、貴郎が好く面倒を見てやつてください。』

『何故そんなことを云ふんだ、』

『私は紫府の侍書でしたが、貴郎とかう云ふことになつたために、その罪で黃岡の劉修撰の家の子供に生れかはることになりました、』

女はさう云つて泣きながら彭の手から子供を取つて乳を飲ましてゐたが、すぐそれを彭に返してひらひらと出て行つた。そして十足ばかり行くともう見えなくなつてしまつた。

官吏夏休廢止の功過批判

以下掲ぐる所は左の如き本誌の問に對して答へられたるものなり。こゝに厚く寄稿せられたる諸氏に感謝す。（編者しるす）

謹啓　加藤內閣成立以來其第一に實行したるものは實に「官廳執務時間改正」其內容は卽ち「官吏夏休廢止」に有之候。當局の意蓋し弛廢せる官紀を肅正し、怠慢に陷り易き執務振りを作興し、延いて行政整理斷行の前提となさんとするにあらんも。又一方より觀れば、薄給にして辛勞多き下級官吏が、年來の慣習にして且つ既得權たる心身の一大愉悅を奪はれたる結果、不平不滿の念昂じて事務却つて荒怠に流れ、當局期する所の能率の增進は反對に減退となつてあらはるゝことなきを保せず。世或は貴族出のお役人、人心の機微と人情の曲折に通ぜず、杓子定規を以て規律と心得、末節に拘泥して却つて大局を觀るの明無きを難ずるものも有之候。而してこは啻に官吏一身の喜憂損得の問題に止らずして國務の實—從つて國民全體の利害に關する重大問題と存じ候につき、炎暑の砌甚だ御迷惑の儀に御座候へ共右に對する御高見何卒七月十七日迄に御洩らし下され度、幸に御承諾を得ば貴論を八月一日發行の「中央公論」に

「官吏夏休廢止の功過批判」

の題下に蒐錄致し度、此段伏して祈上候。敬具

七月十二日

東京市本郷區
本郷三丁目　「中央公論」編輯局

二伸。雜誌の一頁以上に亙るもの及び十七日以後到着の御原稿は頁數と發行日の關係上掲載し能はざるやも計り難し。此旨豫め御諒恕願上候。

○ 法學博士 河上肇

拜復。小生は夏休廢止に反對です。上役の人は仕事が面白いのだから、夜業までしても差支ないと思ひますが、殆ど熱帶國に近い日本で、機械的の仕事ばかりさせられてゐる薄給の小役人から、夏休までも奪つて仕舞ふことは殘酷です。その結果は、營養不良の上に過勞をプラスすることになるので、弱い者は皆な病氣になつて仕舞ひます。人間には少し自由の時間を與へるといふことが、結局全體の利益になるものです。會社や銀行は營利會社だから社會全體の窮極の利益など考へる遑はありますまいが、國家の重職にある人が會社の重役のやうな考を出すのは、甚だ間違つたことゝ信じます。

○ 小川未明

から言つたからとて、私は、加藤内閣の政策に贊意を表するのでない。たゞ、官吏だけが夏休をしていゝ譯でなく、みんなが、この炎暑の頃には、休むようにしたい。もし、みんなが休むことができないものなら官吏だつて、この苦しみを一つにしていゝと思ふのであります。勞働階級は、いつだつて仕事を休むことができない。殊に、筋肉勞働者の苦しい有様を見ると避暑どころではないのです。早く、みんなが夏休の出來るやうな、いゝ社會にならんことを望むのであります。

○ 千葉龜雄

(一)現代以後の人間生活の根本原理は同率の「勞働」と「休養」の二元生活から出發せねばなりません。單に勞働だけを取上げて、休養を罪惡と考へるのは、舊時代の誤まつた考へ方です。事大主義の官吏達は不平も今の中、結局長いものに卷かれて、今に不平も忘れるでせうが、原理としての間違は永久に殘つて居ます。

(二)現代人の神經は極端に疲勞しますから、出來るだけ多くの休養で、それを恢復せねばなりません、ましてや生活難と榮養不良に苦しむ下級官吏は猶の事です。休みは多いほどよいのです。

(三)「量」の能率ばかり考へて、「質」の能率を第一に考へないのは、日本の創造的文明がいつまでも向上しない理由です。三十三年勤續の門番同小使を表彰して、得々として居る心理が之れです。疲勞心理、能率心理の科學的研究が必要です。サンガア夫人の產兒制限の理論がわからぬ譯です。

(四)政府などと云つても、現代では一つの民衆の代表機關に

過ぎぬですから、其處務心理はどこまでもお互の人間的抱擁によつて效果があがるので、無用な法律や規則でそれを拘束する事からは生れません。規則萬能を信ずる處に時代と逆轉した官僚精神が漂つて居ます、其結果は其期待する「量」の能率さへも得られません。

(五)夏休廢止はこの官僚精神の明白な發露です、政治を人間の心理に見ずに、法規や形式の中に求めやうとする加藤內閣の小心曲謹主義は明らかに現代社會心理への反逆です。

○　早川鐵治

學閥黨閥及藩閥以外に立ちたる小生は十數年間の官吏生活中一度も夏休の恩典に浴したることなし從て此度夏休廢止が左まで世間の話題に上るものとも思はざりしにさて〱今日の人間は樂をして甘いものを喰ひ高い金が欲いものと見へ彼是小八釜しく新聞紙抔で論議する樣になつたには一驚を喫し申候我等には勞働者が勞働中少しも休止することをなし得ずして器械同樣の西洋勞働者の眞似をなして八時間勞働の斷行を唱へたり若き婦人が一人前の働きも出來ぬに米利加(西洋にあらず)の社交婦人の贅澤を倣つたりするは片腹痛き樣存居候間實は學閥出身の徒や貴族にて組織したる內閣にて些事ながら斯ゝることを斷行したるは賞めてやり度候」佛國農務長官シエロン氏は熱心なる社會黨なるも八時間勞働の非を悟り其物價の低下は官吏俸給勞働時間の無制限行政整理の斷行にあるも思ひ切つたことは難義知らずの坊ちやん內閣に望むは不可能と存候。

○　寺田精一

官吏は國務に携はるものであるから、若し國家や國民の生活に密接な關係を有する事務に從ふものが、一定時に休暇を取り爲めに事務を澁滯せしめることは問題である。故に單に一定時の休暇が與へられなくなつた點で、不滿のあるべき筈はない。夏休廢止は、官吏の既得權を奪はるるものとの論あるも、休暇を他の時に與へられ居る以上、これを直に認むべきものでない。

官吏は、國民の生活に密接な關係を有する事務に從ふものが少くない。そこで官吏の如く多くの日數を休暇として持ち得さる大多數の國民に、不便不利を感ぜしめてまで、特に夏の休を維持する必要がない。大多數の國民の夏は、一年中の最も繁忙なる時期である。この點は會社員其の他と、類を異にして考へなければならない問題を有して居る。

官吏の薄給を以て、夏休廢止を主張せんとするものあるも、

それは問題を混ぜるものといふべく、若し然りとせば高級官吏へ休暇を與へる根據を失はねばならない。薄き報酬を以て孜々と働くは、國民大多數の境遇である。只問題は、從來多く見られたやうな高級官吏と低級官吏との實際の執務時間の甚だしい懸隔の存在を認むることは、低級官吏の嚴格なる執務時間改正に甚だしい不滿を與へる點である。若し高級官吏が短時間の執務にて事足るならば、宜しく人員を減少し、それに依つて得らるる俸給を低級官吏に提供して、其の薄給の嘆を寬和すべきである。高級官吏が孜々として誠實に働くに於ては、低級官吏が單に夏に休暇を得ずとの理由に於て、不滿を懷き國務の實蹟を減ずることとなき、蓋し火を覩るより明かであらう。

但し夏季は、我が國に於ては溫度の最も高き時であり、濕度に變化に富み、又氣壓に變動を生じ易き時である。これ等の條件殊に溫度の條件は、人の精神的作業並に身體的作業に、其の能率を甚だしく低下せしめるものであつて、それは今日の實驗心理學の證して餘ある事實である。故に執務時間を長めて、それに相應した實績を擧げんとするならば、非科學的要求といはねばならない。從つて同じく休暇を與へるならば、事務の進行上、夏季に與へるを最も得策とするのである。

○　堺利彦

勞働者及び一般の下級雇はれ人の立場から見れば、官吏が幾らか特權を剝がれた所に多少の愉快を感ずる。そして下級官吏がこんな事からして、勞働者及び一般の下級雇はれ人と結合する事の必要を、少しでも悟り得るならば、そこに何程かの利益がある。

○　石川半山

行政整理は先づ繁文縟禮を改むるに在り、然らば局課も減少し、官吏も淘汰するを得べし、薄給の官吏を多く用ひんよりも有爲の人物に高俸を給して、十分熱心に執務せしむる時は、能率は昂進せん、現內閣が此の根本に觸れず、單に執務時間の改正、夏休廢止の如き末節に重きを置きたるは、全く官僚式頭腦より來れる發案として、噴飯に堪へず、尤も小生等年中無休の勞働をなせる者は、從來の官吏の怠慢放縱を咒詛せるが故に、今回の改正より來れる官界の恐慌に同情する能はず、小生は上下共にもう少し眞面目の考慮をなし、緊張したる施設をなさんことを望む者なり。

○ 法學博士　田中萃一郎

人間の生活は一日も休みが無い、官吏は公僕で人民の生活に關係したとを取扱ふものであるとしたならば、休暇のある可き筈は無い、曾て涼しいペトロに二箇月の夏休のあるを知つて驚いたがかゝる西歐の模倣的文化であつたればこそ忽ちにして崩壞したのだ日本人たるものは須らく勤勉の力で立つ可きだ暑中休暇の廢止は至極結構だ。

○ 文學博士　谷本富

元來今度の變挺な中間內閣には多大の屬望はしてゐない小生でも、その第一の仕事が官吏の夏休廢止と聞いては、只呆れる外ない。如何に老朽軍人や紈袴子弟の寄合にしても、多少は世間學界の新思潮は知つてゐさうな筈。目下夫の能率促進上、所謂科學的管理法の喧しい折柄、ちと考へて見るが好い。是迄も學校の夏休が長過ぎるなどいふ愚論は、數々耳にした樣だが、それは概ね例の戴星出入する流の古風の勤勉奬勵で、今日八時間制を普通とする世の中には、固より通用しなからう。自分は彼等諸官吏にも、成る丈け長い休暇を與へて、休養せしめ、修養せしめ、尚ほ實際自家自身の事を處理すべき餘暇を持たすのが却て國家に取つても德用だとする。

○ 文學博士　桑木嚴翼

今まで貰つて居るものが殖える方は誰も不平は言ひませんが少しでも減れば其の當座は餘りよい心持はしません。多年の習慣に休暇があつたものが急になくなると云ふことは、何人にも歡迎されないに定つて居ます。そして勘定高く二三時間多く詰めて居るからといつて事務が捗取ることもありますまい。然し眼を轉じて見ると世間の會社も銀行も其他商店や家々の事務は夏だからといつて半日切りにはなつて居ません。會社などの報酬が多いといへば其までゝすが、官吏に限つて會社員よりも休みを多くするといふのは少し理屈に合はないやうにも考へられます。然し實際多少の繰合せで何日かの休暇を得るやうにするのは能力とか何とかいふ方からは必要だと思ひます。

○ 前田蓮山

私は官吏の暑休廢止に反對である。暑休を贅澤と考へて居る者もあるか知れないが、私は之れを贅澤とは考へない。暑休は我々の能率を增進せしめるための準備であり、精神生活を整理するための時間であると考へて居る。室內の劇務に困難な夏季

を利用して、或は山に登り、或は海に遊び、以て身體を養ふと同時に、自然の間に默想して自我を省みると云ふことは、贅澤ではなくして必要である。言ふまでもなく人間は機械と違ふから、其の仕事の成績は必ずしも時間と比例するものではないのだ。私は會社の事務員にも工場の職工にも、充分の暑休を與へるが可いと思ふ。特別の業務と特別の場合とを除き、普通の會社工場で暑休の實行が出來ない筈はなからう。每年暑中何日間の休業（代り合つて）と一定して置けば、其の前後のやりくりで仕事には差支へなからうと思ふ。

○ 北澤新次郎

元來我國の官吏は其の實質に於ても、又其の能率に於ても低級で且つ徒らに形式的に流れる結果事務の進捗は少しも思はしく行かないのが原則である。然し下級官吏は要するに勞働者に外ならない故（たとへ彼等が之れを自覺しないにしたところが）彼等の勞働時間を長くしたり、夏休廢止をするなどは時代錯誤で、此れは彼等自ら××して××する必要がある。之れをしない處に彼等の階級意識の未自覺さが能く現はれる。

○ 馬場恒吾

今回の夏休廢止通知は羊頭狗肉で實は二十日間は休ます規定故、それに不足を云ふ理由はない、午後出勤も社會全體の勞働狀態から云へば、無論不平を云ふべきものならず、世間には一日の夏休も得られぬ人が澤山ある。二十日の休暇を月給付きで得られるのは先づ幸福の方だ。

○ 室伏高信

官吏の夏休廢止は一、能率增進にならぬことは勿論、それはサボターヂ奬勵策である二、それは官紀肅正の反對に官吏をして反官紀思想を起させる有力な誘發政策である。三、政府はこれによつて範を世間に示すつもりのようであるが、今日道德的に政府を信んずるほどのものは餘程の愚者である。また官吏は昔のような範模階級でも指導階級でもないから、官吏がどうあつても人心に大した影響はない四、たゞ一つい〻ことは多くの官吏を彼等も一個の勞働者、被支配者、被絞取者であるとするの自覺に導くことに役立つことである五、それは資本家が勞働者の勞働時間を延長しようとするメカニジエルングの一運動である六、そこで官吏にはベアムテ組合の必要が意識される。

○ 文學博士 澤柳政太郎

働くときには大に働き遊ぶ時には大に遊ぶのがよいと思ふ、この考へから暑中休暇は存置して靜養以て勇氣を蓄へて能率の高い働を爲すのがよいと信ずる、官吏ならざる僕の意見は公平であらうと自ら信ずる。

○　本間久雄

拜復、官吏夏休廢止は、人間の心身を一個の無生物の機械と心得てゐる、全く人間學を知らない短見的爲政家の考案した惡政の一つです。夏休は、それによつて心身をリクリエートする一年中最も大切な時です。單に官吏ばかりでなく、あらゆる種類の、殊に無産階級の人間に、夏休が可能となり、彼等がそれを最も有効に心身更新のために利用するやうにならなければ文化の進展は到底不可能です。「官廳執務時間改正」などより、もつともつと最初にすべき改正事件があらうのに、そんな無益のことにこだわつてゐるとは情けないことです。

○　犬養毅

よく働き而して規則立たる休日を與るがよし

○　諸井四郎

○　高島米峰

近來問題となつた綱紀の肅正は、主として内閣大臣以下の高官に對して叫ばれたのであるが然も其源泉に非ず支流ともいふべき官吏の夏休廢止の如きものが先づ發表されて、其實際の影響が判任級以下の下層官吏の勤務上に著しく及ぼしたることは看過することが出來ない。彼等は平素出勤簿を以て執務時間を強行せられ、昇給問題年末手當の如き一に出勤日數に依つて左右せられ、常に上官たる高等官の嚴重なる監督の下に在り、半ば勞働勤務と異ならないのである。殊に最近土曜日の勤務時間も二時間を延長せられて、一ケ月二日内外の日數を增加した計算となる。彼等が民間普通の俸給員と比べて薄給と小額の手當とに忍ぶは、其名義に甘んずる點もあらうが、其勤務の割合に緩なるに在る。本來仕事の能率の昂がるのは、其職務に興味を感じて意志情緒共に活動して之に順應するに在る、若し既得權と信じたる暑中休暇の如き勤務の慰安が俄かに廢止されたとすれば、自然能率の低下するは人情の弱點とはいへ止むを得ない、之が爲め幾分にても國務の進行支障を來すことなしと限らぬ。私は、此問題に對して現内閣が其本義を逸して末節に亘り、其結果却て弊害の甚しかるべきを思ふものである。

執務時間中、全く三昧の境に入り、脇目もふらずに働くやうに、まづ精神的の改造を行ふにあらざれば、如何に執務時間を延長しても、能率はあがるものでない。夏休廢止の功過も、これに准じて推斷することが出來る。

人間が出來てさへ居れば、執務時間を短縮し、夏休期間を延長し、冬期にも休暇を與へ、しかも尚、能く現在の狀態よりは遙に能率をあげ得ることゝ信ずる。制度や形式だけで、事が出來ると考へてはならぬ。高級官吏のやうに、我儘の出來ない、胡麻化しの利かない、下級官吏、給仕、小使などが、執務時間延長、夏休廢止のために蒙る、苦痛をも考慮して欲しい。すべての制度形式が、上級階級、金持階級の都合のよいやうには考へられるが、まづ第一に、下層階級、無産階級の立場から考へられるといふことの無いのを甚しく遺憾とする。

○

法學博士　堀江歸一

加藤內閣が新施政の第一着手に行つた官吏夏休の廢止は途方もない間違ひと考へられます。我國官吏の執務振りは全體に於てビジネスライキでありません。是れは官界に多少なりとも接觸する民間當業者の熟知する所であり、又困却する所でありますが、其原因は彼等の執務上に刺戟がなく、ダレ切つて居るからです。而して刺戟の無いのは、拔擢登用の行はれないことが重なる原因でありますが、若し加藤內閣の企てたように夏休みまで廢止し、炎暑の際にも平生通り執務させたならば、益々彼等は無刺戟無感激の生活を送ることゝ爲り結局執務上の能率を害することを免かれません。幾ら貴族院內閣であり、軍人首相であつても、今少し人情の機微に通じさうなものですが、今度の處置に接して、唯驚き、呆れるばかりであります。

○

菊池寛

不贊成。人生は多少吞氣に暮さざるべからず。

○

宮田修

從來官廳の事務がとかく澁滯するもののあるのは、誠に歎息すべき事實であつたに違ひない。然しこの原因は官吏の執務組織が惡いのとその頭腦が鈍感であるからであつて、決して執務時間の多少長短による問題ではないと信ずる。故に此弊を矯めるには第一に組織を改正し、第二に頭腦を明快にさせる工夫をしなければならぬ。それには時々十分な睡眠と安息とを與へる事がその一策である。此點に於て夏休廢止は本來鈍感の頭腦を益々朦朧とさせるばかりで、何等の利益を齎すものではなから

う。賣れ殘りの野菜や魚は如何に山と積まれて安く買つても、結局豚に投げてやる外ないと等しく、居睡りと惰氣とに滿つる夏休廢止は所詮能率を增す所以ではない。こんな事で官紀が肅正されると思つて居たら、とんだ間違ひにならう。

○

法學博士　米田實

僕は夏休み廢止には反對です、英國などでは週末の休みやら海岸保養の時間が與へられて即ち能く休み能く遊んで能く働くことにしてあります。日本の社會でもそうし度いものではありませんか、尤も日本の官吏は怠業ばかりやつて居るから時間でも永くせねばやりきれぬと慨嘆する人もあります、これは官吏諸君が反省すべき所でせう、併し此故に休みを廢止するよりも寧ろ休暇を十分に與へて、その代りに働く時に大に働く習慣を造らせる方が、良策でしやう。

○

杉村廣太郎

夏休廢止などはべらばうな話と思つてゐます。尤も官吏だけが今まで比較的多い夏休を貪つてゐたのもよくない。朝野を擧げて皆一月ばかり夏休を取る事にしようではないか。法律が强制すれば何でもなく行はるゝ話です。

○

上司小劍

もつと暑い國でも、特に暑中休居などはないと聞いて居ります。日本は溫帶で、寒暑ともさしてひどくない、官吏だけの特權のやうになつて、暑中休暇といふものが、今まで保存されてゐたのを不思議だと考へるくらゐです。一體日本は、休日と物草やすみの時間との多い國で、官吏ばかりでなく、職人なども仕事にだらしがなくていけません。兎に角、暑中休暇の廢止はよいことでせう。

○

植原悅二郎

綱紀弛廢、官紀振肅の世論喧しいため、加藤內閣は成立の劈頭、輿論に迎合せんとして官吏夏休廢止を聲明した。官吏の夏休までも廢止して官紀を肅正せんとする其精神は是れを諒とする。併し是れは全く見當違ひの處置だ。官紀の弛廢紊亂は官吏の暑中休暇に因由するのでない、地位と利權とを目標として政權獲得を唯一の生命とする所謂政黨の餘弊である。又官吏の能率劣等なるは、繁文縟禮、高級官吏の官判制度を存置する官制と、官吏をして公僕たることを自認せしめずして、治者たる態度を以つて國民に臨ましむる彼等の專制政治の思想とに起因す

るのである。されば、夏休廢止に依つて官紀粛正、行政整理の一端を示さんとするが如き擧は、角を矯めんとして牛を殺すの類である。而して是れは形式のみに捉はれて居る官僚政治家の心情を遺憾なく暴露せる擧動、即ち政策を能く物語るものだ。夏休廢止に依つて官吏の倦怠と欠勤を増加し其能率は却つて減退されるであらう。又之れに依つて惱むものは下級官吏であつて高級官吏ではなからう。我國の官吏中最もサボルものは高級の官判使用の官吏である。而して夏休廢止は高級官吏には苦痛でなからう。官吏の夏休廢止程、形式に捉はれた愚策はないと思ふ。

○　水野廣德

官廳執務時間改正の結果、官吏の夏休が廢止せられた。之に對する世評は大體次の二つに分れて居る。

(一)夏休廢止其の事に對する主義上の贊否

(二)夏休廢止に依つて執務能率増進の能否

右贊否と能否との如何を問はず、從來常に因襲に拘泥し慣習に執着せる政府の行爲としては確かに賞讃に價する大勇斷と大敢行とである。元來官吏の夏休は法律規則の成文に依つて定められたるにあらずして唯年來の慣例に過ぎないのである。即ち毎年勅命に依つて下賜せられたもので、勅命なければ夏休は與へられない譯である。故に夏休を以て官吏の既得權と稱し得るや否やは疑問である、

夏休廢止の目的は主として官吏の執務能率を増進するに在りと思はれる。若し然りとすれば全然無意義の改正である。何故となれば夏二十日の休暇を廢する代りに一年を通じて任意の時季に二十日の休暇を與ふることゝなれるが故一年間の勤務日数は新舊全く同一である。加之夏期に於て汗拭き〳〵執る事務の能率は他の時季よりも幾分低きを免れない。夏期休暇を廢して花見休暇を與へたるは、寧ろ官吏に對する優遇であるかも知れぬ。併しながら官吏には自己の疾病は勿論、父母妻子の病氣看護、墓參歸省等の爲め若干日の賜暇が許されて居る。故に若し此等の賜暇と今回改正の休暇とを相殺することゝ爲せば、幾分能率増進の意義を生ずる譯である。政府にして夏休までも廢し執務能率を増さんとするの誠意があるならば、從來多くの官廳に於て行はれたる年度末に於ける旅費豫算を使ひ棄てる爲め不必要なる慰勞的出張旅行の如きは此際斷然廢止すべきである。

官吏の夏休は贅澤と云へば贅澤かも知れぬが、年が年中繁務若くは冗務に追はれて汲々營々たる下級官吏に取りては全然無

効率のものではない。夏休廢止よりも能率増有進上一層有効なるは出勤時間の勵行である。從來出勤時間の比較的嚴格に守られたるは陸海軍の官衙ばかりで、其の他の官廳に於ける高等官の出勤時間の如きは實にヅボラを極めたものが多い。

要するに夏休廢止は一大英斷ではあるが執務能率増進の目的には副はないであらう。執務の能率を増すには事務を簡捷するに如くはない。事務を簡捷するには驕慢なる役人根性を去ると共に冗員を淘汰するにある。冗員を淘汰して給與を豐にすれば自ら官吏の奉公心を向上せしめ、能率は期せずして増進するであらう。

○

奥田竹松

大戰以來「少く勞して多く獲んとする」極端なる功利主義は英國あたりから本邦に舶來した。怠慢、惰氣は我が上下に浸潤したのである、此の弛頽せる氣風を振起せんこそ新内閣の重なる使命の一である。先づ手近き處より始めたのが、官吏の暑休廢止だ。在來官吏の勤務は民間の孰れの勤務に比しても短少である。此の不均等なる殊遇を世間並みに建て直ほしたるに何の不思議があるか。能率問題の如きは抑も枝葉の問題である。酷暑中、午後に於て能率の低下するは官吏に限つた事ではなく世間一統皆な然りである。能率低下の爲に獨り官吏のみを偏庇するの理由何れに在りやと反問したくなる。

歐米諸國は今や正に刻苦、精勵、克已、節慾、精進、努力を「モットー」として日も維れ足らざる此の最中に於て、不心得なる我が一部官吏の泣き言、不平に耳を藉すが如きは吾等の與せざる所である。

○

鵜崎鷺城

拜復御尋の問題に就ては御答する程に纏りたる意見無之候得ども、官吏の精勤と能率と正比例せば、夏休及土曜半休の廢止亦可也、更により以上執務時間を延長するも可なりと存候。さりながら多年官廳に傳統する形式主義即ち所謂繁文縟禮の弊を除くにあらざれば、如何に精勤を強力るも、機能の上に實效を擧ぐること難かるべしと存候。凡そ綱紀肅正といひ、行政整理といひ、大局の上より手を下す可し。徒に枝葉末節にのみ走りて根本を忘るゝが如きは形式政治、小乘政治にして眞の改革を期する所以に非ずと愚考仕候以上。

○

文學博士　芳賀矢一

夏休廢止もさうですが、土曜日三時迄の執業はひどい壓迫で

す。青年判任官などはこれらの時間を利用して、講演や講習會に出席、多大の修養を積み、向上を心がけたものです、それを全く奪ひ去る事は、實に彼等の爲に悲しみ、又國家全體から見ても、多大の損害と存じます。

十一年七月十三日

○

貴族院議員　上山滿之進

官吏の夏休廢止は至極結構な措置である。今から十數年前、桂内閣の時であつたかと思ふが行政整理のあつた時、私が農商務省の一局長として提出した整理意見書中に夏休廢止の一項を加へて置いたことがある、それは當時終に採用せられなかつたが、私は今日でもそれを至當な意見であつたと確信してゐる。

官吏の夏休廢止は理論上からも當然のことと思ふが、それは暫く措いて、私は實際上からその適當であることを一言したい、夏休の期間は七月十一日から九月十日迄で、六十日であつたがその全部を全官吏が休む譯では勿論ない。此間に事務の都合を繰合せて休暇を許すのが制度であつて、その實際は希望のものに二週間か三週間位を許すのか各廳の例であつたと思ふ。所が休暇なるものは何か特別の用件があつて貰つた場合には至極結構であるが、何の用件もなく數日間も自宅でブラ〱するのでは洵とに不愉快極まるもので第一健康に大害を醸もす、私も行政裁判所に在職した時二た日夏程六十日間宛無理往生に日休をさせられてことの外閉口した事がある。尤も避暑旅行でもすれば夏休も最も有意義であるが、生計に餘裕のない一般官吏にはそれは夢にも見られないことである。こんな事情であるから制度と取扱振とは前に陳べた通りになつてゐながら、事實に於ては二三週間の夏休さへ希望するものは行政官廳では極めて少數であつた。今回の執務時間改正とは夏休を止める代りに一年中希望の時季に二十日迄の休暇を貰ふことが出來るやうになつたから、この方がドレ丈け官吏に便利であるか知れない。

暑中の官廳執務時間は從來正午迄であつたのが今度午後三時迄に延びた。これも廣い意味の夏休廢止の一部である、私はこの改正にも贊成である、退廳時刻が正午であつても役所の附近に住んでゐるものや二食主義の人は別として普通の官吏は役所で晝食をせねばならぬ、それを濟ました頃は燒け付くやうな暑さ盛りで、そんな時に家路に就くのは無上の苦痛である。それよりも自宅よりも涼しいのが、通例の役所の建物に暫く居殘つて日が蔭げつてからボツ〱歸る方が餘程氣樂で衛生的である。

以上は官吏の大多數の實情から考へた結論であつて、個々別

々に言へば種々の不便を感ずる人もあらう。乍去それは一個の私事であるから我慢しなければならない。

玆に私は高級官吏に一言したいことがある。下級官吏の苦痛は執務時間の制度よりも上官の體度に在る。退廳時刻になつても歸らないで、書見をしたり、來客と無駄話をしたり、甚しいのは夕方の宴會の時刻を役所で待合せる人もある。下級官吏の少くとも一部分は手を拱いてそのお歸りを待つてゐなければならぬ。構はず歸れと言はれても多少の氣兼をしなければならない。其苦しさは思ひ遣らるゝ、下僚を紀律すべき位地に在るものは必ずや先づ以て自から正さなければならない。序だが役所を訪ねる御客の人々も上官をして斯かる不人情を餘儀なくせしむるやうな長談議を差控ゆることが紳士の禮である。

官吏の夏休廢止は私の持論であるから今度の斷行には躊躇なく贊成するのであるが、私には今日の場合に於て特に別にこれに贊成する理由がある。

近年一般綱紀の紊亂に伴ふて官紀の弛廢したことは言語に絶するものがある。先日來夏休廢止に對して官吏社會に不平の聲の高いのは、或は官紀弛廢の結果放肆懶惰に陷つた官界の氣風が急激な衝動を受けた爲めではあるまいか。これは國家の大問題であつて何としても嚴重に引締まらなければならぬことである。私などの絶叫した綱紀振肅の重要なる一部は慥かに官吏社會を對象としたもので、新内閣が第一に玆に手を著けたことは全く國家の慶事である。私もマサカ官吏を以て國民の儀表なりと思ふものではないが、本來官吏が國家の權力を執行するものである以上、その紀律の作振すると否とは國民の利害休戚に直接多大の影響がある。近年の官紀弛緩の爲めに官廳と接觸する多數の實業家が言ふに言はれぬ苦悶を感じてゐることは公然の祕密である。私は加藤新首相が夏休廢止を決行するに至つた初一念を一心不亂に押通して速かに官界の紀綱を振作し、更に進んで一般綱紀を徹底的に廓正することに全力を注がれんことを切望して已まないものである

○　法學博士　神戸正雄

民間實業界では特に夏休を持たぬことでもあり、官吏の夏休廢止は、其との權衡上むしろ當然の事を行つたものと私は信じます。併し其の爲め能率が減じては何にもなりませんから、執務上能率の増加の爲め、別に一段の工夫がなくてはならぬと思ひます。

○　巖谷小波

夏休廢止なぞは愚な事だと思ひますよく休んでよく働く方がよいではありませんか。

○ **Hukunaga-Kyôsuke.**

Ima watasi wa Kôronsya kara dasareta Mondai wo Syômen kara hihyôsuru *Ziyû* wo motanai. Sikasi imano Naikaku ga umareta tokini *Yosino* Hakusi ga "Seitô wo Moto ni site inai' to itte Katô Naikaku no Yosiasi wo gironsuru koto yorimo, sô iu Naikaku wo naritataseru yôni sita tokorono waga Seidi-syakwai no *Zizyô* wo kanasimanakereba naranai," to iwareta no to onazi yôni, watasi wa Natuyasumi mademo tubusite hatarakanakereba naranai Nippon no Yakusyo no *Zizyô* ni tuite iroiroto kangaesaserareru.

"Seiyô ni kurabete, Nippon no Yakusyo dake ga, zentai dô iu Wake de, kono obitadasii Hitokazu ga sorehodo madeni site hatarakanakereba naranai yôna Sigoto wo syoikonde iru no darô?" to.

* * *

Oyakusyo no Sigoto no Daibubun ga reino *Kakimono* wo Nakadati to site hakobarete iru koto wa daresimo syôti no koto de aru. Tokoro ga, Nippon dewa, kono Kakimono wo tôsiteno Yaknnitati no Seikwatu to iu mono ga kiwamete Nôritu no hikui mono aru no wa naze de aru ka? Gwaimusyô wa "Kôwa" no "Kô" wa 媾 ga tadasii no yare 講 gahontô da no no Giron de Hima wo tubusite iru; Hôseikyoku wa 用ふる, 用うる, 用ゐる, no sengidate wo site iru. Sikamo kore de dekiagatta gendai-banareno Bunsyôwa ôkuwa Sumi to Hude de, sukosi Ki no kiita tokoro de ano noroi Hô bun-taipuraitâ! Kore dewa ikura takusanno Yakunin ga Natuyasumi wo tubusita tote Seiyôni kanau Dôri ga nai.

* * *

Buntai wa Kuti de ii Mimi de kiku tôrino Hanasi-kotobahû; Mozi wa Nipponsiki-tudurikata no Romazi; kore koso Nippon no Yakunin-seikwatu no Nôritu wo masu tata hitotuno Kagi de aru. Kono Hinan no ôi Natuyasumi-toriyame wo Kikkake ni, Kokumin *mo* Yakunin mo Mozi to Kotoba no Mondai ni *mezameru* koto ga dekitara, sore wa Nippon *ni* totte mokkeno Saiwai

de aru!

○ 鶴見祐輔

役人である自分としては内閣の施設に對し、直接の批判を試みる地位に居ないと思ふ。只次の二點に就て自分の意見を記して置きたい。

一、英國の新人コールが、「勞働の世界」の中で、生産の悅びと言ふことを高調したのは流石に一代の天才らしき識見であると思ふ。勞働運動の基調を各個人の「人類に奉仕するの悅び」と言ふ點に置かふと言ふ心的態度に自分は滿腔の敬意を表する。人間たるの特權は我々の內心より溢るゝ奉仕の悅でなければならない。又人を用ゆる者は之を鼓吹するだけの高尙なる心靈を所有しなければならない。

二、イブセンが英國を評して「驚くべき老人の國」と言つたのは我々の味はふべき言葉である。廣翁が八十幾歲にして首相たり、ブライス卿が八十四歲にして浩瀚なる著述をしたと言ふやうな、老ゐて衰へざる精力を保有することを我々は常に心掛けなければいけない。燥急な目前的な努力は悠久なる國家の命運に培ふ所以ではない。

尙ほ自分としては政府が「日光節約」（ヴデーライト・セーイング）を實行しなかつたことを遺憾とする。

○ 生方敏郎

官吏暑中休暇廢止可否に就いての解答の葉書は幼兒が何れかへ持ち行きし爲め御返事おくれ申譯無之候、休暇廢止は郵便局等直接人民と接する役所なれば、人民は大悅びにて、局員としても社會奉仕として悅ぶ可し、又一般のお役所も人々が終日終夜働く時に、半日だけ働くといふは冥利あしかる可し、私自身仕事は好きな性質のためか、金も無くてごろ／＼してゐるより大はだぬぎで終日働くは愉快と存候、休暇廢止贊成に候。

○ 古島一雄

民間の會社に暑中休暇なき以上獨り官吏社會に休暇の特權の與へらるべき筈なし、コンナ末節の問題よりは予は五十年間に養はれたる官吏氣質を一掃するの更に急要なるを思ふもの也。

○ 川尻東馬

官吏暑中休暇の廢止は功果ありとしても極めて些末にして其過や頗る多大と存じ候第一に薄給吏員の心神に及ぼす惡影響は

延いて事務の成績に遲滯を來すは勿論思想を惡化せしめ責任觀念のさなきだに薄らぎつゝある折柄益々此惡傾向を助長せしむるものと確信致候古き語に候へ共よく遊べよく學べとは人間の心理作用を最も的確に道破したるものにて今回の改正は能率增進どころか明かに其減退を來すこと間違無之流石に逆轉内閣としての意義を事實上に具體化したる仕打に有之候。

○ 法學博士 森本厚吉

『若年のものは元氣旺盛であるから夏休の必要はない。又高年のものは餘命が短かいから夫れをとつて居る餘裕がない。』と夏休をとられてはとすゝめた助手を叱つた英國經濟學者故スマート教授の努力主義精神に私は共鳴する。勿論これは自分の業務を遊戯化し得たものにして始めて出來ることであるが、セヂ辛い現代社會で官吏の夏休廢止は已むを得ないことであらう。併しそれと同時に其功蹟に相當する增俸が伴ふべきである。そしてそれを可能にする爲めに無能官吏の陶汰を斷行しなければならぬ。夏休廢止は增俸と陶汰と共に行はるべきである。



詞華

早川雪洲・レーニン

野口米次郎

早川雪洲

私は新聞の雑報で雪洲が郷里で涙に咽んだといふことを讀む…………
私の眼前に開く活動寫眞の一幕、場面は田舎家で古びた縁側が庭に向つてゐる、
登場俳優の雪洲は顔色青く、縁側でよろめき倒れる、
妻の鶴子は雪洲の靴の紐を解く、(これは西洋には無い圖です)
室内の佛檀からは黄色な細い蠟燭の火が燃えて、
雪洲は佛檀の前へ這ひづつて行き亡き兩親の位牌を見て泣きむせぶ。

雪洲君、私は初めて君の眞實な場面を見ました、
君も恐らく初めて眞實な人間の涙を體驗したでせう、

又君は國へ歸つて、初めて眞實な人間となつたでありませう。
若し君に眞實な藝術心があるならば、君はいくつも西洋に有名な寫眞を持つてゐますが、
君はそれ等を虚僞の遊戯だとして捨て仕舞ひたく思ふでせう。
君は今眞實な人間の涙の瞬時を體驗しました、
君は無益に歸朝しなかつたことを私は喜びます、
君が眞實な人間の味を知つたことを私は喜びます、
そして私は君に質問するが、
『眞實な人間として君は再び、ホリウツドの撮影場に入る勇氣がありますか？』

レーニン

『レーニンが死んだなら、ソビエツト露西亞はどうなるだらうか？』
と質問するある編輯者に私はこうお答へいたしませう、
『レーニンの名前だつて、日々新聞に出て來る澤山の名前の一といふことの外
なんの響も私に與へません、又與へる筈がないぢやありませんか、
いつそ質問されるなら、日本の將來とでもいつた方が增だと思ひます。
雜誌といふものは、閑日月があるものだとほとほと感服しました、
どうか二度と頁の餘白を埋めるだけに役立つ質問をしてくださるな。
私自身としましては……そうですね……

急に枯葉が出來て心配になつて來た庭の松の木の方が、
人から貰つた所がとんと鳴かない河鹿をどうして鳴かそうといふことの方が、
あなたが私に與へた質問より遙に重大なのですよ。…………
ほんとうにですね……つい近頃産れた赤ン坊の泣き聲の方が、…
露西亞の滅亡よりどんなに重大問題だか知れやしません。』

富士の歌

若山牧水

伊豆天城山に登りて富士山を仰ぐ

わが登る天城の山のうしろなる富士の高さは仰ぎ見飽かぬ

高山に登らざれば高山の高きを知らずとかいへる言葉ありしを思ひいでて

高山に登りあふぎ見高山の高き知るとふ言いよろしさ

山川に湧ける霞の立ちなずみ沈みたなびき富士は晴れたり

まがなしき春のかすみに富士が嶺の峰なる雪はいよよ輝く

富士が嶺の裾野に立てる低山の愛鷹山は霞こもらふ

愛鷹の裾曲の濱のはるけきに寄る浪白し天城嶺ゆ見れば

伊豆の國と駿河の國のあひにある入江のまなか漕げる舟見ゆ

□

富士が嶺の裾野を斜に見えて居る信濃の山の山脈の雪

道ばたに埃かむりてほの白く咲く野いばらの香こそ匂へれ

眞日中の日蔭とぼしき道ばたに流れ澄みたる井手のせせらぎ

道にたつ埃を避けて道ばたの桑の畑ゆけばみた實を持てり

桑の實をつみてたべつつ染まりたるゆびさきを拭くその青き葉に

土ほこりうづまき立つや十あまり荷馬車すぎゆく夏草の野路

埃たつ野なかの道をゆきゆきて聞くはさびしき頬白の鳥

熟れわたる麥のにほひは土ほこりまひたつ道にながれたるかな

白うつぎ紅うつぎ咲く野の藪の茂みに居りてうぐひすの啼く

麥の穂のみなかき垂れてふくみたる夕日の色のなやましきかな

麥畑のひとところ風の吹きたてば夕日は走るその穂より穂に

日をひと日富士をまもとにあふぎ來てこよひを泊る野の中の村

杉山の立木の列のくきやかに青みつらなる夕暮の山

ゆふぐれの山の青みにこもりゐて啼きほほけたるくろつがの鳥

曉をうすら白雲湧き出でていよよみどりなる若杉の山

朝山のみどりが下の道ゆけば露ふりこぼす百鳥の聲

ひそやかにものいひかくる啼聲のくろつがの鳥を聞きて飽かなく

草の穂にとまりて啼くよ富士が嶺の裾野の原の夏の雲雀は

青草を拔き出でてゆるる去年の秋の萩にゐて啼く巣立の鳥は

夏草の野に咲く花はただひといろ紅うつぎの木のくれなゐの花
夏草の大野をこめし白雲のみだれむとする夏のしののめ
雲雀啼く聲みちわたり富士が嶺に消殘る雪のあはれなる空
相添ひて啼きのぼりたる雲雀ふたつ啼きのぼりゆく空の深みへ
寄り來りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山邊に
張りわたす富士の麓のなだらなるなぞへに散れる夏雲の影
夏雲はまろき環をなし富士が嶺をゆたかに卷きて眞白なるかも
富士が嶺の裾野の傾斜照らしたるこよひの月は暈をかさせり

□

大川を堰ける野なかの野いばらの蔭なる井手におよぐ鮎見ゆ
うすらかに道のほこりのまひ浮び水皺寄る瀬をおよぐ鮎見ゆ
水を掩ふ藪いたどりの葉かげなる羽蟲に跳ねる鮎の子の群
うち群れて泳ぐ鮎子にほどのよき井手のながれの瀬の强みかな
この春の日照を多み石垣の深しとふ瀬をおよぐ鮎子等
なめらけき尾鰭のふりや淺き瀬の石あかつつく鮎の子がふり
なめらかになびく川藻のひとふさのうねりの蔭に腹かへす鮎

想華

シチリア遊記

海上

柳澤健

……八時に船はナポリの埠頭を離れた。しかとは暮れやらぬ夕空に細い月影が仄かに浮き出してゐる。二三日ほど前に馬車を驅つて晝餐を認めに行つたサン・マルチニの丘がその月影のすぐ下に迫つて見える。ヴエスヴイオの山はと右手を眺めると、これは最早夕闇のなかを朧ろ朧ろに消え失せてしまつて、たゞその噴煙だけが微かに天際を暈してゐるのが感じられる。

「乞食（ラザロニ）の枕になつてゐるナーブル、マカロニと音樂の生れいでたナーブル」——から詩人ミユツセが歌つてゐるやうに、自分もまたこの街から享けた印象は喧騷と汚穢との釀し出す不思議な逸樂の渦卷であつた。然しながら、かうした優しい薄明の黃昏を通して遙かに船上から眺めるナポリは、最早乞食（ラザロニ）の枕でもなくマカロニと音樂の都でもなかつた。無數の燈影を寶石のやうに胸邊に燦かしながら溜息を洩してゐる憂愁と回想との夫人であつた。やゝ衰褪めた殉情と鄕愁と

の都であつた。

船はソレントのほとりを、カプリのほとりを左に見つゝ進む。月は何時しか落ちてしまつた。ナポリの街の燈影がいつまでも杳かの水平に動いてゐるのを、自分は籐椅子に身を沈めたまゝ長いこと眺めてゐた……

『もうシチリアですよ！』

起しに來たO氏の聲に自分は眼覺めた。窓掛を引くと明るい日射が部屋一杯に這入つて來て、枕許に置いた時計の硝子までがきら〱と眼に痛いまでに燦き出す。六時半すこし過ぎであつた。

洗面もそこ〱に自分は甲板にと上つて行つた。甲板の上には最早大勢の客が群れてゐた。風はやゝ肌に冷たかつたが、太陽の持つ光と色と熱とは流石に强かつた。空も海も一面にするどい輝きと色彩とで溢れてゐた。

シチリアの島が、この光と色の彼方に、眠るがごとく横はつてゐる！

あゝシチリア。昨夕海上からナポリの燈影を眺めながらミュッセの詩句を想ひ出した自分は、この熱い陽の下に未だ懶い眠りを續けてゐるやうに見える薄黯い島影が深碧な洋上から謎のやうに浮び出してゐるのを眺めたときに、再び同じミュッセの詩句が思はず唇に上つたのであつた。

『シチリアの女の持つ異端風な眼は、
お天氣の時には美くしい。
然し靜かなその眼尖は熱を帶びてゐて、
それにこつちがよく答へやうとするには

なかなか樂ではない。……』

まつたく、自分のまへに何氣なく靜かに橫つてゐる島は、不思議なマホメット風の熱情を奧につゝんでゐた。シチリアの女を、その女の眼を、未だ見るにいたらないうちから、自分は先づその島の姿と色合とから、今までの伊太利の旅から受けたものとは杳かに異つた奇しい『眼』の表情を受けたのであつた。

薄い霧のなかに身を橫へてゐるその島は、赭らんだ土の色と粗く刻み込まれた山の貌とを海のうへに悠然と載せかけて、『歐羅巴』から遣つて來た船と人とをまことモハメット風の眼尖のなかに不思議な微笑を湛えて凝視てゐるのだつた。融けて流れ出したやうな濃い碧色の大空と海洋の間に一杯にみなぎる陽の光を浴びながら、この野蠻な姿を持つた獸は呼吸も靜かに『歐羅巴』からの獲物の近寄るのを待つてゐるのだつた。――

自分は、あの邊と思はるる所に眼を遣つて數時間のうちに上陸するであらうパレルモの町を頭に描いた。その町こそは、曾て阿拉比亞人の手で創られられたもののうち西班牙はアンダルシアにあるコルドヴアの町や、さては埃及のカイロの町やと並んでその美しさと豐かさとを最も誇つた所ではないか。二百五十年の長い期間に亘つてモールの奇異なる文明が眩ゆく開花してゐた所ではないか。それは言ふまでもなく『歐羅巴』ではなくて、『阿弗利加』の一角ではないか。

そう言へば、その島の彼方には『阿弗利加』の陸上が直ぐ近くに橫つてゐる譯である。テュニジアがトリポリタンが熱と阿片と黃金の夢が、靜寂と死と砂漠の邦が、さてはかの樂欲と戰鬪に充ちた『愛撫の庭』が、直ぐとその背後にひろびろと橫つてゐる譯であつた。シロッコが熱と砂とを持つてその大陸からまつしぐらにこのシチリアの島目掛けて吹いて來るやうに、その大陸で釀された智識と藝術と酒と女とがあの當時什麼に熾んな力を持つてまともにこの島へ吹き寄せたか、自分は今更に眼のまへにそれを見ることが能きるやうな氣までした。

然しながら、今自分たちは『歐羅巴』のナポリから船出して『阿弗利加』を背後に控へたこのシチリアを見てゐるのであつた。若し自分たちが假に『阿弗利加』のテュニスかトリポリの港から船出してこのシチリアに向つたとする。その際にはこのシチリアは『歐羅巴』を背後に控へた陸土として旅人の心に映ずるであらう。羅馬が、雅典が、コンスタンチノープルが、その背後に横はつてゐる——

この島の上にのしかゝつては退き、退いてはまたのしかかつた歷史の波の數々が、實にそうした旅人の心に映つた姿を現はしたものに他ならないのだ。シラキュサの都を中心とした希臘の統治は、羅馬人の手によつて覆へされた。然し間もなくヴアンダルとかオストロゴートとか稱ばるる蠻族によつて、羅馬人の統治は覆へされたがその蠻族も間もなくビザンチンのためにその地位を讓らなければならなかつた。それとても、結局は阿拉比亞人の襲來を支へることが能きずにこの島を離れなければならなかつた。二百數十年に亘つたこの阿拉比亞人の統治も、やはりまた、北方から來たノルマンのために覆されることになつてしまつた。それから、それから……

あゝこの小さなシチリアの島よ。羅馬を訪ねた露西亞のある小說家が、羅馬の街の一尺四寸の土がつゝむ歷史は實に露西亞大帝國全體の歷史にも匹敵すると嘆じたといふけれど、おまへのこの叢爾な陸地はそうした羅馬の歷史にも劣らぬほどい夥しい變遷の思出を刻み込むでゐるのだつた。おまへは實にこの世界の土が知つてゐる『人間』の爭ひと惜しみと憧れとのうちでその最も烈しい氣息の數々を知つてゐるのだつた。おまへはそのまゝに生きた歷史の書籍であつた。あのゲエテが愛人のスタイン夫人にこの島い旅から贈つたといふ手紙のなかの文句を思ひ出す、——『私い旅は一つの形をとりました。シチリアは阿弗利加と亞細亞とへの道路に私を立たせてゐます。私は信じます、世界の歷史の數限りもない光線が集つてゐたこの異常な地點に私自身が遺つて來たといふことは、決して些事を以て目す可きものではありません!』

さうだ、自分もまた『異常な地點』に自分の身を置いて、東から南から北から射して來た歴史の光線の痕を探ねやうとしてゐるのだ。モハメッド敎と希臘敎と基督敎との世にも不可思議な結婚の跡を見やうとしてゐるのだ。――

船は舵をかへた。かつきりと鋭い線條を蒼空に彫り込むでゐる山影が左手につゞく。その山影がやゝ後ろに退いた邊に一團の簇つた家屋が朱らんで見える。パレルモであつた。あの山は、と傍にゐる客に聽くと、ペレグリノの山であるといふ。最早朝の時も過ぎ船からの距離も近づいたので、あくまで澄み切つた明るい光の下にその豐かな美くしい姿を惜し氣もなく露はしてゐる。夏の來ることの早いこの國では、未だ五月も十日にしかならないのに、眺め遣る樹林の綠りは眞夏のやうな生々した濃さを示してゐた。强い光のなかに搖れてゐるその綠りは眩ゆいながらに、矢張り眼に爽やかで樂しかつた。

それにパレルモの町から左に延びた風景はなか〳〵美くしかつた。白い砂濱、綠と赭とを交へた岬角、そのうしろの小丘、それから續く形のいい山脈、――そうした變化の多い風景が、明るい光のなかに靜かな陰影を作つて健やかな呼吸をしてゐる……

遠く海上から陸を眺めた時にはマホメッド風な眼尖を、靜かななかに奇異なる熱を帶びた眼尖を感じた自分は、かうしてパレルモの町が目睫に迫つてからあたりを眺め廻した時には、むしろ淸純な生命に充ちあふれた希臘の横顏を想ふのを禁めることが能きなかつた。『阿弗利加』の熱い夢想は何時しか自分の頭から薄れて行つて、その代りにかうした爽やかな綠りと淸らかな陰影とを背景とした希臘のあの美くしい列柱の殿堂の姿が眼のまへに泛んで來た。

……ほしいまゝな自分の感興が如何あらうと些かの介意もなくわが乘つた船は刻々にパレルモの町に近付いた。

十時、船は埠頭に着く。

パレルモ

大理石のやうに緻密（みつ）で眞白い熱さのなかを
太陽の鏡が綠色した頭蓋を露はし、
空の小羊の秘（ひ）びやかな群のやうに
烈しい熱さが樹木に嚙み入つてゐる。
パレルモはこれ白く燦めける砂原
その上に物の香りが重く靜かなる天蓋となつて被（かぶ）さる……
扉口も彩玻璃（ヴイトロー）もない露臺（ヴエランダ）の上に、
黄いろな椰子に似た日除けが
新らしい扇の姿で懸る。
海洋はまた薔薇いろの岩の間に
その平らで熱い金屬の大きな荷物を落しつゞける。
人々が壞してゐる壁が、鶴嘴と一緒になつて戰へてゐ、
馬車がゆつたりした馬の步みに連れて動いてゐる。
と見ると、その座席のうへに擴げた日傘の下で

黒人（サラセン）の御者が軟らかなシトロンを噛つてゐる…………

……………………

この風物詩はあのマチウ・ド・ノアイユ伯爵夫人のパレルモを歌つた詩のなかの一つだ。

自分は海に近いオテル・ド・フランスの三階の部屋から眼前に擴がつてゐるガリバルデイ公園の樹木を俯瞰しながら、この詩に歌はれてゐる情景を眼のまへのこととして想ひ遣つた。日射は稍薄れたけれども、熱い匂ひはまだあらゆるものの上にあつた。——

ノアイユ夫人の所謂『白く燦めける砂原』を自分は熱と埃を浴びながら一日歩きつゞけた。マルトラーナの寺院も見た。クワツトロ・カンチーの水を噴いてゐる彫刻も見た。賑やかなヴイツトリヨ・エマヌエレの通りも見た。本寺（カテドラレ）の奇異な美くしさも見た。カペルラ・プラチナも見た。サン・ジオヴアニ・エヴアンジエリスタも見た。さては美術館（ムセオ・ナチヨナーレ）も見たし、大きな伊太利コリント風の劇場（テアトロ）も見た。雜多な感覺と幻想と太陽の熱とで自分の身心はかなりに疲れ切つて、宿のオテル・ド・フランスに戻るや否や、部屋の窓からはいつて來る稍涼しい風と爽かやな綠りとを樂しみながら、ボーイの運んで呉れたシトロナードの眼に沁みるやうにピカントな液體を一息に咽喉につぎこむだ。そしてはじめてほつとした。

見て來たいろいろのものを今想ひ出して見ると、やはり奇異な混淆といふことになる。まつたくゲエテの言つた通りにそれは亞弗利加と亞細亞への道になつてゐる計りではなく、また雅典への羅馬へのコンスタンチノープルへの、更にはまた巴里への道にもなつてゐるのであつた。それはあらゆる場所のまたあらゆる時代の十字路をばなしてゐるのであつた。ドリツク風の殿堂に隣つてアラブの不思議な色と形を持つたバシリカが聳えてゐる。かと思ふと、ビザンチン式の華麗な建物に並んで、ノルマン式の堅硬な感じに充ちた建物が建てられてゐた。否一つの建物のなかに於ても一坪の

なかにビザンチンとドリックとノルマンとが群居してるのさへ見ることが能きるのであつた。然しながら斯うした古い時代の建物の周圍に動いてゐる人々を眺めると、その服裝なりその髮形なりの上に、我々が物の本なぞを讀むで豫想したやうな特異な姿はこれを見出すことが容易ではなかつた。やはりそこにあるのは現代の『歐羅巴』であつた。曾て數ケ月以前西班牙のアンダルシアの各地に遊んだ折に親しく見たその地の風俗のことを、今このパレルモの町の風俗の上に思ひ較べて見ると西班牙の方が現代の『歐羅巴』にかう近くはなかつたやうである。然しこの現代的な風俗にもかゝはらずに、その眼や鼻や唇や髮の毛やの旅人に與へる感じは極めて錯綜してゐた。怪しい熱情的な『モハメツト風の眼尖』が感じられる計りではなく、ドリツクの圓柱のやうに端麗で清純な希臘風の横顏も感じられるし、霧の深いノルマンの謎を持つた碧い瞳のいろをも感じることが能きた。

いま自分は一つの大きな生きた博物館（ムセオ）にゐる！　自分は幾度かうした思ひを胸に湧かしながら古い建物を見上げては立ち停り、また行人の後姿を眺めては立ち停つたことであらう。

……何時しか陽は西の山さして落ちて行つた。あの山影はかのノルマン・シチリアン藝術の最も美くしい典型とされてゐるサンタ・マリア・ラ・ヌオヴアの本寺（カテドラレ）のあるモンレアレの町が横つてゐるカプト山ではないであらうか。雛罌粟のやうに眞紅な夕陽の餘閃を受けてその山影の頂は蝶々の羽のやうに細かくふるへてゐる。涼しい風は、眼の下の夾竹桃の花を動かしながら、黄金いろの薄明に罩められてゐる自分の部屋のなかに爽やかにはいつてきた。それと一緒にいろいろの草花の持つ强烈な香氣までがはいつてきた。自分は椅子から立ち上り、窓ぎはで思ひ切り胸を張つてこの暮方の香氣に充ちた空氣を吸つてみた。——

不圖自分は眼下に見下すことが能きるこのガリバルデイの庭園（ジャルデイノ）の樹々が黄昏の光のなかに一際美くしく泛び出したのを眺めてゐるうちに、ゲエテのパレルモ紀行のなかの一節が頭に泛んで來た。

それは何でもゲエテがこの町に滯在中能く杖を曳いた公園のことである。(眞逆に自分が今見てゐるこの小さな庭園ではあるまい、が自分のほしいまゝな空想はこれであつたことに考へやうとしてゐる) 彼は當時ある劇詩を構想してゐたが、その思ひを纏めるために朝などはよくこの平靜なる公園を漫歩するのを常とした。所が、かうした目的で公園に出掛けるゲエテがそこから獲て歸るものは果してその劇詩の構想であつたか? 否、ゲエテは公園にはいるや否や曾て獨逸にあつて見たものとは到底較べ得ないほどの生々した美くしさを持つ樹と草とを見て烈しく心を惹かれ、引いて彼の常に抱いてゐた自然科學に對する愛の爲めに、此等の植物の形態・性質を仔細に知らんとするの情を抑へ得ず、不覺身をかがめてその葉その花その幹の觀察に時を費やしてしまうを常としたといふ。然もかゝる時を過したのちに、彼は衷心から現代に生れたる人間の心の不統一を分裂を散漫を嘆息するのであつた……

ゲエテが或は植物學に或は鑛物學に或は人體の解剖學に熱い興味を持ち續けた人であるといふことは既に幾度か聽きもし讀みもしたところであつたが、自分はこの二月の末あのワイマーの地を訪ねて彼の舊居のなかに立ち親しく偉人の私生活の跡を眺め廻したとき、今更ながらに彼の持つてゐた世界の廣さを驚かぬわけには行かなかつた。そこには、例へば鑛石だけでも、自分たちの學んだ中學校に備へつけられた夫れ等よりも遙かに多く蒐められてゐるのを見た。まつたく自分は嘆息を洩しながらゲエテの大いなる頭腦のことを想ひ遣らずには居られなかつた。

然しながらこのワイマーに於ては我々は彼の口から左ほどに己れの心の『不統一』を『分裂』を『散漫』を嘆き訴ふる聲をば聽くことはなかつたと思ふ。そこでは彼はあらゆる分裂をそのまゝに寛く享け容れて、大どかなる微笑のなか

にそれをつゝむでゐたのであつた。それがこの『太陽』の國に來て、そこに輝く岩と樹木と草とを見、また眩ゆき大理石の彫像と殿堂とを見たときに、今まで靜かだつた彼の心はその鮮やかな色と光とのために急激に動き出して騷ぎ立てた。彼は、心のなかに燃え立つ詩想を感じると同時に眼に映り來る蠱惑の色と光とを感じた。彼の欲望は同時にあらゆるものに向つて――石に樹に草に建物に彫像に思想に向つて――燃えつゞけた。彼はもう物靜かなワイマーの書齋にむつて鑛石に飽きたら書籍にまたそれに飽きたら人體解剖に、といふやうな日課を繰返へす人ではなくなつて來た。靜かに整へられてゐた數々の欲望が、煌々する南歐の太陽のために、我勝ちにと伸び彈け突き進むやうになつて來た。劇詩の構想を獲むがために足を運んでゐる彼のまへに、光と色の波が亂舞してゐるやうな植物が聳立してゐて、忽ち彼の眼と心とを捉へてしまうのであつた。

彼はこゝで嘆息する――『我々はどうしてかうも數多い欲望を起すやうに刺戟されるのであらう!』

……自分は眼を閉ぢてあの雪のなかのワイマーの情景を頭のなかに思ひ浮べる。それから眼を開いてこのシチリアの空と樹と家とを眺める。あゝゲエテでなくとも、誰がこの著しい環境の相違の下にあつて心の變移を感じないものがあらう。ワイマーにあつてはすべてが靜寂だ冥想だ溫柔だ薄明だ私語だ微笑だ、そして『思想』だ『内』だ。がこの光のシチリアにあつてはすべてが喧噪だ活動だ熱烈だ白晝だ高聲だ哄笑だ、そして『形』だ『外』だ。これこそ明らかに『北』の持つ横顏（プロフィル）と『南』の持つ横顏（プロフィル）との相違だ。……

日は全く沈んでしまつた。暮れ殘つた公園の夾竹桃の林越しに眞白い小徑がかゞやいてゐる。見馴れぬアルバニア風の被布を着けた男が、果實を盛つた籠らしい、大きな荷物を背にしてその仄白い小徑をのそり〳〵と歩いて行く――

セジエスタの希臘殿堂

「トラパニ行」と記された汽車に身を托して二人は——O氏と自分とは、パレルモの町を離れた。セジエスタの寒驛から數哩の所にある古希臘の建築物を見やうが爲めであつた。五月十一日の午前十一時。空は限りなく碧く燦いてゐた。この汽車が行き着く先のトラパニといふ町は、やはりこれもこの汽車が立ち寄るマルサラといふ町とともにシチリアの島の西端に當つて夫々に小さな商港を形作てゐる所である。セジエスタやまたはセリヌンテまでは出掛ける旅人(ツウリスト)もすくなくないけれども、斯うした僻遠の古い港なぞに出掛けるものとては殆んど無いと言はれてゐるそのトラパニやマルサラの地方！　自分たちだとて矢張り世の常の旅人のごとくセジエスタの見物を終へ次第にパレルモの町に引返さうとしてゐる。然しながら自分の心にはその未知の地方の姿が不思儀な魅力を帶びて明滅するのであつた。このシチリアの島に渡るまへに不圖眼にしたその地方の情景を描いた記事が、かうした汽車に搖られてゐる自心の心に淡とした鄕愁(ノスタルジア)の念を湧かすのであつた——

その地方はシチリアのなかでも最も古い傳統を持ち續けてゐる所だとせられてゐる。殊に婦人なぞは未だに古い羅馬法の文句通りにこの全一生を律しられてゐるとさへ言はれてゐる。從つて其等の婦人の生活は旅人の眼には詩とも映り傳說とも映るほどに古風な情趣に充ちてゐるものであると言ふ。

例へばその地方に於ては婦人が單獨に外出するが如きことは殆んどないと言はれてゐる。從つて普通の人民の間に於ては、食物の買出しなぞまでも夫がこれを遣ることになつてゐる。時とすると妻は二重の錠を下した部屋のなかに押し籠められ知人に逢ふにもたゞ窓を通してのみ語り合ふのを許されるに過ぎないやうなことさへあるといふ。言はゞ彼女

たちは一日部屋にあつて夢みてゐるのがその日課であつて、伊太利語の所謂安逸(ファルニエンテ)の快樂。――それに身も心も任せてゐるのである。たゞ内庭の噴水の爽やかなひゞきが、彼女の安逸な氣懶い夢のなかに一筋の彩(あや)を織りこむに過ぎないのであらうとまでに想はるゝのである

未婚の婦人についてもまた等しくかゝる有様が見られるといふ。彼女たちは窓のまへに座つて、小さな狹い路（シチリアではかの西班牙のアンダルシア地方と均しく太陽の烈しい熱を避ける爲めに路を狹めて影を多くしてゐる）を通り過ぎる人々を眺めて日を送つてゐる。若し路行く若き男がこの小窓を通して視線が已れに來ることを感じたとき、若し心に染まなかつたならばその鍔の廣い帽子を眼深に冠り直して通り過ぎるといふ。若し彼が同じ時刻にその場所を二度通つたとしたならば――それこそは言ふまでもなく心と心の歡喜への點火であり、さてはまた續いて來るべき悲劇の幕開きともなるものであらう……

夜が來る。小窓の下でギーターを手にしてしのびやかに唄ふ者がある。と見ると若き娘が、靜かに柔らかに窓の戸を半ば開く姿が見られる……然しながらその唄の聲が一きは高くひびく時、突如として凄まじい火藥の閃光かさては一振りの短劍の閃光が、暗をつんざいて走るのである。――

……パレルモを出てからずつと海に添ふて走つて來た汽車はカステルマーレの驛を離れるとともに海からも離れてしまつた。左右の野には暗綠色の覇王樹の大きな枝幹がそれからそれへと立ち並んでゐた。また地味な淺綠色の橄欖の樹が靜かな色と姿とを整へて彼方此方の丘を飾つてゐた。そしてその野や丘を蔽ふてゐる一面の草原には紅や黄色や紫の草花が艶やかしい色を揺れ動かしてゐるのだつた。午後の容は懶いほどに光に醉ふてとろんとしてゐた。――

希臘の殿堂を見に行かうとしてゐる自分にとつて、この濃い色と光に溢れた野山の光景はそゞろにあの希臘神話の數々の場面をば想ひ出させずには措かなかつた。自分は、この美くしい光に醉ひ痴れた野のかなたから牧羊神（フォーン）の笛吹く聲が懶げにひびいてくるのを耳に親しく聽くのを感じた。自分はまた、そこの花の簇り咲いてゐる草原の上に裸身のニムフがうつつなく午睡の夢に落ちてゐるのをも眼に親しく見るのを感じた。さては、山神（オレアド）が、樹神（ドリアード）が、河神（ナイアード）が、林神（シルヴァン）がそこゝこに身を曲げ身を伸べて、この夏の熱氣に醉ひ痴れてゐる姿をも感じることが能きた。實に、幾度となく巴里の樂堂で耳にした『牧羊神の午後（ラプレ・ミディ・ダン・フォーン）』の夢が、そこにありありと現はれてくるのであつた。……

セジエスタ。その小驛に汽車は停つた。午後二時。空は白葡萄酒のごとく白く濁つて來た。

希臘の癈趾はこの小驛から五哩ほど西に當つてゐる。この間を歩いて行かねばなるまいと考へて來た自分たちは、驛を出るとすぐまへに乘合自動車が横つてゐるのを見出した。

『これは殿堂（テンピオ）へ行きますか？』

片言交りの伊太利語で傍に立つてる人に尋ねると、行きますといふ。然しこれはずつとその先の村まで行くのであるから、歸る折には歩いてこの驛まで來なくてはならぬとのことであつた。

大勢の客を乘せたこの車は程無く動き出した。白い道がわりに緩やかな野山のなかをうねつて行く。樹木は何時の間にか少くなつて、見遣る野は眞紅な雛罌粟の花の咲きみだれてゐる草原であつた。が遠方此方には岩の屹立してゐる山の聳えてゐるのが見られた。遠くの山の頂には城砦の跡が殘つてゐるのさへ見られた。間もなく、右手に當つて幾重の緩やかな緑いろの山越しに赭土いろの四角な建物が孤り寂しげに遙か山上に建つてゐるのが眼に這入つた。

『あ、殿堂（テンピオ）！』

不覺から口に出して言ふか言はぬかの間に、再びその赭土いろした小さな姿は手近い山の肌に隠されてしまつた。草原の美くしい花に見入つてゐてその殿堂を見損つたO氏の顔からそい失望の色が未だ消え失せてしまはぬうちに、車はゆるやかに停つた。

こゝで車に別れてあの山上まで自分たちは歩いて行かなければならないのであつた。

汚ない姿をした子供が何人となく口々に何やら喧しくわめき立てながら自分たちの周圍に集つて來た。道を案内してやらう。荷を持つて遣らうと言ふのであらう、自分たちのほかにその乘合から下車したのは一見して巴里人と察せられる初老に近い佛蘭西人夫妻のみであつた。お互に顔を見合せて苦笑しながらこの煩さい群から漸く免れて、草原のなかを走る徑に出ることが能きた。到底車なぞが通りさうもない粗々しい徑であつた。夫人は顔を顰めて己れの足許の石の多い徑を情けなさうに眺め廻してゐるのを、夫が傍から頻りと励ましてゐる態を後に見ながら、自分たちは早くその殿堂を見むものをと路を急いだ。

ビスピーサの流れ。靴を濡しながらその流れを渡ると、徑は次第に岩山に沿ふて險しくなつて來た。岩角に腰を下して今上つて來た方を眺めると、先程の佛蘭西人夫妻が驢馬を雇ふてゐる姿が遙か小さく見える。青々した草原のなかを走つてゐる白い筋は先刻車で遣つて來た路だ。碧いろに光つてゐるのはビスピーサの流れだ。紅く揺れてゐるのは罌粟の花だ。白く動いてゐるのは放ち飼ひになつてゐる牛だ。自分の想像はまたしても希臘に、希臘はかのアルカディアの魅はしい野にすら、馳けり行くのであつた……

ペデツカの赤い本を夫々手にして、一見英國のオールド・ミスらしい三人の婦人が聲高に哄笑しながら上の方から下りて來た。自分たちは氣が付いたやうに立ち上つて、またしても險しいその山路を喘ぎ喘ぎ登つて行つた。……幾つか

の坂を越えてから漸くのことで嶮しい岩徑は平になつた、——とほつと息を吐きながら見るともなしに前方を眺め遣ると、ほう！　孤立した青山の上に屹然として聳立してゐる希臘殿堂！

薊の花が咲き亂れていとどさへ狹い所を更に細めてゐるその徑を殿堂さして急いで行く折の自分の胸の動悸を、さては、殿堂に辿り着いてその圓柱を仰ぎ見たときの今更らしい強い感動を、その圓柱に親しくこの手を觸れたときの涙ぐましいまでの感激を、自分は何の言葉をもつて、言ひ現はすことが能きるであらう！　雅典のアクロポリスの山上に立つて『祈禱（プリエール）』をさゝげたあのエルネスト・ルナンのやうに、自分もまた祈るほかすべもない激情と陶酔とに捉へられてしまつたのであつた。——

希臘！　あゝ『美』と『知識』の母、『光』と『熱情』の戀人、『藝文』の王座、『青春』と『自由』の故郷である希臘！　卿は見てゐる、卿の手で創り上げたこのセジエスタの殿堂のまへに、思ひあふれて無言の跪拜をしてゐるこの私を！

私は夢のなかで幾度となく見た、この美くしき殿堂の姿を。私はまた幾度となくこの眼でも見た、巴里にあるラ・マドレエヌ寺をパレエ・ブールボンをパンテオンを、その美くしい姿に似せて造られた數々の殿堂を。然し今こそ私の眼のまへに聳えてゐるのは、まぎれもなく卿の胎のなかから生れ出でた娘であつた！　この空、この丘、そして遙かに光つてゐる海——あゝそのなかで私は卿の生むだ美くしい娘をまざまざと見てゐる！

希臘の美くしい娘！　卿をまへに私の胸は激情に浪うち私の眼は陶酔にうるむ。あゝも幼い頃から私の心に數々の忘

れ得ぬ唄を歌つて呉れた古い希臘、――その生むだ娘の美くしい横顔と姿態を、かうも間近にうち眺めかうも親しげに愛撫できやうとは！　あゝわが喜びの大きさは、卿のまへにかうして在ることが今まで見馴れた夢の一つでないかとさへも訝（いぶ）かられる。然し私はたしかに立つてゐる、この五月の燦かしい空の下に、この豊かながらに寂しいモンテ・ヴアルヴアロの山上に、そして三十七本の圓柱が聳えてゐる希臘大殿堂のまへに。それがどうして假初の夢であらう！

あゝ希臘の殿堂よ。卿は私のこの興奮を靜かな微笑を泛べて見下してゐる。そうだ、私は卿が何よりも明るい叡智の『女神（ニンフ）』清楚なる韻致の『娘』であつたことを忘れやうとしてゐた。卿の微笑は、私に心に湧き立つものをおほらかな言葉もて語ることをすすめてゐるのではないか？　よし、私はこの山上に聳立してゐる卿の足許に腰打ちかけて――あの竪琴を手にして爽やかに澄みたる音色のなかに熱い心の波を揺り動かしてゐる卿の國の音樂師のやうに、私もまた靜かなる言葉でわが熱い心の波を揺り動かさう。

……眼のまへに聳立する希臘殿堂よ。先づ卿の姿の美くしさは如何なる言葉をもて讃ひ得やう。私は今こそ知つた、希臘の持つこの單純の美こそは實にあらゆる美くしさを綜合（あつ）めたものに外ならぬことを、ゴチックの美がルネサンスの美がさてはサラセンの美がその側にあつてはまことと『野蠻』の美であるに過ぎないことを、さてはこの單純の美こそは實に希臘の持つたぐひなき叡智から生れ出でたものに外ならないことを。

しかもこの美くしき限りをつくしたる姿態の憩へる座席は？　あゝそれこそ魅（まど）はしい野と山と海と蒼空。ひろびろ

と波うつ野と丘には五月の花が泡の散るやうに擴がり、そのなかを青羽のやうに光るピスピーサの流れとガジエラの流。遙かカステルマーレの海港が岬角のかげ蒼海に添ふて黃金の甲蟲のやうに燦く……實に自然はその持つあらゆる美をあげてこの殿堂への捧物(オフランド)にする。見よ、かくして藝術と自然との持つあらゆる美くしさは、皆この一點をめざして聚まる。誰がこれにまして更に豐麗なる美をこの地球の上で探し得るものがあらう。あゝ『完全の美』の希臘、私は卿に心から跪拜する。

希臘は死んだ、パンは死んだ、オリンピアの神々は皆死んでしまつた、――と誰が言ふのか? あゝ、私はこのセジエスタの殿堂のまへに立つて、死んだのは此ではなくて彼であることを確かに悟つた。ヘブライが、阿拉比亞が、印度が死んだのだ。エホブが佛陀がアラーが死んでしまつたのだ。そして希臘の神々は、エトナに近い靜かな海沙のうへであの牧羊神(フォーン)が夏の日の懶い睡りを眠つてゐたやうに、たゞ靜かな睡りを續けてゐたに過ぎないのだ。見よこの生々した――何ものよりも生々した『美』を、『諧調』を、『叡智』を! これを生み出したあの壯麗なる神々が死んだものであるといふことは、何といふ痴かしい謬言であることか! 見よ、その睡りが覺める時も近くに來てゐるのだ!

あゝ彼女の胎から生れ出でたホメロスとフイジアスとプラトンとを思へ。彼等こそは世界の天心に燦として煌く三位一體の榮光。その眩ゆき光芒のなかに、全人類ははじめて時の黎明を知つたのだ。そして今も全人類はこの光芒の射し來る徑を辿り步きつゝあるのだ。あゝ世紀より世紀へ、國土より國土へと跳躍しつゝ光の洪水を迸ばさしむるこの『奇蹟』を思へ。この壯麗なる炎が消え亡びたものであるといふことは――この炎を生み出した神々が死んだものであると

いふことは、何といふ愚かしい誣言であることか！ アテナがサラミスの空にむかつてその擲矢を投げつけたやうに、わが希臘よ、卿を死せりとなすあらゆる痴かしき者をめざして、その擲矢を誇りかに投げつけよ！

わが希臘よ、實に卿のみこの世にあつて永遠の若さ永遠の聖らかさを現はす。この故に卿の生む所の者の如何に優しくしてまた如何に強きことか、さては如何に歡悦に充ちまた如何に清淨に溢るることか――ホメロスとフイジアスとプラトンを思ふ額を擧げて、更にこの眼前に聳立する大なる殿堂を眺めよ！ そのまがうなき青春と清淨、熱情と叡智との結晶は、實にホメロスやフイジアスやプラトンやの裏に釀(かも)された精神の見事なる鑄型に過ぎぬのではないか！ あゝ、私の眼はいま、そのホメロスの壯大なる詩篇をフイジアスの調和せる彫刻をさてはプラトンの明徹なる思想を、そのまゝ咫尺の間に眺めてゐるのではないか。否、否、全希臘そのものをこの眼が眺めてゐるのではないか……

セジエスタの清楚尋麗なる殿堂よ。モンテ・ヴアルヴアロの山上に寂しく建てられたるわが『希臘』よ。私は曩(さき)に靜かなる言葉で心の唄を奏づることを卿に誓つた。然し卿に對する私の熱い激情が、かうも言葉を亂しその韻律を醜くしてしまつて、曩の誓ひを踐むことができなかつたことを私は恥かしいと思ふ。二千數百年の昔からこの寂しい山上に孤りで立つてゐる卿、また雨と風とに絶えず廢滅へと脅かされてゐる卿、それなのに卿はその朗かで靜かな微笑をすこしも失はうとしてゐない！ あゝ、そのまへにあつてかうも喋がしく吃語する私のみすぼらしさに私は赧くなる。希臘よ、永遠の春よ、私は卿のまへにあつて曩のごとく無言跪拜のなかに熱い心の祈りをひたすらに捧げるにとゞめることとしやう！

驢馬に乘つた佛蘭西人夫妻が遣つて來た。會釋をしながら自分の立つてゐる邊まで近寄つて來た夫人は女にあり勝ちの不平を、——道の遠いことと險しいことと乘り物の不完全なことの數々の不平を、自分にまでしきりとつぶやき續けるのだつた。そして、この殿堂の美くしさに眼が惹かれるといふことさへないやうに見えるのだつた。

自分は多少の苦笑を心のなかに感じながらこの夫人から離れた。……が、ふとかうも思つた——かうした清楚豐麗なる希臘の美こそは、華美纎奢なる濁みのなかにある女性の感性によつては容易に理解し得られざるものではなからうかと、そしてまた、その秘鍵こそは希臘人が美の典型として寧ろ男性のアポロンを女性のヴエヌスの上に置き、女子よりも寧ろ美くしき少年をその熱愛の對象として選んだといふことの證しともなるのではなからうかと。

……この殿堂から離れて希臘劇場(テアトロ・グレコ)の廢趾がある。殿堂から眺めると低地を超えて向ふに横はつてゐる丘の上に、その廢趾があるわけである。それへと續く細い險しい徑を三十分ほども上下して行くと、やがて、靑々した草叢のなかを白く擴がる石の段階が眼に入る。——それが、劇場の廢趾であつた。

殿堂が三十七本の圓柱を完全に維持してゐて殆んど當時の姿態のまゝを眼のまへに示し出して呉れるのと比べてこの劇場は大分にひどく痛められてゐて、廢趾の感じがあたりを蔽ふてゐるのだつた。

然しながら、その廢れた石段の上に腰を卸し、演技の行はれた舞臺を見下してゐた眼をふと擧げて、その彼方に擴がる野と山と海とを眺めたとき、おゝ、希臘の美がその『完全』から何物をも失はることもなく、こゝに悠然として永遠の生命を輝かしてゐることを烈しく感ぜずにはゐられなかつたのであつた。

希臘の都市について學んだ誰でもが知る通り、アクロポリス、卽ち山上に建てられたる殿堂を中心としたる高市から程遠からぬ傾斜に面して必ず設けられることになつてゐたこの劇場なるものは、元來は民衆の享樂の爲めにといふのでは

なく、神を祭るが爲めの場所として作られたものであつた。故にこゝで演ぜられる演劇は今日考へられるやうな娯樂ではなくて、一の神聖なる祭事であつた。從つて希臘市民は、その演出の日は必ず觀覽の義務あるものとして、國家はその辨當料までも拂ふことになつてゐたとさへ言はれてゐる。

その古希臘の制度につゝまれてゐる生々した精神が、廢趾に腰を卸して周圍を眺めてゐた自分に、突如として遣つて來た。まつたく、その舞臺の彼方に展開してゐる美しい風物は（殊にカステルマーレの海港とその彼方に擴がる海洋の美くしさは！　暮方近い薔薇いろの光と色がそのうへを花の細かに顫へるやうに動いてゐた！）單純なる風物ではなくて、舞臺の背景、――といふよりも、むしろ舞臺そのものの一部分をなしてゐるのであつた。かうした比喩なく美くしい風物のなかで演出される演劇といふものを、如何して我々の時代の演劇と同じものであるといふことが能きやう。厚い壁に取りまかれ、人工の燈火に煌かされ、吐く息と化學的な香料とが立て籠めてゐる小さな建物のなかで、演出されてゐるところの今日の演劇と、この朗らかな自然のなかで、この野この山この海この空のなかで、演出されてゐたところの古希臘の演劇と、――それが同じなものであるとは、あゝ如何して言ひ得やう。希臘人にとつては演劇が祭事であり、劇場が祭壇であると言ふことが、今こそありありとこの眼をもつて理解することが能きた！　自分はもう希臘劇場の『廢趾』の上に立つてゐるのではなくて、永遠に廢れざる『生命』の上に立つてゐるのであることを感じないわけに行かなかつた……

時も迫つたので自分たち二人は心殘りの思を抑へながら山を下りはじめた。セジエスタの停車場までは二里といくらかある。もう車の便はないので休憩なしにこの道を歩いて行かなければならない。それに汽車の出る時間も割に切迫し

てゐる。急ぎ氣味にこの長い道を歩かねばならぬことは樂ではなかつたものの、おそらくその當時希臘人の歩いたに相違ないと思はれるその道をば今自分たちも歩いてゐるのだと考へると、今更らしく新らしい感慨は胸にせまつた。それに、それからそれへと眼前に展開してゆく野や山の姿は深い美くしさをもつて心に落ちてきた。山上に寂しく立つてゐる殿堂も、しばらくの間うしろの方に見えてゐた。がやがてそれも夕暮の光とともに消えうせてしまつた。我知らず自分は帽子をとつた。……白い埃の多い道だつた。暮れ方とてあとからもまへからも馬車が遣つて來た。素朴な田舍人のなかには、見知らぬ異人の自分たちにまで暮れ方の挨拶を投げかけるのもあつた。山羊か驢馬の鳴聲が薄明の野のなかから悲しくきこえてきた。——

　セジエスタの貧しい停車場に辿り着いた時には流石に手も足も投げ出したいやうな氣持になつてゐた。

『一杯の游茶、——といふやうなものが欲しいね』這麼ことを二人は口にしながら、停車場の傍に捨てたやうに置いてある小さなベンチに腰を卸して息をついてゐると、一人の男の子が側に遣つて來て、何やらしきりと話しかける。家に來い、飲料があるから、——といふ風に聽きとれたので、その子供のあとに付いて行くと程近い一軒の家へ來た。

　入口に近く、洋燈(ランプ)の置いてある卓子のまへに席をとつてから自分は初めて周圍を見廻した。このほかに部屋が一つ位しかあるまいと思はるるほどの小さな家であつた。古ぼけた油繪の額が、一挺の獵銃やギーターやと並んで掛けてあり、棚の上には葡萄酒の瓶に並んで草花をさしたコップなぞが無雜作に置いてあつた。好奇に充ちた、しかし親しみを失はない眼尖があちらにもこちらにも光つてゐるのだつた——先づ十二三ほどに思へる痩ぎすな小娘の眼が、それからその兄と見える十六七の少年の眼が、それから臺所の方に働いてゐた廿歳ほどの割に美くしい娘の眼が……

　その十二三の小娘がまめまめしく卓子の上を取り片付けて、自分たちが註文した飲物やパンやを運んで呉れた。朱く

透き通つて見える葡萄酒(ヴィノ)も、眞白な肌理の細かいパンも見た眼には奇麗だつたが流石に味は良くなかつた。しかしながら、可成りの空腹としつきりなしに小娘が頭をかしげながら口にする『この葡萄酒はよくつて?』『このパンはうまくつて?』といふ言葉との爲めに、『え、うまいうまい(シ・シ・ボナ・ボナ)』と言はないわけには行かなかつた。覺束ないながらもかうして小娘の質問に答へてゐる自分たちを見て、今まで隅つこの寐椅子に腰を掛けてゐた少年が卓子の側に遣つて來た。そして、『殿堂(テムピオ)に行つたのか?』『美(ベロ)くしかつたか?』といふやうなことから、やがては一向に自分たちには判らない言葉を次々と發してその受け答へに困らせられた。それに、やがては髭面の人の善さそうな主人までが側まで遣つて來て、自分も葡萄酒のコップを手にしながらいろ／＼と話しかけはじめた。小娘はまた階段をのぼつて物置になつてゐるらしい天井の床から小さな筺を取り出して來て、自分たちの卓子の上まで持つて來、そのなかからいろ／＼の手紙や玩具やを出して珍らしそうに並べて見せるのであつた。自分たちはかうした田舍風の歡待に取りまかれて、時々は苦笑を洩しながらも、潤な快い時を持つことが能きたのを心のなかで悦んだのであつた。

もうそろ／＼時間だつた。『幾許拂つたら?』と質ねると、主人は『お幾許でも(ヴォロンタ)……』と答へる。主人に渡したほかに幾許かの僅かなものをその子娘に——『小さなアンジエロ(ピッコロ)』といふ名であることを知つたその小娘の小さな手に與へてから、自分たちはこの小さな家を立ち出でた。

外はもう黄昏が夜にうつる頃合であつた。星が一つ、遠いモンテ・ヴァルヴァロの山の方に當つて强く煌いてゐた。停車場には先程の佛蘭西人夫婦がぽつんとしてゐるだけであつた。やはり自分たちと同じやうに二里いくらの道を歩いて來たとか。あの殿堂のまへであゝも不平を自分に洩した夫人も、今はもうした元氣さへもない程に疲れ切つて唯眼で會釋しただけで苦しげにベンチに凭りかゝつてゐた。然しながら主人は元氣でしきりと先程見た殿堂の美くしかつた

ことを自分たち相手に喋べりつゞけた。ナポリとレッジオとの間にあるペスツムの希臘殿堂も親しく見て來たとて、自分たちにも切にペスツム行を勸めるのだつた。『これからセリヌンテに出ます。貴方たちも御出でになればいいに！』といふやうなことさへ言つて、希臘の美の殘るあらゆる場所を訪ねやうとする若々しい熱情の語氣洩をすのであつた。

やがてパレルモ行の汽車が遣つて來た。再び逢ふ機會もあるまい共老いた佛蘭西人夫妻と手を握りながら、それでも言葉だけは『またそのうちに（オールヴォア）』と言ひ合つてから車のなかに上つた。汽車は自分たち二人をのせたのみで進みはじめた。老人たちの姿は消えた。『小さな（ピッコロ）アンジエロ』の家も消えた。モンテ・ヴアルヴアロの殿堂へと走る白い街道も消えた。それへと續く野も丘も、總てはみんな消えてしまつた……

パレルモからジルジエンチへ

セジエスタの廢趾を觀て來た自分たちにとつて、今更に『希臘』への鄕愁は傷ましい身熱のやうに心を搖り動かして止まなかつた。パレルモの街にもつと止らうとする心は禁め得なかつたけれども、このシチリア島の南岸、亞弗利加海（マーレ・アフリカーノ）の波が洗ふジルジエンチの古市には、セジエスタよりも更に豐かな『希臘』が殘されてゐることを考へると、このパレルモに足を駐めてゐるのが限りなく焦たしかつた。

遂に自分たちはジルジエンチ行の切符を求めて、懷かしいパレルモの街を離れることに決心した。

よく晴れた日だけに暑かつた。眞夏の暑さだつた。旅館から停車場へと赴く馬車のなかから街を眺めると、未だ十時にもならないながらに、夫々鎧扉を固くとざして最早午睡の夢に落ちてゐるかのやうに灼熱と寂寞とのなかを默りこくつて並び立つてゐるのだつた。大きな棕櫚の蔭に水賣が懶げに客を呼んでゐるのが、この暑さに默りこくつた街から響

いてくるたゞ一つの聲であつた……

すこし遲目に停車場に着いたので、車中にはもう自分たちの掛けらるる席は殘つてゐなかつた。廊下までも人は溢れてゐた。こゝ二三日のうちに迫つた總選擧のためにかうして人々の來往が烈しいのであるといふことを、傍に立つてゐた男が知らせて呉れた。『フアシスチと共產黨の爭だからね、伊太利と露西亞との勝敗だからね！』――こんなことまでその男は言つて眉を擧げるのだつた。

何よりも先づ席が得たかつた。然しながら一向に下車する者もなかつた。せうこともなしに持つて來た鞄にもたれたり窓際に凭り掛つたりして、時を過さねばならなかつた。汽車はパレルモを出てからずつと海に添ふて走つてゐる。マーレ・チルレノだ。その懐かしい海景も、座席なしでずつと一時間も二時間も立たされてゐる自分たちにとつては、如何でもよいやうな氣まで起させられるのだつた。それほどに辛い思が深かつた。

セルダと出てゐる小停車場に着いた。こゝで思ひがけず夥しく人々が降車するので、自分たちは漸くのことで席をばとることが能きた。ほつとしながら、地圖を出して調べると、この小驛は一方ずつとマーレ・チルレノの海添へに遠くメツシナの街まで走る線路と、他方このシチリア島を横斷して、今自分たちの行かうとしてゐるジルジエンチの方に走る線路との、その分岐點に當つてゐるわけであつた。

席が得られたのと、咽喉の渇きを濡ほす爲めに口にした香橙(アランシイ)のかぐはしいその匂ひと味との爲めに、自分たちは生きかへつたやうな氣持になつて、窓外の移りかはる風物の上にしみじみと眼を向けはじめたのであつた。

シチリアの内部は殆んど山地のみからなつてゐる、と言はれてゐる。僅かに東部海岸のカタニア地方を除いては、殆んど平地を見ないと言つてもいい程だ、と言はれてゐる。從つて、かうした車窓の一劃からでも、この粗々しい山地が

(見た眼には趣があるものの)世紀から世紀に亙つて數多の民族の烈しい爭奪の對象を成してゐたといふことは、一寸信じられぬほどであつた。思ふにこのシチリアがそうした爭奪の對象となつてゐた所以はその土地自身に持つてゐる價値からではなくて、その地位から來てゐやう。總ての大陸の前衞となり延長となつてゐたその特殊の地位から來てゐやう。……

自分は、曩に海上からこのシチリアの島影を眺めながら考へたと同じことを、またこの意外の展望からも考へ來つたのであつた。

自分の考へは、そうしたことから引き續いて、この豐かに見えぬ山地に働く人々のうへに走つて行つた。『シチリアのガベロツチ』と言へば歐洲人の耳には貪婪の代名詞のやうにひゞくその土地々々の管理人のこと、その下にあつて虫けらの如くに取扱はれてゐる貧しい農夫のこと、その慘めな境遇に忍從し切れずにその土地から逃げ出し山賊となつて、或はガベロツチを狙ふて仇を報ひ、或は行人を掠やかして財貨を奪ふといふ人々のこと、——そうした人々を意外に移りかはる風物のなかにあり〳〵と見ることが能きるやうな氣がしたのであつた。——

種々の本に書いてあることであるが、このシチリアの島を成す土地の大部分は極めて少數の貴族か若くは富豪の手のなかにあるのであつて、然も此等の人々は大概その土地にはゐずして羅馬やナポリやフイレンツエの都にあつて安逸と享樂のなかに時を送つてゐることが常であるが爲めに、土地の管理一切はガベロツチと名付けられる者の手に委ねられるのであつて、一般の農民はこのガベロツチに依つて使傭されることになるのであるが、その大部分のガベロツチの目的としてゐる所は少しでも多くの利益を農民の勞働から搾取して自己の懷を肥さうといふ點にあるので、その爲めには極度の無慈悲をも敢てして憚からぬのは固よりのことであるといふ。從つて農民が此等のガベロツチに對する憎惡・怨恨

の情は深甚を極め、兎もすれば蹶起して慘虐なる報復を敢てしやうとする。故に、ガベロッチはこの報復に備へる爲めに絶えず己れの身に武裝を施こすは固より常に數多のこれも武裝せる警護の士を前後に控へて土地を巡視し、飽まで强壓をもてこれに臨むといふ。

世に聽えてゐるシチリアの山賊なるものは實に右の事情から生み出されたものであることは言ふを要しない。彼等は山地に於て黨を組み、或は村落を侵ひ或は旅人を掠かして慘虐を極める。殊にある人間を拉致し去つて、それを人質として巨額の金をその家族若くは友人の手より提供せしめるが如き方法を採ることは最も頻りであるといふ。

……馬にまたがりながら花の咲き亂れた五月の野をパレルモからジルジエンチへと向つた詩人ゲエテのうへを美しいことのやうに考へてゐた自分も、ふと思ひをこの山賊の上に走らせると、矢張りかうして汽車に揺られて旅してゐる身の上を悦こばずには居られなかつた。苦笑とも微笑ともつかない思ひを胸のなかに感じながら、自分は太陽の照りかゞやく野原と山丘との上を心細げに騎馬して行くゲエテの姿をば親しく眼で見る思ひさへしたのであつた。――

午後三時。とう〲ジルジエンチの停車場に着いた。自分たちを乘せた馬車は白い砂の道をひどい埃を上げて驅りはじめた。太陽は白つぽい厚味のある空のなかに燒き爛れてゐた。岩越しに海が見えた、――亞弗利加海(マーレ・アフリカーノ)が！ 何といふ蒼白さであつたらう。それはまるで澱んでゐる水のいろだつた。熱と光との爲めに焦げてゐるやうないろだつた。さうだ、空も海もそして道も皆白つぽい色と鈍い光とに充ちてゐる。皆が懶い夢想のなかにある。不思議な東方(オリアン)の午睡のなかにある。……

殿堂旅館(オテル・デ・タムプル)、――かう稱ばれる丘の上の建物のまへでわが馬車は駐つた。

ジルジエンチの黄昏

ギャルソンが持つて來て呉れた香の高いレモナードを口にしながら、部屋の窓の下からずつと擴がつてゐる美くしいパノラマを眺める。

蒼白い亞弗利加海がはろばろと遠くまで展がつてゐる。白い帆かげが眠たさうに彼方此方に見える。海が空に續くほとり眞珠のやうに鈍い爍きを漂はせてゐる翳は、亞弗利加はチュニジアの海岬ボンのほとりではないであらうか。そのほとりの空は朱い火のやうに燒けて見える。

陸地はその海濱から緩やかな傾斜を作つてこちらまで上つてくる。その傾斜には美くしく葡萄と橄欖とが生え茂つて、白つぽい土を飾つてゐる。そして所々に高く脹らむだ丘が走つてゐる。が、そのいくつかの丘のうへにきつかりと白く見えるのが即ち希臘の殿堂であつた！　圓柱だけが二三本ほど寂しげに立つてゐるのがある。無慘にもたゞ石だけが轉がつてゐるのがある。きちんとした形を失はずに美くしく聳えてゐるのはかのコンコルデイアの殿堂ではなからうか？　更にその左に當つて、更に大きな、然し稍倒れてゐるところのものはジュノー・リュチナの殿堂ではなからうか？　その數々の美くしい姿が、憾すところなく一望の間に收まるのであつた！

『さあ、行かう』

ゆつくり息をつく暇もなく、自分たちは椅子から立ち上つた。『希臘』が、そこで自分たちを手招きしてゐるのではないか！

花の香りが立ち罩めてゐる草叢のなかに細くついてゐる徑を降りつくすと、やがて廣い道へと出る。ポルト・エムペド

クレの濱へと走つてゐる道だ。その濱の方から遣つて來たと覺しい數人のシチリア土俗の青年の群と出逢つて、お互に『今日は（ボン・ジョールネ）』の挨拶を笑とともに交はし合つてから程もなくジョオヴの殿堂の趾といふのが右手に現はれた。

それは一個の巨大なる屍骸と言つた方が適はしい地べたの上に横臥してゐる巨人（アトランテス）の石像だ。聞けば曩昔地震によつてこの大殿堂は全部倒壞し今日に於てはこの巨像をのぞいては一切當時の建築材は消失してゐるといふ。然しながら僅かに殘存せるこの巨大なる石像から容易に想像できるやうに、當時此處に屹立してゐた建築物の偉大なる規模は言葉に盡し難いほどであつたに相違ない。かのパルテノンの三倍ほどの大きさがあつたと物の本に書いてあることも今はあり〱と理解できる。

ふと眼を轉じると、橄欖の樹の簇つた緩やかな傾斜の彼方小高い山陵の上を圍んだ一團の人家が密集してゐる。新らしいジルジエンチの町なのだ。沈默と荒涼とのなかにその町は山上に打ち捨てられた城趾のやうな佗びしさ、悲しさをもつて横はつてゐる。それは砂漠の岡の上に現はれた影のない蜃氣樓のやうに怪しく空しい美くしさをば眺める者の心の上に投げかける。そゞろに自分はエスパニアのトレドの町の奇異な姿を想ひ泛べずにはゐらなかつた。あの町に夕暮が促し寄せて來た折に、タホ河に架したサン・マルチンの橋の袂に立つて、つく〱と亞拉比亞の怪しい色と光がこのエスパニアの古い町のほとりに揺曳してゐるのを、溺れるやうな感動のなかに眺め入つたことがあつたが、いま自分はこの希臘の巨大な屍骸の傍に立ちながら、その時のやうにやはりこの怪しい亞拉比亞の色と光とがこの山上の町のほとりを揺曳してゐるのを、強い蠱惑なしに眺めずにはゐられなかつたのである。自分はいつ知らず、かうして身は希臘廢趾のなかに佇みながら、心は『東方（オリアン）』の方へと融けて行くのであつた……

カストーレ・エ・ポルーチエの殿堂の跡といふのは、このジョオヴの殿堂のすぐ西に當つてゐる。この殿堂もまたジョ

オヴの殿堂と等しく往時悉く倒壞したのであるが、サヴェリオ・カヴアラリといふ建築家がその倒壞したもののなから四本の圓柱となるものとその上層をなすものとを寄せ集めて今日我々が見るが如きものを建てたのであるといふ。自分はこの廢れた美くしいドリア式の圓柱の間からまた事新らしげに彼方新ジルジエンチの町を眺め遣つて、その不思議な東方的な景物の美を飽きることなく味つたのであつた。もう日は大分西に傾いて空のいろは白つぽい碧のなかに黄金と紫と紅の香煙を焚きはじめてゐた。その多彩な空のなかに山上の町のみは依然とし蜃氣樓のやうな怪しい聲のない姿をば横臥せにしてゐるのであつた。——

まへに來た廣い道に戻ると間もなくグレコ・ロマンの紀念建築物になつてゐるテロンの墓といふのが目につく。それを無花果樹の畑越しに見てから、自分たちはコンコルデイアの殿堂を指して、稍登りになる徑を辿りはじめた。

一歩一歩にその整つた美くしい殿堂は自分たちの身近くに迫つてくる。あたりの樹や草や花やから湧き出る馨はしい匂ひは暮近い空氣のなかに沁みこんで、自分たちの頰を眼を鼻を手をさては心のうへを優しげに撫でろ。地上を見ると、夕日の光が自分たちの陰影を長々とそこに描き出してゐる。あゝ、古代希臘人の陰影を描き出したらうその夕日と地上と！　自分はたゞ嘗て讀むだことのあるピンダロスの詩句を心のなかにくりかへすのみだつた。——『崇ぶべき人間の都市のうちその最も美くしきものを統べ給ふわが美はしき扮装(よそほひ)のアグリゲンツムの女神(ニムフ)よ、われら等しく爾の加護を庶幾(こひねが)はむ！』

コンコルデイアの殿堂は薔薇いろの夕日のなかに佇つた優婉なる姿を自分たちの眼前に聳え立たした。六本の美くしいドリア式圓柱を前面(ファサード)とした大伽藍が、光の洪水の如くに自分たちの眼を通して心の上に落下して來た。あゝ、自分たちの足はとう／＼その石階に觸れた。そしてその手はとう／＼その圓柱に觸れた。——

自分は建築家バジーレがこのコンコルデイアの美くしい建築を材料として世にも有名なる「希臘建築に於ける線(ライン)のカーヴに就きて」といふ研究を公にしたといふことを、今更に思ひ泛べぬわけには行かなかつた。この見事なる美の典型、この均整と諧和とに充ちた美の典型をまへにして、バジーレならずとも如何なる人か深く激しく心を煮かれないわけに行かう。まことにその線(ライン)のカーヴの靜かなる美くしさは、艶やかなる肉體の持つ柔らかき線か、それとも爽やかに紆(うね)り拡がる音樂の波か、——折からの色づく陽の匂ひのなかに煙るその線の美くしさこそは、まことわが「希臘」のしのびやかに歌ひ出すその唄のメロデイヤの美くしさではないのであらうか。……

圓柱に身を凭せかけながら遙か西をのぞむと、太陽は最早沈むに間もない。阿弗利加の沙士越しに沈み行く日のこととて、畫はしいまでに色濃い紅と紫の光があたりに揺れうごいてゐる。然しながら自分たちの立つてゐるほとりは優しい軟らかな色と光とに充ちてゐて、野も丘も建物もその甘美な雰圍氣のなかにすつかりと融けこんでゐる。花の匂ひ。山羊の群の鈴の音。遠い海の仄かな光。——それがみなこの暮れ方の柔かな色合のなかに交り合つてゐる。乾き切つて死んだやうな山上の新ジルジエンチの町の姿も、今は等しい暮れ方の仄かな薄紗につゝまれて、淸々(すがすが)しい生命(いのち)のなかにほのめいてゐるやうにも見える。——

コンコルデイアの殿堂を後ろに上り氣味になつてゐる徑をやゝ暫らく辿つて行くとジユノー・リユチナの殿堂へ出る。その靜かな小徑をば、煙る夕陽の光と五月の香はしい花の匂とを浴びながら、前方と後方とにそれぞれ希臘の美くしい古祠の聳え立つてゐるのを見渡しながら、一歩一歩と歩をすゝめて行く自分たちの心の感動を、何にたとへていいのであらう！ 自分たちは、疑ひもなくもう希臘人になつてゐた。希臘のなかを歩いてゐた。ニムフがパンの神が確かにそこに生きてゐた。一きは淡むだ薔薇いろを燻かしてゐるエムペドクレの海港のほとりに動いてゐる帆は、あゝ疑ひも

なく、遠く本土の雅典から美くしい香料と女人とを積んで來た船であつた。……

自分は最早雅典のアクロポリスに立つたルナンをば羨なかつた。『あゝ希臘の奇蹟、それは自分にとつてはたゞの一度しか現はれなかつたもの、今後再びは見る由もないものと言つてよいが、しかもその效果は自分の心に永遠に續くべきものであらう、あゝそれこそ永遠の美の典型、――』と叫んだあのルナンを、最早自分は羨まなかつた。今こそ、自分は全身をもつて希臘の奇蹟を體驗しつゝある。これ程の陶醉これ程の法悦これ程の感慨をばよしや雅典に渡る折を得た時でも到底自分は味ふことがないであらう。セジエスタの殿堂を見た日からこのアグリゲンツムの數々の諸殿堂を見てゐる今日の日までの自分の心を考へて見ると、實に自分の生涯の上にあつて最も烈しい感動に充ち滿ちた日の一つであることを思はずにはゐられなかつた。かうした日が續いて今後もあり得るとは容易に自分は信じない。妙じくも奇蹟といふ言葉を用ゐたルナン、自分もまたこの數日の心境を說くためにこの奇蹟といふ言葉以上に適はしいものがあらうとは思はない。自分の眼は涙に濡れさへもした。見よ、『完全』の美はしさ、――それがこの地上に嚴然としてあるのだ。それが奇蹟でなくて何であらう。しかもその美を更に煌かせ、その奇蹟を更に深くするがためにこの暮方の空氣の優しさと麗はしさとはその殿堂をつゝみ野と丘をかこみ杳かの海を煉かせさては自分の心をも愛撫してゐるのではなかつたか！

……ジユノー・リユチナの殿堂は、コンコルデアの殿堂のやうに完全な姿を保つてはゐない。然しながら殘存せる數多い巨大な美しい圓柱から容易に當時の壯麗な姿が想像能きる。ゲエテがこの廢祠に遣つて來て、その圓柱の溝のなかに自分の身體を入れて見てその左右の肩が漸くその溝の兩側の壁に觸れた。と言つてその大きさに打れたことも、さてはその一本の圓柱の周圍を人で圍むとすれば如何しても二十餘人の人數が必要であらう、と言はれて更にその驚ろきを深くしたことも、今更のごとくに肯づかれる。『單純なる偉大』――あゝそれこそ、恒に希臘のものであつた！

薄暮は優しく野を罩めた。そのなかをさやかに白い街道が一筋、野を越え丘を越えて何處の村へと走つてゐるのか、驢馬の哀音がその仄白い街道のほとりから聽えてくる。鈴の音涼しくひゞいてくるのは、この殿堂の聳え立つ岩山を攀ぢ登らうとしてゐる羊の群からであつた。その群から遙か離れた街道のほとりを物思はしげに頸を垂れながら歩いてゐるのは年老いた牧者の姿らしい。耳を澄すと微かに阿弗利加海の遠鳴りが聽えてくる。……

再びコンコルディアの殿堂のまへに佇んだ時には、日はすつかりと沈んでしまつた。白い星が一つ、新ジルジエンチの町の眞中に陰氣な形で聳えてゐる西班牙風の寺院の上にまたゝいてゐた。

――旅館に戻つて食事を濟してから、部屋に戻つて見ると、細い月が阿弗利加の彼方の空にかゝつてゐた。地上は暗かつた、たゞ海のあたりのみが仄かな明るみを煙らせてゐた。

あゝこの暗のなかに獨りあの殿堂が寂しくも淸らかに聳えてゐる！――かう思つて自分は何物をも見ることが能きぬ夜の暗のなかをしばしの間見つめてゐたのであつた。――

古都シラキユサ

……ジルジエンチを朝出る汽車がシラキユサの町に着くのは、夜にはいつてである。自分たちはその長い單調さに飽きさせられてしまつた。それに暑熱もかなりに高かつた。たくましい覇王樹の群や、黄や紅や白やの烈しい色を持つたいろいろの草花や、さては燦ゆい陽を浴びて野の上を悠やかに漫歩してゐる孔雀の姿やは、初めのうちこそ珍らしかつたが、幾度となく見て行くうちには眼を遮るのも煩いほどに感じられて來た。

かうした自分たちにとつて、思ひがけなく暮れ近い薔薇いろの陽の光をうけた美くしい雪山が車窓から間近くに聳え

てゐたのを眺めることが能きたときには、不覺『あ、エトナだ。何ていい山だらう！』と言ふ歡聲に似た言葉を聲高に洩さないわけには行かなかつた。噴煙が夢のやうに淡くかそけく雪に埋もる山嶺にまつはつて、やがて柔らかな蒼空へと融けこむでゐた。煌ゆい光と色とに充ち滿ちた南國の强い風物に疲れ切つた眼と心とは、噴煙の交はるこの涼しい雪山の姿を見て、何時知らず和み行くのだつた。自分の心は、今更に遠く離れた母國の富士山のことを想ひ、さては、エスバニアの旅で忘れ得ないあのシエラ・ネバタの眺めのことをも想つた。同時にまた、このエトナの山こそは、希臘神話によつて知らぬ人とてもないあのヴェヌスの神が居を定めてゐたところ、そしてまた巨人エンセラダスが監禁せられてゐたところでもあることをも想つた。また、マラルメの詩章とドビュッシイの音樂で自分にはわけて親しみの多い『牧羊神の午後』の作品が實にこのエトナの山に近い靜かなる沼地の上を舞臺にしたものであることをも想つた。……そうした數々の想ひのなかに、この秀でた山の姿を眺めゆくうちに、何時しか汽車はカタニアの町に着いた。

カタニアからの目指すシラキュサの町までの二時間に亘る汽車の旅は、今までの單調な荒野の旅とは違つて、六方は美くしい海づたへになつてゐることとて絶えず眼を車窓の外に放して飽くこともなかつた。その海、最早パレルモで見た海でもなくジルジエンチで見た海でもなかつた。希臘の本土へとつゞくイオニアの海の一部のマーレ・ジヨニオと呼ばれる海であつた。そして、車窓のなかに吹きはいつて自分たちの頬を撫でるこの風は、雅典の上を吹いて來た風であつた。…………

アウグスタの埠頭に孤立してゐる古城趾、メガラの古都の趾、マグニジの半島、パナジアの岬。――その最後の岬が眼界から消えるか消えぬかのうちに、汽車は靜かに停車場の構内にはいつた。

シラキユサ、――希臘の歷史を繙いたことのある者の忘れることの能きぬ大いなる名、そのシラキユサとある文字

如、忽ち自分たちの眼のまへに現はれたのである。

神話で名の高いアレトウサの泉がすぐ側にあるといふので、外人旅館（オテル・デ・ゼトランゼ）といふのに馬車を急がせる。場末らしく思はれる忙しい夕暮の道を暫らく行くと、やがて賑やかな、――然し如何にも田舎風な廣場（ピアッア）にかゝる。そこを出ると道は急に狹くなる。と思ふと、不意に海添ひのゆるやかな道に出て來た。目指す外人旅館（オテル・デ・ゼトランジエ）といふのはすぐそこにあつた。

……通された部屋の窓を開くと、――ほう！　窓の下から擴がりゆく海灣の眺め。細い月が仄かに海上を照してそこはかとなき黄昏の優しさが漂ふてゐた。彼方に離れて舫つてゐる數多い船のなかからひゞいてくるのはギーターの音に交はる水夫の唄聲である。更に眼を船の彼方に遣ると對岸になつてゐる岬は夢のなかの形のやうに薄墨いろに靠けて、たゞ燈火の寶石だけが彼方此方に艶めかしく點綴してゐた。アレトウサの泉は、と其方角を見遣つたけれどそこはこの建物の蔭になつてゐて見ることは能きなかつた。

汗や埃にまみれた顏や手やを洗ふのも忘れて自分はこの海灣の眺めのまへに長いこと立ち盡したのであつた……

床のなかにはいつてから、パレルモの町で求めたアガチと言ふシチリア人の手になつたシチリア遊記の英譯を取り出して、そのなかのシラキユサの一章を讀みはじめた。自分は今更にこの身が『古代』の心臟のなかに置かれてあることを感じないではゐられなかつた。讀みながらもその本を幾度か床の上に投げやりながら、何とはなしに深い溜息を洩しつゞけた……

このシラキユサの町が創設されたのは歴史家ツキヂデスの書に依れば、實に紀元前七百三十四年であると言ふ。それからジエロン、ヒエロオ、トラシブルス等の君主を經てデイオニサスの熾んなる治世にいたるまでのこの町の歴史はまこ

とに咲く花の匂ふが如く華やかで明るいものであつた。殊に、デオニサスの治世に起つたペレポンネソスの戰は、ツキチデスも言ふが如く『この戰こそは希臘の最盛期を劃するにいたつた最大の事件と言はる可きもの』であつて、シラキユサの名が當時の世界歷史の最高峯の上に燦として煌いてゐた時期であつたのだ。而して、そのペレポンネソスの戰こそは、實に、今自分が身を橫へてゐる部屋の間近くにあつてしのびやかに唄を歌つてゐる薄明の海灣の上に於て行はれたものではないか！

紀元前四百十五年、國威能く中外を壓してゐた雅典は、一擧このシラキユサを屠つてこの町の勢力の下にあるシチリア全島を己れの手に收め、更に進んで地中海の西部までも侵略しやうとの雄大なる野心の下に、陸よりはデモステネス、海よりはニシアス、ラマカス等の諸將に戰艦百卅四艘を率ゐしめて內外からシラキユサを攻擊せしめたのであつた。光榮あるシラキユサの都も、かうした海陸の勁敵を前にしては、最早降服の他はないやうに見えた。この折に、雅典に對しては永年の敵手となつてゐるスパルタの人ギリツプスが思ひもかけぬ少數の兵を率ゐて北方から援助にと遣つて來た。この爲めに最初の戰こそは雅典軍の勝利に歸したけれども、次の海戰にはシラキユサが勝を占めることを得た。これに加へて雅典軍には惡疫の流行を見るにいたつた。更にその上に諸將の間に作戰意見の相違といふ惡禍さへ醸さるるにいたつた。これを見たシラキユサ軍は勢猛に雅典軍を攻め立てて、遂にこれを港內に追込ましめ、灣口を固く閉鎖して再び活動するを得ざらしめたのであつた。かくして最後の烈しい戰鬪が來た。灣內に封鎖された雅典軍は二日間に亘つて遂にその封鎖を立ち截ることが能きなかつたので、三日目には背後の陸を經て遁走することを圖つたのであつた。然しながらフローリデイアに近いその通路は既にシラキユサ軍によつて固められてゐた。止むなく彼等は引返して海岸傳へに遁走しやうと圖つたけれども、此方面にもシラキユサ軍は待ち構へてゐた。

遂にデモンステネスは六千の部下とともに捕へられてしまつた。ニシアスもまた同じ運命に陥つてしまつた。

斯くして榮譽に充ちてゐた雅典の軍隊は悉く囚人としてラトミアの岩窟のなかに繋がるるにいたつた。八箇月ののち彼等は奴隷として賣られた。――たゞ僅かの者がユーリピデスの詩を口誦さむことを知つてゐたといふことの爲めに自由の身となることが能きたと言はれてゐる……

……自分は床にはいつた身を再び起して夜着(ピジヤマ)のまゝに窓のそばに立つて、窓掛をはらつた。

もう月は沈んでしまつたが、星の仄かな光の下に海の面は薄くけむつて見える。青い燈臺の灯が彼方遙かに明滅してゐるばかりで、最早對岸の寶石のやうな燈影も消えてしまつた。何といふ靜寂、何といふ沈默。何處に雅典人が、シラキユサ人が、スパルタ人があつたのか。何處に百卅艘の戰艦が、デモステネスが、ニシアスがあつたのか。あゝ、何處に二千數百年の歷史があつたのか。――

自分はまたしても思はず深い溜息を洩らさないわけには行かなかつた。

眼が覺めるともう暑かつた。窓を開けると空は燒けたやうに白つぽい色をしてゐた。たゞ海だけは眼に痛いほどに濃い碧色を燦かしてゐるのだつた。

かうした古い廢趾の都を馬車に乘つて見て歩くのは面白くないとは思つたものの、この空を見ると到底徒歩する氣にはなれなかつた。自分たちは、「馬車の用意ができました」と言つて來た旅館のギャルソンの言葉を聽いてから、玄關へと出て行つた……

先づ希臘劇場(テアトロングレコ)の趾といふのに行つて見た。萬餘の觀客を容れ得るといふだけあつて流石に大きな規模のものであつ

た。全部岩から成つてゐる山をば彫り刻んでこの劇場ができてゐるために、觀客席を形作つてゐる段階なぞはそのまゝ壞れることもなく殘つてゐた。恰度四月末日までこゝで希臘古典劇を演出してゐたとかで、人足たちがしきりと其邊を取片つけてゐた。しばらく見てゐるうちに、强く烈しい太陽の光がこの白い廢趾の上をきら／＼と照しつけてゐるので、眼を開けてはゐられぬほどの煌ゆさを感じさせられる。

この劇場に隣つて『デオニサスの耳(オレキオ・デ・ディオニジオ)』といふS形に岩のなかを堀り穿つた洞穴がある。デオニサスが囚人を監禁して置いた所で、その大いなる反響の爲めに囚人たちの密語を洩なれく聽くことが能きたと言はれてゐる。番人がそのなかに立つて紙を裂いて見せるとその響きがこの洞穴一杯にひゞき渡るのであつた。

この洞穴に續くラトミア・デル・パラヂソの凹凸の激しい岩の外廓について暫らく行くと羅馬時代の大圓劇場(アムフイテアトロ)に出る。案內人の來るのを待つてゐると、之もまた自分たちと同じやうにシラキユサの古趾を訪ねに來たと見える僧侶が三人ほど近くへ遣つて來た。其なかの一番年長と見える四十歲は越したかと思はれる僧が、ゆくりなくも自分に話をしかけた。『伊太利語は話せないから』と斷はると、その僧は癖はあるもののかなりに巧みな佛蘭西語をば口にするのだつた。

この羅馬劇場(テアトロ・ロマノ)は、羅馬のコロッセオを見てゐる眼には別に珍らしいと思ふ所もなかつた。何時しか自分は案內人の言葉から注意を放してしまつて、この僧と何かと話を交はしながら草の匂ひのはげしい廢趾のうへを歩いて行つた。

自分たちが巴里から來たことを知つてこの僧は、『巴里は自分も知つてゐる、あそこは大變雜鬧(ブリユイアント)する……』などとも言つた。『いや、巴里は落付いていい所ですよ』――と言はうとして慌てて自分は口をつぐむだ。僧の言つた意味はもつと深いところにあつたのかも知れないから、と思つて――。その代りに、自分は尋ねた。

『貴僧(あなた)たちは何處から來られたのです。羅馬からですか？』

『左様です』といふ言葉を疑ひもなく豫期してゐた自分の耳に、思ひがけない返事が來た。

『いゝえ。阿弗利加から來ました。羅馬へはこれから行く所です』

『阿弗利加？　何しに行かれたのですか』

『傳道のためです。あちらに五年ほど居りました。樹もなければ草もない花もない全くの荒野でした！』

……案内人が傍に進つて來て、これで説明は濟んだからと言つて、自分たちを出口の方へと導き出した。

僧侶たちに別れて、聖マルチノの古寺にと足を向けながら、自分の心は今しがた僧の言つた『あちらに五年ほど居りました。樹もなければ草もない花もない全くの荒野でした』といふ言葉から離れなかつた。

何といふ強い生活、何といふ烈しいパッション、――自分はこの伊太利の旅で何十となく詣つた寺院を映畫の如くに想ひ泛べた。そこの何處でも得ることが能きなかつた生命といふものに、今思ひもかけずにはたと突き當つた氣がした。空が明るくなつた氣がした。――

聖マルチノの寺院は聖ジョヴンニの洞墓穴と並んでゐる。寺院はその壊れた冷たい氣配と古く美くしいフレスコの砕片とによつて多感な旅人の心を捉へずには置かぬ所だつた。洞墓穴は割に光もはいりゆる／＼ともしてゐてあの羅馬の郊外の夫れ（『タウオ・ヴデス』に出てくる）の如く陰慘極まる感じを與へないのは、却つて滿々とした氣を起させて嬉しかつた。

冷々したその古跡を出ると、また自分たちの身體は強い外光のなかに曝されなければならなかつた。その外光のなかに眼を細めた自分たちの前には、見上げなければならぬやうな巨大な岩石、その邊を取巻く色の濃い緑の樹や草、火の燃えてゐるやうな眞紅な花が、一面に咲きさつて展開してゐた。これこそはペレポンネソスの戰に於て補虜となつた數

千の雅典人が八個月の長い間獸のやうに監禁せられてゐたラトミア・デ・カプチニではないか！　岩が、樹が、血のやうな花が、不思議な幻想の姿をもつて自分の光に醉つた眼許まで侵し寄せて來るのだつた……

馬車は逆に戻つて埃の多い街道を西へ西へと進むと間もなく、希臘時代に建てられたといふ浴場のギンナジオ・アンチコに出る。ポンペーの廢趾のなかで見た浴場のことなぞを想ひ泛べながら、當時の悅樂に充ちた艶やかな空氣を、わけて物語や詩の上で幾度となく讀むだかのシラキュサの美しい白拍子の情事をさへ其處にまざ／＼と描き出すことを自分は禁めることが能きなかつた。明るい外光のなかの爽やかな涼しい浴泉、そこに匂やかな花の點綴するやうに動いてゐる希臘の女の裸身、――自分の眼には何時かジャン・オーギュスト・アングルの鮮やかな繪畫さへ泛び出すのであつた。……

日の暑さはとう／＼自分たちをエウリエロスの城塞へもまたジュピターの殿堂といふのへも行く考を鈍らせてしまつた。躊躇ののちに自分は御者に言つた。

『旅館に向けて遣つて呉れ』

馬車は再びオルチギアの島の上に建てられたシラキュサの町のなかへと戻つて來た。例の廣場を横ぎると、狹い紆つた路次が、――中世風な路次が馬車の行く先から先へと現れては消えて行つた。

そうした道が稍展がつた所に眼につく二つの大きな建物が對立してゐる。古い方は本寺だ、希臘時代のミネルヴの殿堂の趾に立てられた寺だ、――希臘の神とヘブライの神との結び合つてゐる寺だ。新らしい方は考古學者として有名なパオロ・オルシ教授が館長をしてゐるといふ考古博物館だ、シラキュサを中心としたシチリアの古代文明を知る上には申分がないと言つてもいいほどによく蒐集され整理されてゐる博物館だ、美しい水浴のヴェヌスの古代彫刻がある博

物館だ（殊にその背の肉付の美くしさは！）。

アルテミスの殿堂と並んで、このシラキユサの町のなかに殘つてゐる最も重要な希臘時代のモニユマンとされてゐるアポロンの殿堂（若くはディアナの殿堂とも言はれてゐる）といふのがこゝから間近くにある。——が、そこにはたゞ黒い岩の屍骸が燒け殘されたもののやうに散在してゐるに過ぎなかつた。希臘の夢の碎片にしては、慘しくも淺ましい姿のものであつた。

……旅館にやつと戻つて來た。白い埃を肩から、拂ひながら自分は不覺獨語した。

『シラキユサ！あゝ何といふ古い墓場だ！』

そして今更のやうにかのピンダロス——彼こそこのシラキユサに生を享けた詩人なのだ——の花やかな詩句が恰かも挽歌のごとく悲しげに頭に泛んだのであつた。——

『いさ、わが合唱隊よ、
この榮あるシラキユサを祝はむがため
今こそ高く朗らかに歌聲を張りあげよ！』

タオルミナの僧院

ジヤルヂノ・タオルミナ、——海岸に近いその停車場に降り立つた自分たちを逸早く見付けて宿を勸めに來た男の帽子には聖ドミニコといふ僧院の名が書いてあつた。自分たちはそれが古い僧院の趾を旅館に直したのであることが判つた。自分たち二人と、もひとり肥り氣味た眼のぱつちりした美くしい伊太利の婦人とを乘せてから自動車は停車場を離れ

た。道はただちに坂となつた。見る見るうちに海は下になつた。もう暮れ方の七時頃のこととて海の上は仄かな薔薇いろの煙が海青色を柔らかに霑かしてゐた。その海の彼方におぼつかない菫色の雲脚を見せてゐるのは、もう伊太利の本土のカラブリア半島の一部であつた。すぐ眼の下になつた海岸の白い沙は、緩やかな紆りを作つて遙かカタニアの方へと延びてゐるのが美くしく眼にはいる。そして、その海岸の裾から段々と眼を陸地の方へと登せてくると、そこには屹然と天際に聳え立つてゐる雪を頂いたエトナの秀麗な姿があつた！

際限もなく自分たちを乘せた車は上へ上へと上つて行く、――が漸くのことで人家の密集した山上の町のなかへとはいつて來た。これがタオルミナの町であつた。紀元前三百五十數年の昔希臘のアンドロマツクによつて創られたと言はれる町、羅馬人によつてサラセン人によつてさてはノルマン人によつて次々と壞されまた造り直された町、そして今は五千にも足りない人口でひたすらに富裕な外人の保養の爲めに存してゐるやうな町、――そこに自分たちは着いたのであつた。

目指す宿の聖ドミニコはこの町を出端れたほとりにあつた。停車場で豫想したやうにそれは全く古い僧院のまゝであつた。自分たちの到着したことを庭の隅に吊した小鐘を鳴して奥に告げることも、さては、奥の建物の何れかから明かに聖女マリアの鐘の音がひゞいてきたことも、疑ふべくもない僧院そのまゝの風情であつた。覺えず自分たちは顏を見合せた。

――がやがてギヤルソンに導かれて廣々した冷たい石の廊を通つて自分たちにと極められた部屋にはいつた時には、豫期せずして斯うして變つた旅館に來ることが能きたのを悦ばずにはゐられなかつた。部屋はその形こそ僧房そのまゝではあつたが調度はいづれも快い近代風の旅館のなかに見ることが能きるもののみであつた。冷々する豐かな黒皮の椅

界のなかに身を落して、自分はあの墺太利の作家の書いた『僧房の夢』と題されたる戯曲のなかに出る騎士にこの身を思ひ較べやうとする氣紛れにさへ驅られるのであつた。否それよりも、現實にこの石の冷々した部屋にあつて祈禱と禁欲の生活を送つてゐた中世のドミニカン派の僧侶の聲を眼付を夢をまざ〳〵と其處の壁此處の窓の上に感じることが能きるのであつた。そして、かうした淸く寂しく閉されてゐた人の生活をそれとなくはるばると東方から遣つて來た異教徒である己れの身のうへに想ひ泛べて、今更らしく物珍らしげにあたりを見廻さないわけには行かなかつた。……

外に向いた窓は直ぐ海へと續く崖にでも凭つてゐることと思はれたが、傍に近寄つて見るとそこには廣々とした庭園が薄暮のなかに展がつてゐるのであつた。僧院の庭、――寂寥と沈默とに埋められ生活のうへの唯一の慰めとなつてゐたと云つていゝ庭がそこに展がつてゐた。自分は晩餐を知らせる鐘の音を遠くに聽きながらその庭へと降り立つて見る爲めに廊に出た。――

庭への降口に立つと、そこから薔薇の咲き亂れた通路がずつと走つてゐた。紅や白やの花顆がよく繁つた綠葉の間を一面に飾つてゐた。その薄昏い通路の果を透かすやうにして眺めると、そこには、何とも言へぬ柔らかさに融けてゐる靑紫の色と光とが明るむでゐるのを見ることが能きた。それは、――暮れのころ海の面であつた。その匂やかな美はしい色と光とは！　覺えず惹き寄せられるやうにして自分はその薔薇の通路を通り拔けてこの庭園の端に走り寄つたのであつた。

一眺極みのない海が展けた。日は沈みはてたことゝて東の方が仄かに華やかな黃金と薔薇いろとを殘してゐるばかりで、海の面一帶には薄霧を見るやうな靑味がかつた紫煙が漂ふともなく漂てゐた。漁夫の舟の帆らしいものがこの煙のなかを薄く煌いてゐた。空を仰ぐと月が細く泛むでゐる。黄昏の光の消え切らない空の煌きのなかにあつて、此細い月の光は

兎もすれば消されるやうに果敢なかつた。其月よりも更に仄かに淡い色合で、雪のエトナが細々と煙を噴いてゐた。……

氣がつくと、自分を取りまいてゐる庭の樹や草やから烈しい花の匂ひが咽ばせるやうに匂ふて來た。その烈しい高い花の匂ひは、まがひもなく自分たちが南歐の五月の香はしい野のなかにあることを感じさせるものであつた。それにしてもこれほどに蠱惑に充ち感覺に媚びる花の匂ひは、自分は曾て知らなかつたと言つてよかつた。それは、恰かも女性の私室を罩めてゐる香料と肉體との匂ひにたとへることが能きるほどに蠱はしさと艷めかしさとに充ちてゐた。自分はこの匂ひのなかに不思議な媚笑と誘惑の聲が騷いでゐることを感じた。——

僧院とこの樂欲的(ヴオリユプチユウ)な庭園と！　自分の考は思はずそこに行つた。色のない枯淡な寂寞なこのドミニカン派の僧侶の生活が、この庭園の花の匂ひから、急に色と光と匂ひとを浴びた生活となつて自分の心へと映つて來た。石の冷々した僧房にあつてひたすらに祈禱の生活を續けてゐた姿をば想ひ遣つてゐた自分は、今や、この媚笑と誘惑に溢れた花園のなかにあつて、觸れ醉ひ喘いでゐる僧侶の姿とその心と嘆息とを想ひ遣るやうになつて來た。

あゝ偶然こゝにも希臘の神とヘブライの神との結合がある！——そうした考をも念頭に泛べながら、自分は遠い食堂の方へと石の廊をば歩いて行つた……

タオルミナからメッシナ海峽へ

……希臘劇場(テアトロ・グレコ)の趾を見た、あのゲエテが『澄渡つた蒼穹の下で、この小さな棧敷から、美くしい海岸を見下し、薔薇の花の咲いたのを眺め、鶯の啼くのを聽いたことは忘れることの能きぬ紀念であつた』と言つてゐるその劇場の廢趾も見ることが能きた。傍らにある小さな軍用無線局の庭に立つてカラブリアからシラキユサかけて、さてはエトナの山か

らモンテ・ヴェネレの山かけての世にも美くしい海と山との展望に醉ふことも能きた。シユネーガンスが『こゝで、人は希臘時代の、中世記の、古典的と羅曼的との、さては、歐羅巴と阿弗利加との氣息を一時に感じることが能きる！』とまで言つてゐるパラッツオ・コルヴジアの奇異な四角の建物も見ることが能きた。さては、聖ドミニコの旅館の庭の馨はしい五月の花の匂ひにも、晝餐の折に口にしたモンテ・ヴェネレの赤葡萄酒にもまたマカロニの味にも最早心殘りはなかつた。

『羅馬行』の汽車が出るといふ午後も暮れ方近くになつてから、自分たちは昨日乘つて來た自動車のなかに身を入れて、聖ドミニコの古風な建物を離れた。車窓に映つては消える海、岬、山、樹、家、——その移り變る姿を樂しげに眺めながら、『あゝ、明日はいよ〳〵羅馬だ！』と二人は口に出すともなく口にした。

タオルミナを出た汽車は、遙かカラブリアの半島を雲煙の間に見つゝ海岸に添ふて走る。もう日は暮れかけてゐた海は、藍色と靑色と菫色とが縺れ合ひ溶け合つて、手で撫て見たいほどの柔らかさで脹らんでゐる。彼方水平線のほとりは夕日を受けて一際濃い菫色のなかにけぶつてゐる。あゝ、イオニアの海の黄昏の優しさも、今別れては何日の日に再びそれを見ることが能きやう。自分は車窓に凭りかゝつて聲もなくこの暮れ行く海を、——雅典へとつゞくその海を見詰めたのであつた。……

澄んだ月光が海波の上に揺れはじめた。カラブリアの半島は刻一刻と鮮かに車窓に映つて來る。やがてその墨いろをした山影の麓をなすほとりに、一抹の金泥にもまがふ燈火の群が細かに顫へてゐるのが見られた。メッシナの町と海峽をへだてて對してゐるレジオの町の燈影である。何といふその纎細で華麗な燈影！　まことに海から陸上の燈影を眺める位美くしいものはないと言はれてゐるけれども、海をへだてて見るこのレジオの町の燈影の美くしさはまた特別と言

つてよかつた。それこそはシチリアから離れ難い心を抱いてゐる自分たちを伊太利の本土が呼び寄せやうとする美くしい光の唄ではなかつたか？——

あゝレジオ、それからメッシナ。自分は十月まへの情景を今ありありと思ひ出す。十月まへに、自分の乘つてゐた汽船は白晝この町を兩側に見ながらこの海を通り過ぎたのだ。その甲板に立つて、『あゝ、はじめて歐羅巴の一角を今見たのだ！』と、眼も放たずに白晝の煌ゆい光に燃えたこの町を眺めつくした自分の姿がありありと泛んで來る。その眼に映つた山が、道が、橋が、建物が、汽車が、今も見るやうに泛んで來る。それが今はかうして白い月光のなかに燦ゆい燈影となつて現はれてゐるのだ！ それ計りではない、更に數個月ののちには、日本へ指してこゝを走り行く船の上にこの身をば置くはづの自分なのだ。三度ほど同じ風物を、異れる心持のなかに見やうとしてゐる自分なのだ。微かな溜息がそうした自分の口から洩れて出た。

……汽車はメッシナの停車場に停つた。矢張り紀元前七百有餘年の古い時代に建てれたといふメッシナの町、シラキュサの町やカタニアの町と等しく希臘とサラセンと羅馬とノルマンとの氣息の交り合つてゐるその町、絶えず烈しい地震が侵ふて來るにも拘はらず、町の地置が海峽の要樞に當つてゐるが爲めに壞された上を後から後からと新らしく建て直されて行くその町、——否そうしたことよりも、誰も知るかのゲエテがミニオンの、

『君知るや、チトローネの花咲く國を、……』

の短曲(バラツド)をば創つた所と言はれてゐる聖(サン)グレゴリオの寺院の聳えてゐるそのメッシナの町は、今し燈影まばらに月のなかを稍蒼褪めて横はつてゐるのであつた。

汽車はこのまゝに汽船の上に乘せられて海峽を渡るといふ。メッシナの町もたゞ車窓から眺め遣るに過ぎない自分

は、折柄賣りに來た辨當屋を呼び止めて、その手から香橙(アランシイ)を肉を麵麭を水を買ひ求めて、せめてこれをこの町の果敢ない紀念(スーヴニール)のしるしにしやうとさへ思つたのであつた。

汽車は動き出した。何時しか身は汽船の上に、月光の燦きかへすメッシナ海峽の波の上にあつた。今去つたメッシナの町の燈影と、これから着かうとするレッジオの町の燈影とが前と後に燦き渡つてゐた。空には明るい月とさはやかな微風とが充ちみちてゐた。海波は靜かだつたが、月の光は饗宴のやうに賑やかに騷いでゐた。

ピンダロスの詩句がふと泛んで來た。――

『靜かなる波間にありて、
笛(フリュート)の柔らかき音(ね)をば悅しむ
海上の海豚(いるか)のごとく、
わが心切に動けり……』

あゝ、そのピンダロスにも、メッシナの町にも、否シチリアのあらゆるものにも今は別れを告げなければならない時だ。自分の身は刻々とその島から遠ざかりつゝある。メッシナの町の燈影は段々に細かくなりつゝある。

『シチリアよ、幸(さき)くあれ！』

自分は舳の欄干まで驅け寄つて、冠つてゐた帽子をはげしく打ち振つた……

海

波の囁き

波の氣焔

水野廣德

久し振り靑列車に乘つて見た。乘心地は流石に惡るくはない。車内は今日は殊に廣々として、美しき軟きソツファアーの上に寢るなり轉ぶなり意の儘である。切符改めの車掌の態度迄が紳士的じや。金持が階級制度に執着するのも、彼等の既得權利の正當擁護かも知れぬ。我利的な今の人間には理屈ばかりで到底解決の出來る問題ではない。逗子の停車場に降りた。停車場の外には「乘合」の札を掛けた一臺の自働車と二臺の馬車が居る。自働車の運轉手に「三崎迄行くか」と聞くと、「三崎へは行かない、葉山御用邸前で乘換へることになつて居る」と云ふ。更に馬車の御者に聞くと同じ樣な返事をする。此の自働車も馬車も葉山行きであつた。逗子から三崎までは直行の自働車が通へることは慥かに聞ゐて來たのだから、そんな筈はないがと今度は停車場警戒の巡査に尋ねて居る中、赤筋の旗を立てた一臺の他の自働車が少し離れた處から、ブー〳〵と砂埃を立てゝ出てゝ行つた。巡査は其の自働車を指しながら「今出た自働車が三崎へ行くのですが殘念でしたな、一時間もすれば次の車が出る筈です、あそこで聞ゐて見なさい」と。老年の巡査は頗る親切に教へて吳れた。先の自働車の運轉手と云ひ、馬車の御者と云ひ、如何に商賣仇とは云へ、勝手知らぬ旅行者に對する餘りの不親切に驚いた。地方の人間も追ひ〳〵悪擦れがして油斷が出來なくなつた。社會協同生活に自覺なき人間が生活の競爭に襲はるれば常に陷ゐる邪道じや。自分は之が爲め空しく一時間を逗子で過ごさゞるを得なくなつた。

三月の東の海を見た自分は六月の南の海を見んが爲め今三浦三崎に向ひつゝあるのである。自働車を待つ間に餘り珍らしくもない逗子の海を見に行つた。嚴めしき別莊や、瀟洒たる住宅の建ち連なる靜閑な町を過ぎて海岸に出ると、一面の砂濱が雨の少なき空梅雨の晝過ぎの日に燒かれて白く輝いて居る。風なき海は疊の如く平かに、藍の如く青く、小さな波がチョロ〳〵と岸を洗つて輕き音を立てゝ居る。陸にも海にも海水浴客の姿はまだ見へない。逗子の濱邊は尙ほ神聖が保たれて居る。左手の海岸に簇かる黑い岩の上に腰を下して景色を眺めた。前には白帆群れ浮ぶ相模灣の水を距てゝ、霞にかすむ伊豆の連山が凸凹逶迤として遙かに淡翠を空に畫いて居る。山の左は藐として霞に消へ、右は國府津、大磯、茅ケ崎の濱に連つて、江ノ島の綠が近く七里が濱の白砂に續いて居る。水分多き梅雨の濛氣に包まれて富士の見へぬが遺憾である。女性的とは云へ、閑雅優美の風景は棄て難きものがある

涼しい風が海の面に小波の紋を畫いて、汗ばんだ懷を快よく拂ふて行く。客馬車が蹄聲と喇叭と轢音とを騷々しく一時に立てゝ行き過ぎた後は、天地閑寂として聞ゆるものは唯波の音ばかりである。紅塵萬丈の都に齷齪として食ふや食はずに一生を過ごすも人生、山水明美の此の濱に悠々寛々波を友として一生を送くるも亦人生である、などゝ覺り切らぬ愚凡なる人生觀に思ひ耽りつゝ、ベチャ〳〵と岩間に聞ゆる波の囁に耳を澄ますうち、何時の間にか恍惚として波の世界に引き入れられた。AとBとの波が何かヒソ〳〵と話して居る。

A「ヤア之は珍らしい。隨分久し振りだね。相變はらず要領を得て居るな。」

B「誰かと思つたらA君じやないか、コリヤ珍客じや、マア掛け給へ。併し要領を得ることは御互樣じやよ。御同前、地球の滅亡する迄は今後何億年と云ふ永い間、一文の報酬なしにノベツに岩に碎かれたり、砂を嚙まされる位なら未だしも、時には火責め氷責めの責苦に逢ふ體じやないか、不平の多い人間なら疾つくの昔にストライキとかをやつて居るんだが、地球平等の大理想を有する我々はそんな無責任な事はやらぬ代り、時偶には斯う云ふ岩陰で靜養するのも必要だよ。」

A「時偶の休養なら結構じやが、時偶に働く方だらう。君に逢ふのは何時だつて、斯んな岩陰か洞穴の中じやないか。

一體君は何時から此處でサボ否や休養して居るんだい。」

B「僕だつて君に逢ふのは何時も斯んな樣な處だよ。君が稼いで居る姿は未だ曾て拜見の光榮に浴したことがないがね。人間の道樂者が待合あたりで能く君の言ふ樣なことを云つてるよ、目糞が鼻糞を笑ふと云ふのは此の事だぜ。僕なんかは休む時には休むが、其の代り地球上に起つた重大なる出來事は、ノアの洪水の時アララット山の猛襲から近くは歐洲大戰に至る迄悉く參加して居るんだからね。ところで此の前君に逢つたのは何時だつたらう。」

A「そうね。蘇士運河の開通した時じやなかつたかね、ソラ僕は地中海の方から尖頭第一に進んで行くと、君が紅海の方から熱病か何かにやられて、ヘト／＼になつてやつて來たじやないか。ビッター湖の眞ん中で出會つた時にや、流石衰へて波の色はして居なかつたぜ。」

B「そうだ／＼、あの時の事を思ふと今でもゾッとするね。運河開通の報を聞いてマガリエン海峽から蘇士迄八千海里の道を晝夜兼行大急ぎで驅け付けたのだが、バベル・マン・デブの海峽を越へると早速熱病にやられたね。何しろ世界一の熱い紅海へ世界一の冷たい海から來たのだからね。あれ以來僕は紅海とは絶交さ。運河の開通が一八六九年だつたから、あれから早や五十三年になるね。運河を開ひたレセツプと云ふ男も、あの仕事じや隨分苦勞した樣だつたが、巴奈馬運河の疑獄事件で可哀さうに監獄に打ち込まれたと云ふじやないか。あの時代の人間はまだ正直で社會も中々堅實だつたが、此の節の人間は智惠はだん／＼進むに反して根性はおひ／＼惡るくなる樣だね。殊に日本と來ちや「免れて恥なし」と云ふ流行語さへあるんだから、迂つかりすると生き目玉を引き拔かれるぜ。して君は何時日本へ來たんだい。」

A「やつと昨日來たばかりさ。僕は今歐羅巴本部に居るんだがね、近年日米問題が大分喧ましいので、東洋視察の爲め昨年來專ら南洋から支那方面を視察して居たんだ。僕は元來東洋方面の海理に暗いもんだから菲律賓沖をブラ／＼して居るうち、何時の間にか黒潮に捲き込まれてね。何だか急に暖かくなつたがと氣の付いた時は既に後の祭りさ。いくら逃げ出そうと藻掻いても何しろ一晝夜に八十海里から流れるので、どうしても出ることが出來ない。四五日も東へ／＼と流されてるうち南洋歸りの日本船に取り付いて、やつと此處まで來た譯さ。僕が日本へ來たのは丁度四十年振りだが

此の前來た時は日清戰爭前で日本は支那にギユー〳〵意地目られて居たものだがね。其が今じや米國を相手に戰爭するなんて意氣込だから、日本も中々進歩したものだね。君は昔から日本に餘程緣が深い樣だが。」

B「そう、僕は最近三百年ばかりは大部分を東洋殊に日本の海で暮らして居るのだが、日清戰爭頃に比べると日本も餘程開けたものさ。併し西洋に比べると種々の點に於てまだ〳〵野蠻だね。第一政治だつて憲法は有るには有るが殆んど行はれて居ないよ。言論の自由も集會の自由も無いんだからね。內閣などは國民や議會とは全然沒交涉で、日本特有の元老とか云ふ老人達が茶を吸りながら勝手に造るんだと云ふがね。今の內閣は一月ばかり前に出來たのだが、英國あたりでは百年も昔に流行つたやり方じや。內閣も內閣じやが、日本の議會と云ふ奴が是が又素敵滅法面白いもので、先づ世界に類が少ないだらうよ。日本人は日本の議會を動物園と云つてるがね、日本じや議會は傍聽するものにあらずして見物すべきものなりと定義が定つて居るんだ。此の議會にして此の內閣あり、割鍋にドヂ蓋だね、良い工合に出來てるよ。君も折角來たものじや、是非一度は見物して行き給へ。何よりの土產話じや。

それから日本のモ一つの名物は東京の道路だね。之が又一寸外の國では見られないよ、何しろ狹い泥固めの道へイキナリ自動車を持ち込んだのだから溜まらないさ。雨でも降らうものならオテクリ黨は泥飛沫の洗禮じや。日本人は自ら君子國とか武士道とか云つて獨り偉がつて居るが、其の實、社會道德や公衆道德など云ふ觀念を皆目有せざる極端な自我主義者だよ。殊に所謂上流社會に於て烈しい樣だね。だから僕は社會主義的思想は日本人には最も入り易いだらうと觀察して居るんじや。要するに日本の文明は今日まだ西洋の模倣時代に過ぎないよ。元來基礎文明の無い處へ持つて來て、イキナリ西洋文明を持ち込んだのだから危ぶないものさ。丁度木造の日本家屋の上へ石造の西洋家屋を建て增した樣なもので、矛盾と不調和と危險とは到底免れないね。道德思想だつて東洋式の忠孝と西洋式のデモクラシイとは餘程妥協が六かしそうだよ。まあ今の日本としては、大に教育を盛にして國民の自覺を促がし西洋式に進むか、或は一切の教育を中止して人民を無知にし封建時代に返へるかどちらかを擇ばなけりや思想的動搖は靜まらないと思ふね。

A「でも、日本は戰爭などは中々うまくやる樣じやないか。」

B「ウン、戰爭だけは相當にやるよ、日本で西洋と肩を並べ得るものは恐らく軍事方面ばかりだらうね。尤も日本が是までに軍事に注ぎ込んだ金は、他の文化事業に使つた金に數倍して居るんだから進歩するのも當然ではあるが、兎に角日本人は戰爭だけには一種の天才を有して居るよ。併し夫も此節の樣に兵器が進歩して、飛行機じや、潜水艦じや、タンクじや、毒瓦斯じやと云ふものが戰場で幅を利かす樣になると、元來科學的知能の乏しき日本人の天才も大分御光が薄くなつた樣だがね。何しろ日本人と云ふ人間は命を難有がらん人間だから物騷だよ。學校の教育が既に潔よく死ぬることの尊ぶべきことのみを奬勵して、潔よく生きることの更に尊ぶべきことをチツとも教へないのだから無理も無いがね。其の證據にはパツと開ひてパツと散る櫻の花を以て人生の理想として居るのを見ても判るさ。心中や身投げが日本の特產物たる觀があるのも全く此の爲めだと思はれるね。

僕は日本人の心中に對しては多大の感興を有するもので、從來僕が特に日本在勤を志願したのも實は此の心中研究の爲めさ。波音高き岩頭に若い男女が戀の不如意を歎じて永久の愛に生きんが爲め相擁して海に投ぜんとする刹那の光景や、月影淡き海濱に若い女が失戀の悲愁より免れんと欲して、死のか死ぬまいかと思に惱める風情などは、日本の海岸ならでは滅多に見られないよ。我々波の目より見ると、心中にも色々種類があつてね、合意心中から無理心中、詐僞心中、變心心中、失敗心中などがあるさ、合意心中や無理心中は說明しなくつても判かるだらう、詐僞心中と云ふのは女が孕むか何かして男の方で飽が來た場合に、心中する眞似して相手を一人衝き落す奴で極めてタチの惡るい奴じや。變心心中と云ふのは「きつと離れない樣にね」などと云つて固く手を組んで愈飛び込む間際に、多くは男の方で氣後れして逃げ出すので頗る意氣地の無い奴さ。新聞に出る娘の身投には此の詐僞心中や變心心中の片割がカナリ多いんだよ。失敗心中と云ふのは「未來は夫婦」と抱き合つて飛び込んだものゝ、海が淺かつたりして死に切れず、「海の水は案外辛いのね、もう死ぬは止そや」なんかと相談纏つてノソ〳〵這ひ上がる奴さ。之は最も海の神聖を冒瀆する奴で、彼奴等に限つて間もなく飽き別れをするのが多い樣じや。之が心中の中最も滑稽で而かも最も研究の價値あるものじやね。」

A「相變はらず舌は能く廻はるね、僕惟ふに君の心中研究の目的は、陸上の表情や光景よりも寧ろ水へ入つた後にある

んだないかい……。そこで君は今度は何時頃日本に來たんかい、に

B「僕はね歐洲戰爭が片付くと直ぐ日本へ來たのじや。獨逸の分捕驅逐艦に便乘してね。歐洲戰爭中僕は主に獨逸の潜水艦掛をやつて居たが、獨逸の潜水艦は實際勇敢に勤勉に能く働いたね。あれで獨逸がモウ五十艘も潜水艦を持つて居たら恐らく聯合國は參つたに違ひないのだが、獨逸の爲めにや全く惜しい敗けだつたね。潜水艦の面白い話は無いかつて？　そりや有るとも、大有りさ。白耳義海岸で英の裝甲巡洋艦三隻の鏖殺しから、巨艦タイタニックの擊沈や、ドイツランド號の米國回航や、日本商船平野丸の沈沒など、悲慘な談、壯烈な談、痛快な談は幾らでもあるよ。何しろ一千萬噸以上の船をやつ付けたのだからね。まア緩つくり話すから、君も腰を落ち付けて遊んで行き給へ、もう君、華盛頓會議で海軍の制限は出來たし、四國協約は結ばれたし、殊に日本も米國も本氣でやる決心は無いのだからね。考へて見給へ。日米戰爭なんて川向ふの棒いぢりじやないか、お互に傷ついてお互に倒れるばかりじや。何處の國にも戰爭をダシにする軍閥と軍閥のお先棒はあるものだよ。之に煽られて財布の底を叩く人民が馬鹿さ。日本なども今米國と戰爭でも始めようものなら忽ち身代限りだね。だから當分此の方面じや戰爭の起りつこは無いよ。君の柄に似合はぬ軍事視察など止して心中研究でも始めちやどうだい、僕は二月ばかり此の方面に行動して居るが、心中が三組と身投が五人あつたよ。人間と云ふ動物は死ぬる時迄贅澤を忘れないで成るべく樂に死にたいと見へ、夏向になると心中や身投が殖へるがね。是から二百十日迄は大した時化もあるまいから、久し振りじや緩つくり二人で話そうじやないか。

尤も日本の物價は世界一だそうで人間共は生活難に閉口垂れて居る樣だが、そこに至ると世界平等の我々波黨は氣業なものじや。日本は物資も何もない癖に、狹い土地へ人間ばかり無闇矢鱈と産み散らすのだから生活難も已むを得ぬ次第さ。殊に況んやだ。日本人と云ふ人間は財布の底を叩いて迄も、軍艦や兵隊さへ澤山ありや喜んで居る御坊つちやんで、之じや産業の發達も工業の進歩も到底其の見込なきに於ておやだね。此節英國のノースクリフなどが頻りに日本の軍閥攻擊をやつて居ると云ふじやないか。先生と來たら執拗蛇の如く勇猛虎の如くで、獨逸を孤立さす爲めに歐洲戰爭の十年も前から、隱微の間に不撓不屈の排獨宣傳をやつたと云ふことだから、日本なども今の中に氣を付けないと危ぶ

ないんだがね。日本の新聞なども自分で軍閥攻擊をしながら、ノースクリフが攻擊すると躍氣になつて軍閥辯護をやるんだから滑稽なものさ。」

A「併し日本も今迄は隨分西洋の奴等に意地目られたからね、無理のない點もあるさ。」

B「其の點は僕も日本に對して大に同情するがね、併し何と云つても東洋の田舍國の悲しさに、自己の力量と世界の氣運を察知するの明と智とを缺ひで居るよ。それに多年意地目られた境遇上、繼兒的に根性が拗けてね。世界に對する僻見が強くて困まるさ。まアそんな事は我々波には關係がない。夫よりも今に海水浴が始まると、此の相模の海岸は到る處君が耽美憧憬する肉の曲線美とかも見物が出來るさ。尤も日本人のは西洋人に比べると少々色が黃黑いがね。ナニ家鴨のフラ〳〵躍りだつて？　ハヽヽ、全くだ。君の溫厚にして尙ほ時に此の皮肉があるかね。實際日本の女の裸體姿は肉感以外の藝術美を缺いて居るね、着物を着て居る時には左程でも無いが、素つ裸になつてアノ短い足で尻振り〳〵外ガマで歩く姿は家鴨其の儘じや、家鴨のフラ〳〵躍りとは蓋し適評じやね。だが日本女の美は裸體姿の如き形而下のものよりも寧ろ形而上の心にあると思ふね。即ち愛の熱烈なる點じや。戀の眞劍なる點じや、愛する男の爲めに心も身も全我を捧げて悔ゐないのは日本女の特點だね。是は僕が多年心中研究の結果、獲たる確定事項で、肩書の好きな人間仲間なら論文にすれば、慥に大博士の稱號に價するものと信じて居るのじや。僕をして假りに人間界に生れしむれば、僕は日本の男に生れたいと思ふね。」

A「餘程心中が御氣に召したと見へるね。僕は君と違つて心的戀愛美よりも寧ろ形的肉體美を愛する主義だから矢張り西洋に生れたいね。其はそうとして、君の心中研究は隨分久しいもんだが一體何時頃から何う云ふ動機で初めたのかい」

B「其の事に就いては僕は今迄他に洩らしたことが無いんだが君になら話そう。僕が此の研究を始めてから、もう彼れ是れ二千年近くになるね。而して其の動機たるやだ、詳しく談せば日本の歷史から說かねばならぬが、今日は大體の要領を摘んで話すことにしよう。

日本の紀元七七〇年と云へば西洋の紀元一一〇年じや。あの頃君は何處に居たか知らないが羅馬の全盛期で、トラジヤン皇帝が亞細亞地方までも大に勢威を振ふた時代じや。其の時の日本の天子は景行天皇と云つて、八十人の子を生んだと傳へられる勢力絶倫の方じや。其の澤山の皇子の何番目かに日本武尊と云ふ是は又武勇絶倫の方があつたのじや。今僕等が居る此の邊りは相模の國と云つて歴史的緣故の深い土地だが、其の時代には蝦夷と稱する蒙昧未開の種族が棲んで居て屢々王命に抗したのじや。そこで日本武尊が父皇の命を奉じて、弟橘媛と云ふ若い美しい妃と共に蝦夷を征伐しつゝ此の國迄來られ、舟に乘つて此の先きの下總と云ふ國へ渡られたのじや。ところが尊の舟が相模の鼻を廻はると、不思議や今まで晴れ渡りたる空は俄に墨の如く掻き曇り、疾風猛雨雷鳴電閃、海は忽ち怒濤洶湧、激浪澎湃、舟將に覆らんとする大荒らしとなつたじや。尊の驚き、妃の歎き、從士も舟夫も船底にへたばつて唯天を祈るばかりじや。迷信の深い時代のことゝて斯かる俄かの荒は海神が女人の渡海を怒り給ふが爲めと云ふことで、健氣なる妃は尊を救はんが爲め、「わた津神、風津神、願くば御怒を鎭め給ひて尊を彼方の岸へ渡らせ給へ」と、死なば諸共と止めらるる尊の手を振り拂つて、痛ましや花一輪逆卷く怒濤の中にサツと散つたのじや。斯くと見て從士や舟夫が、妃を助けよ、妃を救へよと起きつ轉びつ騷ぐ中に、尊は波の飛沫か、涙の露か、眼をしば叩きながら泰然として而かも愁然として据つて居られる。海藻の如く亂れた長い黑い髮と、赤い衣に纒はれた白い脛とが荒れ狂ふ波間に浮きつ沈みつ次第に船から遠ざかり行くじやないか。僕は此の時尊の舟の舵の頭にクツ付いて居たのだが、此の悲劇を見ると波も亦罪な商買かなと、坐ろに無情を感じたね。人間が坊主になるのも恐らく斯んな場合だらうかと思つたよ。そこで僕は殆んど無意識に舵の頭から飛び降り妃の着物の裾に取り付いたんじや。妃の體は幾時間か波に揺られ、潮に流されたる後遂に靜かな海底に永久の眠に就かれた。妃の入水せられた所を走水と云つて、今尙ほ二千年の昔を偲んで居るがね。僕は砂を堀つて妃の體を埋め、其の上に海松を一本植へ、再び海面に浮び出て見ると、波はいつしか收まつて尊の舟は早や下總の港に着いて居るではないか。尊は不時の荒しに遭ひ九死に一生を得て、無事漸く目的の港に着いたものゝ、都を出でゝ以來、矢石飛ぶ戰の場にも、衣片敷く旅の宿にも、形に影の添ふ如く寸時も離れざりし最愛の妃を失ひたることゝて追慕哀悼の情

に堪へなかつたのじや。今日は歸るか、明日は便りがあるかと、濱に出ては舟を待ち、山に上つては沖を眺め、日夜悶に諦らめんと欲して諦らむる能はず。去らんと欲して去る能はずと云ふ有様さ。そこで港の人間が尊の心を哀んで、土地の名を「君去らず」と呼び、後轉して木更津となつたと云ふことだがね。妃が尊を救はんが爲めに自ら身を海神の祭壇に供へたと云ふ、男に對する熱愛の清き心と尊とき行とが、僕をして日本女性の研究より更に心中研究者たらしめたる動機さ。」

A「大分劇的な動機だね、すると人間なら坊主となる處を、君は頭の毛が無いばかりに心中研究者となつた譯だね。其の位變はると、日本の内閣よりは代はり榮があるだらうよ。」

B「そう君の樣に混ぜつ返へしちや話が出來ない。妃が入水された所も、尊が上陸された所も、すぐ近くだから其のうち案内しよう。」

A「夫よりも妃の墓はどうなつたかね、そう云ふ哀話を聞くと僕も參詣したい樣な氣がするが。」

B「サアそれだて、僕は其後日本へ來る每に、妃の墓と下關の安德天皇の墓とには必ず參詣して海松の大きくなるのを樂しんで居たのだが、先年來海松が無くなつちやつたのだ。今の海堡のある所ぢやないかと思ふんだがね。あの海堡も十年程もかゝつて、やつと出來上つたかと思ふと、もう御役に立たずさ。飛行機や潜水艦や機械水雷が進步した今日じや。あんなものは君全く無用の長物だぜ。君も知つてる通り歐洲戰爭で、英國がアレ丈け優勢な艦隊を有しながら、而かも國民からは艦隊の無知無能呼はりをされながら、獨逸の海岸に對して唯一回の攻擊すら行はなかつたのは、獨逸の砲臺の爲めではなく、潜水艦と機械水雷とを恐れたからさ。一艘七八千萬もかゝる軍艦を態々東京灣の眞ん中まで棄てに來る馬鹿もあるまいが必要も無いじやないか。東京攻擊なら飛行機で澤山じや、東京灣防禦なら潜水艦と水雷とで充分じや。併し一旦埋め立てたものを今更掘り崩すのも大變だから、まア不良老年の養老院にでもするんだね。品川の臺場がお仲間が出來たので悅んで居るだらうよ。あア饒舌り疲れた。運動旁どこか其の邊を散步でもせうか。日本も景色だけは昔ながらの風致に富んでるぜ。」

A「アレ見給へ、變な人間が岩の上に蹈んで居るよ。」

B「あんなのは毎日やつて來るよ。時によると大きな岩なんかをトバし込んで吾人の安靜を妨げる厄介な奴もあるさ。そうかと思ふと、魚を誘拐や掠奪に來る奴もあるし、ちつとも油斷がならないのじや。僕の考では日本人位魚釣の好きな人間は南洋の土人以外世界に珍らしいと思ふね。つまり魚食が盛んな結果だらうよ、夫にしても朝から晩まで掛つて雜魚の一匹位しか釣らない奴もあるが、飽きもせず又やつと來るぜ。氣の長いこと實に夥しいものだね。之で見ても日本にや閑人の多いことが判かるさ。」

A「閑人が多いのじやない、仕事が無いんだらう。」

B「仕事が無いんじやない、人間が多ふ過ぎるんだよ。見給へ、日本の役所でも、會社でも、工場でも、商店でも、西洋に比べると馬鹿に人が多いから。併し夫も其の筈さ、盲判つく爲めに澤山の月給貰つて遊んで居る役人なども、ザラにあるんだからね。左程重要でもない書類に、下は屬官から上は大臣に至る迄四十五十の判子の捺してあるのは珍らしくないと云ふことだからね。つまり問題の起つた場合の責任逃れの爲めじや、之じや事務の澁滯するのも當り前たよ。今年からは官吏の夏休と半ドンを廢するさうだが、まア小役人をイヂめて世間體を繕ふと云ふ華族サン達のやりそうなことじやね。夫よりも役人の能率を高めようと思へば、人間の數を減して月給を增すに限るよ。食ふや食はずの役人を幾らコキ使つたつて仕事の捗る譯がないさ。工場だつて、ヤレ十時間勞働とか十二時間勞働とか云つて喧ましいが、西洋の職工の樣に正味八時間働く者は日本には殆んど無いと云ふことだぜ。サボの元祖は日本かも知れないよ。よく働くのは紡績の女工ばかりじやと云ふが、其の代りコイツは監獄式待遇と云ふ噂じや。まア大體に於て日本人と西洋人との仕事振りを比べると、西洋人が一人で働ひて二人で儲ける金を日本人は三人で働いて三人で儲けると云ふ有樣じや、言ひ換へれば西洋人が二人で食ふものを日本人は三人で分けて食ふて居るんだね。夫じや何時迄經つても西洋人と同等の生活は出來つこ無しじや、それに日本人と云ふ奴は體の小さい癖に大飯食らひだからね、お負けに生活費が世界一と來りや文句は無いさ。何だつて日本人と云ふ人間は戰爭の時に死ぬることばかり考へずに、平時から愉快に生きることを考へない

んだらう。人間の事ながら僕は氣が氣でないんだが。」

A「心中が氣に入つたせいか、馬鹿に日本の爲めに力瘤を入れるじやないか。」

B「そりや當り前さ、其の國に居れば其の國に從ひ、其の國を愛せよと云ふのが我々波の道徳じやないか、何處かの人間の樣に外國に住みながら極端に國粹とかを頑守せられては、誰だつて歡迎しないからね。君主國に來て共和主義などを高唱せられちや、誰だつて厭やがるに極まつて居るさ。何と云つても日本人はまだ世界的に垢拔けがしないね。」

A「併しだ、日本が若し世界的に垢拔けしたら君が好む心中美も見られなくなるかも知れんぜ。」

B「そこじや、そこが六かしい處じやね。日本人の垢拔けしないのも多分其の點に迷ふて居るからだらうよ。鄕に入つては鄕に從へとか云ふがね、今假りに都會のハイカラ女が田舍に行つたと假定して見給へ、其の女は自ら進んで田舍の風をしなくても、田舍の女の方から自分の眞似をして來るが、之に反して田舍女が都會に出た場合には都の女は決して田舍女の眞似はしないよ。だから田舍女の方で都會化するのでなけりや、何時迄經つても其の女は都會との協調融和は取れないね。そこは文明の價値と威力とが有るのじやと思ふがね。日本も今の六十以上の人間が棺桶に入つて仕舞つたら少しは垢が拔けるだらうよ。」

A「あゝ暑いこと〳〵、もうそんな面倒臭い人間界の議論などは止して、どこか涼しい處へ散歩にでも行うや。」

B「サア何處へ行かうかな、鎌倉も平凡だし、江ノ島も俗だし、と云つて熱海は少し遠いし、まア海岸の景色でも眺めながら三崎へでも行かうか。三崎は此の方面に於ける僕の根據地でね。海が靜かで、岩蔭が多くて、お負けに景色が良いと來て居るから、サボ黨や不平黨が何時も澤山潜んで居るよ。それにまだ汽車が通じないから幾らか固有の日本味を存し、面白い處があるさ。ではボツ〳〵出掛けやうか。」

三崎見物

A「君、さつき岩の上に居た人間が居なくなつたぜ。」

B「今三崎行の自動車が通つたから、アレに乘つて三崎へでも行つたんだらう、此處から三崎迄六里程あるが、道が良いから自動車なら一時間ばかりで行けるよ。」

A「こんな處まで自動車が通ふのを見ると、日本も自動車が余程發達したと見へるね、併し自動車賃はベラボーに高いと云ふじやないか。」

B「高いの何のつて恐らく之も世界一だらうよ。日本の樣に燃料が高くて、道路が惡くて、其の上車が外國の輸入品と來りや、高からざるを得ないだらう。逗子から三崎まで二圓などはまだ頗る廉い中さ。東京などの自動車と來たら英國や米國などに比べると、高くて目玉が飛び出す樣だなど〻外國歸りの貧乏人共が始終コボして居るよ。自動車が殖へたと云つたところで、東京でも五千の番號はまだ少ないのだからね。知れたものさ。我々平等主義の波社會から見ると、日本の如き道德の不完全な國では自動車などは、民衆用のものはウンと廉くし、個人用の物は思ひ切つて高税を課することだね。日本人は「自動車、社會主義を激成す」とさへ云つて居る位に一般民衆は自動車の跋扈に苦しんで居るのじやから。」

A「一寸質問すると事々物々意見や議論の多い男だね、議論抜きの案内を賴むよ。」

B「君は相變はらず温良にして寛恕たりで、專政治下の忠民だね。抑も意見の發表は自治平等の社會に於ては權利と云ふよりも寧ろ義務だよ、僞善道德の多い人間界では「沈默は金なり」とか「不言實行」とか稱へ、ダンマリ、ムツツリを以て美德と云つて居るが、沈默が金なら啞は純金じや、不言實行は有言實行の優れるに如かずじや。僕の如き有言不實行者と雖ども尙ほ不言不實行者に優るのじや。今の日本の老政治家は君の如き無言の人民を最も歡迎し、斯くの如く國民を教化せんとしつ〻あるさ。然るに親の心子知らずで、若い國民は老人達が藻掻けば藻掻く程、反對の方向へ走つて行くから面白いよ。君も折角來た序に日本の思想問題でも研究して見給へ、今の日本には舊い處で孔孟の忠孝主義から、新らしい處でレニン、ラウセル、リツケルトとかに至る迄、政治、經濟、宗教、哲學、社會、道德の各方面に於ける樣々の思想が紛亂錯綜して混沌を極めて居るさ、東洋流の專制式道德の上に西洋流の民主思想が急激に侵入したのだ

から、其の混亂の度は遙に歐米よりも猛烈だね。まア一種の思想博覽會じや。面白いのは此節反動思想家が躍氣になつて國粹保存とかを大聲疾呼するばかりか、先達の議會には過激思想運動取締法案など云ふ恐ろしい時代めいた法律案さへ持ち出した位だからね。そうかと思ふと伊太利のフヘスチスサを眞似たものが、知事や師團長閣下などが後援して俠客團を組織したり、內務大臣が浪花節語をして武士道を鼓吹せしめたり、イヤハヤ思想界の戰國時代じやね。俠客も政府や政黨の提灯持とまで出世すりや、幡隨院長兵衞とかも地下で泣ひて居るであらうよ。今一つ最近に於ける日本思想界の面白い傾向は、諦め主義と他力主義との流行じやね。一時は積極的な日蓮が大持てだつたが此頃は消極的な親鸞が賣つ子じや。夫に秕政百出綱紀紊亂の爲めに日本人の國家思想は大體に於て三つに分れて居る樣じや。强い奴は現狀打破の直接行動主義となるのじや、弱い奴は諦めの爲め宗敎に走るのじや、中間の大部分は政治に愛想を盡して利己主義に墮したのじや。此儘行けば亂國か亡國かじや。」

A「あゝ、もう澤山だよ、日蓮とか親鸞とか云つたつて僕等にはトント判らない。魚の名か鳥の名かい。そう駄辯を弄しられちやア長兵衞とかよりも、君の友人たる僕が泣ひて居るよ。……此の邊りの景色は四十年前と餘り變つては居ない樣じやね。」

B「海岸は格別變はらないが陸の方は相當に變つて居るさ。海岸だつて君、此の大きな別莊が澤山並んで居ることを見給へ、之が皆都會の金持が年に幾度とか命の洗濯に來る處じや。此處から葉山の先の長者ケ峰まで海岸の眺望の良い處は悉く別莊で占領して居るさ。向ふに見へる石壁の大きな園が御用邸で、まア冬宮とでも云ふ格だらうね。今日は靄が深くて見えないが、此の邊から富士を眺める景色は實際惡くないよ。僕は富士山丈は恐らく世界の絕品であると思ふがね。殊に富士は海濱より一氣に聳へ立てる點に於て一層眺望を佳ならしめるね。支那人は山紫水明とか、山光水色とか靑山碧水とか云つて、風景を叙するには常に山と水とを對照して居るが、何と云つても景色は山水併せ有しなくつては面白くないね。山だけでは崇嚴とか壯偉とかはあるが、ゴツ〳〵して殺風景になるし、海だけでは雄大とか豪宕とかはあるが、ズンベラとして没趣味になる。富士は何處から見ても趣はあるが、遠州灘から三保の松原を距てゝ見た景色と

此の相模の海岸と房州海岸から見た景色とが最も良いと思ふよ。」

A「成る程そう聞けば別荘は隨分殖へた樣じやね。日本の海岸は何處へ行つても何となく雅致を帶びて居るが、其代り又何處へ行つても氣の毒な程山ばかりだ。歐羅巴で云へば先づ伊太利かね。」

B「そうじや。單に地形のみならず、物資の貧弱なる點に於ても、國民性の焦躁な點に於ても、商人のコスイ點に於ても亦日本は伊太利に似て居る樣だね。日本の面積の七割乃至八割は山じやと云ふから、耕作に適する土地は僅に二三割に過ぎなんだ。統計上では日本の人口密度は白耳義、英吉利に次ぎて世界で第三位だと云ふが、人間の棲へる平地の面積比に直せば斷然として世界に群を拔いて居るだらうよ。海岸を見て見給へ、こんなに人家の密接した國は外に無いと思ふがね。之で居てサンガー夫人上陸禁止など〻騷いで居るんだからお目出度い譯さ。此節は意氣な心中よりも生活難の身投の方が多いので、僕等の研究に迄影響する次第じや。」

A「此の邊の景色は殊に良いね。あの岩のテツペンに松が踊つて居るところなどは丸で作り物の樣じやないか、斯う云ふ景色は日本以外の海では一寸見られないね。」

B「此處は君、小田和灣と云つてね、今のエンペローアが葉山から態々景色を見に來られた處さ。僕は此の日本の松が好きでね、殊に海濱の松が良いね。千樹千態、百木百姿で、一幹一枝悉く其の形を異にするのは日本の磯邊の松じやね。松の名所は何と云つても舞子の濱じやが、海と一所に見るなら矢張り松島のことじや。あの水氣も土氣も無い堅い岩の間に根を張つて海風に屈せざる松は、各種の樹木中最も生活力の强盛なものと思ふがね。日本人が松を樹木の王として慶祝と幸福とのシンボルとして居るのは頗る當を得て居るが、日本人自身は生に對する執着が極めて弱いのだからお可笑しいさ。僕は松に關して多少の考を持つて居るのだが、又君に泣かれると困るから今日は此の位で止さう。夫よりも君、此邊の波の意氣地の無いことを見給へ。外海の波が岩に砕け岸に逆ひて屈せず撓まざる勇氣と堅忍とに比べると、無氣力と不眞面目とに驚かさるを得ないじやないか。此邊の波は丸で女郎の接吻みたいにイヤ〱舐めて居るんだよ。斯んなことでは到底吾々波の理想たる地球の平等を實現することは出來ないさ。」

Ａ「と云ふ御自分はどうかね。日本や支那には「隗より始めよ」と云ふ詞があると云ふじゃないか。」

Ｂ「あまり大きな聲をするなよ、向ふからイヤな奴が來よる。彼奴は監視員と云ふイヌだから見付かると五月蝿い。此節日本の海では人間の眞似をして頻りにイヌ政治をやるから油斷がならないよ。もつと深く底の方へ潜ぐろ。」

Ａ「大違岩が多いじゃないか。隨分色んな海藻が生へて居るが、ちつとは變はつた種類があるかい。」

Ｂ「僕は其の方面は全然無知識じや。だが日本人と云ふ人間は海に生へたものは何でもカンでも引つ攫らへて行くから浮つかり藻の上で晝寢でも仕て居ようものなら、何時の間にか陸へ持つて行かれて日干釜煎の責苦に逢はされるよ。人間の話に依ると、此の紫色のギザ〳〵した小さい草が石花菜(テングサ)と云つてね、コイツで寒天やトコロ天を造るのじや。杏の葉の裂けた樣な赤いのが鹿角菜(ツノマタ)で、女の髮を洗ふのに好いんださうじや。其の青黒い小筋なのがヒジキで干すと黒くなるがね、人間が之を食ふと耕の糞を垂れると云ふこと程左樣に不消化物じや。あの黄黒い幅の廣いのがカジメで、之から沃度とかを取つて藥や染料を作るんだと云ふがね。向ふに見へる伊豆の何とか云ふ村は石花菜の名所で、海女が素潜りで採るのだが、之が一寸見ものじやよ。大底二分から三分ぐらひ潜つて居るが、水面に出ると浮かしてある樽に縋つてフーッ〳〵と口笛を吹きながら呼吸を繕つてるがね、風の冷たい夕方などに血の氣の薄れた唇から洩れるアノ口笛を聞くと、人間共の悲哀の音が籠つて居るよ。夫でも一人が一日に二圓から五圓位稼ぐさうだから、女の勞働としては日本一だらうね。之が村の共有財産となるので、今では積立金の利子だけで村費の支辨が出來て、税金は一切取らないんだそうだがね。税金の要らぬ處は恐らく天下此の村ばかりだらうよ。まア一種の自治共産制だね。などゝ何時か人間達が話して居たよ。」

Ａ「何だか大鼓の樣な音が聞へるじゃないか。」

Ｂ「アレかい、アレはポツポ船と云つてね發動漁船の音じや。アレが聞へる樣になると、もう三崎の中じや。ポツ〳〵外へ出て見ようか。ソラ向つて左の入江が小網代、右の入江が波壺と云つて兩方とも良い港じや。其の間に突き出た臺地が三浦の城跡で、三浦道寸義同父子が小田原北條の大軍と戰つて戰死をした處じや。今でも其の墓があるがね、道寸

と云ふ男は一寸洒落氣のある人間で辭世の歌に曰くさ。「討つものも討たるゝものも土器の、砕けし後はもとのにくれ。」技巧的虚飾の無いところが面白いじやないか。君はあの頃の日本の戰爭を見たことがあるかい。あの時代の日本の戰爭ほど藝術味を帶びた悠長な戰爭は世界に比類が無いだらうよ。大要を話すとマア斯うじや。敵を前に控へながら「我は桓武天皇何代の後胤鎭守府將軍平の良文の曾孫相模介三浦義明何世の孫……」など丶先祖の系圖を管々しく述べ立てゝ自分の名乘を擧げたゞ後、次には「生年三十三歲、十六歲の時金橋山の合戰に先陣に打つて敵の甲首を擧げ初陣の功名を顯はしてより此方大小十餘戰敵に後を見せしことなき相州切つての剛の者」など丶自家の功名を吹聽する上、「遠き者は音にも聞け近きは寄つて目にも見よ」の冒頭から「我と思はん人達は出合へ〱」の結句までやるんだから大變さ。ツイツを敵味方の双方からやられた日にや、大抵の長い日も暮れて仕舞ふじやないか。夫で滑稽だつたのは蒙古が九州へ攻め寄せた時さ。日本人は例に依つて敵前に馬を乘り出し「我は桓武天皇」をやり出したものじや。勝手の判らぬ蒙古兵驚いたね。降參に來たのかと思ふと、そうでも無い。大聲を擧げて何か譯の判らんことを一人でド鳴つて居る。而倒臭い、やつて仕舞へと云ふので、桓武天皇が半分も濟まんうちに、ぐるりから取り圍んで殺して仕舞ふ。今度は日本人が驚いたね。「夷狄戰の道を辨へず」だとさ。

扨て愈双方の名乘りが濟むと夫からチヤン〱バラ〱が始まるのだが、太刀打が面倒臭くなると刀を拋り出して組打が始まるね。此處の戰爭の時にも組合つた儘、あの高い崖の上から、コロ〱轉げ落ちて敵同志の野郎心中が澤山あつたよ。何と云つても同じ同色毛色で同じ言葉を使ふ人間同志の戰爭はアツサリして居るね。其の點に至ると宗教的の戰爭が最も殘忍で寧ろ酷烈じや。日本には昔から蒙古難以外に外國戰宗教戰が殆んど皆無で、戰爭の目的が專ら名譽慾と權勢慾とに在つたが爲め、自然に戰爭が美化されたのだらうと思ふがね。だから此の國には古來西洋に見る如き殘忍非道なる徹底的殲殺戰なるものは、天草のキリシタン爭亂の外には見ることが出來ないよ。」

A「そう云ふ說明なら暑くなくつて良い。僕は戰爭には全然沒趣味だが。東西の武者繪を比較すると、西洋の武者は必ず盾を携へて居るが、日本の武者には盾は餘り見ない樣に思ふがね。之が東西兩洋少くも日本人と歐羅巴人との性格上

に何等かの關係を有して居ないだらうか。」

B「戰爭嫌ひの君としては中々奇拔な着眼じや。ソリヤ大にあるさ。一體動物と云ふ奴は我々の如き冷靜なる波と違つて頗る自我の强いものでね。殊に人間に於て然りじや。此の自我が即ち其の動物の性格じや。そこで動物が憤怒したる場合即ち爭鬪する場合に於て、其のものゝ性格が最も露骨に最も正當に發揮せられるものじや、戰爭は個人の生死民族の存亡に關する問題だから、戰爭に對する國民の態度を見れば大體に於て其の國民性の本音を窺ふことが出來るのじや。日本の武者が盾を持たぬのは、日本の國民性が防禦よりも攻擊を重んずる爲めで、良く言へば進取の氣象、惡く言へば向ふ見ずだね。之に反し西洋人は矛を以て攻め盾を以て防ぐと云ふ攻防並用主義で、合理的ではあるが打算的じや。だから現代の戰爭に就いて言へば日本人は野戰の突擊には長じて居るが、陣地の防禦戰は得意でないと思はれるよ。此の性格の政策上に現はれたものが攻擊本位の偏武主義で、商業上に惡導されたものが暴利を一氣に貪らんとする近欲主義の低製濫造じや。世界の市場に於ける日本品の不評判は君も大概聞いたゞらうが、日本の大政治家が粗製濫造は造る者が惡いのじやない。買ふ者が惡いのじやと公言して憚からないと云ふんだから、事は簡單明瞭さ。斯う云ふ性格の國民は戰爭をしても、最初の鼻つ張り丈は中々强いが少しく難局に陷ゐると忽ち閉口垂れて仕舞ふのが普通じやね。

べら〳〵饒舌つて居るうち、とう〳〵三崎へ來ちやつた。アノ鼻を廻ると三崎の町じや。アノ鼻を歌舞山とか甲山とか云つて三崎の自然の公園じや。中々眺望が良いぜ。海水浴の時期になると東京邊から不良老靑年が集つて來て、夜通しドンガラ〳〵騷ぎ續け、我々の安眠を妨げることもあるよ。夫から前の方に靑く茂つた堤防の樣な低い陸地が見へるだらう。アレが城ケ島で、其の右の端の白いのが長津呂の燈臺さ。沖の方から白や黃色の帆を擧げて歸つて來る無數の小舟はアリヤ皆漁船じや。發動船も隨分居るだらう。」

A「なる程三崎の海岸は岩の多い處だね。是じや波のサボリ屋が晝寢に來るのに都合好く出來て居るわい。アノ城ケ島とか云ふ島は頂が板の樣に平坦で、日本には一寸珍らしい形の島だね。オイ君、あそこの岩穴に何處かで見たことのある樣な波が寢轉んで居るぜ、君はアノ波を知らないかい。」

B「アレは君、Zと云ふ危險思想家だよ。彼はね、絶對平等の波社會に在りながら强烈なる階級主義者、極端なる專利主義者でね。彼の說に依ると斯うだ。波仲間にも天稟に依つて其の能力に優劣の差がある。優良者は優良の業に從事し優良の待遇を受けて優良の生活を爲すべきである。之が爲めには低劣者は當然優良者の犧牲となすべきであると云ふのじや。丁度人間界の特權階級や資本家の主張に似た樣なものさ。だから波をして若し人間社會殊に日本などに生れしむれば立派な愛國者と爲つて大に權威を振るんだが、不幸にして波の國に生れたるばかりに危險思想家として冷遇せられて居るんじや。彼は又熱心な帝國主義者で常に世界一帝國を唱へて居るんじや。從ふてアレキサンダー、シーザー、成吉汗、那翁等の後援者でね、紀元三百年前アレキサンダーが彼斯印度を征服し、最早や陸上に於て朕が武を用ゆる處なしと陸地の小を歎きたる末、海國征伐を企て、硝子の箱に入つて彼斯灣の海底に沈み海神と會見したる際には、彼は第一の賓客として招待を受けたものさ。其の時の彼の扮裝と云へば海國開闢以來實に空前絕後の珍景であつたね。概要を話すと斯うだ。一萬の東洋眞珠に飾りたる青白赤の昆布の服を纏ひ、南洋珊瑚の冠を戴き、紅緑の八ツ手勳章を胸間に吊し、萬歳の龜甲龜に跨り、空中偵察の爲め飛魚を先鋒とし、蟹と蝦とを隨身近衛と爲し、鯨と鯱とを左右に配し、大小三千五百の魚族を從へ、一千の螺貝を吹き鳴らしつゝ威風堂々彼斯灣に乘り込んだのさ。波界でも人間界でも思想の野變なもの程コケ嚇しの形式に依つて威容を漲らんとする傾があるね。

其後彼は羅馬の間諜となり、カルタゴ艦隊を覆へしたる報酬として一時地中海の王位に上り、大に暴威を振ふたと聞ゐたが、羅馬の衰亡と共に彼も亦沒落して大平洋方面をブラ付き、六百四十年前蒙古が日本を攻めた時には忽必烈に招かれて、蒙古江南軍の水先案內をやつたと云ふことじや。最近に於ける彼の活動は那翁戰爭の時じや。那翁が英國征伐を企て、佛國ブーローンの海岸に立つて自國海軍の微力を歎き、オゝ神よ、希くは我をして唯六時間此の海峽の主人たらしめよと海を睨んで地段太を踏んだ時、彼は同志と共に那翁の爲めにドーバー海峽の水を干さんと大陰謀を企だてが、事露顯に及んで彼は叛逆罪として五百年の南極流罪に處せられたのじや。然るに先年脫獄して行衞を晦まし、懸賞搜索に付せられて居たが、露國革命の時海の大赦に依つて許されたのじや。僕は主義思想に於ては彼と全然正反對の立場

にあるのだが、彼が幾多の壓迫と危害とを意とせず、其の主義に忠實なる點に對しては常に大いに敬意を表せるもので、一個の波としては彼と親交を結んで居る譯じやがね。」

A「彼奴も中々意地っ張りと見へるね。一つ聲を掛けて見ないかい。」

B「まあ待ち給へ、彼と議論し出すと二日や三日じや濟まないんじやから。ドーバー事件の時ゃ僕は彼と三晝夜ブッ通しで論じたものじや。其の前に一通り港内の案内をしよう。ポッポ船の出入が非常に頻繁だから卷き込まれぬ樣に好く氣を付け給へ。」

A「沖の方から大きな旗を立てた舟が澤山列を作って入って來るぜ。」

B「あれが大漁の標さ、皆んなの舟に旗の立ってる時が總旗と云ってね、其を見ると町の人間は大悅びさ。どんな魚を獲って來たか魚の取引場へ行って見よう。君向ふの棧橋を見給へ、衆人環視の中で遠慮憚りもなく、大きな筒口から放射して居るじやないか。あの潮水を桶の中へ汲み込んで、其の中へ魚を抛り込んだからね、人間と云ふ奴は隨分穢ないことをやるよ。ハハア大分烏賊を取って來たな、鯵もカナリやられたわい。此の魚を箱や樽に氷詰として東京へ送くるんだがね。そこに碇泊して居る汽船は皆魚を東京へ運ぶ爲めに來て居るんで、東京で新らしいと名の付く魚の過半は此處から運ぶんださうじや。」

A「又旗を立てたのが入って來たぜ、今度は總旗じや。」

B「アリヤ發動船が曳いて居るから屹度沖漁の鮪舟だらう。今頃は人間が二人掛りでヤット擔ぐ位の大きな鮪が取れるぜ。僕は此處へ來て多くの魚が氷詰にせらるゝのを見る每に、何時も心に一種の疑惑と動搖とを禁ずるのじやがね。鮪は自己生活の爲めに鰮を餌として食って居る。魚屬として鮪は鰮よりも優強者だからじや。人間は自己生存の爲め鮪其他の魚を食物として居る。動物として人間は魚類よりも優強者だからじや。今假りに鮪は鰮を食ふべからず、人間は他の動物を食ふべからずと云ふことになると、鮪も人間も滅亡の外はない。更に之を一般生物に推し廣めると、共食生物の外は此の世界に生存が出來なくなる譯じや。之で見るとZの云ふ如く優、強者は自己生存の爲めに低劣者を犧牲に供

することは、生物生存に對する天の法則であるかの樣に思はれるのじや。君はどう思ふかい。」

A「其の問題は一朝一夕に論斷することは出來ない。第一優强者とは何ぞやと云ふことが先決問題じやからね。併し之は他日の論題として保留し、今日は兎に角Zを訪問しようじやないか。最も御互に主義の議論は避けることにしてさ。君、そこの宿屋の二階から先つき逗子で見た人間が覗いて居るぜ。」

B「へ……人間てへ奴はね、物好な動物で追々夏向になると雜誌なんかに海のことを書く爲めに、折々吾人の內所話を聞き竊みに來るさ。あれもそう云仲間の一人だらうよ。」

波の夜話し

A「居るよ〳〵君、あそこにZが目玉を光らして此方を見て居るよ。一つ呼んで見給へ。」

B「オイZ君ゝ僕だよ、AとBとじや、餘程久し振りじやね。君とドーバー海峽で大に議論をやつてから早や百年以上になるね。其後君は大分苦勞をしたと云ふが壯健で結構じや。相變はらず階級主義を主張して居るかい。」

Z「オーB君か、A君も御一所だな、御承知の樣な次第で其後は御無沙汰、相變はらず達者でお目出度う。吾輩の主義かい。無論階級主義さ。吾輩は愚なる平等主義者の迫害を受くること大なれば大なる程、吾輩の意志は益强固となるばかりだ。暴力に依つて主義思想を壓迫せんとする如きは、火を消すに油を注ぐ樣なものだ。見給へ君、あの時に吾輩の謀が行はれて那翁を英國に渡して置けば、今頃は世界一帝國となつて、歐洲戰爭など云ふ馬鹿氣た戰爭は起りやしないんだ。併し吾輩は今更そんな過去の愚痴は云はないが、陸の國が變化する如く海の國も變化して行くのだ。陸の獨逸や露西亞に於ては、戰前危險思想家として種々の迫害と暴虐とを蒙つた人間が今じや支配者となつて、以前の愛國者が却つて危險思想家として壓迫せられて居るじやないか。海の國だつて今に君等が危險思想家として、サワラに燒かれ南極に凍らされる時代が來るよ。百年の間南極の寒獄に我輩を苦しめたる恨は必ず報ひずには置かぬのだ。恩に感ずる勿れ、恨を忘るゝ勿れ、弱者を虐ぐるは强者の權利なり、劣者を挫るは優者の義務なり、と云ふのが吾人階級主義者の信條だ

からね。」

B「君と僕との主義の相異は幾ら議論したつて到底合致せぬのは勿論、妥協點さへ發見出來ないのじや。併し僕等は君が飽迄主義に忠實にして意見の徹底的なる點に對し私に敬意を表して居る次第じや。だから今日は御互に主義上の議論は全然抜きにして浮世話でもやらうと思つて、見舞かた〴〵來たのじやがね。」

Z「夫は有り難う、併し君等がそんな小供瞞しの樣な氣休を云つたつて駄目だよ。若し吾輩の天下となれば君等の如き平等主義者は片つ端から殺戮するか奴隷にするかだ。浮世話なんかは吾輩に取りては何の感興も引かないが、今日は珍客に敬意を表して主義の議論は止すとせう。夫では吾輩が主人役に談の皮切として南極脱出談でもやらうか。

吾輩が反逆罪に問はれて南極追放の宣告を受けたのは、丁度一八一五年那翁が最初の流謫地たるエルバ島を脱出して再び佛國に上陸したる三月であつた。吾輩は彼の成功を心に祈りつゝ同志と共に嚴重なる警戒の下に南極に送くられたのだ。氷山群流の間を過ぎて當時尚ほ人間未發見のビクトリヤ、ランドに抛り上げられ、吾輩は主謀者と云ふ廉で極點に最も近き地に禁錮せられた。南極の模樣は唯極寒と極寥との二語に盡きて居る。海岸に近き處に海豹、ペンギン、海燕など二三の動物を見るばかりで、一歩內地に踏み込めば木もなく、草もなく、岩もなく、土もなく、滿目唯荒涼寂寞として氷の山に雪の原じや。鎖に繫がれて雪に埋まり氷に滑べりつゝ行く苦しみは、西比利亞流竄囚の人間界の事も思はれて、吾人主義者には絕對禁物なる同情の念さへ起つたね。扨て愈々收禁地に達して見ると眺むる限り唯皚々にたる雪の高原で、風吹けども遮ぎるものなければ聲を發せず、靜寂眞に太古の如しさ。十一月から翌年一月迄の三個月間は、太陽が低空に圈を畫ひて運行するから、晝夜の別なく鈍き弱き光を見ることも出來るが、殘りの九個月は太陽地平線下に沈んで絕對に光を見ざる常夜の暗だ。殊に冬期は不計測の寒氣で眞に聲も凍らんばかりだ。單調無味な太平洋の光景に押れたる吾輩も坐ろに寂寞無寥の歎に堪へなかつた。五百年間も斯んな處に押し籠められてはやり切れぬと思ひ、絕へず脫出を試みたが、何しろ體を地盤に凍ふりつけられて居るので身動きさへも出來ない。幸に天未だ吾輩を棄てず、丁度今から十年ばかり以前に英國のシアツクルトンが南極探險に來た際、犬橇で吾輩の體を引き起して與れたのだ。天

の助と早速檣の底に食つ付いて海岸までは來たものゝ、警戒極めて嚴重で乘船する機會がない。海岸を彼方此方と逃げ歩いて居る中、日の丸の旗を揭げた小つぽけな船が一隻繫がれて居るのを發見した。聞くと日本の白瀨とか云ふ人間の率ゐる南極探檢船と云ふことが判つたのだ。日本の人間には豫てより世界統一主義者が多いと聞ゐて居たから、是れ幸と暗に乘じて潛に船底に隱れ日本へ亡命して來た譯さ。吾輩は今後更に如何なる迫害と苦痛とを受くるとも、どうしても海の平等主義を破壞して階級主義の海帝國を建設せねば止まらないのだ。南極百年の幽囚は吾輩の勇氣を十倍にして吳れたよ。平等主義者が生意氣に大赦などと云つてるが、吾輩は自己の主義の實現を計る以外に罪を犯した覺が無いんだから、そんなものを受ける必要を認めないのじや。」

B「主義の異同は別とし、僕は君の波格を信ずるが故大に君に同情するよ。君は海帝國を建設して第一世皇帝の位に卽時き、大に位階勳爵を備へて封建的專制政治を行はふと云ふんだね。夫も面白かろ、日本などでは貴族院內閣さへ出來る代じや。そして日海同盟を結べば日本人は悅ぶぜ。一體帝國主義と階級主義、自由主義と平等主義とは昔から付き物じや。君の好きな那翁なども階級思想は頗る强烈だつたね、無闇と貴族などを製造してさ。那翁とこそ云へ、彼がドーバー海峽で地段駄を踏んだ時の情なさそうな顏つたら、實に天下無類古今の絕品だね。恐らく人間の悲憤と涙贖との代表的表情だらうよ。アノ少しウナ垂れた小筋な眉の間に瘤瘢皺を寄せて、引き締まつた唇を一層引き締め、腕組をして溜息をついた時には、顏面神經がピク〳〵と動いて、凹んだ銳い目からは淚さへ出さうだつたじやないか。」

Z「吾輩那翁は左程好きじやないんだが、唯吾輩の理想實現の手段として彼を後援利用せんとした迄さ。彼は自由不等主義に墮落した近代の人間中では慥に傑物だつたに相違ないが、あまりに才が勝つて要領を得過たね。所謂英雄の才略餘つて王者の偉大を缺いたものだ。そこに至るとアレキサンダーは偉かつたよ。彼斯灣の會見の時吾輩に向つて、天下語るに足る者唯卿と予とあるのみ、予は世界の陸に王たれ、卿は世界の海に王れ、ば卿と予と手を握らば天下の事意の如くなさらるなしと云つたがね。遺憾ながら硝子箱の內と外、手を握る譯にも行かず、其儘別れたが惜しい事に彼は血氣盛りの三十三で若死して仕舞つた。A君、今度は君が何か話し給へ。」

A「僕は平等主義者で殊に戰爭嫌ひと來て居るんだから、諸君の樣に勇壯活潑な話材を持たないがね、先つき那翁のシカメ面の話が出たから、僕は人間の代表的悅び顏の話をしよう。僕は是まで人間の嬉しそうな悅び顏を色々見たが、もりストファー、コロンブスが始めて亞米利加サンサルバトアの陸影を雲か山かの間に發見した刹那に洩らした笑みの顏ほど、安心と感謝と希望と勇氣と喜悅と光明とに輝いた顏は見たことが無いね。僕は自分の主義よりして世界の陸も海も、萬物に對して自由に平等に開放すべしといふ意見から、亞米利加大陸の沃土が久しく未開の儘に委棄せられてあるを遺憾とし、適當な人間に之を開拓せしめようと一千年以前から主張したのだが、何しろ其頃の亞米利加の海と云へば頑固黨の巢窟だつたのだから、容易に僕の說が容れられない。遂には彼等頑固黨の爲めに「兇　なる人間を泰平の米國に導びき波の世界の平和を攪亂せんとする賣國奴」との汚名を負はされ、グリーンランドの奧に三百年の追放に處せられたものじや。グリーンランドと云へば今でこそ人口一萬三千、貿易年額百萬圓を超へ、稍や人間の住地らしい氣もするが、其頃はまだ海岸の一部に脊の低い髯の多いエスキモー人と見知れぬ寒帶動物が棲息せるのみで、內地は一萬尺の氷山峩々として劍の如く聳へ峙ち、滿目皚々唯一の生物も唯一の色素も見ないのじや。北極探撿家のナムセンも未だ生れず、Z君の樣にシヤツクルトンにも救はれず、僕はとう〳〵三百年を此處で過したのじや。グリーンランドから歸ると僕は素志貫徹の爲め直に世界を周遊して亞米利加開拓に適當なる民族を捜したのじや。其頃日本へも來て時の將軍足利義政と云ふ男にも會つて見たが、奴さん銀閣寺などを造つて收まつて居るので薩張り問題にならない。倭寇の頭領達にも話して見たが、彼奴等は支那や朝鮮あたりで小泥棒を稼ぐのが能で、千里の波濤を越へて新大陸を開拓するなどの遠大の志あるものは一人も居ない。仕方が無いから再び歐洲に歸つて來たが、其頃の歐羅巴と云へば未だ頗る野蠻で、地球球形說などを唱へる者は異端者として首が飛ぶ時代だからね。チアス、ガマなど云ふ相當役に立つ航海者も居るには居たが、彼等は阿弗利加探撿に熱中して居たので、僕の意見などには耳を傾けない。偶々ゼノアにコロンブスと云ふ勇敢大膽なる航海者があると聞き、早速ゼノアに行つて彼を說いた處非常に僕の言を信じて、夫ではやつて見やうと云ふことになつたのじや。それにしても先つものは金なりけりで、彼は資金調達の爲め葡萄牙の國王ジヨン二世、英吉利王ヘンリ

ー七世、西班牙王フェルヂナンド一世と順々に說き廻はつたが、ドレもコレも恐物ばかりで「ウン」と頭を縦に振らないんだ。此時代の事だから外國人が國王に面會でも仕ようとするには夫れ〳〵のツテが要るんで、之が爲めコロンブスは多くもあらぬ資産を使ひ果して一分も殘らぬ窮境に陷つたのさ。僕は此時ほど痛切に財産私有制の弊を感じたことは無いね。併し之で中止しては僕としても殘念であるし、コロンブスに對しても氣の毒なので、僕は最後の手段として一夜西班牙の女王イサベラの夢枕に立つて彼女を口說いたのじや。口說いたと云つたつて變に取られては困るぜ。夫からイサベラがコロンブスに會ふことになつたのだが、流石に男優りとの評判高かつた女だけあつて、二つ返事で「宜しい、金は幾らでも出す、水夫も船も貸してやる、其代り利益は半分分け」と頗る明快に直截に承諾したね。

そこでコロンブスは早速サンタマリヤ、ピンタナ、ニナと云ふ三艘の帆船を艤裝し、百二十人の水夫を募つて、一四九二年の八月三日午前八時と云ふに西班牙のパロス港を出發したのじや。コロンブスはサンタマリヤ號を乘船とし、滿面の得意を夏の旭に輝やかしつゝ總帆に風を孕まして、鬼の海か實の海か、行衞定めぬ萬里遠征の途に上つたのじや。斯う形容すると餘程景氣が宜さうだが、其の實最大のサンタマリヤが積量僅に百噸乘組員五十人で、ニナに至つては四十噸二十四人乘りと云ふ小舟だから心細い次第さ。そこら邊りに繫いで居るポッポ船とかに毛の生へた位のものだからね。扨て此の大艦隊は先づ亞弗利加のカナリー島に立寄つて船體の修理やら、糧食の積込やら、種々遠航の準備を整へたる上、九月六日に再び錨を拔いて意前人未航の海に乘り出したのじや。幸に夏の大西洋は波穩かに風涼しく、舟は北東の貿易風を眞艫に受けて西へ〳〵と進んで行つた。十日經つも、二十日過ぎるも、目指す陸地の影は見えず、明けても暮れても眼に入るものは唯雲の流と波のうねりばかりじや。或は水線に横はる暮雲の堤を眺めては陸の影かと心を躍らし、或は波間に戲むる見馴れぬ鳥の翼を見ては陸地近づくかと氣を勵ましつゝ、明日は〳〵と待つ中に何時しか九月も過ぎて秋風そよぐ十月となつたが、前途は尙ほ茫々として唯雲水の漠々たるばかりじや。加ふるに水も食物も日毎に乏しくなる。流石に海に生れて船を家とする冒險敢爲の水夫中の水夫を選り拔きたる乘組員もポツ〳〵心細くなつて來た。地球平面を信ぜる彼等は、今日は奈落の底に乘り入れるか、明日は地獄の谷に陷ち込むかと、安き心もなく、日夜ハラ

く君としてビク／＼乎たりと云ふ有様じや。不平と失望との聲は次第に高くなり。遂にはコロンブスに迫つて船を元の港へ引き返せと威嚇するに至つたじやないか。コロンブスはモウ二日／＼と水夫達をなだめて尚ほも西へ／＼と進んだが、何時まで經つも陸地が見へないので、ソロ／＼僕の言を疑ひ始めたのじや。丁度十月九日の晩だつた。カビの生へた罐詰と孑孑の生いた水とで名ばかりの夕食を終へた水夫達はコロンブスの室を襲ふて、今から直に船を引き返へせ、若し言ふ通りにせねば海の中へ抛り込むと云ふ騒ぎが起つたのじや。流石に剛毅のコロンブンも迷つたね。兩方の手で頭を抑へ、目を閉ぢてチツト考へ込んだ。此處で船を返へされては九仭の功を一簣に虧くもので、僕が多年の努力辛勞も水の泡となる、最後の五分とは今の場合じや。僕は船窓から飛び込んで彼に「後三日」と囁いた。コロンブスは神の暗示を得たるが如く、決然たる意志と凛乎たる言葉を以て「後三日待つて呉れ、三日經つて尚ほ陸が見へねば其時こそ殺すなり、舟を返へすなり、君等の自由に任かす」と斷然として言ひ放つたのじや。此の三日の間のコロンブスの心痛と憂慮とは見るも氣の毒な有様で、夜も晝も船橋に立ち盡して殆んど一睡もしなかつた。十日も空しく過ぎ、十一日も不結果に暮れ、殘す處あと一日じや。コロエブスは心痛に攫れた顏をば、帆裾を洩れる凉風に吹かれつゝ船橋に立つて、十一日の日出を待つものゝ如く、恐るゝものゝ如く、次第に白み行く空を見詰めて居た。成功の榮冠か失敗の醜辱か、運命の決する處今日一日じや。彼の面には若し失敗すれば、生きて再び故國に歸らずとの決心の色さへ浮んで居る。星が消へて東雲が黄色くなり、樺色となり、紅くなり、水線が次第に鮮やかとなつた。船首見張りの水夫が歡びよりも寧ろ驚きの聲を以て「陸が見へる」と叫んだ。コロンブスは恰かも電氣に打たれた如く、反射的に、無意識に、船橋の端へと飛んだ。どうだらう、船首から右舷の方へ掛けて山の頂が連續として薄く而かも鮮やかに曉の西の空に畫かれて居るではないか。之を見たコロンブスが唯一言「オヽ陸が」と無意識に洩らすと共に、ニツコと笑んだ其の時の顏さ、君想像して見給へ。アドミラル東郷の「敵艦見ゆ」以上だぜ。」

B「流石にA君は藝術趣味が深い丈あつて話が文學的だね。人間の表情談が出た序に僕は一つ人間の代表的心配顏と云ふのを紹介せうか。今コロンブスの心配顏の話もあつたが、彼の心配には尚ほ大なる希望が存して居る。僕が是から話す

のは絶望的の心配顔じや。人間の心配顔にも色々程度と種類とがあるが、何と云つても戰爭の時の軍人の心配顔が最も深刻で最も痛烈じやね。露國婆爾的艦隊の司令官長だつた「ロゼストウエンスキー」が、安南を出發して朝鮮海峽に乘り入れる迄の心配顔も相當痛烈であつたらうと思ふが、朝鮮海峽で彼を待ち受けたアドミラル東郷も隨分心配したに相違ないね。併し東洋人と云ふ奴は喜怒色に現はさぬを以て英雄の要素として居る爲めか、歐米人の如く表情が率直でないから泣いてゐるのか、笑つて居るのか、腹の底が判らないね。殊に當時東郷の參謀長で今度の總理大臣となつたアドミラル友加藤の如きに至つては、蠟燭の燃え殘りとの世評さへある程、極端なる無表情に出來てるから、アノ時なども何の位心配したか想像すら出來ないよ。今でさへ普選などは一度も考へたことが無いなど平氣で言つてのける程冷かな男だからね、若い士官などは彼の體溫は二十七度しか無いと云つてるそうだよ。でも日本海々戰前に鎭海灣で三笠の甲板に立つた彼の顏と、華府會議の行き掛に太平洋で春洋丸のサルンに据つた彼の顏とは、前者の方が蠟燭の殘り方が少なかつた丈けそれ丈け余計に心配だつたと見へるね。まア彼などは無表情の代表的だらうよ。兎に角日本人と云ふ人間は情を矯めて冷靜を裝ふことに巧みだから表情試驗には落第さ。活動寫眞に關係して居る男が、日本人は表情に拙だから活俳としては成功しないと言つて居たが、實際そうだらうと思ふね。表情の點に至るとラテン人種就中佛蘭西人が最も發達してるよ。巴里女の目付と來たら其れこそ天下一品だらうぜ。

前口上は扨て置き、西洋の一五八六年と云へば、日本の永祿元年で上杉謙信と武田信玄とが川中島で鎬を削つて居た頃じやが、歐羅巴では西班牙葡萄牙聯合の無敵艦隊が英國襲撃を行つた年で、英國のエリザベス女王時代じや。西班牙王牙王のフィリップ二世が當時海上に於て世界の權威たりし西、葡兩國の艦隊を擧つて攻め寄せたのだから、日本式に云へば英國の興廢此の一戰に在りと云ふ場合じやね。擧國震駭膽を冷やし上下錯愕色を失ふたのも無理はない譯さ。戰爭の因由かい。人間界の戰爭に因由も糞もあるものか、魚の骨を奪ひ合ふ犬の喧嘩も同樣で、言ふ丈野暮さ。僕の談は此の無敵艦隊に關係があるのじや。無敵艦隊の編成は西班牙、葡萄牙は勿論、遠くネープルス、ゼノア等の精鋭を粹めたもので、壯大城の如きガレオンや堅牢鐵の如きガレースを始め、新舊大小の帆艦稅艦合して百三十隻、其の全

噸數五萬八千噸、備砲二千四百門、乗員三萬人内戰兵二萬と註せられ、實に當時に在つては無敵艦隊の名を辱かしめざるものであつたね。唯司令長官だけは名前さへトンマなグヅマン公であつたが、其部下には司令官としてジュアン・マルゲネス、ドン・ペトロ、ディエゴ・フローレンツ、ジュアン・ゴメス、ドン・アントニオなど、何れも膽を矢丸の下に鍛ひ、氣を劍戟の前に錬りたる一騎當千の勇將が控へて居る。其のリスボン港に勢揃ひしたる光景は正に帆檣林立波を壓き、旌旗翻々空を掩ひ、英國の運命は風前の燈の如き觀があつたね。之に對し英國に於ては全國に檄して船艦を徴集し、大小約二百隻の艦隊を編成し、之をプリマウスの軍港に集めて敵襲に備へたのじや。司令長官は海軍大將ホーワードで其の下にはセーモーア、ホーキン、ドレーキなどの海賊上りの豪傑が居る。船の數は英國の方が多かつたが、實勢力は無敵艦隊の半にも及ばなかつたのじや。

頃は五月の三十日、晩春の空は碧に晴れて淡靄四山を罩むる間に、無敵艦隊は萬衆の歡呼に送くられてリスボンを出發し、意氣凛々征英の途に上つたのじや。僕はグヅマン長官の旗艦たる千噸四十八門砲サンマルチン號のジブームの尖端に乗つて従軍したのじや。後方を眺むると百三十隻の軍艦は數條の縦列を作つて、彩旗檣頭に翻へり、色帆順風を孕み、艫端に渦巻く白波は日に輝いて雪と榮ゆる壯觀美景は、煙ばかり吐く現代軍艦の迚ても及ぶ處ではなかつたね。まア美文的に形容すれば、千疊敷の青疊の上に錦の衝立を立て連ねたとでも云はふか。かくて艦隊は葡萄牙の山を烟靄迴に右舷に望みつゝフィニステル岬も早や過ぎて、今しもビスケーの眞ん中に差し懸つた。名にし負ふ歐洲の難海、暴風俄に起つて艦隊は忽ち四分五裂、檣折れ、帆破れ、散々の體にてコロンナ港に逃げ込んだ。無敵艦隊に取りては實に不吉の前兆で、小心者の長官グヅマン公一度の荒しにスツカリ意氣沮喪し、國王に背を送つて艦船の破損、糧食の腐敗、兵士の疾病を理由に英國征伐の中止をさへ申出したのじや。

無敵艦隊はコロンナ港に碇泊すること一月あまり、戰備を整へて再び出發したのが七月二十二日じや。之から片や無敵艦隊、片や英國艦隊の衝突となるのぢやが、此の戰爭は餘り壯烈なる戰鬪は行はれず、無敵艦隊の敗れたのは英國艦隊にやられたのでなく、寧ろグヅ長官作戰の拙に依つて自滅したと云ふ方が適切なのだから之を省略して、代表的戰鬪

とも云ふべき無敵艦隊燒打戰の一齣を話さう。

無敵艦隊は英國艦隊との決戰を避けつゝ一意東へ〳〵と急いで八月六日には佛國カレーの沖に達し、和蘭より來會すべき援軍を待つたのじや。英國艦隊も亦無敵艦隊を追ひ來つて敵と僅に一里を隔てゝ碇泊した。此の時代の戰爭は隨分呑氣だつたね。今なら十里も先きから戰鬪を始めるんだが、タツタ一里距てゝ敵味方が睨み合つて居るんだから。其代り見物には都合が好かつたね。扨て六日も暮れ七日も過ぎたが兩國艦隊ともチツとも動かない。僕等見物人は大欠伸じや。

七日の夜も早や更けた。哨直の水兵達も晝の暑さに疲れて砲門に、モタれ轉た寢をして居る。月なき空は曇つて星の光さへない。總ての軍艦は一切の燈火を隱して海は墨の如く暗い。波はバサ〳〵と舷側を叩き風はヒュー〳〵と檣を鳴らして居る。哨艇の橈音がコトン〳〵と彼方此方の暗中に聞へる。今しも風と潮とは英國艦隊の方から無敵艦隊の方に吹き且つ流れて居る。僕は虫の知らせか、何事か起りさうに思つたのでサンマルチンの艦首に立つて居ると、草木も眠り波も休むと云ふ丑三つ頃じや。折しも數點の火光がチラと英國艦隊の方で閃めいたかと思ふと、忽ちの間に八個の大火團となり、風と潮とに送られて無敵艦隊の方に動き初めた。斯くと見た無敵艦隊の驚愕と狼狽とは譬ふるに物がない。喇叭を吹いて全艦員を呼び起すやら、空砲を打つて全艦隊に警告するやら、水兵達は素つ裸の儘帆を張る、橈を漕ぐ、錨を捲く、叱咤怒號叫喚の聲が雜音と合して暗中に響き亘る。丸で火事と水とが一時に來た樣な騷ぎじや。各艦の錨鎖は強潮に緊張してケツプスタンは廻はらない。火船は炎々たる火焰に空を焦がし波を染めつゝ刻一刻無敵艦隊の列中見掛けて突進して來るのじや。今は愚圖〳〵しては居られない。多くの艦は錨鎖を切斷し、錨を拋棄し、混亂の狀を以て命からがら沖合に逃げ出した。幸に火船の爲めに燒かれた軍艦は一艘も無かつたが、錨を亡くした艦は再び碇泊することが出來ない。暗の海を風と潮とに流されつゝ漂ひ廻るうち、數隻の軍艦は海岸に乘り上げて破壞した。夜が明けて見ると無敵艦隊は遠近數里の間に分離散亂し雜然として浮んで居る。英艦隊は此の機に乘じ全艦隊を分つて三縱隊を爲し、ホワード、ホーキンは中央本隊を卒ゐ、ドレーキ、フロビツシヤーは右翼を、セーモーア、ウインターは左翼を指揮し、

追潮順風に乘じて突撃し來つたね。舞臺は大部面白くなつて來た。無敵艦隊の各艦は形體のみ徒に大にして操縦に適せず、英艦隊の爲めに翻弄せられて大苦戰に陷つたが、英艦隊の攻撃も生温かつたね、何と云つても先込砲の球彈を梃や梃子で動かしながら、五分置きか十分置きにブツ飛ばすのだから悠長なものさ。かくて戰爭七時間の後双方艦隊とも彈藥缺乏の爲めに勝敗未決の儘戰鬪を中止したのじや。

無敵艦隊は數次の戰鬪の爲め、艦體の損傷せるもの多く、彈藥糧水亦缺乏し、加ふるに援軍來會の見込なきに至つたので、グズマン長官は軍議を開いて今後の作戰を議したのじや。ところが議論は二つに分れ、一は適風を待つて最後の一戰を試み、潔よく屍をドーバーの底に沈めんと云ふ決戰説で、他は風向不利にして到底戰鬪を交ゆるの見込なき故、蘇格蘭土の北方を迂廻し大西洋に出てゝ本國に歸航せんと云ふ避戰説じや。昔から軍議は戰はさるに決すと相場が極まつて居る。軍人だつて命の惜しい連中が多いんだからね、死ぬるか、死ないかと聞きや、きつと死ない方に手を擧げる方が多ふからじやないか。そこでグツマン長官一世の智慧を絞り、一先づ北方に航し好風を待つて再び南下決戰を爲さんと云ふ折中案を執り、殘艦隊を率ゐ北方に航走した。此時風波並に英艦隊の爲めに擊沈破壞せられた軍艦は僅に二十餘隻で、グヅ長官の麾下には尙ほ少くも百隻の軍艦が殘つて居たのじや。英艦隊は直に無敵艦隊の北走を追ふたが、之も彈藥庫は空なのじや。双方ともに戰爭する氣は無いのじやから面白い。丸で大きなヤツトの競爭じや。八月の二十日に無敵艦隊は蘇格蘭の北端を西に廻はつて大西洋に出たが、英國艦隊も糧水缺乏の爲め廻はれ右をして歸つて仕舞つた。無敵艦隊の悲劇とグヅ長官心配の幕は愈之から始まるのじや。

出征の當初より風の神に崇られたる無敵艦隊は大西洋に出でたる後も亦暴風に襲はれた。戰鬪の爲め檣索を斷たれ檣を傷けられ船體を破られたる軍艦は最早や風に抵抗する力がない。一度の時化に遭ふ毎に檣を折られて怒濤の間に進退の自由を失するもの、艦體を碎かれて激浪の中に沈み行くもの、昨日は三隻今日は四隻と、艦隊に從ふ船の數は次第に減つて行く。積日の過勞心痛と糧水の缺乏腐敗との爲め士卒は日に衰弱悃憊して、眼前に沈み行く僚艦の慘狀を見るも救助するの力もない。惡疫は蔓延して死歿する者日に益多く、各艦乘組の牧師達は病者臨終の慰安と水葬の經文を讀

むとに朝から晩まで忙殺せられて居る。中には全艦員悉く病に斃れて帆索操る者も舵取る者もなく船は風波に弄ばれて遂に海岸に碎けるのもある。病苦の爲め自ら海に投じて死する者は日に幾干あるか判らない。一杯の水を求めつゝ悶死するのもあれば、屍體の始末出來ずして蛆の生いて居るのもある。熱に浸かされて父母妻子の名を呼ぶもあれば、戰爭を呪ひつゝ狂ひ死ぬるのもある。宛として人間の生地獄じや。先度の歐洲戰爭でも色々海上の悲劇を見たが、此の位大規模の慘劇は古來一寸類が無いね。

此の悲慘慘憺たる光景を日夜見聞するグツマン長官の焦慮憂悶は想察するに餘りがある。心腸寸斷とは恐らく斯う云ふ場合を指すのであらうと思はれた。長官の髪の毛が一分間に十本づゝ白くなつたね。斯くて八月も過ぎ九月となつたが慘狀は日を經るに從ふて益甚だしい。格蘭土、愛蘭土の海岸に打ち上げられて破碎したる船だけでも三十隻を越へ、生き殘れる乘員は何の容赦も遠慮もなく悉く敵刄の銹じや。艦の數が減ずると共に長官の白髪は增した。或日のこと長官は珍らしくもスターンウォークに半身を現はし荒れ狂ふ海を眺めて居た。前日來の暴風に海は怒つて山の如き激浪は船を九天に揺り上げ九地に揺り落し、其の度毎に甲板の轢る音が氣味惡るくギイ／＼と鳴る。偶一隻の難破艦がサンマルチンの側を流れ過ぎた。檣は半より折れてサヽラの如く、帆は裂け亂れて古暖簾の如く、彈丸に貫かれ、怒濤に碎かれたる船體は著しく傾いて甲板には多數の屍體が轉つて居る。色は靑褪め姿はやつれて幽靈の如き二三十人の人間が、半ば毀はれたる艦尾船樓の柱に縋り付いて居る。之が最初何百人を數へたる乘員中今生き殘れる總てであらう。サンマルチンが近づくと、微かな聲を擧げて何事か叫びながら此方を向ひて手を合はして居るものもある。多分救助を求めて居るのであらう。生の執着じやね。長官は手摺に寄り掛つてヂツと此の光景を眺めて居た。痩せた靑い顔には幾日か剃刀を當てぬ髯が小穢なく延びて居る。髪は早や半以上白い。眼には希望と光明との輝き失せて絶望と暗黒との爲に鈍つて居る。緊く結んだ唇には最早や勇氣も活氣もない。打ち掛かる飛沫を厭はず蠟人形の如く何時迄も／＼破船を見詰めて居たが、破船は何時しか見へなくなつた。僕は未だ曾てアノ時の樣な、淋しい、憂はしい、悲しい、惱ましい、情けない、ヤル瀨ない人間の顔を見たことが無い。彼は謂はゞ生きた死人であつたね。此の時以來彼は決して自室の外へ一歩

も出なかつた。無論艦隊の指揮は次席の司令官に譲つたのじや。そして七月二十二日に漆黒の髪を帆風に飄らせながらコロンナを出てゝより正に二個月を經て九月二十一日西班牙のサンタンデル港に歸航したる時には、當年僅に三十歳のメデイヤシドニヤ公グヅマンの髪の毛は雪の如く白かつた。

A「大分夜が更けた樣だが、ボツ／＼退却せうか。」

Z「まだ好いさ。我々仲間には晝も夜もあるものか。久し振りだ、朝まで話さうじやないか。今度は僕が何か話す番だね。諸君の人間百面相の談も中々面白かつたが、吾輩は自分で最も愉快と感じたことを話さう。吾輩は階級主義者だから奴隷承認者だ。帝國主義者だから權力尊重者だ。即ち民族だらうが、個人だらうが、優强者は劣弱者を以て自己生存自己發展の犧牲に供し得ると爲すものだ。凡そ宇宙の萬物を比較すれば必ず强弱の差と優劣の別とがある。何故に斯くの如き差別が存するかの理由に至つては吾輩には判らないが、吾輩は唯事實を事實として認むるに過ぎないのだ。吾輩は無神論者で神の存在を知らぬ者だが、假りに宗教家の說く如く宇宙の不可解事は悉く神の意志であるとすれば、此の强弱優劣の差別の存することも亦神の意志である。既に之が神の意志であるとすれば此の差別を極度に發揮することが、神の意志に副ひ神の意志を助成するもので、神に對する奉仕じやないか。之が爲めには優者は劣者を、强者は弱者を、自己生存の爲め、自己發展の爲め、殺すも、擄るも、神より與へられたる優强者の權利であり、神より命ぜられたる劣弱者の義務であるのだ。君等の唱ふる如き自由とか平等とかは畢竟力を有せざる低劣者の泣言に過ぎないんだ。之は議論をする爲めでなく、吾輩の話を進める前提なのだ。

之から話すのは吾輩が地中海王として在位中の出來事じや。吾輩が地中海に君臨したのは人間暦紀元前一四六年、第三ポエニ役の爲めカルタゴの滅亡してより紀元四七六年西羅馬帝國の終滅に至る迄六百餘年間だつた。カルタゴのハンニバルと云ふ男は吾輩の敵で、吾輩は彼の爲めに六十年ばかりもサワラの熱沙中に幽囚せられたが、敵ながら彼は痛快男兒だつたね。我が輩が第二ポエニ役の時羅馬のスキピオを援けて彼を苦しめたのは吾輩終生の恨事で、彼は慥にアレキサンダーに次ぎナポレオンを凌ぐの勇略と才幹を有して居たね。唯彼の爲めには惜しいことに國民に意氣地が無かつ

た爲め、ザマの決戰にスキピオに破られ、爾來諸國を放浪して遂に不遇の裡に毒死して仕舞つた。吾輩はハンニバルに對して何等の恩怨も無かつたのだが、カルタゴ人民の重金主義の町人根性が氣に食はなかつたので、ツイ羅馬を援ける氣に爲つたのだ。

次に出て來るのがクレオパトラさ。アリヤン系の雪の膚にセミチック系の黑い眼を具へたる彼女の美貌は云ふ丈け野暮だが、彼女がアレキサンドリヤの宮殿の奧で大シイザーを籠絡したる時の艶姿嬌態こそ思ひやられるじやないか。彼女がシイザーと共に初めて羅馬に行く時の光景が見物さ。何しろ一方は瘠せても枯れても埃及の女王、一方は權威赫々並びなき大羅馬國の最高執政官だ。其の乘艦の如きは實に驕奢華美の限りを盡したもので、金銀を以て飾りたる龍頭鳳尾の三段橈大軍艦の甲板上には金光燦爛たる樓臺を構へて錦の幔幕を張り廻はし、其の中に御大シイザーとクレオパトラとが金銀珠玉の椅子を並べて安からぬ處を見せ付け、外には五彩の幕を張り、五彩の旗を飜へしたる百隻の軍艦が隊列正しく前後左右を警護して居るんだ。クレオパトラ此日の粧裝は大金剛石を嵌めたる埃及の王冠を戴き、寶石眩ゆき純白の東洋練絹の服を着け、怨むが如く、媚びるが如く、秋波一瞥シイザーを顧みる樣は、眞に所謂眸を回して一笑すれば百媚生ずと云ふところだね。明眸皓齒、柳眉花唇、芙蓉の顏、紫雲の髮、雪の膚に淡紅を散らしたる女二十三のあでやかさは、支那人をして六宮粉黛顏色無しと歎はしめたる唐の楊貴妃の美も、よも之には過ぎずと思はれるね。閉花羞月沈魚落雁と云ふが、沈魚どころか君、クレオパトラを見んが爲め地中海の魚が悉く集まり來りて船の進行をさへ妨げたと云ふ騷ぎさ。シーザーはと見れば此時既に五十七の老年ながら、クレオパトラの一瞥に逢ふと千軍萬馬の間に鍛ひ上げたる鐵の如き彼の體が忽ち海鼠の如くグニヤ／＼となり、緊肅其の物の如き彼の顏面神經がダラ／＼と緩んで鼻下長きこと正に三寸さ。英雄色を好むと云ふが、僞の多い人間も偶には本當のことを言ふと感心したよ。此時のシーザーの顏は人間おめでた顏の代表的のものだらうね。

次はクレオパトラとアントニーの會見の幕さ。シーザーの暗殺されたる後クレオパトラは埃及に歸つたが、覇氣滿々たる彼女は羅馬に臣屬することを好まず、潛かに其の覇權を脫せんと企てたが爲め、羅馬の東部執政官アントニーが事

實調査の爲め小亞細亞のシリシヤ迄彼女に出頭を命じたのだ。シーザーに死別れて孤閨を恨むクレオパトラはアントニーの呼出狀を見るや、玉容中に入るとニヤリと妖艶な笑みを洩らしたね。夫から最高度の美粧を凝らし、最上級の衣裳を整へ、金鼓に銀撥を操り、朱塗の檣に紫絹の帆を張り、儀杖を盛んにしてシリシヤに押し渡つたのだ。二十七の女盛り美容美に艶愈艶だ。彼女は一笑以てアントニーの疑を解き再笑以てアントニーを擒にするの自信を有するもの丶、心中尚ほ幾分の不安を免れずと見へ、欄杆にもたれて打思ひし氣に海面を眺めて居る。美人の憂顔ほど凄艶にして惱殺的のものは無いね。美人の顰とは誠に能く言つた詞だ。此時のクレオパトラの顏なども波に映りたる人間の代表美として人間百面相の一に加へる資格は充分あるね。吾輩は今度こそはと思つて絕へず機を窺つてる中、彼女が何氣なくプツと吐き出したる球の如き咳唾が吾輩の頭の上に降り掛かつたのだ。すると驚いたね、吾輩の護衛兵たりし一匹の大鯛が不埒にも唾と共に吾輩をガブリと呑んで仕舞つたじやないか。鯛の糞に混つて漸く海へ出て見ると、アントニーは既に彼女の爲めに骨も魂も拔かれて仕舞つて居た。其後十年夢の如く過ぎて二人の間には三人の子供さへ出來たが、紀元前三一年羅馬のオクタビアスとアントニーとの間に戰爭が起り、羅馬埃及兩國艦隊はアクチユーム沖で大戰を海交へたのだ。吾輩別にクレオパトラに咧む譯ではなかつたが、羅馬と同盟の誼を重んじ羅馬艦隊を援けて埃及艦隊を打ち破つたのだ。此時クレオパトラも軍艦に乘じて、アントニーと共に戰場に在つたが、味方の旗色惡るしと見るや眞つ先きに逃げ出した。恐怖に襲はれた美人の顏も亦棄てたものではなかつたね。時に彼女は早や三十八の姥櫻、得意のニコ睨めもオクタビアスに對しては電氣が通ぜず、遂に毒蛇に咬まして死んだ。羅馬の豪傑を二人迄も手玉に取つて骨拔餠となしたる叔女は慥に美なる偉女子だつたね。

今迄の我輩の談はホンの餘興で、是からが我輩の痛快談だ。凡そ人間界に於ける世界の帝王中、極度に王權を發揮して人民を自己娛樂の具に供したものは、羅馬の帝政時代就中シーザー系の帝王に如くものはあるまいよ。東洋には殷の紂王とか、夏の桀王とか云ふ斯道の天才があつて、炮烙、油柱などの妙刑を案出したと云ふが、迚ても羅馬のチベリユースやネロには及ぶまいと思ふよ。尤もチベリユースは基督の死刑にサインした男だし、ネロは基督教を徹底的に厭虐し

た男だから、後世の基督教史家の爲めに事實以上に非難されて居る樣ではあるがね。ネロが羅馬の市街を燒き拂つたとか、露臺の上で歌を讀みながら、猛火に燒け死ぬる人民の苦みを見て喜んだとか云ふ傳說はアテにならぬが、初めて基督教の宣傳に來たセントポールとセント、ピーターの體にピッチを塗り、之に火を點じて宮殿の庭の移動燈に代用した位のことは、憎異教徒思想の強烈なる時代とてネロのことならヤリ兼ねないと思ふがね。一體に基督教ほど博愛を高唱するものもないが、基督教徒ほど排他的なものも亦少ないよ。彼等は基督教に反對し、基督教徒を虐待するものを以て最邪最惡の人間と爲し、有ゆる讒誣中傷を逞しふして厭はないんだからね。だから日本人中で彼等に最も評判の惡るい男は耶蘇教を嚴禁して島原の亂を惹き起したる德川家光だらうと思ふね。若し家光が羅馬に生れたならネロ以上の惡人と云はれてるだらうよ。

吾輩は地中海帝國の王位に在りし間、ナポリ灣の風景が頗る氣に入つたので、帝座を同灣カプリ島の綠の洞穴に定めたのだ。日本の海の景色にも特有の美があるが、ナポリ灣の美景は實に好いね。第一に空の色が美しい。アノ澄み切つた深い藍色の空は伊太利の特色だね。紺靑を流した樣な靜かなナポリ灣の水に、刻むが如く、剔ぐるが如く、而かも軟か味と優し味とのある斷崖が屛風の樣に峙ち、其の上には白や赤の家屋が綠の林の間に點在せるソレント半島の景色や裾を碧水に浸し頭を靑空に拔くベスビヤスの噴煙の流れや、扨ては其の麓に五色の豆を撒いた如く連なるナポリの町の眺など全く一大油繪だね。流石に羅馬大帝國第二世皇帝チベリユスースが離宮を造つて半世を過した場所だけあるね。君等はカプリ島の綠の洞穴を見ただらうが、あれは一寸變はつた面白い穴だね。入口と云へば水面上三尺もあるか、ないかで、少し大きな波が來ると塞がつて仕舞ふのだが、中へ入ると廣さ三十間幅十六間高六間と云ふ大洞穴となるのだからね。殊にアノ透澄紫藍の水中に物を入れると、木も金も吾輩等の黑き腕も悉く固有の色を失ふて白銀の光を放つのだから、智慧の乏しい人間達が不思議がつて見に來る筈だ。此節日本でやかましい萬有還銀說などは、あそこに行けば立どころに解決が出來る譯でないかハッハ。波のうねりを見計つて洞口の開いた際に舟を衝き入れる舟夫達の腕前は中々冴へたものだが、乘つて居る見物人は眞つ靑な顏をして居るぜ。吾輩がアノ洞穴中に居を定めて居る間にチベリユスー

スが彼の離宮から隧道を穿つて屢々遊びに來たものだ。殊に夏になると美しい侍女を連れて海水浴に來り、白銀に輝く美人の曲線美を見て喜んで居た。元來チベリユースと云ふ男は流石にオーガスタスの息子だけあつて何となく大きい處があつたよ。若い時は甚だ平凡な人間的明君だつたが、晩年に至つて痛快に帝王權を發揮したね。彼がカプリ島の絶壁の頂に離宮を建てた時などは、何千人の人間がアノ斷崖から海中に轉げ落ちて死んだか判らないのだ。今じや殆んど廢墟となつて僅に殘礎を存するのみだが、離宮の落成した當時は宏壯雄大、實に輪奐の美と結構の麗とを極めたもので、天井から壁から床に至る迄精巧華美なるモザイックで飾られ、羅馬の各領地より取り集めたる珍什名器を以て埋められて居たのだ。宮殿の前に直垂五百尺と云ふ眞の斷崖がある。下には外海の波が岩を嚙み白湍を飛ばしてドウ〳〵と鳴つて居る。如何に豪膽な男でも崖端に立てば、足が慄へて目が廻はると云ふ物凄い處じや。チベリユース大王、罪人を裸に脫いで此の崖から突き落し、自分は宮殿のベランダに美人に擁せられて赤い酒を飲みながら、突き落された人間が掻く樣を見て空中ダンスだと喜んで居たものだ。吾輩も折々は見物に出掛けたが、矢張り空中ダンスよりはクレオパトラの顏を見て居る方が氣持が好かつたね。併しチベリユースの樣な痛快な帝王を今時見ることの出來ぬのは吾輩大に物足らないね。

夫から今一つ痛快だつたのはチベリユースの叉親のオーガスタスがやつた擬海戰だ。オーガスタスと云へば今でも羅馬の明君と稱へられ、當時羅馬市民からは「國父」とまで慕はれた男だが、アレで隨分人間を粗末にしたものだぜ。尤も帝王としては正當の行爲で、敢て彼を非議する譯ではないがね。彼は非常に勝負事が好で、陸上の決鬪競技に一萬人間を殺傷したのに尙ほ飽き足らず、タイバー河畔に長さ三百間、幅二百間の大池を鑿り、之に三千の鬪士を乘せた三十隻の軍艦を浮べて擬海戰をやらしたものだ。擬海戰と云つた處で此頃の軍艦の演習の樣に、空放の屁をひつて追つ掛つこをやるのでなく、眞劍の殺し合をやらすのだから、人間の見る遊戲中最も愉快なものに相違ないね。斯う云ふ遊戲を度々やつて見せて吳れりや吾輩だつて國父樣々と云つてやるよ。

吾輩も招待を受けて此の擬海戰を見物したがね、そりや實戰以上に痛快だつた。大小三十隻の軍艦を各十五隻づゝの

赤白兩軍に分ち、兩軍共に三段橈の大艦を旗艦として中堅に備へ、二段橈の中形軍艦四隻を共の前方並に左右に配し、一段橈の小艦十隻を前衛並に遊軍とし、恰かも將棊の駒を並べた如く整然として對陣して居る。武器は見物人に危害を與へざる爲め弓矢其他の飛道具を除けば刀槍隨意じや。戰士は特に決鬪競技の目的を以て養成せられたる奴隸で、何れも隆々たる筋肉を裸體に誇つて居る。池の周圍には幾十萬の見物人が雲霞の如く集まり、中央正面の棧敷には黃金の帝冠を戴きたるオーガスタスが貴族高官に取りまかれて、一段高き處に泰然として傲然として座を構へて居る。羅馬市民の被れる純白の長きトーガが雪の長堤を築ける間に、婦人の色服が錦の花を織り出して居る。羅馬の空は碧りに晴れて輕風にひらめく赤と白との旗の色が鮮やかだ。陣形全く整ふと開戰の合圖の大鼓がドンと鳴つた。兩軍前衛の小艦の橈がキラリと閃めいて力强く波を打つた。戰士の顏には殺氣が漲り、見物人の手は汗を握つて居る。橈の一搔き毎に兩軍の前衛は次第に逼まつて遂に觸接した。橈がメリ〳〵と折れる。戰士が敵艦に躍り込む。白刄がギラ〳〵と閃めく。紅の血がサツトと流れる。斬られて水中に轉げ込む。突かれて甲板に打ち倒れる。怒號、叱咤、叫喚、呻吟の聲が各所に起る。離れては合し、合して又離れ、追ひつ追はれつする中に、敵艦に船腹を衝き破られて轉覆する船もある。乘員全滅して波上に漂流する船もある。見物人も次第に熱して來た。赤よ、白よ、と叫ぶ聲は百雷のどよめく如くだ。斯かる間に二段橈の中型船が早や戰鬪を始めた。三段橈の旗艦も動き出した。血に染まる赤き水の面には橈の折れ、船體の破片、戰士の屍が雜然として亂雜して居る。小形艦は旣に殆んど全滅して仕舞つた。中形艦は戰正に酣はである。水の血色が濃くなるに從ひ見物人の心は益熱して半狂亂の狀となる。男と女の差別もない。今しも吾輩の眼下で二隻の二段艦が戰ふて居る。舳と艫とを互ひ違ひにピツタリ接着して、兩艦の戰士は入り亂れて格鬪の眞最中だ。色稍や淺黑く筋肉隆々仁王の如き一人の偉男子が全身に血を浴びながら、左に圓形の盾を持ち右に碧血滴る刀を振ひ、瞬く間に三人の敵を切り伏せた。四人目に脇腹を突かれた。彼は飛鳥の如く敵に組み付き共に海中に飛び込んだ。暴風の如き喝采が此の勇士に對して注がれた。

之から兩軍旗艦の決戰だが、どうせ擬海戰のことだ、勝負など話したつて仕様がないから之で中止するが、まア大體

は斯んなものさ。其後吾輩、ベネチヤとサラゼンとの間に戰はれたレパントの海戰や、ベチネヤ艦隊のコンスタンチノープル攻擊を見たが、此の時の擬海戰に能く似て居たね。鷄の蹴合や、牛の突合さへ面白がる人間が、人と同志の殺し合を見るんだから面白い道理さ。併し戰爭も此頃の樣に、船體も見へない遠方から打ち合つたり、毒瓦斯で知らぬ間に殺したりする樣になつては、戰爭の壯烈味が無くなつて仕終つたね。」

A「外が大遽騷がしくなつたじやないか、もう夜が明けるんかね。」

B「まだ三時だよ、アレはポッポ船が漁に出て行くのさ。」

A「馬鹿に早くから出て行くんだね。朝の三時から稼いじや八時間勞働どころか十八時間勞働じや、一體三崎と云ふ處には漁業以外に之と云ふ物產も無い樣だから、住民の大部分は自ら漁業に從事するか、左もなければ直接或は間接に漁師の懷に依つて生活して居るのだらうが、肝心の漁師の生活程度は他の職業の人間に比して大分低い樣に見へるね。生活經濟の拙なのに由るのか、生活經濟の貧しいのに由るのかは知らぬが、若し後者とすれば、寄生者が肥へて本尊が瘠せてる譯で、甚だ間違つた社會狀態じやと思ふがね。」

Z「間違つて居るか居ないかの決論は後に讓り、若し間違つて居るとすれば弱點は寧ろ漁師側にあるんだ。なぜとなら彼等は生活の低きを承知の上で漁師をやつて居るのじやないか。若し低き生活がイヤなら漁師を止めて、生活の高き他の職業を擇べばよいのだ。吾輩日本の法律は知らぬが、眞逆か職業選擇の自由をまでも妨げないであらうと思ふ。彼等にして生活の低き漁師以外の職が執れぬとすれば、畢竟彼等は低劣者なのだ。併しながら若し彼等が自己生活の低劣に甘んぜず、何等かの手段に依つて生活の向上を計る樣になれば、彼等は低劣階級より優良階級へ進むものだから大に歡迎すべきだが、彼等が低劣階級として甘んずる間は低劣者として之を遇するも差支ないではないか。だから吾輩は決して間違つて居ないと信ずるのだ。」

A「君の意見も階級主義者の說としては一應の道理はある樣じや。我々平等主義と雖ども、鯛の尊重せらるゝ日本に於て鰻は如何に力むも價格に於て鯛に及ばぬことを認めてゐる。併しながら若し此處に不當なる制度や不正なる組織に依

つて鰻の價格を低下せしむるものありとすれば、斯かる制度組織を撤去改善することは必要じやないか。」

Z「一體不當とか不正とか云ふことは判斷に依つて決するのだ。然らば之を判斷するものは誰かと云ふ問題が起る。我輩の見に依れば之を判斷するは優良者に在りて云ふんだ。」

A「之は驚き入いた自我說じやが、假りに君の意見に從ふとして、其の優良者とか低劣者とかは誰が決定するのじや。」

Z「一言にして盡せば「力」だ。理窟は何うであらうと、斯うであらうと、力の弱い鰯は力の強い鯨の餌食たることを免れないじやないか。」

A「君の言ふ如く優良者を決するものが、「力」でありとすれば、人間界の國家とか社會とかの組織上に如何なるものが「力」かね。」

Z「言ふ迄もなく支配者の權力だ。」

A「すると、更に支配者とは何ぞやと云ふ問題を解決することが必要だね。」

B「我々に取つて何の役にも立たない人間界の議論なんか止して、夫よりも今日の行動でも相談しようじやないか。僕は今日はA君を城ケ島へ案内したいと思ふんだが、Z君も一所に行かないか。」

Z「僕は城ケ島は度々行つて、今じや岩の皺まで知つてゐる位だから明日は止さう。此節人間の城ケ島廻りがチョイ〳〵あるから其の舟へ便乘すりや樂だよ。」

城ケ島廻はり

A「君、そこの宿屋の下から天幕を張つた小さい舟が出たよ。チョビ髭を生やした男が一人乘つてるぜ。」

B「アリヤ屹度城ケ島廻はりか、鰹釣舟かのどちらかじや。アレに乘つて見よう。アノ船頭非常に愉快な爺さんで、中々奇拔なことを話すぜ。……もう爺さんと客とが話を始めて居る。默つて聞こうよ。」

……………………

客「オイ爺さん、お前さん幾つになるかい、六十は越したゞらうね。」

爺「旦那、俺等アもう駄目でさア、之で丁度だよ。」

客「丁度と云ふと七十かね、夫れにしちやア元氣なものじやね。爺さんは此の土地の生れかい。僕は三崎は初めてだが中々賑やかな景氣の好い處だね。何か土地の面白い話でも聞かして與れんかい。戸數は餘程あるだらうね。」

爺「賑やかだ云つたところで東京に比べりや、新橋の藝者と漁師の女房程違ひますさア、夫でも俺等が子供の時にや穢ない藥屋が五六百あつたばかりじやが、今じや二千もあるでがせうよ。發動が出來てから急に殖へましただ。」

客「新橋の藝者は奇抜だね。爺さん新橋へ藝者買ひに行つたことがあるのかい。」

爺「俺ア藝者は買はねへが息子が東京に居るから偶に新橋まで行くだがね。此處へも東京の旦那がたが藝者を連れて遊びに來なさるから、たび〳〵見ますだ。矢張り東京の女は綺麗だね。」

客「息子が東京に居りや結構だね。博覽會でも見物に行つたかい。爺さん子供は幾人あるんだい。」

爺「俺ア息子は六人ありますだ。東京に居るのから博覽會を見せてやるから、來い〳〵つて言ひますがの、俺等アあんなもの見たつてビツクラするばかりで、ちつとも役に立たねへだ。あんまり評判が好くねへ様じやがせんか。夫に東京つて云ふところは危なくて〳〵俺等が様な田舍の年寄などは獨りで歩けやしねへ。若い奴等が東京々々ツて騒ぐが俺等東京は好かねへだ。」

客「まアさう東京を嫌はずと、博覽會でも見てやりなさい、入りが惡くて困まつて居る様だから。併し六人も男の子が有りや樂みだなア、爺さんなどはもう樂隱居だらう。」

爺「何が樂隱居なもんですかい、子供なんさア幾ら有つたて仕様がねへだ。餓鬼を生んじや、皆んな俺に擔り付けて何處かへ飛び出して仕舞やがる。俺ア今孫を八人も世話して居ますだ。俺ア息子が六人だが、夫でもまだ少ない方で十人位生むのはザラにありますだ。三崎の女は子を産むこと丈は上手でがすよ。斯んなに人間ばかり殖へて此先き何うなるだ、旦那。三崎だけでも俺等が子供の時に比べると四倍も五倍も殖へて居るだから、昔は旦那　仕事の邪魔にな子供は

大概ヤツタものでさア。」
客「殖へるだけ殖へて食ふものが無くなりや、自然に止まるだらう。爺さんが百まで生きてもまだ大丈夫じや。安心しなさい。夫よりも子供を欲しがる人には三崎の娘さんを世話するんだね、僕も二三人頼まれて居るんだが、爺さん心當りはないかいハヽ……。まア少し休んで一服おやりよ。」
爺「有り難うがす、俺ア煙草やらねへだ。」
客「夫じや酒の方はどうかね。」
爺「酒も若い時には一升や二升はやりましたが胃を惡くしてから一切止めましただ。胃にや酒が一番惡るうがすの、胸がドク〳〵して呼吸がつまるでさア。」
客「煙草も吸はず、酒も飲めず、もう爺さん程の年になつちや、あの方も何だらうし、今じや何が一番樂しみかね。」
爺「そりや旦那、幾ら年取つたつて俺アまだ婆さんが生きて居ますだ。俺の知合に八十の時に七十の婆さんを離緣して五十六の花婆さんを貰つた人があるだよ。此道ばかりは立派な大臣さんだつて、我々風情だつて違はねへだ。夫に俺等ア毎日生きた魚を食つて居るだから、體の肥しが違ひますだ。」
客「コイツは失禮を言つたね、それ丈の元氣が無けりや七十になつて艪は漕げないだらう。じあア漁船が澤山入つて居るが、アレに乘つてる澤山の若い人達はどうするんかね。」
爺「ソリヤ俺等の若い時分にや牛部屋つて明しも何にも無へ眞つ暗い部屋へ男も女も一所に寢たもんだが、今じや明過ぎる位な立派な遊廓が出來てますだ。揚屋が五軒に花魁が五六十人も居るでがせうよ。だから舟が澤山入つた晩なざア、一人で二十人も取るてへことだが、之も旦那人助けでさア。昔の何とか云ふ皇后樣はナリン坊の膿まで吸つたてへじやがせんか。幾ら漁師だつてナリン坊の膿よりやキレイでがすよ。アツハツヽ。」
客「ハヽ……、成る程之も當節流行の社會奉仕かね、一人を犧牲にして二十人を救ふてやれば、女郎も犧牲的奉公者で女郎屋も立派な公益事業じや。多くを苦しめて己一人を利する惡資本家よりも遙かに敬尊すべきじや。」

爺「俺等にや旦那の仰つしやる社會ホーキてへが何んな筈で、シホン家か五本家か、薩張り判らねへが、アレが有る爲めに若い者よりや娘を持つ親の方が助かりますだ、困まるのは夏向き東京から來る若い男でさ。東京の男と來ちや仕様がねへだ。俺等ア度々舟に乘せてやるだが朝から晩までオカシな話ばつかりやつて居るだよ。町の娘やカミさんは大分痛められますだ、俺等ア海水浴はデーきらひだ。」

客「東京者は餘程風向が悪いね、併し東京じや「相模女に……見せな」と云ふ歌さへあるぜ。ハ……大分來た様だね、此處は中々景色が好いが何と云ふ處かい。」

爺「こゝが旦那、遊ケ崎と云つてねへ、昔頼朝公が此處で遊ばれたつて云ふんで、名前が付いて居るんだよ。月の名所だつて云ひますが俺等には月よりや團子でさア。三崎の向ふの鼻が甲山ツて頼朝公が甲を脱いで置かれたと云ふんだ。頼朝公は大邊三崎の景色が氣に入つて度々遊びに來たつてへがね。今でも花の御所じや、桃の御所じや、櫻の御所じやつてへ處が殘つて居ますだ。一寸甲を置いたつて云や、ヤレ甲山、遊んだつて云や、ヤレ遊ケ崎、俺等ア生れたつて、死んだつて、八兵衛崎とも、兵助山とも言つちや吳れねへが、同じ人間でも色々値打が違ふもんでがすの。そこに在る藁葺の家は皆んな別莊でさア。夏二月ばかり使ふだけだに、あんな大きなものを建てゝ不斷は閉め切つて置くなんて無駄なこつちやねへか。世間じや金は廻はり持つてへ云ふが、俺等のとこへは一向廻つて來ねへが何う云ふもんでがせうね。俺もコレ生れて七十になるだが一度位廻つて來たつて罰ア當るめへと思ふだに。」

客「ソリヤ爺さん。金つてへ奴はね、贅澤な奴で我々の様な貧乏人の住む小つぽけな家なんかへは中々入つて來ないよ大きな石の門でも建てゝ自働車を乘り付ける様な玄關で、美しい侍女が五六人も三ツ指をついて御出迎へをする様な家でなけりや、福の神は來ないんじや。金が出來たら家を建てるなど云ふケチな考じや、金の方から逃げて仕舞さ。夫から當世じやア第一に齒が丈夫でなけりや駄目だね。砂利でも、レールでも、大砲でも、軍艦でも、ガリ〱噛ぢるだけの力が無くちや、金は來ないよ。今の富豪とか金持とか云ふ連中は、大概斯う云ふ齒の持主なんだからね。」

爺「そいつは旦那、俺等にやモウ間に合はねへだ、澤庵さへ噛めねへ入齒ではね、アッハッハ。だが旦那、此邊の景色

は好いでせう。あの松なッか見たせへ、あんな枝つ振りや作つたつて出來やしねへだ。景色が良くて、水がキレイで、夏ぁ涼しいと來て居るんだから、斯んな好いとか日本中にありやしねへだよ。夏になるとアノ沙原が人間で一杯になりますだ。旦那、釣は好きかね、その邊りで小鰺でも釣つて見ねへか。」

客「道具がありややつて見よう、そこらの舟は皆釣舟かね。」

爺「アリヤ鮑取りでさア、こゝん處は海が淺くて岩が多いから、鮑やトコブシが澤山居りますだ。今度築港が出來るとこゝらの岩を取ることになつて居るだが、金が無へんで困つて居ますだ。去年此の先きの谷へ砲臺が出來ただが、何でも五六年かゝつてペラボウに金が懸つたつて云ふがの、あんなに金があるなら少しこちらへ廻はして呉れりや、三崎の人間は幾ら助かるか知らねへんだ。コリヤ今日はちつとも魚が居ねへだ、潮が引いたの、何處かへ遊びに行きやがつたな。旦那、今日はだめだよ。ズッと廻つて燈臺の下へ行きませう。あそこにや乾度居りますだ。」

客「何處でも宜いが、島の外側を一つ廻つて呉れんか。」

爺「ようがす。旦那、そこに小さな握飯の樣な岩ばかりの島があるだらう。アレが〇〇島つてね、〇〇と云ふ男が初めて黑船が見へた時一番に注進した手柄で、將軍家から褒美を遣はすから何なりと望みのものを申出へと云ふお達しがありましただ。其時アノ島を頂戴したいと申出でたので、其後〇〇島と云つてますだが、松が五六本しか生へて居ねへアンな島貰つて、どうする積つだつたのか今に話の種に殘つて居ますだ。俺なりやセメて城ケ島一島位を貰つたゞに、昔の人は欲が無かつたね。こんな話がありますだよ、昔房州の漁師が何か大邊な手柄をしたてへので、其時鎌倉幕府から褒美として安房一國を遣はすに依つて不足ならば何なり申出でと云つたそうだがね。處が漁師は矢張り漁師で根性が下司でさア。安房一國を粟一石と取り違へ、幾ら漁師だつて粟を一石も貰つたつて仕樣がねへと思つたから、何れ歸へつて親爺とも相談の上返事をするつて家へ歸へただ。夫から色々相談の末粟を一石も貰つたつて食はりやしねへ、米か麥と代へて貰へと云ふことで、翌日恐る〳〵幕府に出頭して、粟一石はとても食ひ切れねへから、どうか米九斗と代へて貰ひたいと云つたてへがの、コリヤ俺が話家から聞いたのだ、アッハッハ。」

客「爺さん中々人が悪いね、舟賃の外に寄席の木戸錢まで取つちや叶はんぜ。どうだい、今度は一つ黒船の話をして聞かさないか。」

爺「米利堅のペソリの來た時は俺アまだ生れたばつかりで能くは知らねへだがの、何でも此の邊りは大變な騒ぎだつたつて云ふだ。俺等の小供の時にも今の學校――それ町の上の森の中に長い屋根が見へるでがせう――あそこに陣屋があつて薩摩や土佐などの士が三百人位代はり合つて詰めて居ただ。其頃の武士てばテイしたもので、漁師が道をドケなかつたつて云つちや、大根を切る様にヅバリとやるだ。俺等ア士を見るてへと二丁も先きから隠れたもんでがすよ。町の外れにや番所ッてへがあつて三崎へ出入りするものは犬の子まで檢査するだ。夜なんざ親の急病だつて町役人の書付が無けりや、容易なこつちや通ふさねへんだ。其頃に比べると今は有り難いもんでさア。其代り昔は呑氣な　もがしたがの。夫から城ケ島の上にも臺場があつて今でも未だ跡が殘つて居ますだが。沖の方を異人の船が通ふる毎に士が繰り出して大騒ぎをやつたもんだ。今から考へると夢の様でさア………

此處の鼻が旦那、城ケ島の安房崎と云ひましての、丁度安房と向ひ合になつて居ますだ。左のゴリ〳〵した山が鋸山で、右の二つ尖んがつたのが八犬傳で名高い富山でさア。三崎の神様が京から來られて初めて船を着けなすつた處ッて云ふだが、其時一所に來られたのは海の神、港の神、風の神、水の神など十二人だつたそうで、一の神様は藤原の何とか卿と云つて今でも氏神様に祭られて御坐らすだ。」

客「爺さん一寸待つてお呉れ、何とか卿じや判らない。案内書を見るからね。

「城ケ島は三崎の南五六丁の海上に在り、東西二十余町、南北五丁余、漁家百戸、六百余人、其の初めて世に知られたるは天平年間（約千百八十年前）僧行基此の島に來りて神宮寺（今の藥師堂山）を建立したるに創まる。其後百二十年を經て貞觀六年十一月一日九州大宰少貳藤原廣嗣四代の孫養盈三崎に漂着し、土民を撫育して尊信を博し其の死するや時人愛惜、祠を建てゝ靈を祀る。今の海南神社是れなり」

成る程判つた。だが爺さん、此の島を城ケ島と云ふのは昔此處に城でもあつたのかね。」

爺「そんなこたあ知らねへだが、何でも昔、里見の軍勢が安房から攻めて來て北條の軍とドエライ軍が此島であつたとか云ひますだが。旦那、アレ御覧なさい。此の島の女の働くことを。婆さんも娘も皆んな磯へ出でて腰まで潮に浸けて稼いで居るだ。三崎の女なんざ朝から晩まで茶でも飲んで。男の噂でも仕ながらブラ〳〵暮らして居るだよ。」

客「アリヤ皆島の人かね。何を取つて居るんだらう。」

爺「鹿角菜と石花菜とでさア。石花菜は何日から何日までは取られねへつて云ふ規則だが、許の解けた時なざア一日に五圓から稼ぐ女がありますだ。何しろ海の草は多いが何一つだつて役に立たねへつてものはねへんだからの。人間ばかりだよ。役に立たねへものが多いのは。」

客「コリヤ猛烈に中てられて耳が痛いね。ハ、、、。城ケ島も外側は殺風景だね、木は唯の一本も無し、唯草と岩ばかりじや。併し波は外海に似合はん靜かだね。」

爺「潮風が強いから迚ても木は育ちましねへ。之で冬になると波は中々荒いからね。御覧なせへ、あの岩の洞穴を。アリヤ皆んな波がブチあけたのだよ、波ほど力の強へものはないだ。でも夏になると海は何時もこんなものでさあ。之でも東京の人は醉つぱらふんだからね。釣に連れて行け〳〵つてへから、道具まで仕度して海へ出ると、もの〻三丁も行かねぇうちにモウ醉つぱらつてゲー〳〵云つてるだ。城ケ島の渡しでさへ靑くなる人があるんだから呆きれつちまうだねへか。○○○○見たいに乘りさへすりやウンウン言つてるだよ。でも旦那は割合へに強い方だ。」

客「褒められて難有いね、此節の若い人はボートの稽古をやるから一體に舟には强い筈だが。」

爺「ソリヤ東京の泥川と三崎の海とア。海の値打が違ひまさア。之が長津呂の燈臺つて云ふだが明治三年に出來ましただ。昔は此處で薪を焚いたもんだが、今の明しよりや薪の方が宜うがすだ。霧の掛つた時などア今のじやちつとも見へねへが薪なら遠方からようく見へるだよ。ホラ今日は魚が居ねへと見へて漁師ア皆んな晝寢して居やがらア。旦那、之からドケへ行きますだ、フグでも釣んなさるか。」

客「僕ア城ケ島へ登つて見たいんだが何處かへ着けて呉れ給へ、上には道が有るだらうね。」

爺「島の上は立派な畠で、端から端まで往還が通つて居ますだ。米の外なら何でも好く出來ますだ。俺ア向ふの漁師村の前で待つてるだから悠つくり見て來なせへ。漁師村あアまりキレイじやねへだよ。」

B「之で城ケ島も大概一廻りしたのじや、もう船から離れようや。」

A「御蔭で人間の馬鹿話を聞きながら城ケ島の見物も出來た。思つた程の島でもないね。併し船頭の爺さんは中々愉快な男だ。矢張り田舍の老人は卒直で飾り氣が無くて氣持の好い處があるね。」

× × × × × ×

三崎から自動車で横須賀に出る。三浦の高臺から眺めると、東は綠の林の間に出沒する東京灣の水を距てゝ總房の山が夕陽に映へて居る。西は藷や南瓜の畠を越へて相模灣が池の如く平かに湛へ、其の向には伊豆の峰が薄つすりとうねつて居る。横須賀の町に入ると、碇泊の軍艦から今しも上陸した水兵の白い服と、工廠から出て來る職工の青い服とで町は埋まつて居る。工廠の船臺には軍縮の犧牲者巡洋戰艦高雄の肋材が赤く銹びて居る。「之まで組立てゝ毀はすのだから惜しいものです」などゝ同乘の客の呟きが聞へる。之を完成する爲めには尙ほ數千萬圓の國民の血を絞ぼらるることを御存じない樣子じや。軍港內には遠からず廢艦となるべき軍艦が旗も立てずに淋し氣に繋がれて居る。彼等も過去の功艦じや、併し時代の推移と進歩とには勝てない。古きものは遠慮なく葬むれよ。軍艦も。人間も。

（了）

時論

法學博士　吉野作造

社會評論雜談

○

友達と社會問題に關する雜談を交へたり、又は新聞雜誌上の評論を讀んだりなどして、其の時々に思ひ浮んだことを順序もなく書き附けて見る。

○

友人某君頻りに露國新憲法中の著名な一ヶ條『働かざる者は喰ふべからず』を持て囃す。成程之は、資本主義の御蔭に依て利潤に生活する者に取ての一大鐵鎚であるのみならず、千古不拔の眞理の最も大膽な而して最も正直な道破であるといへる。實に新しい社會に期待さるゝ正しい組織の依て以て立つ所の基礎の一つは、是非とも此の眞理でなければならない。

併し「働く」とは何を意味するのか。若し之を單に筋肉勞働に限るものとするならばそは餘りに淺薄である。「働く」とは平つたく謂へば社會に必要有益なものを作ることである。客觀的にいへば貢獻である。主觀的にいへば創造である。鹿爪らしくいへば文化價値の創造である。而してその所謂文化價値の單に物質に偏す可らざるは言ふまでもない。

現在までの社會は餘りに筋肉勞働者を酷遇した。資本主義に毒せられたるブルジョア階級はまた餘りに筋肉勞働を蔑視した。此の忌むべき趨勢に對する反動として、筋肉勞働乃至筋肉勞働者を推挽謳歌する思想の一時勃興するは怪むに足らずとするも、其立場の相對的なるを忘るゝことは亦嚴に愼まねばならぬ。尤も、所謂筋肉勞働のみが喰ふ事に對する唯一の權利者でないといふて、徒手遊食の徒が若し依然その不當なる地位を手放さゞらんと試むるならば、我々は大に其の厚顏を責めなければならぬ。斯んな横着者に利用さるゝの恐があるから、寧ろ筋肉勞働のみに權利を認めることにする方が實際世の中を治めるに樂だ。併し樂な方法は多くの場合に於て正しい方法ではない。

我々は筋肉の力の表現たる物的價値と相並んで精神力の表現

たる心的價値の創造をも迎へたい。否、物的被造物そのものをして實は精神力たる個性の表現であらしめたい。「働かざる者は喰ふ可らず」とは誠にいゝ言葉だ。この言葉の中に若些しでも思想、藝術に眞面目に悠遊するの人を脅すが如き分子を含むことあらば、そは憐に眞理の曲解である。

○

「各人の利益は各人最も能く之を知る」といふ諺がある。前世紀初頭の自由主義や不干涉政策は一つにはこの命題を主なる根據とした。今日でも往々にして此の格言に基く一種の自由放任論を世上に見る事がある。說き樣に依ては正しいが又說き樣に依ては飛んでもない間違を生ずる。

何處が痛いのかは病人たる本人が最もよく之を知る。併し其れが何病にて如何の處置を必要とするかは醫者でなければ分らない。世の中の事でも、「解決」は本人の要求を丁寧に聽いて專門家たる第三者が之をきめるといふ場合は普通の現象である。

何時の世にも一知半解の徒は非常に多い。素人鑑定家、田舍政治家、劇通、角通、數へ立てれば際限もないが、概して彼等は其の道の一端を聞いて直に全斑の通を氣取る。是れ虛誇人に衒ふの性分にも依らんか、一つには思ひ掛けない知識の獲得に由て有頂天になるの餘り、自らを過大に評價するの錯覺に陷るのが常人に免れ難いからでもあらう。病人にしても同じ事だ。少し何かを聞きかぢると、やがて醫者をそつち除けにして己れの病氣は何病だ、何の藥を飮めば直るなどと云ふ。斯う云ふのを醫者に對する病人の無政府主義と謂つてもよからうか。

知識が廣まれば專門家を必要とする程度は減ずる。之は疑がない。併し專門家を必要としないと云ふ事と聰明なる先覺者に訊るといふ事とを一所に排斥してはならない。

「各人の利益は各人が案外に知らぬことが稀でない」。その本人を離れて之を知り得る途のないのは勿論だ。昔の專制政治は民衆と沒交涉に民衆の利福を進めんとした所に拔く可らざる誤があつた。民衆の要求は到底之を聽かなければならない。立憲政治はこの眞理に立脚する。併し乍ら民衆の要求は何に依て滿足せられ得るかも亦民衆自身が最も能く知つて居るのかといへば、之は大なる疑問である。痛苦を訴ふる本人が其の何病たるを知らざるが如く、要求の對象の本體は案外にも本人に分つて居ないことは普通でないか。其處で病人が醫者に聽くが如く民衆は先覺者にきく。玆處に代議政治の理論的根據がある。所謂政治否認論は、一面に於て「各人の利益は各人最もよく之を知る」の意味を取り違へたものと謂ふことが出來る。

「各人の要求は各人に就て之を知るの外に途はない」。而かも如

何にして各人の要求を滿足すべきかは、各人自身之を知らないのが常である。玆處に指導の必要が起る。時としてまた強制の必要が起る。孰れにしても、「各人の利益は各人最もよく之を知る」といふ命題より、自由放任論をひき出すことは甚だ危險である。

○

されば云つて僕は自由主義に反對するものではない。僕も熱心なる自由主義者だ。たゞ僕の自由主義は人性に對する無限の信賴から來るのである。

僕は人の性能は無限に發達するものなるを信ずる。今日の無知は必しも明日の無知ではない。故に我々は現在の無知に失望することなく、將來の聰明に期待する所なければならない。而して彼の性能は本來日に〳〵發達して熄まざるものなるが故に、我々の最も心して努むべきは、正しきを知ることよりも、常に正しきを知らんとする向上的態度でなければならぬ。斯の如き倫理的態度を社會上政治上の活動に應用すれば、民衆は現在の無知を自覺して指導を聰明なる先覺者に托 なければならぬ。所謂代議制否認論は、民衆が自ら其現狀に於て聰明[illegible]る所なしと僭稱するに異らない。

選擧とは將來に期待せらるべき自己の發達せる態度を他の人格に求むることである。他人の人格の內容にヨリよき己れを見出すことである。選擧權が人格の自由といふことに根據して文化開發の上に一の重大な役目をつとむる所以は、主としてこの爲である。

人性の發達に對する無限の信賴といふことを外にして、自由主義の倚るべき基礎はない。

○

自分には萬卷の藏書がある、貧弱な書庫ながら一通りの研究に事缺かないと云ふて、圖書館設立の急務に反對した學者があつたとする。昔大阪鴻池家の老未亡人は、どんな貧乏人だつて金銀の一二升有つて居ぬ者はあるまいと云つたとやら。今でも斯んな頭で社會政策を論議する富豪がないとも限らない。自己獨特の偏した體驗に依て社會問題を論ぜられては困る。併し之と同じ型の議論は、プロレタリアートの友を以て任ずる者の間にも少からずあることは言ふまでもない。

獨自一己の體驗を偏重するも間違だが、之を全然無視するも亦然りだ。貧すれば鈍するといふ諺がある。物質の缺乏が如何に人の性能を傷くるかは、唯物主義的倫理派の人々の指摘するまでもなく極めて明瞭な事實だ。人は物　的[illegible]の[illegible]に如何樣にもするものだといふ言葉に多分の眞理はある。併し

世の中には渇しても盗泉の水を飲まずと、命よりも節義を重しと見る人も稀にはある。功名富貴も志を奪ふ可らずとする底の精神主義者も絶無ではないのだ。數は少いが、人間本性の趣く所は結局此方に味方するものではなからうか。少くとも歴史の此點に關する觀方は決して一樣ではない。然るに昨今の論壇には、這般の少數者流の體驗を無視し、凡そ人間はその物的環境に依て性格を作るものだと、輕々に概括して宗教も道德も飢えたる者に取つては馬に念佛だといふ者が案外に多い。

○

明治の文明は物質的文明だといふ人がある。といふ意味は、維新後、俄に西洋の文物を模倣するに急にして、苟くも此方面の一藝一能に秀づる者は、其人物の如何に拘らず拔擢したからである。即ち一藝一能に長ずるを用ふるに足ると爲して、其の道德的品性の如きは殆んど全然顧みなかつたからである。之を極端に誇張していへば、明治の文明は、宛も戰爭の急要に應ずべく張作霖が俄に馬賊を驅り集めた樣なものであつた。當座の役には立つとしても、軈て其間から收拾すべからざる破綻の生じ來るは自明の理である。果せる哉明治大正の推移期に至て其弊發して到る處にボロを出せる事や。

一藝一能に長ずる丈けの者を驅り集めたのでは、本當の文化は作れない。斯んな事は現代の新空氣を呼吸せる者には何も承知であるべき筈だ。然るに這般の同じ誤りは今や新文化の創造を以て任ずる者の間にも繰り返さるゝを觀る。是實に誠に不可解の現象と謂はなければならない。

何を以て斯の言を爲すや。昨今一部の社會運動家の間には、曰く階級鬪爭、曰く直接行動、曰くブルジョア文化の撲滅、曰く何、曰く何と、內容の乏しい形式的標語を弄んで、氣勢をあぐるに少しでも役立つ者をば驅り集め、些しでも之と相衝く者は之を排斥してやまぬからである。何の根據で何い說を吐くやは必しも深く問ふ所でないからである。

馬賊を集めて戰爭に勝つたのでは、支那の本當の統一が出來ない樣に、淺薄なる社會戰に役立つ丈の所謂一藝一能の輩を糾合したのでは、新時代の文化は作れない。明治時代の所謂物質文明の弊に懲りた我々は、前途多幸なる社會運動に再びこの同じ誤りを繰り返さしたくはない。

小題小言

○

軍縮實施の結果ドンを廢めるといふ噂がある。之に就て想ひ出すのは、先年の財界變動の際、僕の識つて居る某實業家の機敏な緊縮策である。彼は經費節減を名として第一に多數の苦學生に出して居つた奬學費目を全廢した。今後の方向に困らうが困るまいが知つた事でないといふのであつた。但し政府筋からの口添に因る定額寄附の二三は其儘であつた。第二に店員の給與を減じた。之が爲に大騷動を起した話はこゝには省く。夫から第三第四と段々に切り詰めて往つたが、最後に斧鉞を加へしめたのが主人公自身の交際費（否遊興費）で、終に毫末も手を觸れなかつたのが妾宅の費用であつた。社會的に視て一番有益なものから削つて、往くといふは、陸軍當局も成金實業家も異曲同巧である。

○

日本程良い事の仕にくい國はない樣に思ふ。ボンヤリして居ると無能だといはれる。少し頭を働かして改革をすると、先きに遣つた事をやつたのに責任を負へと迫らるゝ。アゝうるさい勝手にしろといふ氣にならないのが不思議な位だ。

加藤内閣では國民多年の要望に聽いて今度いよ／＼西伯利から撤兵する事にした。海外に於ける日本の評判の急に善くなつたこと夥しいものがある。然るに國内一部の政客間には「今日撤兵する位なら最初出兵したことが無意義になる。現首相はその頃海相として出兵の廟議に參した。然らば彼はこの無意義な出兵に參した事につき責任を負はねばならぬではないか云々」と理窟を捏ねるものがある。

政治家の責任を八釜しく云ふは、輕卒な行動を愼ましむる爲に必要な事だ。併し之も程度問題であつて、前にやつた事が誤つた結果重大な形勢の變化を來して今や別の行動にでも出でねばならぬといふ樣な事になつたのなら知らぬ事、形勢には前後大した變りはない、只之に處する手段の選擇に於て當初の考の誤を悟り國民多數の要求に潔しく從ふと云ふのなら寧ろ其改變を諒としてやるべきではあるまいか。

政友會に强烈な反感を有する僕が、其の反對黨たる憲政會に義理にも同情を有ち得ぬ一つの理由は、其の屁理窟にある。も少し議論に餘裕がつかなくては、憲政會たるもの何時までも國民多數の支持を得ることは出來まい。

親鸞聖人開宗七百年記念

懸賞募集

趣意書

社會の改造は文化促進の運動により文化の促進は其根蔕を宗教的信仰に置き而も其宗教的信仰は日本民族自らが生める親鸞聖人の民衆的宗教に依らざる可らず、是れ聖人の信仰が我國現代の思想を風靡しつゝある所以也。聖人淨土眞宗を開創せられしより明年は正に滿七百年、本會は此立教開宗を記念すべく茲に左の規定に依り祖徳鑽仰宗義宣揚に關する創作文幷に今後永久に用ふべき宗歌を募集し以て我民衆文化の精華を飾らむとす、奮つて應募せられむ事を望む。

賞金

創作文　壹等　金貳千圓　貳等　金壹千圓

宗歌　壹等　金貳百圓　貳等　金壹百圓

規定

創作文

(一)内容　は一般家庭讀物として(一)親鸞聖人に現はれたる他力信仰(二)親鸞聖人の時代と立教開宗(三)眞宗信徒の家庭等に關し一項若くは各項につき適宜創作する事

(二)文體　は平易にして清新なる口語體

(三)字數　は四百字詰原稿紙二百枚内外

(四)發表　は大正十二年二月中四六版布裝として公刊の豫定

宗歌

(一)内容　は本宗各派の諸種會合の節常に合唱するに適當なるもの

(二)句調(字足)　は隨意たる事但し節を分つ場合は三節以内とす

▲住所氏名　は別紙に書きて原稿に添付し原稿には記入せざること。▲原稿締切期日　は本年十一月末日▲當選文の出版權　は本會所有となる事▲選餘の原稿は返戻す

京都烏丸七條大谷派本願寺々務所内

眞宗各派協和會事務所



山戀ひ

宇野浩二

いつから私がそんなに山を戀するやうになつたか、私は知らない。考へて見ると、極く少年の頃から確にさういふ傾向はあつたとも思へるし、又別の考へ方に依ると、それは多分何處で何といふ山を見初めたのが元ではなかつたらうか、といふやうな記憶がないでもない。すると又ある友達が言ふには、それは君がもう三四年越しに、今の世には珍しいプラトン的な戀をしてゐる、そら何とかいふ名前の藝者だつたね、(さうさう、ゆめ子！）あの女の住んでゐる信濃といふ山國を懷しむ餘りに起つたところの氣持、つまり變態戀愛とでもいふものなんぢやないかね、とそれも無理とは思へないのである。

だが、或秋の日、私が町で偶然友達と會つて、偶然旅行しようかといふ相談が起つて、そして二人でとあるカフエーに行つて、一枚の地圖の上に額を寄せながら、何處がいゝだらうか、何處にしようかといろ〳〵迷つた末に、到頭信濃の國のその小さな溫泉町に決めた時、誰が、どうして、そこで私がさういふ女を見ようと思つたで

あらう。

實際、その時私は山を見ようと思つたのである。「みすゞかる信濃の國は日の本のくぬちのうちにいや高き國にしあれは峯聳え山重なりて久方の雲井に近くとふ鳥もつはさをたわみあらかねの巖ふみ行くけものすら走るをなやみ谷川はくるめき流れ岸高くけつれるか如そはたちて渡るすへなみ路たえしところ多かる……」と勝海舟が歌にもある、私はさういふ未だ私などの見たこともないやうな高い山々に圍まれた、藍色の水を湛へた山の湖のほとりにある、溫泉の湧く町の景色を私の想像の畫に浮かべながら、早速その晩の汽車に乘つて、友達と二人で出かけたのである。

しかし、實際は私の想像の畫とは可成り違つたものであつた。その山と湖の景色は未だ見なかつた時に想像した半分の魅力さへ持つてゐないやうに見えた。湖とその周圍の猫の額ほどの盆地（即ち諏訪の平）を取卷く山々は例へば、醜と女のやうに、悉く低くて何の奇もないのである。アルプスの方は見えないのですか、八ケ嶽も見えないやうですね、御嶽は見えないのですか？　と宿の番頭に聞くと、えゝ、こゝは廻りにすつかり山がありますので、外の山が見えないのです、と彼は何の惜しげもなく答へた。

さういふ譯で、その旅では、目に見える景色から言ふと、想像して來た興味がずつと割引せられた形があつたが、その代りに、それを償うて餘りあるやうな、思ひがけない天惠の魅力が私たちに與へられたのであつた。といふのは、丁度私たちが東京を立つ日までの、その一週間ほどの間といふものは、所謂殘暑の氣候で、而もそれが眞夏の時にも一度もなかつたやうな暑さがつゞいたのであつた。君、どういふ譯だらう。僕は暑さには相當に強い方であるが、この暑さにはあやまるね、仕事も何も手につかないぢやないか、何處か涼しい所へ旅行しようか。——そして私は友達と旅に出たのであつた。私たちを乘せた汽車が飯田町の停車場を出たのは夜の十一時であつた。諸君も知らるゝ如く、それは我

國でも第三流の鐵道線のことであるから、客車とはいふもの丶荷物車の姉さん位にしか當らない窮屈な車の中は、殊にさういふ嚴しい殘暑の頃のことで、晝の暑さの殘りの上に、トンネルを幾つも幾つもくゞるので、自然の暑さと煤煙と、人いきれとで、私たちは忽ち旅に出たことを後悔し合つたほど苦しまされねばならなかつた。だから、私たちはどうしてもそこに行かなければならないといふ譯もなかつたので、幾度か、うと／＼と半分眠つては、暑さの爲に目を醒まして、互に不快さうな顏を見合はしながら、もういつその事この邊で下りてしまはうか、と言つた位だつた。そして私たちは汽車が一つの驛に着く每に、その僅な停車時間を、借り合つてプラットフォームに息抜きに下りた。ところが、汽車の中の暑苦しさに引きかへて、驛々のプラットフォームの空氣の冷たさは、風を引きはしないかと心配になる程であつた。汽車は甲斐の國を東南から西北へと橫切る爲に走つてゐるので、どのプラットフォームに下りても、黑々とした夜の山が目近に聳えてゐて、天には天の河が煙るやうに流れて見える晴れた晩であつた。初めのうち、私たちは、汽車の中は何だが、流石に夜が更けると、外は隨分ひや／＼して涼しいね、多少は山國へ來たせゐだらうか、然し又夜が明けて日が出たら暑くなるんだらうねなどと話し合つた。

汽車が甲府を通る時は未だ夜が明けなかつた。汽車の中の暑さに可成り閉口し切つてゐた私たちは、もう殆どそこで下りるつもりをしてゐた。ところが、そこでは案外大勢の外の客たちが下りてしまつたので、後の汽車の箱の中は、各々の客がみんな腰掛の上で橫になつても十分なほどに空いてしまつた。で、私たちは更に我慢して、乘りつゞけることにしたのである。

私たちは昨夜からの疲れで、それから一二時間の間うと／＼と眠り入つたと見えた。その間に夜が明け放れたのであるが、ふとぞく／＼するやうな淸爽さを覺えたので、私は目を醒まして、君、非常に涼しいね、と傍に寢てゐる友達に向

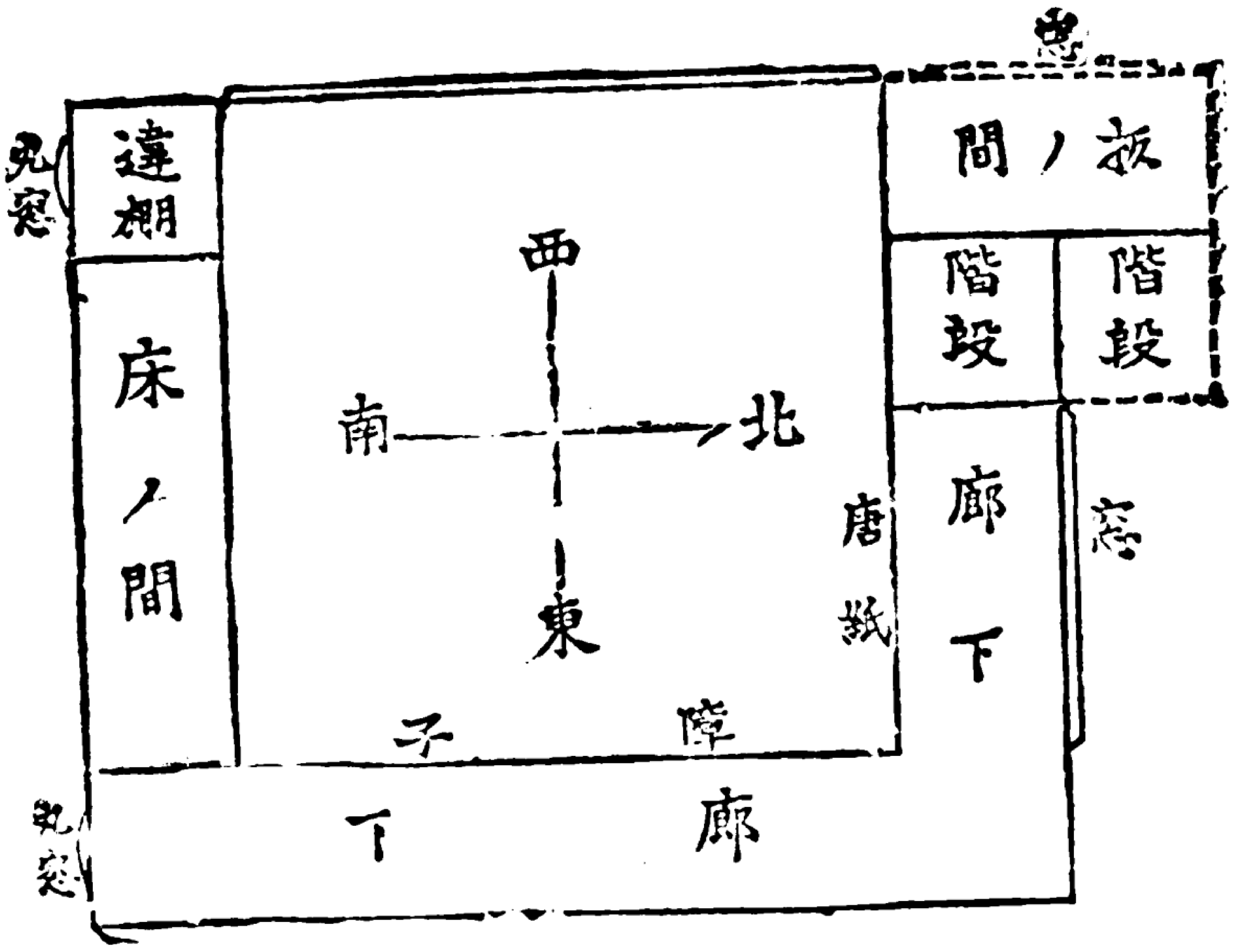
つて言ふと、彼も目を醒ましてゐたと見えて、卽座に、涼しいどころか僕は少し寒いよ、と言つて腰掛の上に起きなほつた。その時、丁度汽車が止まつたので、もうどの邊だらう、と半分獨言ちながら、窓の外を覗くと、「ふじみ」と認めた白い看板の傍に、海拔三千百三十五尺と書いた棒標が立つてゐた。君、もう信州に這入つたんだよ、こゝは海拔三千百三十五尺ださうだよ、と私は何といふ事なく、一種名狀し難い身震ひするやうな感動を覺えながら、友達に報告すると、成る程、流石に山國だね、これは確に山國の寒さだよ、東京とは隨分溫度が違ふね、と彼は着物の襟を搔き合はせながら言つた。

それは、天然の時候にも、丁度暦の上でのやうに、例へば柱暦で昨日まで冬であつたのが、一枚めくるとその日から立春と認められてあつたり、或ひは何月何日に夏が終つて、その翌日の何月何日から秋が立つと言つた風に、はつきりと或日を境にして二つの季節の分れる時がある。恐らく私たちが東京を乘り出して、甲斐を横切つて信濃に向つた夜、偶然にさういふ日が來たのであらうか。つまりその夜を境にして、この天地に夏と秋との交替があつたのに違ひない。だが、僅か一晩の汽車に依つて、夏の東京から秋の諏訪に來ようとは眞逆に想像がつかないものだから、私たちはその一夜明けた廣寒の氣候は、悉く山國のせゐにして考へたのである。折から、昨夜汽車の窓から見た星空に引きかへて、低い山々に取卷かれ、低い灰色の雲に閉ぢられて、その山の湖は沈靜極まる表情を湛えてゐた。寒いね、何處へ行かう、何といふ宿屋がいゝんだらう、實際冬見たいだね、などと話しながら、暫くの間ぼんやりと汽車を下りた驛の前の廣場に佇んでゐた私たちは、淅々と吹く風に俄に寒さを覺えた程である。卽ち山や湖の景色は、想像した半分の魅力をも持たなかつたけれども、それを閉ぢ込めてゐる秋冷の氣か、山國の氣か、更に何思ひも及ばなかつた氣候が私を感動させるに十分であつた。だから、自然、その初めに一見して失望させられた景色さへも、終には、私にどうしても忘れられ

ない印象を與へたのである。

そして、私は二週間ばかりその地に滯在してゐたのである。その二週間の日の大方は、しと〳〵と降る秋の雨に閉ぢ込められた。私と一緒に來た友達は、急に東京に用事が出來た爲に、一週間ゐて私より先に歸つて行つたので、私は一人になつて、毎日毎日窓にもたれて、霧のやうな雨の間を湯の煙が悠々と灰色の空に向つて立ち上つてゐるところの、目の下の溫泉町や、その向うの鉛色の湖や、ともすると雨の爲に隔てられて見えなくなるところの、間近の山々やを眺めて暮した。

私の宿屋は町の東部に當る高臺の、その又山に沿うた側に立つてゐた。而も私の占めてゐた部屋はその家の唯一部屋切りない三階の八疊の間であつた。それは不思議な部屋で、といふのは、その西側の、町と湖水とを見晴らす窓は、高さは略五尺で、幅はその側面全部であるから、正に二間もある、恐らく近代劇の舞臺面でゞも、餘りに不自然だといふ理由で採用せられないに違ひないやうな、尨大なものであつた。神樣は私をして、その山の湯の町と、山の湖の景色と、周圍の山々の眺めとを樂しまさせる爲に、その見えない手で私をそんな不思議な窓を持つ部屋に導かれたのに違ひないのである。南側は一間半が床の間で、殘りの半間に違ひ棚などが造り附けられてあつたが、その棚の上にも亦比較的大きな丸窓が附いてゐた。さて東側は一ぱいに四枚の障子が嵌まつてゐて、その外は椽側になつてゐたが、(それはどういふ心持の人が建てた家なのであらうか?)その椽側の南の突當りの半間の壁にも亦、大きな丸窓が附いてゐた。そして、最後に北側であるが、そこの西寄りの一間は壁になつてゐて、後の一間は二枚の唐紙に依つて外の廊下に通じてゐた。ところがその廊下の北側にも亦、一間と半間との四角な、硝子障子の嵌まつた窓が附いてゐるのである。便宜の爲に、今その部屋と窓との關係を圖にして示すと、



上の圖のやうになるのであるが、更に先の說明に附け足して置きたいのは、(上圖參照)この部屋から下の二階に下りる爲に、唐紙を開けて外の廊下から階段を西向いて下りると、それは五六段で盡きて、そこに一間と半間の板の間があつて、その西側にも亦一つの四角な階子窓があることである。即ちそこは私の部屋である三階と、二階との中間の高さにある位置で、その板の間から三階へとは反對の方向に向つて、階段を五六段下りたところに、二階の廊下がある譯なのである。

先にも言つたやうに、その宿屋そのものが町の一番高見にあつた、そしてその宿屋の中でその部屋は、唯一棟の三階建で、而もその三階の唯一のもので、從つて最も高い位置にあつた。現にその部屋の西の窓から十間以上と隔たらないところに、町の消防の火の見櫓が立つてゐたが、その尖に吊つてある半鐘でさへも、窓に腰かけてゐる私の目より高い位置にはなかつた、何故と言つて、それは私の宿屋の位置から言へば、崖の下に立つてゐたからである。而もその火の見櫓のある所が、町での高臺で、自然最も高い場所であるのだが、私の宿屋は謂はゞその直傍から始まつてゐる裏山の、中腹にあつたと言つた方が、諸君に早く了解されるであらう。然し、それ等の如何なる事よりも、その不思議な窓の多い三階の部屋が、どんなに私の將來の生活に重要な交渉を持つやうになつたか、神樣の外に誰が知ることが出來たらう？

友達が歸つてしまつて、私が一人になつてからの一週間の大抵分も、大抵の日は雨に暮れて雨に明けた。だが、或日雲が悉く影を消して、私の部屋の何處の窓から天を仰いでも、見渡す限り、染め上げたやうに空が晴れ渡つたことがあつた。私は朝起きると早速西の窓を一ぱいに開いて眺め、それから南の違ひ棚の上の丸窓を開き、同じ廊下の方の丸窓から覗き、東側の廊下の欄干にもたれて立ち、さては廊下傳ひに北側の硝子窓を覗き、さうしてぐるぐると、まるで部屋の中に閉ぢこめられてゐる囚人でゞもあるやうに、窓から窓と、外の景色を眺めて廻つた。先にも言つたやうに、その邊からはその國の高い山々は、その町の周圍にある近くの低い山々に遮られて、一つも見えなかつた。だが、それ等の近くの山々さへ、これまでは雨に隔てられて、或ひは全く見えなかつたり、或ひはぼツと烟つて見えたり、悉く隨分遠くにあるやうに見えたものであるが、その日は恰もそれ等の山々が秋晴と共に化粧して、改めて私のそれ〳〵の窓に挨拶に來たかと思はれる程、丁度女の襟足のやうに、草や木や森やで飾つた山の膚を青空の中にくつきりと浮き立たせながら、出來るだけ近くに迫つて見えるのに私は驚いた。

南の丸窓から半町と離れないところには、土地の神であるところの、明神の杉の森が、幾日か雨に洗はれた後の、すが〳〵しい綠色で、青空の中にこんもりと繁り立つてゐた。こゝからは、あの森があるので見えませんが、あの森の向うの邊に、湖を圍んでゐる山が一と所切れたところがあります、あの切れたところにぽつちりと嵌め込んだやうに富士山が覗いて見えるのであります、と心なき宿の番頭も、この久し振りの秋晴れに、心が愉快になつたやうな言ひ方で、私の傍に立つて、一つの丸窓から私の顏と並べて外を見ながら言ふのである。この山は、と彼は東側の廊下の欄干にもたれて、私たちの立つてゐるところが既にその山の一部であるところの、段々畑になつて東の方に聳えてゐる山や、その山と重なつて少し右寄りに見える、滿山を常盤木らしい木で蔽はれた山や、その山とかの山との間に、一寸頭を覗かして

ゐる丸い恰好の山やを指さして、この邊のにみた低い山ですが、その二つ三つ向ふに隱れてゐる奧の方では、それでも五六千尺はある山もあります、もつともこの邊が既に海拔三千尺といふ所ですから……へ？　八ヶ嶽ですか、さうです、八ヶ嶽が丁度この山の向うの見當になるのですが・こゝからは見えません、けれども、八ヶ嶽なら、停車場のプラットフォームに行きますと、その頭の方がすつかり見えます。……

彼は又北の窓に立つて私に言つた。——こゝから目の下に見えるのは、さつとこの町の三分の二でせうか。彼方にも彼方にもさうですな、ざつと二百本はありませうか、立つて居ります赤い煙突は、みな製糸工場の煙突です。彼方にも此方にも、普通の家では屋根に石の置いてありますのは、この地方の名物になつて居ります位で、諏訪の名物、娘天下にさぼしに、屋根の石と申します。この向うの、山の麓の邊に一かたまりの大きな森がありますでせう、あの邊には殊に澤山さぼしが居ります、さぼしといふのは淫賣婦のことでございます。その上の、丸い形をした、大きな山かお見えになりませう、あの向うに和田峠といふ峠がありまして、昔の中仙道の峠の一つで、あそこを越して、上田とか、小諸とかへ通じるのであります。……

しかし、何と言つても、西の窓の眺望が最も私を喜ばした。そこからは鹽尻峠も見えるのである。その峠の下の邊に、湖が一段と細く見えて光つてゐる邊から、遠江に流れる天龍川が始まつてゐる、と番頭は說明するのである。湖の西を限つてゐる一列の山脈は、見たところさう高くはなささうであるが、木曾はあの山の向うの方であらうと聞くと、その山の向うにある山又山が想像されて、幾ら見てゐても、幾ら見てゐても、飽きない景色であつた。

ふと、私はその湖の西に屛風のやうに立つてゐるところの、一列の、連つてゐるやうな低い山脈の空に、同じやうな不等邊四角形をなした、二座の山の頂が覗いてゐるのを發見した。明らかにそれ等は湖水の彼の山のつゞきでないのみ

ならず、その山脈と彼の山とでは、私の見てゐる所から湖水の山への距離よりも、その三倍以上も離れてゐると見えるのみならず、高さに於いても恐らく五倍は違ふと思はれるのみならず、難かしく言へば、多分その成立も、地質も、悉く選を異にするものゝやうに思はれた。そして、それ等の二座の山自身も、私の方から見て、並んで立つてゐるやうに見えるものゝ、然し可成りの距離を隔てゝゐるに違ひないのである。が、二つが二つとも、その湖水の山の後（うしろ）から現してゐる部分は、多分肩から上といふよりは、人の姿で喩へて言ふと、眉か目かの邊から上を、一寸覗かしてゐると言つた方が適當であらうか。が、更に注目すべき事は、それは私の部屋の六つの窓から見えるどの山でもが、未だみな草色か、青黒色か、緑色か、或ひは幾分黄色かをもつて彩られてゐるのに引きかへて、その二座の、その頂の不等邊四角形の姿を覗かしてゐる山だけは、最早や銀色の雪を被つてゐることであつた。それに、山に素人である私にも、確に一萬尺前後の山に違ひないと思はれた。で、早速、宿の番頭にそれを指さして聞いて見たところが、さあ、と彼は流石に氣の毒さうに、わざと首を傾げる恰好をして、何といふ山ですか、確に高い山のやうですが、存じません、多分日本アルプスの續きでせうか、と言つたばかりである。あの邊は木曾でせう、と私は右手に見える高山の方を差して、では、木曾の御嶽でもないんですか、と重ねて聞くと、さあ、さうであるかも知れませんな、と彼はもう一度首をひねつて、しかし、御嶽はこゝからは見えないやうに聞いて居りますが……と言つた。君は何處か他所の國から來てゐるのですか、と私が聞くと、いゝえ、私はこの町の生れの者でございます、と彼は答へた。

私は、この生れ國の、而も生れてからそこに住みつゞけてゐながら、己（おれ）の町から朝夕見えるところの、そんなにも顯著な山の名を知らない男に對して、一種の憤りをさへ感じた。が、一人になつてからも、私は一時間も二時間も、その西の窓の敷居に腰をかけたまゝで、やつぱり動かずに、湖水と、湖水の西を限る山々と、その山の向うに見える雪を被

つた二座の山を見てゐると、そんな憤りの氣持などは忽ち消えてしまつて、心が次第に澄んで來るのを覺えるのである。私は例へば長い間知らぬ他國をさ迷うてゐた旅人が、久し振りで、計らず古里を望んだ時のやうな、何とも名狀し難い懐しさが胸に込み上げて來るのを感じた。

が、實は私は都會生れで、當時三十歲で、而も生れてから一ケ月以上都會を離れて住んだことのないものであつた。而もその最近の五六年間の私の生活といふものは、眞に「餓」と壁一重隣同志の住居をしてゐたと言つても、何の嘘ではないやうなそれであつた。けれども、どんな慘めな生活をしてゐても、そしてそれが私のやうに都會生れの者でなくても、人生の二十歲三十歲といふ言はゞ壯年時代にあつては、人は都會とか、即ち人事とか、情事とか、金錢の事とか、さういふ事の外に興味を持たぬものである。そして私も實際その一人であつた。そして恐らく私と同年號の諸君も、私と同じ思であるに違ひない。たとへ場末の、どんな陋屋の屋根裏でゞも、三度の食事を二度に儉約しても、都會で樂み、都會で苦み、都會で働き、都會で報いられたい、自然とか、山とか、野とか、田舍とか、そんなものは悉に鬼く喰はれてしまへ!……

だが、山とは何といふ不思議なものであらう。生れ古里に山や田舍やを持つ人ならば兎も角、私のやうに都會の塵の中に生れてそこに育つて來たものにさへ、そして恐らく、これは私だけの特別の例ではないだらうと思ふ、どうして山といふものがそんなに魅力をもつて現れるのであらうか。實際、秋か冬かの晴れた日、東京の山の手の町を步いてゐる時、突然家と家とに挾まれた町の彼方の地平の上に、秩父や日光や或ひは富士や箱根やの紫色の山影を眺めて、はツとして足の步みを緩めない人は少ないだらう。この心持は、私が近頃讀んだ或歐羅巴の學者の說に依ると、私たちの先祖の、原始の人たちが山に親んだ心が、代々の子孫に潛在意識となつて傳はつたものであるとのことである、として見れば、

私がその宿屋の西の窓から、湖水の向うに見える雪の山を望んで、久しく別れてゐた古里を見た時の懷しさに似てゐると言つたのは、諸君を欺く言葉ではないのである。そして、その後知つたことであるが、その時私が見た山は確に一萬尺前後の山だつたので、して見ると、私が生れて、そんな高い山を見たのは、富士山の外には、始めての驚きだつたのである。

その時、山と、そして初めて、ゆめ子といふ、當歳の子を持つてゐる、その町の藝者を私は見たのである。

それから二ケ月ほど後、此度は私一人で、朝の八時に飯田町を乘り出したのである。この二ケ月は私に、かの山と彼女とを戀ひる心を酒のやうに醱酵させた。實はこの前の時彼女を見た度數は三四度以上ではなかつた、而もそれは時間に延べて十時間以上ではなかつた。而も彼女は至つて無口で、それに、私だつて決してそんなにお喋りといふ方ではないので、だから、その間彼女と私とが交した言葉は、恐らく蓄音機に仕込んだとて、二枚以上の盤を要しない程に違ひなかつた。

彼女は色が黑くて、前髮と島田とがいつも傾き加減になる程に、髮に癖があつて、しやくれ顏で、そして赤ン坊さへ持つてゐる、等、等、とその缺點の方を擧げるなら、多分その美點の三倍も數多くあるのである。けれども、私は小學教師のやうなことを言ふが、人はその見える形がどんなに惡く造られてゐようとも、その內なる心の現はれてゐない顏や形といふものはないのである。痩せて、背が高くて、いつも俯向いてゐる彼女の顏形の全體の印象は、一口に言ふと、私に浪曼的に見えた、そしてそれ等の全體の浪曼的なのを裏切る唯一つの點は、彼女の口元に違ひなかつた。(神よ、彼

女を、そして私を憐み給へ！）

その後だん／＼に私が知つたことであるが、彼女は、私が生れてから今日までに知つた總ての男や女やの中で、恐らく今の世で女の腹から生れた人間の中で、彼女ほど他人の噂と併せて自己の吹聴をしない人を、私はまだ見たことがない。彼女は沈默、それは詩人の最後の形であるところの沈默、そのものゝやうに私には見えたのである。それに就いて、人は斯う言ふだらう。――それは私が私のやうな氣質をもつて、彼女に戀した爲に、戀人の目の故にさういふ風に見えるのであらうと。或ひは五分通りはさうかも知れない。だが、私の考では、由來戀といふものは、戀の眼目はその對稱にあるのではなくて、その人自身にあるのだから、それでよいのではないか。

だから、私はその二度目の旅に依つて、決して彼女をどうかうしようと計畫したのではないことは、神様も照覽されるところであらう。抱え藝者ではなく、藝者屋の娘である彼女をどうして身受けしようとか、どういふ男との子であるか、その生れた赤ン坊ぐるみ貰ふ相談をしようとか、それどころか、せめて彼女ともう少し密接な關係を持つようにでもならうとか、さういふ考は毛頭持つてゐなかつたのである、唯彼女を見たかつたのである、彼女とそして山を！　だからこそ、私は朝の八時の汽車を選んだのであつた。その時、私は、あの幾つとなく通らねばならぬところの、小佛や笹子の長いトンネルの、煤烟で蒸される樣な苦しさも、それ等の峠の向ふにある國を思へば、寧ろ喜びであつた。

果して、笹子のトンネルを通り拔けたところで、汽車の中にこもつてゐる、殆ど並んで腰かけてゐる隣の人々の顏をさへ辨まへられない程の濃い、息苦しい煤烟を追ひ出すために、人々と共に爭つて窓を開いた私の目の前に、然し容易に消え去つてしまはない白い煙の絶え間に、そしてそれが次第に晴れて行く中に、見渡す限り秋らしく高々と澄み切つた空の下に、池の底でもさらへたやうな形をして、廣々と、甲府の盆地が廣がつてゐるのが見渡されたのである。そし

てその盆地をめぐる南の山々の後から、富士山がいつもながらの恰好をして、肩から上を現してゐた。ところがふと、そこから轉じて西の方、多分私の目指す信濃との國境とも思はれる方の山々を眺めた時、私は再び口の中で驚喜の聲を上げた、それは諏訪の宿屋の三階から、湖水の西の山の後に眺めた二座の高山の印象に似てゐた。

それは文字通り、甲斐の國の屏風のやうに見えるところの、所謂甲斐ケ根の山脈に違ひない。その時私はまだそれ等の山の名前を知らなかつたが、私の先づ目についたのは、それ等の高い屏風狀の山脈の上に、一際高く、雪を被つた三座の山が、南から北へと次第に高さを增して、並んで聳えてゐる景色であつた。それはその一ケ月程前に、私が銀座の繪草紙屋から買つて來て、下宿の茶色の壁にピンで張り付けて樂んでゐたところの、歐洲アルプスの山の景色に似てゐるのに私は一層興味を引かれた。その寫眞の中では、右の方からユングフラウ、メンヒ、それからアイガアと三座の山が、丁度その時私の目の前にある甲斐の山の景色のやうに、並んで見えるのである。こゝでユングフラウに相當するのは何といふ山か、アイガアに比敵するのは何といふ山か。物徂徠の峽中紀行に、「農馬、農牛、鳳凰、地藏、駒嶽次第に邐列す、其二農の上に巖然たる者之を白嶺と謂ふ、之を望めば稜々乎として畏るべし、窮髪の巓冬時毎に雪ふる、只峻々乎として草木之を翳獻する有る莫きを以てか」とあるのが、この光景ではないか。そんなら、あの山は農馬か、農牛か、鳳凰か、地藏か、駒嶽か、——後で知つたのであるが、この三座の山は南から順に、農鳥山、間の岳、北岳といふ名で知られてゐる、北岳即ち甲斐ケ根で、この山こそ、富士山を除いては、日本本州第一の高山なのであつた。

私はそれから富士見に至る迄の三四時間といふもの、客車の昇降口の臺の上に始終出て行つては、そこの左右の扉を開けては外の景色を眺めたので、二三度も車掌に注意された位だつた。やがて汽車が甲府を過ぎて、日野春あたりにさし掛つた時、私の左の窓に現れた景色は再び私を有頂天にまで驚かした。それは、私の汽車の走つてゐる線路の左手は、可

成り急な角度を以て目の眩むやうな大きな溪谷をなしてゐるのだつた、反對に言ふと、つまり私の汽車は大溪谷を仕切つてゐるところの、迚も人工では思ひも及ばないやうな天然の土手の上を走つてゐる譯で、その土手の傾斜の盡きたところ、即ち大溪谷の最も底を、一條の急流が流れてゐるのが、汽車の窓から見下ろされるのである、地圖に記するところに依ると、それは釜無川である。ところが、汽車の走つてゐるその私たちの場所から、釜無川へは、可成り急な傾斜ではあると言ふものゝ、その間には畑もあり、所々には小さな村落もあり、所詮、大なる天然の土手の側面といふに過ぎないが、それが釜無川で切られて、さてその向う岸はといふと、それはもう傾斜でもなければ、大なる土手でもない、正に直立した、と言つても殆ど誇張ではないところの、崖といふか、切立てといふか、兎に角嶮岨極まる山が棒を立てたやうに、或ひは屏風を立てたやうに聳り立つてゐるのである。私たちの走つてゐる汽車の位置が既に、先に言つたやうに可成り高い所であるが、その谷底の釜無川は海拔から言つても決してそんなに高い所ではない、ところで、その彼岸の山は、そこから露出しに、棒のやうに一萬尺の高さに聳えてゐるのである、それは正に甲斐駒ケ岳なのである。

甲斐駒ケ岳は九千七百八十何尺の山である。汽車の窓から見ると、駒ケ岳の後左手に、それより高くはあつても、決して低くないところの山々の頂が、二つも三つも覗いて見える。多分それは鳳凰、地藏、奥千丈などといふ山々であらうか。その他、私の目の前に、その山を先頭にして、夕日を背にして黒々と、奥へ奥へと南につゞいてゐる山々は日本一の白峰山脈に違ひないのである。だが、その時私の目は、時々他の方に目移りしながらも、絶えずその全山を私たちの目の前に露出してゐる、驚くべき駒ケ岳にかへつて來るのであつた。駒ケ岳は恰も舞臺に出てゐる團十郎のやうに見えた、外の諸々の山は悉く彼の影に消されて、ひとり彼だけが、駒ケ岳だけが觀客の目を引付けるのであらうか。が、何は兎もあれ、駒ケ岳は外の山よりも私たちの最も目近に、その怪異な姿を丸出しにして突立つてゐることも事實であつ

た。彼女はその麓を釜無川に洗はれながら、一萬尺近いその異様な塊を、根元から私たちに露出して、その最早や行から上を雪を被つたいびつになつた頂は、恰も隣國信濃の國を山々の頂を越えて覗き込んでゐるかとも見えるのである。

丁度時刻は夕方で、彼女の麓の釜無川の此方の岸の、彼方此方のぽつん〳〵と撒き散らされてゐる家々からは、薄紫色の烟を立てたるものもある。そして、あたりが段々暗くなつて行く中に、釜無川だけは、餘程の急流と見えて、うね〳〵と白墨の跡のやうに一筋白く眺められる。だから、駒ケ岳の大部方は、その他の山々と共に、私たちから見るところは入日の反對の側にあるので、最早や夕方らしい暗い影に染められてゐた。然し、その雪を被つた頂は、山々の上に突出てゐる爲に、夕日を眞横に受けて、或所は眞赤に見え、或所は眞紫に見え、或所は眞靑に見える。日を轉じて左手の過ぎ去つた方を振返ると、駿河との境の屛風山脈の一列が眺められたが、それは入日を斜に受けて、悉く淡い紫色に彩えてゐる中に、それ等の山を臺にして、富士山が輝くやうな黄色に染め出されてゐた。

その日の暮に、私は僅十日餘りしかの馴染ではないが、それが最早や第二の古里であるやうな氣のする町に着いて、私の最も愛する例の宿屋の三階の部屋の客となつたのである。日はもうすつかり暮れた後で、私はその部屋に通されると、着物もあらためない前に、早速西側の大きな窓に立つて、暗い外を眺めたが、遠い湖水も、湖水をかぎる山の屛風も星空の下に唯黑々と透かして見えるだけであつた。だが、直目の下の町は、東京の町と比べると、その火の數は五分の一にも十分の一にも當らないが、然し周圍がそんな眞暗な中だけに、彼方此方に火影が點々と光つてゐて、それは私に泣きたい程人懷しい心持を覺えさせた。それにそれ等の火影の割合に、多分その私の宿屋のある近くに溫泉の共同浴

場があつたり、色町があつたりするからだらうか、人の行きかふ氣配や、何とも分らぬ色々な雜音や、そして彼方此方に紘歌の聲やが、隨分大勢の人々の込み合つてゐる場所のやうに思はせた。藝者ゆめ子はどうしてゐるだらう、と私は思出さない譯に行かないのである。

さうして、私は此度はその町に二ケ月近く滯在してしまつたのである。その間、私はなるべく自分で自分を制して、ゆめ子とは二日に一度位づゝ會ふことにしようと思つた。幾ら藝者稼業をしてゐるものとは言ひながら、朝からとか或ひは晝間からとか、そんなに早くから彼女を呼ぶことはどんなものか、と私は躊躇するのである。たとへそれが唯の抱え妓の身分の者であるとしても、朝寢も必要だらうし、多少はぶら〳〵と怠ける時間も入るだらうし、又髮を結つたり、湯に這入つたりする暇もなければならぬだらう、まして一軒の藝者屋の、屢々留守にする養母に代つて、一家を取締らねばならぬ彼女は、隨分忙しいだらう、と私は遠慮するのである。まして、當歳の赤ン坊を抱えてゐる身とすれば、夕方に一度子に乳を含ませて、次には子が目を醒ます十二時前には、彼女が歸つてゐる方が便利であらう、と私は推察するのである。だが、さうは思ひながら、彼女を呼ばぬ晩は、私は本を讀んだり、物を書いたりする自分の仕事がどうにも手につき兼ねて、私は幾度立上つて、私の部屋の東西南北に附いてゐる、六箇の窓を順々に覗いて廻つたか知れない。すると、曇つた晩も、晴れた夜も、黑々とした山や湖は、それ〳〵の窓の外に、同じ表情をして私に眺められた。さて又、今夜は昨夜辛抱した代りに、彼女を呼ぶ番だと思ふ日は、晝飯を食ひ終つた頃から、私はそわ〳〵して落着かぬ思をした、すると、私は又立上つて、やつぱり六箇の窓を順々に覗いて廻るのが常であつた。それが故か寒さも次第に嚴しくなる頃であつたから、私は窓を覗いて、身體が寒くなると、溫泉の湧いてゐる宿の風呂場に飛び込んだ、そして風呂を出ると又窓を覗いた。その頃は大抵毎日空が高く晴れてゐるので、西の窓から見える湖水を限る屛風山脈

の彼方には、例の二座の高山が始終姿を現してゐた。私はその時は不完全ながら、信濃の國の地圖を用意してゐたので、それの方角と自分の部屋の方角とを合はして机の上に置いて、その山の見える方向を色々と研究して見た結果、どうやらその向つて左手に見えるより高い方の山は、正に木曾の御嶽山であると信じられ出した。右手に見える今一つの山は、と次いで色々と調べて見たら、どうしても位置が少し違ふやうであるが、同じ木曾の駒ヶ岳に當るやうに思はれ出した。しかし、地圖のその見當には、その外にそんな高い山の名前は出てゐなかつたのである。そして私はいつともなくその二座の山を御嶽山と木曾駒ヶ岳であると思ひ込むやうになつた。そしてその御嶽山と駒ヶ岳の頂は、私がこの前見た時と同じく、私の窓から見える範圍は悉く雪を被つてゐるのに變りはないが、それが一日一日と氷のやうに冴えた色に見えて來るのである。まるで、それは普通の土や岩やの山ではなく、氷で出來た山のやうに、而もその氷の頂が、誰かゞそれを何かで毎晩々々、人の知らぬ間に磨きをかけてゐるかと思へる程、一日は一日と氷よりも青く、叉より物凄く冴えた色に澄んで來るのである。

或日、一人の未知の青年が私を尋ねて來た。青年と言つても、私と二三歳しか年下でない、二十七八の、鼻の下に髭などを貯へた男であつた。彼は私がこれ迄に書いて時々雜誌などに發表してゐた小說を讀んでゐた者らしく、その小說の作者が同じ町の宿屋に來て滯在してゐるといふことを聞いて、會ひに來たのである。宿の女中が最初、斯ういふ方がお目にかゝりたいと言つて、お出でになりました、と持つて來た名札を見ると、それには肩書も所番地も何もなくて、唯、西向觀山といふ妙な姓名が認めてあつた。

「あなたの名前は何といふんです、變つた名前ですね？」と私が聞くと、

「はい、にしむかひと言ふんですが……」と彼は房々した髮の毛を、手入れもしないで無雜作に分けてある頭を恥づ

かしさうに抑へながら言つた。

觀山といふのは多分雅號だらうと思つたが、私は名前に就いてはそれ以上聞かなかつた。その外に私が聞いて見たり、彼が話したりしたところに依ると、彼は甲府の生れで、印判を刻むことを職業とするもので、現に甲府で彼の父は今でも印判屋を營んでゐる、彼も三四年前まではこの町で同じ業をしてゐたのであるが、一向繁昌しないばかりか、自分一人を養ふことすら覺束なくなつたので、その後半年ばかり電氣會社の養成所のやうなところに這入つて、今ではその町の變電所に勤めてゐるとのことであつた。

部屋の眞中には、その國の習慣で、四角な大きな炬燵が切つてあつて、私はいつもの通りそれの東側に座を占めて、その中に足と手を入れて坐つてゐた。例の西側の尨大な窓には四枚の障子が嵌まつてゐて、その四枚共に可成り大型の硝子が仕込まれてあつた。だから、私の坐つてゐるところからは、炬燵にあたりながら、外の景色が見晴らせるのである。そこへ女中の案内で西向觀山が這入つて來たので、私は彼に私と向ひ合つた西側の座に坐ることを勸めると、彼は遠慮して決してその方へは行かうとしないで、南側の、而も炬燵から四五寸離れたところに、きちんと行儀よく坐つたまゝなのである。そして彼は前に言つたやうな、一通り自分に就いて話したり、それから私の小說に就いて尋ねたり、或ひは自分の仕事の話をしたりしたのであつた。彼の仕事に就いて、と言つても、それは彼が現在勤めてゐる電氣會社のことではなく、彼の子供の時分からの仕事であるところの、そして今でも暇さへあるとやつてゐると言ふところの、私などには餘りよく分らない、印判に關したことであつた。だが、私が感心したことは、彼がその印判に就いて話す時は、例へば私にして言ふと、文學とか藝術とかの話をする場合のやうに、何か有難いものとか、何か心を喜ばせるものとかの話をする時の眞劍さと、喜ばしさとが見えることであつた。だが、どちらかと言ふと彼は眉毛が思ひ切つて太く

て、鼻の寸が少し短くて、全體の印象は人に、謂はゞ頓狂な感じを抱かせた。

「まあ、そこぢや話をしてゐても、僕の方で落着きませんから、兎に角もつと傍に寄つて、形だけでも炬燵の中に足なり手なり入れませんか。ね、どうか、どうか。そこぢや、お茶を入れても手が延びませんから、」などと私は幾度も、幾度も彼に炬燵の傍に近づくことを勸めると、やつと、來てから一時間以上も經つた時分に、

「では、御免蒙ります」、と彼は叮嚀に頭を下げて、炬燵の南側の座にいざり寄つて來た。その時、ふと西側の窓の障子の硝子越しに、それはもう、町ではまだそれ程ではなかつたが、近くの山といふ山は、どんな低い山でも大方雪に見舞はれてゐた時分のことだつたので、彼はそこから見える可成り廣い景色に驚いたらしく、「ほう！」と口の中で小さな叫び聲を上げて、「成る程、こゝは思つたよりも高いですな、」と私に向つて言ひながら、「一寸失禮します、」と坐らうとして又立上つて、窓の傍に立つて行つた。で、私も彼につゞいて立つて行つた。

　それは幾度も言ふ通り眞西に向いてゐる大きな窓のことだから、毎日午後になると、西日が部屋の中に一ぱい射し込んで來るのである。だから、夏の日の爲に、その窓の外にはその左側の柱に仕掛けてある一本の綱を卷いたり延ばしたりすることに依つて、日を遮る爲に屋根型の日覆が下りるやうになつてゐる。私は冬のどんな寒い時でも、部屋の中に日光の射し込むのが嫌ひな性分なので、先程から、太陽の位置に從つて少しづゝその日覆を下ろしてゐたのであるが、今、客の觀山と一緒にその窓から外の景色を見る爲に、柱に取附けてある綱を卷き上げた。すると、くる／＼といふ滑車の音と共に、日覆が屋根の軒に卷き込まれて、見る見る、町と、湖水と、湖水の西を限る屛風山脈と、そしてその後に氷のやうな鋭さを以て突つ立つてゐる二座の高山の姿とが、靑空の下に、きら／＼と目を射るやうな眩しさを帶びて現れた。」

「やつ、御嶽山が見えますね！」とその時、思ひがけなく、斯う觀山が叫んだ。

「やつぱりあれは木曾の御嶽山でしたか。」と私も思はず嬉しさうに叫んだ。「あの左手の方がさうでせう、そして、そしてあの右手の山は駒ヶ嶽ですか？」

「いえ、あれは乘鞍だといふ話です。」と觀山はその太い眉毛の下で、雪の眩しさに目をちら〳〵させながら言つた。それを見てゐる彼の樣子が、如何にもいそ〳〵と嬉しさうに見えるので、

「あなたも山が好きですか？」と私が聞くと、

「えゝ、私は大好きです。私は、先生、妙な性分で、どんなに腹の立つた時でも、氣のむしやくしやした時でも、山を見てゐるとすつかり忘れてしまふのです。」

「成る程、あなたの名前は觀山といふんでしたね。」と私が氣が附いて斯ういふと、

「いや、どうも。」と彼は恥かしさうに頭を掻いた。

「僕も山を見るのが三度の飯よりも好きなんですよ。」と私も眩しいので、目をちら〳〵させながら、「それにしても此邊の人はひどいですね、あそこに見える山が御嶽だといふことさへ知らないんですよ、もつともそれはこゝの番頭だけかも知りませんがね、だから、僕は自分でそれを地圖と首つ引で發見したんですよ。しかし、それをあなたの口で確めてもらつたので、又一倍嬉しい氣がします。」

「先生もそんなに山がお好きなんですか。」と觀山も嬉しさうに言つた。「そんなら、この後の山に、さうです、二十町ばかり上るんですが、そこに發電所がありまして、私の友達が詰めて居ります。何なら、一度そこへ御案内しませう、そこからですと、あの山がもつと、ずつと肩の邊から見えますから。」

「さうですか、それは是非一度連れて行つて下さい。」と私は言つた。

やがて、私たちは元の炬燵の傍に戻つて來て、色々と雜談を交したが、何かの話が切れた時、

「先生は音樂の方には餘り興味はお持ちになりませんか？」と槻山は何を思つてか、こんなことを聞いた。

「音樂つて、つまりヴイオリンとか、琴とか、歌とかいふ、その音樂のことですか。」と私は聞き直して、「いえ、僕は自分では何にも出來ませんが、好きは大變好きです。あなたはお好きなんですか？」

「私はどういふ譯ですか、こんな道樂事のやうなものばかりが好きで、殊に音樂と來たら、それこそ三度の飯よりも好きでして。」と槻山は何か恥づかしいことでもあるやうに言つた。「私はよく人に、お前の好きなものに碌なものがない、文學とか、山とか、判を彫ることとか、可笑しなものばかり好きな男だな、と笑はれるんでございます。その通りなんですが、私は自分で時々考へて見ますのに、しかしその好き方が一々違ふんです。まづ第一番に印判といふやつですが、これはどうも親讓りのもので、さあ、決して嫌ひといふんぢやないんですが、何と申しますか、幼い時からの許嫁とか、惡く言ふと腐れ緣の女房とか、さう言つたやうな好きで、今ではどちらかと言ふと、私はどうかして嫌ひになつてやらうと思つてゐる位なんです。」

「だつて、今までも時々やつてると言ふぢやありませんか？」と私が聞くと、

「えゝ、それと言ふのがやつぱり好きなんですね。」と彼はさうするのが多少持前の癖と見えて、頭を掻きながら、恥づかしさうな恰好をして、「それに會社の月給だけぢややり切れないものですから、つい内職をするやうな事になりまして、へえ、どうも……。それに比べますと、文學の方がずつと好きは好きですが、これはどうも幾ら好きでも、自分なぞがどんなに力んでも手を出すことが出來ませんし、唯手當り次第に讀んで喜んでゐるといふ位で、それも貧乏人です

から、さう思ふやうに本が買へません、まあ謂はゞ岡惚れのやうなものでせうか、……」

「岡惚れはふるつてますね、」と私は次第にこの訪問客の言ふことに興味を持ち出して、「ぢやあ、山の方は一體どう言ふんです？」

「これもやつぱり岡惚れの類でございますね、」と彼はまだ時々馴れた言葉の間に、變に叮嚀な言葉を挾みながら、「先生もやつぱりさうなんでございませう。私はどうもそれ程山が好きな癖に、無精者の上に足が丈夫でないものですから、それに斯うしてゐますと暇もないものですから、本當に何の何と言はれる程の高い山に上つたことはないのです。上るのは一日おき位に、先にお話しましたこの裏の山の發電所へ遊びに行きます位で、だから、唯もう眺めて暮すといふだけなんでございます。そして私どもは先生方と違ひまして、自分の岡かこの信州位の外に、別に旅行したことがありませんから、他所の山はちつとも知らないんです。……」

「ぢやあ、音樂は自分で大いにやれるんですね？」と私は問いた。「どんなものをやるんです、樂器の方ですか、うたふ方ですか？」

「いや、やれるといふ程でもございませんが、」と彼は例に依つて恥づかしさうな表情をしながら、「それに聲を出す方は、御覽の通り私は鼻の寸法が短いものですから、耳はさう惡くないつもりなんですが、その爲にどうも調子がうまく取れないんです、えゝ、確に鼻の寸法が短いからに違ひありません、それやまあどうにか斯うにかごまかす位のことは出來ますが……。その代り器樂の方は色んなものを少しづゝ指手を出して見ました。三味線もやりましたし、琴も二三年年期を入れましたし。えゝ、ヴイオリンも、尺八も、みんなほんの少しづゝですけど……。」

だか、その夕方、ゆめ子を招いて、三人で晩飯を食つてから、私が「西向君、何か是非彈いて聞かしてくれませんか、

うたはなくてもいゝですよ、唄は何ならゆめ子君にうたつて貰はうぢやありませんか?」と幾度も幾度も催促したが、彼はゆめ子が來てから柄になく固くなつてしまつて、「いえ、駄目です、駄目です、」と言ふばかりで、三味線の方に振り向きさへしなかつた。然し、これは考へて見るのに、ゆめ子が來てから、彼が固くなる前に私が固くなつたのかも知れなかつた。そしてそれが彼に傳染したのかも知れないのである。ゆめ子、彼女も亦、いつものやうに、俯向いて坐つてゐたが、私が西向に、何か彈いてくれ、彼女にうたつて貰はうぢやないか、と言ふ度に、彼が一度も三味線さへ取上げないのに、彼女は聞えない程の聲で、「私、何も出來ませんもの……」と言ひ出した。

やがて、西向は歸り仕度をして、

「では先生、どうです、明後日あたり山に上つて御覽になりませんか、」と言つた。

「えゝ、僕はいつでも結構ですが、あなた、社の方の御都合はいゝんですか?」と私が聞くと、

「社は一日交替ですから、明後日は又休の番になるんです、」と彼は言つた。「今日はこちらでお邪魔をしてしまひまして、到頭山の方へ行きませんでしたから、向うでは待つてるだらうと思ひます。」

「山の上に女の人でもゐるんですか?」

「いゝえ、男です。」とそこで彼は頭を掻きながら言つた。

その約束した日の、晝の十二時を少し過ぎた時分に、西向觀山は間違ひなく私を山に誘ひに來た。空は冬のさういふ高原地方によくある、からりと響くやうな晴天であつたが、前の前の日の、彼が歸つて行つた晩に少し雪が降つたので、

「どうでせう、あの雪で、山の道は?」と私が心配して聞くと、

「發電所から上は、とても獵師や郵便屋の外は通れませんが、そこ迄は少し位の雪は降つても降らなくても大して違ひ

はありません、」と觀山は言つた。その癖、見ると、彼はその邊の土地の人の用ひるらしい、多分深靴とでも言ふものを穿いてゐた。

「そんな靴を穿かなければ行けないんぢやないですか?」

「いえ、普通の靴で十分です、私がお引受します、」と彼は言つた。

私の宿屋の前を一寸した阪道を下りて往來に出て、そこを右へ行くと、料理屋とか、藝者屋とか、さては町に一軒しかない寫眞屋とか、小間物屋とかの並んでゐる、稍々賑かな道筋を一町ばかり行つたところで、道が二つに分れてゐる。左手の道は今迄の町つゞきで、そしてその分れ目のところから阪になつて下り道になつてゐたが、右手の方は二三軒行くと家がなくなつてしまつて、左手の方のが如何にも町中のそれらしく、石礫などが敷いてあつて、急な代りに短いのに反して、これは一寸見には氣の附かぬ程のだら〳〵上りになつてゐた、即ち山へとつゞいてゐるのである。

その道の分れる所の左側に、ゆめ子の家があるのを、私はその五六日前に聞いてゐたので、何處だらうと氣を附けて見て行くと、阪道の始まる一番上の位置に、だから土臺を石垣で積まれた一軒の古ぼけた家の門の軒燈に、夢の家と書かれてあるのを見付けたので、はつとして、無意識に、並んで歩いてゐる西向の袖を引張つて、

「君、あの家が、」と一寸顎で方角を示して、「あれが昨日の藝者の家ですよ、」と言ふと、

「えゝ、夢の家でせう、」と相手は十年も前から知つてゐることのやうに言つた。それは當然のことで、彼はこの町の住人だから、知つてゐる筈に違ひなかつた。

私は少し赤くなつて、彼が私のそんなあわてた行動を何と思つてゐるだらう、それから又もしやあの家の何處かゝら、偶然ゆめ子が私のそんなはしたない行動を見てゐはしないか、と氣が廻つて、急に手足を早めて前途に向つて歩き出し

た。もうその邊から、道は何日となく積もつて消えない雪に蔽はれて、その雪が又別に固まつて氷になつてゐる譯でもなく、と言つて溶けもせず、雪の姿のまゝで、謂ふ通り、白布を張つたやうに眞白であつた。そして一町、二町、三町、と進むに從つて次第に傾斜は急になつて來た。

私は都會に隨分大雪の降つた景色を知つてゐる、だが、屋根に五寸以上も積もつて、一度降つたその大雪の殘りが、庭の隅や、或ひは、町の日の當らない凹地に、三週間も消えずにゐるやうな場合の時でも、その雪の降つた朝町に出ると、成る程、人の通らない積もつてゐる所は一尺近くも雪があつても、私たちの歩く道は泥に混ざつた唯の泥濘になつてゐるのが普通である。そして、見渡すと、町の彼方にも此方にも雪の積もつてゐる白い部分とそれのない黑い部分、即ち人家の、それを掃き落された屋根とか、塀とか、廣告塔とか、煙突とかが、丁度白と黑とで畫かれた版畫のやうな景色を呈するのを知つてゐる。だが、こゝでは同じ雪景色でも、すつかり違つてゐた。私たちの歩いてゐる道は、現に、先にも言つたやうに、そこはそんな山路ではあるが、上の村から下の村へ毎日學校通ひの子供や、その外色々な人が通ふ爲に、まるで町の中の道のやうに、何人もの人の足跡に踏み固められて、時には車の轍さへはつきりと、印せられてゐるのであるが、しかし土の色は何處に見る影もなくて、唯砂糖の路を歩いてゐるやうに眞白であつた。見上げる山も、傍の谷も、その横を過ぎて行く崖も、悉く砂糖を被つてゐるやうに眞白であつた。私は上るに從つて、足の疲れと離れて來た町の懷しさに、十歩上つては振り返り、一寸した曲り角に出ては後を向き、眺望のよささうな臺地に來ては立止まつて振り返つた。私たちの歩いてゐる路は恰も山と山との間の、谷間に沿うた崖の上に通じてゐるので、その谷の底が盡きた所の平地にある諏訪の町を見失ふことはなかつた、況して湖水も、そして湖水の周圍の山々も。そしてそれ等の景色も亦、都會の郊外の雪景色とは大分趣きを異にしてゐた。例へばそこでは大雪の降つた朝でも、それは謂

はゞ色の黒い女が白粉をつけたやうな趣きがあると、こゝのは全く地から白い女の肌にも喩へられようか。だから、こゝらは白と黒との模様畫ではなくて、悉く眞白であつた、さうでなければ白に近い灰色であつた。だから、空はそんなにからりと鳴るやうな青空であるにも拘らず、下界の景色だけは、都會の丁度雪のしん〳〵と降つてゐる最中のやうな色合ひに見えるのである。町に林のやうに立つてゐる、百本の煙突も灰色である。湖水の、もう凍る少し前の水の色もやはり灰色である。そしてその湖水の彼方を限る山は、盆栽の雪の山よりももつと雪を被つて、青空の下で白いといふには餘りに白く光つた色に輝いて見えるのである。が、一瞬間にして、忽ち私の目を奪つたのは、例の湖水の山の向ふ側の、二座の高山の姿であつた。あゝ、西向觀山は嘘を吐かなかつたのである。彼の言ふ如く、それ等の山は、私の宿屋の三階の部屋から見るとは、大凡その二倍も、惜しげなくその姿を、一歩づゝ上れば上るほど現し始めたのである。もつとも、考へて見ると、それは無理なことではないので、初めて私がそれを宿屋の部屋から觀察した如く、それ等の山を隱してゐる湖水の縁の山脈と、私の宿屋との距離よりも、それ等の山と湖水の山脈との距離の方が五倍も或ひはもつとも距離があつた譯なので、だから、少しづゝ高い所へ上れば上る程、それ等の山は湖水の山脈の後からによき〳〵と姿を現す譯なのである。だが、まさかそれ程とは私は想像だもしなかつたのであるが、一歩上つて振返り、二歩上つて振返り、終にはさういふ足元の危い雪路にも拘らず、私は子供がよくするやうに後向きながら、だから背後の方に足を運ばせながら上つた程、その壯大とも、崇高とも、何とも形容の出來ない見事な山の景色から目を放つことが出來なかつた。だから、路がその大觀を遮る方角に曲つてしまふと、又それが見える曲り角に上る迄、私は走り出した位であつた。終にはその二座の山は、最早や例の氷に磨きをかけたやうな頂だけどころか、或ひは肩から上だけばかりでなく、雪を被らない、謂はゞ腹の邊から上までを、湖水の山脈の上に現はし出した。そればかりでなく、その湖水のふちの山

脉と、その二座の山との間の十里か、二十里が、兎に角それ等の距離を感じさせるだけの空氣をも、見る人に感じさせるやうにさへなつた。

「あれが御嶽山ですか、あれが木曾の御嶽ですか！」と私はその方を見ながら、何度斯う獨言で叫んだか知れない。「そしてあれが乘鞍ですか、乘鞍ですか！」

「えゝ、」と西向はそれに答へて「あの乘鞍の右の方に、これから、今はもう一寸我々のやうな者には行けないところですが、その發電所のあるところから、又二十町ほど上つた和田峠へ行く途中の所まで出ますと、穗高から、鎗などといふ日本アルプスの山々が一列に見えるんですが……。」

「今はどうしてもそこ迄行けませんか？」と私は聞いた。

「さうですね。誰かしつかりした案内者でもあつて、その上に、それこそこの邊の土地の人のしてゐるやうな、あゝ言ふ雪袴を穿いて、雪靴を穿いて、十分な用意をして行きませんと……」

「どうしても行けませんかね、」と私に歎息しながら言つた。

「さあ、もう直です、この角を曲つて、もう一つ曲つたところです、」と西向は言つた。「發電所の舍宅の方なら、炬燵に當りながらこの景色がずつと見晴らせますし、又機械のある所ですと、機械のせゐで幾分溫かですし、そこには爐が切つてありますから、早く行つて溫まりませう。」

やがて私たちは黑い、貧弱な棒が二本立つてゐる外に、柵も何もない發電所の門を這入つて行くと、時候のいゝ時にはそこは畑か何かに使はれてゐるに違ひない、たゞつ廣い平地の向ふの、その建物の中から一人の小さい男が現れて、その途中まで私たちを迎へに出て來てくれた。

「先生、これは私の友達の堀戸君です、」と西向はその男を私に紹介した。

「お名前は兼々承つて居りました、よくお出で下さいました、」と堀戸は、年は幾つ位か知らないが、變に年寄り染みて見えたり、又どうかするとまるで子供らしく見えたりする顔の持主で、「どうぞ兎に角此方へ、一先づ、」と私たちを發電所の方へ案内して行つた。

そこは私などには可成り薄氣味惡い音をたてゝ、間斷なくごろ〳〵と廻つてゐる機械が建物の中の半分を占めてゐた。「盛んなものですね、」と私が言ふと、「いゝえ、これで今は丁度この邊の製糸工場が休みなものですから、機械は半分しか動いてゐないのです、」と西向が説明してゐる間、堀戸はその小さい身體を働かせて、爐の火をしらべたり、茶を汲んで出してくれたりした。

「それに、來る途々で御覽になりましたやうに、」と西向が説明して言ふには、「あんな風に、冬になりますと、この邊の山の中は川の水でも大部分凍つてしまひますし、滝になつて落ちてゐるものでも、天然のまゝにしておきますと、水は少なくなりますし、果はやつぱり凍つてしまひますし、中々その方の手當だけでも大變なんでございます。しかし、どうしても冬は動力がそんな譯で弱くなりますので、先生の宿屋の電燈なんかでも、あんな風に暗いのは止むを得ませんのです。」

私は彼のさういふ説明を半分いゝ加減に聞き流しながら、先程から木曾の御嶽山は何處に見えるか知ら、と思つて、硝子窓の彼方此方を透かして、外の景色を透かして見たが、一向それらしいものが見えないので、「御嶽は何處です？」と我慢がし切れなくなつて聞くと、「いゝえ、こゝからは見えません、」と西向は答へた。「あちらの官舍の方へ行きませんと……」それから、彼は堀戸に向つて、「君、先生はあの御嶽山の見える景色が大變氣に入られたんだが、どうだ、中尾

君に頼んで此所を見てもらつて、向うの方へ行つて坐ることにしようぢやないか？」と言つた。

「うむ、僕もそのつもりでゐるんだ。」と堀戸は答へて、その建物と鍵の手の形になつて立つてゐる、日本建の家の方へ出かけて行つた。

間もなく、堀戸の同僚である中尾といふ、彼等と同年輩位な、色の青白い青年が出て來て、私たちに挨拶してから、

「堀戸君は今あちらを片附けてゐますから、一寸暫くお待下さい。」と言つて、彼は私たちと一緒に、爐の傍の椅子の一つに腰を下ろした。

「濟みません、折角、お休憩のところを無理を頼んで。」と西向はそこで中尾に言つた。

「いえ、どうせ遊んでゐるんですから。」と中尾が言つた。

やがて、私と西向とは堀戸に案内されて、その日本建の、彼等の所謂官舎の方へ出かけて行つた。それは二軒長屋の一軒で、片方の家は今は誰もゐないと見えて、戸閉めになつてゐた。三疊と六疊の、縁なしの疊を敷いた、がらんとした粗末な部屋で、その六疊の方に炬燵が切つてあつて、それに被せてある穢い蒲團の上に、白い布切をかけて、その上にお茶の盆などを載せて、そこに私たちは迎へられたのである。堀戸は小柄な身體の持主だけあつて、湯を沸かしたり茶を入れたりする用事を、芝居の女形の役者のやうなくにや〳〵した恰好で、始終心がけてやるのである。だから、初めのうちは私と西向とが向ひ合つて炬燵に當つて色んな雜談をしてゐる間も、彼だけはその中に交らないで、その狭い部屋の中を絶えず彼方此方(あちこち)してゐた。私はふと思ひついて、突然座を立つて行つて、突當りの障子を一枚開けて外を見ると、そこに忽ち目の下に深い谷が遠く延びて、それが盡きたところに諏訪の町があつて、町の彼方に湖水があつて、湖水を限る山脈があつて、その山脈の向ふに、山の七分方(がた)までくつきりと青空の中に浮き出してゐる、御嶽と乘鞍の二

山が、沁みるやうに目に這入つたのに驚かされた。

「先生、山がよく見えるでせう?」と觀山が後から聲をかけた。

「よく見えますね、」と私は言つた切りで、寒いのも何も忘れて、長い間その景色に見惚れてしまつた。そこからは、峽や谷も、町も、湖も――それ等は言ふ迄もなく、その湖の彼方を限る屏風狀の山脈さへも、私の足の下に見下されるのである。無論、さう言へば、御嶽も乘鞍も、見た目だけでは同じやうに私の目の下に眺められはしたが、目に見たところは兎に角、その外のどの山々も、彼女等よりも私の立つてゐる位置の方が實際にも高く思はれる中に、然しやつぱりその二座の山だけは、どんなに引下ろさうとしても、それは天外に聳えてゐると形容する外、何の言葉も見出せない光景であつた。

「今日は笛を持つて來なかつた?」と後の炬燵の傍で、堀戸が西向に斯う尋ねてゐる聲が聞えた。

「あゝ、持つて來たよ、」と西向が低い聲で答へた。

その時、私は漸く彼等の方に振り向いて、炬燵の傍に歩いて行きながら、

「笛つて、尺八ですか?」と聞いた。「そんなもの、君、持つてたんですか?」

「えゝ、」と西向は例の恥づかしさうな恰好をして答へた。

私は、今し方この部屋に這入つて來た時、玄關の二疊の間で不思議な光景を見たことを思ひ出した。それは奥の間であるところの、その六疊の部屋でさへ、古びた机と、古風な木の齒の本箱との外に、何一つ道具らしい道具のないその家の中に、そこには琴が立てかけてあつたり、三味線やヴァイオリンが吊り下げてあつたりしたことである。もつともそれを見た時、私は直にこの間、音樂が飯よりも好きだと言つた、西向觀山を思ひ出したが、どうもその様子から察しるとこ

の部屋の主人公の堀戸も同じものを嗜むらしい風である。幾ら馴れた路とは言ひながら、此間の西向の言葉にも、一日おきの休の日には必ず彼の方からこの山の上へ訪問して來るといふのも、多分この二疊の間の樂器類に關係があるに違ひないと氣が附いた。

「堀戸君も音樂をやるんですか？」とそこで私が聞くと、

「えゝ、」と堀戸は西向ほど恥かしさうな樣子をしないで、はつきりと答へた。「然し、私の、西向さんは、先生なんです。」

「何か聞かしてくれませんか？」と私が催促すると、

「えゝ、まづいんですけど、」と堀戸はしかし直に何かやり出しさうだつたが、

「いや、駄目です、駄目です、迚も先生方にお聞かせするやうなものぢやありません、」と先生の西向の方は恥かしさうな恰好で、兩手で頭を抱へながら、中々應じさうになかつた。

「一昨日も藝者が來た時やつてくれなかつたぢやありませんか、」と私は言つた、何もそんな場合藝者の話などする必要はなかつたのであるが、その時分から何といふ理由はなく、私は變に里戀しさと、急に彼女を見たい心に襲はれ出したので、わざとそんな事を言つて見たのだつた。もつとも、あんな藝者にうたはれるんぢやあ、彈く氣がしないかも知れませんが……」

「どう致しまして、」と西向は心から辯解するやうに、「この土地ぢや此間のへなんかはちやき／＼ですから、私の方こそ氣おくれがしたんです。」

「誰、何といふ藝者？」と小柄の堀戸は身體にしなを造りながら聞いた。

「ゆめ子さんだよ。ね、君、あの人とか、小蕗とか言へば、この土地では一流の人だからね、」と西向はその丈の短い琴を突き出しながら言つた。

「まあ、さう謙遜しないでやつて下さい、」と私は再び催促した。

「ぢや、やらうぢやないか、」と堀戸の方は頻りにやりたいらしく、小聲で、彼の師匠であるといふ西向の、袖を引くやうにして勸め出した。

「ぢや、やるかな、どうせ下手は分つてるんだから。先生、お笑ひになつちやあいけませんよ、」とやつと西向が思切る迄には餘程の時間が掛つた。

が、一度口を切つてやり始めると、終には私がもう甚だ退屈を覺え出した程で、彼等は惜まずに、次から次と色んなものを演奏し出した。堀戸は徹頭徹尾ヴイオリンを彈く役目であつたが、西向は千變萬化であつた。一番初めに、彼は堀戸に手傳はして、例の二疊の部屋から琴を擔いで來た。琴の寸の短いのを悲む彼と、小柄で女のやうなしなをして媚(あだ)を振舞ふ堀戸とか、どう見ても彼等とは關係なささうに思へるところの、琴といふやうな樂器を運んで來た光景は、滑稽といふよりは、物凄くさへ見えた位だつた。

「少し調子が狂つてるんだが、一寸手傳つてくれない?」と西向が言つて、相手に手傳はして、私の方にその寸の短い琴の側面を見せながら、彼は大工のやうな體附(からだつき)で手足を踏ん張り、お孃さんのやうな手附で糸を締めたり、駒を動かしたりした、それは一寸見ると、芝居の道具方が舞臺に使ふ小道具を扱つてゐるやうにも見えた。

「おや、生田ですか?」と私はその時、關東には珍しく、山田流ではなく生田流らしい琴であるのを見て、斯う尋ねると、

「え丶、生田です。先生はよく御存知ですね。」

その時、私はふと思ひ出して、「確かあの此間のゆめ子といふ藝者も、僕は聞いたことはありませんが、生田をやると か言つてましたが……」と獨言のやうに言ふと、

「さうでせう、多分、私の師匠と同じ師匠です、」と西向は音締を直しながら言ふには、「三年目に一度づ丶、上方から來て半年ほどこの町に滯在して數へてくれる師匠があるんです。」

さういふ間にも、彼は十三箇の駒を彼方此方に動かしながら、琴の調子を一所懸命に合はしてゐた。と、傍では堀戸が、これ亦ヷイオリンの調子を調べたり、ニツケル製の樂譜臺を立てたり、色々と演奏開始前の準備に忙殺されてゐたが、やがて、

「はつ!」といふ西向の掛聲と共に、ヷイオリンと琴との『殘月』の演奏が始まつたのであつた。見ると、彼は今の先までの琴を運んで來た時の恰好や、音締を直してゐた時の道具方のやうな體裁とは、まるで別人のやうな印象を見てゐる私に與へた。最早や彼の顚狂な顏附も、その寸の短い鼻も、不相當に太い眉毛も、その幾分か猫のやうな脊中も、悉く生々として、と言ふよりも、實際よく人が言ふやうに、そこに奏し出される音の外には、彼の體も、それから安物らしい古ぼけた琴も、何にも見えないと言ふことが出來る程であつた。或ひは又、彼の上半身は、氣狂のやうに震へる手と共に、猿のやうに琴の上を走り廻ると見えた。それに引きかへて、流石にその弟子だけに、彼と合はしてヷイオリンを彈いてゐる堀戸は、その小柄な、女のやうな體附が、弓を持つ手に氣を取られたり、樂譜面に氣を取られたりして、尋常茶飯の折の變にしいなをする恰好も何も忘れて、しどろもどろの體に見えるのである。

それは實際、一種何とも言はれない、不思議な光景であつた。そんな山里離れた、高い雪の山の上の、つまり發電所

の番小舍であるところの茅屋の中で、ちぬの浦浪六の小說の主人公のやうな二人の青年が、樂器を持ちながら踊つてゐたやうにも見えるのである、或ひは又、さういふ山家の中に置き忘れられた魔法の樂器が、この二人の青年に取り憑いて、縱橫無盡に鳴つてゐるとも思はれるのである。

やがて、私は煙草の烟が部屋の中にこもつたからといふ理由で、先の緣側の障子を開け放つて、西の方の御嶽の方を見ると、早や大分傾きかゝつた日の加減で、並んでゐる乘鞍の峰と共に、その頂の氷のやうな雪の色が、少し紅味を帶びて來たのを見出した。その時は丁度西向が獨りで、三味線をもつて、六下りか何かの上方唄を彈いてゐた時だつた。

私は先程からの思が次第に募つて來て、麓の町がひどく戀しくなつて來たので、

「西向君、もう大分遲くなつて來ましたから、どうです、歸りませんか、」と彼の三味線の一寸した止み間を見計らつて言つた。「どうです、そして都合が何とか附くんでしたら、堀戶君も一緒に僕の宿へ遊びに來ませんか。そして一つ小瀧とか、ゆめ子とかを呼んで、諸君も一緒に何かやつて聞かしてくれませんか、」

すると、初めのうちは、西向は例に依つて遠慮して中々應じなかつたが、到頭私の言葉に從ふことになつて、堀戶も勸めの方の用事を中尾に賴むことにして、一緒に來ることになつた。三味線は言ふ迄もなく藝者たちが持つてゐるだらうし、琴はゆめ子のでも、或ひは觀山の相弟子だつた、湖心亭（料理屋）の娘のでも借りればいゝ、ヴイオリンだつて一挺や二挺位なら、何處かに借りられる所があるだらう。やつぱりこれだけ持つて行つたらいゝでせう、と言つて、觀山だけが持つて來た尺八を、マントの下に隱して、着物の帶の間に刀のやうに差し、堀戶は中尾の借り物だといふ、大きなだぶ／＼のインバネスを羽織つて、三人は山路をとぼ／＼と町に向つて下りた。私は頻りに町とゆめ子とが戀しかつたが、向うの湖水の緣の山の後に、次第々々に、せり下りのやうに沈んで行く夕日を浴びた、御嶽と乘鞍の景色に

別れるのが、あゝ又、この景色をいつ見るだらうといふ氣がして惜しくてならなかつた。

「先生、先生にお願ひがあるんでございますが、」と山路で突然西向が、ひどく言ひにくさうにして、やつとのことのやうに言ふには、「といふのはこの堀戸君のことなんですが、堀戸君はいつ迄もあんな發電所の番人のやうなことをしてゐたくないと言ふんです。無理もないんです、堀戸君は未だ十九歳なんです。で、是非東京に出て、人の家の書生でも何でも辛抱するから、音樂をもつといゝ先生に就いて稽古したい、それに何處かの音樂隊とか何とか言ふやうなとこに下廻りのやうにして這入つてもいゝし、どんな事でもすると言ふのですが、それに就きまして、どうか先生、先生などはお顔が廣いでせうから、若しお心當りの所がありましたら、是非お世話をしてやつていたゞきたいんでございますが……」

「どうも僕はそんな方には一向知つた人もありませんし、顔なんか一寸も廣くないんですから、心がけては置きますが、賴まないと同じ位に、的にしないで下さい、」と私は言つた。「そしてあなたは、西向君、君は東京へ行く氣はないんですか？」

「えゝ、それや、」と彼は例に依つて恥づかしさうな表情をしながら、「行けるならいつでも行きたいんですが、私はもう堀戸君などよりずつと年も取つて居りますし、元々印判屋なんですし、……然し、私も何とかして行きたいなア……」

ふと、路が一つの曲り角に來て、今迄隱れてゐた谷の向うの、湖水や山の景色が私たちの前に開けたので、私は心の中で御嶽と乘鞍の方に別れを惜みながら、

「東京などに行つたら、山が見られませんよ、」と半分冗談にして言つた。

「もう、さうなつたら、山が見られなくてもかまひません、」と然し相手は眞面目な調子で答へた。

それから私たちは山を下りて、一先づ私の宿に歸つて、湯などに這入つて一吹してから、夕飯を食べかた〴〵、宿屋ではまさかそんな音樂會を始める譯には行かないので、湖心亭に出かけて行つたのである。ところが、その晩、彼等の音樂と合奏する爲に、彼等と相談して湖心亭に呼んだ藝者の中に、無論ゆめ子も這入つてゐたが、その外に、三春家の小瀧といふ藝者がゐたのである。何故、わざ〳〵こゝに小瀧といふ藝者の名を出したかと言ふと、今、その時から最早や四年ほど經つてゐるが、不思議な緣あつて、私はその女と夫婦になつてゐるのである。そして、今も尙、その當時のまゝ、私がこの世の中で最も戀してゐる女はと言ふと、その、當時一歳の赤ン坊を抱えてゐた、藝者ゆめ子であることに少しも變りはないのである。ゆめ子の子は最早や四歳になるであらう。

その翌年の四月に、小瀧は信州の山から下りて來て、東京の私の女房となつたのであるが、その年は七年目に一度づゝ催されるといふ、町に大祭のある年だつた。それは例の私の宿屋の二階の部屋の、南向いて附いてゐる二つの丸窓から見えるところの、明神樣の大祭なのである。杉の木に圍まれたこの明神の境內に這入つて、社殿の後に廻つて見ると皮と枝とを毟り取つた、大きな杉の木の柱が四本、長方形を畫いて、各その頂點の位置に突立つてゐる。この四本の柱を七年目に一度づゝ取換へる事になつてゐるので、その年の五月に卽ち七年目のその柱の祭が行はれたのである。七年目に一度といふやうな祭の事であるから、町全體が、のみならずその町の附近の村々が、或ひはこの明神の名を知つてゐる範圍の村々町々全體が、祭の催し物、祭の着物、祭のお客、祭の御馳走、すべて祭といふものが持つて來るいろ〳〵

の用事の爲に、私のやうな他國人の目にも甚だ緊張してゐるのが見られた。私の南の丸窓から覗くと、明神の杉の森と社の景色には何の異狀も認められなかつたが、心なしか、いつもは滅多にその境内を人が、近道の爲に横切る外には、或ひは又稀に子守や子供たちが遊んでゐる外には、人の姿を見なかつたやうに思はれたのに、その頃はいつの時でも、五六人の法被を着て、靴を穿いて、中折帽を被つてゐると言つた風な種類の人たちが、その杉の森の中を檢分するやうに見歩いてゐたり、又別の時は、洋服を着た役人のやうな連中が二三人の巡査と一緒に、口々に何か頻りに話しながら境内を彼方此方と歩いてゐたり、始終何か彼にか人の姿を見かけないことはなかつた。さては又、西の窓から眺められる範圍の町の辻々の、五六箇所に、それ〴〵思ひ思ひの形をした長持のやうなものと、その上に御幣を立てたのが見出されるのである。それは番頭の説明に依ると、やはり杜の祭の時の催し物として、町ならば町内からそれ〴〵一箇づゝ、村ならば一村から一箇或ひは三箇位づゝ、各々趣好を凝らした長持を擔ぎ出して、それが二三町の長さにもつゞく所の、長持の行列が行はれる爲のものであるとの話である。或ひは又西の窓、北の窓から眺められる、二百本の工場の煙突が、此頃では夜になつてからも黑い烟を吐いてゐるのは、その祭に何日かの休を得る爲に、男工女工等が臨時の夜業を勵んでゐるに違ひないのである。夜と言へば、そのうち段々祭の期日が迫つて來る頃になると、毎晩毎晩、私の高い三階の窓の下を、不思議な、木遣に似た唄を何十とも知れぬ多數の人間の聲で合唱して通るのが聞かれた。それは、私の部屋が、彼等の歩いてゐる道から言ふと塔ほどの高さにある上に、下の町の屋根や、夜の暗さやの爲に、その姿を十分に見極めることは出來なかつたが、祭に出る町の人々が、長持を擔ぐ者は長持を擔ぎ、棒を持つ者は棒を持ち、音頭をとる者は音頭をとり、その七年に一度の晴れの祭の日の練習をしてゐるのである。その時には、長持の行列の外に、大名行列といふのが主な催し物の一つとして數へられてゐたので、その爲の鎗持つ者、挾み箱持つ者等も亦、別の行列を作

つて、毎晩々々私の窓の遙かな下を通るのである。彼等は皆、晝間は桶屋だつたり、大工だつたり、漁師だつたりする家業があるので、夜の休息時間を利用して、さういふ祭の日の爲の練習をしてゐるのらしかつた。或晩からは又、南の丸窓から見える明神の森で、何をするのか、一ところ篝火をたいて、それを取卷いて何人かの人々が、がやがやと騷いでゐる氣配が聞え出した。

町の人々の話題は二言目にはその祭のことに移つた。宿屋の番頭は言つた。

「先生、一度お歸りになるにしても、五月には是非お待ち申しますから。……えゝ、それはもう先生のことですから、この部屋をお明けしてお待ちいたします。藝者はもうお正月の五倍も忙しい目をします、取分け先生の御贔負になさいますゆめ子とか小瀧とか云ふ連中になりますと、さあ、一座敷に五分間ゐるところは、餘程お馴染の方でないと……へゝ、御冗談でせう、先生のお座敷なら十分や二十分は向うでお願ひしてもお伺ひいたしますでせう。」……

「もうずつと、祭の時まで御滯在ですか？」と顏見知りになつた、郵便局の局員も私に言ふのである。「何しろ七年に一度のお祭のことですから、大騷ぎする筈なんです。この前の時は私はまだ十五歳の鼻たれ小僧でしたが、その時分には父がゐまして、どうにか斯うにかやつて居りましたから、東京へ出て大學に這入るつもりだつたんです、郵便局員にならうとは思ひませんでした。この次の祭にはもう三十歳になるんですから、どういふ風になりますか……」

なる程、七年に一度と言ふと……と私は延々考へるのである。この局員と多分同い年位である藝者ゆめ子は、この前の祭の時はまだやつと雛妓になり立て頃だつたに違ひない、七年後に子の親にならうとは、誰が知つたらう？恐らくこの町の人々は、七年に一度づゝ、自分たちの過去を思つたり、將來を考へたりする機會を與へられるに違ひない、七年を長い氣がしたり、餘りに早く經つたと思つたり、喜んだり、悲んだり、そしてその祭を三度見るか、五度見るか、

七度逢ふか、どんなに多くても十度以內めぐり逢はないうちに、桶屋も、局員も、藝者も、皆々死んで行くのであらう。

共同浴場の傍を通ると、「この間の木落しには珍しく誰も怪我をしなかつたよ。」「それは珍しいな。この前の時だつたな、綿屋の揚藏が死んだのは？　その代り又大きな喧嘩がなければいゝがな。……」「もうどの邊に廻つてるずら、御柱は？」「有元村ずら、昨日有元の若い衆が來て、今日御柱が村へ着いたと言つとつたから……」

宿に歸つて番頭に聞くと、もうずつと前から町々村々の總代の者が、この山のずつと奧の方の、四里ばかりあるところへ一ケ月ほども通（かよ）つて、適當な木を四本切つて、それを木落しと呼ばれる崖の上まで引いて來て、そこから崖の下へ落すのださうである。山道の四里のことであるから、麓の村や町から出かけて行くのに、行きと歸りの道に一日のうちの大部分の時間をとられて、向うでは一時間位しか仕事が出來ないのださうである。さて、木落しから落してしまふと、その落ちたところから最も近い村までは一里位しかないので、その村の者やその外からも多少手傳の者が出て、四本の柱に縱橫無盡に綱をかけて、それからえんさ〳〵と村から村へと引きずつて步くのださうである。そして一つの村に一日なり二日なり置いては、又隣の者から引取りに來て、到頭五月の祭の日までに、この諏訪の町に柱が這入るやうになるのである。

さういふ賑な最中に、私と小瀧とは、私たちは共に共に最早や三十歲であつたから、二十歲の人たちのやうに、今更らしく戀を語り合つたといふ譯でもなく、又別に改まつて結婚しようと約束し合つた譯でもないが、俗に言ふ破れ鍋と閉ぢ蓋とが合つたやうに、その翌月私が、二ケ月近く滯在したその町に別れて、東京に歸つた一週間ほど後のこと、彼女も東京に出て來て、そして私たちは夫婦になつたのである。それは卽ち御柱の祭のある月であつた。七年に一度づゝ奧山から杉の木を切つて、供へさせるやうな神樣であるから、それは隨分な荒神樣に違ひないのである。果して、祭に

は何處でも附き物の靦があるが、この祭では山で木を切る時とか、木を引張つて歩く時とか、兎に角、何かの機會に人間の血を見なければ治らないものだと言はれてゐる。緣起を調べて見ると、この明神は上社下社の二ケ所に分れてゐて、この町にあるのは下社で、上社といふのは三里ばかり東にあるのである、祭神は建御名方命と八阪刀賣命といふ夫婦の神で、ずつと以前には二神は上社に一緒に居られたのであるが、或時夫婦喧嘩の末、別れて妻の八阪刀賣命は此方の下社に移られたと言ふ話である。それに因んでか、この柱の祭の年に結婚すると、必ず別れることになるから、決してしてはならぬと言ふ言ひ傳へがある。それにも拘らず、私たちは夫婦になつたのである。

私はどうしても東京に歸らねばならぬ用事が出來たので、四月の末か、五月の初のことだつたが、或雨の降つた晩、「もう御柱祭が近いんですから、折角のことにそれを見てお歸りになつては、」と止める宿の番頭に、「祭の日までは未だ十日からあるんでせう、その時には又來るかも知れない、多分來ることにしますよ、」と言ひ殘して、その町を立つたのである。東京行の汽車がそのステーションの小さなプラットフォームに着いて、丁度そこへ俥で着いた私が、あわてゝその汽車に乘り込んで、座席の中の空いたところに鞄を置いて、私は硝子窓越しに、小さな、驛の待合室から入口の方を覗いて見た。そして三十秒か一分かゞ經つた。やがて、汽笛と一緒に汽車が出ようとした時、私はその入口のところに二人の女が慌しく傘をすぼめてやつて來るのを見たので、あわてゝ汽車の昇降口のところへ立つて行つた。私が昇降口のところへ出て行つた時、二人の女は――小瀧を先にして、ゆめ子が後から――改札口を出て來たところであつた。「有難う、さやうなら、」と私は彼女等に向つて叫んだ。私と彼女等との間に雨が降つてゐて、プラットフォームがあつて、驛員たちが右往左往してゐた。それだけの間を隔てたところから、小瀧がその大きな目で私の方を見てお辭儀をした、と、彼女の背中の後からゆめ子が半分隱れてお辭儀をした。が、恐らく彼女等がお辭儀の頭をすつかり上げ切

らないうちに、最早や走り出してゐた私の汽車は雨の夜の中に消えた譯である。

その時の印象を私は忘れることが出來ない。私ははつきりとではないが、小瀧と、彼女が近々東京へ、——私のところへ遊びに來るといふ約束を交してゐたのである。それのみならず、その時既に私は彼女ともつと立入つた交渉をさへ結んでゐたのである。そして彼女よりも以前から知つてゐるところの、且つ心から愛してゐたところの、その爲にこの町をも愛するやうになりこの町に來たところの、ゆめ子とは何の約束も、何の特別の關係も、それどころか唯の四方山話の外に何の語らひも私はしたことがなかつた。私は汽車の冷い硝子窓に頭をおし着けて、雨の夜の中にも朧ろに見えるその山の湖を硝子越しに睥みながら、「神よ、憐み給へ、」と心の中で叫んだ、「私がゆめ子を愛するやうな愛は、この世の中で成立たないものでありますか？　ゆめ子を愛する愛と小瀧を愛する愛と、神よ、人の心は昔の哲學者が言ふやうに、二元に惱むやうに抑も出來てゐるのでありますか？　神よ、助け給へ！」そして私は山の湖に別れ、甲斐ケ根の傍を過ぎ、笹子小佛の峠を拔けて、翌朝東京へと歸つたのであつた。

だが、それから十日程後、私はふと思ひ立つて、又もや飯田町から出る汽車に乘つたのである。私がその十日程東京にゐた間に、山の町からは小瀧から二通と、堀戸から二通と、(その外に誰からも來なかつた、)四通の手紙を受取つた。前者からのは、一口に言ふと戀文で、寂しいとか、商賣も殆ど休んでゐるとか、近いうちに東京に出て、色々御相談したいとか、さういふ類のもので、後者は是非御柱の祭に入らつしやい、屹度先生にはお珍しいに違ひないとか、こゝにはわざと言はないが、實は面白いことがあるからとか、さういふ類のものであつた。堀戸がそんなに二度も案内の手紙を寄遣すのに、どういふ譯か西向からは何の便りもなかつた。そして、丁度私が不意に思ひ立つて、憑き物でもしたやうに、ふら／＼と飯田町から汽車に乘つた晩に、私の留守の家に小瀧から、アスツカガヒマスといふ電報が來たのであ

つた。私はそんな事とは知らないで、宿に着くと、その晩、小瀧は又の日のことにして、早速ゆめ子に會つたのであるが、彼女といつもながらの唯の四方山話をしてゐた時、東京から電報が來て、留守に小瀧が來てゐると知らして來たのである。

　だが、その翌日が愈よ明神の御柱が町に引込まれる祭日の當日だつたので、私は返事の電報を打つておいて、もう一日滯在の日を延ばすことにした。私は妙に病的な迄に内氣な性質から、これ迄にも郵便局に行く時位の外は、宿屋から町に足を踏み出すことは稀であつた。今、噂の高い田舍町のことだから、私とゆめ子や小瀧やとのいきさつが、その眞相が何にも知られてないだけに、色々の臆說と共に傳はつてゐるに違ひないと思つて、それに私の妙に秘密好きの癖も手傳つて、現に私は停車場から宿屋までの俥にも、晴天だつたにも拘らず幌を掛けさせた位だつた。そんな譯で、私は町に一歩も出なかつたが、その上そんな人里から遠く且つ高く離れた、山の中腹の三階の部屋に一日坐つてゐながら、物音に依つてか、氣分に依つてか、空氣に依つてか、人々の素振に依つてか、多分それ等の總てに依つてゞあらうが、町に大祭があることが十分に感得されるのである。南の丸窓をそつと開けて覗くと、いつもの無表情な明神の森も、社も、今日は七年に一度の化粧をして、赤と白や、黑と白やの幔幕が張り廻され、百の見世物の小屋掛や、百の物賣の屋臺店やが、杉の木を埋める程に並んでゐた。夜は夜で、そこに何事か、戰でも始まつたやうに、篝火や、電氣の火や、瓦斯の火や、カンテラの火やが點つてゐて、最早や數日前から始まつてゐるに違ひない、ドン〳〵、チャン〳〵といふ曲馬や、八木節や、地獄極樂やの見世物の囃子、さては社の神樂の音樂などが賑かに聞えて來るのである。それは南の窓ばかりでなく、町を見渡す西の窓や北の窓やは言ふ迄もなく、山に面してゐる東の廊下に立つても、その山の彼方此方にちらほらと散在してゐるところの、どんな小さな家や小屋にも旗や提灯が出てゐて、これ迄はそんな所に路がある

とも思えなかつた邊を、こゝから隱れてゐてそれが見えなかつたと見えて、盛裝した子供たちや、大人たちやが愉快さうに通行するのが見えるのである。だから、町に大祭のある事は、恐らく盲目にも聾にも感じられたに違ひなかつた。

だが、私の心の中は町の景色とは反對のものであつた。私は私の留守の東京の家に、小瀧が私と夫婦になる打合せをしに來てゐることを考へると、嬉しいどころか、到底救はれ難い、重い氣持を感じた。彼女と會ふ迄は、そんなにも自由に、廣々と展開されてゐた眼界であつたが、それが段々狹まつて來た上に、今や無限のトンネルにでも這入つて行つたやうな氣がした。だから、詩人のやうに譬へて言ふと 町は大祭の最中であるのに、私の心には葬式が通行してゐた。

私はふと思ひ立つて、卽ち山と、湖と、町と、夢とを求めて來は來たのだが、東京からの電報に依つて、忽ち思ひ設けぬ穴に落ち込んだやうな氣持で、三階の窓から町の景氣を見下ろしてゐた。私は、だから、來たことを堀戸にも、西向にも、誰にも知らさなかつた、そして唯一人、ゆめ子にだけ知らした譯である。

「先生はちつとも外にお出かけになりませんし、折角お出でになつたのに、それでは何ですから、」と番頭が來て、肩から下げるやうになつた、黒い革のサツクに入れた舊式な望遠鏡を私に渡しながら、「惡い眼鏡ですが、どうかこれでもお使ひ下さい。……今、そこへ、この眞正面の道を、下の方から大名行列が上つて來るさうですから。……」そして、番頭は案内するつもりか何かで、私の腰かけてゐた西の窓の框に私と並んで腰をかけて、「ほら、もう、あそこ、あの阪の上のところへ『下に、下に、』の連中の來るのが見えますでせう。そら、もう槍の尖が段々見えて來ました。」

成る程、初めに供の裝束を着けて、『下に、下に、』と叫びながら、杖を引きずつて歩く人たちがやつて來た。それにつゞいて、槍持、挾ん箱などを持つた人たちがやつて來た。が、それ等は、私の見てゐるところから一直線に延びてゐる道を歩いて來るので、可成り不便な眺望であつた。それに、私自身の氣持が前に言つたやうに、決して晴々しない狀

態にあつたので、私には、見てゐて餘り樂まないのであるが、番頭は私の爲ではなく、彼の爲でゞもあるやうに、一人面白がつて、そして私も當然彼と感想を同じくするかのやうに、やれ當節の人があんな裝束を着ると似合ひませんねとか、あの一番初めに來るのが何の某といふ鍛冶屋で、喧嘩早くて、亂暴者であるが、町の顔役になつてゐる男だとか、あの二番目の槍持はもう六十近い男だが、これで五度目の御柱祭に槍を持つて出る古參だとか、夢中になつて見入りながら私に説明するのである、そしてその間、屢々、「恐れ入りますが 一寸眼鏡を、一寸眼鏡を、」と言つて、私からその持つて來た望遠鏡を取るのである、終には私よりも彼の方が望遠鏡の主人に見えた程であつた。

だが、彼は先程から私の機嫌が餘り浮き立たないのを知ると、「ゆめ子はもう間もなく來るだらうと思ひます、確か一時間ほど前に電話でさう言つて參りました。何しろ今日は藝者衆はお正月より忙しいもんですから……しかし、外ならぬ先生のお座敷ですから、今に參りますでせう、」と私を慰めた

私は望遠鏡を目に當てゝ、屢々大名行列を他所にして、町の景色を見廻した。私の部屋からは悉く目の下に見えるところの、町の宿屋と言はず、商賣屋と言はず、仕舞太家と言はず、會社と言はず、家といふ家はその道に面した場所を開け放つて、そこにありたけの毛氈を敷き、屏風を立て廻して、或所では酒を飲んでゐる者、碁を圍んでゐる者、歌つてゐる者、叫んでゐる者、町の人、近在の人、老人、子供、ありとあらゆる人々がありとあらゆる形をして、この大祭を樂んでゐるのが、私の舊式な望遠鏡の中に近々と映つて見えるのである。が、矢張り、それ等の中で、私の最も目についたのは、今日こそは一流も二流も、悉く島田に髮を結つて、紋付の着物の褄を取つて、座敷に坐つてゐるのや、町を歩いてゐるのや、兎に角群集の中に際立つて見える藝者の姿であつた。それ等の藝者の中にゆめ子は何處にゐるか知ら? と私は思ふのである、すると又、この大祭を他所にして、こゝにゐれば彼女等の中で第一の姉さんとして威張つ

てゐられる筈の小瀧が、今頃は東京の私の留守宅で何をしてゐるだらう？ と考へるのである。……

「先生、大名が來ました！」とその時私の耳元で番頭が叫んだ。「恐れ入りますが、一寸と眼鏡を拜借。」

そして彼は望遠鏡を目に當てながら、「いゝな、いゝな、流石にいゝな、」と一人口の中で感心してゐた。「あゝいふ大人びた恰好をすると、成る程、お父つあんによく似てるな。」

「一寸僕にも見せて下さい、」と私も彼から望遠鏡を受取つて、指差された方を見ると、供の人たちは槍持にしても、奴にしても、先拂にしても、悉く大人である中に、大名になつてゐるのは十二三の少年で、彼だけが籠の代りに馬に乘つてゐるのであつた。

「あれはどういふ子供なんです？」と私が聞く迄もなく、番頭が云ふには、

「この町でのあれは金持の坊ちやんがなるんでございますが、今度のは、先生、あれはゆめ子の子供の、お父つあんの息子さんです、つまりゆめ子の子とあの子とは腹違ひの兄弟になる譯でございます。お見えになるでせう、目のぱつちりした、鼻の少し低い、――お父つあさんにそつくりの顔をしてゐます。あゝして坊ちやんをこのお祭の大名に出さうとしますと、それや大變なお金が掛るんですからね。あの着てゐる着物を、もう二三枚肌脱ぎになつて居りますでせう、あれを何枚も何枚も脱がして、つまり何枚も何枚も下にいゝ着物を着せるのが親の見えになつてゐるのでございます。あの着物だつても大變な金目のものでせうが、それに大名の馬の綱を引張つてゐる子供が一人居りますでせう、あれは他所の子供を借りて來るんですが、その子供の衣裳もしてやらなければなりませんし、その外この行列の供廻りの人たちにすつかり心附けをしなければなりませんし、迚も少々の金持では出來るこつちやございません。……」

言ふ迄もなく、私は彼の言葉の後の方は聞いてゐなかつた。私は念入りに眼鏡の裏表を手巾で拭いて、その馬に乘つ

て、金襴の着物を二三枚も肌脱ぎになつてゐる子供の大名を、眼鏡越しに睥みつけた。すると、私に漠然とした、嫉妬とも、憎しみとも附かない感情が次第に募つて來て、私は私自身をお伽話に出て來る風の神と想像して、實際私が彼のやうに大きな風の袋を持つてゐたならば、立所にその袋の口を打開いて、見たところ無邪氣な顏をして、否々決して無邪氣ではない顏をして、そのつんと低い鼻を變な態度で空の方に向けて、白粉を眞白に塗つて裝飾した顏を、時々誰かゞ聲でもかけると見えて、にや／＼笑はす樣と言ひ、その一枚づゝ要所々々で肩脱ぎになつて、金襴と金襴と、緞子と又緞子と、縮緬と又縮緬と、無限のやうに着込んだ上着を一枚づゝ腰に垂らして、反り身になつて乘つてゐる子供の大名を、馬も、供も、或ひは町も見物も、大風を起して、諸共に吹き飛ばしてやりたいとさへ思つた。だが、さういふ無力な風の神が、さういふ辻褄の合はぬ謀叛心を起してゐるとは誰が知る譯もなく、やがて大名行列は靜々と私の目の下の角を左に曲つて、明神の社へと通じる道に進んで行つた。だが、私の見てゐるところからは、角を曲ると、一人づゝ三つ角の左側の、眞綿問屋の家の軒に隱れて行つた。

それから一時間ほど後のこと、四方八方から風に送られて聞えて來る祭のざわめきを耳にしながら、私はこんな祭を見に來たことを後悔したり、東京の私の留守の家で小瀧がどんな思をして待つてゐるだらうと思ひやつたり、ゆめ子はどんなに忙しいのか知らないが、何故顏を見せてくれないのだらう、若しかすると、否、もう多分小瀧がこんな祭を他所にして東京へ行つたことが、そしてそれが私の家へ行つたことが彼女の耳にも聞えて、それで彼女は來ないのではないだらうか、――私は千々に思案しながら、もう直に、出來るだけ早くの汽車を摑へて、東京に歸らうと思ひ立つたり、せめてもう一度何とかしてゆめ子に會つて行かうと思ひ直したり、そして氣分がどうしても苛々して來ると、立つて西の窓から天を覗いて見た、天を覗いて見たと言ふのは、町を見ないで靜かな山の遠景を見ようと思つてゝある。だ

が、空は曇つた日ではなかつたが、最早やそんな寒い山國ではあるが、春の霞がこめてゐる爲だらうか、幾ら目を凝らしても、御嶽山も、乗鞍山も見えないのである。その時、女中が部屋の入口に現れて、

「堀戸さんといふ方がお見えになりまして、一寸失禮ですが、先生にお玄關まで……」と言つた。私はどうして堀戸が私が來てゐることを知つたのだらう、多分宿の番頭とでも町で逢つて、私が別に口止めして置かなかつたから、彼から聞いたのであらう、それにしても西向はどうしてゐるのであらうかと思ひながら、玄關に下りて行つた。堀戸は例の辯で、女のやうに兩手を股の邊にそろへて、しなをした恰好でお辭儀をしてから、何の前置の挨拶もなしに、

「先生、もう間もなく御鏡が通るんでございますが、こゝの御部屋からですと、大名行列などと逆つてよく見えませんと思ひますので、どうぞ會社の方へお出で下さいませんか。お席を取つて置きましたから、私が御案内いたします、是非どうぞ……」

彼は私が二三度辭退した言葉にも拘らず、どうしても私を連れ出さねば歸らないやうな氣配なので、私は、もし留守中にゆめ子が來たら……と思ふと、何としても行き度くなかつたのであるが、仕樣がないので彼に連れられて外に出た。彼の會社といふのは、私の宿から半町と隔つてないところなので、直にそこに着いたのであるが、私は途で「西向君はどうしてるんです、さつぱり消息がありませんが、此地にゐるんですか？」「えゝ、居ります。」「會社にゐるんですか？」「……えゝ……」といふやうな問答を交した。が、堀戸は私を、昔の關所か何かに見るやうな、黒い丸太ン棒の柵をした電氣會社の中に案内して、そこの書記の一人に紹介して、私のことを賴んでしまふと、

「あの、私はこれから又一寸山の上へ行つて參ります、今日はこんなお祭ですから、中尾君と半日交替で下りて來ることになつてゐるんです。」と言つて、私が何か言はうとした言葉も聞かないで、大急ぎで外に出てしまつた。

間もなく、表の方にざわめく聲が起つて來たかと思ふと、先に堀戸が私を紹介して行つた書記が私の傍に來て、「御鏡が通るさうですから、御席へ御案内いたしませう、」と言つた。この電氣會社も堀戸等のゐる山の會社と似てゐて、先に言つた柵の中に見たところ五十坪ばかりの空地があつて、それを隔てゝ貧弱な建物が立つてゐた。逆に言ふと、何々電氣會社と書いた標札の出てゐる門をくゞつて、その空地を横切つたところに、會社の建物があるのである。私は今書記に案内されて、その空地を横切つて行くと、先に言ひ忘れたが、その黒い丸太ン棒の柵の内側に、一間程の間隔をあけて、それと並行して紅白の幕が張られてあるのは、どういふ譯だらうと不審に思つてゐたところが、今來て見ると、柵とその幕との間に二列に澤山の椅子が並べてあつた、そして未だ餘地のあるところに、小使や、給仕たちが建物の中からありたけの椅子をそこへ運んでゐる最中だつた。つまり幕を背にして、各々の人が椅子に腰かけて、黒い柵の間から、往來を通る御鏡を見ようといふ計畫なのである。私は書記に賴んで、なるべく隅い方の椅子の一つに坐ることにした。そして私が彼と並んでそこに腰を下ろした時は、丁度小學生徒の綱引遊戲が敵味方ともに同じ方角に引張るやうな恰好で、二本の綱に蟻のやうに大勢の人間が止まつて、それを引きずつて歩いてゐる光景が展開してゐた。彼等は綱を引きながら、既に私はそれの練習中に聞いたことがあるので、私の耳に聞覺えのあるところの例の木遣節のやうな調子の歌を、一節づゝ切りながら歌つてゐた。聞いてゐると、誰か後の方でその音頭を取る者があるらしく、綱を引く群集の歌聲が切れると、遙かに後の方で、確に一人の聲で、模範の一節をうたふ聲が聞えて來る、そしてそれが一節終ると、群集は忽ちそれに附いて合唱すると見えるのである。

「この綱の後に所謂御鏡が附いてゐるのですか?」と私が並んで腰かけてゐる書記に聞くと、

「えゝ、さうです、」と彼は答へた切りで、脇目もふらずに、一生懸命に柵の丸太ン棒の間に顏を推し附けて、往來の

綱引に見入つてゐた。

それは未だ村から村へと順々に渡されて行く間は、それ〴〵の所屬の村の若い衆たちが引つ張つてゐたものであるが、今日はこの明神の氏子であるところの、それ等の村々全體の若い衆が總出で引張つてゐるのださうだから、私たち見物人の前を綱の部分が通り過ぎる間だけでも、驚くほど長い時間が掛つた。が、漸くにして次第々々に御柱が近附いて來る氣配がした。私は初めは綱引の歌の音頭は一人であると思つてゐたところが、今言つたやうな長い一列であるから、後で知つたところに依ると、根元の御柱の上で一人の男が歌ふと、要所々々に取次の音頭を取る男があつて、大凡十人以上もさういふ者がゐるのである。それ等の人々は白い神主の着るやうな裝束をして、二本の綱の間に這入つて、行列と共に進行しながら、幹部の御柱のところで歌ふ大音頭取の歌と一緒にうたふのである、すると、それ〴〵の彼等の歌を聞き得る部分の引手たちが附いて歌ふのであつた。

そして、到頭御柱が私たちの前に進んで來たのである。そんなに大騷ぎして引張られてゐるものは、と見ると、それは四本の柱を筏のやうに組んで、その上に御幣が立てかけてあるところの、唯大きなばかりで、至極簡單な呆氣ないものであつた。ところが、その御柱の筏の上に一枚の莚が敷いてあつて、その上に音頭取の總領であるところの、だから今迄のどの音頭取よりも、同じ神主流の白衣の裝束ではあるが、立派な風采をして、手に持つてゐる御幣を管絃樂の樂長のやうに振りながら、御柱の歌の音頭を取つてゐる男を見て、私は驚いたのである。彼を見る前に、私はその聲が遠くに聞えて來る時分から、どうも聞いたやうな聲だとは思つたのであるが、私は自分自身の物思の爲に、そんな事に、彼を目のあたり見る迄は殆ど頭を費さなかつたのである。

「西向君がやつてるよ、やつてるよ！　何とか聲をかけてやらうか！」と私の近所の椅子にゐた電氣會社の人たちが

斯う言ひ合つてゐるのを聞く迄もなく、それはまぎれもなく西向觀山なのであつた。

西向觀山は御柱の先の方の、莚の上にまるで活人形のやうな恰好をして突立つてゐた。彼は歌ふ爲に口を開く事と、拍子を取る爲に手に持つてゐる御幣を振ることの外には、それ等の運動さへどうかすると人形の仕掛か何かのやうに見えた。彼は釘付けにされたやうに動かなかつた。從つて、彼は自分の勤めてゐる電氣會社の前を通行しつゝある時も、即ち彼の同僚たちが黒い大櫓の間から一勢に見物してゐる方へも、一瞥さへもくれないで、唯だ歌ひ、唯手を振つてゐた。恐らく彼はいつ何處を通つてゐるかさへ夢中であるやうに見えるのである。私と並んでゐる書記の話に、初めこの大音頭を取る人の人選に就いては、色々な人たちが選ばれたのであるが、最近に、祭の十日ほど前に、急に今迄の人に用事が出來たり、多少の缺點があつたりして、彼が選ばれるやうになつのださうであるが、その最初の動機は或晩彼が醉酊して、町をふら／＼歩きながら、いつの間に聞き覺えたのか、その御柱の歌をうたつてゐたのが、それが誰かの注意を呼んだといふことで、調べて見ると、兎に角中流の、相當に教育のある人間でもあり、殊に元々音樂が大變好きであるといふので、彼を賴みに來たのださうである。言ふ迄もなく、彼はその妙に內氣な性質を以て、泣くやうにして幾度も斷つたのであるが、それではせめて、稽古の時にでも來てくれと言ふことになつて、それ迄も斷る譯に行かなかつたので、一度行き、二度行き、そして一度うたつて見せ、二度うたつて聞かせるうちに、一層その巧さが人々を驚かして、無理耶理に今度の大音頭に選び出されたのださうである。町の人々は彼を選んだことが間違ひでなかつたのを喜び合つてゐるといふ噂であつたが、「成る程、これや巧い。それにあんな內氣な男ですが、內氣なだけに夢中で、實に熱心ですな、あの熱心なところがいゝな、」と書記は半分は獨言のやうに言つて、相變らず櫓に顔を押しつけて、歌つてゐる西向觀山から目を放さなかつた。

さういふうちにも、御幣を振り振り、歌つてゐる西向觀山の姿は、一寸か二寸かづゝ、徐々に私たちの前を過ぎて行つた。恐らく私は今一時間程前に見た子供の大名の身分に就いて聞かず、又この音頭取の西向と知合の間柄でなく、彼等が同樣に私に知らぬ他人であつたとしても、前者は風の神になつて吹き飛ばしてやりたいと思ふと共に、後者には滿腔の好意を持つことに變りはなかつたに違ひない。一口に言ふと、彼は子供の大名のやうに反り身にもならず、肌も脫がず、況して時々にや〳〵と笑ふこともなく、左右を顧ることもなく、彼は唯々恐縮し切つてゐた。そして恐縮しながら滿身に汗をにじませて、御幣を振り振り、夢中で歌つてゐた。その聲は、いつか彼が賢くもそれを知つてゐて、私に悲みながら言つたやうに、鼻の寸が短いので、聲の調子が極僅か狂つてゐたが、今この木遣節に似た御柱の歌を歌ふのに、それが最も適當した音聲となつて、人の心をひし〳〵と感動させるのである。私は一二寸づゝ、彼の歌聲と、それに和して綱を引く千人の歌聲とに連れて、私たちの前を進行して行く彼の姿を見送りながら、目と目の間の鼻の邊がむづかゆくなつて來るのを感じた。やがて後を見せて、次第々々に遠ざかつて行く西向觀山の姿は、面白いとも、悲しいとも、嚴肅なとも、滑稽なとも、何とも名狀しやうのない感じを私の胸に刻み込んで、それが淚となつて私の目をうるませたのである。

今は早や、その時から足掛三年の月日が經つのである。が、御柱祭の年に緣を結んだ私たち夫婦は、どんな明神の怒りを免れたのか、見たところは今だに一通り和合して暮してゐるのである。けれども又、考へやうに依つては、夫婦の上に加へられる神の罰は、離別一點張りとは限られてゐないので、私たちの上にはもつと嚴しい彼の罰が加へられてゐ

るのかも知れない。他所目には、そして實際上にも亦一通りは、好き合つたやうな形で、夫婦になりながら、私たちが同じ屋根の下に住むやうになつた日から、或ひは私たちが知り合ふ前から、私が山の町に殘つてゐる今の私の妻の朋輩藝者であるところのゆめ子に、折に觸れ時につけ、絶えず心を通はしてゐるといふやうな境遇も、確に神の罰の一つに違ひない。或ひは又私の妻にして見れば、漸う三十年の辛抱の實が結んで、長い間憧れてゐた生れ故郷の東京に歸ることが出來て、而も、私が言ふのも變なものだが、相當な、引目を感じない男の、妾にではなく、妻になり得たことは、それは確に夢ではないのだが、夫婦になつてから唯の一度も並んで歩いたこともなく、病氣の時の外は一日として二時間以上向ひ合つたこともなく、彼は自分を愛してゐるのか、ゐないのか、どんな事を考へてゐるのか、外に出たらどんな事をしてゐるのか、嘗て一度も彼自身の考や出來事やに就いて語つたこともなく、考へて見ると、幾ら考へて見ても、今となつてはさういふ譯にも行かないが、又山の町を引上げる時には二度と歸らぬつもりで出て來たのだが、折角一人前の藝者にはなつてゐたし、自分の手で何人かの抱え妓さへ置いて、一家を張つてゐたし、あゝその時の方が、どんなに氣樂で、安心であつたらう、と最早や及ばぬ後悔に煩悶してゐるのも、これ亦確かに明神の罰の一つに違ひないであらう。更に又、夫婦共に三十歳を過ぎて、たとへ明日の生活に何の安全も約束されてゐないとは言ふものゝ、謂はゞ相當に贅澤なその日暮しの生活をしてゐる私たちに、最早や丸三年に近い夫婦暮しをしながら、一人の子もなく、それは多分永久にないだらうといふことは、これは明神が私たちに加へた罰の最も重大なものであらうか。

その祭のあつた年の秋のことだつたと思ふが、或日その私たち夫婦の家の玄關に、突然西向我山が現れたのに私は驚かされたことがあつた。

「突然ですね、いつ來たんです？」と彼を座敷に通してから私が聞くと、

「もう半月程前からなんでございます、」と彼はいつもながらの恥かしさうな恰好をして言つた。

私はいつかの御柱の祭をそつと見に行つたことや、而も堀戸に案内されて會社の座席から彼の歌ひ振りを見たことやを、東京に歸つてから彼に感謝して書いてやつたことがあつたが、それに對して彼からの返事の代りに、堀戸から、彼が西向の厭がるのを承知しながら、私を御柱の祭に案内狀を出したのみならず、そんな會社の座席にまで迎へに行つたことを、殊に今度の私の手紙を見て、改めて西向から非常に叱られた、といふことを書いて來た。それ切りで私たちは消息を絶つてゐたのである。

「堀戸君はどうしました？」と私に彼の上京から思ひついて、やはり上京して音樂をやりたいと言つてゐた堀戸のことから遠廻しに聞いて見た。

「堀戸君ですか、」と彼は力のない聲で言つた。「堀戸君は轉勤になつて、島々へ行つてしまひました、非常に悲觀して居ります。」

「島々といふと日本アルプスの入口の、――あつちの方ですか？」と私は聞いてから、段々相手の西向の事情に移つて行つて、「で今、君は何方にお住居なんです？」と聞いて見た。

彼は、見たところ、東京に來た甲斐もなく、妙に悄然としてゐて、着てゐるものなども餘りさつぱりしてゐないのである。彼が言ふには、「どうも田舍がだん〳〵つまらなくなつたものですから、以前甲府の私の家に居りましたもので、當地の四谷に來て相當にやつてゐるものがありますので、そこへまあ住み込んでゐるやうな譯なんでございます。あの田舍にももう六年住んで居りましたので、飽き飽きしてしまひました。……」

つまり、彼は東京に來て、音樂でなく、再び印判の職人になつてゐるらしいのであつた。そして今彼が住込んでゐる

四谷の印判屋といふのは彼の父の家にゐた職人で、彼の父に可成り世話になつたものらしく、それだけ今彼がその家を他依つて行つて、多少とも仕事を手傳ひはするものゝ、明らかに冗員として、半分は居候の資格で住んでゐるといふことを、甚だ窮屈に感じてゐる様子であつた。だが、彼は私があの山の町で會つた時もさうであつたやうに、その時も決して自分の境遇や心持の悲しさや苦しさを直接に表現しなかつた。そして、毎日二階でごろ〳〵寢轉んでゐます、退屈も馴れて見ると中々味のあるものですとか、私の部屋の窓からは夕方になると富士山が實によく見えます、富士山といふ山も退屈と同じことで、ちつと見てゐますと實に味のある山ですなとか、ですけど、一旦決心して田舍を引拂つて來たのですから、まあ、これからどうなりますか、何にしても土にかぢりついても、當地にゐるつもりですとか、――いふやうな事を、なるべく言葉に餘裕を持たせて、ぽつり〳〵と話した。

私は彼の性質を知つてゐるので、彼が恐縮するのを氣遣つて、いつかの御柱祭に就いては、何にも言はずにゐた。彼も亦それに就いては何にも言はなかつた。彼は一時間ほどゐて、歸つて行つたが、歸り際に玄關の所で、「失禮します、さよなら、」と言つてから、「あ、これは變なものですけど、どうぞ、」と言つて、新聞紙に包んだものを置いて、逃げるやうにして歸つて行つた。後で開けて見ると、國華といふ紙卷煙草の袋を五箇、叮嚀に紙に包んで水引をかけたのと、もう一つ何か小さなものを、同じやうに紙に包んで水引をかけたのとが這入つてゐた。小さい方のは、彼がこしらへたもので、私の名前を刻んだ象牙の印判であつた。

彼はそれから一年間ほどの間に、合はして三度位私のところに來た。そしていつの時でも、或ひは石鹸半打とか、タオルとか、さういふ種類の、妙に實用向きの品を、歸りがけに新聞包みのまゝで置いて行くのが常であつた。「これはお粗末なものですけど……」などと言つて、人の前で麗々しく出すことなど、彼には乾度變に恥かしくて出來ないのであ

らうか。彼は時々、「私のやうなものでも、何か書けるものでせうか、書きたいと思つたら、書いて見てもいゝでせうか。」といふやうな事を言つた。「書きたいと思つたら、書いて見てもいゝでせう。」と私が答へると、彼はまるで大變な事でも許されたやうに、「有難うございます、有難うございます、」と言つた。だが、到頭一度も私は彼の書いたものといふのを、見たことがなかつた。「此頃は音樂の方は……？」と聞くと、「いや、迚もそんなものをやつて居られません、」と言つた。

その二度目に來た時は、一度目の時から四五ケ月も後のことであつたと思ふが、その時の話に、「堀戸は到頭島々の方の勤めを止めて、又諏訪に歸つて居ります。」「諏訪で又勤めてゐるんですか？」と私が聞くと、「さうは行きません。だから仕事がなくて困つてゐるものですから、今は方々から印刷の注文をとつては、私の方に申込んで來るといふやうな仕事をしてゐます、一つの注文に何割かの禮をやることになつてゐるのですが、大したことはありませんから、困つてゐるでございませう、」と西向の話であつた。「ですから、堀戸も亦、今の私と同じことで、もう音樂どころの騷ぢやないんでせうが、東京へさへ來たら何でもいゝ事があるやうなつもりで、始終私のとこへ手紙を寄越します。ですが、私は田舎者が東京に來たら、泥坊か乞食の外にすることはない、とその度毎に返事してゐるんですが、堀戸はそれが何か私が意地惡でもするやうに思つてゐまして、近頃では怒つてゐます。ねえ、先生、私たちは東京で何をしたらいゝでせう？」

私は氣がついたのであるか、第一回の時よりも、その時の方が彼が一層悄然として見えたことであつた、着てゐるものも一層汚れてゐるやうであつた。その時まで、私は彼の容貌を見る度に、それが樂天的なものか、厭世的なものか、明るい顔なのか、陰氣な顔なのか、解決に苦んだものであるが、その時こそ始めて、それが決して樂しいものではない

ことを見出した。實際、その手入れのしてない、無雜作に分けた髮の毛も、太い眉毛も、寸の短い彼の恰好も、さてはその鼻の下の太く短い口髭も、勤人のやうにも見え、かと思ふと爭れないもので忽ち職人らしくも見えるところの、その全體の感じも、それ等の一つ一つが泣いてゐるやうな表情をしてゐることを私は感じ出したのである。そしてその泣き顏が時には笑つてゐるやうに見えることがあるだけなのである。

何でもその翌年の正月に、彼から寄越した年始狀に、西向觀山と書いた横側に括弧をして、住所選定中としてあつたので、笑はされたことがあつたが、果してそれから一ケ月ほど後に、牛込の方の何某方といふ所書きで、移轉したことを知らして來た。彼は到頭四谷の印判屋に別れを告げて、二階借の生活を始めたらしかつた。その後、私のところへやつて來た時は、更に一層悄々としてゐた上に、ひどく肉體的にも窶れて見えた。「やつぱり私のやうなものには、山の見える所でなければ暮せないんでございますな。植木と同じことで、野に生えるものとか、川べりに育つものとか、山でなければ育たないものとか、人間にもそれ〴〵合ふ土と合はぬ土があるんぢやないでせうか、先生？」と彼は言つた。「私はもう此頃では退屈にも飽きましたので、毎日東京の町を歩いて暮して居ります。毎日歩くとゑらいもんですな、實に下駄が減るんでございます。……」

「先生、東京からも山は見えないことはないんでございますね、」と西向はいつになく雄辯になつてつゞけた。「との上野の公園などからもお天氣の夕方なら、屹度富士山から箱根にかけての山がよく見えますのを、先生は御存知ですか？ もつとも此頃は一年中で一番よく山の見える時ですが、先生、田端といふ方へ行きますと、筑波山が見えますね、私は初め何といふ山だらうと思つて、往來の人に聞いて見たんですが、誰も教へてくれないんでございます。ところが三度目に行つた時に、その田端の停車場の傍のとこですが、御存知でせう、あの前の方が大きな穴のやうな、崖のやう

になつたところです、ですから、往來の片側に柵がこしらへてある、あそこのところです、甘酒屋が丁度荷を下ろしてゐたものですから、甘酒を一杯飲みながら聞いて見ましたら、そしたら敎へてくれたんです。先生、あそこからは筑波山ばかりでなく、日光とか、秩父とかの山も見えるんでございますね。先生、秩父の山は甲州の山に一寸趣が似て居りますね、さうはお思ひになりませんか？　もつとも、それを知つたのは極く近頃のことでして、それ迄は毎日程この上野へ來たんですが、先生の所へはいつでもお寄りしたいんですけれど、いつも先生のお邪魔になるだらうと思ひますもんですから……」

實際、彼の性質として、この言葉の通り、彼は私のところへ始終來たいと思ひながら、私の邪魔になりはしないかと思つて、その度每に遠慮して來ないに違ひなかつた。或時は折角私の家の前まで見ながら、玄關に客の下駄らしいものが幾つも脫いであつたので、人が見てゐたら隨分怪しく思ふだらうと恐縮しながらも、引返したことが三度もある、といふやうな話さへした。そして彼はそんな山の話ばかりして、何故四谷の印判屋を出たのか、どうして二階借をしたのか、そして何をしてゐるのかといふやうな話に就いて、詳しいことは何にも言はなかつた。だが、彼が可成り苦しい境遇にあるらしいことは、言葉の端々に現れてゐた。が、彼は依然として山の話ばかりつゞけるので、

「甲州の山といへば、東京の近くからそれが見えるのを知つてゐますか？」と私もつい山の話に引込まれて、斯う言ふと、

「え、本當ですか、先生、本當ですか、何處からです？」と彼は膝を進めて聞いた。

で、私が、外の、市內の愛宕山とか、或ひはその外二三箇所からも見えるところがあるさうだが、それ等に就いては詳しいことは知らない、私の知つてゐるのは、京濱電車の川崎驛の傍の、六鄕川の前後の低地のところへ行くと、電車の

中からでも、或ひは下りて見るなら川崎驛で下りて見ると、西北の方に甲斐ヶ根の三座の山が、まるで砂糖の山のやうにくつきりと見える、汽車の中からでも、それ等の山は暫くの間、電車が走ると共に、家や、林の頭の上を走つて見えるといふことを話すと、彼は驚きと喜びとで、即座に座を立ちさうにした位であつた。

私の外の大勢の友達の中で、山の話をそんなに興味をもつて、熱心に語る人は一人もなかつたので、私はその點だけでも西向と會ふことは、どんなに自分の仕事の忙しい時でも、決して厭ではなかつた。まして、彼の極端に内氣で、それに何處か田舍の人には珍らしく彼拔けのした所があつて、而も善良な性質に、私は十分好感を持つことが出來た。だが、私が彼を歡迎するのにもう一つの重要な原因があつた、それは外でもない、彼が多分堀戸から聞くのであらうが、あの山の町の新しい消息を來る度に傳へてくれることであつた。山の町の消息と言へば、即ち彼女の(私の愛するゆめ子の)消息を含まねばならぬのである。けれども、彼女等の(山の町と彼女との)新しい消息と言つても、彼女等の一ヶ月は、私たちの住んでゐる都會の一日の變化をも持たなかつたから、要するに、此間何々屋の番頭に會つたら、先生に宜しくお傳へしてくれとのことであつたとか、何月何日の朝、堀戸がその近所に用事があつて、夢の家の前を通つたら、ゆめ子が襷がけで水汲をしてゐたとか、昨夜湖心亭の入口から、褄をとつたゆめ子が出て來るところを、ちらと見かけたとか、此間町の芝居小屋で東京の歌劇團といふものがやつて來て、手品と歌劇とを交る交るにやつたとか、さういふ種類のものに過ぎなかつた。が、それ等を西向は私に話すのに、(彼は、この前山の町で會つた時には、一人の年增藝者に過ぎなかつたものが、次に東京の私の家で見た時は、けろりとして私の妻になつてゐる女に向つて、生れた時からの私の妻ででもあるかのやうに、鄭寧に、奧樣、奧樣、と挨拶してゐたが、)その私の女房が傍にゐる時は勿論遠慮して話さなかつた、そして彼女が傍にゐない時を見計らつて、一段と聲をひそめることを忘れなかつた。

だが、話は、愛する私には、それより以上を要しなかつたのである。私にはゆめ子があの阪の上の彼女の家の前にある、共同の堀井戸へ、襷掛けして水汲みに行つたといふことだけで、又彼女が褄をとつて、湖心亭から出て來たといふことだけで、或ひは又堀戸が町で何々屋のあの顔のつるりとした雄辯家の番頭に會つたといふことだけで、それ以上を要しなかつた。私は端折りの着物を着て、襷をかけて、細い身體に重さうにバケツを下げる彼女の姿、バケツの重さに惱む彼女の顔の表情、褄をとつて俯向き勝に、何か悲しい事でもあつたやうな恰好をして、さういふ料理屋から出て來る時のすらりとした姿、さては町の共同湯の往來まで溢れる湯の匂から、最早や雪の爲に白くなつた四方の山々の景色やら、いろいろの風物が目に見た百倍もの、樣々の姿で心に浮かぶのである。――

西向觀山は私が京濱電車の沿道から、彼の生れ國である甲州の三座の山が見えることを教へてから、三日に上げずそこへ出かけて行つたらしかつた。彼からはそれに就いて一ケ月おき位に二度ほど葉書を寄越した。その二度目の葉書では、彼は最早や春になつて、どの日もどの日も、甲斐の山が見えなくなつたことを、人に別れたよりもつと悲んで來た。彼は今日こそはと思つて、幾日か出かけて行つたらしかつた。けれども、東京でどんなに空が青く晴れてゐても、その六郷川の邊に行くと、青い空は頭の上だけで、彼が仰ぎ見る西北の空も、多分その何の方角の空も、地平に近くなるに從つて、乳のやうに白く淀んで見えた。彼は或日野に居る百姓に尋ねたところが、もうこれからは幾ら天氣のいゝ日でも、向うの山は見えませんと答へられた。その事を私に報じて來たのである。

それから又一ケ月程後、私は同じ人から、甲府何々町といふ肩書をした、手紙をもらつたのである。彼は到頭、又彼の故郷の山の町に歸つて行つたのである。それに甲斐ケ根の三山の峰の雪が次第に消えて、その南の端の農鳥山に、殘雪に依つて形造られる有名な鳥の形の現れる頃であつた。彼はこゝに、父の家に一ケ月ばかり滯在してゐる、毎日毎日

山を見て暮してゐる、六郷からは見えなくなつた甲斐ケ根の、南の端の鳳凰山だけは、三日に上げず見ることが出来るやがて私はやつぱり六年間住み馴れた諏訪の町に歸るつもりです、諏訪に歸つて何をしませうか、それは未だ考がつきません、が、今兎に角、堀戸君に家を探してもらつてゐます、私が彼方へ行きましたら、先生どうか是非入らつしやいませんか、ところで先生、昨日堀戸君からの手紙に、ゆめ子は又子を孕んださうです、それで、近いうちに藝者を引くさうです、と書いてあつた。

私は彼の手紙を掴んだまゝで、思はず部屋の中で棒立ちに突立つたのである。彼〃が子を孕んで藝者を引いてしまへば、それを生み落して、また再び藝者に出る迄は、丁度六郷河原に春が來て、甲斐ケ根が見えなくなるやうに、私は幾ら飯田町から汽車に乗つても、彼女を見ることは出來ないのである。

だが、私は今まで言はなかつたが、實はたとへ私が彼女の町に出かけて行つて、たとへ彼女がまだ藝者をしてゐても、暫くでした、と言つて、笑つて彼女に會へない事情があつたのである。といふのは、私は足掛け三年前、御柱祭の後に、私はその時々に都合のいゝ友達を引張つて、私の女房には内所で前後四度ばかり、彼女の町に行つたことがあるのである。ところが、その三度目の時のことであるが、或晩、私は一緒に行つた友達と、彼女と、彼女の逆の藝者と、四人で近くの町に、自働車に乗つて活動寫眞を見に行つたことがあつた。その翌日私たちは、私がどんなに長く落着いてゐたくても、落着いてゐられないその町を立つたのであるが、その時のことを、町の新聞で何か隠れ事で　しに行つたやうに書いたといふ事件が起つた。私はこれ迄に、自分の職業である小説に、屢々彼女に似た女をモデルに使つて書いた事があるので、それでなくてさへ、彼女の子の父親か、或ひは目下彼女が特に贔負になつてゐる旦那かのありもしない嫌疑を受けて、不機嫌を買つてゐたに違ひないのに、その新聞の記事に依つて、彼女か（或ひは彼等か）の更に厳しい咎めを

彼女は受けたらしいのである。彼女は或日私に手紙を寄遣して、その新聞の切拔を封入して、どうか私と先生とは、特別の怪しい關係はないのですから、その事を、私を可哀さうと思つて、書いて來てくれませんか、と言つて來たことがあつた。その手紙は、私の女房に、私が彼女に隱れてその町へ出かけて行つたことを知らせた上に、嫉妬の感情で彼女を可成りに怒らせた。だが、そんなことは私として幾らでも忍ぶとしても、考へて見ればそれは女から私への絶交狀でもあるに違ひないのであるから、私は悲みの餘り呆然としてしまつた。嘗て添寢したこともなく、嘗て戀を語つたこともなく、それでゐてこの世の中で私の最も愛する者であるところの女から、そんな手紙を受取つた私の悲みは、實際譬へやうもない程であつた。私はそれに返事を出さなかつたのである。

だから、四度目に私は一人で行つた時、例の三階の部屋にこもつたまゝで、呼ばうか呼ぶまいかと、三日の間毎日朝方の窓から窓へと部屋の中を歩き廻つて、そして到頭彼女に會はずに歸つて來たのである。私はそれを、その頃はまだ東京にゐた西向觀山に、行つたといふことだけはその度毎に話しはしたが、彼女との間がそんな風になつてゐるとは話さなかつた。だから、今の私には、晴れた冬の日に、六鄕川原に行つて甲斐ケ根を見るやうに、そんなに易々と彼女を見ることが出來るかどうか、たとへ勇氣を出して飯田町から汽車に乘つたとしても、それは丁度西向が東京に來たやうに、恐らく要領を得ることは覺束ないのである。

けれども、私のやうなものには、どんな艱難な境遇にゐても、そこに夢見る餘地さへあれば、又悲みのうちに樂み、憂ひのうちに樂むことが出來るのである。だから、彼女と私とがどんな境遇や關係にあらうとも、彼女がその町に藝者でゐさへすれば、たとへ行きはしなくても、或ひは又行つても、四度目の時のやうに到頭會はずに歸つて來るやうなことがあつても、私は希望を樂むことが出來るのである。それが、いつか私たちの何でもない唯の散歩が、新聞に間違つて

載せられた時に、彼女を咎めて、彼女にそんな手紙を書かせたところの、男の種であらうか、兎に角子を孕んだ爲に、彼女が藝者を引くといふ西向からの消息は、愚かな、併し私の身にとつてはこの艱難な浮世に於ける、唯一の慰めであるところの心地よい假睡から、棒でもつて叩き起された程の打撃に違ひなかつた。私が彼の手紙を摑んで、部屋の中に芝居の幕切の役者の眞似のやうに、棒立に、突立つた所以である。

私は取るものを取敢ず、是非行つて見たいと思つたのである、山と彼女の國へ！



巷の雜音

藤村千代

東向の高窓であつたから、未だ夜の明方でも、ほの白い微光が、雨戸の隙や節穴からお絹の枕元まで流れ込んで來た。その微光を未だ見開かない彼女の眼瞼に柔く感じ乍ら、お絹は木綿薄團の粗い肌觸りを享しむように、兩方の足を二三度、伸べたり縮めたりして居た。そして心の中で、

「もう起きなければ…………」と未練げに呟いて居た。

と、突然、ギツチ、ギヂギチギチ………とミシンの針を刻む音が、頭の中まで響いて來た。まるで腦味噌を齒車にかけて刻みでもするように、不快な鮮かさでお絹の頭を脅して來た。お絹は急に眉を顰めた。

「何だつてお隣りではこんなに早くから遣り出すんだらう、」

と、眠り足らない眼を、後方の厚い壁の方へ向けた。が、軈て思ひ切つて寢床の中から起き出し、荒々しい程な手早さで、雨戸を繰つた。水のような光線と青草の匂と

が、一時にお絹の顔に降注いだ。甘い水氣を含んだ朝風が彼女の後れ毛を撫でて過ぎた。お絹は少し踵を爪立てて背伸びをし乍ら、高窓の敷居に兩手を組合せて倚りかゝつた。直ぐ鼻の先に表邸の黑板塀がぬつと列んで、楓や櫻の梢が、朝露に濡れたしつとりとした明色を見せて居た。黑板塀の閉ひ一杯に盛り切れないで、僅かに洩れ出た朝風であり青葉であつたが、凡ての快いもの新しいものを拒まれたお絹にとつては有難いものであつた。暫くうつとりと快い陶醉の中に浸つて居た。

が、ふと、たつた今、頭の中を搔廻したミシンの響が彼女の顔を暗くした。………こんな宏壯な庭園の持主である隣家の人達が、貧しい自分と同じように、未だ夜の明け切らぬ間からミシンを遣る氣遣ひがない。よし又こんなに早くから遣つて居たにしても、牧草の廣つ原や、花壇や植込などのずうつと彼方にあつて、この窓からは僅かに屋根の一角が遠見に望まれるだけのその母屋から、あんなにはつきりした、腦味噌を引搔き廻さないではおかないような不愉快な音が響いて來やう筈がない。………

お絹は高窓から離れて、彼女のたつた一つの財産であるミシン臺の前に腰を下し乍ら、考へた。素麵の空箱であつたその腰掛がギシギシと微かに鳴つたが、あとはしいんとして、何處からもミシンの刻む音は響いて來なかつた。

「矢つ張り、頭のせいかも知れない、」

お絹はこのミシン臺が始めて彼女の部屋に運び込まれた時の、大きな喜びを思ひ浮べようとした。それは遠い昔の事のようでもあり、唯つた二三日前の事のようでもあつた。思ひ出す度びに。氣ざなちよび髭を貯へた、ミシン販賣人ののつぺりした面構へが、お絹の頭の心で、エヘ、、、と卑しい追從笑ひをして居た。

「急にお部屋が狹くなりましたね、」

た、その男は狡猾さうな一瞥で、お絹の貧しい三疊の間を、ぐるつと一遍に見て了ひ乍ら、

「これで毎日お稼ぎになりや、好いお衣裳は着放題、おいしいものは喰べ放題、」

お絹はそう言ふ腐つた女の誰るやうな言葉遣ひが大嫌ひであつた。その上、その男の言葉の調子には、月賦購入のミシンで稼がなければならない、若い貧しい娘の境涯を蔑む様子が不遠慮に出て居た。然し幸な事には、その時のお絹は餘り有頂天になり過ぎて居た。餘り嬉しがり過ぎて居たから、男の言葉をちつとも氣にしなかつた。

「私のやすむとこが無くなつて了ひましたわね、お部屋中ミシンがのさばり出して、」

彼女の眼尻と唇が何時までもだらしなく笑ひ續けた。

「あの時はどんなに嬉しかつたらう。」

お絹はおそる〳〵踏臺へ足を載せた。男から幾度も催促せられてやつと、爪先に力を籠めてぎいつと一つ押した。ぎい、ぎい、臺の上の滑車が眩い銀の輪を畫いて、廻轉する、それにつれて縫針が、めまぐるしい早さで、チクチクと布地に喰ひ込んで行く、何といふ精巧な、愛すべき機械であつたらう。これが、今日から自分の持物で、この部屋に据えてある！お絹はその男の足音が階段の下に消えると同時に、滑らかなミシンの胴體を抱へるようにして、横髮を摺りつけた。氷のような冷たさが、快く彼女の觸感を刺撃した。

お絹の薄い唇がひとりでにゆるんで、低い唱歌の聲が洩れた。頭の中では、明日の日から彼女の眼前に拓けて行くであらうエデンが、ぐるぐると廻轉した。彼女は決して、米を買ふ金にも、間代を拂ふ金にも困らない、國許に遣して來た老いた父親と、一人の弟とへ送金する、あはよくば、弟を手許に呼寄せて好きな勉强をさせて遣り度い！お絹は涙ぐましい感激を以て父親へ手紙を書いた。夜毎に人の寢靜まる頃を、「火の用心」の鈴を鳴らし、雨に濡れては呼び歩く老

父の姿と、ゐろりにそだをくべて父親の歸りを待つ憐れな弟の姿とを、心の中に描き乍ら。

然し、それから十日も經たない間に、空想のエデンはあと方もなく消えて行つた。お絹の唇には再び唱歌の聲が上らなかつた。それは何といふ不愉快な仕事であつた事か。朝早くから寢る時までの終日は、我慢のならない、長い長い時間であつた。ギッチギチギチ、唯つたそれだけの單調な響きは、彼女を殺して了ひそうであつた。監獄の中の麻糸繋ぎもこれ以上恐ろしくはあるまい、と思はれた。たつた十日の間に、眞四角なエプロン許りを、お絹は恐らく八百枚も縫つたような氣がした。座敷の隅に出來上つたエプロンが、堆く積み上げられた。お絹は溜息をし乍らそれを見た。これが、あの愛すべき子供の胸にかけられるエプロンか、と疑つた。白い蛆虫の殘骸をでも見るように、お絹は得體の知れない憎惡の眼でこれを眺めた。一番不可ない事は餘り安過ぎる工賃であつた。よくもこんな安い報酬を案じ出したものだ、と呆れる程であつた。お絹は自分で生活しなければならなかつた。ミシンの一廻轉にも彼女の體力は消耗されて行つた。あとからあとから、それを補はなければならなかつた。それには適當な睡眠と休息と營養とが、是非必要であつた。彼女はそれらの料を凡て、ミシンの工賃から割出さうとした自分の虫の好さを、苦々しい嘲笑を以て思ひ出さなければならないように、なつて行つた。その上に、一ケ月五圓の月賦金はお絹にとつては少額ではなかつた。工賃の上り額が少なければ少い程、この月賦金がおつかぶさるような思ひを伴つて、思ひ出されて來た。きちようめんなお絹の心に、身分不相應な負債を責める聲となつて、ギッチ、ギチギチギチ、とミシンの響きが、執拗な意地惡さを以て迫つて來た。

果ては、逐ひかけて來る惡鬼の蹄の音のように聞えて來た。これから二ケ年半、なしくづしに拂ひ續けなければ、眞當に自分の物ではない。二ケ年半！お絹は自分の聲に驚いて聲を立てそうであつた。自分は死んで了ふに違ひない、何

といふ情けないものに縛り付けられて了つたんだらう」

お絹は悲しみに充ちた聲で心の中で叫んだ。

例の男が、瞬く間に素晴しい工費を得させて了ふといふミシンの偉大な機械力を語り聞かせたあとで、

「月に五圓位は、全くただみたいなもんでさあ、機械がひとりでに儲けて呉れますからね。」

などと言つた言葉を、腹立しく思ひ起さずには居られなかつた。

何處の國の男か知らないが、販賣人などといふものを、この世界の隅々にまで、根氣よく配置して、凡ゆる手段を講じて、只管この機械の賣行に腐心して居る有様は、丁度、土蜘蛛の口から怪しい糸を吐き、縦横無盡に網を張つて、何にも知らずに引掛つて來る犠牲を一つでも逃すまいとする具合に似て居た。お絹は、何時の間にかこの網の端に引掛つて藻搔いて居る哀れな自分の姿を、じつと見詰めなければならなかつた。

毎日毎日、彼女の眼瞼の見開いて居る間中彼女の頭の中でミシンが鳴つた。仕事をおいて、貧しい獨りの食卓に向つて居る時も、道を歩いて居る時も、厠に這入つて居る時でさへも鳴つた。お絹は呆然と大きな瞳を見開いた。

「頭が如何かなつたのかしら、」

お絹はそう疑ふ事が恐ろしかつた。そして、頻りに頭を振つて、その響を振りもがふとした。朝、眼が醒めるか醒めないかに、頭の中が鳴り始めた。寢て居る間だけが、その響から逃れて居る時であつた。

「…………　…………………」

お絹は恨めしげに眼の前のミシン臺を見詰めて居た。

「早く仕事をしろ、お前は何と言ふ怠け者なのだ！」

ミシン臺はそう言つて、お絹をせついて居るようであつた。横着を構へて、尻を膨らませ乍ら縫そべつて居る猫よりも、ふてぐしい落付を以て、ミシン臺は澄して居た。お絹は斯うして腰掛けた儘で、頭の中に數字を列べ乍ら、未だ五日にもならない今月の稼ぎ高を計算して居た。それは、今月分の月賦金を差引く事も出來ないような高だ、といふ事を情けなく悟らねばならなかつた。彼女は、こんなに早くから、ミシンの幽靈に叩き起されて、飯も喰べない間に仕事をしなければならないのが業腹だつた。一針も縫ふ氣がしなかつた。世の中の慘めな事は何も彼も、皆、このミシン臺のせいのような氣がした。

お絹は素麵箱から腰を外して、ぶつとした顏付をし、男のような足音をさせて、階段を降りて行つた。

階下では、又別の貧しい一家族が、いぎたなく重なつて寢て居た。末の女の子が獨り、母親の懷の中から脱け出して、茶の間の隅にあつた飯櫃の中に手を突込んで居た。赤坊は腹が減つて居たので、冷えた固い飯を喰べて居た。他の者は、死んだようになつて寢て居たから、この小さい惡戯つ兒の邪魔をする者はなかつた。フランネルの前掛には勿論、出しつぱなしにした茶ぶ臺の廻りや、疊の上やそこら中一杯飯だらけになつて居た。母親の居る前では許されない、その惡戯は、大變赤坊の氣に入つた。彼女は上機嫌で、飯粒の附いた笑顏をお絹の方へ向けた。

「おや、綾ちやんは、駄目、駄目、」

お絹はもうミシンの事を忘れて了つた。赤坊と無心に遊ばうといふ念で一杯になつた。赤坊は飯櫃の事を忘れて了つた。二人は同時に馳寄らうとした。お絹は疊の上にこぼれた飯粒を踏み付けないようにするために、足を爪立てゝ歩いたが、赤坊は態と踏潰して面白がつた。お絹がしやがんで、一粒宛つ拾はふとすると、赤坊はそうさせまいとした。短い歡喜の叫聲を擧げ、飯粒だらけの兩手を擴げて、お絹の首へ噛り付いた。お絹は半分顰め面で、半分笑ひ出し乍ら、

赤坊を振り上げた。小さい足が、頻りにぱた〳〵と騒いで、礫のようにお絹の腹を蹴つた。

「可愛いい、可愛いいおいたさん！」

お絹は赤坊の蓮蕊のようなくにや〳〵した小さい肩先を、自分の顎の下に挾んで、くつくつと押した。赤坊は仰山な悲鳴を擧げて嬉しがつた。大きな娘と赤坊は、そうしてふざけて居た。

と、お絹の耳に低い呻り聲が聽へた。お絹は直覺的にそれを感じた。

亭主は未だ雨戸の開けてない、薄暗い奥の間で、蒲團の上に起直つて居た。彼は强度の神經痛で半身不隨であつた。自分獨りでは、起上る事と體を横にする事だけしか出來なかつた。彼は晝間も寢て居たから、夜は未だ暗いうちから眼が醒めた。若い女房が遲い夜遊びから歸つて來て、「遊んで來るのが當り前だ、」といふ風に、がたぴしと不遠慮に表の戸を明けて這入つて來るのも、朝は遲くまで不貞寢をして居るのも、沈默つて見て居なければならなかつた。顏は半分いびつになつて居て、碌に口を利く事が出來なかつた。彼は先刻、赤坊が蒲團の中から這ひ出したのも、飯櫃を引つ搔き廻して居るのも知つて居た。だが、坐つた儘で、沈默つて見て居なければならなかつた。

彼は頻りに呻つて、寐呆けて居る女房や息子の注意を惹かうと試みたが、無駄であつた。赤坊が、今にも椽側から轉び落ちるだらうと言ふ惧れが、彼を惱ませて居た。

處へお絹が降りて來た。赤坊とふざけ始めたのを見て、嬉しさのために、彼は笑はふとした。が、笑ふ事が出來なかつた。笑つても泣いても、彼の顏は同じであつた。何時も硝子玉のような空虚な眼には、涙が浮んで居た。

お絹は呻り聲を聽くと同時に、その顏を見た。暗い座敷であつたが、椽側からの微かな反射光線で、泣き笑ひの不氣味な顏が、映畫のように現はれて居た。くしやみを半分しかけて、その儘、凍りついて了つたような顏付であつた。お

絹は心で、彼の悲しい心を感じた。

「小父さん、綾ちゃんがおいたで仕様がないのよ。」

彼女は大きな聲で態ざと笑ひ乍ら、平凡な事を言つた。どんな事を話し掛けても好かつた。彼には誰も話し掛けて呉れる者がなかつた。否、まだ生きて居るのか、と言つて呉れる者もなかつた。生きた儘で死んで居た。

彼は、赤の他人でしかない、この優しい若い女に感謝したい念で一杯になつた。何かの意志表示をしやうとしたが、妙に下腹が突張つて來るような氣がする許りであつた。

軈て、裏のどぶ板を踏むお絹のはしやいだ足音と、赤坊の嬉しげな叫び聲とが、一緒になつて彼の耳へ聽へて來た。

無念無想の動かない瞳を、暗い座敷の隅に向けたまゝで、彼はぢつとして居た。

お絹は、皆の寢て居る間に赤坊の守をしがてら、今日の仕事を取りに行かうと思つて、表へ出た。

「綾ちゃん—お早う、お早うをして御覧。駄目ねえ綾ちゃんは、何にも出來ないの、」

赤坊はたつぷり三つになつて居た。然し、家のものは、赤坊を玩具にして居る暇に稼がなければならなかつたから、哀れな赤坊は、僅か猿眞似ほどの藝當も出來なかつた。お絹が歩き乍ら、赤坊の頭を押へ付けるようにして、頭を下げる事を敎へようとしたが、無駄であつた。赤坊は頭を下げるのが恐ろしいとでも言ふ風であつた。頑なに、顔を眞赫にすく事程力を籠めて、首を後へ反さうとした。薄穢い生毛の生へた、猿のような顔が、疑深さうにお絹を見詰めて、動かななつて了つた。お絹は、朝の挨拶を仕込む事を諦めねばならなかつた。そこで、出來るだけ機嫌の好い笑顔になつて、細い捲毛のよぢれ上つた小さい頭を、激しくこすり乍ら、

「お早うは可厭ね、好いのよ、好いのよ。綾ちやんは好い子ねえ。ほら、御らんな、わんわんが來たでせう？」

玩具なしで育てられた赤坊は、犬と猫と雀とを友達にして居た。その時、表邸のくぐり戸から、太つた黒犬が走り出たのでお絹と赤坊は一緒になつて喜んだ。赤坊は急に手足を藻掻いて、土の上に下りたがつた。裸のままの足で土の上に降しても、赤坊はちつとも痛がらなかつた。生れ落ちるとから、痛い、などと言ふ感じに負けないように出來て居た。二三歩、よたよたと走つて、犬の方へ近附いて行つたが、又立止つて、小さい日に焦げた兩手を擴げて、犬を呼ぶ手附きをした。大きな犬は仲々來そうにもなかつた。赤坊はちつとも飽きないで、頻りに手を振つて犬を呼んだ。人間同志の挨拶は知らなくつても、犬を呼ぶ事は知つて居た。悲しい事には、犬の方で知らぬ顔をして居た。

お絹は袂の中から、赤坊のために取つて置いた菓子の欠けらを出して、犬に投げてやつたが、横着な畜生は、一寸長い耳を動かしただけであつた。一歩も動かうとしない處か、振向きもしなかつた。牛乳や肉切れを飽きる程喰べて居る犬にとつては、この貧弱な御馳走は、木の葉が落ちて來た程にも感じられなかつた。犬の方が動かないのを見ると、赤坊は自分の方で近寄つて行かうとした。

丁度その時、同じくぐり戸の中から、その家の小間使が出て來た。先づ、お絹たちへ露骨な蔑視を浴せ掛けたのちに、

「クロ、クロ……………」

と、叱るような激しい聲で、犬を呼んだ。

お絹はその女の眼と聲とから、全で違つた意味を汲み取つて居た。

「クロ！早く歸つて來るんだつてば、貧乏人の女や小供と遊ぶんぢやあない。」

お絹はこの違つた意味の方を、はつきりと信じ切つて了つた。

「何だ、金持のお慈悲でやつと生きてる腐つたよな女の奴隷奴、其處へ立つてる間におべつかの一つも稽古した方がましなんだらうよ。」

と、心の中で奴鳴り返した。そして、その女が犬を抱き上げて、黒繻子の帶を肥つた尻の上で搖り上げ乍ら、潜り戸から這入つて行く後姿を、じつと白眼んだ。

「綾ちやん！早く行かうね、」

そう言つて、お絹が赤坊の方を振返つた時、赤坊は犬も喰べなかつた菓子の欠けらを、拾つて喰べて居る處であつた。

「馬鹿ね！綾ちやんは、」

お絹は思はず險しい顔付になつて、荒々しく赤坊の手から、その菓子を剝ぎとつた。砂と白い粉で緣取られた汚ない口を大きく開けて、赤坊が泣き出した。お絹ははつとした。自分が今、何をしたか氣が附いた。

「おゝ、御免よ、御免よ、」

お絹は自分も一緒にべそを搔きそうな顔になつて、赤坊を搖り上げ乍ら、調子をとつて歩き出した。

「泣くんじやあない、泣くんじあない、」

そう言つて自分では、大きな瞳の中に一杯涙を溜めて居た。…………何だつて斯う、何も彼も腹が立つよになつて了つたんだらう。ちつとも我慢が出來ないとは…………お絹は兩側に列んだ小綺麗な家の、はたきの音を聽き乍ら、ほんとうに泣き出しさうになり、變な聲で子守唄を唱ひ始めた。

みしん屋ではもう、門先に打水までしてあつて、片手間商賣の唐物を陳列した店も、きちんと片附いて居た。お内儀は奥で、楊子を使つて居たが、白粉焦けのした蒼い顔を半分、店の方へ向けて、

「一寸待つて下さい、」

とぶつきらぼうに言つて引込んだきり、仲々出て來なかつた。お絹は十五分位待つて居なければならなかつた。赤坊は退屈して何か悪戯の種を探し始めた。困つた事には、赤坊の眼の前に、幾筋も束になつた帶〆や、赤い手提袋などがぶら下つて居た。一寸隙を與へると、赤坊は汚い手で、じやれ附くようにして、いぢり廻した。その間中、白い胸をはだけて、頻りに襟白粉を塗つて居乍ら、お内儀はちよいちよいと光る眼で、簾の間から赤坊を白眼む事を忘れはしなかつた。そして、ぢれつたげな大聲で、

「傳どん！お客さんだよ。」

それでも誰も出て來なかつた。赤坊にいぢらせないようにあやすのに、だんだん背が折れ始めた。それで、待つてる間が、尚更ながくなつて行つた。お絹はぢれぢれして來た。この洒落者の三十女が、だだつぴろい顔一杯に白粉をぬたくり、癖の悪い鬝毛を撫で上げるのが、すつかり濟むまで待たなければならないのは、無性に馬鹿々々しかつた。それに、彼女が起きてから大部時間が經つて居た。酷く空腹であつた。みしん屋の臺所からは、頻りに、温い味噌汁のむせるような香が立昇つて居た。それが、お絹を尚更氣短かにさせた。喰べる事の出來ない他處の朝飯の匂に、鼻を鳴らしたり、呆れる程安い工賃に釣られて來たりして居る自分が、腹を減らして居る野良犬のような、慘めな氣がした。皆が寄つてたかつて馬鹿にして居る、そんな氣がした。これ以上長くは我慢がならない、と思つた丁度その時に、お内儀が眼が醒めたように仇つぽく化粧を濟して、につこりし乍ら、出て來た。丕で別人のようであつた。

「おや、被入しやい。お待たせしてお氣の毒樣、」

上客にとつておきのお愛嬌を、もう一遍振り撒いた。お絹は變な氣になつたが、お内儀は上機嫌であつた。お内儀は自分がどんなに美しくなつたかを、「たつた今鏡を見てよく知つて居た。自分の水々しい化粧振りを見て呉れる者が、若い男でないのは一寸殘念であつたが、貧しい娘なのはそれよりも心易かつた。そう言ふ考へが、お内儀を晴々させたので、愛想の好い女が誰でも遣るように、連れの赤坊を頻りにあやし始めた。それが假令、汚ない鼻ったらしであつても、まるで氣にも掛けないようなそぶりで…………然し、お絹は酷く不機嫌であつたので、お内儀のあまのじやくな御天氣と一緒になつて、踊りたくなかつた。

「まだ仕事は來ないでせうか？」

「好いのが來ましたよ、今朝着いた許りで、未だ誰方へもお上げしないんですけど、」

「エプロンじやありませんの、」

「いゝえ、帶締めですよ。何、雜作はありません、すうつと一筋に縫つて下さりさへすれば、引繰り返すのは此方で遣りますからね。一番手が懸らなく、、それに綺麗な仕事ですから、氣が紛れますしね、百本位雜作なく縫へますよ。」

お内儀は奥から、羽二重絞りの細長い切れを一束ね、持つて來た。うす藤や、ひわや、とき色の滑らかな、光る布地が、お絹のうす汚れのした前掛の上に擴げられた。一瞬間、お絹の瞳が物欲しさうに耀いて、生々とした。が、直ぐに彼女は、それらの美しい布地が、自分には何の關係はりもないものである事に氣附いた。そして、懶い、氣の無い孤子で聽いた。

「これで、幾何なんでせうか、」

「割に好いんですよ。何しろちつとも手が懸らないんですからね、それで、百本二十五錢です。」

「百本廿五錢！」

お絹は、自分の聽き違ひじやあないか、と疑つた。が、お内儀の澄ました顏を見ると、がつかりして了つた。百本二十五錢！それで割に好いんですよ、だとは。

お絹はお内儀の顏を、白粉の上にのつぺりと脂の浮いて來たその顏を、呆れて見詰めた。そのうちに、お絹の悶い表情がお内儀の顏に感染して行つた。

「では、別なものになさいますか。」

短いが、その質問には色々な意味が含まれて居た。今にもこの仕事を引込めて了ふであらう、といふ豫感が、お絹を脅した。此處まで來ると、お絹は凡ての考へを捨てて、降參しなければならなかつた。腹立ちまぎれな事を言はないようにする爲めに、舌を嚙んで居た。お内儀は、この仕事は、全く割が好いのだ、と恩着せがましく又繰り返した。お絹は、どうぞ、その仕事をさせて見て下さい、と賴んだ。石のような固いものが、咽喉に引掛つて居るような氣がした。

赤坊を負ぶつて、仕事の這入つた風呂敷を下げて、みしん屋の敷居を跨ぎ乍ら、

「さようなら、有難うムいました。」

と言つて出て行つた。

お絹は何時でも、仕事を與へて吳れる者に對して、お禮を言はなければならない事を知つて居た。然し、心の中では、全で違つた言葉で呪つて居た。

「出來るだけ上まへを跳ねるが好い！そして、お前の白粉代と亭主の晩酌の代とを、しこたま溜めるが好い！」

今朝、あんなに酷くミシン機械を憎惡した事を、全で忘れて了つたやうに、お絹は、臺に凭り掛つて丹念に機械を磨いて居た。薄埃りを冠つた胴體と臺にくつついた銀板とが、皮を剝いたやうに滑べつこい耀きを以て、黒檀のやうに、又プラチナのやうに光り始めた。「持てるものの享樂」が彼女の胸にも湧いて來た。それは、何かの幽靈に纏ひ付かれて居ない、純な感情であつた。生きたものに對するやうな愛撫の情であり、感謝を現はすものであつた。お絹は、心を籠めてその銀板を拭いた。そして、

「よく動いて呉れる私の針よ。私は餘りお前を使ひ過ぎた。使ひ過ぎなければ喰つて行けないのを、私と一緒に悲しんでお呉れ、」と無心に呟いて居た。「機械は何にも知らない。機械が惡いのではない。」お絹は詫ふやうに、自分の心に言つた。愛馬を勞つて居る農夫のやうな、平和なお絹の顏が、磨かれた銀板に映つた。お絹はその顏を見た。梳らない捲毛の垂れ下つた廣い額、愛に飢えて見開らかれた瞳、もの言ひたげな薄い唇、何處かに反逆者の心が眠つて居た。動的な美が潜んで居た。お絹はうつとりとなつて、自分の顏に話しかけて居た。

その時、體の何處かで、ぴく／＼と微かな疼痛が、時々、丁度細い糸をでも曳くやうな具合に、極く微かに間をおいて、響いて來た。暫くすると、それが、左の足の踝の邊りに焦點を持つて、可成り激しい痛みとなつて、ずきん！ずきん！と頭まで上つて來た。お絹は急に顏を顰めた。

「あそこが、到頭痛み出した！」

幸福な妄想が一時に消えてなくなつた。痛みが激しくなるにつれて、お絹は否應なしに恐ろしい事を自覺しなければならなかつた。

二日前の事であつた。

見知らない子供が、狹い街道で、得意廻りの自轉車に轢れそうであつた。はつとして、お絹は跳び出した。雨上りのでこぼこ道であつた上に、もう薄暗くなりかけて居て、足許が解らなかつた。といふよりも、足許など氣にして居る暇がなかつた。お絹は、罠に引掛りでもしたように見事な横倒しになつて、ぬかるみの上に手を附いて居た。自轉車に轢かれる筈の子供が怪訝な顏で「うつけ者の獨り踊り」を見て居た。お絹は顏を赧らめて起上つた。足駄の緒が切れて、左足の踝の上の瘤に血がにぢんで居た。激しい疼痛が遣つて來た。

然し、はたから見ると、それは街上にざらにある、平凡な、馬鹿げた出來事の一つであつた。お絹も痛さ痒さを感じる暇のない程忙しいお陰で、昨日一日忘れて居た。それが今になつて痛んで來た。……………あの時の傷が内攻して居るのだ、何と言ふ激しい痛みだらう。………………突然、或考へが、お絹の頭に閃いた。今日限り、ミシン臺を踏む事が出來なくなるだらう、といふ豫想であつた。それは、今日から喰つて行けなくなる、といふ事を意味して居た。が、その恐ろしい考へも、長くは續かなかつた。凡ての感覺を剝ぎ取つて了ふ程の激しい疼痛が遣つて來たからであつた。お絹は音を立てて轉倒した。階下から、女房が喚き乍ら上つて來た。彼女は、何をこのお轉婆娘が騷いで居るのか詰問しやうとした。お絹は腹立たしそうに、大粒の淚を溜めた眼で女房を見詰めた。

「痛いのよ、小母さん！おととひ轉んでくぢいたのが……………ああ、あ、あ、」

お絹は疊の上を轉つて泣き出した。女房はお絹の泣くのを見た事がなかつた。愚かな女房は如何して好いか解らなかつた。何か探し出しでもするように、きよと〳〵と狹い部屋中を見廻した。譯の解らぬ事を口走り乍ら、狼狽てて階下へ降りて行つた。が、階下では、智惠を貸して呉れる者は誰もなかつた。女房は、こんな時何の役にも立たない亭主を、

腹立ちまぎれに口汚なく罵り乍ら、又二階へ馳け上つた。そして「ほんとうに上手な揉療治」が裏横丁の三軒目にあるから、直ぐ行つたら好いだらう、と言ふ事を始めて思ひ出したようにお絹に告げた。それから、成田山の御符が好かつたら貼つて遣らうか、などと言つた。お絹はそれらの言葉が耳へ這入らなかつた。何にも言はないで、醫者の處までおぶつて連れてつて呉れ、と哀願した。

お絹の惧れて居た事が一時に遣つて來た。傷は化膿して居て、切らなければならなかつた。手術は濟んでも、「足を絶對に使はないように、」と言渡された。お絹は泣く事も出來ないような思ひで一杯になり乍ら、ぽかんと天井を見詰めて、寢て居た。寢て居て、痛みと暗い妄想とに打克たうとして、齒を喰ひ縛つて居た。

朝に夕に、貧しい食膳が女房の手に依つて運ばれた。一椀の粥、一皿の香の物も即時に換算せられて、お絹のレース編の巾着から、女房の掌に銅貨が載せられた。その度びに、女房の光る眼が、巾着の口を覗き込み、最後の一錢のはたかれる時機を計つて居るようであつた。そのあとで、

「もうそろ〳〵、起きて見たら如何だね。」

斯う、せつつくような調子で言ふのが癖であつた。お絹は、暗愚な女房の親切が、何處までが眞物であり、何處までが銅貨に繋がつて居るかを、よく見極めて居た。それで、折角の温い粥も味噌汁も、只、咽喉を流れると言ふだけであつた。

「早く起きたい！」

お絹はみしん臺の方を見ないように、背を向けて寢乍ら、考へた。

「早く起きて、何の人間にも皆、仕返しをして遣り度い！」

が、仕返しをして遣る前に、お絹はもつと虐げられなければならなかつた。或日、ミシンの販賣係の男が遣つて來た。どんどんと不遠慮に音を立てて、階段を上つて來た。寢て居るお絹を、突立つた儘で見下して、

「ミシンを取りに來ましたがね、」

彼は、「お怪我をなすつたさうですね、」とも「お氣の毒た事をしましたねえ、」とも言はなかつた。お世辭は金儲けに役立つ時以外には遣はない、と言ふのがこの男の主義であつた。

「ミシンを？」

お絹はその意味が解らなかつた。

「こちらではもう、御不用だと言ふじやありませんか。」

これだけ言つたら澤山だと言ふ風であつた。叩きさへすれば、無盡藏に調子の好いおべつかの言へる口を持つて居乍ら、今は一言いふのも惜しい、と言ふ風であつた。薄い唇を小憎らしくひん曲げて、つぐんで居た。その口附を一眼見ただけで、お絹は凡てを理解した。

「いいえ、不用ではありません。私は直き起きられます、」

「店の方でも機械が足りなくつて弱つてるんですし、御不用なものを飾つて置いても仕方がありませんからね。」

「だから、不用じやあないつて言つてるじやありませんか。貴方がたは、私が月賦のお金を拂ふ事が出來ないとでも思つてるんですか。」

然し、男はそれに答へなかつた。

「兎に角、一應お預りして歸りますから、」

「不可ません！」

お絹は蒲團を跳ねのけて起き上つた。もう足も痛くはなかつた。

「私はちやんと證書を入れて、規定通りのお金を拂つて、貴方の店から買取つたのです。私が不可ないつて言ふのに、如何しても持つて行くと言ふんですね。」

お絹は憎惡を籠めた眼で男を見詰めた。熱い血がかつと、兩頰に集つて來るのが感じられた。

「貴君は證書の事を仰言るが、全額拂込を濟さないうちは自分の所有にならない、と言ふ事を承知の上で、お入れになつたのではありませんか。」

男は落付いて居た。痩せた頰には薄笑ひが浮いて居た。何も彼も男の言ふ通りであつた。ミシン臺は自分のものではない！もう、お絹には何にも言ふ事がなかつた。で、低い聲で、お持ちになつても構はない、と言つた。近いうちに、起きさへしたら、一度貴方の店へ行く、と言つた。男は、さうですか、とも言はなかつた。

「おい、」

とそれまで、二人の言爭ひを障子の蔭で聽いて居たもう一人の若い男に、眼で指圖をした。そして、二人でミシン臺を抱へて階段を降りて行つた。

「あれが同じ人間なのか？」

お絹は自分の心に問うて居た。ミシンを運んで來た男と、それを取上げて行つた男は、同じ人間であつた。彼は只、自分の商賣に忠實であつただけであつた。轉つて行く金貨を追掛けて來ただけであつた。

お絹は泣かないようにするために、瞳を大きく見開いて天井を見た。湯のような涙が、頬を流れた。

「明日からは……………」

其處へ、眞暗な扉が、ずしん！と音を立てて落ちて來た。お絹は悲壯な心を抱いて、まともに、その扉にぶつかつて行かう、と固く決心した。

「明日は如何しても起きる！」

氣弱な信心者が、おみくじに逆つた決心をする時のような、自信のない聲で、お絹は幾度となく自分で言つて見た。未だ足が痛いからであつた。然し、もう八日寢て居た。ちつとも働かないで居た。あと、二日とは暮せないだらう。この思ひが駑馬に鞭打つような冷酷さで、お絹の床摺れの出來た痩せた尻を打つた。鞭打たれる駑馬には、蹄の先に釘がささつた位で、痛いなどと言ふのは贅澤な沙汰であつた。お絹は足の傷の事を思ふ譯には行かなかつた。それに、終日、ミシン臺の脚輪が疊の上に喰ひ込んで居た跡を、寢て居乍ら見て居なければならなかつた。その跡には、ミシン屋の親爺のせせら笑ひが殘つて居た。

「如何したい？のらくら娘、」

その日が明けて、明日が來た。幸な事には足の痛みは充分、我慢が出來た。お絹は朝日と共に起上つた。一寸、左足を引摺つて窓際へ寄り、雨戸を繰つた。窓幅だけの空氣が、小川のように無音のせせらぎを立てて、流れ込んだ。お絹は思はず大きな息を吸ひ込んだ。そして、光りの中に白い腕を晒し乍ら、寢衣を着替へた。垢染みた肌着から、ブンと

臭氣が立つた。お絹は一寸、おどけた手附きで、肌着の襟を摘み上げ乍ら、

「何て臭い…………」

そして眼の中で獨り笑ひをした。が、聲を立てない間に笑ひが消えた。踵からずうーんと微かな音を立てて、疼痛が上つて來たから。

「畜生！畜生！」

お絹は野良猫を逐ふような聲を擧げ、痛む足を邪剣に叩きつけて、疊を踏んで居た。

「おや、如何したのさ、」

階下の女房のおえいが、お絹の獨り芝居を呆れて見て居た。おえいは、お絹が八日も何にもせずに寢て居た事を怒つて居た。二階の間代を踏み倒されやしないか、と絶えず疑つて居た。「足が一寸痛な位で…………」と、馬鹿にして居た。おえいは無病息災で、蹴飛ばしてもびくともしないように出來上つて居たから、外の者も皆そうだ、と思つて居た。「自分達の若い時分には…………」と、おえいは、意氣地のない亭主を督勵して身體を粉にして稼いだ、と言ふ毎時の自慢話しを、寢て居るお絹にもう一度聽かせて遣りたい、と思つて居た。お絹が始めて足が痛い、と言つて、氣狂ひ犬のようになつて喚いた時の事を、おえいは腹立たしく思ひ出して居た。あれはきつと、狂言に違ひない、と思つた。自分はお人好しだから、欺されたのだ、と思ひ度がつて居た。

今、お絹宛ての郵便を持つて、二階へ上つて見ると、お絹はひとりで騷いで居た。「業の條！」おえいは後の壁に向つて、丁度牒し合せた仲間にでもするような具合に、狡猾なめくばせをした。——この娘は、人の居ない時は、何時もこんな事を遣つて居たのだ！

「餘り長いこと寢て居ちやあ、退屈だあね、」

おえいはぺろつと舌でも出したい氣で、斯う言つた。

お絹はおえいが上つて來た事を知らなかつた。その心中の獨り判斷は尚更解らなかつた。

「今日から起きて見たいと思つてね、少しあ痛いようだけども、仕方がないわ。」

その手は喰はない――おえいは心の中で用心して居た。朝つぱらから馬鹿にせられて堪るものか、と思つて居た。未だ、痛いのか、などと聽いて遣るのが業腹だつたので、郵便をお絹に渡して、さつさと下りて行つた。

その郵便は弟の英二から來たのであつた。一年に三度位しか手紙を書いた事のない英二は、それで、綴方とお習字の仕上げを根限り遣つて居た。

お絹は先づ、封筒の馬鹿丁寧な字を見て、微笑した。その手紙には何時も、お世辭がちつともないのであつた。電報をもう少し、長くしたようなものであつた。一くさりの單語から色々な意味を汲みとらなければならなかつた。一字一句を様々に延長して考へなければならなかつた。この仕事はお絹に、人知れぬ喜びを齎らして呉れた。が、今朝の手紙には、「裏の藪に筍が澤山生えた、」とも「お父さんは大層丈夫だ、」とも書いてはなかつた。ほんの一行讀んだきりで、お絹は顏の色を變へた。その手紙には、田舍者らしい信頼と、無骨な率直さで、

「英二は明日の夜行で立つから、停車場まで迎へに來て呉れ。」

と書いてあつた。――誰がお前に來いなどと――それはお絹が書いて遣つたのであつた。

お絹はたつた二週間前の事を忘れて居た。寢て居る間中、彼女は自分の事だけしか考へて居なかつた。若しくは、自分の道に立塞がらうとする厚かましい人間に對して、反抗する事許りしか考へて居なかつた。然し、英二はもう、将軍

に乘つて、林檎の白い花を窓に見乍ら東京に向つて居た。

お絹はミシン屋の甘言にうま〳〵と引掛つて、安つぽい感激に有頂天になつて居た自分を呪つた。そんな夢はとうの昔に、消えてなくなつて居た。

「又この上に、丸裸のまゝで喰ひ度がつて許り居る人間が、一人增えるのか！」

お絹は溜息を吐いた。

が、汽車は脫線もしないで進行して居た。

お絹は顏を洗ひに下りた序でに、おえいに話し掛けた。

「國から弟が來るつて言つて來たんだけども、全く困つて了ふのよ。」

「今は駄目だと言つて遣れば好いじやあないか、」

唯つた一人の相談相手は、そんな事は考へるまでもない、と言ふ風な顏付で、にべもなく言つて退けた。お絹は情けない顏をして、夕方は上野へ着く筈だ、と言つた。

「無鐵砲な事を遣るもんだねえ、」

おえいは斯う、御山な言方をして、馬鹿正直な田舍者と、虫の好い姉娘とを一緖に非難した。

「一體、如何するつてんだらう？」

と、おえいは、相手に聽えないような低い聲で呟いた。そして、早速、ナツプルの時計會社へでも、世話をして遣らなければなるまい、と、ひそかな親切心で思ひ廻らして居た。

午後、汽車が着く二時間も前に、お絹は驛へ出掛けようとした。屋根裏の二階で、色々な事を考へて居るのが、息苦し

くて仕方がなかつたから、驛で、うよ〳〵する人混みを見て居たら氣が紛れるだらう、と思つたのであつた。

「一體、幾時の汽車なんだね？」

おえいが、へつついの上の壁に貼り付けた煤けた時間表を見乍ら、聲を掛けたが、お絹は聽へぬ振りをして居た。赤坊が一緒に出たがつて泣いて居た。「何て、うるさい兒だらう。」お絹は頭の中が、ごちやごちやになつて居たので、べそつ掻きに構つて居られなかつた。足の痛みは體だけが感じて居て、頭の中までは上つて來なかつた。少し引摺り加減に歩いて居乍ら、お絹はそれを知らなかつた。馬鹿のようになつて、眼許り見張つて眞直ぐに歩いて居た。乘合自働車、電車、自轉車が蚊の鳴くような微かな唸りを立てて、かすめて居た。それらは全で、別の世界で唸つて居た。頭の中では、「如何したら宜からう？」何時までも答への出ない遁環小數が、どうどう廻りを遣つて居た。

停車場では、様々な自働人形がうよ〳〵して居た。赤切符で二等待合室に收つて居るハイカラ令嬢や、俺のネクタイは如何だい？と體中で皆に聽いて居る若い男や、藝者を連れて旅行する事を人々に知らせたがつて居る禿茶瓶や、その他、他人の思はく許りで動いて居る人間の集りであつた。が、お絹はちつとも腹が立たなかつた。それらは皆、別の世界に住んで居た。何にもお絹の氣を惹くものは無かつた。

汽車が來た！光つたレールの上に、機關車の頭部が現はれた瞬間に、お絹の臍の上から胸の方へ、固い棒のようなものがぐつとこみ上げて來た。肉身に對する本能的な愛情が、泉のように湧いた。つい一瞬間前まで、「如何して厄介拂ひをしたゝものだらう。」と言ふ事許り考へて居た事が恥しかつた。そんな冷酷な考へを持つたのが自分だと言ふ事は、情けない事であつた。英二！英二！お絹の眼の前に、茶絣の筒袖を着て、新らしい、玩具のようにしやちこ張つた帽子を冠つて、畝道を學校へ行く、英二の子供姿の幻がかすめて通つた。次の瞬間には、その幻が「中學生」に出世して居

た。それは紺サーヂのちつとも織の當らない洋服を着て、光つた編上げを穿つて居た。そして「今日のおやつは何か知ら？」と云ふ事以外には苦勞のない、ほがらかな顔をして居なければならなかつた。それが英二に對するお絹の偶像であつた。その偶像は、お絹の大嫌ひな、表邸の坊つちやんに似て居た。然し、お絹はちつとも氣が附いて居なかつた。この偶像とお絹とは、一寸小綺麗な二階を借りて、樂しい巣を營む筈であつた。

これらの想像は、ほんの一瞬間にお絹の頭の中を過ぎたのであつた。然し、汽車の頭が驛に這入る直ぐ手前のカーブに差掛つてから、蒸氣が切れた、とでも言ふ風にぐづぐづして居た。お絹はこんなのろまな汽車を見た事がなかつた。が、到頭、けたゝましい最後の叫聲を擧げて止つた。お絹は焼けつくような瞳で英二を探した。見知らない無數の首が、窓から出て居た。彼女には何の係はりもない樣々な叫聲が、喧しく呼びかはして居た。せはしない喜悲劇が驟然と幕を上げて居た。やがて人々は、豆を煎るような音を立てて階段を上つて行つた。

英二は居ないのか！居た。それは何と言ふ情けない樣子であつたらうか。お絹はもう少しで聲を擧げる處であつた。二人が別れて九年經つて居る事をお絹は忘れて居た。英二はもう玩具ではない、村祭りには鼻をかいて山車を擔ぐ立派な若い衆であつた。

「荷物は？」

「自分でに持つて來た。」

英二は一寸笑はうとした。厚い唇から馬鹿げて白い齒が出て居た。茶色の瞳が疑深く光つて居た。それは、人に怖えた山猿の表情であつた。お絹は、何か親しい言葉を掛けて遣りたいと思ひ乍ら、何にも言ふ事が出來なかつた。「さぞ疲れたでせう？」と言ふ代りに、お絹は沈默つて信玄袋の緒に手を掛けた。英二はそれを振拂つて、自分で提げて歩き出

した。

彼は樽肥りの上に背が低かつた。おまけに大人びた袂付の着物を着て居た。袂の重味で肩がシーソーのように揺れた。全で、奴凧が踊つて居るようであつた。おどけた腰には、水色縮緬の二尺巾の帯がみせつけがましく捲きつけてあつて、垂れが尻の横つちよでぶらん〱して居た。

丁度、郵便車から行嚢を引摺り出して居た驛夫と、押車に腰を下して居た赤帽とが、變なめくばせをした。そして、一寸間を置いて、悪意のある大笑ひを浴せ掛けた。英二は、朴訥な恥しがりから、すばしこく感じて居たが、振り返るのが恐ろしかつた。が、あとから、お絹が續いて居た。お絹は、他人を嘲笑して樂しんで居る彼等の下素根性を憎んだ。その上に、自分の弟が的になつて居た。お絹は英二の側に寄つて、かばふような身構へをし、敵意のある眼で白眼み返した。その時には、向ふの仲間は四五人になつて居た。貧乏娘の下手な挑戰は、ぼろを着たかゞしが弓を引いて居るようであつた。彼等は面白がつて凱歌を擧げて居た。お絹はその聲を弟に聴かせたくなかつた。何か、全で別の話しを、國の様子をでも話し合はうとした。だ、水色縮緬の帯と奴凧の袖とが、お絹の瞳から離れなかつた。

「もつと違つた帯は持つて居ないの？」

そう、聴いて見たくて堪らなかつた。「男手一つに育てられた。」と笑はせたくないと言ふ、老父の愛情が、その帯を腰に捲かせた事を、お絹はちつとも知らなかつたから。

二人は、逐ひ立てられるように、驛から出た。宿まで歩く間中、ちつとも口を利かなかつた。二人とも驛での出來事を氣に病んで居た。その上に英二は、田舎訛りを笑はれやしないか、と心配して居たし、お絹は、弟の品定めを遣つて居る事を、氣附かれやしないかと恐れて居た。然し、それでも宜かつた。二人は、お互同志の心の底に湛へて居る湖のような

愛情を信じて居たから、それで滿足して居た。

英二は、姉の生活に就いて充分な知識を持つて居なかつたから、勝手な想像をして居た。「ミシン臺の備へ附けてある二階」を見度がつて居た。彼は紬車と手織機の間で育つて來たから、「機械」の力を誇張して考へて居た。姉は異人の住むような家に居るのかも知れない、と思つて居た。が、其處は、午後になるとちつとも陽がささない、薄暗い部屋であつた。押入を少し大きくしたようなものであつた。英二は、こんな狹い部屋を見た事がなかつた。「東京」といふ處はこんなものかと怪しんで居た。

お絹は英二が考へそうな事を、ひそかに感じて居た。胸が塞がるような思ひを、甜めなければならなかつた。ミシンを渫つて行かれた事を、如何して話したものか、と心を痛めて居た。英二はそれとは言ひ出し兼ねて、何か落し物でもしたような顏付で、部屋中を見廻して居た。お絹にはそれが能く解つて居た。

「當分仕事が閑だから、他處へ借して遣つた。」

そう言へば何の雜作もなかつたが、未だ着いた許りの弟に、生活の不安を感じさせるのは忍びない事であつた。何れはぶちまけて了ふのだ、と思ひ乍ら、その決心をし兼ねて居た。そして、その機會を次々に延して居た。

「お這入り、狹いけど當分我慢するんですよ。」

と、お絹は袋を持つたなりで敷居の處に立つて居る英二に言つた。そして、これ位の處に二人位で住んで居るのは、未だ好い方なので、未だ未だ酷い六疊一間に二家族位が、うじや〳〵して居る處さへある、住宅が不足で皆が困つて居

るのだ、と話した。そう話し乍ら、如何言ふ氣でそんな事を言つたのか、解らなかつた。

直きに、途中で誂へて置いた洋食が來た。暗い階段を上り詰めた處で、おえいが首だけ見せて、慄える手で皿をさし出して居た。あくどいヘットと胡椒の臭が、腦天に浸み渡つた。おえいは隨分長い間、こんな御馳走にあり付かなかつたし、お絹は晩のために晝食を儉約して居たから、二人は一緒に、ぐつつと咽喉を鳴らした。お絹はもう少しでおえいに

「一緒に喰べませんか、」

と言ふ處であつた。然し、英二が恥しがつて思ふように喰べないだらう、と言ふ思ひが、やつとお絹を引留めた。お絹は急いで、おえいの手に洋食の代を握らせた。それつきりでもう、彼女のレース編の巾着の中には、一厘もなかつた。「明日」の事を、お絹はよく知つて居た。が、「明日」は今ではない。「明日」のために、可愛い弟に一皿の御馳走を斷念しなければならない程なら、お絹は死んで了つた方がましであつた。

が、お絹の心盡しも無駄に終つた。英二は四つ足を食ふのは畜生だ、といふ田舍風儀に染んで居た。その上に獸脂のあくどい臭氣が、彼をもう少しで吐き出しそうにした。彼はゐろりに懸けた芋汁を戀しがり乍ら、空腹を忍んで居た。

「喰べないの、」

「ううん、汽車に乘つとつたから、咽喉が塞つとるようで、喰べられん。」

「でも少うし喰べて御らん、」

「ううん、」

お絹は悲しい瞳で、弟を見据へて居た。彼の厚い唇を、無理に引きあけてでも喰べさせて遣りたかつた。——何て、ひねこびれた子供なんだらう。

英二はそれを感じて居た。彼は姉に可哀な思ひをさせるのが悲しかつた。で、もつと落付いてから、夜半にでもきつと喰べる。それに、今はちつとも腹が減つて居ない、と恐る恐る言つて居た。可哀そうに彼は、眞夜中にひとりで起きて、あの一皿の肉片を如何始末をしたものか、と思ひ悩んで居た。そして、とうとう一杯の白湯を呑んだ切りで、辛棒しなければならなかつた。

二人は枕を並べて寢た。お絹は、考へなければならない事が澤山殘つて居た。それは、凡て明日までに片附けなければならなかつた。彼女は身動きもしないで、考へに耽つて居た。

お絹は今まで、自分の爲めに許り生活して居た。只、生活しさへすれば宜かつた。然し、今は對象があつた。而もそれは、御念の入つた偶像であつた。お絹は英二に、喰べさせる丈けでなしに、「官製はがき」のように通用する教育を施したがつて居た。彼女はひそかに自分の無教育(彼女はそう信じて居た。)を恥ぢて居たから、「官營の教育」を屢々買被つて居た。その免許狀で購ふ事の出來そうな樣々な幸福を信じて居た。彼女の胸の底には未だ、權勢に對する無意識の憧憬が、根を張つて居た。愛する弟をそうした、絢爛と輝く幸福の國へ送り屆けて遣り度かつた。そのためには、自分の生活を棒に振つても、ちつとも後悔しまい！と容易く決心する事が出來た。この決心は、お絹に甘醉つぱい、犧牲者の歡びを感じさせた。この心持を享樂するだけで、彼女は充分に幸福であつた。「愛する者のためにする生活」は淨い。この前提で積み上げた精準の上に立つて居れば、彼女はどんな事でも、不正不善をさへも、疚しさに迫められる事なしに、仕遂げられそうな氣がして居た。犧牲の假面を眞向うに振翳して行けば、行く手の野山が、ひとりでに拓けて行く事を夢見て居た。彼女の心の中だけの遊戯は際限もなく渦を捲いて居た。次には只、何を賭物として撰ぶか、を決めさへす

れば宜かつた。

お絹は、何處かの大きな銀行や郵便局で、「お孃樣の御道樂」といふ風な手附きで仕事をし、「三日目毎に變つた裝りをする、」と言ふ丈けの理想を持つて居る顏付で、電車に乘つて通勤して居る、女事務員になる事は如何かと、考へて見た。彼女は學問はして居なかつた。が、意地と押しとで、其處ら邊りの女共を出し拔く位の自信を持つて居た。然し、「月給日」と言ふ日まで、二人の腹を締め付けて置く事が出來なかつた。泣きつ面をして、「月給日」を見上げ乍ら、腸滿病みのような水つ腹を抱へて、鹽を嘗めるだけの我慢が出來たら、…………………彼女は女事務員になる筈であつた。

米の飯を喰つて、生きて居る人間が二人居た。而も一人は、月謝を出して、「教育」を受けねばならなかつた。

お絹は蜂に刺されたような顏をして、頭を橫に振つた。

「矢つ張り、あれに決めよう、」

お絹の頭の中で、「月收八十圓」と言ふ紙札が、ぶらん〳〵搖れて居た。それは或、一流のレストランの廣告文の文句であつた。彼女は、未だ手に渡りもしない、その「月收八十圓」の遣ひみちの事許りを考へて居たから、その他の事は思ひ附く暇がなかつた。

「英ちやん寢た?」

「未だ、」

「私も未だなのよ。」

薄い蒲團の襟の中で、いが栗頭が一寸動き、茶色の笑つた瞳が、お絹の方へ向いて居た。その瞳のために、お絹は、「月收八十圓」の決心が無駄でない事を感じて居た。で、彼女ははしやいだ氣持ちになり、明日からの二人の生活に就い

て饒舌り初めた。――お絹は非常なお饒舌り好きであつた。只、不斷は餘り苦しい事許りで、饒舌る事を忘れて居ただけの事であつた。――

英二は、秋に受ける中學校の編入試驗の準備のために、早速明日からでも英語速成學校へ通つても好い事、暮し向きの事はちつとも心配する必要がない事、それ處か、もう少し經てば父さんに何か送つて上げたりする事も出來る事、などを話して聽かせ、英二もゝう、學生になるのだから、洋服を着なければみつともない事、編上げの靴も買つて上げる事、――だから、水色縮緬の兵兒帶は止めた方が好い、ともう少しで言ふ處であつた。――そんな愚にも附かぬ事を饒舌つて嬉しがつて居た。そして、最後に、輕い氣恥しさと疲勞のために口を噤むまで、お絹は、何處からそう言ふ「かて」を得て來るか、と言ふ事を明かさないように用心して居た。彼女は、弟から無言の譴責を受ける事を、ひそかに恐れて居た。

然し、英二は、姉が偉い人間である事を屢々父親から聽かされて居た。彼女は素朴な驚歎と、單純な感謝とをもつて、この長談議を聽き終りさへすれば好かつた。

軈て、二人の上に、靜かな夜が落ちて來た。

朝。

ざるの底に馬鈴薯が六つ殘つて居た。萎びて黄色い芽を吹いて居た。お絹は流しの側でそれを見て居た。唯つた、それだけの材料で二人の朝食を調理しなければならなかつたので、愛する弟のために、自分は一つかけも喰べないで居やうと、決心して居た。

「七輪」の底で粉炭が花火を擧げ、土鍋の中で湯がたぎり、芋が踊つて居た。かぐはしい澱粉の匂が、湯氣と一緒にお絹の鼻先きを撫でて居た。それ程、お絹は土鍋の中を覗き込み、丁度、湯氣から立上る芋の氣を吸ひ込んで、おなかの足しにしやうとして居るようであつた。

英二は昨夜の姉の話しを信じて居たから、折角、自分ひとりの爲めに差出された、煠うで芋を、遠慮するのは失禮だ、と思つて居た。馬が、枯草を嚙むような氣忙しさで、むしやむしや喰べて居た。

「姉さんはもう、済んだのか？」

と聴く事も忘れて居た。お絹はそれでも、彼が遠慮するかも知れない、と云ふ心配から、彼が喰べ終るまで階下に居やう、とした。そして、階段の降り口まで行き乍ら、又何か用事ありげに引返して來た。お絹は芋の側を離れたくなかつた。せめて、英二が甘味そうに喰べて居る處でも見て居たかつた。お絹は氣附かれないように用心し乍ら、如何にも手仕事が忙しい、と言ふ風に、彼の側に坐り、着物の綻びを縫つて居た。白い湯氣が、ほか／＼と眼の先きで立上つて居た。時々、手が御留守になり、ちらつと上眼遣ひに皿を見て居た。——殘すか、殘さないか、——お絹はそんな事を考へるのが恥しかつたから、見ないで居るために、じつと辛棒して居た。が、どうかしたはづみに、英二の大きな口から、薯のかけらがこぼれ落ちた。お絹の眼が、心よりも早く、疊の上に落ちた薯を逐ひかけ、ちらと盗み見て居た。——拾つて喰べるか、喰べないか。喰べないで居てお呉れ、あとで私が、——

然し、英二は、田舎者は不作法だ、と笑はれたくなかつたから、一つ一つ、どんな小さいかけらでも、拾つては喰べて居た。お絹はがつかりして、口の中で唾液を呑み、狼狽てて、手仕事の方へ眼を移した。

英二が喰べ終つた時、丼の中には何にも無かつた。お絹は、ひき吊つたような笑顔をつくり、悲しい聲で、

「甘味かつた?」

「あゝ、甘味かつた。」

彼女は溜息を吐いた。そして、未だぬくもりの冷めない丼を、胸に抱へて下りて行つた。」

晝少し過ぎ、お絹は家を出た。昨夜の決心を實行するためであつた。彼女は幾度も、電信柱や荷車にぶつかりさうになつたり、肴屋の鉢巻きに罵しられたりした。

頭の中は、「それは正しい事か、」といふ思ひで一杯になつて居たから。

カフェ、ローラの白煉瓦の建物が、學生街の角で薄埃りを冠つて、晝寢をして居た。影の薄い晝電燈が、軒先でとぼけて居た。大理石の門柱には、十三になつた許りのボーイが二人、金ボタンの制服姿で、お互に戯談口を叩き合つて居た。二人共、閑で退屈であつたから、何か悪戯の種を探したがつて、栗鼠のような眼をむいて居た。丁度、好い鹽梅にお絹が、入口のどあを押して居る處であつた。二人は、狡猾なめくばせをし、急に大眞面目な顔で、

「いらつしやあーいー」

と、怒鳴つた。お絹はぎよつとした。彼女は未だ、こんな立派な建物の中へ這入つた事がなかつたので、吃驚して居た。「直ぐその後で學習院へ御通學になつても差支へない、」ような可愛いい坊つちやん達から、こんな掛聲で歡迎せられる覺えがなかつた。で、大急ぎで、二人へ向いて、眞赤になり乍ら頭を丁寧に下げた。二人の悪戯者は、何方がお芝居が上手か、といふ風に、同時にお絹の腰付を、直ぐその後で眞似て居た。彼等は、退屈な時にお客のあら探しを遣ろのに慣れて居たから、お絹が、少し左足を引いて歩く事を、見逃さなかつた。

「うふ…………」

彼等は、二本の指を唇に當て、堪らないと言ふ風な細眼をして、忍び笑をして居た。不思議な事にはその顔が、二十過ぎた放蕩息子の表情になつて居た。…………

お絹は勝手が解らなかつたから、さんざ、きよろ〲見廻し、最後に、料理場の皿を出し入れする處から首を出して、ナイフを磨いて居た男に、馬鹿丁寧な言葉遣ひでたのんで居た。新聞の廣告を見た事。どんな事でも辛棒する積りで居る事。などを話して居た。ナイフ磨きは少し鈍な男であつたから、眼をぱち〲させて、沈默つて居た。が、奥で、代りのもつと澤山の聲が、返辭をして呉れた。

「女ボーイになりたいつてんだらう？」

「そんな話しなら、此處じやあ駄目だい、」

「お爺つさんにやあ、ナイフ磨きの事だけしきやあ解らねえや、」

「事務所へ行つた、行つた。」

それらは、廣い料理場の隅から起つて居た。其處では、コックが五人、コスメチックで頭だけを光らせ、大俎の上に尻を載せて、「昨夜の女が、どんなに愛嬌者だつたか、」といふ事に就いて、自惚け合つて居た。

お絹は赫くなつて首を引込め、其處を去らうとした。

「へえ、大した心掛けだ。日に五人はあんな風な女が來やあがる！」

一人の濁聲が、その後から浴せかけて來た。

――へえ、大した心掛けだ。――

お絹はもう少しで、この窒息しそうな洋館から出て了ふ處であつた。が、一歩外へ出ると、生活が大きな口を開いて待つて居た。彼女は、ほんの少し許りでも、パンのかけらを掴まない内は出る事が出來ない事を、よく知つて居た。……支配人が逢ふだらう、と言ふので、お絹は暗い控へ室の隅で、ながい間待つて居た。薄絹の衝立が二枚、バーへの通路と距てて居て、狹い三角形をなして居た。その中のソファに腰を下して、じつと息を呑んで居た。

深い靜けさの中に何處からともなく、巷の雜音が響いて來た。それに混つて、燻し燒きの肉、蒸し魚、さま〴〵なかぐはしい香料、それらの匂が、煙のように漂つて居た。お絹は、餘り腹が減り過ぎて居たから、その煙の中に浸つて假睡をするほど、ぼんやりして居た。立上る元氣がない程、ぐつたりして居た。

やがて、こと〳〵と靴の音が近づいて來るようであつた。お絹は、ばね仕掛けのように飛び上り、直立不動の姿勢を取つて、その音に耳を澄して居た。

が、彼は直ぐ來なかつた。エプロンを掛けた若い女が、金切聲で何か呼び掛け乍ら、彼を逐つて來た。

「駄目だつてんだよ。」

「可厭あよう、後生だから返して頂戴よう、」

「もう一枚貰つてお出でよ。そうすりやあ、尙、可愛がつて與れらあね、」

「いやあよう、返して頂戴よう。」

「好い加減に諦めた方が宜からうぜ、ほら、これで我慢するんだ！」

それは如何はしい猿芝居であつた。男は、矢庭に女の首つ玉を締めつけ、耳朶に口を附けた。同時に、女はさかりの猫のような悲鳴を上げ、大きな尻を振つて身悶へして居た。

お絹は恥しさに顏を赫らめた。全で、自分ひとりが、恥しい事でもしたように、彼等の眼から如何して逃れたものか、と言ふ心配で、後の壁にぺつたりと、身を寄せて居た。が、ちつとも心配する必要はなかつた。衝立の蔭からは明るい方がすつかり透いて見えても、向ふからは全で見えなかつたから、又假令、見えたにしても、彼等はそんな事には慣れて居て、恥しいと言ふ感情を持ち合せて居なかつたし、出鱈目の照れ隱しを遣る位は、朝食前であつたから………

が、到頭、支配人は這入つて來た。激しい息遣ひが未だ靜まらないで居た。顏だけ、平常の職業的なにこやかさに戻つて居て、非常に落付いて居た。

「私が支配人の岡田、」

お絹は、本能的な恐れのために慄えて居た。自分で自分をかばふような身構へをして、突立つて居た。然し、岡田は一分前の出來事を忘れて居たから、不愛想な世間なれない娘を怪訝な眼で見て居た。そして、低いおしつけるような聲で、

「お掛けなさい！」

と、お絹の席を顎で示して居た。

お絹は、同じ人間が、唯つた五分の間にでも、色々な藝當が遣れるものだ、と言ふ事を知らなかつた。自分の眼を疑つて居た。で、臆病な心を鞭打ちながら、「何しに來たのか、」を、又、彼女がどんな辛棒でも爲る覺悟で居る事を、吃り勝ちに話し初めた。

其處は、二人が向ひ合つて腰を下すのには、大分狹かつた。話す間中、膝頭が擢れ合つて居た。お絹は、自分の體が慄えて居るのを、氣附かれるのが恥しかつたから、出來るだけ身をよぢらせて、膝頭が喰違ひになるようして居た。然

し、直ぐ、彼の膝頭が逐ひ掛けて來て、ぴつたりと押し附けて了ふのであつた。その度びに、腐つた肉のぬくもりが、お絹の體中を締めつけ、息も出來ないようにした。お絹は、この厚かましい無禮者の膝を、もう少しで跳ね返すところであつた。が、賴む事があつた。これが、堪忍と言ふものであつた。お絹は怖えた眼で彼を見た。脂切つた顏が、喘くような口付をして、頻りに葉巻きを吹かして居た。

「俺が、こんな貧乏娘の事を、夢にでも氣にして居ると思ふのかい？」

横柄な鷲鼻が、そう聽いて居るようであつた。お絹は再び、臆病に囚れた。…………何と言ふ恥しい事か、この男は、私の膝に觸つた事を、木片に觸つた程にも氣にしては居ない…………

岡田は、至極涼しい顏をして、迷惑そうな皺を刻んで言つた。

「初めて來た時は、誰でもそんな風に言ふもんだよ。然し、慣れて來ると女つて奴は、隨分圖々しいもんだ。」

お絹はそんなぞんざいな口の利き方を、未だ聽いた事がなかつた。自分に言つた事か如何か、と岡田を見た。

「それに、一人だけ欲しいと思つて廣告を出したのに、余り希望者が多くて弱つてる、」

お絹は、自分も彼を弱らせる希望者のひとりだと思つて居たから、悲しい失望のために、眼をおとして了つた。

岡田は、先刻から慵い眼でお絹を見て居た。然し、彼は立派な支配人で、自分の職業に忠實であつたから、給仕女を扱ふには鈍い眼を持つて居た。お絹の様子に、先刻から可成り心を惹かされて居た。殺されると知り乍ら、勇敢に反抗し續けて居る俘虜の小娘のような、可笑しみを面白がつて居た。

「あれで、一寸客種を變へるかな！」

彼は慵い眼で見續けて居た。窓を透して午後の白い光線が、蜘蛛の糸のような纖細さをなして流れ込み、その光の中

に、お絹の薄い耳朶と、赫い捲毛の垂れ掛つた横顔が晒されて居た。

彼は、お絹を使ふ事に決めて居た。が、それを直ぐ、お絹に知らせて遣る程の親切心に、欠けて居たから、人を小馬鹿にした様子で、口笛を吹き、靴の先で、床の上に足拍子をとつて居た。

お絹は、彼のその様子を見るのが、辛かつた。もう、彼は、自分には用事がない。早く出て行つて了ふのを、もどかしがつて待つて居る。…………お絹は力なく立上る處であつた。が、――――宿では英二が、空腹の儘で、狭い三疊を野良犬のように、往つたり來たりして居るだらう。假令、おえいでも、お金を遣らないでは喰べさせて呉れないだらう。――――お絹は身慄ひした。そして、最後の悲しい努力を試みるために、彼を見上げた。今、可哀想な弟と自分が、どんなに困つて居るのかを哀訴しようとした。

彼女は今まで、凡ゆる苦痛を堪へて生活して來た。國許では、老いた父親が、「火の用心」の拍子木を叩き乍ら、二人の成功を待つて居た。彼女はつい近頃まで、ミシンを遣つて居た。死ぬ程辛い仕事であつたが、彼女はそれを辛棒して居た。弟を呼び寄せる樂しみの爲めに、であつた。彼女は怪我をした。冷酷なミシン屋が、ミシンを取上げて行つた。弟が來た。彼女は學校へ出して遣り度かつた。然し、今夜は喰べるものもない。弟にそれを悟られる位なら、死んで了つた方がました。それに、父親も六十三になつて居る、何時死んで了ふか解らない。彼女は、唯つた一遍でも父親に甘味いものを送つて遣りたい。…………………

お絹は、自分で自分の聲に感動して居た。涙が頬を流れた。何と言ふ慘めな目に許り、逢ふ事か。最早、彼女には、反抗の意氣はみじんも殘つて居なかつた。土下座をして額を泥で汚しても、口惜しくなかつた。若しそれで、聽き届けられるものなら、彼女はどれだけそれを欲したら・・

お絹は、涙に濡れた瞳で、彼を見上げた。然し、――彼はちつとも聽いては居なかつた。父親が、六十三になつて居ようが、彼にはちつとも關係がなかつた。彼は、只、ぼんやりしてお絹の顏を見て居ただけであつた。頭の中では、今夜、劇場で逢ふ約束をした女の、可愛いい味噌つ齒の事を考へて居た。それが濟むと、昨夜の寢不足を補ふために、ずつと深く腰を下して、假睡を始めようとして居た。

丁度その時、お絹の言葉が切れて居た。岡田は小さい欠伸を續け樣にし乍ら、それをちつとも隱さうとしなかつた。

「それで……………」

お絹はもう、言ふ事が無かつた。彼女は、がつかりして、起上る勇氣もなかつた。

「それで何だね、君は體は丈夫だらうね、これで、遣つて見ると、はたで見るように樂じやあないよ。朝から晩まで隨分激しく體を使ふから、ひ弱い女ぢやあ一堪りもないからね。」

彼は、お絹の萎れた樣子に、少し許り氣を惹かれて居た。それに、氣紛れが手傳つてゐたから、優しい調子で口を利いて居た。お絹はその調子に欺かれて居た。彼女は、自分がどんなに頑健であるか、彼に見せたかつたので、袖をまくつて、日に焦けた腕を見せようとした。

「どれ！」

急に彼の眼が、卑しい願望で輝いて來た。それは電光石火の早業であつた。お絹のか細い腕が、彼の兩手の中にはがひじめにされ、乳房が鷲掴みにされた。お絹は魂切るような叫聲を擧げて、彼の腕に噛みついた。

「騒ぐんぢやあないよ。」

彼は呼吸をはづませ乍ら、靜かに手をほどいて居た。そして薄笑ひを浮べ――、

「只一寸、お醫者樣の眞似をしただけの事じやあないか。」
彼は、お絹の金切聲に辟易し乍ら、面白がつて居た。彼はこんな猿のような娘を、見た事がなかつた。
「今に、摺れつ枯らして來ると、丁度好い加減になる、」
そう思つて、笑つて居た。が、お絹は、恥しさに氣が遠くなつて居て、何事も分別する力を失つて居た。
「もう、お暇いたします。」
お絹は立ち上つた。
彼はちつとも留めなかつた。「貧乏娘の痩せ我慢」が、どれ丈け續くか、彼は能く知つて居た。又明日、否や、今日のうちに遣つて來るだらう…………
彼は、お絹をもう少しからかつて遣りたかつたから、彼女のみすぼらしい黒襦子の洋傘をわざ／＼どあまで持つて出て、自分でさし掛けて遣つた。
「おや、こいつは不可ねえ、骨が折れて居りますね、」
お絹はもう澤山であつた。それを捥ぎとつて、街へ驅け出て泣いて居た。
「へん、大したお孃さんだ。もう、お暇いたします、か。」
が、彼は直ぐに、この出來事を忘れて了うた。パロアでは、女優の話しをし掛けた儘で待つて居る客が居たし、そろ／＼夜の仕度を初めなければならなかつたし、氣に入りのお光を、もつとぢらして遣りたかつたし、兎に角、彼は非常に忙しかつたから…………

お絹は、石塊の上に頭をぶつつけて、死んで了ひたかつた。矢鱈に、何處と言ふあてもなく、街々をさまよひ歩いた。男や女が歩いて居た。皆、平穩無事な顏をして居、屈辱も激怒もない、不可思議な顏をして居た。お絹は、激しい反抗心のために身を殺しかけて居たから、火を放つて、塵埃と共に、それらの人間を永久に燒き拂つて了ひ度かつた。幾時間、幾里位、何處を歩いたか、彼女は知らなかつた。軈て、激しい疲勞が來た。彼女の憤怒が、靜かな悲哀に變つて行つた。英二が、どんなに待つて居るだらう。お絹は眼を擧げて、遠い空を見た。

「もつと大きな屈辱が來るだらう。」

お絹は再び、首をうな垂れて歩き初めた。疲勞につれて、堪へがたい飢が遣つて來た。體中の凡ての感覺を覆つて只、「喰ひたい!」といふ丈けが、のさばり返つて居る、と言ふ風な飢であつた。お絹は、その飢に向つて腹立しげに叫んで居た。

「そんなに喰ひ度けれあ、臓腑でも喰つて我慢するが好い!」

が、それはほんの一瞬間であつた。次の瞬間では、飢は何處かへ姿を隱して、只、何とも言へないかつたるさだけが、感じられた。腹の底に脱脂綿でも詰め込んだような、變な氣持であつた。風船玉のような腰付で、他愛もなく歩いて居た。その間は、五分位續いて居た。が、直きに前のよりも激しい飢が戻つて來た。かうして、疲れと飢がちやんぽんになつて居乍ら、だん〳〵に疲勞だけの間が短くなり、最後には、只飢だけが、體中を虐んで居た。それは丁度、陣痛が迫つて來る時に似て居た。お絹は飢に身を任せて、倒れさうになつて居た。

丁度場末の殺風景な露店の多い通りを歩いて居た。赤い提灯を出した、張天井の軒先で、煮賣屋の親爺が、眞鍮鍋のおでんをつつ突いて居た。煮しめた醤油の匂が、お絹の腦天に、丸太ん棒の一撃を食らはすような激しさで、泌み渡つ

た。お絹は二三度、その前を往つたり來たりして、内の様子を見た。親爺の汚い料理前掛と、竹箸を握つた手とが見えるだけで、顔は暖簾の蔭に隠れて居た。その奥では、職工、俥夫、人足のたぐひが群をなして、呑んで居たが、彼等は濁酒の舌觸りを享しみ、雑談に氣をとられて居た。誰もお絹を怪しむものがなかつた。お絹は、鼻腔を開いて、夢遊病者のような腰付で、往つたり來たりして居た。飢餓が、氣の狂ふ程のじれつたさを伴つて、じり〳〵とお絹の體を廻つて居た。それに身を任せて、お絹は享しんで居た。それは、ヒステリー女が、逞しい男の腕つ節で、叩きのめされ乍ら、その痛さに嬉し涙をこぼして居るのと同じであつた。それは誰にも知られない、快い享樂であつた。彼女は夢中になつて、お百度詣りのように往つたり來たりして居た。が、ほんの少し許り、理性が殘つて居た。店の前は工場歸りの男や女で、可成りな人通りであつた。お絹は恥しさで赫くなつた。――何といふ眞似をして居たのだらう。晩まで斯うして居たら、腹でも膨れると言ふのか――と言へば、宿でも英二が同じように、おえいの家の臺所の蔭で、鼻を蠢めかし乍ら、往つたり來たりして居るだらう。

お絹は急に、急ぎ足で歩き出した。その時再び、ローラの支配人に逢ふ事を、ひそかに決心して居た。もう、恥も外聞もない、只、自分の飢と英二の飢とに、支配せられて居た。

「兎に角、餘り我を張るのは不可ないね。何しろお客相手の商賣だから、我慢をするのが一番大事だ。」

お絹は又、例の隅つこで、全で見當違ひのお説教を聽かねばならなかつた。その上に、先刻の彼女の粗忽を（彼女は全で反對を信じて居たが、）恥しい思ひをして、彼に詫びなければならなかつた。弱者と強者との道徳はあべこべになつて居た。只、それはうはべだけで、心の中では何を考へて居ても好かつたから、お絹は伏眼になつて上草履の赤い鼻緒を見詰め乍ら、彼に對して敵愾心を燃やして居た。

聽て、彼に案内せられて化粧室へ行つた。これから、お仲間になるべき女給仕達に引合はされるためであつた。其處では十五人餘りの女給仕が、電線に列んで止つて居る燕のやうに、長い腰掛にずらつと列んで、喋つて居た。あと二人丈けは、鏡に向つて、直きに初められる夜食の、客のために頻りに浮身を窶して居た。まだ黛を塗らない前の夕顏のようにぺろつとした顏と、恥しげもなく黑い肌を拔いだ儘の白首とが、同時にお絹の方へ振返つた。

岡田は、お絹の前で支配人の貫目を保つために、鹿爪らしい樣子を裝つて女達に君臨しやうと、滑稽な努力をして居た。然し、女達はこの色好みの支配人を、てんで馬鹿にして居るから、彼の訓示に耳を傾けては居なかつた。

「これが、今夜から店へ出るようになつた、お前、何て言つたつけな、あ、お絹さんてんだ。皆、仲よくして、解らない事は親切に敎へて上げ給へ。」

語尾は、女共の喧騷の中に掻き込まれて了つた。彼女達は一齊にお絹に眼を向けた。それらの眼からは少しの好意も見出されなかつた。只、出來る丈け多くの缺點を、お絹の樣子から拾ひ出さうとする焦燥で、光つて居るだけであつた。そして、お絹の頭のてつぺんから、足の先まで、端念に調べ上げて居た。

眞岡木綿の洗ひ晒した浴衣は、膝頭でぽこつと膨れて、裾の方で捲れて後へ跳ね返つて居た。變な紙人形のような格好であつた。更紗の帶は、染色がにぢんで、どんな模樣か歷然して居なかつたし、結び方も流行を超越して居た。足袋を穿いて居ない足は、埃を冠つて眞白であつた。梳らない頭髮は只束ね上げたといふ丈けで、おまけに、少し側へ寄れば鼻を摘まないでは居られないだらう、と思はせて居た。彼女等は、ほんの一瞬間、唯の一瞥で、これだけを調べ上げて居た。そして、安心して、この身の程知らずの新米を輕蔑する享しみを味つて居た。心の中で、陰口を利く時の符徴を、友達を吃驚させるような巧い綽名を案じ出さうとして、めいめいにあせつて居た。――「ひやめし草履」これは

お絹の上草履が、皆のように上等なフエルトでも畳付でもなくて、誰かが穿き切らして、下駄箱の底に投げ込んで居たのを借りたので、もう尻が切れて、酷くなつて居たから――――「片びつこ」これは、お絹が左足を引いて、支配人の後から歩いて居たのを、丁度其方を向いて居た女の眼に觸れたから――――「異人巻」これはお絹の頭髪が、赫くて、波を打つて居て、妙な風に卷き付けてあつたから――斯うして、彼女等は心の中で掌を叩いて喜んで居た。

これ丈けが濟んで了ふと、もう彼女等は、お絹に用事がなかつたから、又元のように、し掛けたお饒舌をし續け、塗り掛けた白粉を塗り續けて居た。お絹は、冷い凝視の中で悶くなつて居た。暫くして、それから解放せられた時は唯つた一人であつた。彼女は遠慮がちに、その長い腰掛の端に、最後の燕から二尺程、ぽつんと離れて腰掛けて居た。彼女はそのまゝ消えてなくなりたかつた。初めて、自分のみすぼらしさを知つたのであつた。彼女は今迄、只、パンの事許りしか考へて居なかつたから、みなりで、こんな惨めな思ひをしなければならない世界のある事を、ちつとも知らないで居た。

お絹は、二時間も經たない間に、此等の女共が醸して居る空氣が、どんなものであるかを知つて了つた。今から、その空氣の中で呼吸しなければならない、そう思つただけで、お絹は怖毛だつて居た。

彼女等はお互に、嫉視反目の中で、激しい戰鬪をして居た。嫉妬だけが彼女等の感情であつた。それを引拔いて了へば、氣の拔けたビールのように、馬鹿になつて了ふであらう。と思はれた。彼女等は、凡ての客の心を、自分の上だけに惹き寄せたいと、誰もが考へて居た。若し、許されるならば、彼女等は、自分ひとりで、凡ての客の給仕を引受けようとして居た。その爲めには、卓子と卓子との間をマラソン競爭のように馳け廻り、息切れがして倒れても厭はなかつた。自分でない誰かが、客から特に愛せられる、と言ふ事は、彼女等にとつては許せない事であつた。その客が假令、二た

眼と見られない目つかちであつても、顔中、ひつつりが出來て居ても同じ事であつた。若し、自分でない誰かが、特に寄かに愛せられ、それが、如何しても防ぎようのない場合には、彼女等は、凡ゆる方法で陰に廻つて、その女をいぢめて、失はれた自分の面目をとり返さうとして居た。自分ひとりではいぢめ足りない時は、唯つた一瞬前まで、仇同志であつた仲間とでも、平氣で、攻守同盟を結んで、その女に對抗して居た。それは實に、目もあてられない露骨さで現はれて居た。彼女等は、自分よりも美しい、又様子の好い、仲間が居ると言ふ事を、認めなかつた。認めても、平氣で抹殺して居た。

斯う言ふ彼女等にとつては、一人でも、新らしい仲間が増える事は禁物であつた。増してそれが、何處かに見處のある女であつた場合には尚更であつた。「とても辛抱し切れないで出て行つて了ふ、」ように、向けるのが、新らしい仲間に對する唯一の遇し方であつた。大抵の女給志願者が、その第一線で敗けて居た。「とても辛抱し切れない、」と言つて兜を脱いで居た。前から居た女達は、それを待つて居た。その女が、ちつとも逆らはないで、素直に出て行かうと言ふのは、大變、女共の氣に入つた。彼女等は、去つて行くものに對しては別人のように親切であつた。

「どうぞ、又、時々遊びにいらつしやいね。」と、言つた。

「御氣に觸る事を言つて濟まなかつたわ。」と言つた。到頭、最後に、

「御手紙を頂戴ね、私も乾度、お便りを上げてよ。」と、誓つた。唯つた一瞬間前まで、眼の仇にして居た邪魔者の住所などを、知つて居やう筈のない事を、うつかりして居た。で、大抵の新入りが、この甘い言葉を聴くたびに、二日と經たない間に「出て了はう。」と言ふ誘惑に降参して居た。

然し、お絹は執拗な意地を持つて居た。相手の惡意が露骨であればあるだけ、彼女は頑張つて居た。

お絹の此の強情と傲慢とは、瞬く間に店中に知れ渡つて居た。女共は、暗黙の内に、互に結束して、お絹の生意氣な考へを粉砕しやうとして居た。誰も、彼女の赤い腰紐が一尺程、帯の下からぶら下つて居るのを、教へて呉れる者はなかつた。誰も彼女の足袋を穿かない埃の素足を、注意して呉れるものはなかつた。夕飯を喰べるべき時が來ても、誰も彼女を誘ひ合して行かうとする者はなかつた。お絹は、その敵意を、直ぐに感じて居た。そして、もう一つ先廻りをして、誰にも教はらないで、何でも遣つて居た。それは驚くべき偉力であつた。彼女は五感の許す限り、女共が嘲笑の種にしやうと謀んで居る事を、凡て嗅ぎ出して居た。可哀想なお絹は、その爲めに、彼女の全精神を犠に捧げ、凡ての精力を容費して居た。そして、ちつとも氣が附いて居なかつた。彼女の心は、はち切れそうになり、唯つた一刺で血が漲り出る程、緊張し續けて居た。

カフエ・ローラは都下でも二流と下らない店であつたから、夜、九時より遲くまでどあを開いておく事を、恥として居た。(それは只、表看板であつた。恥しくて揭げられない看板であつた。)客に酒を呑ませたり、女に媚を賣らせたりする事は、勘定の中へ入れて居なかつた。只、自慢の料理をお客様に味つて頂く、それより外に、料理店の思惑があつてはならない。支配人は、何時もそう廣言して居た。又その通り、一流の客に一流の料理を喰はせて居た。客が立て込むのは食事時だけで、夜更けまでのんだくれてゐたいような者は、もつと下等な所で我慢するが好い！支配人は、そう言つて居た。お蔭で、女給仕達は比較的早く、家へ歸れるのであつた。然し、彼女等には、それから後に、薄暗い世界があつた。思ひ思ひの方角へ出掛けて行つた。

お絹は、朝から晩まで、敵と惡ごすい間諜の中に居た。店がはねて、一歩、どあの外へ出ると、石段の上へ突伏して了ひたい程、ぐつたりして居た。宿へ歸つて英二と語り合ふ、と言ふ慰めがなかつたら、どあの前で、通り掛かる目敏

車の下敷になつて死んで了ふかも知れなかつた。お絹は酔つぱらひのような足どりで歩いて居た。

お絹は初めての夜、一圓なにがしのチップを、客から受取つて居た。彼女は巾着を持たないで居たから、その紙幣を皺くちやにして、掌の中に握りしめて居た。そして、歩き乍ら考へて居た。

これは正しくない仕事か。自分は媚を賣つたか。——

その男は吝みつたれた成上り者であつた。彼は、ローラへ度々飯を喰ひに行く、と、友達に吹聴して居たが、未だ一度も行つた事がなかつた。いつも、彼はその事を不安に思つて居た。で、彼は來た。彼は、素晴しい御馳走が出て、美しい給仕女が彼をちやほやして呉れるだらうと、期待して居た。然し、彼は大喰らひで、一人前の料理では喰ひ足りなかつた。

「けちな料理だなあ、」

彼はデザートに出た水菓子を喰べ終り乍ら、考へて居た。その上、給仕女は膨れつ面をして居た。(それはお絹であつた。)彼は、高い勘定を支拂つた上に、こんな可愛げのない女に、只呉れて遣るのが業腹であつたから、如何かして遣らないで濟まさうと思つて居た。で、彼は、椅子を引いて立ち上つた。折あしく、お絹が彼の手附を見て居た。(彼は變な處に臆病で、氣が弱かつたから、廻し氣でそう思つて居た。)彼は吝みつたれだ、と思はれるのが、身を切るよりも辛かつた。一應、懐にしまつた蟇口を又取出して、五十錢札を引出した。そして、

「チェッ」

と舌打ちをした。それは、チップを置いたぞ！と言ふ合圖であつた。丁度、お絹は他處を見て居た。彼はじれつたがつて、

「オイ、此處へ置いたぞ！」

と、卓子の上を指して居た。それは、恩惠を施して遣つた、とでも言ふ風な横柄な口の利き方であつた。お絹は、

「有難うムいます。」

と禮を言つた。――彼は、恩惠を施したと言ふ意識を持つただけで、充分、五十錢に價して居る、と考ふべきであつた。お絹はその辱しめを受けて禮を言つた。

それが媚を賣つたのか。

小間物屋の店先では、緋鹿の子の娘や、眉の青い四十後家が、頻りにおべつかを遣つて居た。乘合自働車では、あたら盛りの娘が、あられもない洋服姿で、白粉を塗り、助平爺いを嬉しがらせて居た。郵便局の窓口、お役所の事務机、何處にも白粉を塗つた姫御前が、同僚の男や、上役のお髯の塵を拂つて居た。

猫を膝に載せたお妾でなくとも、凡ての家で凡ての女が、男に色を鬻いで居た。彼女等は午後四時が打ち、良人の靴音が門先に聽へる前に、白粉を塗り紅をさして居た。丸髷と言ふ貞操の象徴を賣つて、ダイヤモンドの指輪を購はうとして居た。

何處でも、金と白粉のある世界では、女は、媚を賣らないでは生きて行かれなかつた。

媚を賣つたか。――それは當り前であつた。お絹は生きて行かねばならなかつた。

宿の方へ露路を曲る四つ辻で、六十過ぎたお爺さんの巴燒屋が、赤い提灯の下で、近くまで餡ころの匂をさせて居た。お絹は、毎夜、其處で英二への土産を買つて歸つた。

英二は、姉の歸りを待つて居た。素麵箱を横倒しにした机の上には、英作文の教科書が開いた儘になつて居た。彼は未だ子供で、時々、姉の歸りが待ち切れないで、睡くなるのであつた。彼は、甘い夢の中に彷徨ひ乍ら、教科書の上へ首を投げ出して居た。彼は姉の生活を知らなかつたから、自分が、他處のお坊つちやんのようにして、暮して居られる事を、大して感謝しては居なかつた。あどけない夢を見、涎を流して居た。

お絹は、へと／＼に疲れて居た。階段の下まで辿り着くと、もう上つて行く程の元氣もなくなつて居た。兩手を伸して、階段にしがみ附き乍ら、ばつたん／＼音をさせて、上つて行つた。英二は、どんなに寢呆けて居ても、その音だけは聽き逃した事は無かつた。バネ仕掛のように飛び上り、狼狽てて、口の廻りに袖を當てて居た。寢て居た事を姉に知られるのが恥しかつたから、立續けに饒舌つて居た。今日、電車の中で女の兒が泣いて居て、醉つぱらひが、「矢釜しい！」と怒鳴つた事、表邸の犬が、空蟬橋までついて來て、歸らないから石を投げつけて遣つた事、など、何の話しも極く下らないものであつた。お絹は、彼のてれ隱しを見逃しては居なかつた。が、それを咎める氣などはちつとも湧いて來なかつた。只、英二のその聲を聽いて居るだけで、心が海のようになごやかになつて行つた。何も彼も慰められて居た。二人は、蒲團の上に腹這ひになり、巴燒の袋を引寄せ乍ら、暫く、樂しい無駄口を叩き合つて居た。

その時、お絹の顏は、疲れて死んだようになつて居た。一時に、三つも年を老つたようになつて居た。幸な事には、五燭の電燈は暗かつた。英二は長い間、姉の顏色をはつきりと見た事がなかつた。彼は、表邸の坊つちやんよりも幸な、夢を結んで寢て居た。

朝八時。

美しい奥様やお嬢様が、前後して二十人近く、ローラの表のどあを押して這入つて居た。客の殘り物を、摘み喰ひなどした事がない、と言ふ風にすました顔をして居た。彼女等は往來を歩く時、ローラの給仕女だと氣附かれる事を恐れて居た。昨夜、どあの前まで送り出し、投げキッスまでして別れた男と、途中で逢つても、知らぬ顔をして摺り抜けて居た。

「おや！」

その男は振返り、自分の眼が昨夜の夢を見續けて居るのか、と疑つて居た。それ程、彼女等の理想が、お嬢様や奥様になる事にあつた。それは、樂で、お洒落が出來て、男共にちやほやせられて居たから、尚、自働車に乘れて、好きな買物が出來たから……

が、この僞物のお嬢様や奥様達には、どあを押すと、うんざりする程、朝の仕事が待ちうけて居た。彼女等は、ぶつくさ言ひ乍ら、その仕事を横眼で見、先づ、朝の食堂へ行つた。食堂！そこは豚小屋と言つた方がましであつた。便所と、貯藏室とが兩方に隣り合せて居た。獸肉と魚肉と野菜とが、腐り、蒸れて異臭を放つて居た。全で、嘔吐するために喰べて居るやうなものであつた。おまけに、飯の中にはラングーン米が混つて居、薄い味噌汁の中では、わかめがめだかのように浮いて居た。三度ともそれであつた。只、殘飯でない丈けがましなのであつた。腹一杯、喰べようにも、喰べる事が出來ないように出來て居た。彼女等は、あとで、料理場の蔭でコック共と一緒に、チースやフランスパンをちよん切つて喰べようと思ひ乍ら、好い加減に豚小屋から飛び出して居た。

それから、彼女等は仕事着に襷掛けといふ、身支度をして、外から窺ひ知る事の出來ない、激しい勞役に就くのであつた。幾百の靴と草履に踏躙られた化粧煉瓦の床の上に、泥をなめる程、腹這になり乍ら、雜巾掛をし、拭いても拭いても果しのない窓硝子の汚點に、溜息と共に息をふきかけ、尙、卓子の上の飾付け、皿洗ひ、食器磨き、それらの仕事は、二十人が總掛りで、三時間ぶつ通しに働いて、やつと片附くのであつた。

誰かが、息拔きの積りで、呟くような低い聲で、流行唄を唱ひかけて居た。誰も、それに隨いて唱ひ出さうとする者はなかつた。それ處か、女中頭のお濱は、忌々しげな舌打一つでその唄に報いて居た。彼女等は、餘り仕事が多過ぎたから、氣が短くなつて居た。唄を唱つて居る呑氣者に腹が立つたのであつた。皆、不機嫌で、不平を訴へ、絶えず、愚圖々々こぼして居た。仕事の間中、陰慘な墓場のような靜けさが、擴つて居た。時々、皿のかけあふ音がした。お濱は、癇癪玉が破裂したような聲で、怒鳴つて居た。

「チェッ！序いでに割つてお了ひな！」

誰の瞳も、意地惡く光つて居た。(同じ瞳が、夜になると、瓦斯洋燈の下で、水々しく笑ひ掛けるのであつた。)

斯うして、朝の仕事が終つた。午食の客がすつかり去つて了つたあと、又朝と同じ仕事が繰返された。夜、最後の客を送り出してからも、樣々な後片附けが殘つて居た。それは體の好い下女奉公であつた。貪婪な店主は、僅かな報酬をも出し澁つて居た。それ處か、彼女等が客からチップを貰ふのを、ちらと横眼で見乍ら、

「如何だ！此店に居れば、そんな好い事があるじやないか。」

と言ふ風な顔付をして居た。自分の店に置いて遣る丈けで、充分感謝すべきだ、と考へて居た。

女共は、馬鹿許りが揃つて居たから、自分達の終日の勞働が、何處へ搾り取られるかを、考へて見やうともしなかつ

た。一錢でも多く客からチップを貰はう、と心掛けて居た。それは、お門違ひな考へであつたが、店主に都合の好い長い間のしきたりから、彼女等は夢にも怪しんだ事がなかつた。

で、女共は、客が來るのを待ち受けて居た。朝からの激しい勞働の腹癒せをする積りで居た。彼女等の頭は只、チップの事許りで、一杯になつて居た。

ぎいーつと、どあが明いた。

麥藁帽子の廂が一寸見え、氣取つた赤靴の爪先がちらと見えた。その瞬間に彼女達は、這入つて來る客の全體を、彼女達特有の鋭敏な直覺で見透して居た。

男は、帽子を脫いで汗を拭くより前に、

「俺は今日、これつだけしか持つて居なかいんだ!」

と、財布を抛り出して見せる方が、ましな位であつた。

月給日の晩だけに遣つて來る男、友達の衣類を入質して來た男、二十五錢のアイスクリームの皿を、何時までも嘗めずつて居る男、彼女等は、こんな男達をしんから輕蔑して居た。こんな男共には、用事がなかつた。

卓子の上に、小さい銀盆が出て居た。――この上に、銀貨を一つ、置くか置かないか――女達は、何か頻りにお愛想を言ひ乍ら、他處見をして居た。而も、一時も銀盆から眼を離さないで居た。

こんな有樣は、目も當てられない程、痛しいものであつた。彼女達は血の出るような眞劍さで、それを遣つて居た。

全く、うつかりすると生きては居られなかつたから……

が、彼女等は、こんなに金を欲しがつて居る事を、誰にも悟られたくなかつた。「金で苦勞をした事がない、」と言ふ風

を見せるのが好きであつた。彼女達の一番輕蔑する事は吝みつたれであつた。（儉約をすると言ふ事も同じ意味であつた。）蟻のやうに、溜め込むといふ事は一番恥しい事であつた。何でも惜しげなく塵溜の中へ投げ込むやうな風をして居た。

暑い午後。

「一寸、氷が吞みたいわね、」

「私、いちご、」

「私、れもん、」

「チエツ！ミルクセーキにしないの？」

斯う言ふ調子であつた。

お光の草履は、未だ十日しか穿いて居なかつた。絹天の緒の裏が少し切れ、踵も少し許り低くなつて居た。

「もう、穿かれなくなつちやたのよ！」

と、お光は鼻緒を摘み上げて居た。それをボーイに捨てさせる前に、「未だ穿けば穿かれなくもない、」と言ふ事を、一渡り、知らせ廻つて居た。そして、それを捨てさせたあとで、二三日は、ひそかに心の底で、惜しがつて居た。

斯うして、彼女達は、自分のつくつた罠の中で藻掻いて居た。轉々と所を更へ乍ら、何時までも足を洗ふ事が出來ないやうな、破目に陥つて行つた。

お絹は、斯う言ふ風な女達の様子に、唾液でも引掛けて遣りたかつた。

「こんな處に、半年も我慢をする位なら、人の物でも盗んで遣るんだ！」

お絹はそう思つて居た。で、平氣で、古草履を引摺つて廊下を歩いて居た。女達はその草履を知つて居た。自分達の平和な花園を、踏み躙つて行く異端者の足跡を、しかめつ面をして見送つて居た。それは、女達には我慢のならない事であつた。

「冷飯草履！」

そう怒鳴つただけでは、腹が癒えなかつた。もつと酷い、唯つた一言で、お絹の腹をえぐり返して遣るような、罵詈を考へ出さうとして、あせつて居た。

お絹が唾液を引掛けて遣りたいのは、仲間の馬鹿女だけではなかつた。此店へ來る客の殆んど凡てを、お絹は心の中で、鎗玉に擧げ、小突き廻して腹癒せをして居た。

ほんの少し許りの客だけが、只、食事をする爲めにだけ、食堂へ這入つて居た。あとは、女を張りに來る不良少年、女を馬鹿にして偉がつて居る道樂者、煙草を吹かす場所を探しに來る穀潰し、自分の心と差向ひになるのが恐ろしさに、女と酒の間で假睡して居る臆病者、「俺が、どんなに偉い哲學者か、」と言ふ事を、邊りの人に吹聽しに來る唐變木、誰も相手にして呉れないで、仕方なくごろつき廻る貧乏華族、此等の人間が、お客樣として奉られる「安易さ」を恃んで、恣にのさばつて居た。

彼等は、どんな料理を出されても、決して、賞めなかつた。決つたようにしかめつ面をして、

「もつと甘味いものを喰はせないかなあ、」

と、言つて居た。（何でも、單純に褒めるのは、不見識な事だと心得て居た。）彼等は、喰べる前に、メニユーと定價表

を穴のあく程見較べて、出來るだけ安上りなものを自分で選んで置き乍ら、ちつともそれを極り惡がつては居なかつた。

お絹は、彼等の側でその皿を見て居た。雞の片足が、ナイフを一刺入れただけで抛り出されて居た。彼等はその一皿が、貧しい者の一日分の生活費に相當して居る事を知らないで居た。若しくは、知つて居て自分の結構な身分をみせびらかして居た。

いつか、場末の街で、激しい飢に迫められた時の眩暈を思ひ浮べ乍ら、お絹は、「飽く事を知らぬ横着者」の横顏を、憎惡を以て見詰めて居た。その、たるんだ頰の肉は、倦怠と憂鬱のために、薄い暗色を隈どつて居た。

洋畫家だ、と言ふ二人連れの若い男が、毎夜のように灯ともし頃を待兼ねて、ローラのバーへ姿を見せて居た。二人とも、畫を描くよりは口を叩く方が上手であつた。口笛、オペラの眞似、齒の浮くような藝術談、我流のダンス、彼等の薄い唇と、痩せた手足がちつともじつとして居なかつた。それが、藝術家の特權だ、と言ふ風に、横柄な騷々しさで振舞つて居た。彼等は、道樂と女蕩しの心から畫を遣つて居た。一人は極端に汚い態をし、一人はぞろりとした着流しであつた。それで、二人とも、各々自分の身態を自慢して居た。(一人は、わざと汚い着物を着て居るのだ、と思はせたがつて居たが、彼の下宿のなげしには、代りの着物はぶら下つて居なかつたし、一人は、自分の容貌に自信がなかつたから、てかてか光る着物で補ふ積りで居た。オールバックの長髮の下には、四つの時犬に嚙まれた疵痕が、好い鹽梅に隱れて居た。)

彼等は二人とも、お絹を漁る積りで來て居た。彼等は、東京中のレストランの消息に通じて居る事を、ルネッサンス

の藝術を論じる程に重大な事と心得て居たから、新しい女給仕が、何處の店へ出た、といふ風な噂を、一番早く嗅ぎ出して居た。そして、初見世の女を買ふような意氣込みと好奇心とで通つて居た。その女を自分等の仲間以外の者にせしめられるのは、展覽會に、自作の畫が落ちたより以上に、不名譽な事だと思つて居た。生蕃が、頭蓋骨を生垣にさして祭るのと同じ風習が、彼等の「不良少年道」に於て行はれた。「初めての女をせしめる、」それ丈けが目的であつて、その女を愛するの、戀するの、と言ふ事は、未だ卵の殼が尻にくつ附いて居るお坊つちやんの言ふ事だ、とせせら笑つて居た。その血祭にお絹が上げられやうとして居た。が、二人は仲が好かつたから、同じ女を爭ふ代りに、お互に讓り合ひ、觀世撚で籤引まで遣つた。その上で、負けた方は潔く相手の權利を認め、尚、相手の爲めに戀の橋渡しをする事を辭さなかつた。それが、彼等の「不良少年道」であつた。二人はローラの店の前で、この新派悲劇の役割を決め、

「ラ、ラ、ラ、、、、」

と踊り乍ら這入つて來たのであつた。

彼等は先づ、一杯宛のコクテルを注文した。そして、一寸グラスに口を附け、決つたように顰めつ面をした。

「君、ツーガンのコクテルは素的だぜ、」

と言つて居た。

お絹は、そんな技巧は聽飽きて居た。で、窓から顏を出して街を、灯の美しい遠くの街を見て居た。

彼等は軈て、此店の料理が評判ほど甘味くない事、そして女達が無智で、平氣で男の玩具になつて居る事、(それが如何したと言ふのか、お絹は二十人の女を代表してむきになつて居た。)然し、君だけは偉い、君は如何してこんな處へ來て居るんだ。……

お絹はもう、そんな技巧も聴飽きて居た。ちつとも感動しなかつた。ほんの義務的な微笑で報いて居た。が、彼等は目的に許り急であつたから、相手の様子を見ては居なかつた。お絹が恥しくて聴いて居られない程の仰山な讃辭を浴せ掛け、おだて上げて居た。そして、

だが、惜しい事に君の帶は、「色の感じが惡い、」（と、彼等は一寸氣取つて言つた。）君のその帶の色がもつと好かつたら、君は未だどんなに美しくなれるか解らない。……

そんな事は聴かないでも好かつた。綺麗な帶が結べる位なら、こんな、むしづの走る青二才のお相手はして居ないのであつた。お絹は冷笑を浮べて聴いて居た。

コクテルが底に少し、何時迄でも殘つて居た。彼等はそれ以上何にも注文しなかつた。

軈て、長髪の男が一人で歸つて行つた。一寸、お芝居掛りの間があつた。殘つて居た男が、豫定の科白を重々しい口調で遣り初めた。

「今井君はね、先刻歸つた男さ、あの男は恥しくて君の前に居られないんだ。あの男は君に戀してる、」

不幸な事には、お絹がこの店へ來てから十日も經たないのに、彼女はそんな言葉を吐出す程聴かされて居た。それよりも「冷飯草履」の鼻緒を讃められる方がましであつた。――ほかの女なら言ふのであつた。「御戯談もんでせう！」オ、、その下卑た輕跳さよ。――お絹はその代りに、唯つた二つの返辭を知つて居た。「ふん」と鼻の先でせせら笑ふ事であつた。石佛のように押しだまつて了ふ事であつた。

然し、このそそつかしい結びの神は、結論を急いで居た。

……あの男は××會社の支配人の唯つた一人の息子で、非常に兩親に愛せられて居るから、彼の戀は屹度、兩親の心

を動かすに違ひない、お絹は一躍して富豪の令夫人になれるかも知れない。(彼は幾度も同じ言葉で方々の女を口說いて居たから、口の廻りへ油を引いた工合に、何時の間にかペラ〳〵と早口になり、折角のお芝居を、駄目にしかけて居た。)

「一躍だつて……」

お絹は呆れてその男の顏を見た。彼女はそんな事を賴んだ覺えが無かつた。

「何卒、そんな事を被仰るひまに、結婚媒介所へでも被入るように、

お絹はぶつきら棒に答へて居た。が、その男は、お絹が恥しがつて居るのだ、と思つて居た。初心な女を射當るには、ひた押しに、圖々しく行くに限る、と自分の心とうなづき合つて居た。だから、友達に「一押し、二金、」と言ふ色男の信條を敎へて遣らうと考へ乍ら、ローラを出て行つた、

お絹は、その男の襞のなくなつた綿セルの袴が、どあの外へ出て了ふのを見詰めて居た。足許に小石でも落ちて居たら、その男の踵をめがけて、投げつけて遣る處であつた。

が、これ位の事で青筋を立てるのなら、この店に居る間中、耳を蔽ひ眼隱しをしてゐる外はないのであつた。お絹は只、小波が足許へ寄せて來る位の積りで、聽流して居れば好いのであつた。彼女は、「馬鹿、馬鹿、」と、念佛を唱へるように呟いて、いきり立つ心を靜めて居た。

化粧室の隅に、非番の三四人がごろ〳〵して居た。何か喰べるか、それでなければ饒舌つて居た。往來を歩く時のお孃樣や奥樣なども、此處では裏店の餓鬼か山の神以上ではなかつた。皆、裸になつて、それでも未だ、一皮むいて了ひたい程暑い、とこぼして居た。赤い腰卷と、眞白く塗つた首とが、あやつり人形のように動いて居た。その態で、「馬鹿

男の品評會」を開いて居た。

どの男も皆、手の附けられない鼻下長で、おまけに吝みつたれだ、と話し合つて居た。彼等がどんなにうつゝを拔かして居るか、と言ふ事を、顏の赤くなるような露骨さで自慢し合つて居た。昨夜、店がはねてからの暗黒の世界を、如何過したか、と言ふ事が、皆の自慢の種になつて居た。幕間、めくばせをして置いた男が、電信柱の蔭や、安待合や、活動小屋の横町で待つて居た。そんな馬鹿男を、どんな工合にして咥へ込んだか、と言ふ事を自慢し合つて居た。休日には、近在の避暑地まで、どんなに面白いホネームーンの眞似事を企てたか、と言ふ事を自慢し合つて居た。

この種の話題を持つて居ないものは、化粧部屋の隅では幅が利かなかつた。まだ新米の女達は、わざと眼をみはつて、古株のお手柄話しを驚嘆する眞似をして、彼女等一流の阿諛便佞を送つて居た。どの女の財布の中にも、紙幣型に印刷した××が挾んであつた。裸になつた女共が、新しく蒐集した誰かの××を見やうとして、淫卑な叫喚と笑聲とで引張り合つて居る圖は、丁度、重り合つた蛆虫が音のない呻りを立てて、動いて居るようであつた。

お絹は、この奇怪な雰圍氣から押し出されるように、眉を寄せ乍ら出て行つた。若しくは、此等の蛆虫共を草履の下に蹂躙つて了ひたい衝動で、慄えて居た。女共は、お絹の樣子を見逃さなかつた。

「へん、可厭に澄してやあがら。」

「生意氣な面構へをしやあがつて……」

それが、お孃樣方のお絹に對する言ひ草であつた。彼女等は、口で言つただけでは腹が癒えなかつたから、床板の上でじだんだを踏んで居た。皆、結束して、お絹一人に對抗して居た。

お絹は、こんな女どもに降參する位なら、死んだ方がましであつた。眉を怒かし、白眼の一瞥を報いて居た。

が、皿を拭き乍ら、ナイフを磨きながら、お絹の胸に氷のような淋しさが、忍び込んで來た。それは、路傍の石ころをでも抱きしめたい程に、もの狂はしい孤獨感であつた。お絹は、齒を喰ひしばり、我と我身を殺して居た。

毎夜、今井と言ふ男だけで、バーに來て居た。執拗にお絹の給仕を求め乍ら、戀知り顏にうつむき、コーヒーのコップに口をあてて居た。それが濟むと、ローラの前の電柱の蔭で、お絹の歸りを張つて居た。

だが、この種の客は餘りに多く居過ぎた。而も彼はお絹にとつて唯一の相手にならう、と言ふ野心を抱いて居た。

然し、お絹は、新派悲劇のような戀をして居るひまがなかつた。彼女は、パンを得なければならなかつた。おまけに、彼の執拗なお芝居掛りにうんざりして居た。しまひには、彼のなすままに任して、ひそかに彼を輕蔑する享しみを味つて居た。

今井も、お絹の態度に業を煮やして居た。勝手の違つた模索をするのに飽きて來た。

で、或日、晝寢の時間を割いて、又少し許り脚色を施して見た。

彼は、悲劇的な戀を夢見て居た。その爲めに、二人の戀を邪魔する嚴格な母親が是非必要であつた。彼は今日、昔堅氣なその母親から、女を思ひ切る事を迫られた筈にして置いた。そして、出來るだけお絹の感情に媚びるために、悲痛な科白を用意して置いた。彼は、お絹がその爲めにどんなに悲しむだらう、と想像して自惚れて居た。

例に依つて、電柱の蔭に立ち乍ら、非痛な顏附を裝つて居た。それは成功した。お絹が眞面目に、

「如何して?」

と聽かずに居られない程であつた。彼は顏を上げた。彼は、お絹がそう聽くのを待つて居た。

「如何したら好いのか解らないんだ。」

彼は、ぶちこはしにならない程度のうるみ聲で遣り初めた。お絹は泣いてるようであつた。否、忍び笑ひをして居るのかも知れなかつた。丁度暗い邸町にさしかかつて居た。只、お絹のはつきり響くような聲が、說明して呉れた

「何卒、お母樣の被仰るようになさいな、私しは少し遠いのを我慢して、向ふの通りから曲つて歸ります。もう、明日から、彼處に立たないで下さい。」

斯うして二人は別れて了つた。

翌日。

今井は又來て居た。が、もう彼は、お絹に用事がなかつた。最早や、彼女によく思はれようとは務めなかつたから、ありの儘な自分をさらけ出して居た。(もつと早くから、彼がそうして居たなら、彼は、もつと愉快な男であつたらうに、と、お絹は眞面目に彼のために考へて居た。)非番のお光と、無駄口を叩いて、わざと大聲でふざけて居た。

お絹はその夜、ひとりで街を歩いて居た。ふと、摺違つた自動車の中に、今井とお光の顏が列んで居たのを見た。お絹は一寸振返つた。彼女は、自分の思ひ違ひかも知れない、と思つて居た。針の先でつついた程の黒い斑點が、ちらと頭の中をかすめて行つた。軈てそれは、自動車の影と共に、巷の雜音の中に吸ひ込まれて行つた。

「あゝ可厭だ!」

お絹は、そう呟いて頭を左右に振つた。凡ての者に對する嫌惡が、海嘯のように押寄せて來た。ひそかに、ローラを出て了う事を決心して居た、

その時のお絹の心には、最早や、犧牲者の彩色を施した虛榮心が、跡方もなく消えて居た。英二と二人で、孤にくるまつた儘、往來に轉つて居る方がましだ、と思ひ詰めて居た。それでなければ――

高利貸しの妾になつて、一夜の内に男を締め殺し、首に捲いて居た財布の紐をひき千切つて、遠いアルゼンチンへでも逃げ出すのだ！

午後三時！パロアとバアとを通して、一人の客もなく、大理石の卓子が墓のように列んで居た。

お絹は唯つた一人、過勞と睡眠不足とで、輕い眩暈を感じ乍ら、椅子の上に腕を組んで居た。ほんの十分間、奈落の底へ引込まれるような不安な假睡に落ちて行つた。……錯覺が渦を卷いて居た。

お絹の周圍の卓子に、幾百といふ頭が列んで、何事か聲高にしやべり、肉片を突きさし、パンを千切つて居た。眞白に塗つた藝者の首、眼尻の下つた親爺の赫ら顏、腕輪を捲いたラシヤメン、覺えたての單語を操つる中學生、出來損ねのゼムの看板のような女優、にきびを氣に病む色男、新ダイヤ型の貴婦人、鼈甲縁を掛けた運轉手、それらの無數の首が、うよ〳〵と動き、わあーん、わあーん、と呻りを擧げて居た。その首の間を、お光の猥卑な金齒と、おはまのそばかすにまみれた鼻とが、へら〳〵と笑ひ乍ら泳いで居た。何といふ騷々しい事か。

と、中央の卓子の下から、があーん！と言ふ爆音と共に火を吹き上げ、めら〳〵と燃え上つた。おゝ、阿鼻叫喚、逃げる！逃げる！貴婦人の緋縮緬の腰卷よ！吝つたれの抱え込んだ革の鞄よ！

夢の中で、お絹は氣狂ひのように、手を叩いて居た。

「燒けつ了へ！黑焦げになつて死んで了へ！」（完）

――一九二一、七、五――

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロツト」を口にすれば
斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!
實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主け自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が総立ちになつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロツト」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人參の精氣を含有せるを以て朝鮮人參が具有せる強效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の保健期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロツト味（百日分）金貳圓
カロツト具（永久使用 銀模樣入）金五拾錢
同 象牙サツク入 金壹圓五拾錢

一組

送料（內地十八錢 海外四十五錢）
小替送料（內地卅五錢 海外五十五錢）

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地
榮川堂
電話丸の內一九一九 振替東京五二九一一

御注文は振替利用[illegible]れども御都合によりては現金にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

エミール教育論

▽菊判天金總布製函入九百五十頁餘 ▽定價七圓五拾錢 ▽郵税二十七錢

内山賢次全譯

(ルーソー原著)

少しでも心あるものが今の日本の教育界に身を置いて沁み〴〵と思ふことは、ペスタロッチやフレーベルや其他の生き〴〵した思想がいかに末派の教育者達によつて歪められ、歪められたまゝで固定されてゐるかといふことです。彼等は口癖のやうに「注ぎ込むな、引出せ」といつてゐます。それでゐて彼等は何も引出すことをせずに只注ぎ込まないことを誇りとしてゐるのです、そこには實に不自然な、少しの深みもない、技巧的な「近代教育」があるばかりです、さうして少しの深みもない、上辷りした、小利巧な小供が育つてゆくのです。モンテッソリーだつてフレーベルだつて、ペスタロッチだつて決してこんなつもりぢやなかつたと思ひます、ましてルーソーはこんなつもりぢやなかつたので。私達は引返してまだ形の定まらなかつた、それだけ情熱に潤ふてゐる教育論を讀み「自然に歸れ」の教育思想を採りたいと思ひます。この意味に於て「エミール」の始めての全譯をこゝに提供致します。

高島平三郎著 □ **教育に應用したる兒童研究**(十版)

▽定價五圓也

發兌元 振替口座東京二〇九一四 東京市麴町區隼町廿番地 **洛陽堂** (電話九段九六六番)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢

以上郵税共

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一　**誌代郵税**は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一　**振替貯金**口座は**東京三十四番**なり

一　**郵券代用**は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一　**代金引替**　小包の取扱は一切謝絶す

一　**集金郵便**　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一　**中央公論**及**婦人公論**代金取り纒め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一　**受領證請求**は必ず返信料を要す

大正十一年七月三十日印刷納本
大正十一年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.